

一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

穂	多	田	武	跡
森	山		筑	跡
寺	道		造	跡

1992年3月

大分県教育委員会

一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

樋 多 田 遺 跡
森 山 遺 跡
寺 迫 遺 跡

1992年3月

大分県教育委員会

序

大分と北九州を結ぶ北大バイパスは、大分県を南北にはしる国道10号線の改良工事として計画されました。この道路は大分県の産業・経済発展の大動脈であり、交通混雑の解消に対する県民の期待には大変大きいものがあります。

このうち中津バイパスに伴う発掘調査は、昭和55年度に始まり、本年度で12年目を迎えました。この間、古代の家族構成や墓制のあり方に新事実を提供した上ノ原横穴群をはじめ、たくさんの重要な遺跡を調査してまいりました。また、こうした遺跡の取り扱いについても関係者の多くの努力が払われました。

これらの発掘調査の成果につきましては、順次報告書を刊行しております。本報告書では樋多田・森山・寺迫遺跡など3遺跡について収録いたしましたが、埋蔵文化財に対する御理解をいただくとともに、今後の学術文化の向上に少しでも役立てば幸いに思います。最後に、調査に開始時から御指導いただきました諸先生方をはじめ、調査に御協力いただきました関係者各位及び地元の方々に対し、深く敬意を表すと共に、厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

大分県教育委員会

教育長 宮本高志

例 言

- 1、本書は一般国道10号線中津バイパス建設に伴う事前調査のうち昭和60年から昭和62年までに調査した中津市樋多田遺跡、森山遺跡、寺迫遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として、大分県教育委員会が実施した。
- 3、発掘調査にあたっては中津市、三光村の各教育委員会、並びに地元作業員の御助力を得た。
- 4、出土遺物及び関係資料は、大分県教育委員会文化課に保管している。
- 5、本書の執筆者は次のとおりである。

第1章 序説

第1節 調査の経過

- 1 発掘調査に至る経過……………清水宗昭
- 2 調査の組織……………渋谷忠章

第2章 各遺跡の調査

第1節 樋多田遺跡

- 1 調査の概要……………江田 豊
- 2 A区……………原田昭一
- 3 B区……………原田昭一
- 4 C区……………原田昭一
- 5 D区……………江田…豊
- 6 自然科学分野における調査
樋多田遺跡土壌のプラント・オパール分析……………佐々木章
樋多田遺跡の花粉分析……………畑中健一
樋多田遺跡A地区S B 1竈の地磁気年代……………時枝克安・伊藤清明

第2節 森山遺跡

- 1 調査の概要……………村上久和
- 2 遺構と遺物……………村上久和
- 3 小結……………村上久和

第3節 寺迫遺跡

- 1 寺迫横穴墓……………小林昭彦
- 2 寺迫火葬墓……………小林昭彦
- 3 寺迫火葬墓骨蔵器出土火葬骨……………田中良之・金 宰 賢

- 6、遺物の実則、トレース、写真は、それぞれの担当者が坂本嘉弘、牧尾義則、綿貫俊一、吉武牧子、安倍聡子の協力を得て行った。また、遺物の整理・復原には県文化課資料室の多くの方々の協力を得た。
- 7、森山遺跡に使用した方位は磁北であり、真北との偏差は西偏06°0′で、森山遺跡遺構の座標は国家座標第2係に基づき $X=+60^k914^m379$ 、 $Y=+21^k005^m301$ である。
- 8、本書の編集は清水宗昭を中心に各担当者で行った。

目次

序

例言

第1章 序説	1
第1節 調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査の組織	2
第2章 各遺跡の調査	7
第1節 樋多田遺跡	7
1 調査の概要	7
2 A区	8
3 B区	29
4 C区	48
5 D区	74
6 自然科学分野における調査	114
樋多田遺跡土壌のプラント・オパール分析	114
樋多田遺跡の花粉分析	121
樋多田遺跡A地区S B 1竈の地磁気年代	124
第2節 森山遺跡	129
1 調査の概要	129
2 遺構と遺物	131
3 小結	258
第3節 寺迫遺跡	267
1 寺迫横穴墓	267
2 寺迫火葬墓	271
3 寺迫火葬墓骨蔵器出土火葬骨	273

挿 図 目 次

第1章 序説	
第1節 調査の経過	
第1図 各種遺跡位置図	5・6
第2章 各遺跡の調査	
第1節 樋多田遺跡	
第1図 樋多田遺跡調査区配置図	7
第2図 樋多田A区遺構配置図	8
第3図 樋多田SB1・SK1遺構平面図および断面図	9・10
第4図 樋多田SB1カマド実測図	11
第5図 樋多田SB1遺物出土状況	13・14
第6図 樋多田SB1出土遺物(1)	15
第7図 樋多田SB1出土遺物(2)	16
第8図 樋多田SB1・SK1出土遺物	17
第9図 樋多田SK2実測図	22
第10図 樋多田SK2出土土器	22
第11図 樋多田A・C区北壁セクション図	23
第12図 樋多田A区6層出土遺物	25
第13図 樋多田B区遺構配置図	28
第14図 樋多田SB1遺構平面図	29
第15図 樋多田SB1遺物出土状況	30
第16図 樋多田SB1出土遺物(1)	31
第17図 樋多田SB1出土遺物(2)	32
第18図 樋多田SB1出土遺物(3)	33
第19図 樋多田SB1出土遺物(4)	34
第20図 樋多田SB1出土遺物(5)	35
第21図 樋多田SB1出土遺物(6)	36
第22図 樋多田C区遺構配置図	49・50
第23図 樋多田SB1実測図	51
第24図 樋多田SB1出土遺物	52
第25図 樋多田SB2遺構平面図	55
第26図 樋多田SB2SP1実測図	56
第27図 樋多田SB2SP1出土遺物	56
第28図 樋多田SB2SP2実測図	57
第29図 樋多田SB2SP2出土遺物	57
第30図 樋多田SB2SP3実測図	58
第31図 樋多田SB2SP3出土遺物	58
第32図 樋多田SK1実測図	60
第33図 樋多田SK1出土遺物(1)	61
第34図 樋多田SK1出土遺物(2)	62
第35図 樋多田SK1出土遺物(3)	63
第36図 樋多田SK1出土遺物(4)	64
第37図 樋多田SK2実測図	69
第38図 樋多田SK2～4出土遺物	69
第39図 樋多田SK3実測図	70
第40図 樋多田SK3出土遺物(1)	70
第41図 樋多田SK3出土遺物(2)	71
第42図 樋多田SK4実測図	73
第43図 樋多田C区4層出土遺物	73
第44図 樋多田D区調査区配置図	74
第45図 樋多田第1次調査土層断面図	75
第46図 樋多田第1次調査区平面図	77・78
第47図 樋多田第1次調査出土杭実測図	79
第48図 樋多田第1・第2トレンチ杭分布図	80
第49図 樋多田第1次調査出土土器実測図	84
第50図 樋多田第1次調査出土土器実測図	85
第51図 樋多田第1次調査出土土器実測図	86
第52図 樋多田第3トレンチ出土土器実測図	86
第53図 樋多田第2次調査土層断面図	88
第54図 樋多田第2次調査第1～第3トレンチ平面図	89・90
第55図 樋多田第2次調査第4・第5トレンチ平面図	91・92
第56図 樋多田第2次調査出土土器実測図	94
第57図 樋多田第2次調査出土土器実測図	95
第58図 樋多田第2次調査出土土器実測図	96
第59図 樋多田第2次調査出土土器実測図	97
第60図 樋多田第2次調査出土土器実測図	98

第61図	樋多田第2次調査出土木器実測図	100
第62図	樋多田第2次調査出土木器実測図	105
第63図	樋多田第2次調査出土木器実測図	106
第64図	樋多田第2次調査出土木器実測図	107
第65図	樋多田第2次調査出土杭実測図	108
第66図	樋多田第2次調査出土杭実測図	109
第67図	樋多田第2次調査出土杭実測図	110
第68図	樋多田分析試料採取点土層概念図	116
第69図	プラント・オパール定量法	117
第70図	樋多田A地点の分析結果から推定した埋没植物体重	118
第71図	樋多田B地点の分析結果から推定した埋没植物体重	119
第72図	樋多田C地点の分析結果から推定した埋没植物体重	119
第73図	樋多田D区セクションの花粉ダイアグラム	122
第74図	樋多田E区第2トレンチの花粉ダイアグラム	123
第75図	樋多田遺跡A区S B 1竈の残留磁気の方向	127
第76図	樋多田遺跡A区S B 1竈の残留磁気の平均方向 (+印) と誤差の範囲 (点線の楕円)、および、広岡 (1977)による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線	128
第2節 森山遺跡		
第1図	森山S B 1・2平・断面図	178
第2図	森山S B 1・2出土遺物	179
第3図	森山S B 3平・断面図	180
第4図	森山S B 4平・断面図	180
第5図	森山S B 5平・断面図	181
第6図	森山S B 5出土土器実測図	181
第7図	森山S B 6平・断面図	182
第8図	森山S B 6出土土器実測図	183
第9図	森山S B 7平・断面図	184
第10図	森山S B 7出土土器実測図(1)	185
第11図	森山S B 7出土土器実測図(2)	186
第12図	森山S B 7出土土器実測図(3)	187
第13図	森山S B 7出土土器実測図(4)	188
第14図	森山S B 7出土石器実測図	189
第15図	森山S B 8出土土器実測図	191
第16図	森山S B 9平・断面図	192
第17図	森山S B 9出土土器実測図	193
第18図	森山S B 9出土石器実測図	194
第19図	森山S B 10・11平・断面図	195
第20図	森山S B 11出土土器実測図(1)	196
第21図	森山S B 10・11出土土器実測図	197
第22図	森山S B 10出土石器実測図	198
第23図	森山S B 12平・断面図	199
第24図	森山S B 12出土土器実測図	200
第25図	森山S B 12出土石器実測図	200
第26図	森山S B 13平・断面図	201
第27図	森山S B 13出土土器実測図(1)	201
第28図	森山S B 13出土土器実測図(2)	202
第29図	森山S B 13出土石器実測図	203
第30図	森山S B 14平・断面図	204
第31図	森山S B 14出土土器実測図	204
第32図	森山S B 15・16平・断面図	206
第33図	森山S B 15・16出土土器実測図	207
第34図	森山S B 16出土石器実測図(1)	208
第35図	森山S B 16出土石器実測図(2)	209
第36図	森山S B 16出土鉄器実測図	210
第37図	森山S B 17平・断面図	211
第38図	森山S B 17出土土器実測図(1)	212
第39図	森山S B 17出土土器実測図(2)	213
第40図	森山S B 17出土石器実測図(1)	213
第41図	森山S B 17出土石器実測図(2)	214
第42図	森山S B 18出土石器実測図	215
第43図	森山S B 18平・断面図	216
第44図	森山S B 18出土土器実測図(1)	217
第45図	森山S B 18出土土器実測図(2)	218
第46図	森山S B 19平・断面図	219
第47図	森山S B 19出土土器実測図	220
第48図	森山S B 19出土石器実測図	221

第49图	森山 S B 20平·断面图	222
第50图	森山 S B 20出土石器实测图	223
第51图	森山 S B 20出土石器实测图	224
第52图	森山 21·22平·断面图	225
第53图	森山 S B 21·22出土遗物实测图	226
第54图	森山 S B 23平·断面图	227
第55图	森山 S B 24平·断面图	228
第56图	森山 S B 24出土石器实测图	229
第57图	森山 S B 24出土石器实测图	230
第58图	森山 S B 25平·断面图	231
第59图	森山 S B 25出土石器实测图	231
第60图	森山 S B 25出土石器实测图	232
第61图	森山 S B 26平·断面图	233
第62图	森山 S B 26出土石器实测图	234
第63图	森山 S B 26出土石器实测图	234
第64图	森山 S B 27出土石器实测图	235
第65图	森山 S B 27平·断面图	236
第66图	森山 S B 27出土石器实测图	237
第67图	森山 S B 28出土石器实测图	238
第68图	森山 S B 28出土石器实测图	238
第69图	森山 S B 28平·断面图	239
第70图	森山 S B 29平·断面图	240
第71图	森山 S B 29出土石器实测图	241
第72图	森山 S B 29出土石器实测图(1)	242
第73图	森山 S B 29出土石器实测图(2)	243
第74图	森山 S B 29出土石器实测图(3)	244
第75图	森山 S B 30平·断面图	246
第76图	森山 S B 30出土石器实测图	246
第77图	森山 S B 30出土石器实测图	247
第78图	森山 S B 31平·断面图	248
第79图	森山 S B 31出土石器实测图	248
第80图	森山 S B 32平·断面图	249
第81图	森山 S B 32出土石器实测图	249
第82图	森山 S B 32出土石器实测图(1)	250
第83图	森山 S B 32出土石器实测图(2)	251
第84图	森山 S K 3平·断面图	252
第85图	森山 S K 3出土石器实测图	252
第86图	森山 S K 9平·断面图	253
第87图	森山 S K 9出土石器实测图	253
第88图	森山 S K 9出土石器实测图	254
第89图	森山 S K 10平·断面图	255
第90图	森山 S K 12出土石器实测图	255
第91图	森山 S K 19平·断面图	256
第92图	森山 S K 19出土石器实测图	256
第93图	森山 S K 19出土石器实测图	257
第94图	森山 S K 20出土石器实测图	258
第95图	森山 S K 21平·断面图	259
第96图	森山 S K 21出土石器实测图	259
第97图	森山 S K 21出土石器实测图	259
第98图	森山 S K 23平·断面图	260
第99图	森山 S K 23出土石器实测图	260
第100图	森山 S K 23出土石器实测图	261
第101图	森山 S K 24~27、S B 33平·断面图	262
第102图	森山 S K 24出土石器实测图	263
第103图	森山 S K 24出土石器实测图	264
第104图	森山 S K 25出土石器实测图	264
第105图	森山 S K 25出土石器实测图	265
第106图	森山 S K 31~32平·断面图	266
第107图	森山 S K 31出土石器实测图	266
第108图	森山 S P 1平·断面图	266
第109图	森山 S P 1出土石器实测图	267
第110图	森山 S P 2平·断面图	268
第111图	森山 S P 3平·断面图	268
第112图	森山 S P 2·3出土石器实测图	268
第113图	森山 S P 4平·断面图	269
第114图	森山 S P 4出土石器实测图	269
第115图	森山 S P 5平·断面图	270

第116図	森山SP5出土石器実測図	270
第117図	森山SP5出土土器実測図	271
第118図	森山SP6出土石器実測図	272
第119図	森山SP6出土石器実測図	272
第120図	森山SP7平・断面図	273
第121図	森山SP7出土土器実測図	273
第122図	森山SP8~10平・断面図	274
第123図	森山SP11平・断面図	274
第124図	森山SP8~11出土土器実測図	275
第125図	森山SP13出土土器実測図	276
第126図	森山1号祭祀土坑平・断面図	277
第127図	森山1号祭祀土坑出土土器実測図	278
第128図	森山1号祭祀土坑出土土器実測図	278
第129図	森山1号土墳墓平・断面図	279
第130図	森山2号土墳墓平・断面図	279
第131図	森山3号土墳墓平・断面図	280
第132図	森山4号土墳墓平・断面図	280
第133図	森山5号土墳墓平・断面図	280
第134図	森山6号土墳墓平・断面図	281
第135図	森山7号土墳墓平・断面図	281
第136図	森山8号土墳墓平・断面図	281
第137図	森山9・10号土墳墓・1号木棺墓平・断面図	282
第138図	森山11号土墳墓および2号木棺墓平・断面図	283
第139図	森山2号木棺墓出土石器実測図	284
第140図	森山12号土墳墓平・断面図	285
第141図	森山13号土墳墓平・断面図	285
第142図	森山3号木棺墓平・断面図	285
第143図	森山1号小児用土墳平・断面図	286・287
第144図	森山1号小児用甕棺墓平・断面図	288
第145図	森山14号土墳墓平・断面図	289
第146図	森山1号火葬墓・1号火葬跡平・断面図	289
第147図	森山1号火葬墓平・断面図	290
第148図	森山1号火葬墓・1号火葬跡出土土器実測図	290
第149図	森山SD1出土石器実測図	291
第150図	森山SD1・2出土土器実測図	292
第151図	森山SD2出土石器実測図	293
第152図	森山北側丘陵斜面部表探遺物	294
第153図	森山遺跡出土石器実測図	296
第154図	森山遺跡出土石器平・断面図	297
第155図	森山遺跡土器平・断面図	298
第156図	森山遺跡出土石器平・断面図	299
第3節 寺迫遺跡		
第1図	寺迫1号墓出土須恵器実測図	398
第2図	寺迫遺跡の遺構位置図	399
第3図	寺迫横穴墓位置図	400
第4図	寺迫横穴墓実測図	401
第5図	寺迫火葬墓骨蔵器実測図	402
第6図	寺迫火葬墓実測図	403
第7図	寺迫人骨遺存部位(体部骨)	406
第8図	寺迫人骨遺存部位(頭骨)	407
付図1	森山遺跡遺構配置図	

図 版 目 次

- 図版 1 樋多田A区全景、樋多田A区S B 1 遺物出土状態
- 図版 2 樋多田A区S B 1 カマド付近検出状態
- 図版 3 樋多田A区S B 1 カマド付近検出状態
- 図版 4 樋多田A区S B 1 カマド熱残留磁気測定、樋多田S B 1 完掘状態
- 図版 5 樋多田A区S B 1 断割り状態、樋多田A区S K 2 遺物出土状態
- 図版 6 樋多田B区遺構群遠景、樋多田B区S B 1 遺物出土状態
- 図版 7 樋多田B区S B 1 完掘状態、樋多田B区S B 1 断割り状態
- 図版 8 樋多田C区全景
- 図版 9 樋多田C区S B 1 遺物出土状態、樋多田C区S B 2 およびS K 1
- 図版10 樋多田C区S B 2 S P 1 遺物出土状態、樋多田C区S B 2 S P 2 遺物出土状態
- 図版11 樋多田C区S B 2 S P 2 石包丁未製品出土状態、樋多田C区S B 2 S P 3 遺物出土状態
- 図版12 樋多田C区S K 1 遺物出土状態、樋多田C区S K 1 完掘状態
- 図版13 樋多田D・E全景、樋多田D区近景、樋多田E区近景
- 図版14 樋多田E区第2トレンチ縄文土器出土状態、樋多田E区第2トレンチ トチの実出土状態、樋多田D区流路内土器出土状態、樋多田D区第1トレンチ花粉分析サンプリング
- 図版15 樋多田第2次調査流路内二又鍬出土状態、樋多田第2次調査流路内横鍬出土状態
樋多田第2次調査流路内鋤出土状態、樋多田第2次調査流路内えぶり出土状態
- 図版16 森山遺跡遠景空中写真
- 図版17 森山遺跡全景空中写真
- 図版18 森山S B 15～17周辺空中写真、森山墳墓周辺空中写真
- 図版19 森山S B 1・2 近景、森山S B 5 近景
- 図版20 森山S B 18近景、森山S B 29近景
- 図版21 森山1号土壇墓周辺、森山1号石蓋および1号甕棺墓切り合い関係
- 図版22 森山1号木棺周辺、森山1号土壇墓周辺
- 図版23 森山1号甕棺墓出土状態、同下半分検出状態
- 図版24 森山1号火葬跡、1号火葬墓全景、森山1号火葬骨蔵器人骨出土状態
- 図版25 森山S B 17遺物（片刃石斧）出土状態、森山S B 13遺物（投弾）出土状態
- 図版26 寺迫横穴墓全景、寺迫骨蔵器出土状態
- 図版27 寺迫火葬墓人骨 1
- 図版28 寺迫火葬墓人骨 2
- 図版29 寺迫火葬墓人骨 3
- 図版30 寺迫火葬墓人骨 4

第1章 序 説

第1節 調査の経過

1. 発掘調査に至る経過

中津バイパスは、福岡県と境をなす下毛郡三光村左知から、宇佐市山下に至る総延長9.9kmである。一般国道10号線の改良工事として計画された北大道路（北九州一大分市）の一部であり、宇佐バイパス、宇佐・別府道路へと続き、日出ジャンクションで九州横断自動車道と合流する。計画は交通渋滞の解消および地域経済の活性化を目的としたもので、早期完成にむけて県民の期待がますます高まっていた。

この北大道路に伴う文化財の取り扱いについて、昭和40年代後半から工事主体者である建設省と大分県土木部及び大分県教育委員会のあいだで協議が行われ、中津バイパスの路線内における分布調査の結果、推定地も含めて28カ所の遺跡を確認した。この分布調査の結果のもとに試掘調査および本調査を実施したが、路線内の調査は福岡県と境をなす山国川をのぞむ上ノ原横穴群はじまり順次、宇佐市域に近付き、本報告にかかる地区は中津市加来から伊藤田にかけてその対象となり、調査の行われた昭和60年から昭和62年までの経過については以下のとおりである。

まず昭和60年、樋多田遺跡において調査範囲全域にトレンチやグリッドを設け、遺跡の性格および範囲の把握を試みた。この試掘調査の結果にもとづきD区において弥生時代の流路の本調査にとりかかったが、詳細な調査は次年度以降にもちこされた。昭和61年度には樋多田遺跡B～D区全域の本格的な調査を行っていたが、もっとも犬丸川よりのA区において土器片が採集されたため、本調査の対象に加え、6世紀代の住居跡をはじめとした遺構・遺物を検出し調査を終えた。また寺迫区において全域を試掘・本調査したが、古墳時代後期の横穴2基が確認されたほかさほど良好な成果は得られなかった。昭和62年度には森山遺跡において暫定2車線分のみ全域発掘調査をおこなったが、弥生時代の住居跡群をはじめ多くの遺構・遺物を確認した。その結果、遺跡の広がりには確実に未調査の南側斜面部にも及ぶものと推測でき、今後の調査に期待されるところとなった。

2. 調査の組織

調査の組織は次のとおりである。

昭和60年度

調査主体 大分県教育委員会

調査指導員 賀川 光夫 (大分県文化財保護審議会委員・別府大学文学部教授)

小田富士雄 (大分県文化財保護審議会委員・北九州市立考古博物館館長)

佐々木 章 (大分短期大学講師)

大分県教育委員会

教 育 長 藤井 義美

文 化 課 課 長 高塩 至

文化財専門員兼 後藤 宗俊

埋蔵文化財係長

主 査 清水 宗昭

主 任 村上 久和

主 事 西 哲弘、後藤 一重、江田 豊

嘱 託 城戸 誠、友岡 信彦、小野 整

昭和61年度

調査主体 大分県教育委員会

調査指導員 賀川 光夫 (大分県文化財保護審議会委員・別府大学文学部教授)

小田富士雄 (大分県文化財保護審議会委員・北九州市立考古博物館館長)

時枝 克安 (島根県大学助教授)

畑中 健一 (北九州大学教授)

調査員 田中 良之 (九州大学医学部解剖第二講座助手)

土肥 直美 (同)

大分県教育委員会

教 育 長 藤井 義美

文 化 課 課 長 塔鼻 勝人

文化財専門員兼 後藤 宗俊

埋蔵文化財係長

主 査 渋谷 忠章

主 任 西 哲弘

主 事 江田 豊

嘱 託 城戸 誠、原田 昭一、小野 整

昭和62年

調査主体 大分県教育委員会

調査指導員 賀川 光夫 (大分県文化財保護審議会委員・別府大学文学部教授)

時枝 克安 (島根県大学助教授)

池上 悟 (立正大学講師)

大分県教育委員会

教 育 長 嶋津 文雄

文化課課長 後藤 昭六

参 事 徳丸 欽也

主 幹 後藤 宗俊

埋蔵文化財 渋谷 忠章

第二係長

主 任 村上 久和、西 哲弘

主 事 小林 昭彦、松本 康弘

嘱 託 永松みゆき、友岡 信彦、後藤 晃一、吉武 牧子

その他、後多忙中にかかわらず次の方々に御指導いただいた。記して感謝する次第である。

甲斐忠彦、工楽善通、高倉洋彰、宮内克己

昭和60年度

亀田修一、桑原幸則、後藤一重

昭和61年度

石野博信、武末純一、坪井清足、西谷 正

昭和62年度

第2章 各遺跡の調査

第1節 樋多田遺跡

1. 調査の概要

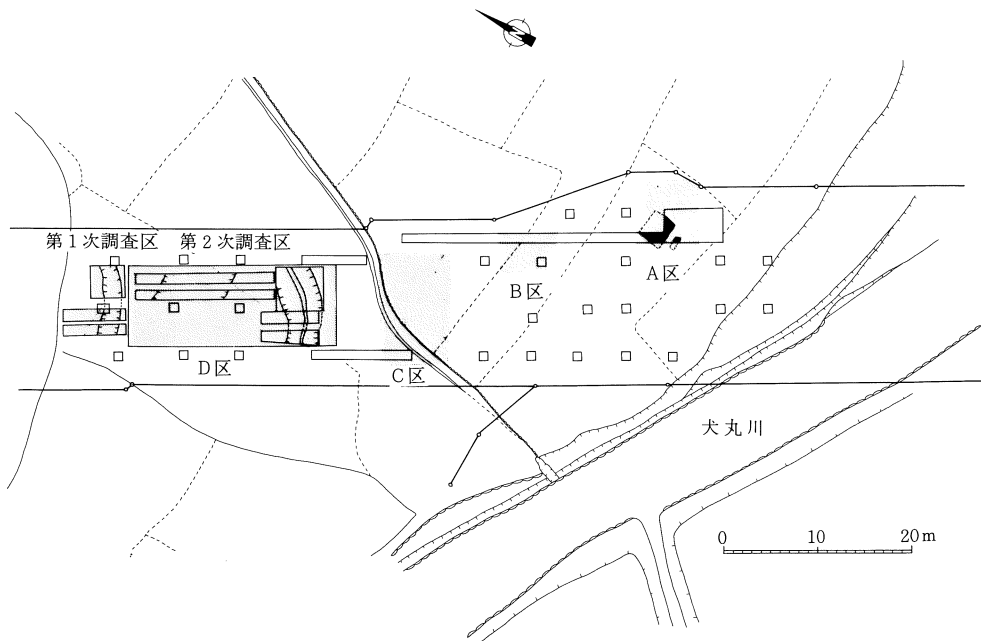
樋多田遺跡の調査は、昭和60年度に試掘調査が行われ、引き続き本調査が実施された。本調査は昭和61年度まで継続され約800㎡の調査を行った。

調査は犬丸川が蛇行をくり返して形成された自然堤防上を中心に行われ、西側では犬丸川の旧河道を含む低湿地の調査も行った。

試掘調査はグリットを10mごとに設定して遺構が確認された地点はさらにトレンチを伸ばしてその範囲を調査した。その結果、調査区の東半部においては弥生時代中期～古墳時代後期にかけての集落を確認し、西側の低湿地地帯では多量の流木を含み、弥生時代中期初頭～後期にかけての遺跡が検出される流路を確認した。

そこで調査区の東半部をA～C区、低湿地部をD区としてそれぞれ調査を行った。A～C区では住居跡が4軒、D区では杭列を伴う流路を2条検出した。この流路内からは、流木とともに木器や加工材などが出土している。

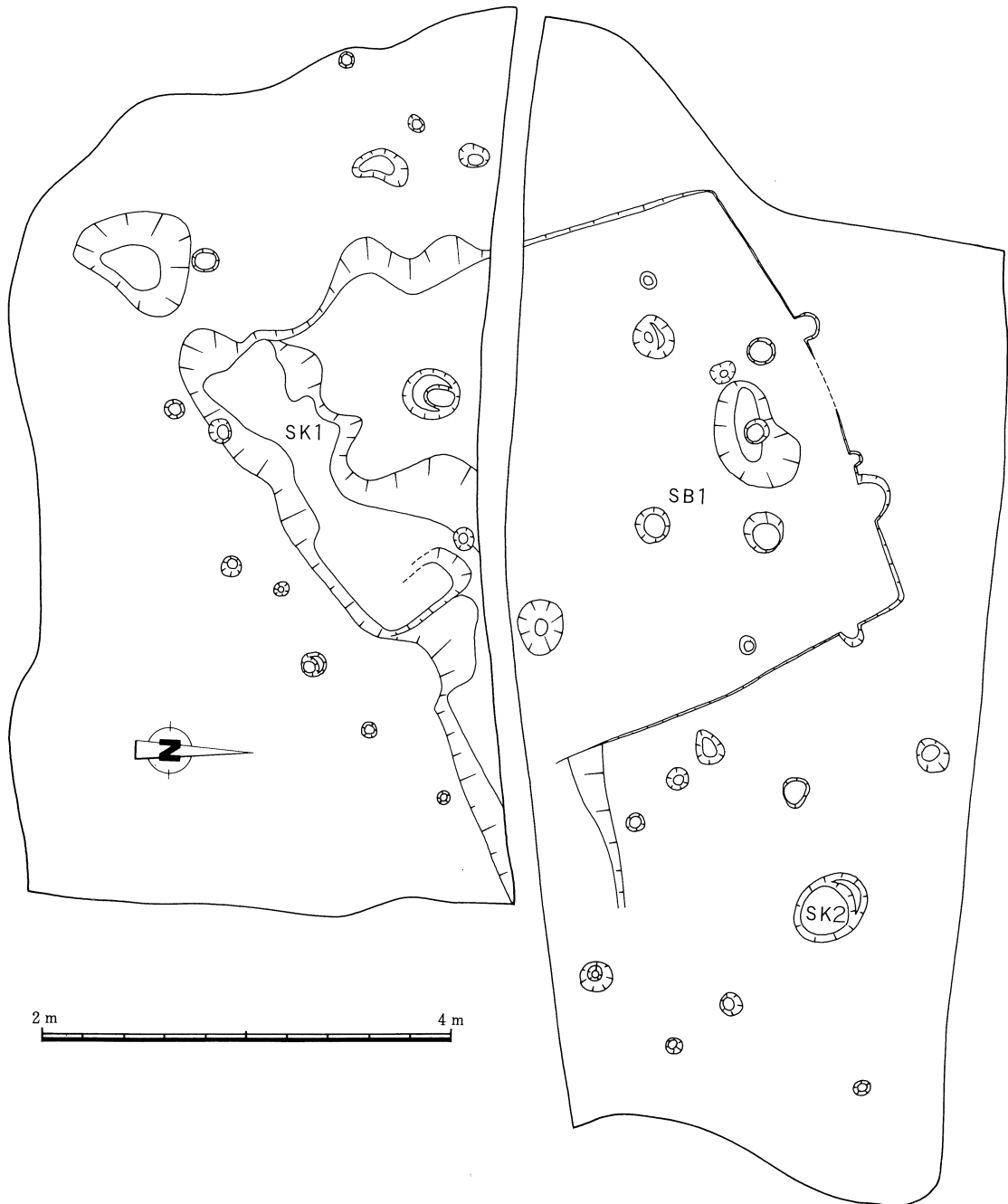
この調査と並行してA区の住居跡において熱残留磁気測定のスAMPLING調査をおよびD区の流路内においてプラントオパール分析、花粉分析のスAMPLING調査を実施した。



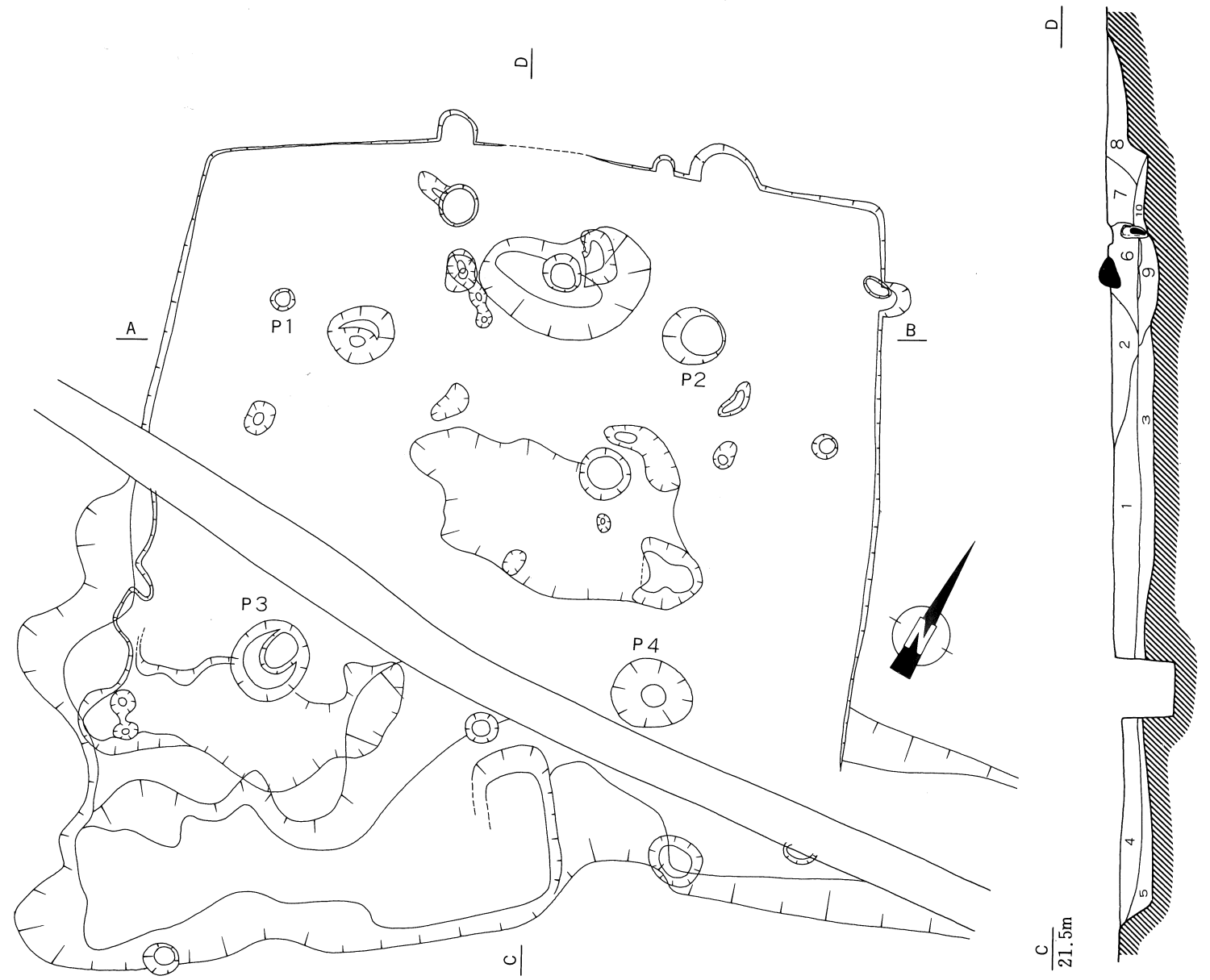
第1図 樋多田遺跡調査区配置図

2. A区

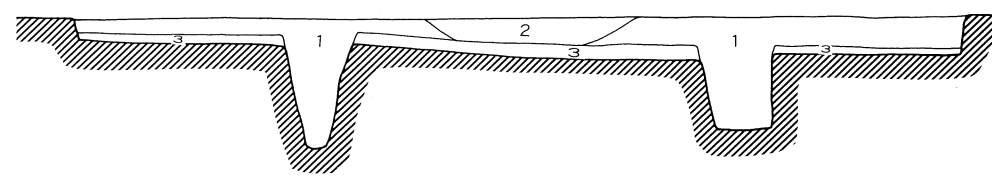
A区は犬丸川西岸の自然堤防上に立地する。約80㎡の調査面積を測り、耕作土も含めて6層の堆積層が確認できたが、6層下面において遺構のプランが確認でき、古墳時代後期の竪穴住居跡1棟、弥生時代中期前半と奈良時代および時期不明の土坑が1基ずつ計3基、時期不明の



第2図 樋多田A区遺構配置図



A
21.5m



- B
1. 茶褐色土 (炭、焼土を含む)
 2. 茶褐色土 (炭、焼土を含まない)
 3. 黄褐色粘質土に暗褐色土がブロック状に含まれる (貼り床)
 4. 茶褐色土 (炭、焼土を含まない)
 5. 1層と3層が混在している。
 6. 茶褐色土 (炭、焼土を多く含む)
 7. 茶褐色土 (炭、焼土をたいへん多く含む)
 8. 茶褐色土
 9. 茶褐色土 (炭、焼土を含むが、下部にいくほど少なくなる)
 10. 茶褐色土 (炭、焼土を含まず、地山と漸移的な様相をもつ)

0 3 m

第3図 樋多田SB1・SK1遺構平面図および断面図

多数のピット群を検出した（第2図、写真図版1）。以下ではA区の遺構・遺物についてふれてみたい。

SB1

SB1はプランの南西部分をSK1により切られているものの、方形プランを呈する竪穴住居であり、一辺約4.4×4.4mを測るものと推測でき、床面積約19.4cmとなる。検出された深さは貼り床も含めて6～26cmであり、埋土の茶褐色土には炭や焼土を若干含んでいた。支柱穴は第5図に示したSB1のP1～4が対応するものと思われ、4本柱となる。それぞれの柱穴はP1が60cm、P2が44cm、P3が41cm、P4が40cmの深さをそれぞれ測り、支柱穴間の中心距離はそれぞれ2.2～2.4mの数値におちつく。床をみると黄褐色粘質土に暗褐色土がブロック状に含まれた土で貼られており、その厚さは4～8cmを測り、貼り床下には中央部と南側コーナーにおいて深さ約7～13cmの不定形の浅い土坑が検出できた（第3図、写真図版1）。

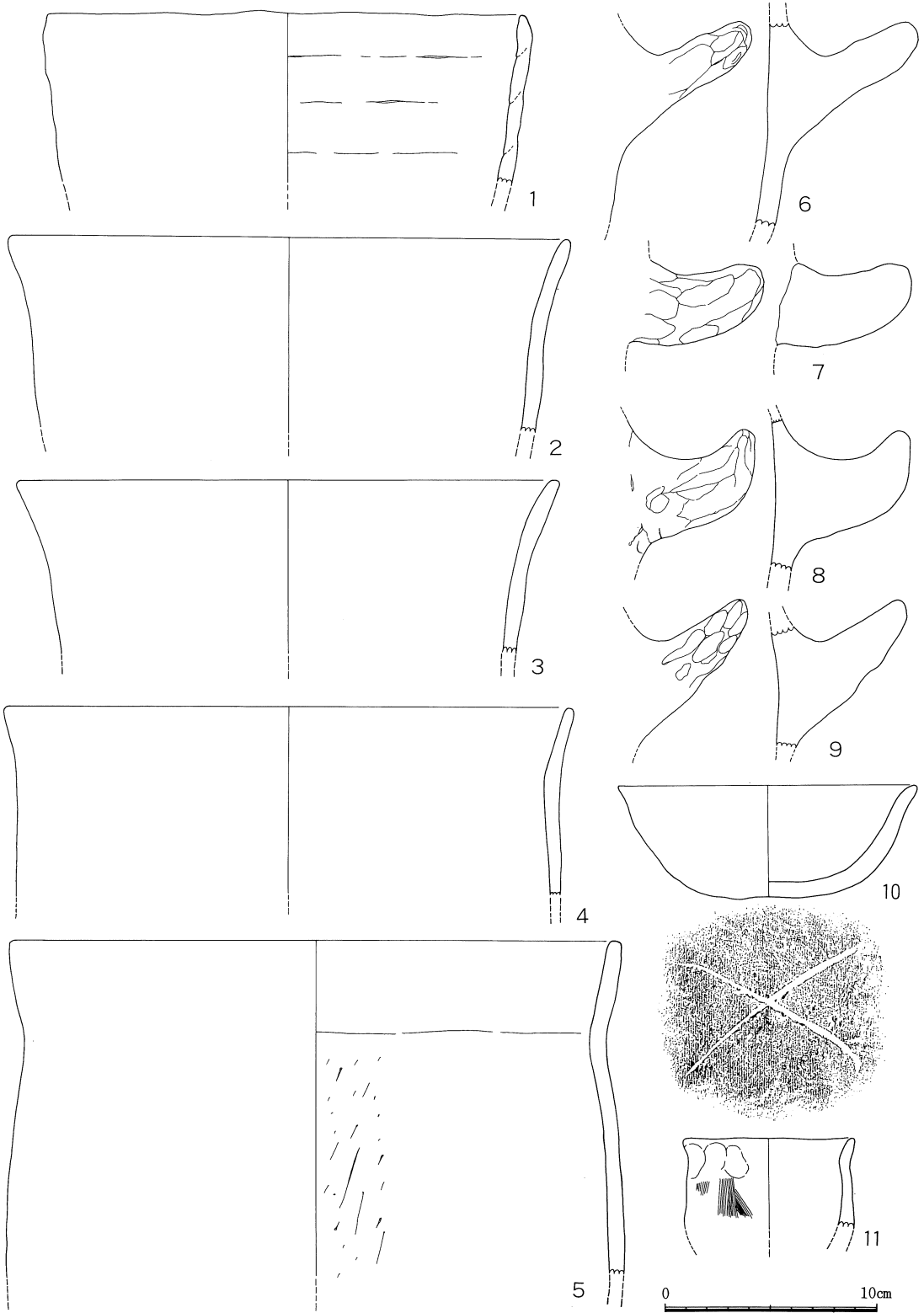
また住居跡北辺中央部において竈跡が検出されている（第4図、写真図版2・3）。竈の前面には河原石を両端に埋め込み、支脚として、その上に扁平な石をわたし焚口をつくっている。竈本体はほぼ完全に破壊されており、竈の部分から原位置を保たない焼土ブロックが多く検出されている。竈の中央には円柱状の形態をもつ支柱が残っており、この支柱およびその前面の竈床面は堅く焼き締まり赤変していた。この竈床面の熱残留磁気測定を行ったが（写真図版4）、その詳細は後述するとおりである。竈部



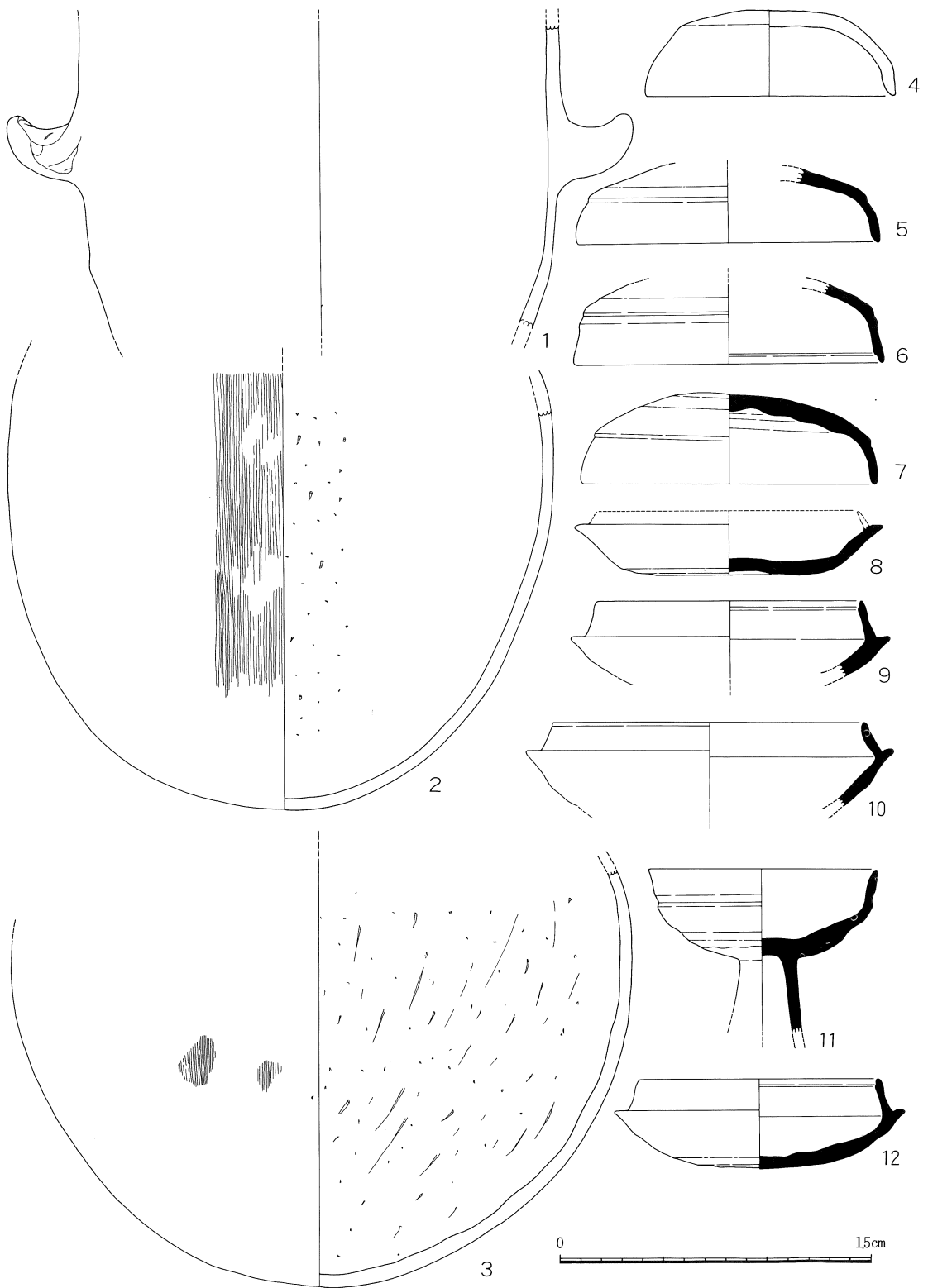
第4図 樋多田SB1カマド実測図



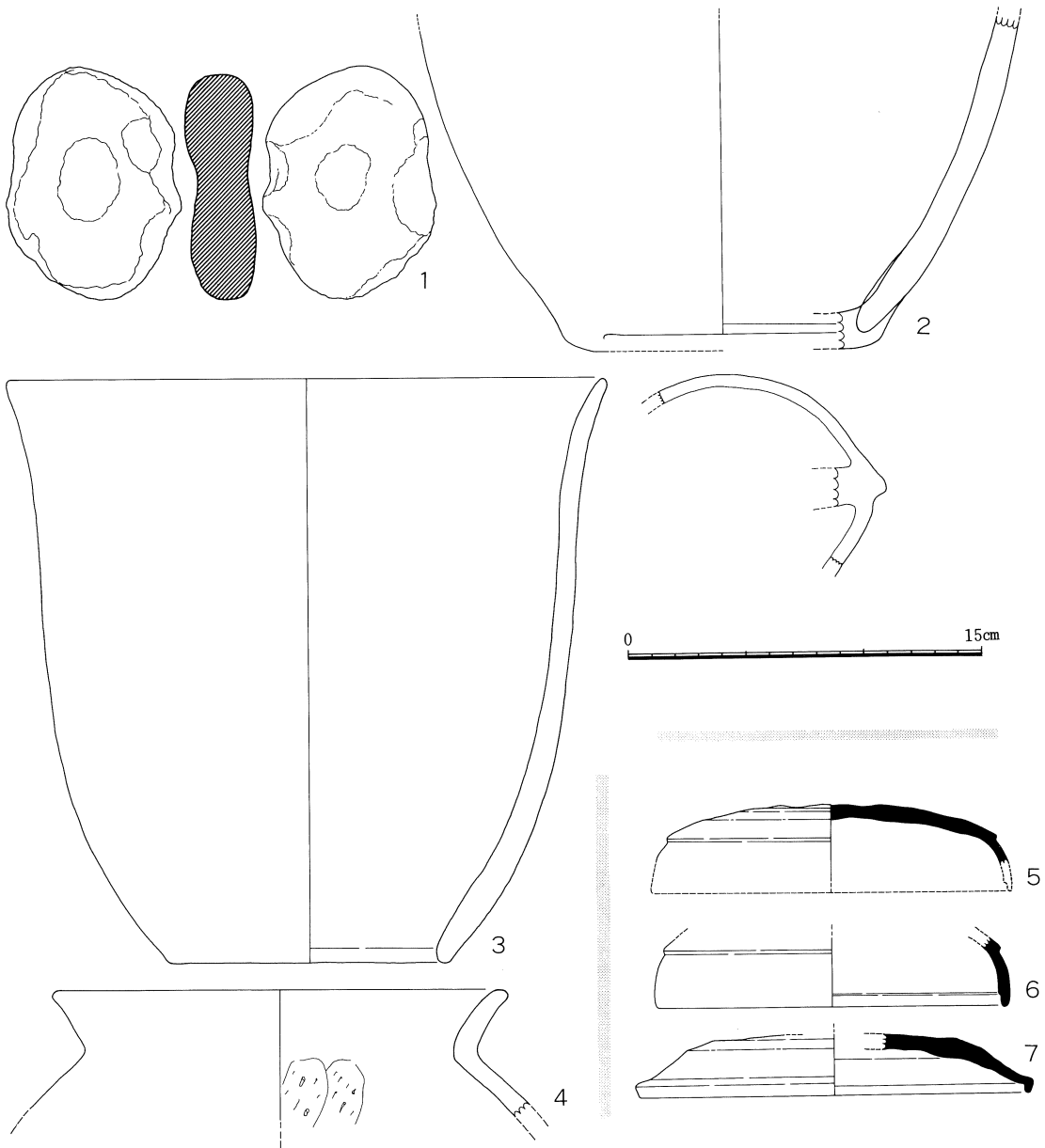
第5図 樋多田SB1遺物出土状況



第6図 樋多田SB1出土遺物(1)



第7図 樋多田SB1出土遺物(2)



第8図 樋多田SB1、SK1出土遺物

分の焼土ブロックの下には土師器片が出土しており、なかでも底部外面に「×」のへら記号のみられる坏がほぼ完形で出土しており（第6図10）、竈の廃絶の際にとりおこなわれた祭祀に伴うものと推定できる。

遺物の出土状態は住居跡全域の埋土中から出土しているが、なかでも竈跡両側の壁寄りにそれぞれ土師器の甕が据えられており（第5図、写真図版1～4）、胴部上半が欠損しているものの原位置を保っているものと思われる。遺物は土師器および須恵器の土器類と叩石をはじめと

土器観察表(その1)

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	色調
		口径	頸部最大径	胴部最大径			
8-1	甌(?)	(22.5)			・外面はナデ ・内面はきわめて粗いナデが施され、粘土紐接合痕が残る	・長石、角閃石	・外面は明赤褐色 ・内面は黒色
2	甌	26.0			・内外面ともヨコ方向のナデ	・長石、角閃石、石英粒	・外面は橙～褐灰色 ・内面はにぶい黄橙色
3	甌	(25.5)			・外面はヨコ方向のナデ ・内面はナデ	・長石、角閃石	・内外面とも明黄褐色 ・外面に黒斑
4	甌	26.5			・内外面ともヨコ方向のナデ	・長石、角閃石、石英粒	・外面は橙～褐灰色 ・内面はにぶい黄橙色
5	甌	(29.0)			・外面および口縁部内面は磨減しており調整不明 ・胴部内面はタテ方向のケズリ	・長石、角閃石、石英粒	・内外面ともにぶい黄橙色
6	甌				・内外面ともナデ ・把手部は手づくねにより成形	・長石、角閃石、石英粒	・内外面ともにぶい橙褐色
7	甌				・把手部の剝離痕がみられる ・把手部は手づくねにより成形	・長石、角閃石、石英粒	・内外面とも橙褐色
8	甌				・把手部は手づくねにより成形	・長石、角閃石	・内外面とも橙褐色
9	甌				・把手部は手づくねにより成形	・長石、角閃石、石英粒	・内外面とも橙褐色
10	鉢	14.0		5.3	・内外面ともナデ ・外面口縁部を横ナデ ・底部外面に「×」印のへら記号が施される	・長石、角閃石	・内外面とも明赤褐～橙褐色
11	鉢	(8.0)	(7.6)	(8.0)	・内外面とも手づくねにより成形 ・外面の一部にタテ方向のハケ	・長石、角閃石	・内外面とも橙褐色

土器観察表(その2)

番号	器種	法量 (cm)			() の数値は推定復元		調整	胎土	色調
		口径	受口径	胴部最大径	底部径(高台径)	器高			
9-1	甌			(22.0)			・外面はタテ方向のナデ ・内面はナデ	・角閃石、石英粒、砂粒	・外面は灰白色 ・内面は灰色～褐灰色
2	甕			26.0			・外面はタテ方向のハケ ・内面は下から上方向のケズリ	・石英粒、白色粒	・外面は白色～淡橙色 ・内面は灰白色
3	甕			29.0			・外面はタテ方向のハケ ・内面はナナメ方向にケズリあげている	・長石、角閃石、石英粒	・内外面とも灰白色
4	土師器(?) 坏蓋	11.4			4.2		・頂部外面は不定方向のへラケズリの上からミガキ ・体部内外面ともへラミガキ ・口縁部内外面ともヨコナデ	・長石、石英粒、微細な砂粒	・外面は淡橙色 ・内面は淡橙～褐灰色
5	須恵器 坏蓋	(14.5)					・頂部外面は回転へラケズリ ・内外面とも回転ナデ	・精選されている ・黒色粒がみられる	・外面は暗青灰～灰白色 ・内面は灰色
6	須恵器 坏蓋	(14.8)					・頂部外面は回転へラケズリ ・内外面とも回転ナデ	・精選されている	・外面は暗青灰色 ・内面は青灰色
7	須恵器 坏蓋	14.0			4.4		・頂部外面は回転へラケズリ ・内外面とも回転ナデ	・精選されている ・石英粒を若干含む	・内外面とも青灰色
8	須恵器 坏身	(15.0)					・底部外面は回転へラケズリ ・内外面とも回転ナデ ・底部内面は仕上げナデ ・底部外面に「X」印のへラ記号	・精選されている ・石英粒を若干含む	・内外面とも青灰色
9	須恵器 坏身	(12.6)	(15.4)				・内外面とも回転ナデ	・精選されている ・黒色粒を含む	・内外面とも青灰色

土器観察表(その3)

番号	器種	法量(cm)				胎土		調整	色調
		口径	受部径	胴部最大径	底径(高台径)	器高	元高		
9-10	須恵器 坏身	(15.0)	(17.8)				・精選されている	・内外面とも青灰色	
11	須恵器 高坏	11.0					・砂粒を多く含む	・内外面とも暗青灰色	
12	須恵器 坏身	(11.5)	(14.0)			4.4	・精選されている ・黒色粒を含む	・内外面とも青灰色	

した石類が多く出土している。第8図1は径9.8×7.3cm、厚さ2.2~3.0cmを測る叩石である、表裏両面とも中央部がくぼんでおり、側面にも使用痕が認められる。なかには鉄器も出土しているが、錆化が著しく原形を保っていないため図化しえなかった。なお遺物の観察は別表にまとめた。

SK 1

SB1の南側コーナーを切る位置に0.6×3.2mの不定楕円形の土坑が確認できた(第3図、写真図版1・4)。深さは最深部で15cmを測り、皿状の様相をもつが、埋土中より古墳時代後期および奈良時代の遺物が出土している(第10図5~7)。古墳時代後期の遺物はSK1との攪乱によるものと思われ、当該遺構の帰属時期は奈良時代であるものと考えられる、なお遺物の観察は別表にまとめた。

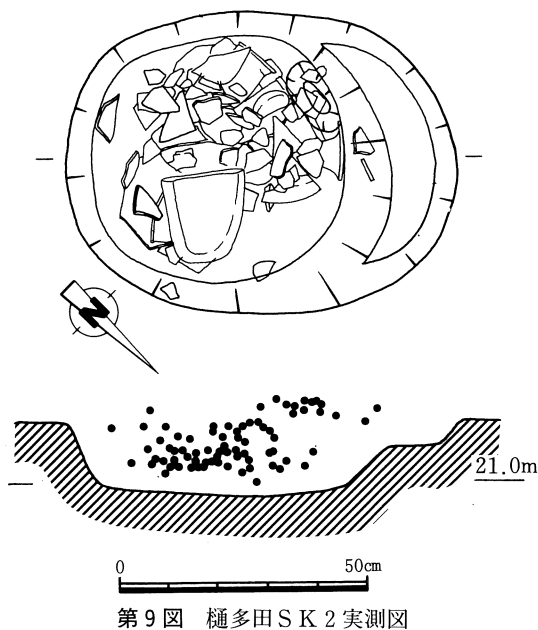
土器観察表(その4)

番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
		口径	胴部最大径	底部径(高台径)	器高			
10-2	甌			(12.0)		・内外面ともナデ	・長石、角閃石、白色粒、砂粒	・外面は灰白色 ・内面は浅黄橙色
3	甌	25.0		11.6	24.7	・内外面ともナデ	・長石、角閃石、石英粒、砂粒	・外面は赤褐色～灰白色 ・外面に黒斑がみられる ・内面は浅黄橙色
4	甕	(17.8)				・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はナデ ・体部内面は下から上方向へのヘラケズリ	・石英粒	・内外面とも灰白色
5	須恵器 坏蓋					・頂部外面は回転ヘラケズリ ・外面は回転ナデ ・内面は回転ナデ ・頂部内面には仕上げナデ	・精選されている ・黒色粒がみられる	・内外面とも暗青灰色
6	須恵器 坏蓋	(14.8)				・内外面とも回転ナデ	・精選されている ・黒色粒がみられる	・外面は灰色 ・内面は灰白色
7	須恵器 坏蓋	(16.6)				・頂部外面は回転ヘラケズリ ・外面は回転ナデ ・頂部内面は仕上げナデ ・内面は回転ナデ	・精選されている ・石英粒がみられる	・内外面とも灰色 ・重ね焼きの痕跡が色調の違いに観察される

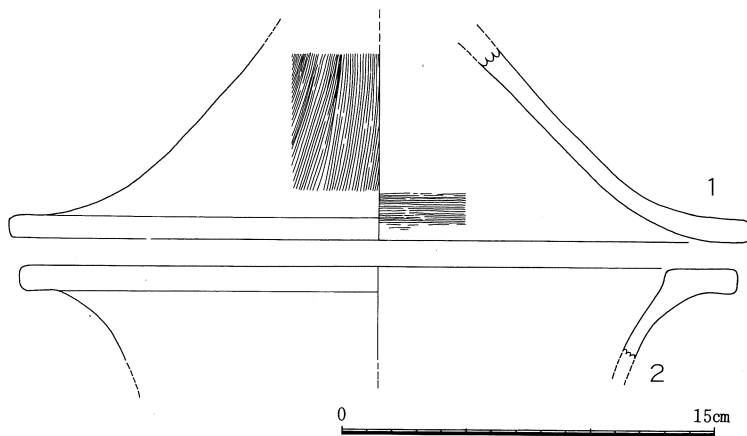
SK 2

調査区北東部分において90×60cmの楕円形を呈する土坑が検出できた。土坑は2段に掘られており、最深部でも15cmと浅い。埋土中には壺形土器と蓋形土器が押し潰され、そのうえに扁平な河原石がおかれた状態で確認できた(第9図、写真図版5)。

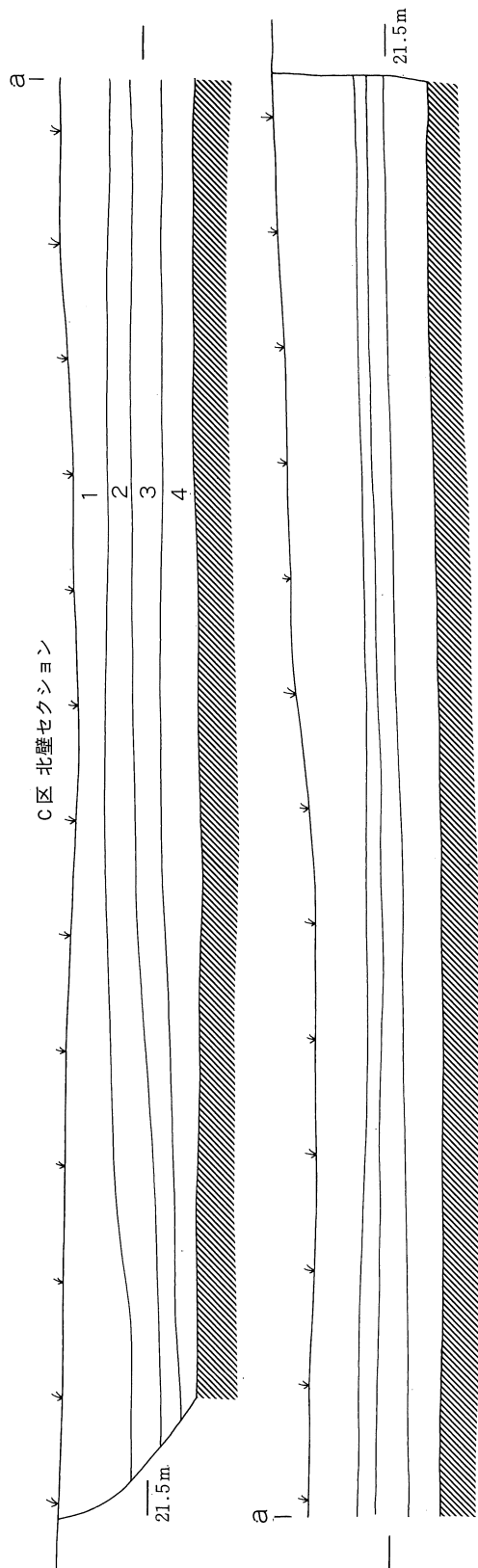
出土遺物は壺形土器と蓋形土器のみである。第10図1は蓋形土器である。受部径25.5cmを測り、外面に縦方向のハケ目、内面口縁付近には横方向のハケ目が施されている。胴部内面はナデが施されており、受部内外面ともヨコナデであった。第10図2は壺形土器である。口径29.0cmを測り、鋤先状口縁をもつ。内外面とも磨滅しており調整は観察しにくい。



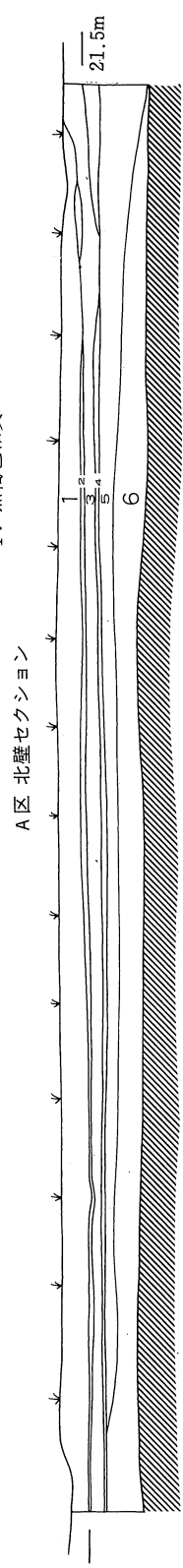
第9図 樋多田SK 2 実測図



第10図 樋多田SK 2 出土土器



1. カクラン土
2. 青灰色粘質土 (旧耕作土)
3. 黄灰色砂質土
4. 黒褐色粘質土



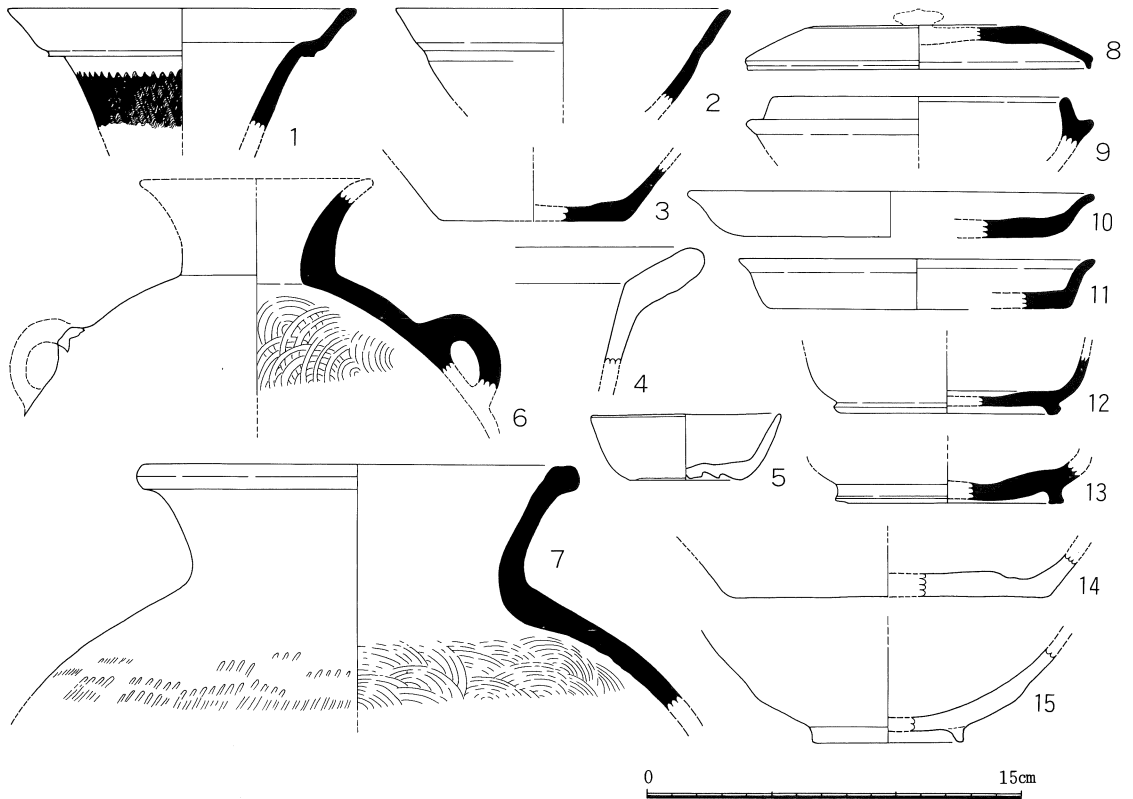
1. 灰褐色土 (耕作土)
2. 赤褐色砂質土 (酸化鉄が凝集している)
3. 灰褐色砂質土
4. 赤褐色砂質土 (酸化鉄が凝集している)
5. 茶褐色土 (上部にマンガング粒が認められる)
6. 茶褐色粘質土



第11図 樋多田A・C区北壁セクション図

土器観察表(その5)

番号	器種	法量(cm)				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底部径(高台径)			
12- 1	蓋	29.9				<ul style="list-style-type: none"> 外面はタテ方向のハケ 口縁部内外面ともヨコナテ 内面はナテ 内面口縁部付近にヨコ方向のハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも黄橙色 内面に黒斑がみられる
2	壺	(29.0)				<ul style="list-style-type: none"> 内外面ともナテ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石、白色粒 	<ul style="list-style-type: none"> 器表は内外面ともふい、黄橙色 断面は黒色



第12図 樋多田A区6層出土遺物

6層出土遺物

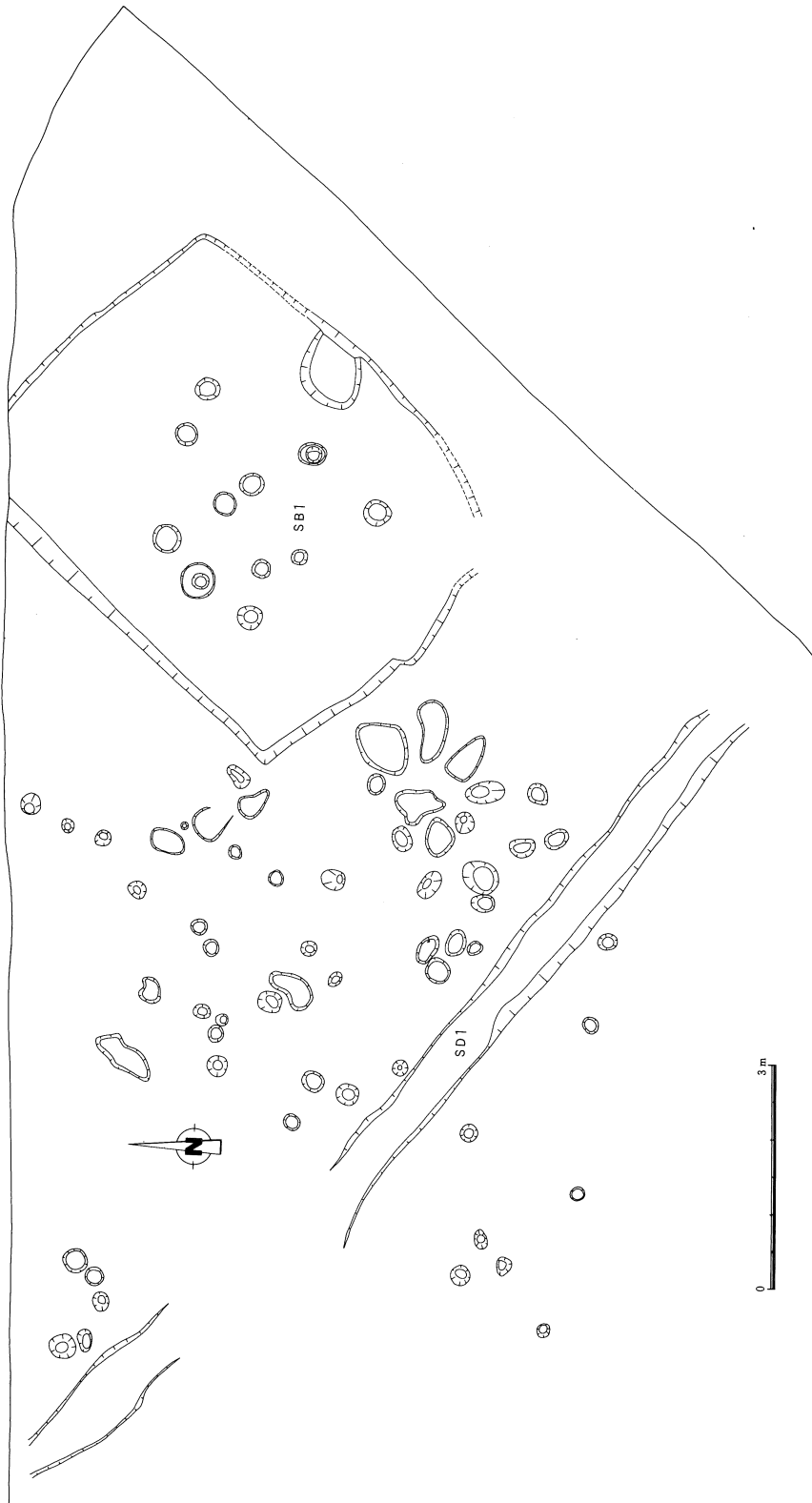
A区はSB1、SK1・2などの遺構は地山上においてプランが確認でき、地山まで地表下50cm内外の6層の堆積土が確認できた(第11図)。耕作土下には2、4層など酸化鉄が凝集した層も認められるし、5層上部にはマンガン粒も認められ、乾田状態の水田が上部に存在していたことがわかる。また6層の茶褐色粘質土からは多くの遺物が出土しており、6世紀後半、8世紀代など下面において遺構の確認された時期の遺物のほかに中世の遺物も若干出土している。なお遺物の観察は別表に示した。

土器観察表(その6)

番号	器種	法量(cm)				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	受部径	底径(高台径)			
14-1	須恵器 甕	(13.8)				<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも回転ナデ 頸部外面に櫛描波状文 	<ul style="list-style-type: none"> 精選されている 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも灰色
2	須恵器(?) 坏身	(13.4)				<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも回転ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも灰白色 やや軟質
3	須恵器 坏身			(7.4)		<ul style="list-style-type: none"> 体部内外面とも回転ナデ 底部内面には仕上げナデが施されている 底部外面は回転ヘラケズリのうえにナデが施されている 	<ul style="list-style-type: none"> 精選されている 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも灰色
4	土師質 甕					<ul style="list-style-type: none"> 内外面ともナデ 口縁部内外面ともヨココ方向のナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石、赤色粒 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は褐灰色 内面は浅黄色
5	土師質 坏身	(7.4)		(5.2)	2.6	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも回転ナデ 底部外面は回転ヘラ切り 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は浅黄色 内面はふい橙色
6	須恵器 提瓶		6.0			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は回転ナデ 体部外面にカキ目 体部内面に同心円文の当て具痕 	<ul style="list-style-type: none"> 精選されている 小石をふくむ 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は青灰色 内面は灰色
7	須恵器 甕	(17.8)	(13.3)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は内外面とも回転ナデ 体部外面はタテ方向の平行タタキ 体部内面は同心円文の当て具痕 	<ul style="list-style-type: none"> 精選されている 長石、角閃石をふくむ 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも灰色

土器観察表(その7)

番号	器種	法量(cm)				胎土	色調・焼成
		口径	頸部径	受部径	()の数值は推定復元 口径 底径 器高 (高台径)		
14-8	須恵器 坏蓋	(13.6)				・精選されている	・灰色
9	須恵器 坏身	(11.8)		(14.0)		・精選されている	・灰色
10	須恵器 皿	(16.2)		(12.0)	(1.8)	・精選されている ・底部外面は回転ヘラ切りののち回転ナデ	・外面は灰白色 ・内面は灰色
11	須恵器 皿	(14.2)		(12.0)	2.0	・精選されている	・内外面とも灰色
12	須恵器 坏身				(9.1)	・精選されている ・底部外面はヘラ切り後にナデ	・内外面とも灰色
13	須恵器 坏身			(9.1)		・精選されている ・内面は回転ナデのうえから仕上げナデ ・底部外面は回転ヘラ切りの上から回転ナデ	・体部外面は暗青灰色 ・高台内および内面は青灰色
14	土師器(?) 皿(?)				(12.8)	・長石、角閃石	・焼成は軟質である ・内外面とも灰白色
15	瓦質土器 坑				(6.0)	・精選されている	・内外面とも灰白色～黒灰色



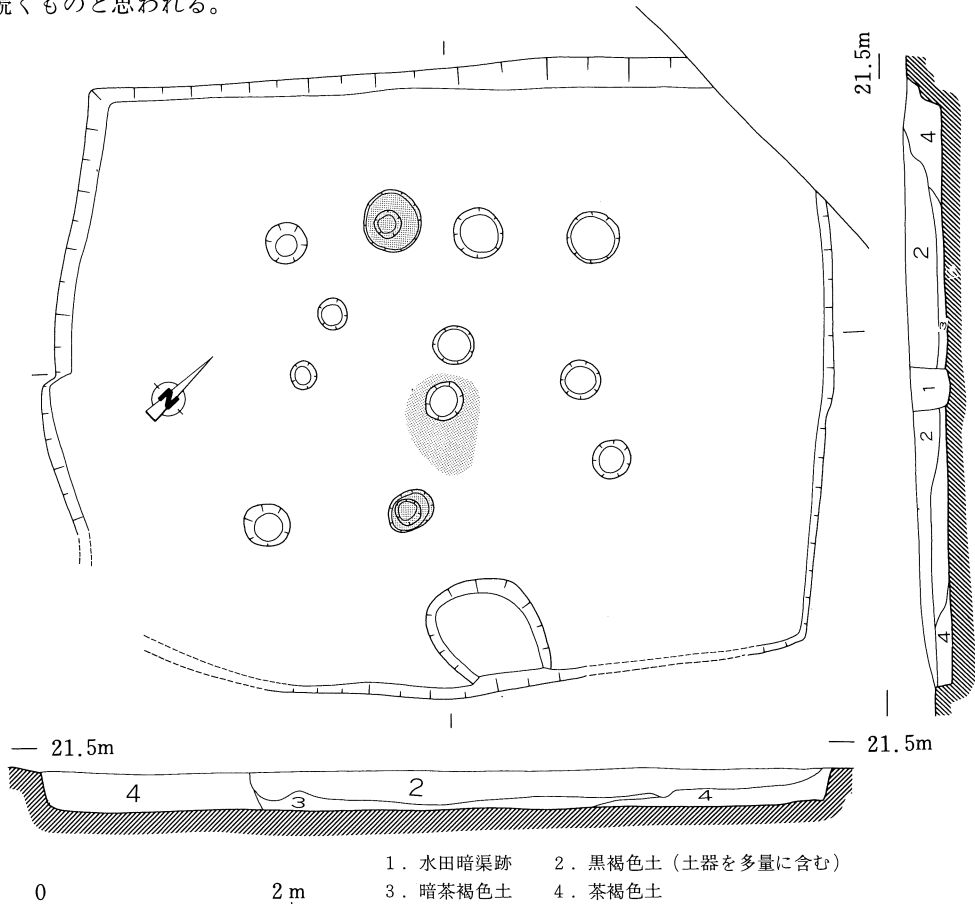
第13図 樋多田B区 遺構配置図

3. B区

A区とC区に挟まれたB区では、東端部分において竪穴住居跡（SB1）1棟、溝状遺構（SD1）1条、ピット群多数が検出できた（第13図、写真図版6）。

溝状遺構（SD1）は幅55～75cm、深さは最深部25cmを測り、その埋土は上層が黒褐色土、下層が褐灰色土の2層に分かれる。埋土中からは土器片が出土しているが、図化しえる破片はない。しかし、その時期は竪穴住居跡（SB1）と同時期であると思える。またその方向は南東から北西にのび、竪穴住居跡（SB1）の南西辺の方向と一致しており、この両者は有機的に結びつくものであると思える。

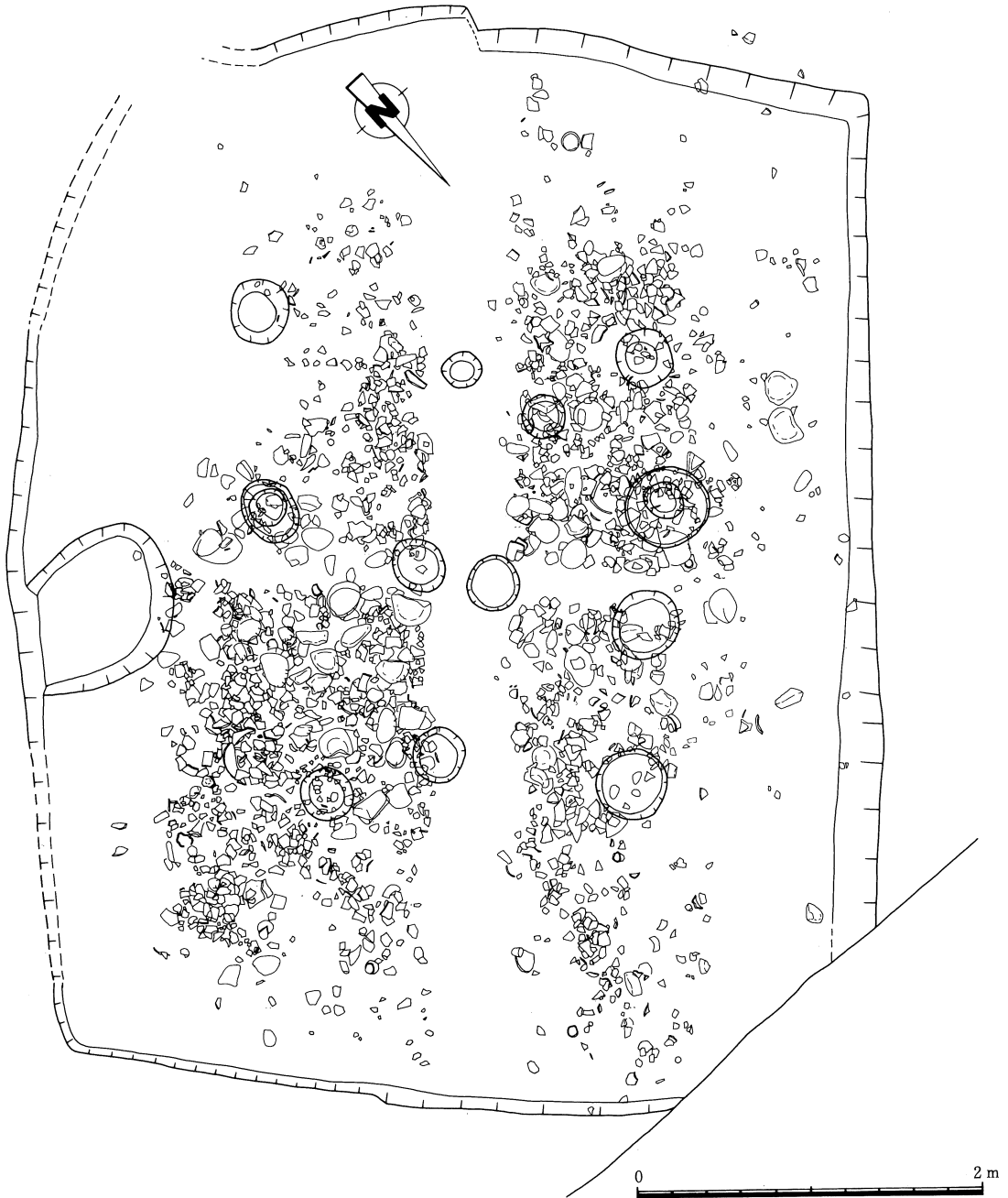
また、ピット群は竪穴住居跡（SB1）と溝状遺構（SD1）に挟まれた地域を中心に数多く検出されている。その並びが建物跡などのように規則正しく配列するものはみられないが、埋土中から小さな土器片が出土しているピットもみられた。なお竪穴住居跡（SB1）の北側の地域は調査範囲外となっているため、その広がりが確認できないが、このピット群は北方にも続くものと思われる。

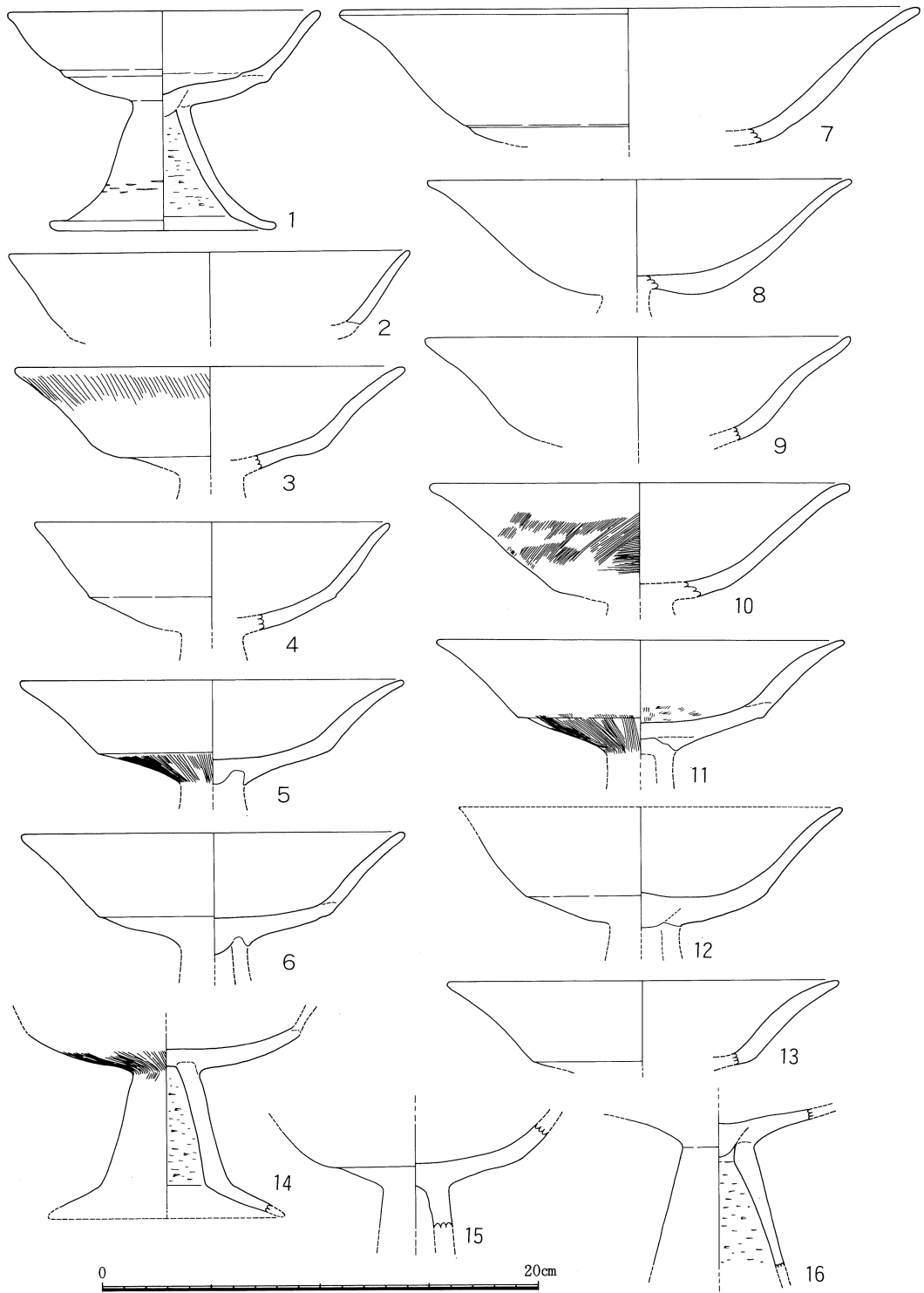


第14図 樋多田S B 1遺構平面図

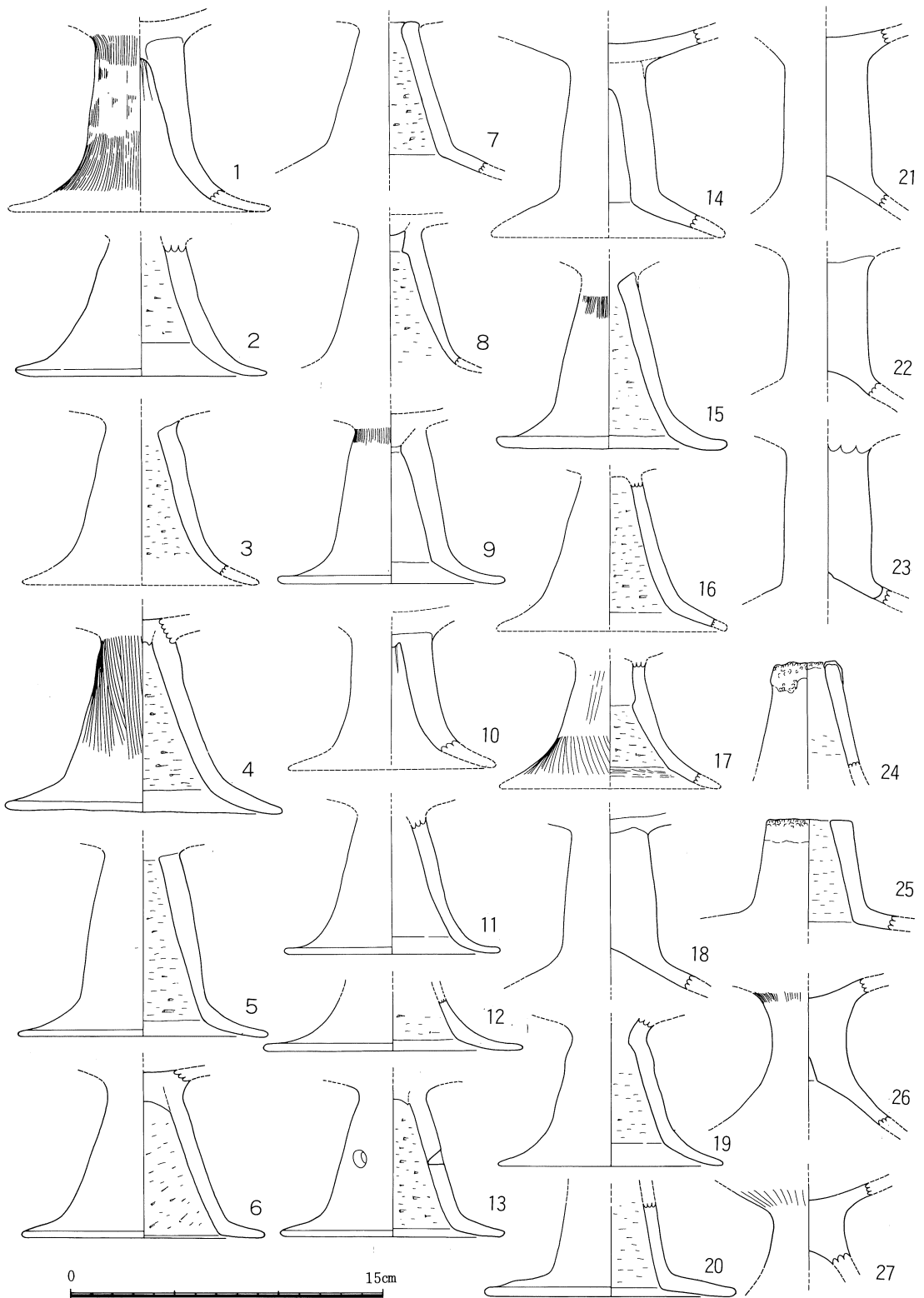
SB1

調査区北東端において1棟の竪穴住居跡が検出できた(第14・15図、写真図版6・7)。プランは6.2×5.0mの方形を呈し、確認できた深さは15~50cmを測る。支柱穴は2カ所認められ、両者とも2段に掘られている。北西側支柱穴は径50cmを測り、1段目の深さは12cmを測る。さらに1段目の上端には径20cmのピットがみられその深さは12cmであった。また南東側支柱穴は径38

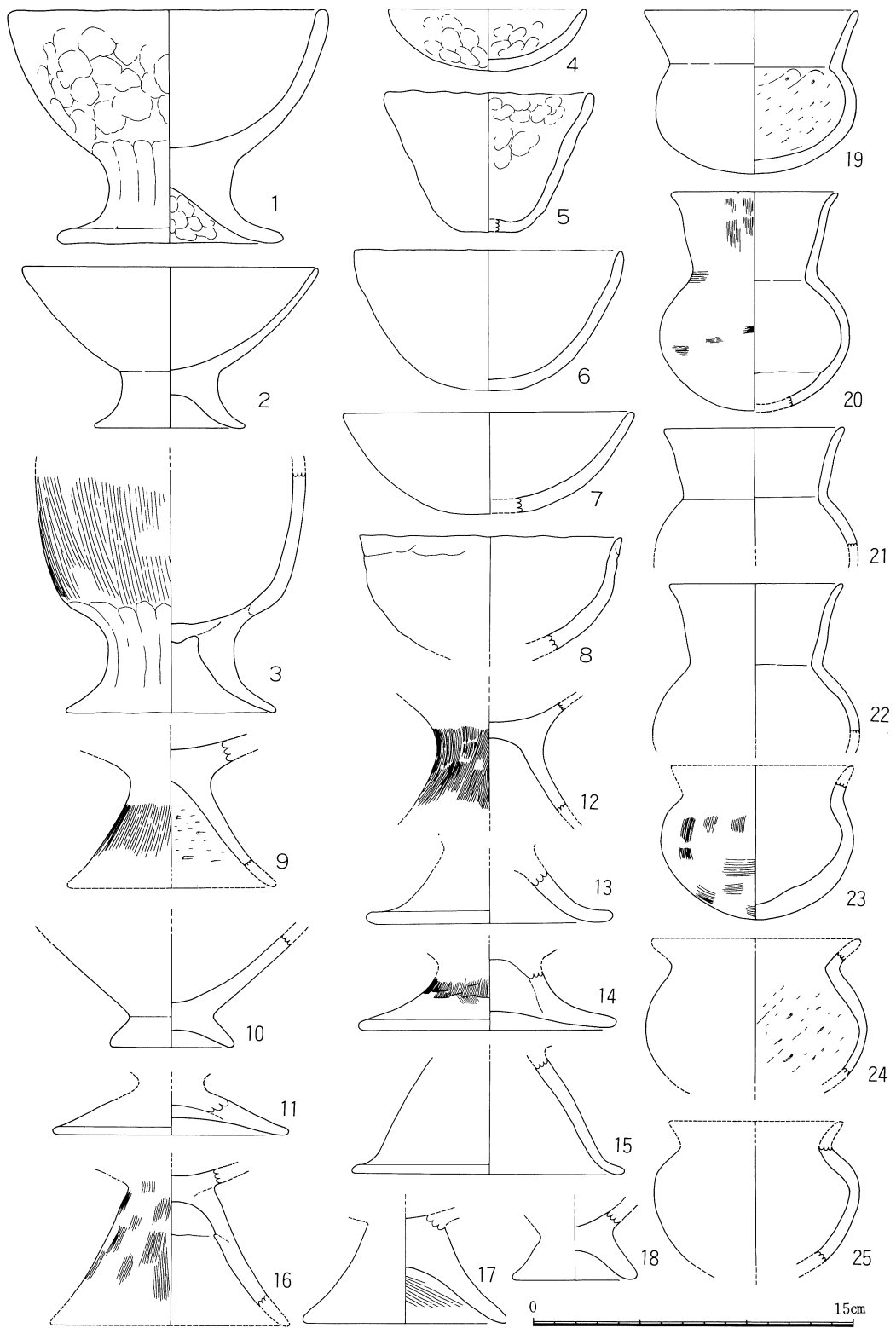




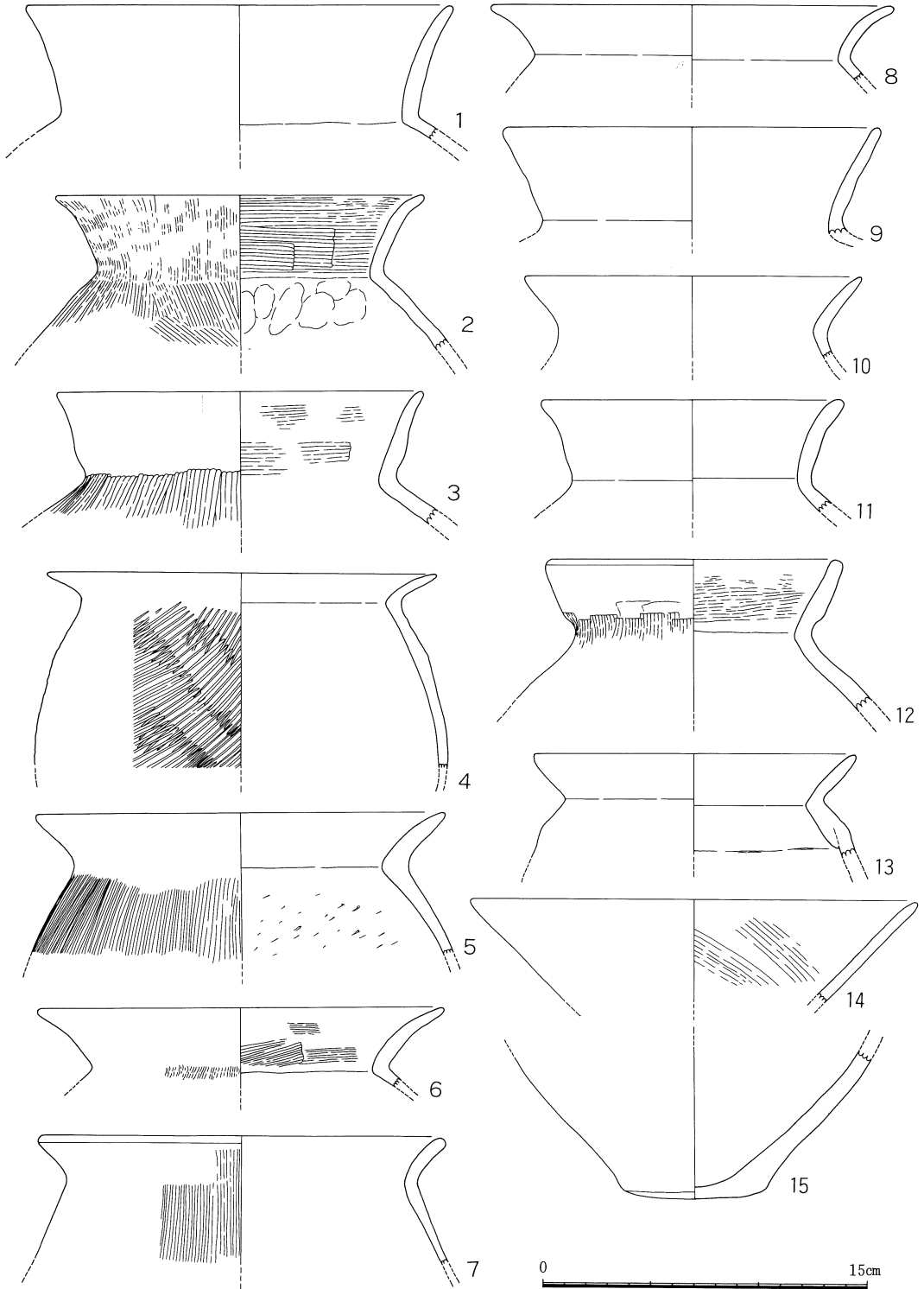
第16図 樋多田SB1出土遺物(1)



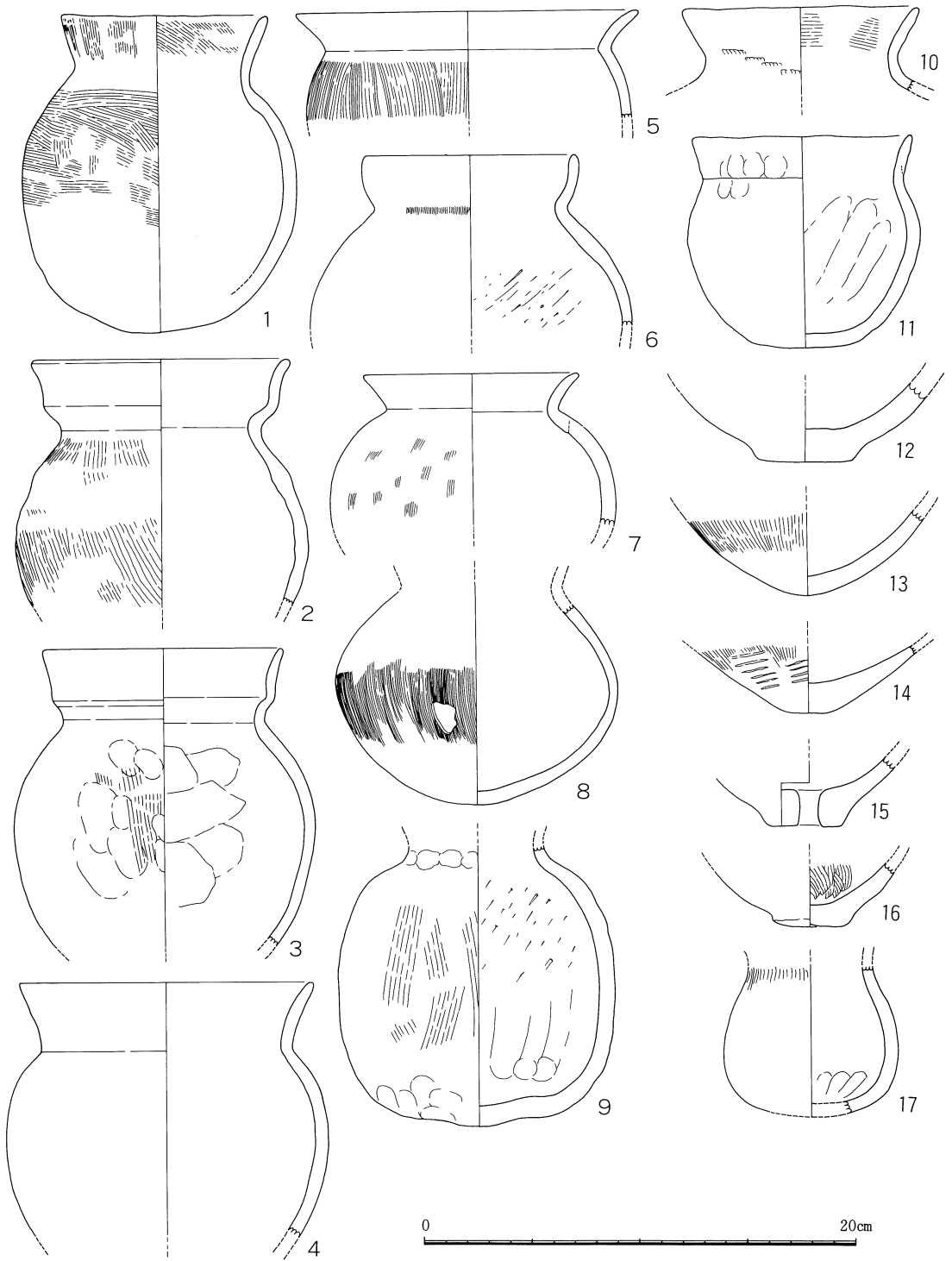
第17図 樋多田SB1出土遺物(2)



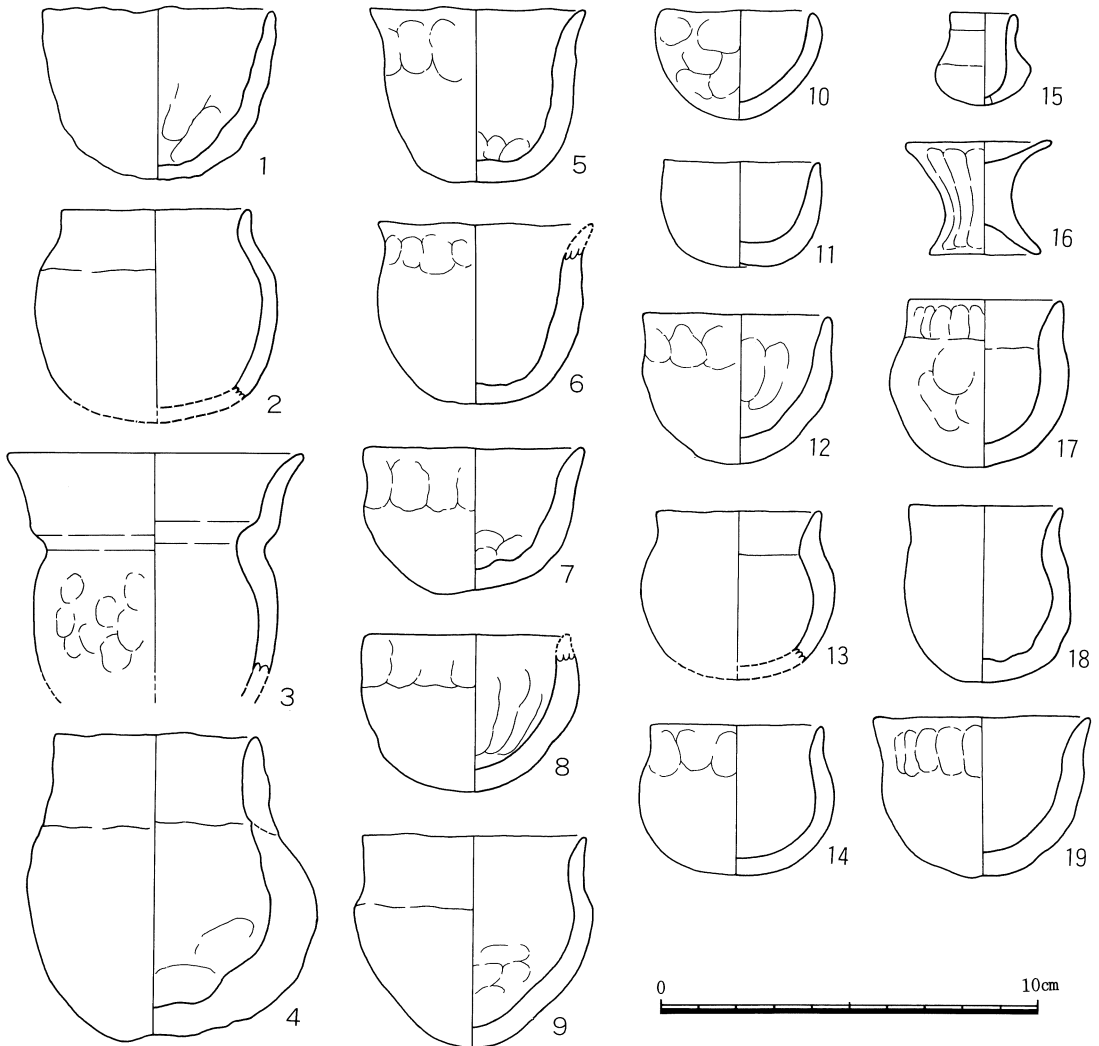
第18図 樋多田SB1出土遺物(3)



第19図 樋多田SB1出土遺物(4)



第20図 樋多田S B 1 出土遺物 (5)



第21図 榑多田S B 1 出土遺物 (6)

×30cmを測り、1 段目までの深さは16cmを測る。1 段目の上端には径20×23cmのピットがみられ、その深さは9 cmである。なお、両者ともピットの底のレベルは同じである。ほかにもピットが9基検出できたが、位置も深さもまちまちである。また中央部に径32×28cm、深さ8 cmの浅いピットが確認できた。このピットを中心に58×80cmの範囲で床面上に炭および焼土が多く、炉跡と考えられる。なお住居跡南東辺中央部に接して径85×80cm、深さ22cmの土坑が確認されている。

S B 1の埋土を観察すると、床面上には暗茶褐色土、また壁面付近には茶褐色土の堆積がみられ、住居が廃絶してから埋没して行く過程において土坑状を呈していたことがわかる。この廃棄住居から多量の土器片・石類が出土しているが、ほとんど2層の黒褐色土から出土している(第14図)。土器類は高坏・鉢・皿・壺・甕・小型丸底鉢・小型器台など多量の遺物が確認できたが、観察は別表に示した。

土器観察表(その8)

番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径			
18-1	高坏	14.2			20.0	・ 胴部内面はヨコ方向のへラケズリ ・ 胴部外面はナデ	・ 角閃石、長石	・ 内外面とも橙～淡橙色
2	高坏	(18.5)				・ 坏部外内はヨコナデ	・ 長石、角閃石	・ 内外面とも橙色
3	高坏	(18.0)				・ 坏部外面はヨコナデ	・ 長石、角閃石	・ 内外面とも赤色 ・ 内面に黒斑
4	高坏	(16.2)					・ 長石、角閃石	・ 内面はにぶい褐色 ・ 外面は橙色
5	高坏	17.6				・ 口縁部内外面ともヨコナデ ・ 坏部底部外面はタテハケ	・ 長石、角閃石	・ 内外面とも淡黄橙色
6	高坏	(17.6)				・ 口縁部内外面ともヨコナデ ・ 坏部底部内面はナデ	・ 長石、角閃石	・ 内外面とも淡橙色
7	高坏	(26.8)				・ 口縁部内外面ともヨコナデ	・ 長石、角閃石	・ 内面は灰白～淡橙色 ・ 外面は淡橙～褐灰色
8	高坏	19.5					・ 長石、角閃石	・ 内外面とも橙～にぶい橙色
9	高坏	(19.6)					・ 長石、角閃石	・ 内面は浅黄橙色 ・ 外面は浅黄橙～橙色
10	高坏	19.2				・ 内面はヨコナデ ・ 外面はナメ方向のハケ	・ 長石、角閃石	・ 内外面とも赤黒～赤褐色
11	高坏	(18.8)				・ 口縁部内外面ともヨコナデ ・ 坏部底部内面は放射状の細かいハケのうえからナデ ・ 坏部底部外面は細かいタテハケ	・ 長石、角閃石、砂粒	・ 内外面とも橙色

土器観察表(その9)

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径			
18-12	高坏						・内外面とも赤～淡赤橙色
13	高坏	(18.0)			・内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
14	高坏				・坏底部外面は細かいタテハケ ・脚部外面はナデ ・底部内面はヨコ方向のケズリ	・長石、角閃石	・内外面とも赤色
15	高坏				・坏部内面はナデ	・長石、角閃石	・にぶい黄橙色
16	高坏				・脚部内面はヨコ方向のケズリ	・長石、角閃石	・内外面とも橙色
19-1	高坏				・脚部外面はタテ方向のハケ	・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
2	高坏		12.0		・脚部内面はヨコ方向のケズリ ・裾部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・内外面とも橙～灰白色
3	高坏				・脚部内面はヨコ方向のケズリ ・脚部外面はナデ	・長石、角閃石	・内外面とも赤～橙色
4	高坏		13.2		・脚部外面はタテ方向のハケ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ ・裾部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・内外面とも黒褐～灰白色
5	高坏		(12.0)		・脚部外面はナデ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ ・裾部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・内外面とも黒褐～灰白色
6	高坏		11.7		・脚部外面はナデ ・脚部内面はナナメ方向のケズリ ・裾部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・内外面とも赤～灰白色
7	高坏				・脚部外面はナデ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ	・長石、角閃石	・内外面とも橙～淡橙色

土器観察表(その10)

番号	器種	法量(cm)				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径			
19-8	高環					<ul style="list-style-type: none"> ・脚部外面はナテ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・外面は赤褐～灰白色 ・内面は灰白色
9	高環			11.0		<ul style="list-style-type: none"> ・脚部と環部の接合部はタテ方向のハケ ・脚部外面はナテ ・裾部内外面ともヨコナテ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも浅橙～橙色
10	高環					<ul style="list-style-type: none"> ・脚部外面はナテ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石、赤色粒 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも浅黄橙色
11	高環			(10.4)		<ul style="list-style-type: none"> ・脚部外面はナテ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも赤～浅橙色
12	高環			(12.5)		<ul style="list-style-type: none"> ・裾部内外面ともヨコナテ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面ともぶい黄橙色
13	高環			(10.8)		<ul style="list-style-type: none"> ・脚部中央に2カ所の穿孔、そのうち1カ所は完全にあいていない ・脚部外面はナテ ・裾部内面はヨコナテ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも赤色
14	高環					<ul style="list-style-type: none"> ・裾部に穿孔 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも浅橙色
15	高環			11.1		<ul style="list-style-type: none"> ・脚部上半に細かいタテハケ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも橙色 ・裾端部に黒斑
16	高環					<ul style="list-style-type: none"> ・脚部外面はナテ ・脚部内面は横方向のケズリ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも橙色 ・裾部外面に黒斑
17	高環					<ul style="list-style-type: none"> ・外面は粗いタテハケ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ ・脚部内面に段をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも橙色
18	高環					<ul style="list-style-type: none"> ・脚部外面はタテ方向のナテ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面ともぶい黄橙色

土器観察表(そのII)

番号	器種	法量(cm)			調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径			
19-19	高坏			(10.8)	<ul style="list-style-type: none"> ・脚部外面はナデ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ ・裾部内外面ともヨコナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・外面は淡橙色 ・内面は灰白色
20	高坏			(12.0)	<ul style="list-style-type: none"> ・裾部内外面ともヨコナデ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・外面は橙～浅橙色 ・内面は浅橙色
21	高坏					<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石、石英粒、赤色粒 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面ともふい、橙色
22	高坏					<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも橙色
23	高坏				<ul style="list-style-type: none"> ・脚部外面はナデ ・裾部に1カ所穿孔されている 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも橙色
24	高坏				<ul style="list-style-type: none"> ・外面はミガキ ・内面はヨコ方向のケズリ ・脚部上端にスラッグ状付着物 ・脚部上端付近は被熱により灰色に変色 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも橙～淡橙色
25	高坏				<ul style="list-style-type: none"> ・脚部外面はナデ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ ・裾部内外面ともヨコナデ ・脚部上端にスラッグ状付着物 ・脚部上端付近は被熱により灰色に変色 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも淡橙色
26	高坏				<ul style="list-style-type: none"> ・脚部上部はタテハケ ・脚部外面はタテ方向のナデ ・裾部内面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・外面は灰白色 ・内面は淡橙色
27	高坏				<ul style="list-style-type: none"> ・脚部上部に粗いタテハケ 	<ul style="list-style-type: none"> ・長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも橙色

土器観察表(その12)

番号	器種	法量(cm)				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径			
20-1	鉢	(15.1)		(10.6)	(10.9)	・外面は指ナデ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
2	鉢	13.9		7.1	7.6	・内外面ともナデ	・長石、角閃石	・内外面とも橙～浅黄橙色 ・台端部に黒斑
3	鉢			(12.7)	(9.8)	・外面はタテ方向のハケ ・台部は指ナデにより成形 ・内面はナデ	・長石、角閃石	・内外面とも黒褐～明褐灰色 ・台部に黒斑
4	皿	9.2			2.9	・内外面とも指ナデ	・長石、角閃石	・外面は浅橙色 ・内面は橙色 ・外面は黒斑
5	鉢	(9.9)			6.5	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも赤橙～黒褐色
6	鉢	(10.6)			6.5	・外面はナデ	・長石、角閃石	・内外面とも赤褐～灰白色
7	鉢	(13.6)			(4.7)	・内外面ともナデ	・長石、角閃石	・外面は黄橙～黒褐色 ・内面は橙～黄橙色
8	鉢	(12.2)				・内面はナデ ・外面は指オサエ	・長石、角閃石、白色粒	・外面は橙色 ・内面は灰白色
9	高坏					・脚部外面はタテ方向のハケ ・脚部内面はヨコ方向のケズリ	・長石、角閃石	・内外面とも橙色
10	鉢				5.9	・内外面ともナデ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
11	鉢				(11.0)		・長石、角閃石	・外面は橙色 ・内面は灰白色
12	高坏					・脚部外面はタテ方向のハケ	・長石、角閃石	・内外面とも明黄褐色
13	鉢				(11.5)	・内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・外面はにぶい橙色 ・内面は浅橙色 ・内面に黒斑

土器観察表(その13)

番号	器種	法量(cm)				()の数值は推定復元	調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径				
20-15	高坏				(12.8)		・外面はナデ	・長石、角閃石	・外面はにぶい橙色 ・内面は橙～にぶい橙色
16	高坏						・外面は細かいタテハケ	・長石、角閃石	・内外面ともにぶい橙色
17	高坏				(9.7)		・胴部外面はナデ ・胴部内面はナメ方向の粗いハケ	・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
18	鉢				5.8		・台部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石、石英粒	・内外面ともにぶい橙色
19	壺	10.0	8.1	9.3		7.7	・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はナデ ・体部内面はナメ方向にケズりあげている	・長石、角閃石	・外面はにぶい黄橙色 ・内面は橙～にぶい黄橙色 ・外面の頸部と胴部に1カ所ずつ黒斑
20	壺	(7.9)	(5.8)	(8.9)			・口縁部外面はタテ方向の細かいハケの上からヨコナデ ・体部外面はヨコ方向の細かいハケの上からナデ ・底部内面はヨコ方向のケズリの上からナデ	・長石、角閃石	・内外面とも灰白色 ・外面体部に黒斑
21	壺	(8.5)	(6.8)					・長石、角閃石	・内外面ともにぶい黄橙色
22	壺	(8.2)	(6.2)	(9.7)			・口縁部内面はヨコナデ ・体部外面はナデ ・口縁部外面はヨコナデ	・長石、角閃石	・内面は灰白色 ・外面は黄橙色 ・外面体部に黒斑
23	壺		7.5	9.0			・外面は不定方向のハケの上からナデ ・内面はナデ	・長石、角閃石	・内外面ともにぶい橙色

土器観察表(その14)

番号	器種	法量(cm)			()の数値は推定復元		調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胸部最大径	底径	器高			
20-24	壺		(7.9)	(10.3)			・体部内面はナメ方向にケズりあげている	・長石、角閃石	・外面は浅黄橙色 ・内面はにぶい橙色
25	壺		(7.1)	(9.6)			・体部内面はヨコ方向の粗いナデ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
21-1	甕	(19.8)	(16.5)				・口縁部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・外面はにぶい赤褐色 ・内面は橙～にぶい赤褐色
2	甕	(17.1)	(13.2)				・口縁部外面はタテ方向のハケの上からヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・口縁部内面はヨコハケ ・頸部内面は指頭圧調整	・長石、角閃石	・内外面とも灰褐色
3	甕	(17.0)	(14.4)				・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面頸部付近は粗いナデと指オサエ	・長石、角閃石	・外面はにぶい橙色 ・内面は浅黄橙色
4	甕	(18.2)	(14.9)	(19.2)			・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はナメのタタキ ・体部内面はナメ方向のナデ	・長石、角閃石	・内外面とも橙色
5	甕	(19.0)	(15.5)				・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテ方向のハケ ・体部内面はナメ方向のケズりあげ	・長石、角閃石	・内外面とも橙～褐灰色
6	甕	(18.8)	(13.7)				・口縁部内外面はヨコ方向のハケ ・口縁部外面ヨコナデ ・頸部外面はタテ方向のハケ	・長石、角閃石	・外面はにぶい橙色 ・内面は灰白～褐灰色

土器観察表(その15)

番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴最大径	底部径			
21-7	甕	(18.9)	(16.3)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナテ 頸部から体部にかけてタテ方向のハケ 体部内面はナテ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも灰色
8	甕	(18.7)	(14.6)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナテ 体部内面はナメ方向のケズりあげ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ともふい、黄橙色
9	甕	(17.5)	(13.9)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナテ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ともふい、黄橙色
10	甕	(15.6)	(12.4)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナテ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面はにふい、褐色 内面は褐灰～にふい、褐色
11	甕	(14.0)	(11.1)				<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は浅黄橙色 内面は淡橙色
12	甕	(13.9)	(11.0)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面はヨコナテ 頸部外面はタテハケ 口縁部内面はヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は橙～浅橙色 内面は灰白色
13	甕	(14.9)	(12.0)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナテ 体部内面はナテ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも灰白色
14	不明	(20.8)				<ul style="list-style-type: none"> 外面はナテ 内面はナメ方向のハケのうえからナテ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも橙色
15	甕				(6.6)		<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石、砂粒 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも浅黄橙色

土器観察表(その16)

番号	器種	法量(cm)				()の数値は推定復元		調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径	口径	器高			
22-1	甕	9.6	8.1	12.8		14.6	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面は粗いタテハケのうえからヨコナデ 口縁部内面はナメ方向の粗いハケ 体部外面上半はヨコおおよびナメの粗いハケ 体部内面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は黒褐～橙色 内面はにぶい橙～黒褐色 	
2	甕	(12.0)	(9.3)	(13.6)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナデ 体部外面はナメ方向のハケ 体部内面は粗いナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は灰白～黒褐色 内面はにぶい黄橙色 	
3	甕	(11.3)	(9.3)	(14.0)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナデ 体部外面はタテハケ 体部内面はケズリのうえからナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は灰～白色 内面は浅黄橙色 	
4	甕	(13.6)	(11.6)	(15.0)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面および体部外面はナデ 体部内面はケズリのうえからナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面はにぶい黄橙～黒褐色 内面は褐灰色 	
5	甕	(16.0)	(13.3)				<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナデ 体部外面はタテハケ 体部内面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも橙色 	
6	甕	(10.0)	(9.0)	(15.0)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ともヨコナデ 頸部外面は細かいタテハケ 体部外面はナデ 体部内面はヨコ方向のケズリ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも黒褐～橙色 	

土器観察表(その17)

番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径			
22-7	甕	(10.0)	(9.0)	(13.3)		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面はヨコナデ 体部外面はタテハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも橙色
8	甕			(13.1)		<ul style="list-style-type: none"> 体部上半外面はナデ 体部下半外面は細かいタテハケ 体部下半に穿孔が1カ所 体部内面はケズリのうえからナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は灰白～橙色 内面は灰白色 体部下半外面ススが付着
9	甕			(12.8)		<ul style="list-style-type: none"> 体部外面は粗いナデのうえに部分的にタテハケ 体部上半内面はナメ方向のケズリ 体部下半内面は指ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも灰白～黒褐色
10	甕	(11.0)	(8.9)			<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面はヨコナデ 口縁部内面は粗いヨコハケ 頸部外面はタテハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は橙色 内面はにぶい褐～黒褐色
11	鉢	(10.2)	(9.6)	(10.8)	(9.8)	<ul style="list-style-type: none"> 頸部外面は指オサエ 体部上半外面はナデ 体部内面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面はにぶい橙色 内面は褐灰色
12	壺(?)				(4.4)	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面とも橙色
13	甕					<ul style="list-style-type: none"> 体部外面はタテハケ 底部外面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は橙～浅黄橙色 内面は灰白色
14	甕				(2.2)	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面はタキのうえからタテハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は橙色 内面は灰白色

土器観察表(その18)

番号	器種	法量(cm)				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径			
22-15	甕			(4.0)		・内外面ともナデ ・底部に穿孔	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色 ・外面に黒斑
16	甕			(3.5)		・外面はナデ ・内面はナナメ方向のハケ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
17	小形丸底鉢		(5.9)	(8.0)		・頸部に粗いタテハケ ・体部外面はナデ ・体部内面はナデ ・底部内面は指オサエ	・長石、角閃石	・内外面ともいぶい黄橙色
23-1	小形丸底鉢	6.1			4.5	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙～黒色
2	小形丸底鉢	(5.0)		(6.4)		・内外面ともナデ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
3	小形丸底鉢	7.9	5.7	(6.5)			・長石、角閃石	・外面は灰白色 ・内面は浅黄橙色
4	小形丸底鉢	5.4	6.1	7.6	8.0	・口縁部は貼り付け ・内面は指オサエ ・体部外面は指オサエのうえから棒状圧痕	・長石、角閃石	・内外面とも黒褐色
5	小形丸底鉢	5.8			4.6	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・外面は浅黄橙～黒色 ・内面は浅黄橙色
6	小形丸底鉢	(5.6)	5.2	5.4	4.8	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも黒～黒褐色
7	小形丸底鉢	5.9			3.9	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
8	小形丸底鉢	(5.5)		5.8	4.1	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
9	小形丸底鉢	(6.0)	(5.9)	(6.3)	5.6	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
10	小形丸底鉢	4.0			2.9	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙～黒色
11	小形丸底鉢	(4.0)			2.8		・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
12	小形丸底鉢	5.0			4.0	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも褐灰色

遺物観察表(その19)

番号	器種	法量(cm)			()の数値は推定復元		調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径	器高			
23-13	小形丸底鉢	(4.3)		(5.1)			・内外面とも指ナデ	・長石、角閃石	・外面は灰白～黒色 ・内面は灰白色
14	小形丸底鉢	(4.5)		(5.2)		(4.0)	・内外面とも指ナデ	・長石、角閃石	・外面は橙～黒色 ・内面は橙色
15	小形丸底鉢	1.6	1.7	2.5		2.4	・内外面とも指オサエ ・底部に穿孔	・長石、角閃石	・内外面とも橙色
16	小形器台	3.9			3.0	3.0	・指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも褐灰色
17	小形丸底鉢	4.0		4.7		4.4	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
18	小形丸底鉢	4.0		4.4		4.7	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・内外面とも橙色
19	小形丸底鉢	5.9				4.2	・内外面とも指オサエ	・長石、角閃石	・外面は灰白～黒色 ・内面は灰白色

4. C区

C区では竪穴式住居跡2棟、土坑5基、ピット多数が検出されている(第22図、写真図版8)。

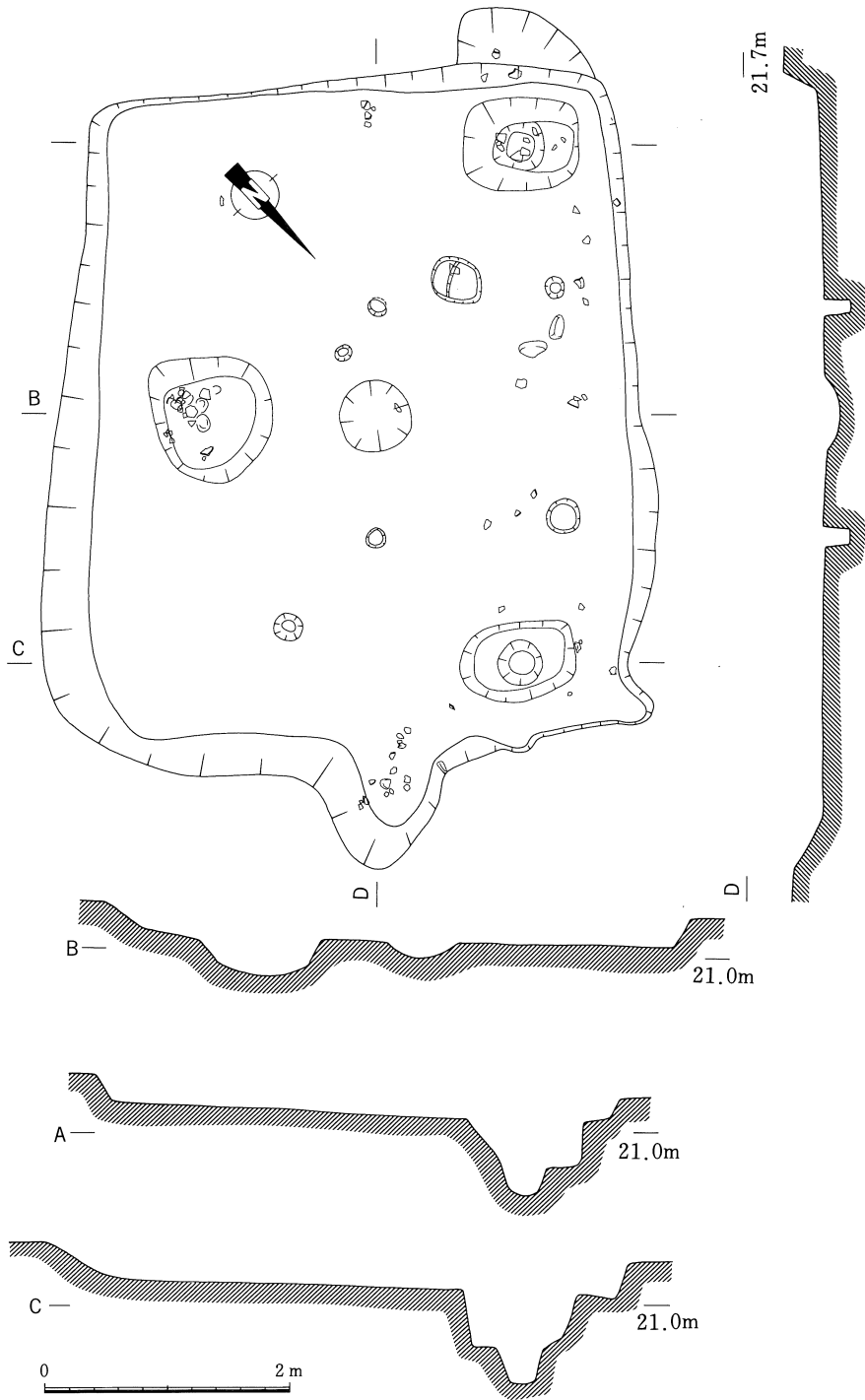
SB1

調査区東北箇所において4層の黒褐色粘質土を掘り下げていくと、3.4×3.7mの不定形土坑が確認できた。この埋土中から多量の遺物が出土したため、遺物の取り上げを行ったうえで掘り下げたところ、この不定形土坑直下の地山直上において方形の竪穴住居のプランが検出できた。不定形土坑の床面中央部付近のレベルとSB1床面のレベルはわずか3cm内外の差しか認められず、SB1が埋没していく過程で不定形の土坑状を呈したため、不定形土坑内の遺物はSB1の埋土中のものであるという結論に達した。

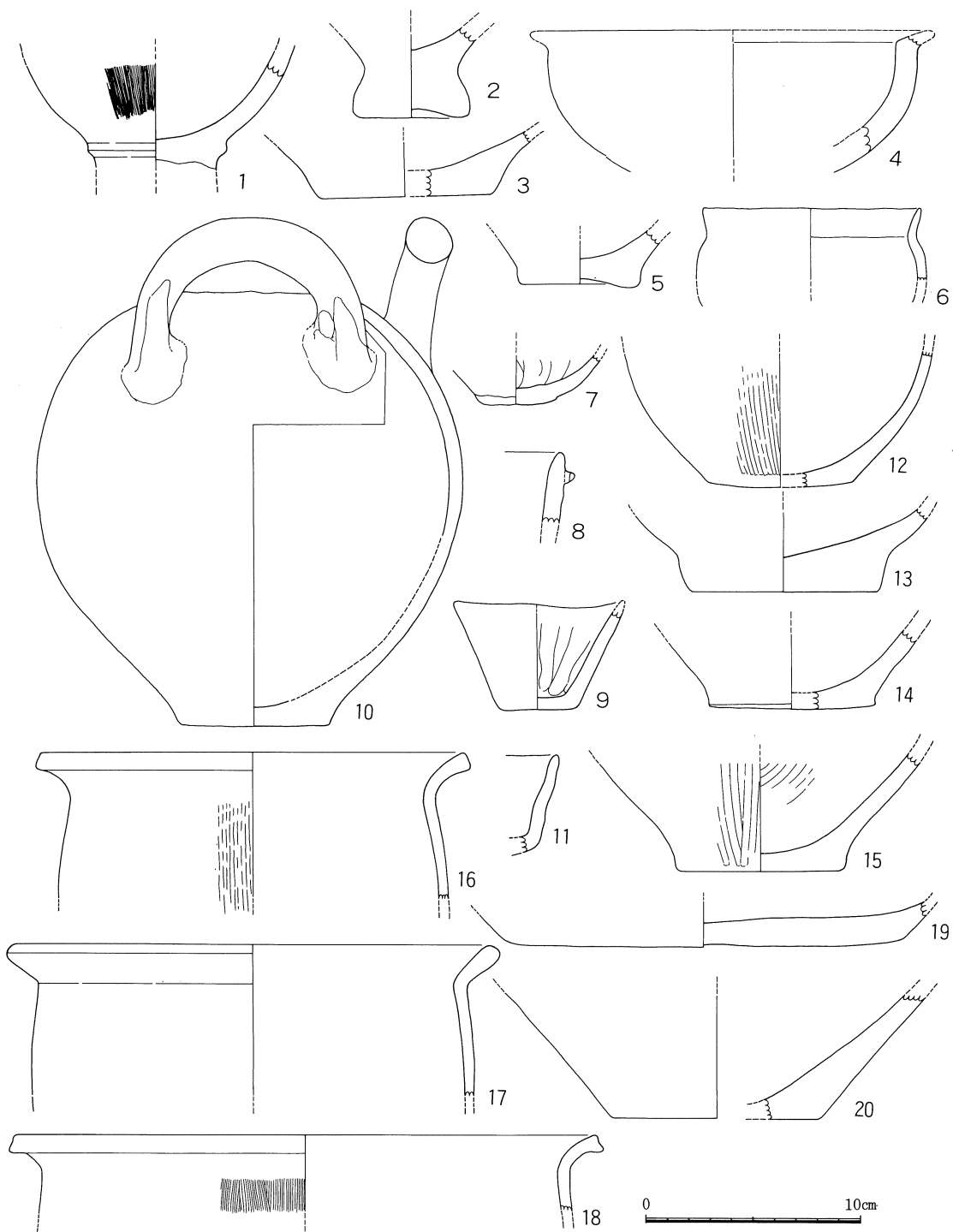
SB1は4.7×5.5m、深さ20～30cmを測る竪穴住居である(第23図、写真図版9)。床面中央部には径58cm、深さ11cmの皿状の土坑が認められ、この土坑の埋土中から炭片が多く出土しているため、炉跡であった可能性が高い。主柱穴はこの炉跡をはさみ長軸方向に1ヵ所ずつ2基確認されている。北東側主柱穴は径16cm、深さ17cmを測り、また南西側主柱穴は径12×16cm、深さ27cmを測る。また北側および西側コーナーにおいて二段堀りの土坑が1基ずつ検出されている。北側コーナーの土坑は1段目が95×65cm、深さ45cmを測り楕円形を呈する。2段目の土坑は1段目の床面の中央部に径37cm、深さ30cmの円形を呈して掘ら



第22図 樋多田C区遺構配置図



第23図 樋多田S B 1 実測図



第24図 樋多田SB1出土遺物

遺物観察表(その20)

番号	器種	法量(cm)				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底部径			
26-1	高坏					<ul style="list-style-type: none"> • 坏部内面はナデ • 坏部外面は細かいハケ状ナデ • 坏部と脚部の境に三角突帯 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石、白色粒 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面はにぶい黄橙色 • 内面は灰白～黒色
2	甕				5.4		<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石、白色粒 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面は橙色 • 内面は黒色
3	壺				(8.0)	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面ともナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石、白色粒 	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも灰白色
4	鉢					<ul style="list-style-type: none"> • 外面は粗いタテ方向のナデ • 内面はヨコ方向のナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面は灰白色 • 内面は明褐灰色
5	壺				(5.6)		<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面は橙色 • 内面は黒色
6	鉢	(10.2)	(9.8)	(10.8)		<ul style="list-style-type: none"> • 内外面ともナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも浅黄橙色
7	鉢又は壺				(3.8)	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面ともナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも橙色
8	甕					<ul style="list-style-type: none"> • 外面に貼り付け刻目突帯 • 内外面とも粗いナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面はにぶい橙色 • 内面は橙色 • 外面に煤が付着
9	鉢	(8.0)			(3.7)	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも指ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも灰～浅黄橙色
10	壺			19.9	7.0	<ul style="list-style-type: none"> • 肩部に把手が付けられる • 外面は粗いナデ • 内面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも灰白～褐灰色 • 外面肩部と底部に黒斑
11	鉢					<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも指ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石 	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも橙～灰色
12	壺				(6.4)	<ul style="list-style-type: none"> • 外面はタテハケ • 内面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 長石、角閃石、白色粒 	<ul style="list-style-type: none"> • 内外面とも褐灰色
13	壺				(8.9)	<ul style="list-style-type: none"> • 内面はナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 石英粒 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面はにぶい橙～黒色 • 内面は橙色

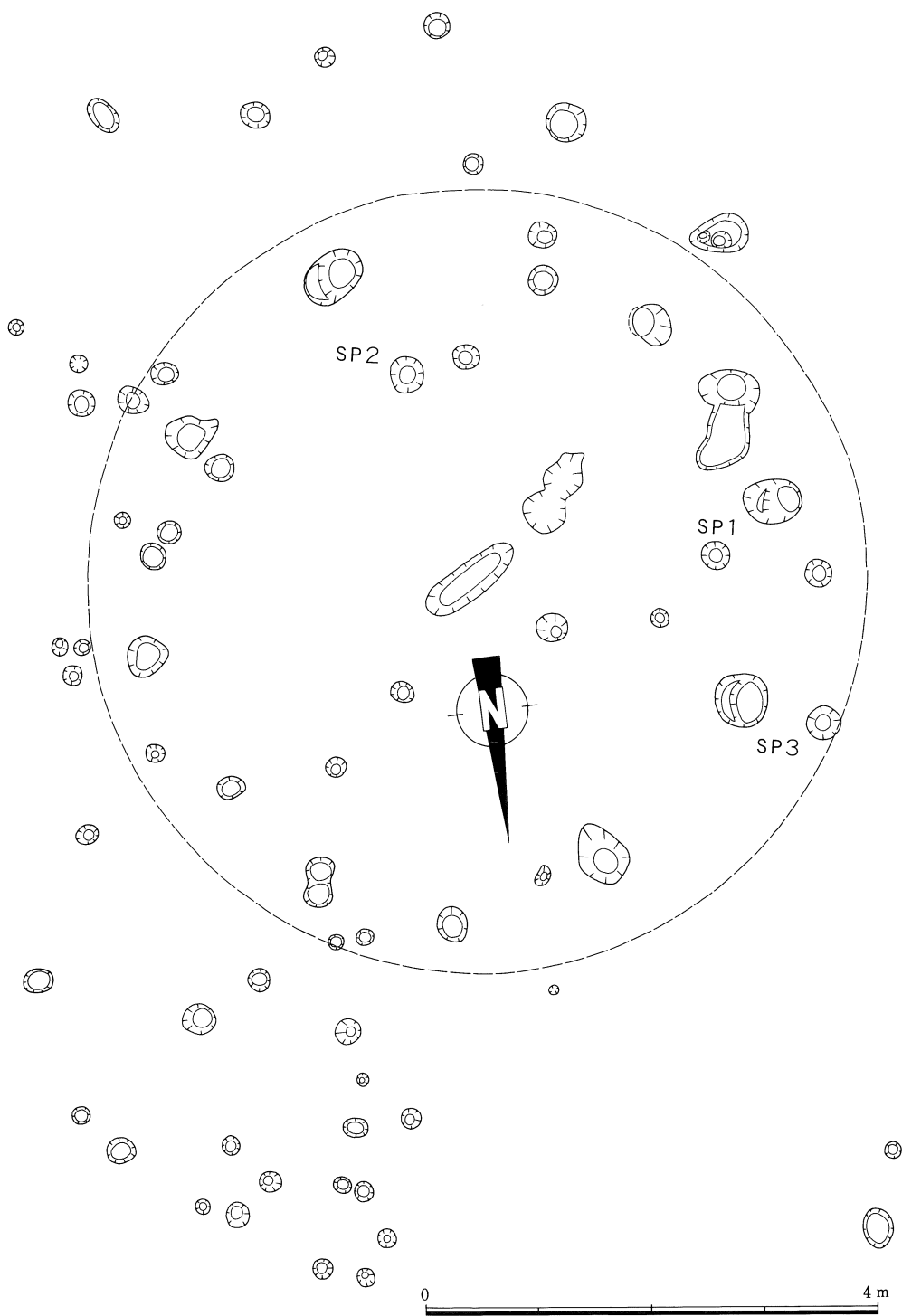
遺物観察表(その21)

番号	器種	法量(cm)				()の数値は推定復元			調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底部径	器高					
26-14	壺					7.8			・外面はタテ方向のハケ状ナデ ・内面はナデ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも灰白色 ・外面に黒斑
15	壺					7.8			・外面はタテ方向のハケ状ナデ ・内面はナメ方向の粗いナデ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも灰白色 ・外面に黒斑
16	甕	(20.4)	(17.0)						・体部外面はタテハケ ・口縁部外面はナデ ・内面はナデ	・長石、角閃石、砂粒	・内外面とも灰白色
17	甕	(24.0)	(20.0)						・長石、角閃石	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
18	甕	(27.0)	(24.8)						・口縁部内外面ともヨココナデ ・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
19	壺					(18.6)			・長石、角閃石、白色粒	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも灰～灰白色
20	壺					(10.0)			・内外面ともナデ	・長石、角閃石、白色粒	・外面は浅黄橙色 ・内面は明褐灰色

れている。西側コーナーの土坑は1段目が9.5×7.5cm、深さ38cmを測り、2段目は1段目中央部に径40cm、深さ21cmの円形を呈して掘られている。この両土坑は規模や特徴が似ており、住居跡奥壁の両コーナーに同様な土坑が存在することになる。また住居跡南東壁中央部から40cmの間隔をもち径95×105cm、深さ34cmの不定円形の土坑が検出されている。

先に記述したとおり住居が埋没していく過程において土坑状を呈し、この土坑中から多量の土器片が出土したものの、本来の住居内からは若干量の遺物が出土したのみである。住居内出土の遺物は弥生時代中期前半の土器が多く、わずか数点、弥生時代後期前半の土器が混じる。これに対し、上層のくぼみ状の土坑からは弥生時代後期前半の土器を主体に中期前半が若干混じる。このくぼみ状の土坑の床面と住居跡床面はレベルが殆ど同じであるため、土坑内の遺物の時期はS B 1が廃絶してからさほど時間的な差異が認められないように思える。それゆえS B 1の帰属時期は弥生時代後期前半であると思える。

なお、出土遺物の観察は別表に示した。



第25図 樋多田S B 2遺構平面図

SB 2

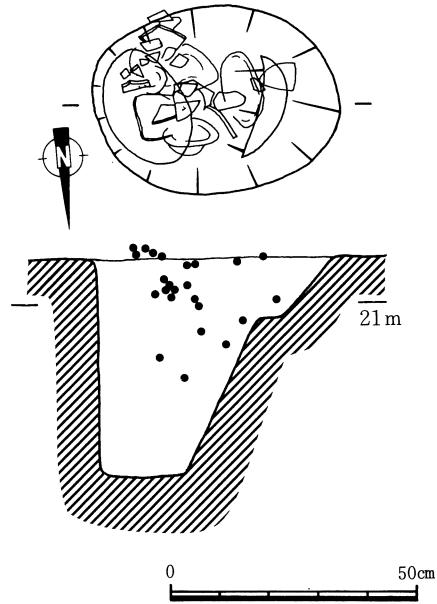
調査区東端中央部において床面の削平された竪穴住居跡（SB 2）が検出できた（第22図、写真図版9）。床面が削平されているため、正確な規模は明らかにしえないが、支柱穴と思われるピットの位置から8 m内外の円形住居であると推定できる（第25図、写真図版9）。深さが30cm以上のピットが12基、径約5.5mの円形に並んでおり、埋土および出土遺物から同時期かつ同じ性格を有するピットであると判断し、床面の削平された住居の支柱穴と推定した。

SP 1～3は他のピットに比較すると土器および石類が多く出土した。

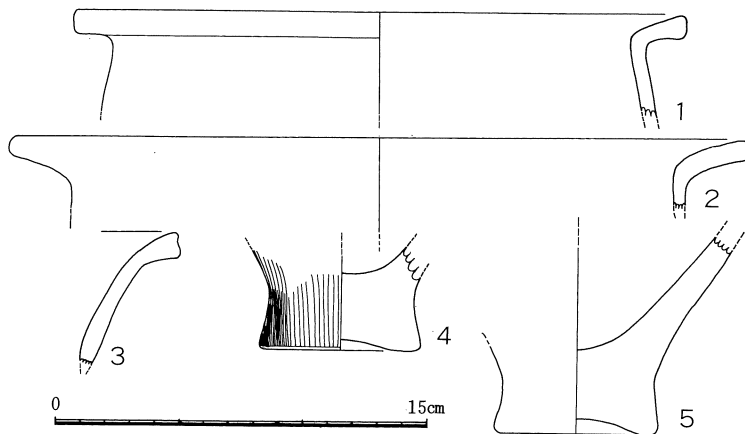
SP 1は2段堀りであり、上面の径が50×38cm、深さ44cmを測る楕円形ピットである（第26図、写真図版10）。遺物は甕類がピット上層において発見されており、埋土中から炭が多量に出土し、また焼けた石もみられた。

SP 2も2段堀りであり、上端の径55×38cm、深さ68cmを測る楕円形ピットである（第28図、写真図版11）。埋土中からは上層において甕、扁平打製石器、扁平な円礫が出土している。扁平打製石器（第29図）は結晶片岩製で14.8×5.8cm、厚さ1.0cm、重さ148gを測り、三日月形を呈する。側縁の一部に研磨痕がみられるし、先端付近両面に擦痕が認められる。

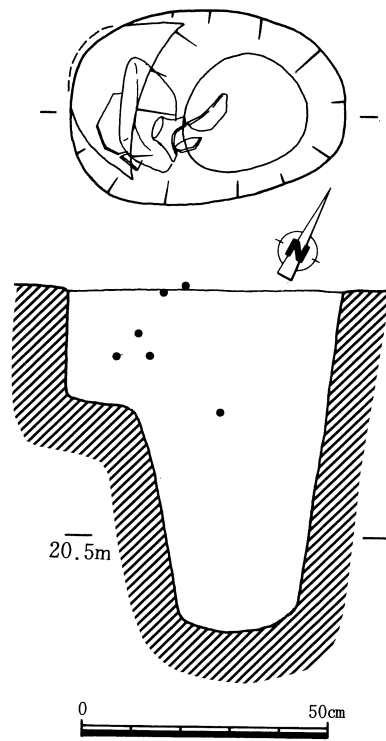
SP 3も2段堀りであり、上端の径47cm、深さ43cmを測る円形ピットである（第30図、写真図版11）。埋土中の中層から甕の破片が出土している。



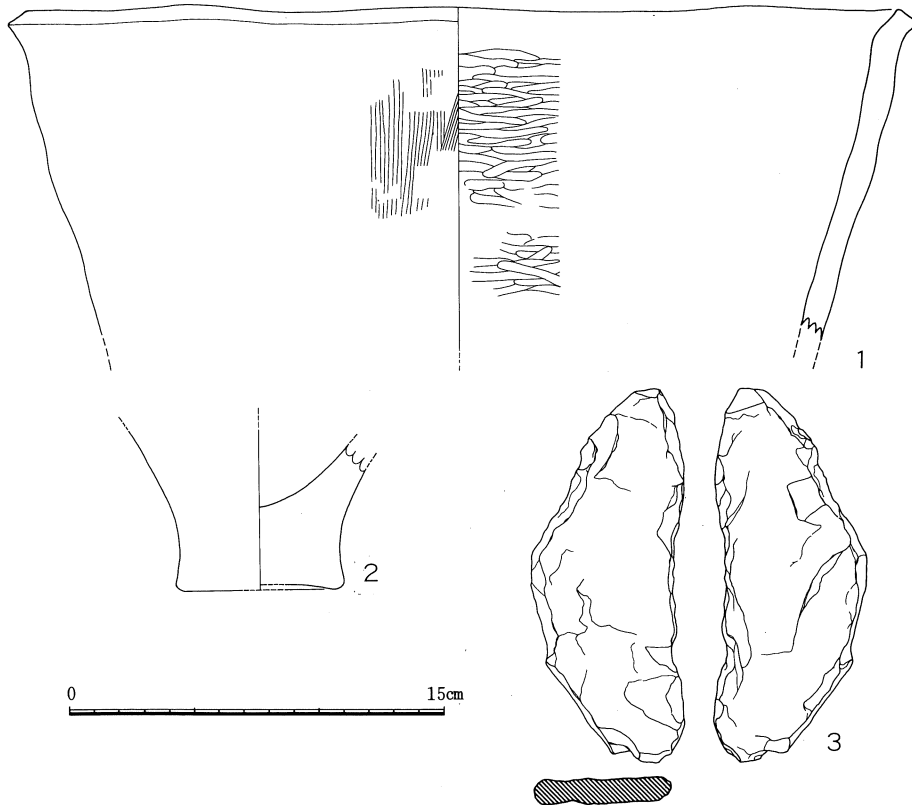
第26図 樋多田SB 2 SP 1実測図



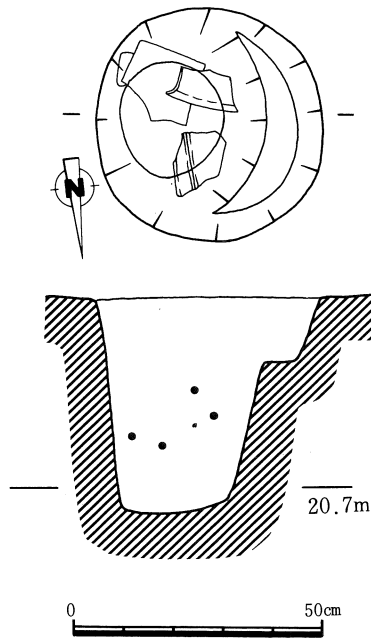
第27図 樋多田SB 2 SP 1出土遺物



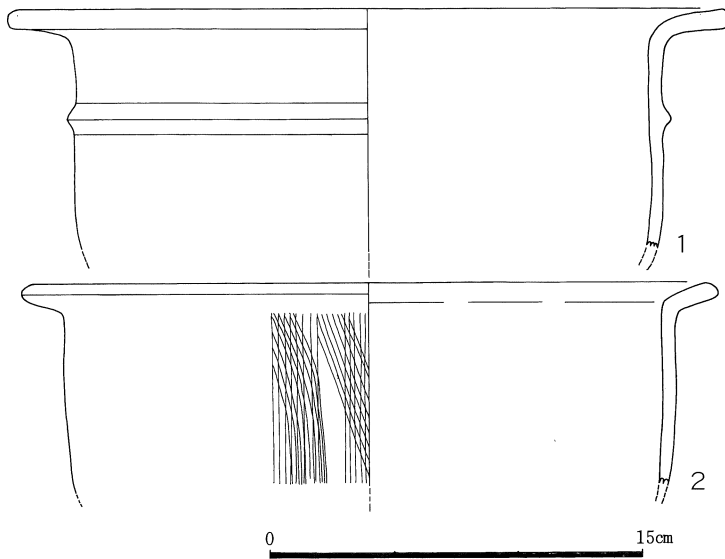
第28図 樋多田SB2 SP2実測図



第29図 樋多田SB2 SP2出土遺物



第30図 樋多田SB 2 SP 3 実測図



第31図 樋多田SB 2 SP 3 出土遺物

土器観察表(その22)

番号	器種	法量(cm)			胎土	調整	色調
		口径	頸部径	胴部最大径			
29-1	甕	(24.8)			・長石、角閃石	・口縁部内外面ともヨコナデ	・外面は褐灰色 ・内面は浅黄橙色
2	甕	(30.0)			・長石、角閃石、白色粒	・口縁部内外面ともヨコナデ	・内外面ともぶい黄橙色
3	壺				・長石、角閃石	・内外面ともヨコナデ	・内外面とも灰白色
4	甕			6.4	・長石、角閃石、白色粒	・外面はタテハケ	・外面は橙色 ・内面は褐灰色
5	甕			6.8	・長石、角閃石	・外面はタテハケ	・外面は灰白～橙色 ・内面は褐灰色
31-1	甕(?)	(37.0)			・外面は浅黄橙色 ・内面は浅黄橙～黑色	・外面はタテハケ ・内面はヨコ方向のミガキ ・口縁部内外面ともヨコナデ	
3	甕			(6.8)	・長石、角閃石、白色粒		・外面は橙色 ・内面は灰白色
33-1	甕	(29.2)	(24.0)	(23.8)	・長石、角閃石、白色粒	・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部内面はナデ	・内外面とも浅黄橙色
2	甕	(28.2)	(24.8)		・長石、角閃石	・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ	・内外面とも浅黄橙～橙色

SK 1

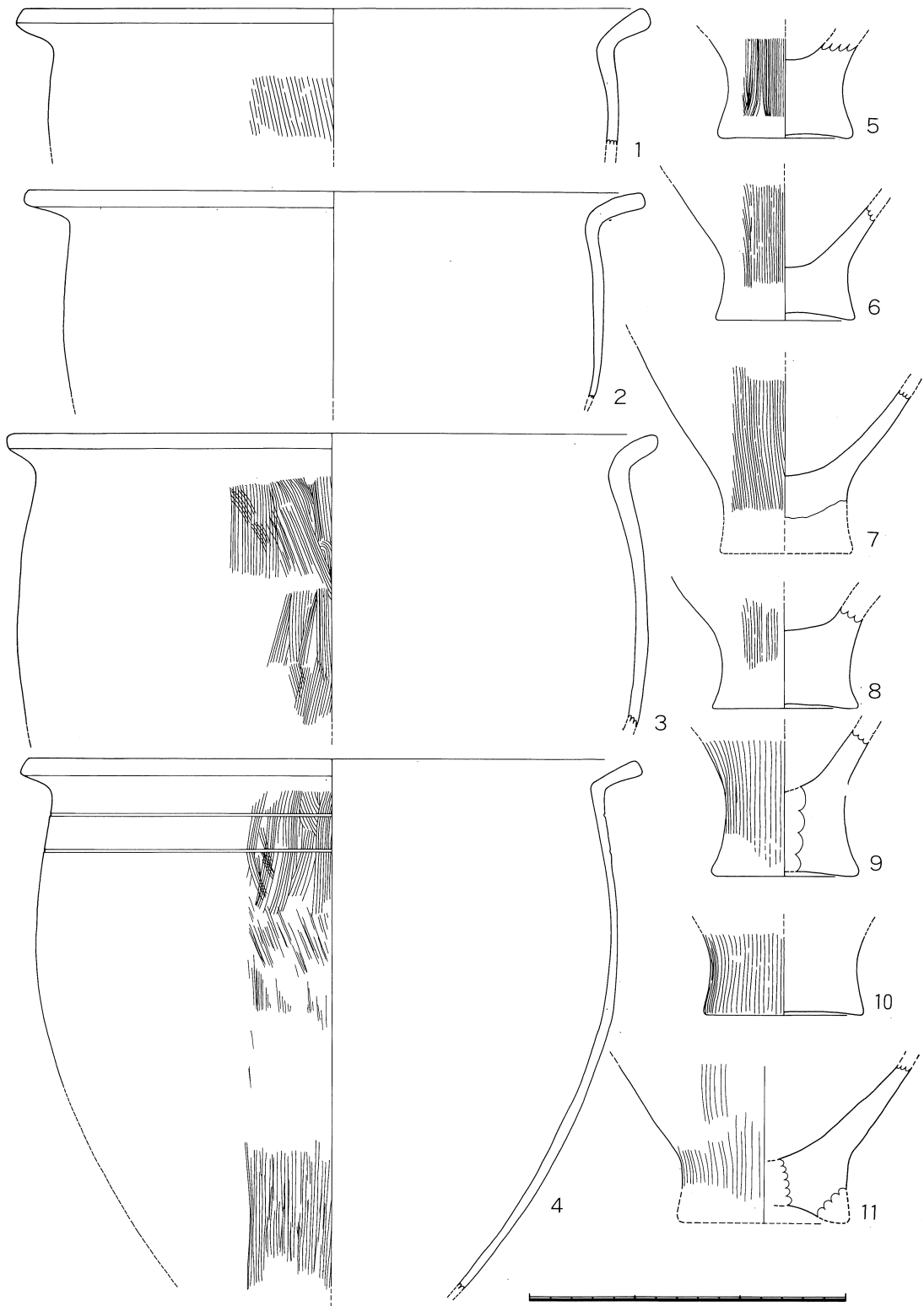
調査区中央部において2.8×1.7cmの長方形に近い土坑が検出された（第32図、写真図版12）。土坑は3段に掘られており、1段目までが16cm、2段目までが40cm、最深部が60cmを測る。SK 1内埋土は4層からなるが、3段目の土坑からはさほど遺物が出土しておらず、そのほとんどが上～中層から出土している。

遺物は円礫、土器、扁平打製石器である（第33～36図）。土器のほとんどは甕であり、若干ほかの器種が混じる。扁平打製石器（第36図3）は上下端がかけており、残存長7.5cm、幅6.5cm、厚さ1.3cmを測る。

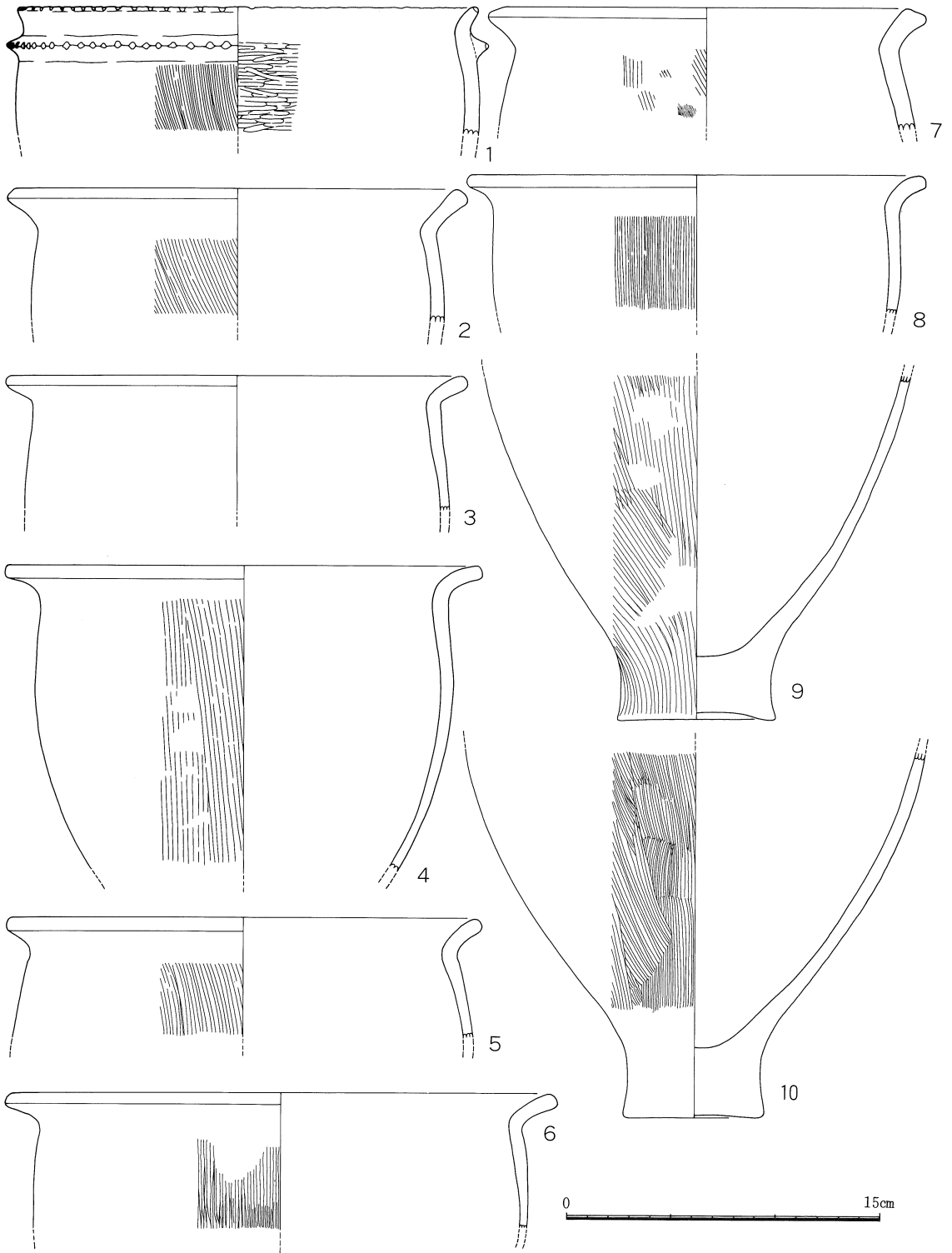
なお、遺物の観察は別表に示した。



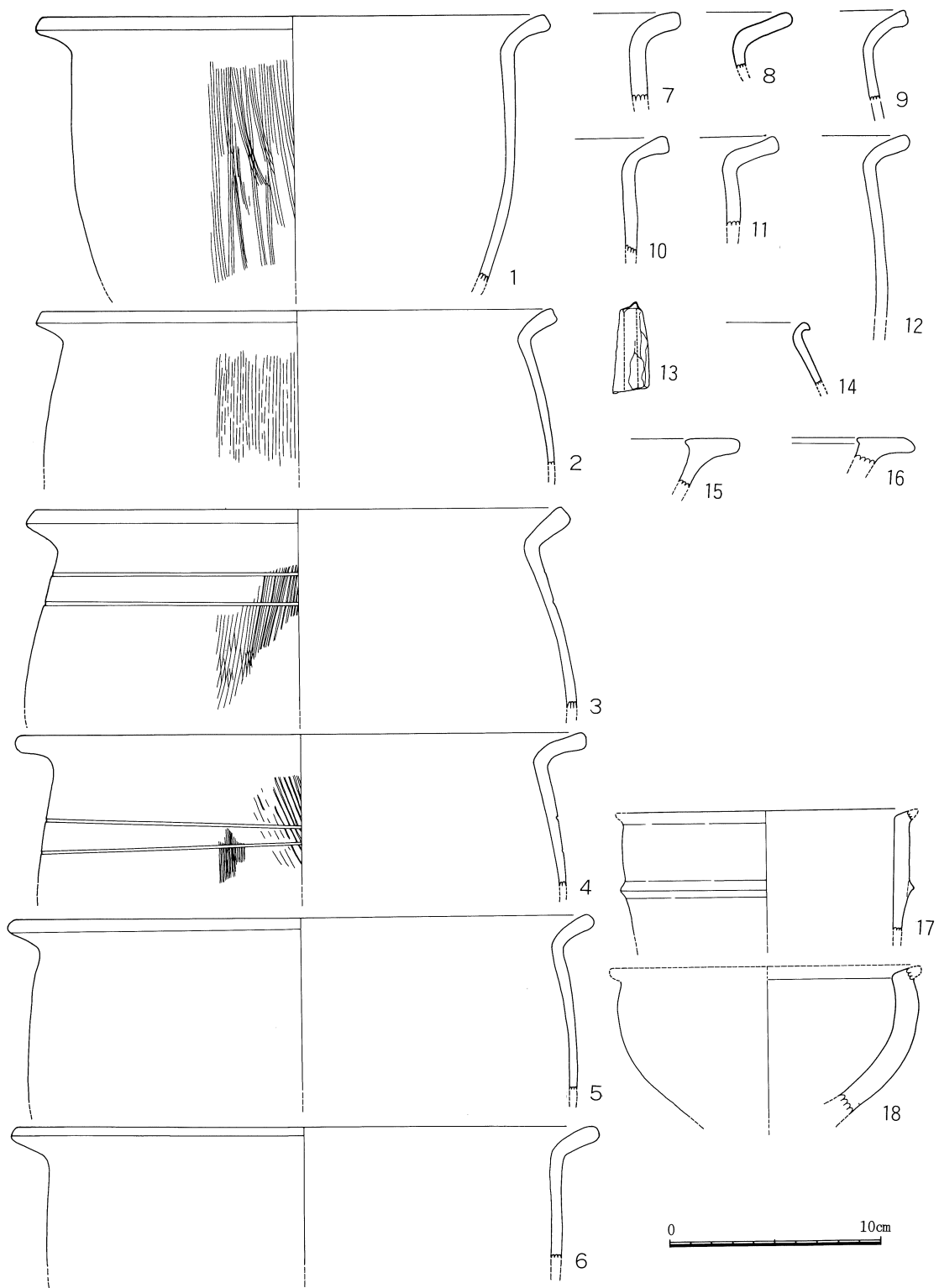
第32図 樋多田SK 1実測図



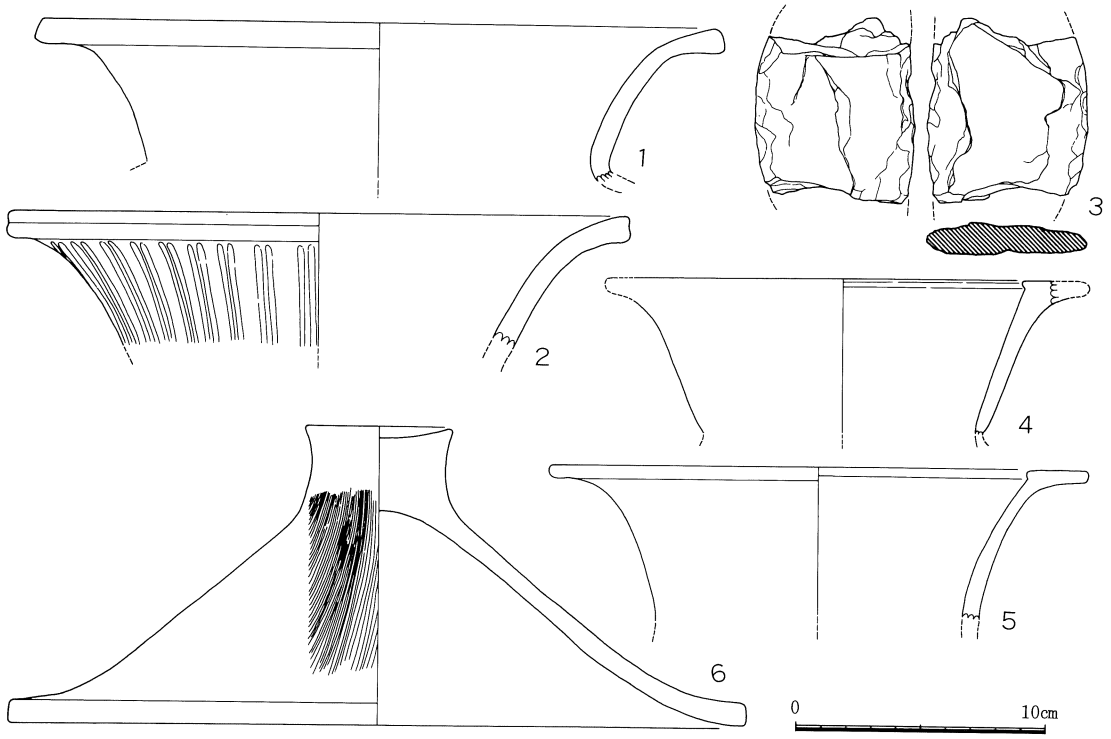
第33図 樋多田S K 1 出土遺物 (1)



第34図 樋多田S K 1 出土遺物 (2)



第35図 樋多田SK1出土遺物(3)



第36図 樋多田SK1出土遺物(4)

土器観察表(その23)

番号	器種	法量(cm)			()の数値は推定復元			調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径	器高				
35-1	甕	(29.6)	(26.6)					・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石	・内外面とも褐灰～灰黄褐色
2	甕	(29.4)	(25.1)	(25.6)				・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石	・外面は橙～赤黒色 ・内面は橙～黒褐色
3	甕	(31.0)	(28.2)	(30.0)				・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ	・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
4	甕	28.8	26.3	27.6				・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ ・頸部外面に洗線が2条	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも橙～灰白色
5	甕				6.4			・体部外面にタテハケ	・長石、角閃石、白色粒	・外面は橙～黒色
6	甕				6.6			・体部外面にタテハケ ・体部内面はナデ	・長石、角閃石	・外面は橙～灰白色 ・内面はにぶい黄橙色
7	甕							・体部外面にタテハケ ・体部内面はナデ	・長石、角閃石、白色粒	・外面はにぶい橙色 ・内面は灰黄褐色
8	甕				7.0			・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石、白色粒、砂粒	・外面は橙色 ・内面は褐灰色
9	甕				(7.0)			・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
10	甕				(7.6)			・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石	・外面は橙色
11	甕							・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石	・外面は灰白色 ・内面は褐灰色

土器観察表(その24)

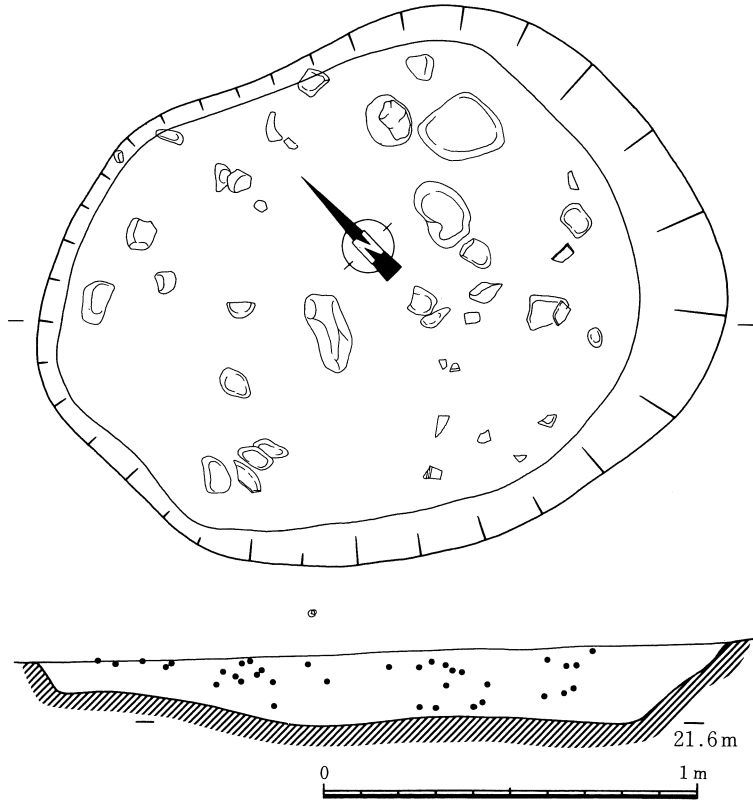
番号	器種	法量(cm)				胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径		
36-1	甕	(22.2)	(21.5)	(23.2)		・長石、角閃石	・内外面ともふい、褐色
2	甕	(21.2)	(19.1)	(19.9)		・長石、角閃石、白色粒	・内外面ともふい、橙～黒色
3	甕	(21.8)	(19.6)			・長石、角閃石、白色粒	・内外面ともふい、橙色
4	甕	(23.0)	(19.6)	(20.0)		・長石、角閃石	・内外面とも橙～灰白色
5	甕	(22.8)	(20.4)			・長石、角閃石	・内外面とも橙～灰白色
6	甕	(26.0)	(23.2)			・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
7	甕	(19.0)	(18.4)			・長石、角閃石	・内外面ともふい、黄橙色
8	甕	(22.0)	(19.6)	(19.6)		・長石、角閃石	・内外面ともふい、黄橙色
9	甕				(7.6)	・長石、角閃石	・外面は橙色 ・内面はふい、黄橙色

土器観察表(その25)

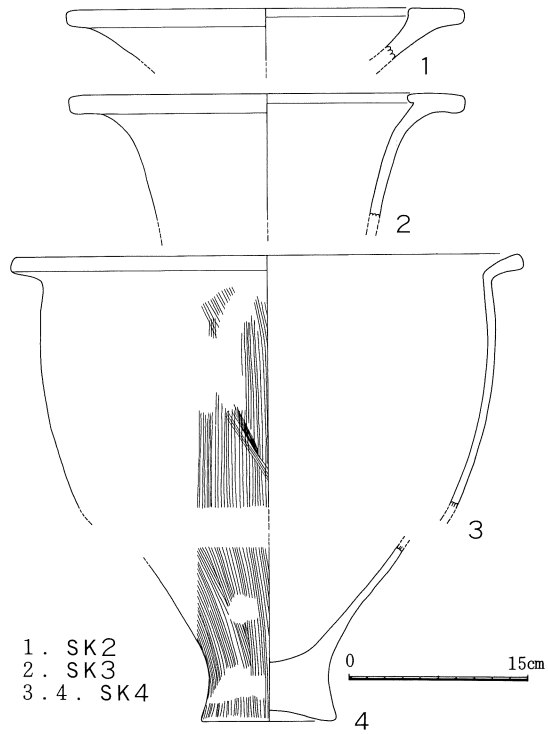
番号	器種	法量(cm)				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径			
36-10	甕				6.6	・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ	・長石、角閃石、白色粒	・外面は橙色 ・内面は灰白～黒色
37-1	甕	(23.8)	(21.0)	(21.2)		・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ	・長石、角閃石	・外面はにぶい黄橙色 ・内面は灰白色
2	甕	(24.0)	(22.3)			・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ	・長石、角閃石	
3	甕	(25.0)	(23.0)			・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ ・外面頸部付近に沈線が2条	・長石、角閃石	・内外面とも淡黄橙色
4	甕	(27.0)	(23.4)			・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ ・外面頸部付近に沈線が2条	・長石、角閃石	・内外面ともにぶい黄橙色
5	甕	(27.4)	(25.0)			・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部内面はナデ	・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
6	甕	(27.4)	(24.4)			・口縁部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも浅黄橙色
7	甕					・口縁部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
8	甕					・口縁部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
9	甕					・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石	・内外面とも黒褐色
10	甕					・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石	・内外面とも黄橙色

土器観察表(その26)

番号	器種	法量(cm)				()の数值は推定復元			胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底径	器高				
37-11	甕								・長石、角閃石	・内外面とも浅黄橙色
12	甕								・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
13	注口土器								・長石、角閃石	・外面は灰白色 ・内面は黒色
14	鉢								・長石、角閃石	・内外面とも灰色
15	高坏(?)								・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
16	高坏(?)								・長石、角閃石	・内外面とも橙～黒褐色
17	甕								・長石、角閃石、白色粒	・外面は明黄褐色 ・内面は浅黄橙色
18	鉢			(14.4)					・長石、角閃石	・外面は灰白色 ・内面は灰色
38-1	壺	(27.0)	(18.6)						・長石、角閃石	・内外面とも灰白色
2	壺	(25.0)							・長石、角閃石	・内外面ともふい黄橙色
4	壺								・長石、角閃石、石英粒	・内外面ともふい橙色
5	壺	(21.6)							・長石、角閃石	・内外面とも黒色
6	壺	29.6				11.9			・長石、角閃石	・外面は灰白～橙色 ・内面は灰白～褐灰色 ・内外面に黒斑



第37図 樋多田SK 2 実測図



- 1. SK2
- 2. SK3
- 3. 4. SK4

第38図 樋多田SK 2 ~ 4 出土遺物

SK 2

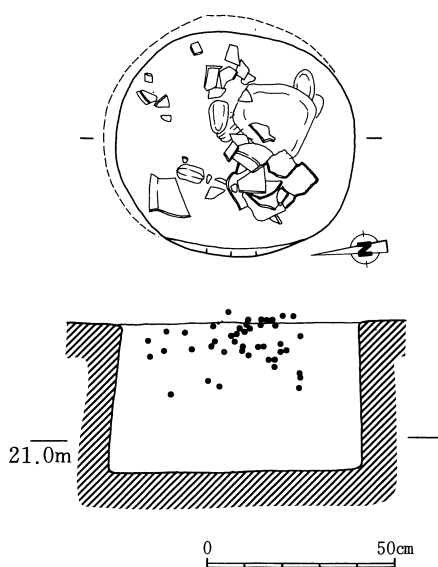
調査区南端中央部において径1.85×1.4m、深さ0.2mの楕円形土坑が検出された(第37図)。埋土中からは河原石に混じり若干の遺物が出土している。遺物の観察は別表に示した。

SK 3

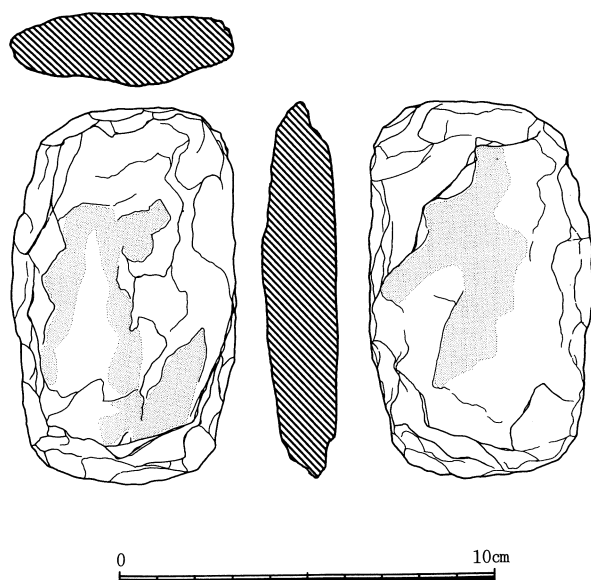
調査区南東端の地域において土坑が検出できた(第39図)。検出面が径63×59cmの円形、床面が径67×62cmの円形を呈し、下方が広がっていることがわかる。深さ40cmを測り、土層の確認は行えなかったが、床面上20cmには遺物は検出されておらず、上層においてのみ出土している。SK 1はその形態的特徴から貯蔵穴であると想定できる。出土遺物は河原石および甕・壺などの土器類であるが、遺物の観察は別表に示した。

SK 4

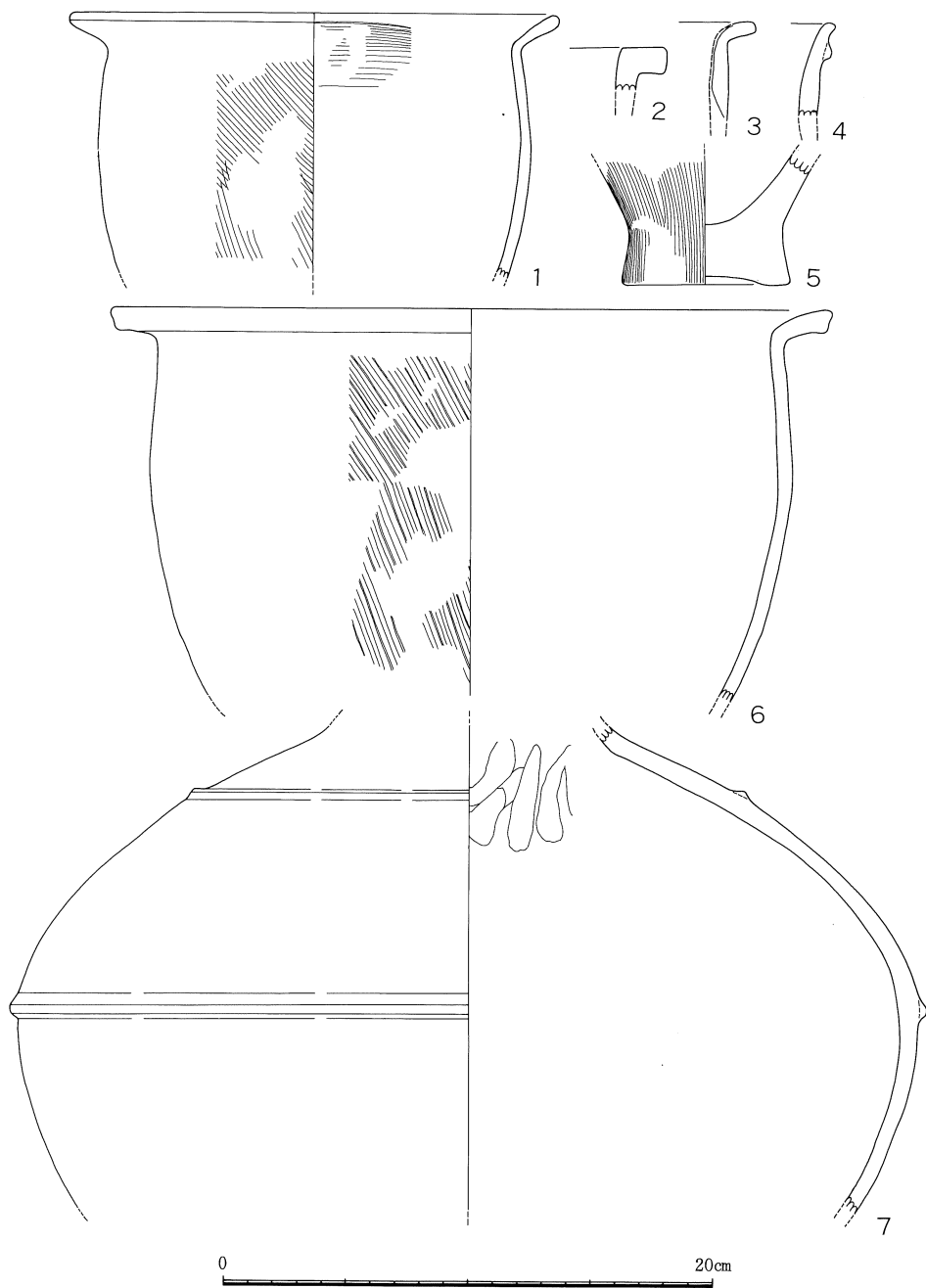
調査区東側中央部において径2.1×0.65cm、深さ0.41cmの楕円形土坑が検出できた(第42図)。SK 4は2段堀りであり、1段目の下面とはほぼ同レベルの中央部付近で径36×20cm、厚さ3cmの範囲で焼土が集中的に検出された箇所がみられた。また土坑埋土内には炭および焼土が若干含まれていた。遺物はそのほとんどが1段目の埋土から出土しており、径5cmにみたない円礫が焼土南西側を中心に多く認められ、焼土上部を中心に甕形土器の破片が出土した。



第39図 樋多田SK 3実測図



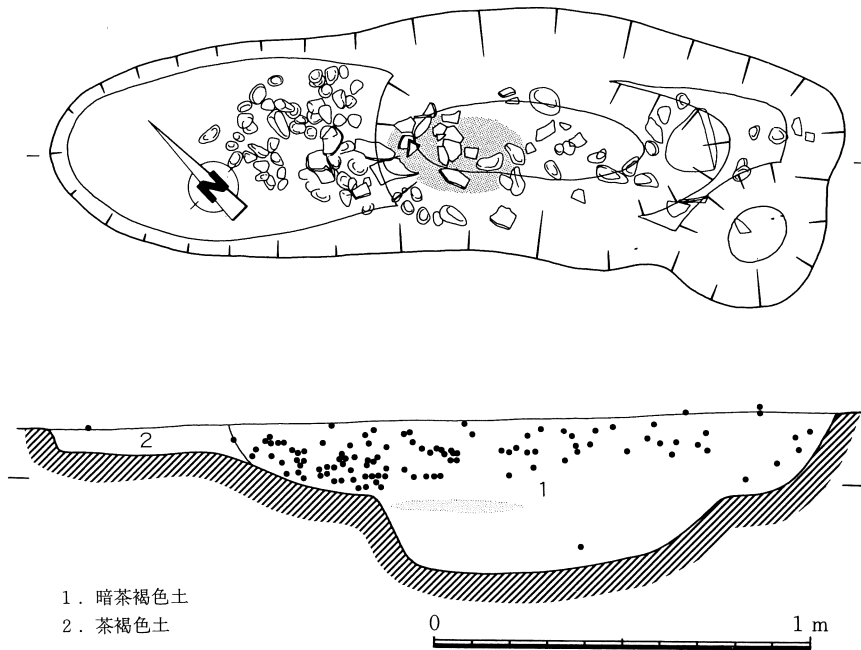
第40図 樋多田SK 3出土遺物(1)



第41図 樋多田S K 3 出土遺物 (2)

土器観察表(その27)

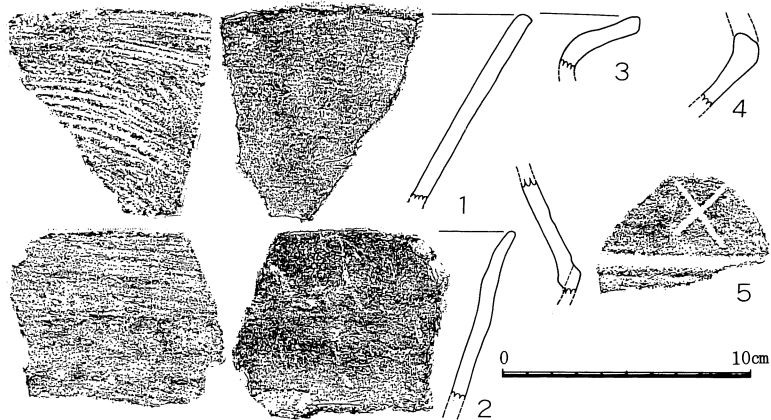
番号	器種	法量(cm)				調整	胎土	色調
		口径	頸部径	胴部最大径	底部径			
40-1	高坏	(22.2)				・口縁部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも浅黄橙色
2	壺	(22.0)					・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも浅黄橙色 ・口縁部に黒斑
3	甕	(28.0)	(25.0)	(25.4)		・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はタテ方向のナデ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも灰白色
4	甕			7.5		・外面はタテハケ ・内面はナデ	・長石、角閃石、白色粒、砂粒	・外面は橙色 ・内面は浅黄橙色
43-1	甕	(19.6)	(17.0)	(17.9)		・口縁部内外面ともヨコナデ ・外面はタテ方向のハケ ・内面はヨコ方向のナデ ・頸部内面はヨコハケ	・長石、角閃石、白色粒	・外面は灰白色 ・内面は浅黄橙色 ・口縁部内外面とも煤により灰色に変色
2	甕(?)					・口縁部内外面ともヨコナデ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面ともいぶい橙色
3	甕					・体部外面はタテハケ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面ともいぶい橙色
4	甕					・外面口縁部付近に貼付け突帯	・長石、角閃石	
5	甕			(6.9)		・外面はタテハケ	・長石、角閃石、白色粒	・外面は橙色 ・内面は灰色
6	甕	29.6	25.8	16.3		・口縁部内外面ともヨコナデ ・体部外面はタテハケ ・体部内面はナデ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも灰褐色
7	壺			37.5		・体部外面はヨコ方向のナデ ・外面肩部と胴部に突帯が1条ずつ ・肩部内面は指ナデ ・胴部内面はヨコ方向のナデ	・長石、角閃石、白色粒	・内外面とも橙～灰色



第42図 樋多田SK4実測図

4. 層出土遺物

C区は第11図に示したように4層の堆積土から形成されている。これまで述べてきた遺構群はすべて4層下面の地山上で検出できた。4層は黒褐色粘質土であり、若干の遺物を包含していたが図化できるもののみ第43図に示した。3は弥生時代中期前半の甕であるが、他はいずれも縄文時代晩期の土器である。1・2は深鉢の破片であり、1は外面にヨコ方向の条痕が施され、内面にはミガキがみられる。また2にも外面にヨコ方向の条痕がみられ、内面にミガキが施されている。なお1・2とも色調は黒色である。3は甕形土器の口縁部で内外面ともヨコナデが施されている。4の外面には条痕がみられる。5の屈曲部外面の凹線の上に「×」の沈線がみられる。



第43図 樋多田C区4層出土遺物

5. D区

1. 第1次調査の概要

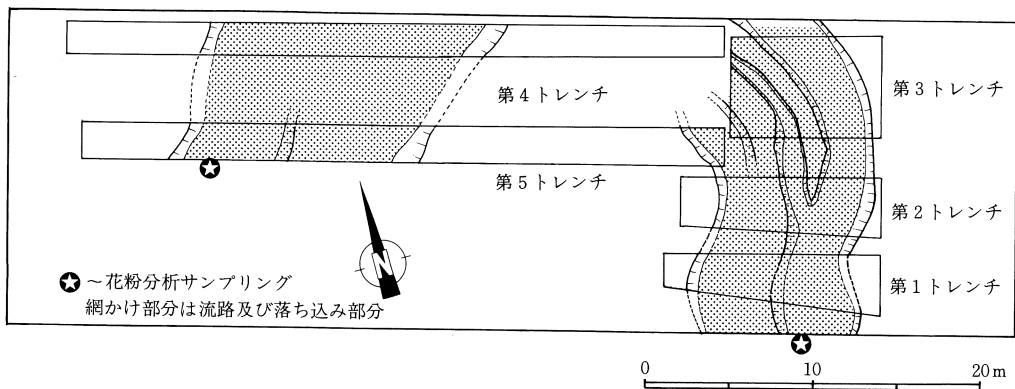
試掘調査の結果をふまえて調査区のほぼ中央部に2本のトレンチとグリッドを設定して調査を行った。調査によって蛇行する流路の一部を検出した。幅は均一ではなく、3～5m、緩くカーブを描きながら南北に走る。弥生時代中期初頭以降、この流路に杭等を打ち込んで水を取り込むなんらかの水利施設が構築されていたことが考えられる。この流路は土層に砂層や砂利層などが互層となって複雑に入り込んでいるため何度か小氾濫をくり返しつつも、その流れは大きくは変化せず弥生時代後期にはいっても利用されていたものと推定される。なおこの低湿地帯の東側にあるA～C区において弥生時代中期初頭の住居跡と古墳時代の住居跡が検出されている点から、この流路を使用した集落が隣接していた可能性が高い。

さらに、第3トレンチの南壁でプラントオパール分析を行った結果、弥生時代の後期の層、および流路内埋土（弥生時代後期）から多量のイネの珪化機動細胞が確認されて水田耕作の存在も示唆されている。ただし、水田に関わる珪畔等の遺構は確認されていない。流路内から弥生時代中期初頭、後期初頭の土器とともに多量の流木、加工を施した建築部材、平鋏、丸木杭、割杭の類いが出土した。こういった遺物群は、流路内から出土しているが、それとともに、わずかではあるが縄文晩期の土器が出土していることから、この調査区を含めた一帯に縄文晩期の遺跡が存在していることも考えられる。

2. 土層

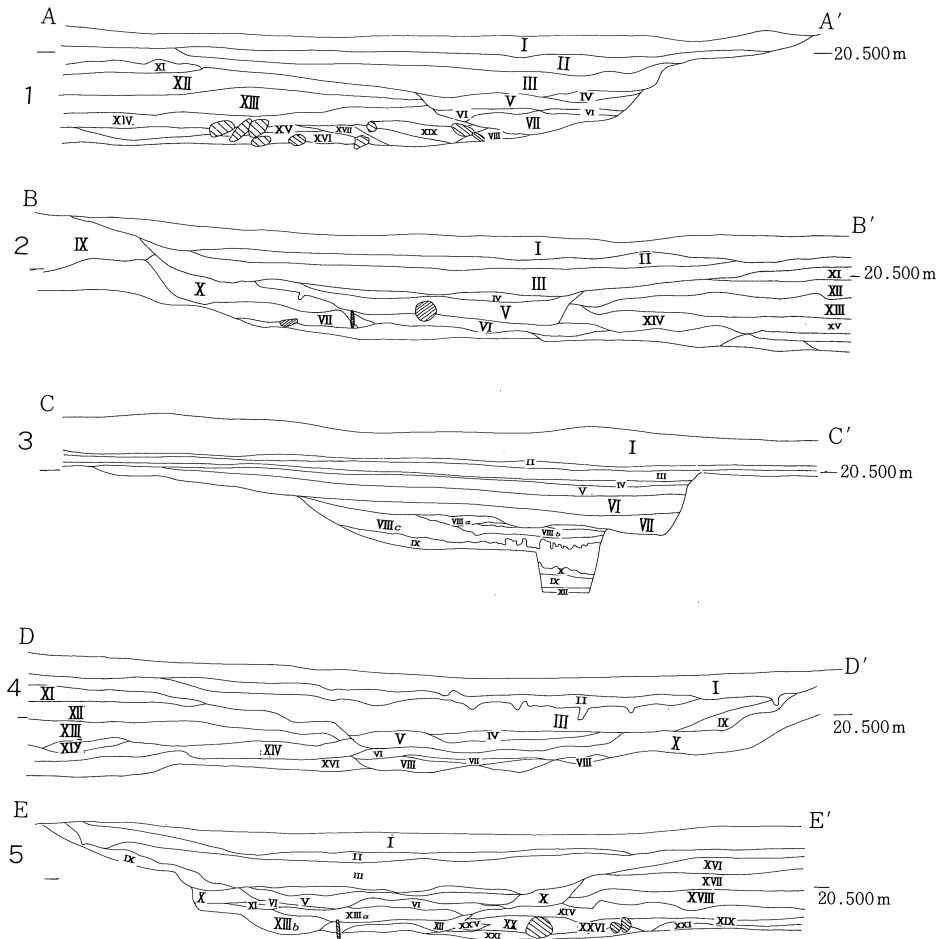
第48図に示した土層は第1～第3トレンチの土層断面図の一部である。上から1. 第1トレンチ南壁、2. 第1トレンチ北壁、3. 第2トレンチ北壁、4. 第3トレンチ南壁、5. 第3トレンチ北壁の土層図である。

1・2は、I層耕作土、II層床土、III層濃灰色粘質土で若干砂を含んでいて、旧水田面と思われる。IV層暗黄褐色土、V層暗黄褐色砂質土、VI層濃灰色粘質土で酸化鉄やマンガンを含

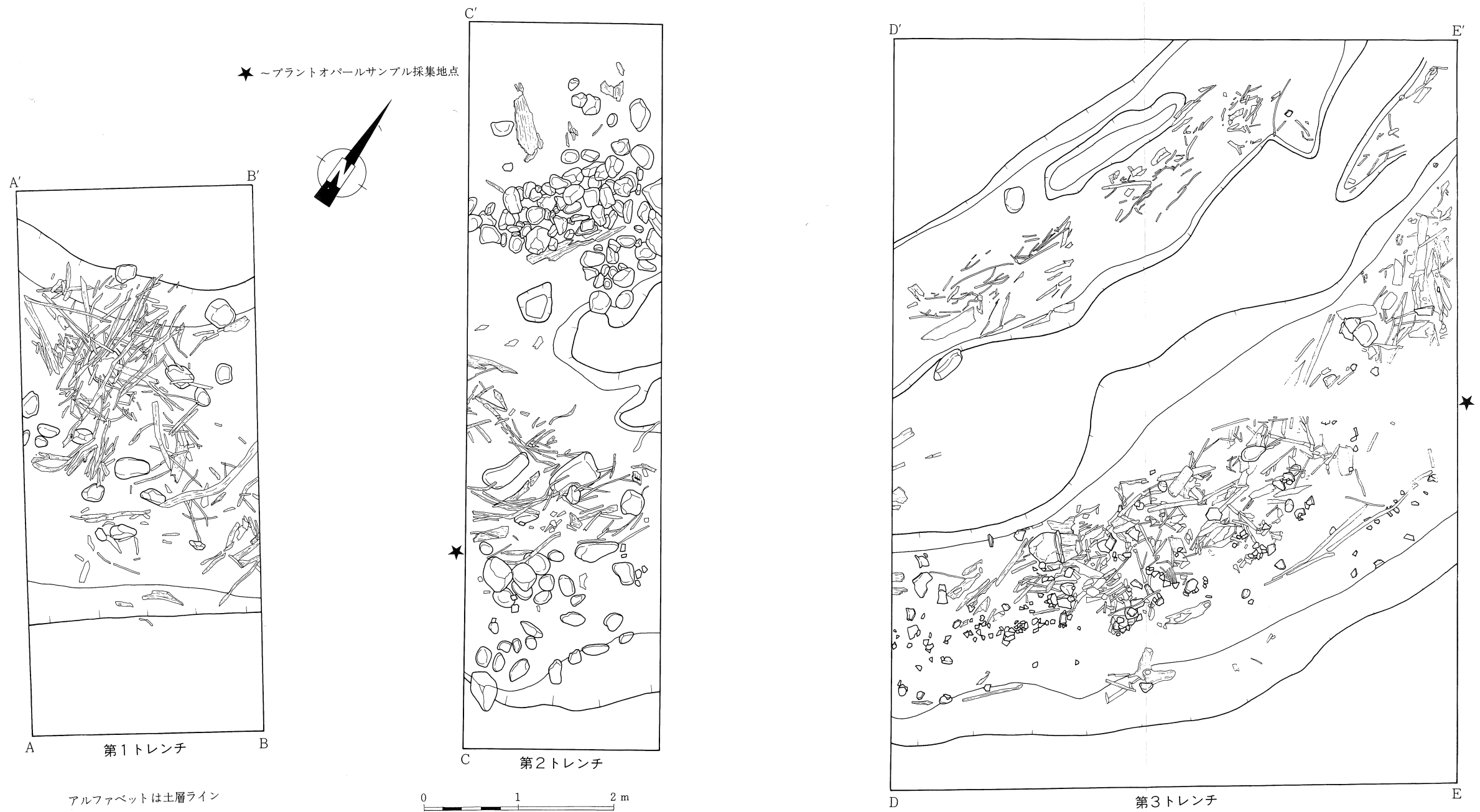


第44図 樋多田D区調査区配置図

む。VII層黒灰色シルト層、VIII a 層黒灰色粘質土、VIII b 層黒灰色粘質土（マンガンを含む）、VIII c 層暗濃灰色粘質土、IX層暗黄褐色粘質土、X層灰褐色粘質土、X I 層濃灰色粘質土、X II 層砂礫層となる。3は、ほぼ南壁土層図と対応するが、最初の河道形成時の推積土として、XVII層青灰色砂質土、XVIII層砂利層が認められた。4・5は、I層が濃灰色粘質土で酸化鉄やマンガンが粒子状に含まれるもので現耕作土を含む層である。II層は、暗濃灰色で酸化鉄・マンガンを含む層で床土。III層は、濃灰褐色粘質土で、砂を若干含む。IV層が灰色粘質土。V層は濃黒褐色粘質土である。約5mの中で浅く落ち込む形で推積していて、この層中から流木が出土することから、旧河道の一部と考えられる。同時に弥生時代後期中葉の遺物を中心とした遺物が出土した層でもある。以下VI層黒灰色砂質層、VII層砂利層、VIII青灰色シルト層、IX層明灰褐色粘質土、X層灰色粘質土（酸化鉄を含む）、X I 層黄褐色砂質土（酸化鉄を含む）、X II



第45図 樋多田第1次調査土層断面図 (S = $\frac{1}{100}$)



第46図 樋多田第1次調査区平面図 (S = $\frac{1}{50}$)

層暗褐色砂質土（マンガンを含む）、XIII層暗茶褐色砂質土（マンガン・酸化鉄を非常に多く含む）、XIV層淡灰褐色砂層、XV層淡灰褐色砂層、XVI層青灰色砂質土。このうち、VI層、VII層、VIII層、X層は前述の旧河道の一時期前の河道の落ち込みと思われる層である。

最下層は河床礫が広がっていて、その中に縄文晩期の土器やトチの実などの堅果類もわずかに出土した。

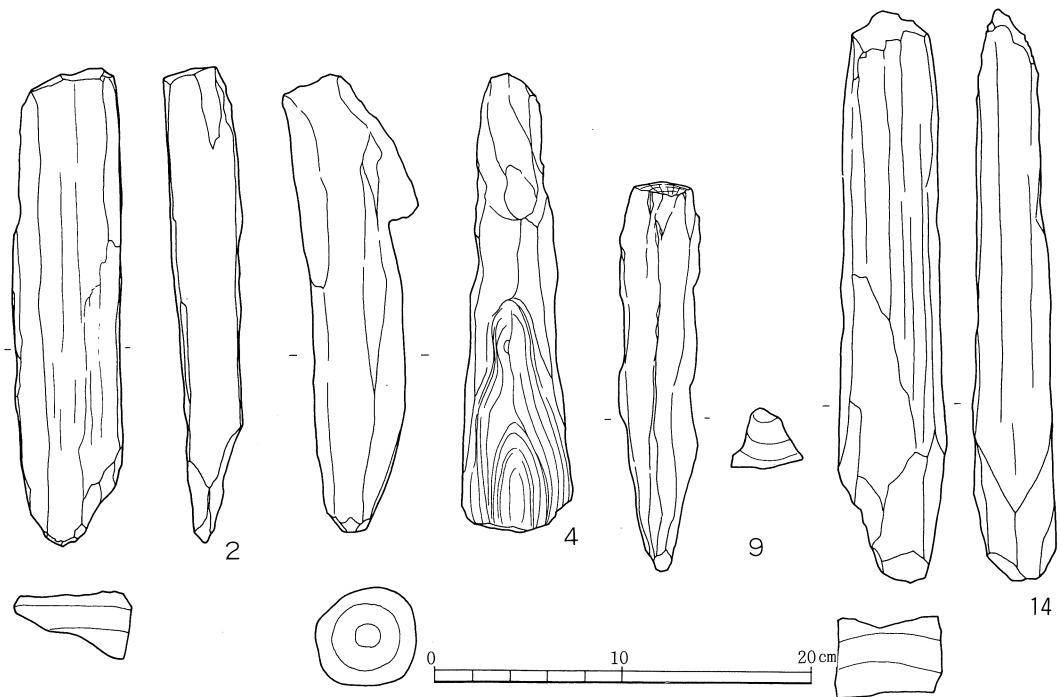
3. 流路

旧河道の一部であると思われる溝状の流路が1条確認された。（第46図）この流路は北東方向にゆるやかなカーブを描きながら流れ、北側では巾が広がる。第1トレンチで幅4.5m～3.5m、第2トレンチ内で約4.0m、第3トレンチに至ると流路が2本に分かれ、南側の流路は幅約2.5m～3.5m、北側の流路は幅約1.2m、深さは平均的に30～40cmである。

この流路の最下層には小児頭大～人頭大の河床礫が広く分布してかつて犬丸川の本流が流れていたことがうかがえる。

この流路内には遺物とともにかなりの流木が折り重なるように推積していたが、大部分の流木がローリングは若干受けているものの樹皮が比較的良好に残っていることから、さほど水の流れはきつくない河道であったことが推察される。

出土遺物は弥生中期初頭、城の越式土器や須久II式土器さらに後期初頭～後半にかけての土器とともに農耕具が出土した。また建築部材も出土したがこれらの大半は杭として転用されている。

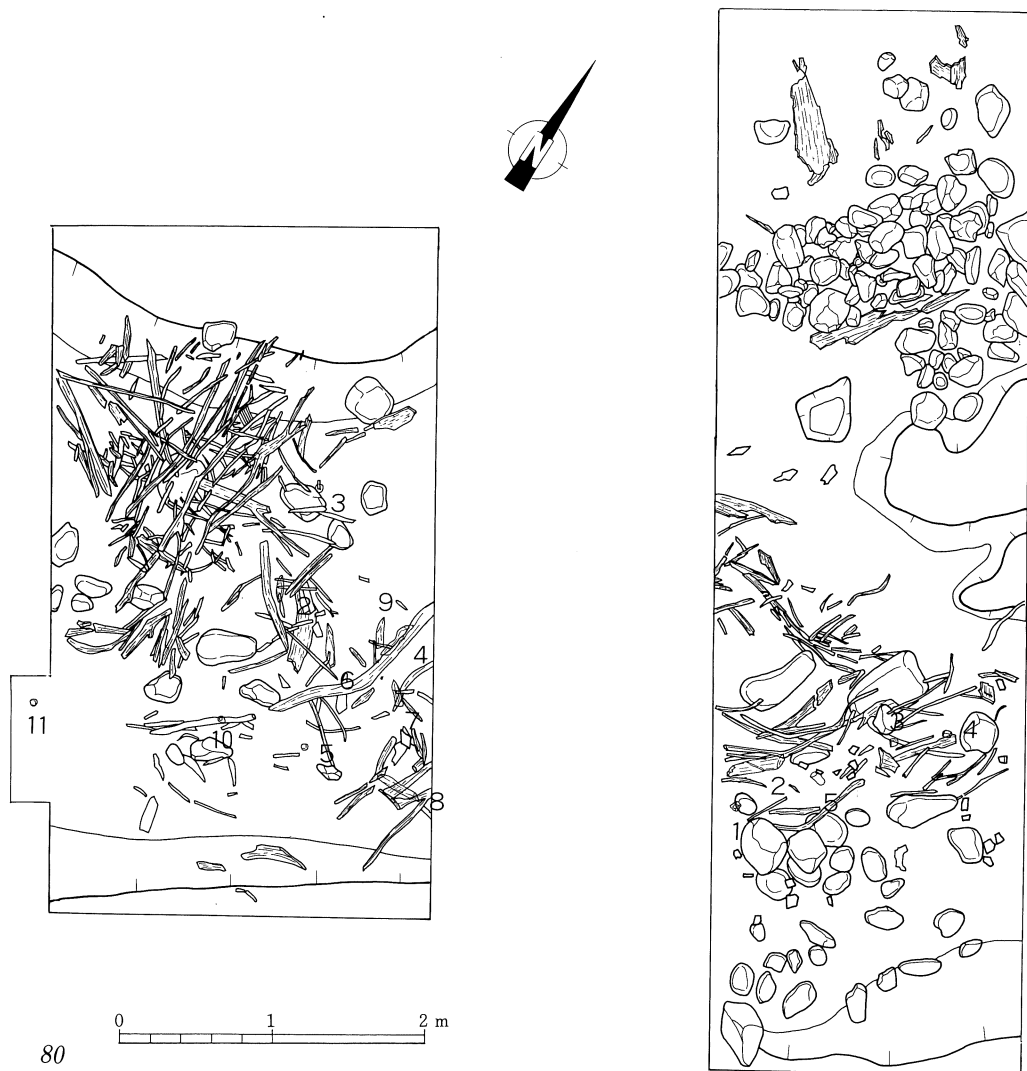


第47図 樋多田第1次調査出土杭実測図（1/4）

今回の調査ではプラントオパール分析を行ったが、その分析結果から流路内および周辺でイネの珪化機動細胞が大量に確認されていることから水田跡がこの流路の付近に存在していたことが指摘されている。出土遺物からもこの流路が弥生時代中期初頭～後期後半にかけて水田農耕にともない使用され、古墳時代に入り完全に埋没したためその役目を終えたものと考えられる。

4. 杭列 (第48図)

第1トレンチ～第2トレンチで、流路内に2列の杭列が流路の岸にほぼ並行する形で確認された。2列の杭列は方向を北西方向に取り、長さ2.5～3.5mで30～50cmの間隔で8本検出され、またこの杭列の周辺で5本の杭が倒れた状態で出土したがこの杭列に伴うものと思われる。出土した杭はいずれも損耗が著しく打ち込んだ際の打撃痕が観察されるものは2～3本で残りは平均25～30cm内外の長さで上部は大部分を欠損している。そのため構築された時期を特定でき



第48図 樋多田第1・第2トレンチ杭分布図 (1/50)

なかった。

これらの杭列は流路に沿って打ち込まれていることから、河道内の流れを分岐して水田に水を取り込むような施設が想定される。

NO.	地点	遺物番号	杭の分類	法 量 (cm)			樹皮	被火熱	図版	備 考
				長	幅	厚				
1	流路内	樋多田 1	丸	11.5	4	9	○	×	第50図	
2	流路内	樋多田 2	割	25	5.5	2	×	×		
3	流路内	樋多田 3	割	19.5	4.5	3	×	×		
4	流路内	樋多田 4	丸	24.5	5	4	×	×		
5	流路内	樋多田 5	割	19.5	5	3	○	×		
6	流路内	樋多田 6	丸	27	6.5	6	○	×		
7	流路内	樋多田 7	割	27	3	4	×	×		
8	流路内	樋多田 8	丸	34.5	3	3	×	×		
9	Iトレンチ	Iトレ杭 1	割	20	4	2.5	×	×	第50図	ローリング著しい
10	Iトレンチ	Iトレ杭 2	丸	15	4	3	×	×		
11	Iトレンチ	Iトレ杭 3	割	16.5	2.5	1	×	×		
12	IIトレンチ	Iトレ杭 1	割	27.5	4.5	4	×	×	第50図	ローリング著しい
13	IIトレンチ	Iトレ杭 2	丸	40	6.5	5	○	○		ローリング著しい
14	IIトレンチ	Iトレ杭 3	割	29.5	5	3.5	×	×	第50図	
15	IIトレンチ	Iトレ杭 4	丸	27	7	5	×	×		
16	IIトレンチ	Iトレ杭 5	丸	37.5	6	5.5	○	×		
17	IIIトレンチ	IIIトレ379	丸	24.5	3	3	○	×		

第1次調査出土杭一覧表 (その28)

5 遺物

1) 土器

調査で出土した土器は流路に伴う遺物が中心で弥生時代中期初頭～後期にかけてのもの、流路内の河床礫面で出土した縄文晩期の土器である。口径その他は観察表にまとめてある。

縄文時代晩期（第49図1～4）

刻目突帯文を施したもので、内面に条痕を施す。1・2は深鉢である。1は口縁部に刻目突帯を施したもので内面には条痕が施される。2は口縁部が外反し側面に条痕を施す。3は浅鉢である。口縁部端部を丸く仕上げ大きく屈曲して胴部へと至る。4は内外面とも研磨されたもので、口縁部から「く」の字状に内傾して胴部へといたる。

弥生土器（第49～第51図）

この時期の土器は甕が主体でそれに壺、器台、小型壺などがある。

・甕（5～17）

5は、口縁部が短くかつ上端が平坦で断面三角形の形状を呈するもので、亀の甲タイプの土器である。板付II bに並行するものと考えられる。6、7は口縁部が短く如意状に外反するもので6は胴部にあまり張りが無いが7は胴部に張りがある。これらの土器は中期初頭から前半にかけての土器と考えられる。8は鋤先状口縁を呈するもので、口縁部は短く、内側への突出も小さいもので須玖式土器でも古式の様相を呈するものと思われる。9は、口縁部が「く」字状に外反して、端部を跳ねあげたもので中期初頭の城の越式に類似するが、口縁部は長く伸びて胴部も張りがあり、中期後半に下るものと思われる。10は口縁部が頸部から比較的シャープに伸び、内面に稜線が形成される。胴部は張りが大きくなるようである。11は口縁部が丸みを持ち、緩く外反する。口縁端部は方形に作られている。胴部も大きく張るものと思われる。

13～17は底部で、13、14はいったんくびれて胴部に続くもので上げ底である。底部の厚さも非常に厚く作られている。15はくびれがなく、平底である。底部の厚さもやや薄くなる。13～15は中期初頭～前半と思われる。16は12や13と同様上げ底でいったんくびれて胴部へ続くが、底部の厚さがかなり薄くなるもので中期でも後半に属するものと思われる。17はレンズ状の平底で後期中葉のものと考えられる。

・壺（18）

18は口縁部がやや長めにのびて、外反するもので、端部が若干下がり気味となる。胴部は球形に近い形となる。後期に入るものと考えられる。

・長頸壺 (19・20)

19は長頸壺の胴部で、頸部に断面三角形の突帯を1条巡らす。胴部はやや肩が張る。20は口縁部が頸部からやや開き気味に外反して口縁部の最上位に断面M字状の突帯が1条巡る。

中期中葉から後半のものであろう。

・器台 (21)

筒形器台で器面調整は口縁部、底部を外反させた際の指頭圧痕を残し胴部に粗い刷毛目が観察される。内部には「絞り」の痕跡も認められる。

・小型土器 (22・23)

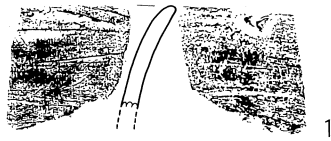
いずれも手づくねの土器で、22は甕、23は鉢である。22は、口縁部に、23は底部に指頭圧痕が顕著に認められる。

・その他の土器 (24)

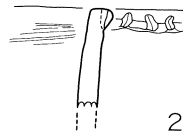
台付きの甕か鉢と思われる。台部は短く開きシャープさに欠ける。

番号	器種	法量 (cm) ()の数値は推定復元					器面調整	胎土	色調	ス
		口径	頸部径	胴部最大径	底径	器高				
1	深鉢	—	—	—	—	—	刻目突帯の下にヨコナデ 内面 ヨコナデ	長石 角閃石を含む	灰褐色 口縁部は黒灰色	
2	深鉢	—	—	—	—	—	外面ケズリ 内面ナデ	長石 角閃石を含む	黒灰色	
3	浅鉢	(25.5)	(24.0)	(28.8)	—	—	内外面ミガキ	長石 角閃石を含む	内外とも黒灰色	
4	浅鉢	(31.0)	—	(33.0)	—	—	内外面ミガキ	長石 角閃石を含む	灰褐色	
5	甕	(28.0)	—	—	—	—	口縁部下3cmに1条の沈線 外面及び口唇部タテ目調整 内面はナデ	石英 長石 角閃石 砂粒	灰褐色	
6	甕	(25.0)	(22.1)	(22.5)	—	—	外面ヨコナデ 内面ナデ	石英 長石 角閃石 砂粒	淡茶褐色	外面○
7	甕	(22.5)	(19.8)	—	—	—	口縁部 内外面ヨコナデ 胴部 は外面タテハケ 内面ナデ	長石 角閃石を含む	黄灰色	外面○
8	甕	(18.0)	(15.5)	—	—	—	口縁下3cmに断面三角形の突帯 を一糸めぐらす。内外面ともヨコナデ	石英粒を含む	黄褐色	
9	甕	(32.0)	(28.0)	—	—	—	外面 回転ナデを口縁部周辺に 施し、胴部にはタテ方向のハケ 内面はナデ	長石 角閃石を若干含む	灰黄色	外面 ○
10	甕	(28.0)	(24.8)	—	—	—	外面は、口縁部はヨコナデ胴部は ハケ内面はヨコナデ後一部ハケ	長石 角閃石を含む	赤褐色	
11	甕	(23.0)	(15.6)	—	—	—	口縁部は外面ヨコナデ 内面ヨ コハケ 胴部は外面タテハケ 内面ナデ	長石 角閃石を含む	黄灰色	外面 ○
12	甕	(15.9)	(13.5)	(17.4)	7.5	—	内外面ナデ	長石 角閃石を含む	黄灰色	
13	底部	—	—	—	(8.5)	—	外面タテハケ	長石 角閃石を含む	淡黄褐色	
14	底部	—	—	—	(8.5)	—	外面タテハケ	石英粒を多く含む	外面黄灰色、内面黒灰色	
15	底部	—	—	—	(7.3)	—	底部ナデ その後タテハケ 内面ナデ	長石 角閃石を含む	淡黄褐色	外面○
16	底部	—	—	—	7.6	—	内外面ナデ	長石 角閃石を含む	淡黄褐色	
17	底部	—	—	—	7.5	—	内外面ナデ	長石 角閃石を含む	茶褐色	
18	壺	24.5	19.4	—	—	—	口縁部内外面ヨコナデ 胴部 内外面ハケ	長石 角閃石を含む	灰黄色	外面○
19	長頸壺	15.7	13.3	(17.8)	—	—	口縁部内外面ヨコナデ 胴部 内外面ナデ	長石 角閃石を含む	黄灰色	
20	長頸壺	—	—	17.0	—	—	外面ミガキを施し、頸部に1条 突帯を貼りつける。内面タテハケ	長石 角閃石を若干含む	外面 淡黄灰色 内面 淡灰色	
21	器台	11.3	7.3	—	—	—	内外面ナデ	長石 角閃石を含む 長石 角閃石を含む	外面 黒褐色 内面 黄灰色	
22	手づくね土器	—	—	—	—	15.3	上端、下端は手づくね、中央部タ テハケ 内面はナデ	白色粒を含む	黄褐色	
23	手づくね土器	9.0	8.0	10.0	—	—	外面へラケズリ 口縁部～内面 指頭圧調整		黒灰色	
23	ミニチュア土器	7.5	—	—	6.0	4.0	内外面に指頭圧痕が残る	長石 角閃石を含む	黄灰～黒灰色	
24	底部	—	—	—	6.6	—	外面ナデ	長石 角閃石 白色粒を含む	外面 黄灰色 内面 黒褐色	

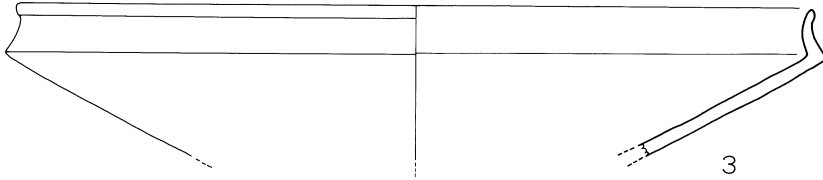
第1次調査出土土器観察表 (その29)



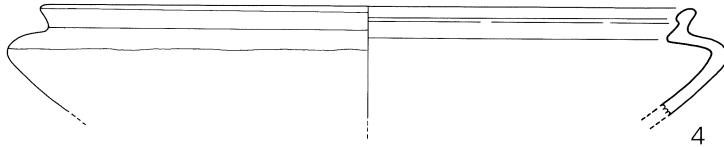
1



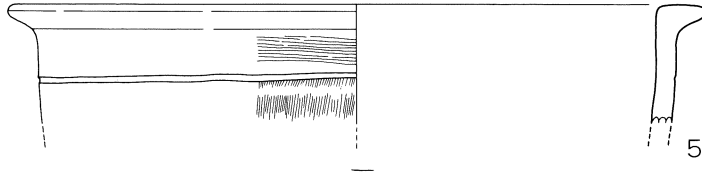
2



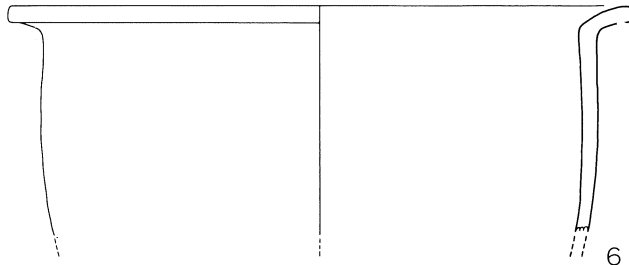
3



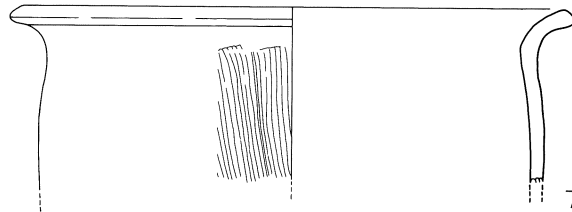
4



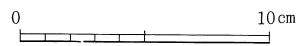
5



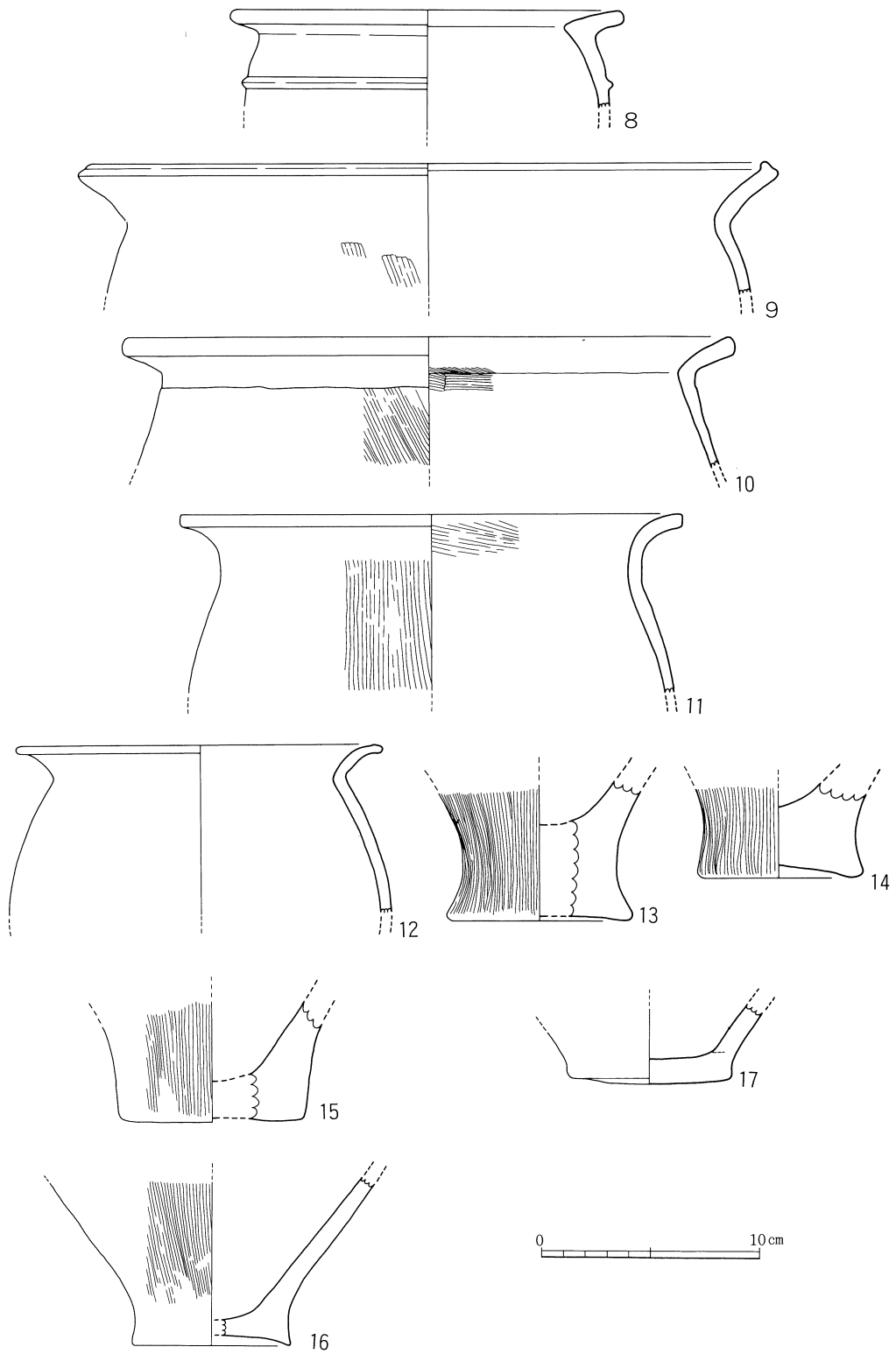
6



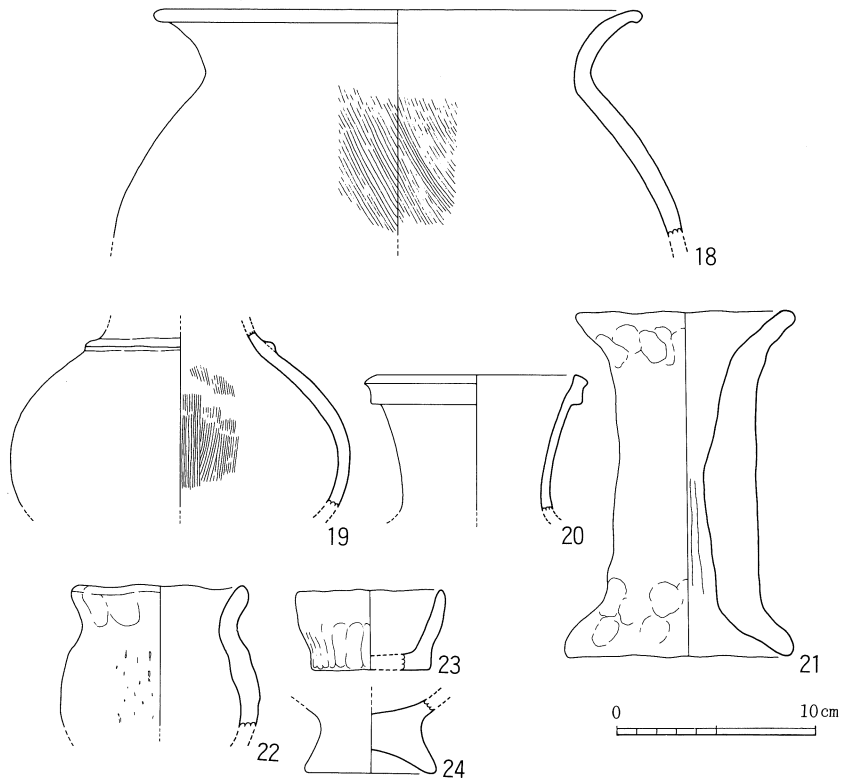
7



第49図 樋多田第1次調査出土土器実測図 (1/3)



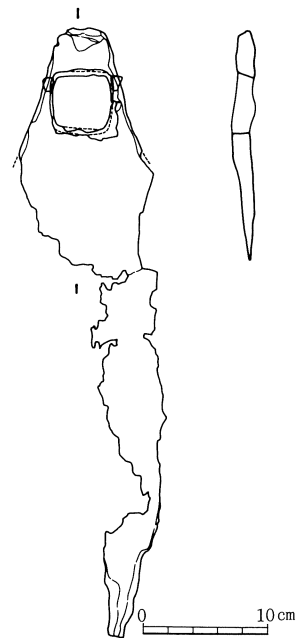
第50図 樋多田第1次調査出土土器実測図 (1/3)



第51図 樋多田第1次調査出土土器実測図(1/3)

2) 木器

第IIIトレンチ内の流路のほぼ中央部分で鍬が1点出土した。非常に遺存状態が悪く両面ともローリングをかなり受けていて非常に薄くかつもろくなっているため復元は非常に困難である。第52図に示したものがそれで先端部分は特に損耗が激しく細かい分類は困難である。基部についてはローリングの影響が少なかったため、かろうじて柄孔が測定できた。この柄孔は4.0×4.0cmのほぼ正方形である。現存長48cm、同幅11cm、同厚さ1.4cmである。



第52図 樋多田第3トレンチ出土木器実測図(1/4)

2. 第2次調査の概要

第1次調査では流路の一部を検出しそれに伴う杭列を確認した。さらに出土遺物に木製の鍬やプラントオパール分析によって水田耕作がこの地で行われていた可能性が高まり、第1次調査区の南に新たに調査区を設定して水田遺構の確認を行った。これと並行して西側の自然堤防に広がる弥生時代中期～古墳時代にかけての集落の一部の調査を行った。その結果新たに流路が1本確認され、それに伴って土器や木製農耕具が出土した。しかし畦畔等水田遺構に関連する遺構は検出できなかった。

また集落部分は微高地上の自然堤防上に位置し弥生時代中期前半の住居跡1軒・古墳時代の住居跡2軒、弥生時代中期の土杭・ピット群、および時期不明であるが土杭やピットが検出された。弥生時代のピット群の中には埋土の状態から住居跡を想定するものも含まれていた。

1) 土層 (第53図)

基本的な層序は下の表に示した通りで、このうち酸化鉄を含んだ層が3層確認された。また第4トレンチではグライ化したシルト層が下層に行くにしたがって推積していて、特に流路内の埋土は黒色化が著しい。さらに最下層の河床礫中には黒色シルト層が推積していて縄文晩期の土器が出土する。

このうち上記のVI層、VII層、XIV層～XV層に水田が存在していたことが推定される。

2) 流路 (第54図)

今回の調査では前回確認された流路から東に40m離れた地点でこれにほぼ並行するように1

I	淡青灰色粘土層		
II	淡赤褐色土層		
III	淡褐色粘土層(マンガンを含む)		
IV	黄褐色粘土層(マンガンを含む)		
V	褐色粘土層		
VI	黄褐色粘土層		
VII	茶褐色砂質層		
VIII	淡褐色粘土層(砂粒含む)		
IX	淡褐色粘土層(8層よりやや色が薄い)		
IX'	淡褐色粘土層(9層に比べ若干砂粒が多い)	I	暗灰色粘土層(酸化鉄を含む)
X	淡褐色粘土層(8・9層に比べ色が薄い)	I	暗灰色粘土層(酸化鉄を多く含む)
XI	淡黄褐色粘土層	II	淡褐色粘土層(酸化鉄を含む)
XII	黄褐色砂質土層	II'	淡褐色粘土層
XIII	淡褐色砂質土層	III	青灰色シルト層(粒子が荒い)
XIV	淡黄褐色粘土層	III'	青灰色シルト層
		IV	暗灰色シルト層
XV	淡褐色粘土層(流木・杭列・木器を含む)	IV'	黒灰色シルト層
		VI	暗灰白色シルト層(流木・杭列を含む)
XVI	礫層(縄文晩期土器を含む)	III	黒色シルト層(木の实・流木・縄文晩期土器を含む)
		VIII	礫層

第1トレンチ南壁

第4トレンチ南壁

第2次調査第1・第4トレンチ土層観察表(その30)

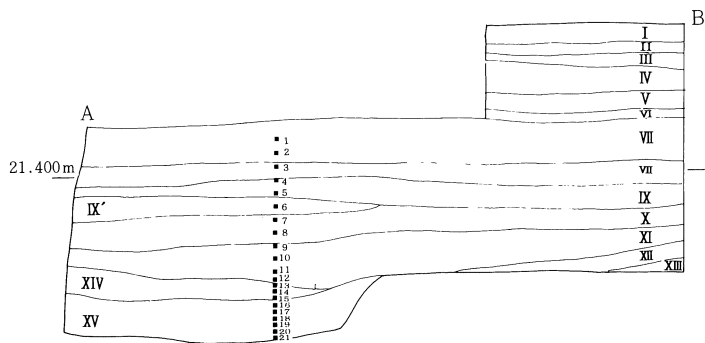
条の流路が検出された。第1トレンチで幅約5.5m、第2トレンチで幅約3.5m、第3トレンチで幅が大きく広がりトレンチ南壁で5.5m、北壁で6mを超える。平均的に深さは30～40cmで第3トレンチ内では西側が2段に落ち込む。

流路内からは遺物に混じって流木もかなり認められたが大半が表面に樹皮を残しかつローリングをあまり受けていないものが多い。第1次調査で確認された流路と同様流れがさほどきつくなかったと思われる。ただ、流木の中には非常に大きなものも含まれていた。おそらくこの流路の周辺に生息していた樹木が流路内に倒れ込んだものと思われる。

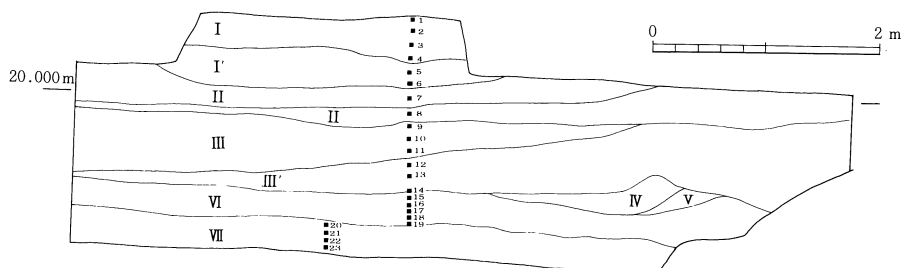
この流路内からは杭列となりそうな遺構は確認されなかったが9本の杭が出土している。遺物は土器と木器であるが木器は大半が農耕に関わるもので鍬・鋤・えぶりといったものが出土していることはこの周辺に水田が存在していたことを強く裏づけるものであろう。この事は花粉分析の調査結果でもほぼ同様の事例が報告されている。出土遺物からこの流路は弥生時代中期初頭～後期後半にかけて使われていたものと考えられる。

今回の調査では、1次調査区との間に幅2mのトレンチ（第4・第5トレンチ）を設定して流路の確認調査を行ったが、この間に流路は存在しなかった。ただ最下層まで掘り進め河床礫が現れたレベルで犬丸川のかつての本流と思われる落ち込みを検出した。またこの礫層中より縄文晩期の土器が数点出土していることから、縄文時代の終わりには犬丸川は現在の流れよりやや東側を流れていたことが推定される。それが弥生時代に入り本流の流れが現在のようになりそこに小河道が取り残されようとして流れていたものを弥生時代中期に入って水田耕作等に伴う水利施設として利用していたものと思われる。これは、第1次調査で確認された杭列や今回の調査で出土した杭や木器などからもうかがえる。

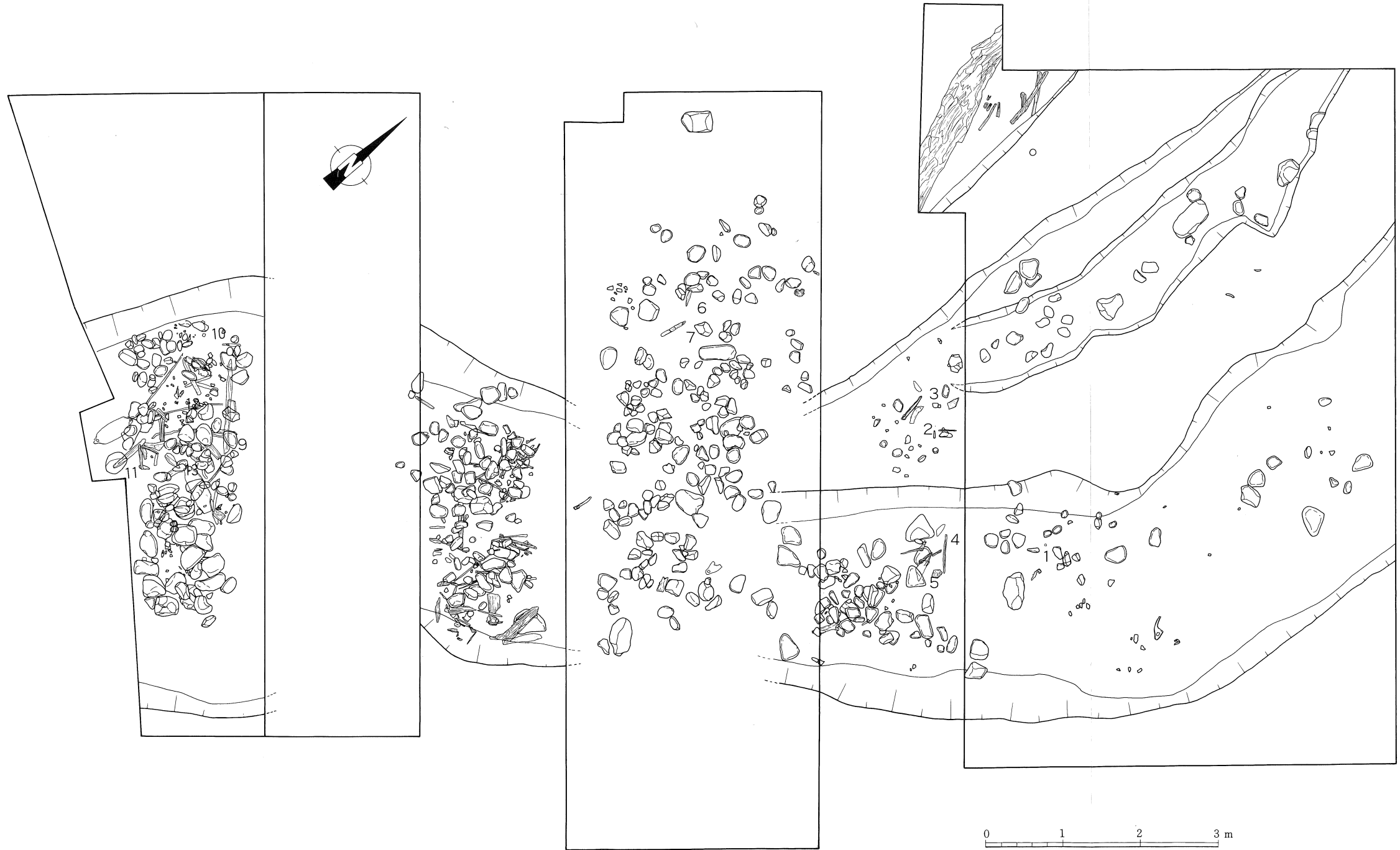
花粉分析の結果からはこの第4・第5トレンチ周辺ではイネの花粉は検出されず、水田が存在していた可能性の低い場所であるとの所見が出ている。



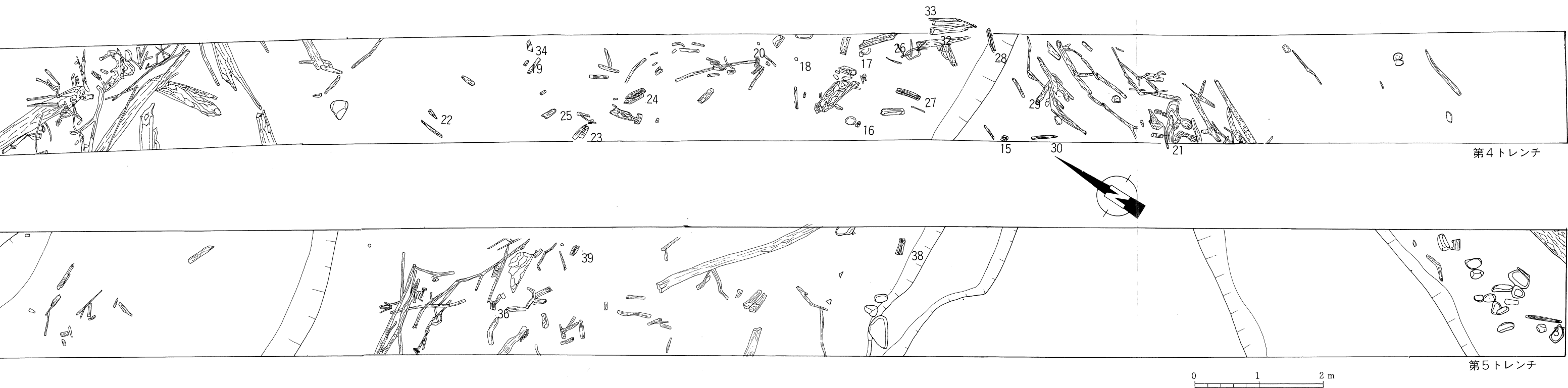
第1トレンチ南壁土層図 (1/50)



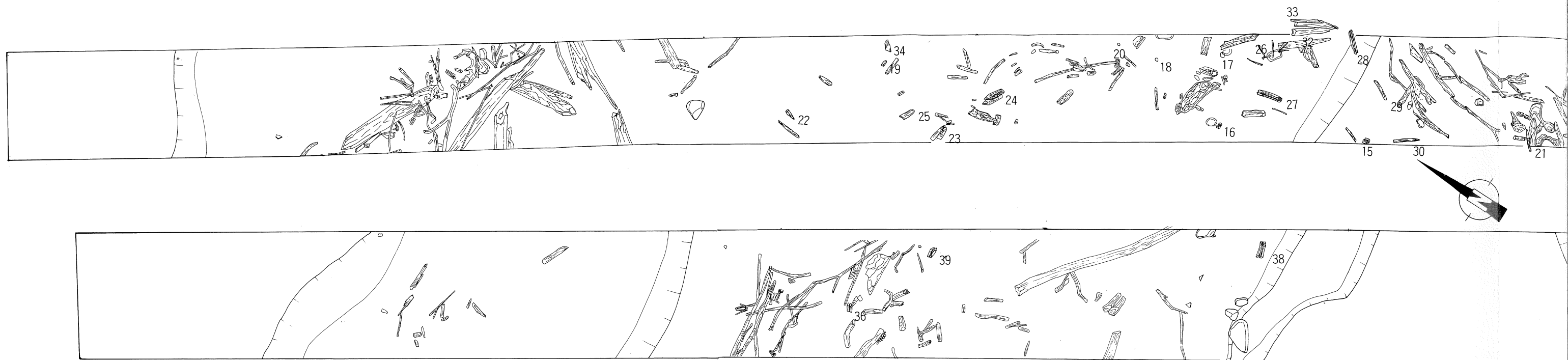
第4トレンチ南壁土層図 (1/50) ■は花粉分析サンプリング位置
第53図 樋多田第2次調査土層断面図



第54図 樋多田第2次調査第1～第3トレンチ平面図



第55図 樋多田第2次調査第4・第5トレンチ平面図



第55図 樋多田第2次調査第4・第5トレンチ平面図

3 遺物

1) 土器 (第56～60図)

今回の調査で出土した土器は縄文晩期、弥生時代中期初頭、弥生時代後期の土器で縄文晩期の土器は礫層に混じってごくわずかの出土にとどまり、大半は弥生時代のものである。

縄文晩期 (25～27)

25、26は深鉢で胴部の屈曲する部分である。内外面とも2枚貝等で条痕が施されている。27は浅鉢で口縁部は短く外反する。内外面とも丁寧に研磨が施される。

弥生時代

甕 (28～45、47～52)

28～30は口縁部がやや短く如意状に外反しているもので、29～30は口縁部内面に稜が作られる。28は内外面ナデ調整で口縁下2cmに幅1mmの沈線を1.5cmの間隔で2条施している。中期初頭の城の越式に並行するものと思われる。

31は口縁部が長く伸びてかつ端部が跳ねあげられている。胴部は張り気味である。外面はナデ調整後に幅1.2cm程度の刷毛で調整を施す。32は口径の復元径が50cm前後の大型のもので、焼成も他の土器に比べて非常に良好である。口縁部は須玖II式の特徴をもつもので、鋤先状の口縁部である。口縁下に断面三角形の突帯が巡っているが、口縁部との間にほとんど間隔がなく後期に下る様相を持つ。33は口縁部が長く伸びて大きく外反するもので、端部は平坦に作られている。胴部は大きく張って最大径が上半部より上にくる。底部はやや丸みを帯びた凸レンズ状である。34も口縁部が比較的長く伸びて端部が平坦に仕上げられる。胴部は大きく張って最大径はやや上位にある。内面、外面ともナデ調整後に刷毛で調整している。後期初頭～前半にかけての土器と考えられる。

35～40は口縁部が「く」の字状に外反し丸みを持つ胴部へと続く。口縁端部は平坦に仕上げられているものの、シャープさに欠け丸みを持つ。35、36は口縁部の外反が急角度で内面に稜線ができる。口縁部は内面、外面ともナデ調整で、胴部はナデ調整後に細かい刷毛による調整を施す。38は内面、外面にススが付着している。これらの土器は後期後半にかけてのものと思われる。

42、43は小型の甕で、口縁部は垂直気味に立ち上がり端部で若干開く。胴部はほぼ球形で内面にはケズリ痕が認められる。

44～52は底部でこのうち44～45は上げ底で器壁も厚く中期の特徴を持つものである。47～52は凸レンズ状の丸みを持つもので後期の土器底部である。

壺 (53~62)

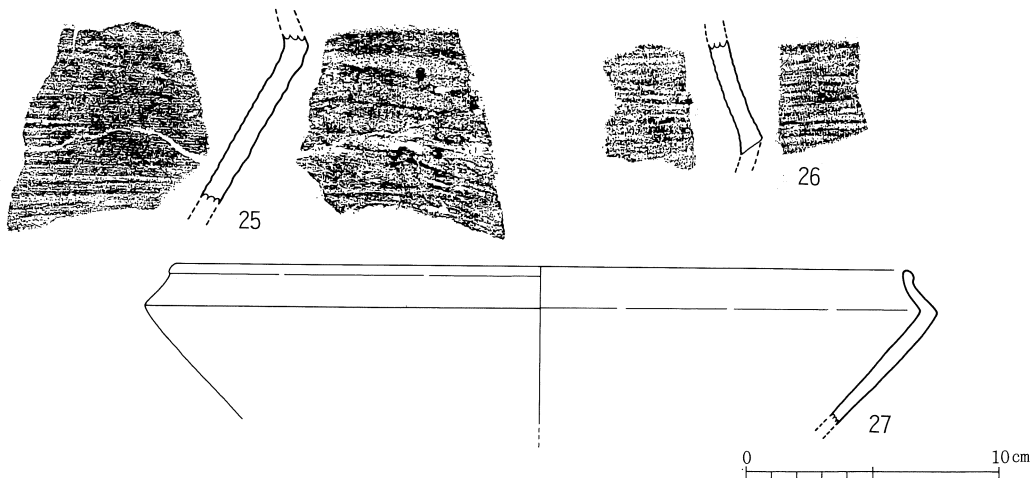
53は鋤先状口縁で、内面端部はシャープさに欠けて、外面端部は若干下がり気味である。器面調整は、外面を横ナデ後、筥磨きを縦方向に施し、内面はナデ調整後横方向の筥磨きを施す。中期後半から後期初頭にかけてのものと思われる。54は、口縁部が直線的に外反し口縁端部は比較的シャープに作られている。器面調整は内外面ともナデ調整である。56は口縁部の立ち上がり部が直線的でそこから朝顔状に大きく外反する。端部はわずかに下がり気味である。55は二重口縁壺で口縁端部は内面の整形によって断面三角形になり、そこからしまった頸部へと続く。外面には文様は施されず器面調整は内外面ともヨコナデである。後期後半の土器に伴うものと思われる。57~62はいずれも壺の底部で、57は若干上げ底気味でそれ以外はいずれも凸レンズ状に丸みを持つもので、器壁は中央部が薄く仕上げられている。57は後期初頭~前半、58~62は後期後半のものと思われる。

台付き土器 (63)

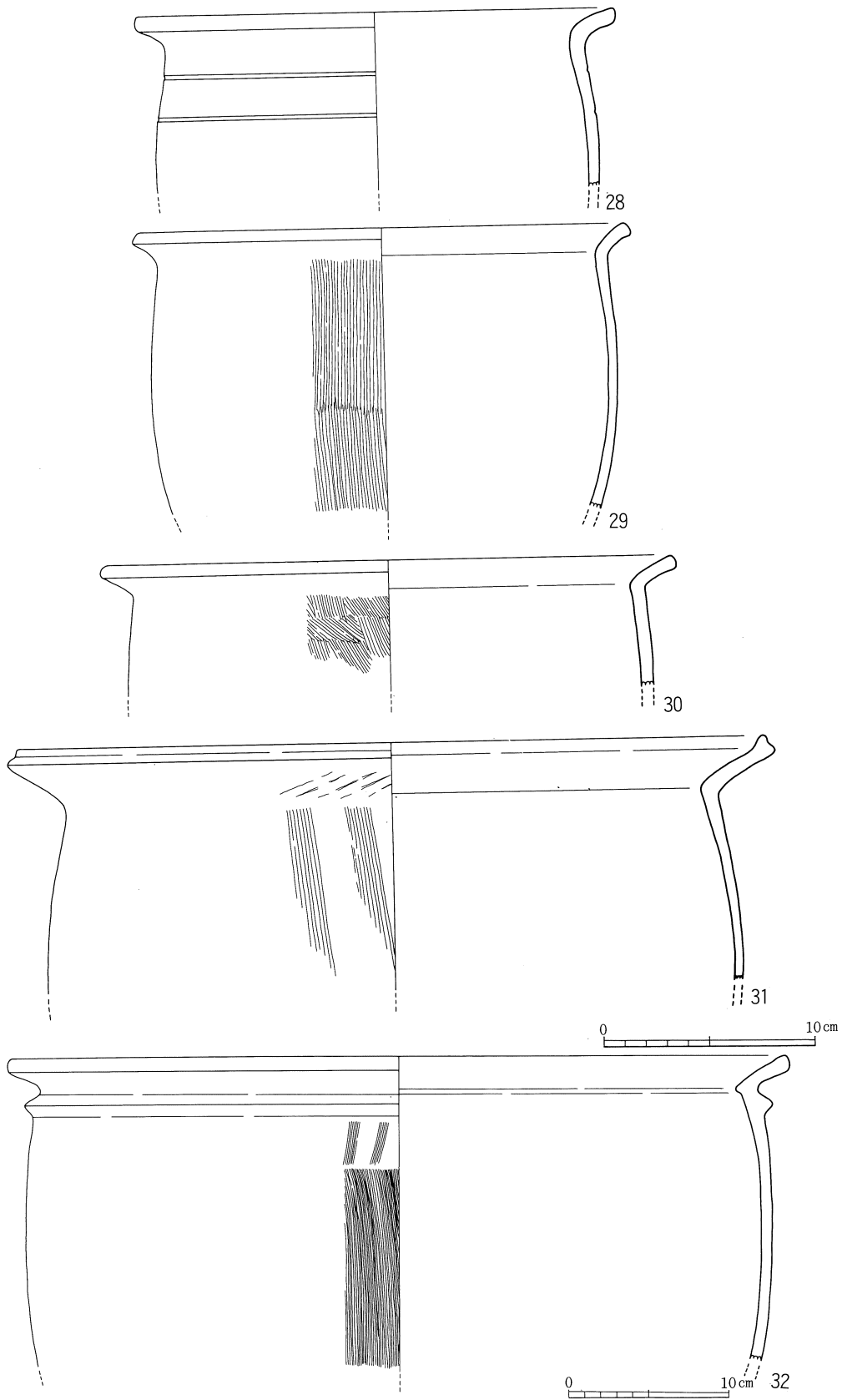
高台部分の作りはシャープさに欠ける。上部の器形は不明である。

ミニチュア土器 (64)

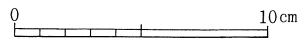
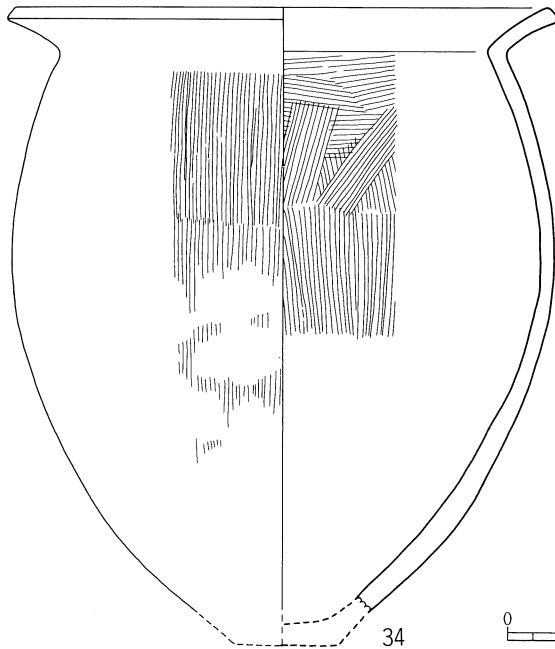
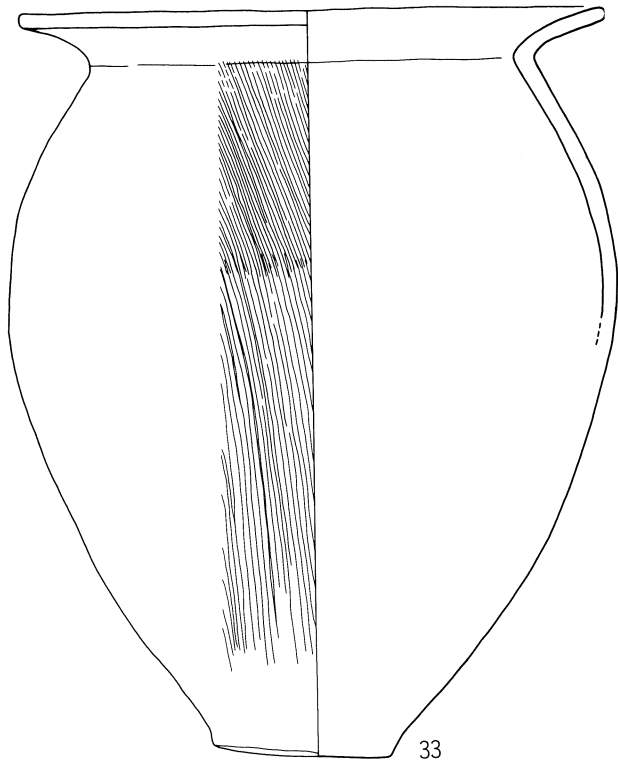
小型の鉢型土器で手づくねで作られていて指頭圧痕が特に口縁部周辺に観察される。



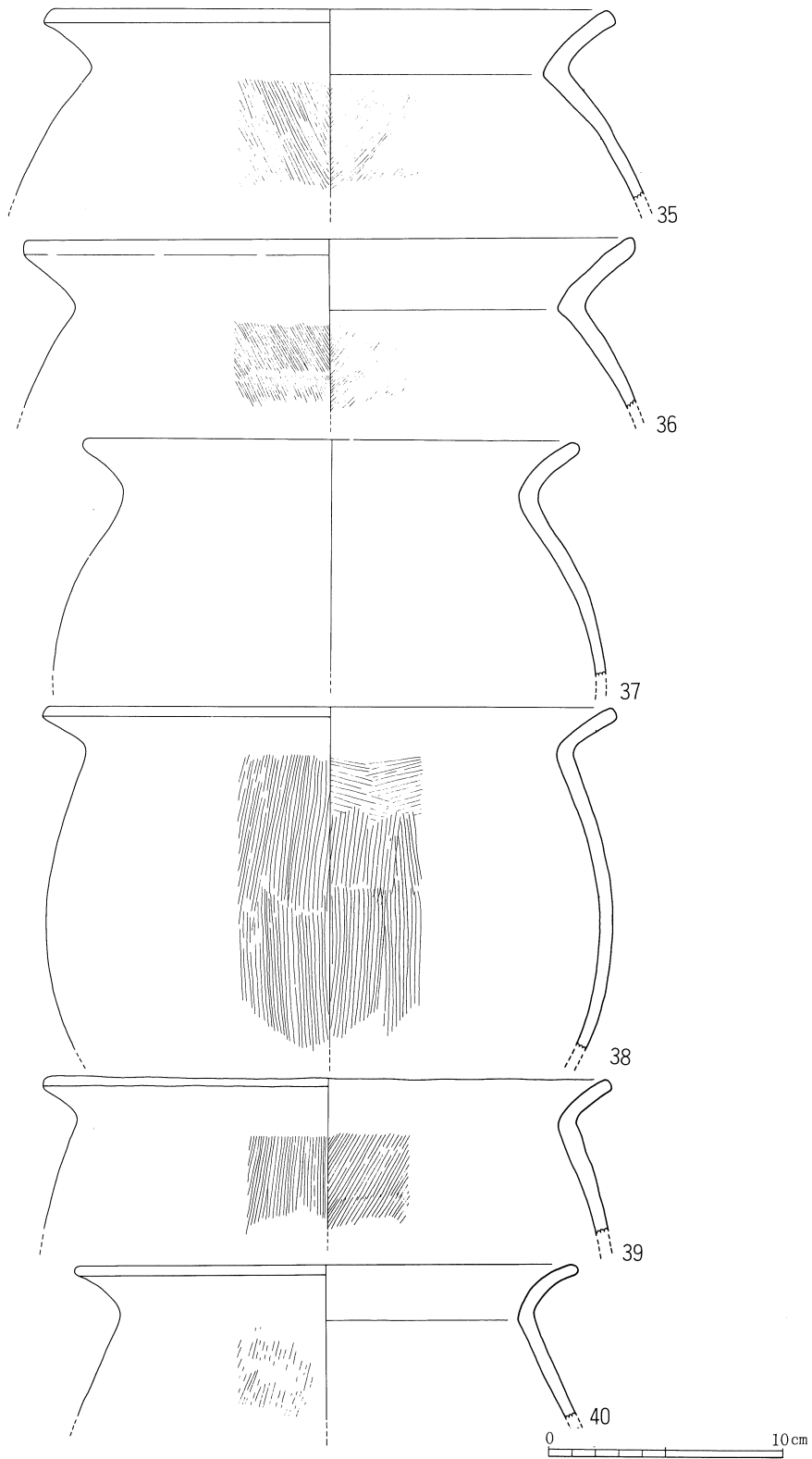
第56図 樋多田第2次調査出土土器実測図



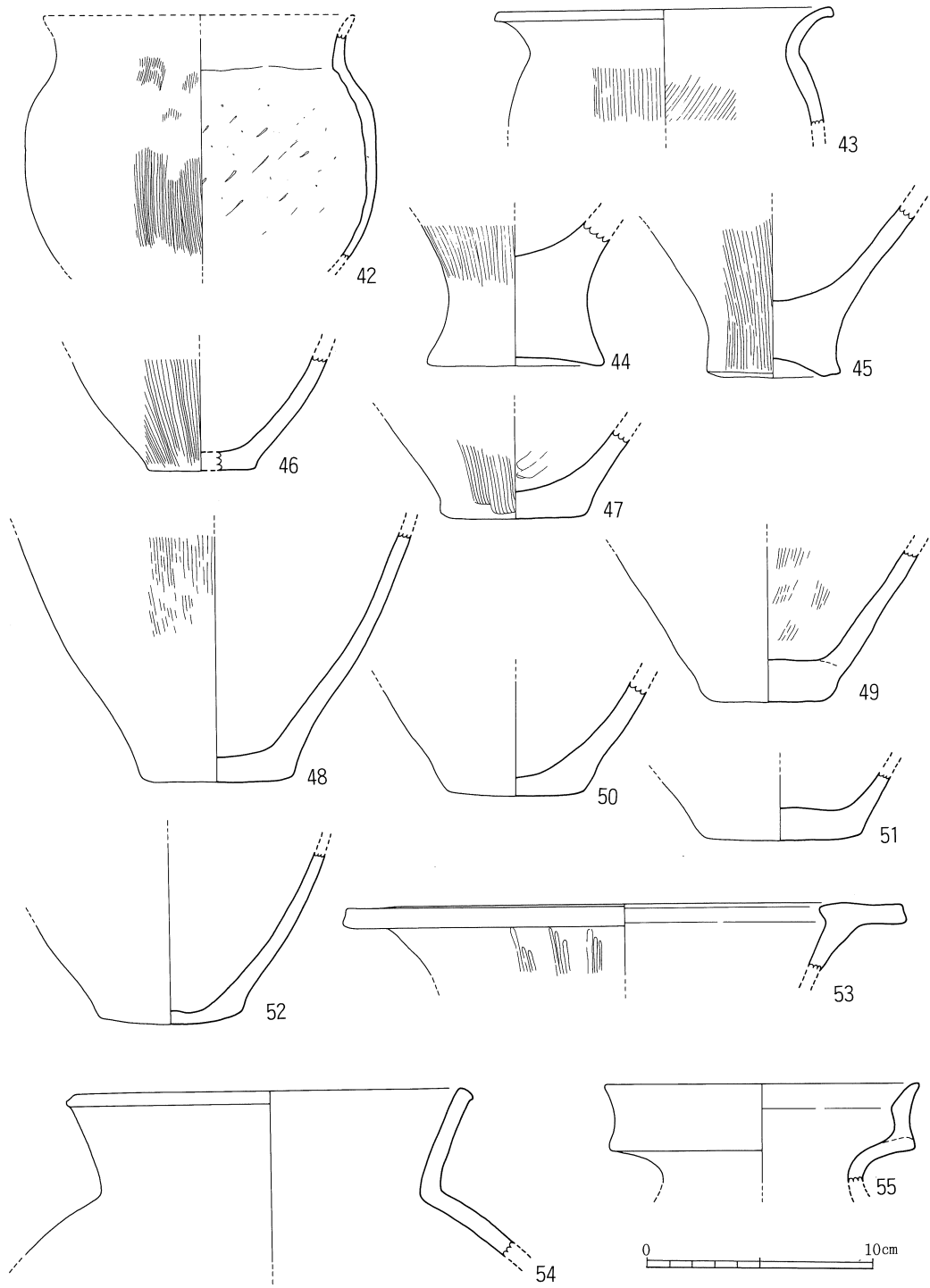
第57図 樋多田第2次調査出土土器実測図 (1/3・1/4)



第58図 樋多田第2次調査出土土器実測図 (1/3・1/4)



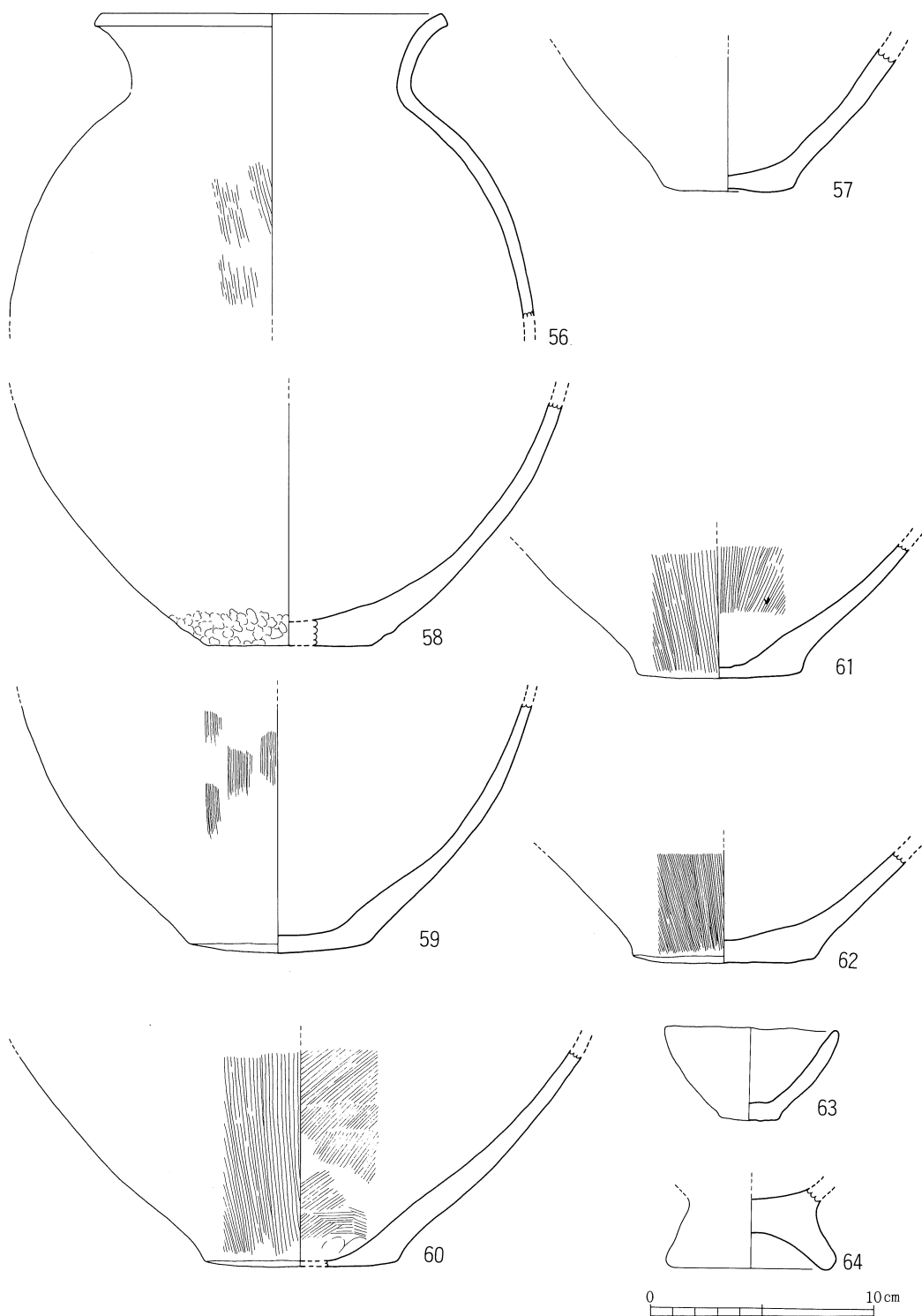
第59図 樋多田第2次調査出土土器実測図 (1/3)



第60図 樋多田第2次調査出土土器実測図 (1/3)

番号	器種	法量 (cm) () の数値は推定復元						器面調整	胎土	色調	スス
		口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高					
25	深鉢	—	—	—	—	—	内外面とも2枚具によるヨコ方向の条痕具	長石 角閃石を含む	黒灰色		
26	深鉢	—	—	—	—	—	内外面とも2枚具によるヨコ方向の条痕	長石 角閃石を含む	黒灰色		
27	深鉢	(29.5)	—	(32.0)	—	—	ヨコ方向のミガキで精緻	長石 角閃石を含む	黒灰色		
28	甕	23.0	20.0	—	—	—	口縁部は大きく傾くが、そのカーブはゆるやかである。口縁下2cmに中1mmの沈線が2条施される。内外面ナデ	長石 角閃石を含む	淡黄褐色		
29	甕	24.0	21.6	22.4	—	—	如意状口縁で内面に稜がつくられる。全体的に器壁はうすく仕上げられる。外面タテ刷毛、内面ナデ	長石 角閃石を含む	淡茶褐色	○	
30	甕	27.8	24.5	—	—	—	如意状口縁。内面に稜線。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテ刷毛、内面ナデ	長石 角閃石を含む	黄灰色		
31	甕	37.0	31.8	—	—	—	口縁端部は跳ね上げ口縁を呈する。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテ刷毛内面ナデ	長石 角閃石を含む	黄褐色	○	
32	甕	(50.0)	—	(50.0)	—	—	口縁部が若干内側に突出する鋤先状の口縁部を呈する。口縁部下2cmに断面三角形の突帯。外面タテ刷毛、内面ナデ	長石 角閃石を含む	黄褐色		
33	甕	23.5	17.8	24.5	7.2	29.5	如意状口縁。胴部の最大径はほぼ中央になる。口縁部内外面ヨコナデ胴部外面タテ刷毛、内面ナデ	長石 角閃石を含む	灰褐色	○	
34	甕	23.5	17.8	24.5	7.2	29.5	口縁部は如意状を呈し、胴部のやや上位に最大径がくる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面タテ刷毛、内面ナデの後タテ刷毛	長石 角閃石を含む	灰褐色		
35	甕	25.0	20.5	—	—	—	口縁部「く」の字状に屈曲し、比較的球形に近い胴部へと続く。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナメ刷毛	長石 角閃石を含む	黄灰色		
36	甕	26.5	22.3	—	—	—	大きく外反する口縁部から球形の胴部へと続く。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナメ刷毛	長石 角閃石を含む	黄灰色		
37	甕	21.5	18.0	—	—	—	球形の胴部。内外面ナデ	長石 角閃石を含む	茶褐色		
38	甕	24.8	21.2	24.5	—	—	大きく外反する口縁部で胴部は球形。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテ刷毛、内面ヨコ刷毛→タテ刷毛	長石 角閃石を含む	茶褐色	○ (内外面)	
39	甕	29.5	21.7	—	—	—	やや短めの外反する口縁をもち、端部の仕上げもシャープさに欠ける。胴部内面ナメ刷毛外面タテ刷毛	長石 角閃石を含む	黄褐色	○	

第2次調査出土土器観察表 (その31)



第61図 樋多田第2次調査出土土器実測図 (1/3)

番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					器面調整	胎土	色調	スス
		口径	頸部径	胴部最大径	底径	器高				
40	甕	21.7	18.0	—	—	—	口縁部はゆるいカーブをもちながら外反する。胴部はやや直線的に広がる。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテ刷毛、内面ナデ。	長石 角閃石を含む	黄灰色	○
41	甕	21.0	19.1	—	—	—	口縁部は如意状。端部は若干つまみ上げられている。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテ刷毛、内面ナデ。	石英粒砂粒を含む	茶褐～黒灰色	○
42	甕	—	12.8	15.8	—	—	口縁端部は欠損。やや垂直気味に立ち上がった口縁部が、わずかに外反する。胴部は球形に近い。外面タテ刷毛、内面ナデ。	長石 角閃石を含む	外面 赤褐～黄灰色 内面 暗灰色	
43	甕	15.2	12.1	—	—	—	口縁部はゆるいカーブを描きながら外反し端部は下がり気味。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテ刷毛、内面ナメ刷毛。	長石 角閃石を含む	灰褐色	
44	甕底部	—	—	—	8.0	—	底部はナデによって上げ底に仕上げ、くびれて胴部へと続く。底部の厚さは9.5cmある。基部ヨコナデ、胴部外面タテ刷毛。	長石 角閃石を含む	外面 黄白～赤褐色 内面 茶褐色	○ (内面)
45	甕底部	—	—	—	6.0	—	底部は上げ底、接地面は平坦に仕上げる。若干くびれて胴部へと続く。外面タテ刷毛内面ナデ。	長石 角閃石を含む	外面 赤褐色 内面 黄褐色	
46	甕底部	—	—	—	(4.8)	—	平底。外面タテ刷毛 内面ナデ。	長石 角閃石を含む	黒灰色	
47	甕底部	—	—	—	6.5	—	平底。わずかにくびれて胴部へと続く。外面タテ刷毛、内面ナデ。	長石 角閃石を含む	外面 赤褐色 内面 灰褐色	
48	甕底部	—	—	—	6.5	—	平底。わずかにくびれて胴部へと続く。底面に近い部分はナデ、上位はタテ刷毛。	長石 角閃石を含む	外面 黄褐色 内面 灰褐色	
49	甕底部	—	—	—	5.2	—	底部は平底。内外面にナデ後部分的に刷毛。	長石 角閃石を含む	外面 淡灰褐色 内面 黄灰色	
50	甕底部	—	—	—	6.0	—	若干レンズ状に丸みをもった底部。内ナデ。	長石 角閃石を含む	黄灰色	
51	甕底部	—	—	—	7.0	—	レンズ状に丸みをもつ。内外面ナデ。	長石 角閃石を含む	灰白色	
52	甕底部	—	—	—	5.4	—	レンズ状に丸みをもつ。若干くびれて胴部へと続く。内外面ナデ。	長石 角閃石を含む	淡灰褐色	
53	壺	25.0	—	—	—	—	鋤先状口縁。外面ヨコナデ後タテ方向のミガキ、内面ナデ後ヨコ方向のミガキ。	長石 角閃石を含む	灰黄色	
54	壺	18.2	15.3	—	—	—	口縁部は直線的に外反し、端部はわずかに下がり気味。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデ。	長石 角閃石を含む	黄灰色	○ (口縁部 内外面)

第2次調査出土土器観察表 (その32)

番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					器面調整	胎土	色調	スス
		口径	頸部径	胴部最大径	底径	器高				
55	壺	14.1	(9.0)	—	—	—	二重口縁。端部はシャープなつくり。内外面ヨコナデ。	長石 角閃石を含む	黄灰色	
56	壺	15.8	12.6	—	—	—	若干開き気味であるがほぼ垂直に立ち上がり、そこから大きく広がる。端部はシャープに仕上げられている。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテ刷毛、内面ナデ。	長石 角閃石を含む	淡灰褐色	
57	壺底部	—	—	—	5.8	—	上げ底気味。内外面ナデ。	長石 角閃石を含む	灰白色	
58	壺底部	—	—	—	(7.5)	—	平底。底部の周囲は未調整。胴部はタテ刷毛、内面ナデ。	長石 角閃石を含む	灰褐色	
59	壺底部	—	—	—	8.1	—	レンズ状の丸みをもつ底部。外面タテ刷毛、内面ナデ。	長石 角閃石を含む	外面 淡灰褐色 内面 灰褐色	
60	壺底部	—	—	—	(8.7)	—	わずかにレンズ状の丸みをもつ。底部は内面を指オサエ、外面をナデで非常にうすく仕上げる。胴部は内外面刷毛。	長石 角閃石を含む	外面 淡灰褐色 内面 黄褐色	
61	壺底部	—	—	—	7.4	—	わずかにレンズ状の丸みをもつ。内面は指によるオサエ。底面はナデ後不定方向刷毛、胴部内外面タテ刷毛。	長石 角閃石を含む	外面 黄灰色 内面 淡灰色	
62	壺底部	—	—	—	8.3	—	わずかに凸レンズ状の張り出し、外面は細いタテ刷毛 内面底面ナデ。	長石 角閃石を含む	灰褐色	
63	ミニチュア土器	—	—	—	7.2	—	高台部。内外面ナデ。	長石 角閃石を含む	外面黄褐色 内面黒灰色	
64	台付土器	7.9	—	—	2.5	4.1	形状的には鉢形で、指のオサエによる整形。	長石 角閃石を含む	黄灰色～黒灰色	

第2次調査出土土器観察表 (その33)

2) 木器 (第62~64図)

今回の調査で出土した木器は農耕具(又鋤、平鋤、横鋤、鋤、えぶり)、用途不明木器に分けられる。前回の調査に比べて遺存状態は比較的良好で完成品を含めて全体の形状が復元可能なものも含まれる。

・又鋤 (1~3・5)

1は現存長45.5cm、歯部長25cm、現存幅12cmの三又鋤で、柄孔は6.0×4.5cmの縦に長い方形である。頭頂部は丸く作る。この部分はやや厚みがある。刃部は2本が欠けて残りの1本も先端部分が欠けている。刃部は肩部の張り出しが心持ち強く分岐部から外縁がほぼ平行して伸びる。刃部の断面は扁平で内縁の削りが片側からのみ削り出されている。また中央の刃部と左右の刃部との取りつき部分の挟り込みの位置が違い、左右の刃部の幅も若干違いがありそうに思える。2は、頭部と刃部1本を残すに過ぎない。柄孔は横に長い方形で推定で縦4cm横8cmである。頭頂部は隅丸の方形で肩部が若干張り気味になり外縁は平行して伸びる。刃部は分岐部分の断面が扁平気味で先端部に行くにしたがって方柱状になる。刃は内縁はほぼ垂直に落としていて外縁のみ両面から削り出している。現存長44.8cm、刃部長24.8cm、刃部幅は分岐部分で4cm先端部分で1.5cmである。3は、2本の刃部を持つ鋤で頭頂部分は丸く柄孔は4×4cmの略正方形で肩の張りがほとんどないまま刃部へと続く。刃部が2本とも欠けているため全体像はうかがえないが狭鋤の範疇に属するものであろう。刃部は内縁、外縁とも損耗が激しく刃部の削り出しは観察されなかった。分岐部分の断面は扁平である。頭頂部は若干厚みがありノミ痕が観察される。現存長19.4cm幅6.5cm、歯部は分岐部で3.2cmである。5は損耗が著しく柄孔、刃部も欠いている。かろうじて頭部の周縁に垂直に面取りした部分が観察されるほかは刃部の分岐部の内縁部にごくわずかに加工を施した面が観察されるのみである。刃部の分岐の状態から2本刃の鋤と思われる。現存長16cm頭頂部幅10.5cmである。

平鋤 (4)

損耗が著しく頭頂部、柄孔以外は欠く。頭頂部分はほぼ水平に切断しており柄孔は4×5cmの縦長の方形である。その他は観察不能である。現存長28cm、頭頂部幅は6.8cmである。

横鋤 (6)

長さ38cm、幅は12~14cm、厚さ1cmの板材を利用したもので身部は板材の角を削り落としながら整形して半月状の平面形を呈する。頂部より4cmぐらい下に円状の柄孔を約9cmの間隔で2個平行に穿つ。刃部は鋸歯状に作られ1本の刃部長は約2cm幅1.0~1.5cmで11

本の刃が付けられていた。

鋤（7～8）

出土した鋤は2点とも一木作りである。7は、柄の大半と身の $\frac{2}{3}$ を欠いている。身の形状は側縁に抉りが入るもので身に反りがないたためどちらの面が表になるか不明である。柄は断面が楕円形である。現存長22.8cm柄の直径2.8cm身部の現存長15.5cm、同幅10.5cm、抉りの深さ2cm、厚さ2cmである。8は、柄の上部を欠いているがその他は比較的損耗の少ないものである。この鋤は身に抉りをもたないもので、かつ足踏み部はほとんど考慮されず傾斜角がほとんどない。身部は表がノミによって山形状に整形されてほぼ中央で左右に分かれる。裏は蒲鋒状に整形されている。先端部は、ほぼ丸く仕上げられている。柄は比較的頑丈な造りで断面は円形である。現存長51.8cm柄の直径2.5cm身の長さ約15cm、幅8cm、厚さ1.3cmである。この鋤は比較的小振りで足踏み部分がないことから、比較的軽作業時に用いられていたものと思われる。

えぶり（9・10）

2点出土したが左右に柄孔をそれぞれ持ち頭頂部はほぼ対称である。共に身の中央部分が薄くなっていて断面形は凹レンズ状を呈する。9は、頭頂部分が水平に切断されていてその幅も広く身部の両側縁は直線的に作られている。柄孔は両方とも身に対して横長の方形で 2×4 cmである。全長は63cm、縦幅20.8cm、頭頂部の縦幅11cm、厚さは頭頂部1.3cm、中央部0.9cmである。10は、頭頂部を丸く作り柄孔は 3×2.5 cmの略方形である。頭頂部の縦幅が狭いため身部には大きく広がる。身部はやや弧を描くように作られている。全長59.8cm、縦幅19.2cm、頭頂部の縦幅7cm厚さは頭頂部が1.6cm、中央部が0.5cmである。

この2点は整地具としてかなり使用されていたことが、中央部分の凹みで把握される。特に10は、頭頂部と中央部の厚みの差が著しく、その使用頻度がかなり高かったものと思われる。

用途不明木器（11～13）

11は、全長15.5cm、幅12cm、厚さ0.5cmの板材を使用したもので、両端を水平に切断して片側に歯部を削り出している。その形状からは鋏に近い性格付けができよう。12は、全長23cm、幅11cm、厚さ2cmの板材を使用し両端部を斜めにカットしている。表面は焼けて炭化している。13は、全長22cm、最小幅2cm、最大幅3.5cm、厚さ最大2cm、最小0.5cmで、柄の一部と思われる。上端近くの断面形はやや横長の方形で幅1.8cm、厚さ1.3cmで次第に広がっていき断面形も扁平化していく。破断面から上に5.5cmのところに

1 cm×0.5cmの横長略方形の小孔が穿たれている。

建築材 (14~16)

14、15はかつて建築材として使用していたものを杭として再利用したもので14は、全長34cm、幅5cm、厚さ1.2cmの板材で各面それぞれ丁寧に面取りしている。先端部は両側面から削り出している。15は、全長41.5cm、幅8cmで長辺に沿って右半分の厚さが3cm、残りが厚さ0.8~2cmという加工を施したものを杭として再利用している。16は、柄孔を穿つものであるが損耗が著しい。現存長37cm、幅4.5cm、厚さ1~1.5cm、柄孔は3.5×5cmの縦長の長方形である。

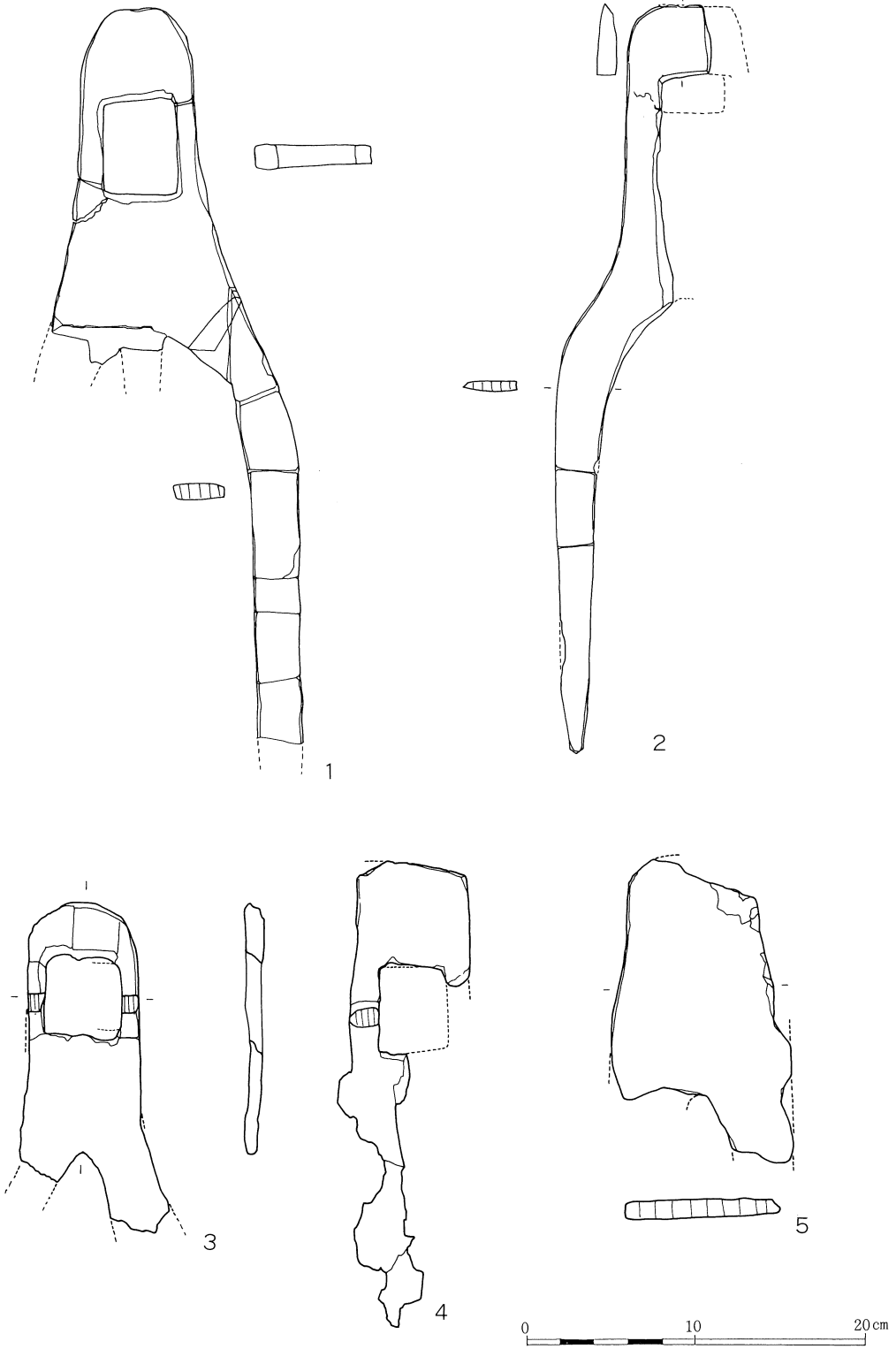
杭 (第65~67図)

今回の調査では第1~第5トレンチにおいて39本の杭が出土した。流路の項でも述べたが流路内に意識的に打ち込まれてような杭列は今回は確認されなかったが流路内から出土したものは堰等の施設として使用されていたことが考えられる。また第4・5トレンチでは21本の杭が確認された。

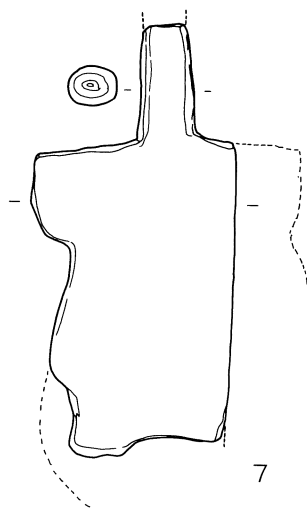
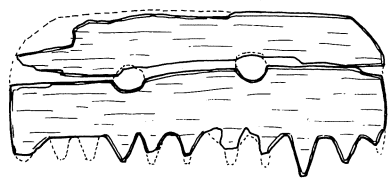
丸木杭はすべて樹皮を剥ぎ取ったものを使用していて割杭に比べて若干丁寧な作りと考えられる。杭の先端部は割杭は各面から削り込むものと表裏2面から行うもの。一面からのみ行うものときまぎまあり、これは材料となる材木の形状によって選択されたものと思われる。

ただ先端部の作りは概して粗雑なものが多く最低限の使用に耐えうることが必要条件であったのだろう。それに対して、丸木杭は先端部の作りも丁寧なものが多い。特に30は丸木材を手頃な太さに整形した後先端部分をノミ等で削り出し、さらにその先端部分を滑らかに仕上げたものである。

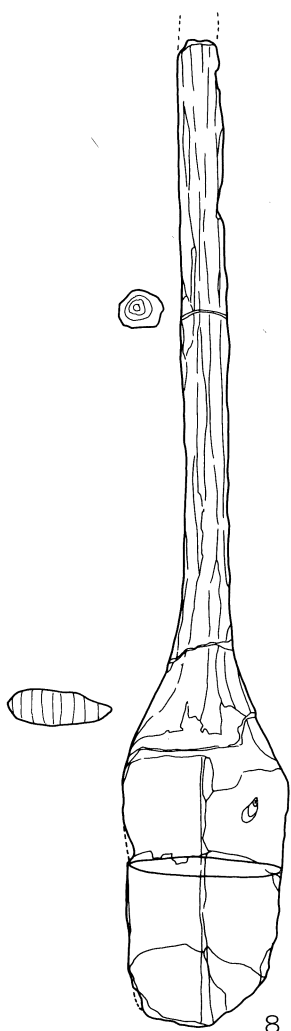
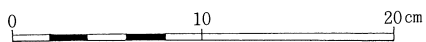
なお今回図化したものは代表的なものであり細かい数値等は観察表を参照願いたい。



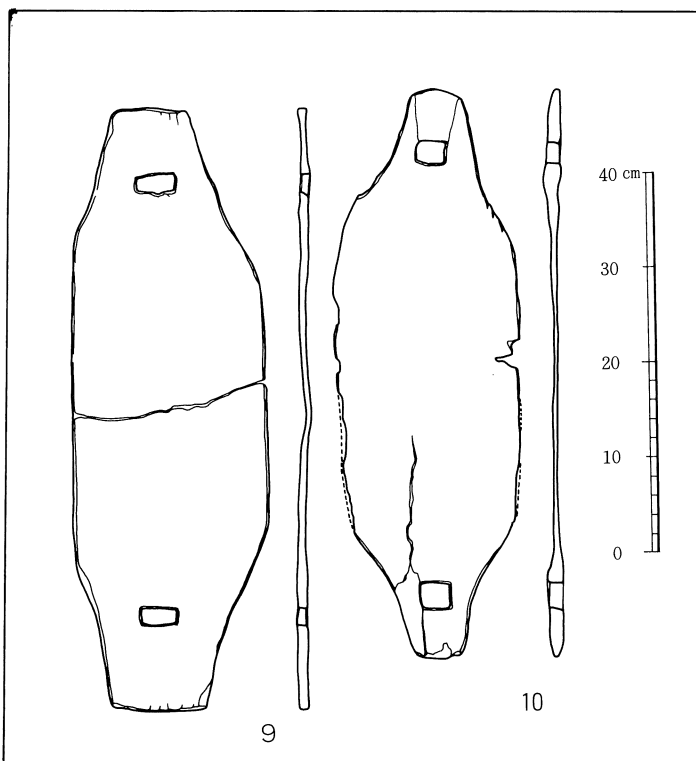
第62図 樋多田第2次調査出土木器実測図 (1/4)



7

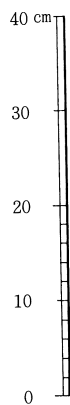


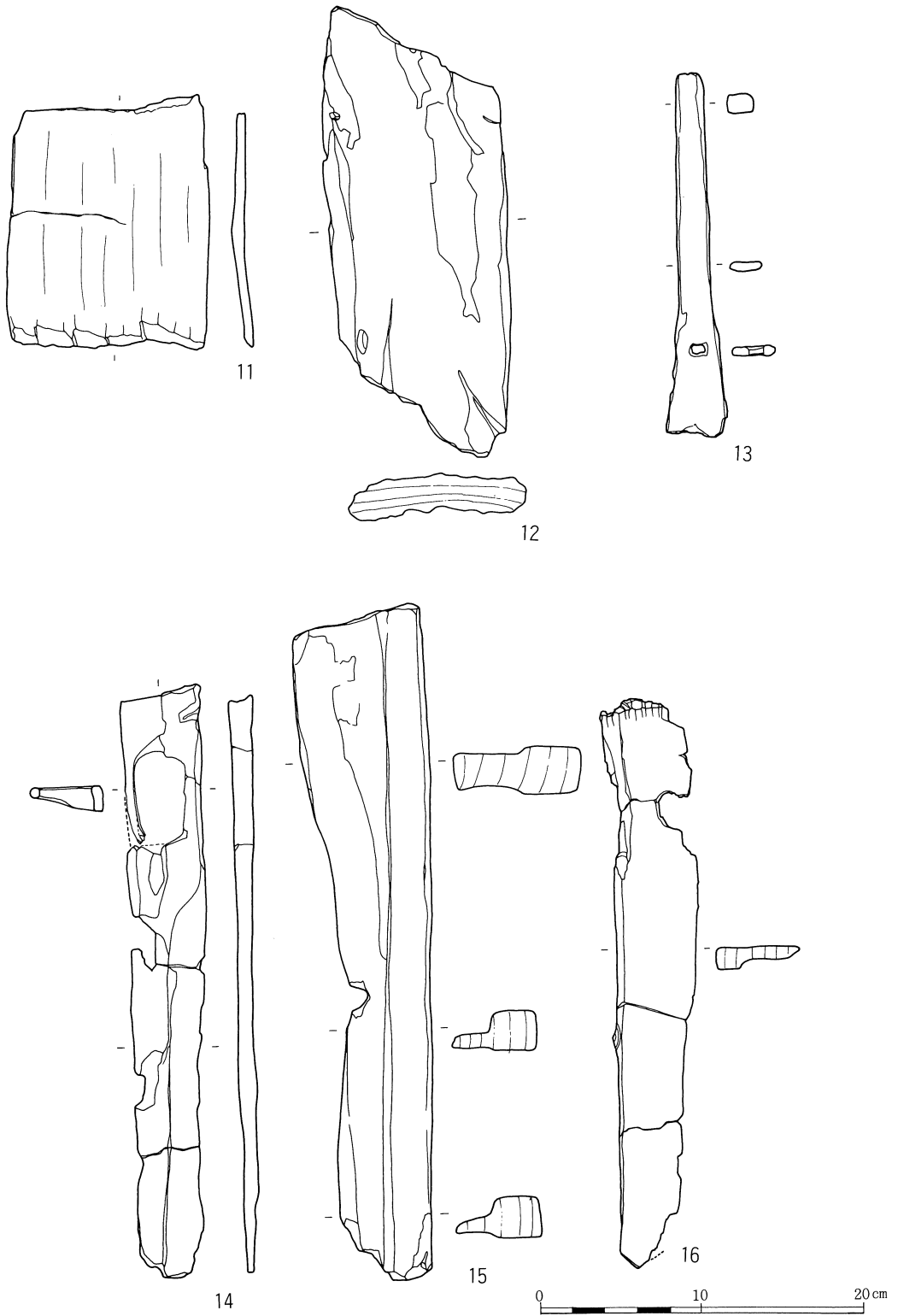
8



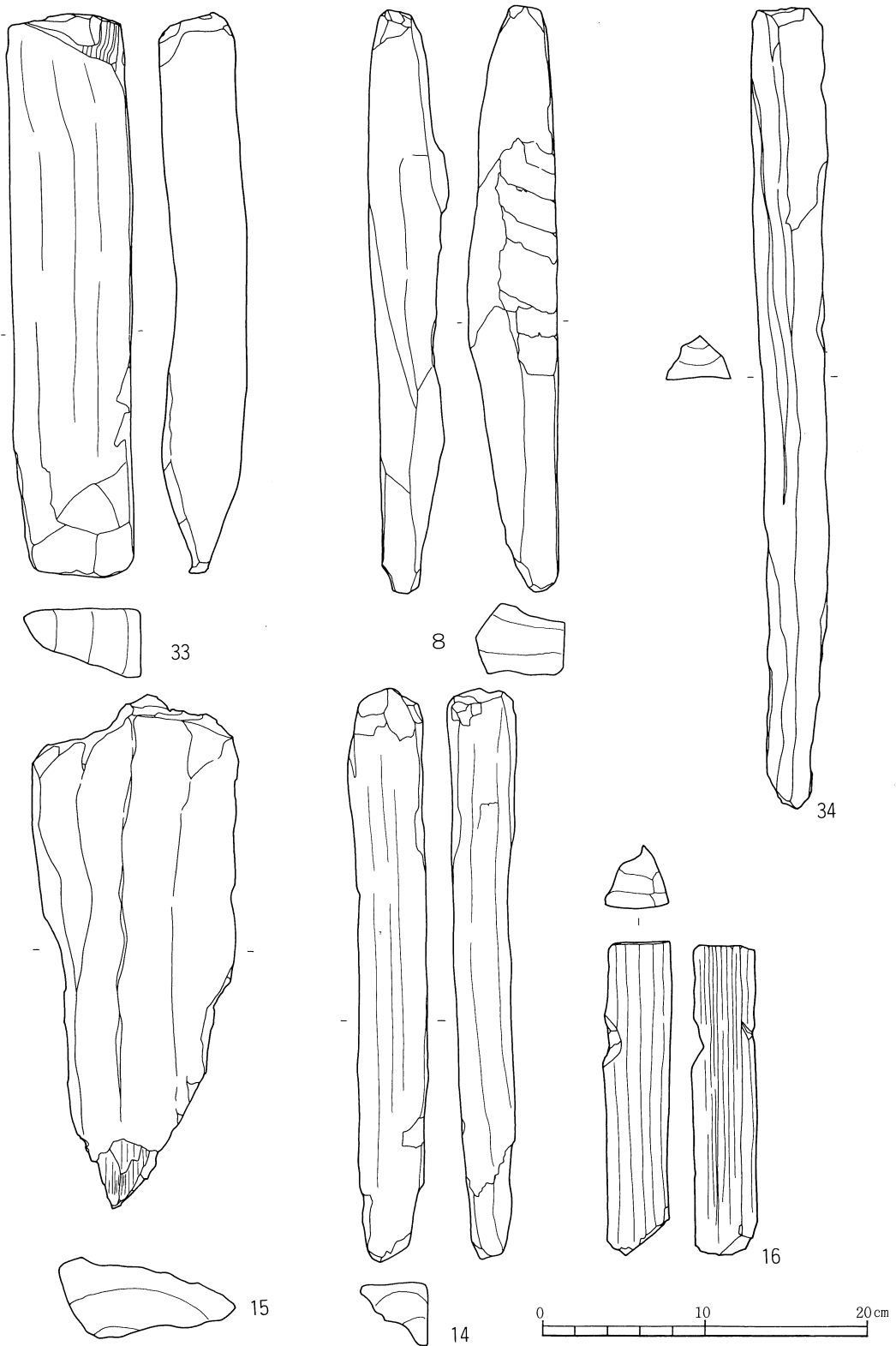
9

10

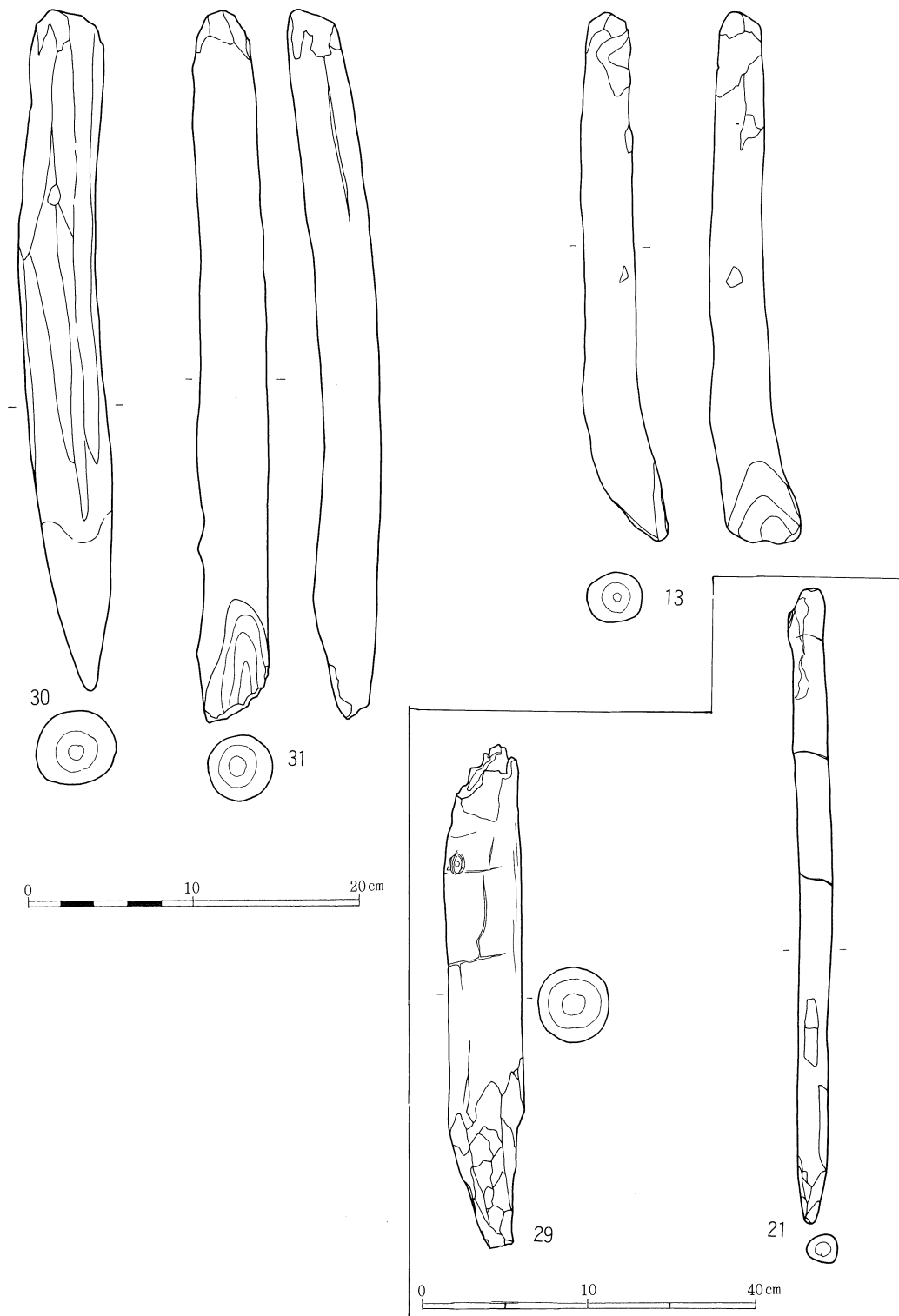




第64図 樋多田第2次調査出土木器実測図(1/4)



第65図 樋多田第2次調査出土杭実測図 (1/4)



第66図 樋多田第2次調査出土杭実測図(1/4)

4. まとめ

縄文時代晩期～古墳時代の複合遺跡である樋多田遺跡は調査の結果集落＋水田という弥生・古墳時代の基本的な生活パターンの遺構をそなえた遺跡であることが確認できた。2次にわたる調査では残念ながら水田面そのものを検出するには至らなかったが流路がそれにかわるものとして浮かび上がってきた。このことは自然科学分野の分析結果を見ても疑う余地のないものであろう。

以下各時代ごとにまとめていきたい。

縄文時代晩期

この時期は、犬丸川が現在よりやや東をながれていたことは2次調査の2本トレンチで想定される。遺物が出土することから周辺にこの時期の遺跡が存在することは十分考えられる。

なおこれら晩期土器は出土数は少ないが深鉢と浅鉢がセットで得られた。これらの土器は器形から菜畑遺跡の9～12層出土の土器と類似した特徴を持つもので^(注1)、山の寺式土器と並行するものと考えられる。そこで問題になるのは農耕の存在である。菜畑遺跡ではこの時期の土器に伴う水田農耕の存在が確認されているが花粉分析の結果第4トレンチ内の最下層からは稲の花粉は検出されず、ここに水田が営まれていた可能性は低いという結果が得られている。

弥生時代

この時期にはいと犬丸川の蛇行はピークを迎えて次第に流れを西よりに移していく。こういった蛇行河川の堆積作用については桂雄三氏の論文^(注2)にあるようにその蛇行が強調されすぎた段階で流量をさばき切れなくなり、本流から切り離されいわゆる放棄河道となる。(この放棄河道に堰水したものが三日月湖と呼ばれるものである。)前回ならびに今回検出された流路はそういった放棄河道の一部が次第に埋没して行く過程で形成されたものと思われる。

特に流路を取り巻く上層観察では流路内に堆積した部分は黒色化が著しいものの、その上層ならびに下層では比較的青灰色に近い層が観察されている。これは上位、下位の層が比較的早く埋没した状況^(注3)を示すものである。それに対して流路内の黒色土は緩慢な堆積によって形成された層であり、おそらく弥生時代になって流れが変わった後もある程度水の流れはあったのであろう。さらに幅のさほど広くない流路が複数存在した低湿地地帯であったことは十分考えられる。こういった地理的環境を利用した水田耕作が営まれていたのであろう。

1次調査ではプラントオパール分析、2次調査では花粉分析といった自然科学の分野からのアプローチも試みた結果この流路内に堆積する層から高密度のイネの珪化機動細胞や花粉化石が検出された。これはこの流路が単に水が流れていた小河道であったということだけでなく、

幅4～5m前後の範囲で水田が営まれていたことを示唆するものである。流路内から出土した木器に完形品がないのはおそらく農作業をしていく中で破損したものを廃棄したものであろう。

さらに1次調査で流路内で検出された杭列は、畦畔施設あるいは水の取入口であった可能性も考えられる。

ところで水田耕作は流路周辺のみ限定されていたのかという事が問題になる。2次調査で流路と流路の間にトレンチを設定して水田面の確認調査を行ったがみとめることができなかった。地形的には低湿地であったにもかかわらずあえて流路付近を選択したのはおそらく水の取り込みならびに排水などを考慮したからであろう。花粉分析でもこの間においてはイネの花粉化石は検出されず水田が営まれていた可能性が低いといった結果が得られた。

土層観察では3面の水田面を想定できたが、出土した土器からは、1期・弥生時代中期初頭、2期・弥生時代中期末～後期前半、3期・弥生時代後期後半の3時期にこの流路を使用していたことがうかがえる。このうち1期に伴う住居跡がA区において検出されている。2期に伴う集落には南西の丘陵状に所在する森山遺跡があげられる。直線距離で100m以内のところでは樋多田遺跡周辺で生活していた人々の一部が一時的に台地上に集落を営んだものと考えられる。3期に入るとこの森山遺跡は、住居跡の数は激減していく。森山遺跡は比較的短期間で終息していきその後再び樋多田遺跡を中心とした自然堤防上に営まれていくものと考えられる。B区やC区で検出された5～6世紀にかけての住居跡はそういう動きを示すものであろう。中津市教育委員会の調査でもピット群と溝が確認されている。^(注4)おそらくこの時期の集落がこの自然堤防上に広範囲に広がっているものと思われる。

ただし2期および3期については調査区内でこの時期に相当する住居跡が確認されていないため森山遺跡をあてたが今後この周辺で2期・3期に相当する集落が確認される可能性も十分ある。

木器類は農耕具が中心で、特に鍬、鋤が中心となった。鍬は又鍬が最も多く横鍬、平鍬が出土する。鋤は一木作りの鋤のみで組合せ式のもの1点も出土しなかった。この遺跡の特徴として出土する木器に完成品がないという点があげられる。これについては、水田耕作の作業の段階で破損した農具を廃棄する行為があったことが想定される。但し当時のこれらの農具はかなり大事にされていたことも事実で福岡市の那珂久平遺跡では狭鍬が破損した後使える部分から横鍬を作っている事例が報告されていることも考慮に入れておくべきである。^(注5)ところで大分県内で現在木器や建築材が出土した遺跡としてあげられるのが国東町安国寺遺跡、大分市下郡遺跡群、大分市下郡桑苗遺跡、一木中安遺跡がある。安国寺遺跡では弥生後期の鍬類や竪杵、機織具とともにほぼ1棟分の建築材が出土している^(注6)、下郡桑苗遺跡では弥生時代前期末葉～中期初頭の木器が出土している^(注7)。一木中安遺跡では後期にあたるナスビ型木器や鍬、機織

具などが出土している(注8)。このように大分県でも次第に沖積地に調査の範囲が広がってきていることから資料も今後増加が見込まれる。

注1 『菜畑』 唐津市教育委員会 1982

注2 桂 雄三「蛇行河川の堆積作用」『考古学ジャーナル』No.329 1991

注3 赤木克視「大阪の低湿地遺跡における土層のとらえ方」『考古学ジャーナル』No.329 1991

注4 中津市教育委員会の栗焼憲司氏のご教示によるもの。

注5 『那珂久平遺跡』 福岡市教育委員会 1988

注6 『安国寺弥生式遺跡の調査』九州文化総合研究所編 毎日新聞社 1958

『安国寺遺跡』国東町教育委員会 1989

注7 『下郡桑苗遺跡』大分県教育委員会 1989

注8 『丹生川』大分大学学芸部総合調査報告 1963

6. 自然科学分野における調査

樋多田遺跡土壌のプラント・オパール分析

大分短期大学助教授

佐々木章

イネ科植物の葉身中に存在する機動細胞は、植物の種類ごとに特徴的な形状をしている。また、その細胞壁は珪質化しているため植物が枯死した後分解をうけにくい。そこで、土壌中に残った珪化機動細胞の化石（プラント・オパール）を顕微鏡下で検出することで給原植物を推定することができる。また、プラント・オパールが全て土壌中に残っていると仮定できる場合には、現在の植物体中珪化植物体密度を使って土壌中のプラント・オパールの量を給原植物の量に換算することにより、過去のイネ科植生やイネ科作物の生産量を推定することもできる。このような方法をプラント・オパール分析法と呼び、日高遺跡（群馬県）以来発掘があいついだ各地の生産跡遺跡の分析をおこなってきた。さらに進んで、プラント・オパール分析を本格的な発掘調査に先行させることにより発掘以前に水田埋没土層を予測する実験（水田探査法）が開始され、夫敷遺跡（島根県）・若江北（大阪府）・垂柳遺跡（青森県）などで成功をおさめた。その後も多くの研究が積み重ねられており、プラント・オパール水田探査結果には高い評価を得ている。今回、水田遺構は検出できなかったが遺跡の立地などから水田あるいは水田関連遺跡と考えられる樋多田遺跡土壌のプラント・オパール分析をおこなったので報告する。

調査分析方法および結果

樋多田遺跡の考古学的な発掘調査結果は本報告書に詳しいが、犬丸川が大きく蛇行するその内側に時代を異にする2つの小溝が検出された。新しい方の溝には特に多くの樹木が散乱していたので井堰の可能性が考えられている。いずれの溝からも弥生式土器が検出されており、古い溝は弥生期の早い内に、新しい溝も古墳期までには埋まったようである。

分析試料を採取したA地点は新しい溝の内部、B・C地点はその南に位置しB地点は古い溝の内部、C地点は新しい溝の内部と考えられる。採取地点の土層概念図を図1に示す。プラント・オパールの大きさは50 μm と微小なので土壌試料採取にあたっては試料が汚染されないように細心の注意が必要である。そのため試料採取には筆者自身があたり、採土管を用いるなど細心の注意を払った。試料は採土管につめたまま研究所に持ち帰り図2に示す方法によって定量分析を行った。

結果および考察

分析の結果を表1 植物体中の珪化機動細胞密度の値を使って植物体重に換算して図3～5に示す。単位は広さ10 a (1,000m²) 深さ1 cmの土壤中に埋没した植物の植物の地上部乾物重(t)で示してある。イネについては生産されたであろう稲量も推定してあわせ示した(ハッチ部)。

A地点ではI～XI層にわたって多量のイネ科機動細胞プラント・オパールが検出された。いずれも水田作土層としても十分な量であり埋没水田層の可能性が高い。B地点では上層はすでに発掘により削除されていたが、①③層が埋没水田の可能性が高い。⑫層も上層よりも多いので埋没水田の可能性は大きいが紛れ込みの可能性を否定しきれない。C地点の④・⑤⑥層はA地点のX・XIに相当するが、多量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。この量はかなり多いのでこの付近に水田があったものであろう。

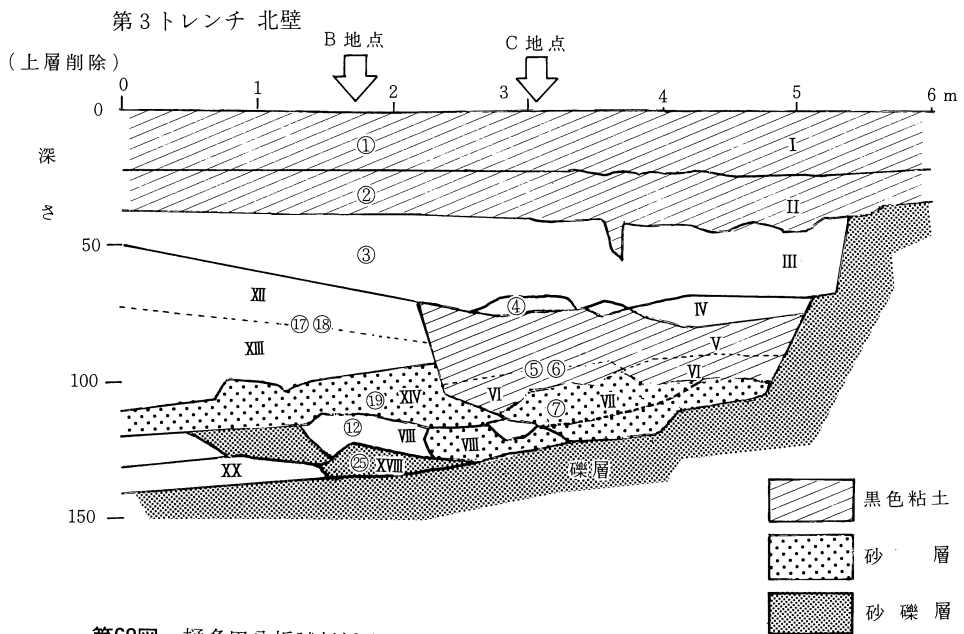
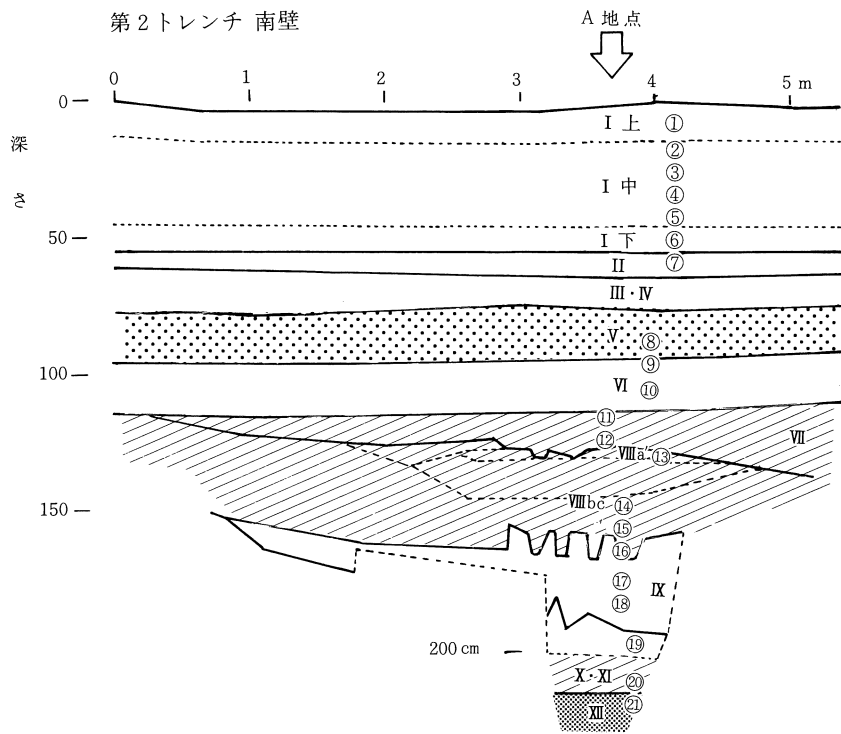
一般に常水田化している上層ではイネが多い層はヨシが少ないが、下層では必ずしもそうではなく雑草であるヨシが多い。

横軸に示した値に土層厚を乗ずると、その層に含まれる植物体量を推定することができる。たとえばA地点のX XI層はイネ稲4.25 t /10 a /cmで層厚が24cmなので102 t /10 aになる。これを稲量に換算すると36 t /10 aに相当する。この条件は穂刈に匹敵するが、株刈であったとすれば機動細胞は葉身とともに圃場外に持ち出されているので圃場に残された機動細胞から推定した値のおよそ20倍が実際に収穫された値になる。もし、堆肥などで圃場にもどされていればその割合に応じた中間的な値が実際に生産された収穫になる。今、かりに全て水田で穂刈を行っていたと仮定して10 aあたりの稲収量を求めるとC地点⑤・⑥層で12.2 /10 aと計算できる。年間収量を100kg/10 aと仮定すると120年間に相当する。このように長期にわたって水田が営まれていたとすれば、最初の溝は弥生の初期にさかのぼる可能性が高い。

結論

今回の調査は、期間も短く調査地点も限られていた。しかし、分析地点はいずれもイネプラント・オパールの含有量が高く、水田であった可能性が高い。とくにA地点I下・III・IV・IV VI・VIIIa'・IX、B地点③・⑫、C地点の④および⑤⑥層は水田の可能性が高い。

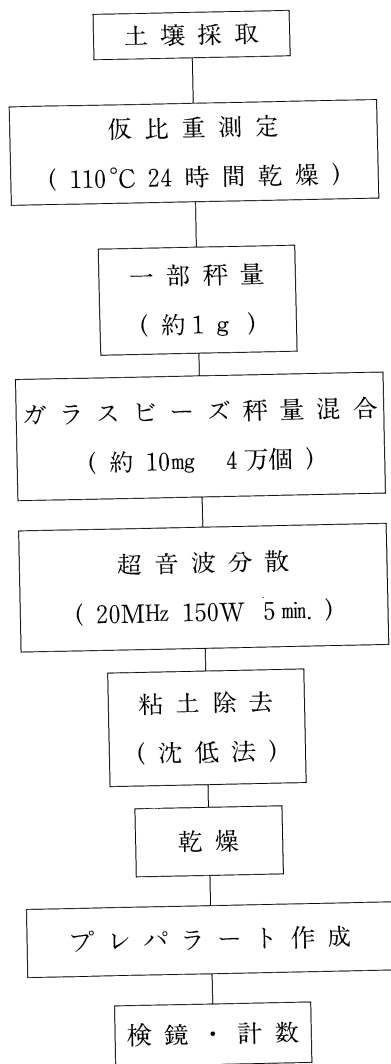
C地点の④および⑤⑥層には多量のイネ機動細胞プラント・オパールが含まれており120年近く水田が営まれていた可能性が高い。



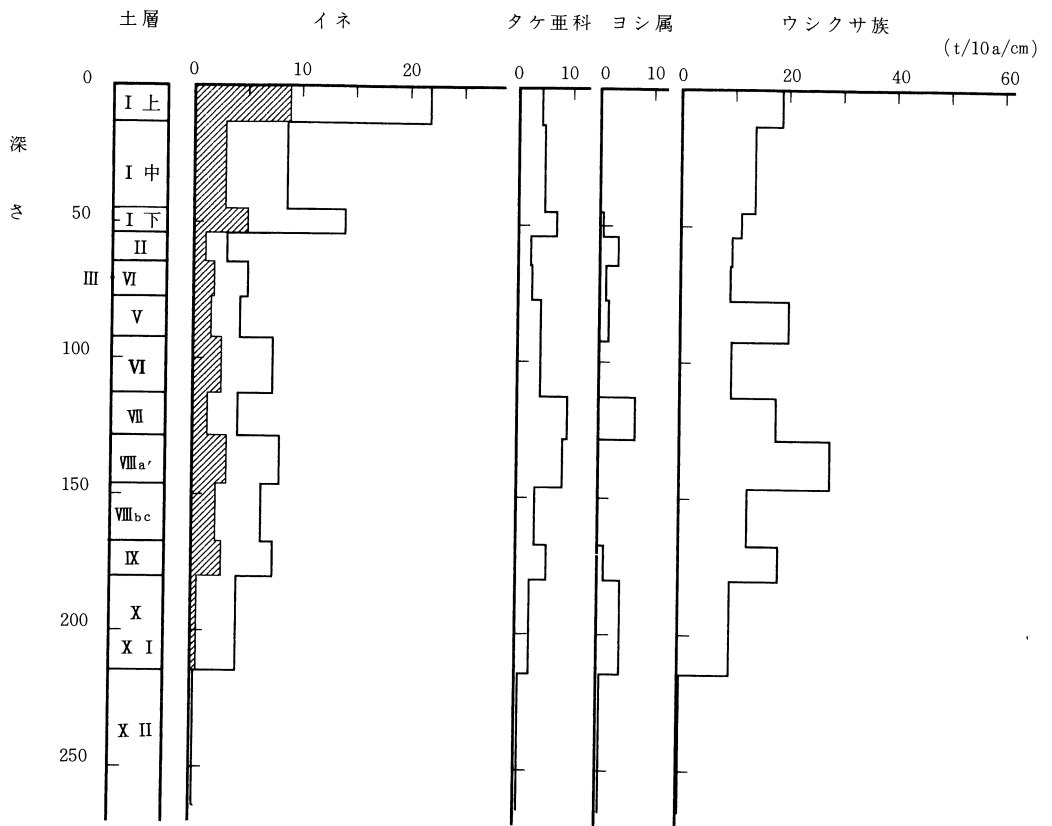
第68図 樋多田分析試料採取地点土層概念図

第68図 樋多田分析試料採取地点土層概念図

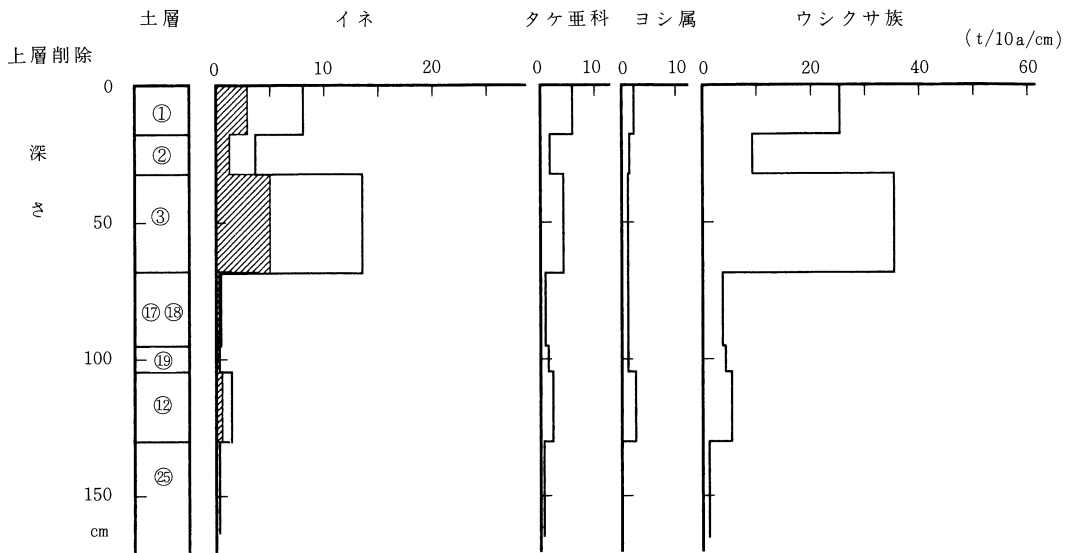
※数字はサンプル番号



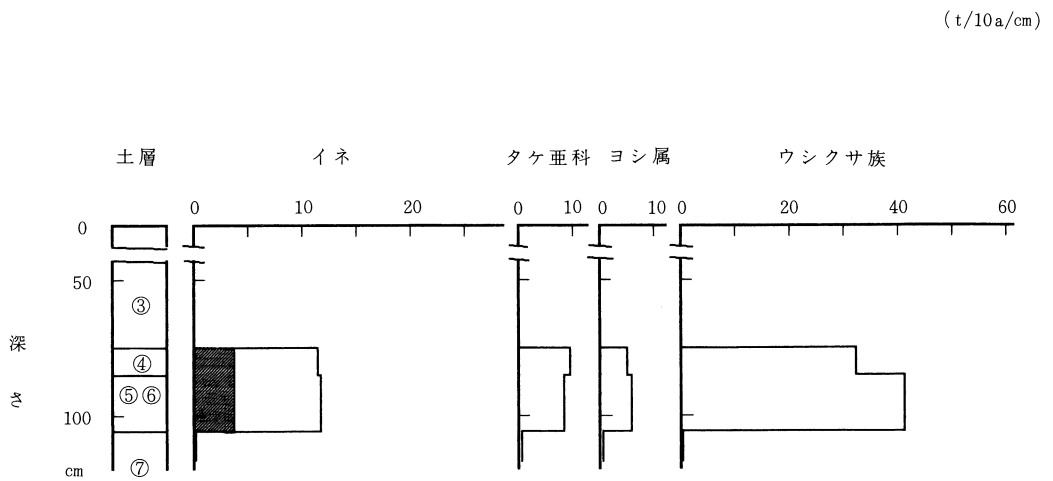
第69図 プラント。オパール定量法



第70図 樋多田A地点の分析結果から推定した埋没植物体重



第71図 樋多田B地点の分析結果から推定した埋没植物体重



第72図 樋多田C地点の分析結果から推定した埋没植物体重

表1 植物体中の珪化機動細胞密度

植物名	密度 ($\times 10^4$ 個/g)
イネ	Oriza Sativa 3.40
ヨシ属 (ヨシ)	Phragmites communis 1.44
タケ亜科 (ゴキダケ)	Pleiolobus Chino var. virides f. pumilis 20.83
ウシクサ族 (ススキ)	Miscanthus sinensis 2.79

樋多田遺跡（中津市）の花粉分析

畑中 健一

中津市大字加来字樋多田に所在する「樋多田遺跡」のD区AセクションおよびE区第2トレンチの壁面から採取した試料について花粉分析を行い、古環境について考察した。

本遺跡は、犬丸川により形成された低湿地と自然堤防上に立地する。標高22m余りである。D区Aセクションにおいては、埋土を含む表層部の堆積物（0～65cm）を除き、地表下70cm以下の堆積物について、5～10cm間隔で21点の試料を採取し、上位から順次1～21の番号を付した。E区第2トレンチでは、地表下110cm以下の堆積土から5～10cm間隔で23点の試料を採取し、D区と同じく上位から試料番号を付した。

分析結果と考察

分析結果は図1・2の花粉のダイアグラムに示す通りである。

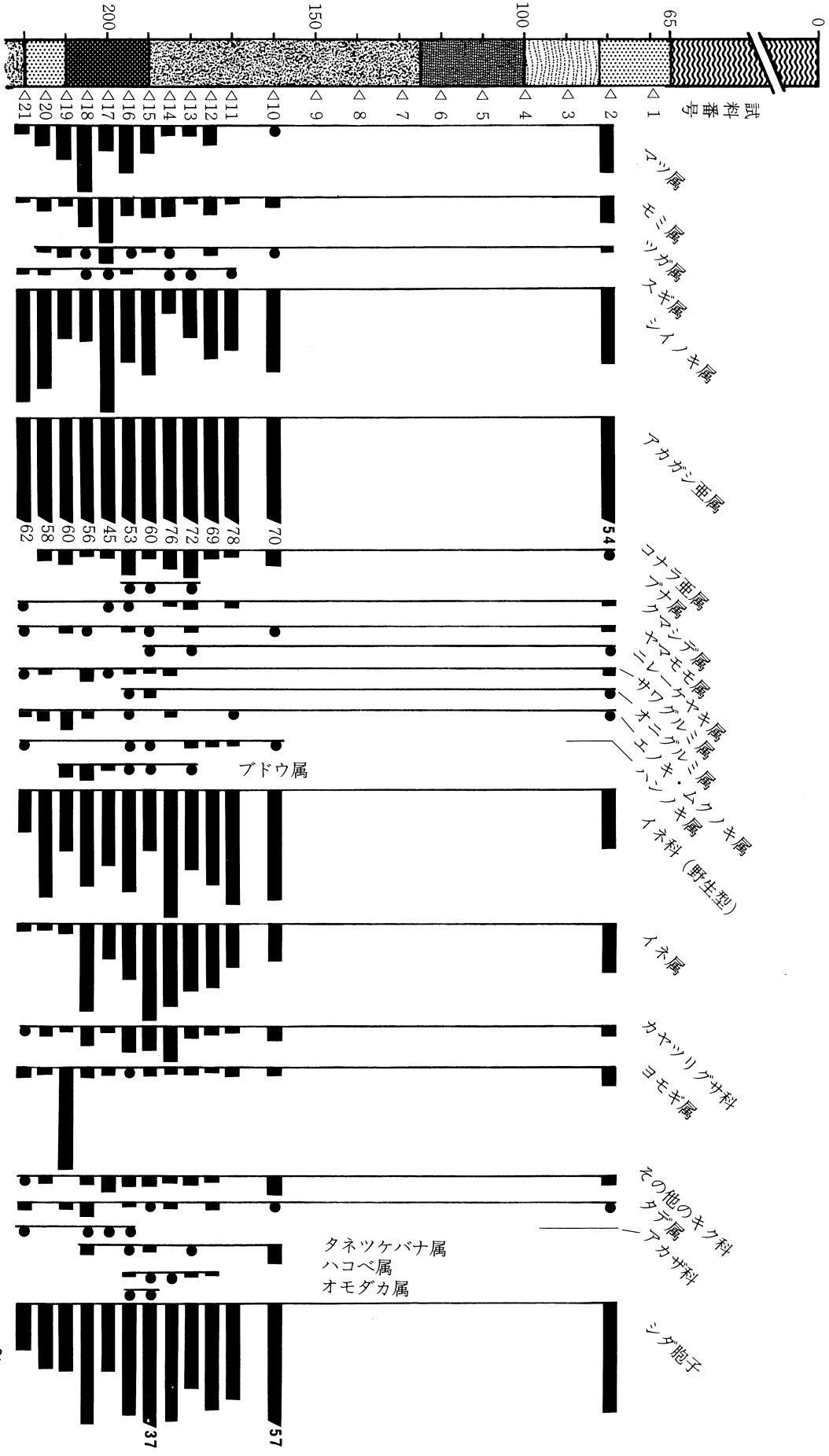
D区セクション：花粉群集は、常緑広葉樹のアカガシ亜属とシイノキ属の優占によって特徴づけられる。試料1と3～9からは花粉・孢子化石は検出されない。草本類では、イネ科（野性型）が高率に出現し、地表下205cm（試料18）以上の層準ではイネ属（イネ）もかなり高率に出現する。また、イネ属が出現する層準では、キク科・タデ属・ヌネツケバナ属などの雑草類が低率ながらほぼ連続的に出現する。

こうした花粉化石の出現状況から推測すると、地表下148cm以下の層準（11・14・15層）は、一括して弥生時代前～後期の堆積物とみなされているが、少なくとも15層下部、地表下220cm以下の層準は縄文晩期の堆積物と考えるのが妥当であろう。

イネ属花粉の出現率からみて、15層上部より上位の層準ではかなり集約的な稲作が営まれていたと推定される。

E区第2トレンチ：花粉ダイアグラムに示すごとく、試料1～16の層準は無花粉帯である。試料17～23の花粉組成についてみると、D区Aセクションと同じくアカガシ亜属が優勢であるが、ここでは特異的に、落葉広葉樹のエノキ・ムクノキ属も高率に出現する。草本類の出現状況は明らかにD区とは異なり、イネ科（野性型）はいちじるしく劣性であり、イネ属はまったく検出されない。これらのことから、花粉が検出される6・7層は、縄文晩期もしくはそれ以前の堆積物と推定される。

(cm)



第73図 種多田D区Aセクションの花粉ダイアグラム

樋多田遺跡A地区S B 1 竈の地磁気年代

島根大学理学部 時枝克安 伊藤清明

樋多田遺跡A地区S B 1 竈について、熱残留磁気の方向を西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線と比較して次の地磁気年代を得た。この値は6世紀中頃～後半という土器年代とうまく整合している。

樋多田遺跡A地区S B 1 竈の地磁気年代 A.D.560±25

1. 年代測定の仕事と問題点

[仕組]

地磁気は長短の周期をもつ変動成分を含んでいるが、その中には、時間が約10年以上たつと方向と強度に目立った偏倚が現れるような緩慢な変動があり、これを地磁気永年変化と呼んでいる。一方、窯や竈の例のように、粘土が加熱されると、焼土は土中の磁鉄鉱等を担い手として熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の方法は、加熱時の地磁気の方法に一致し、再加熱されなにかぎり安定であり数万年程度経過しても変化しない。もし、焼土が再加熱されて磁鉄鉱等のキュリー温度(575度C)以上になると、それ以前の残留磁気は完全に消滅し、その時の地磁気の方法に新しい残留磁気をもつようになる。つまり、須恵器窯のような高温加熱体の熱残留磁気は、最終焼成時の地磁気を正確に“記憶”していることになる。

これらの事実から、もし地磁気の方法と年代のグラフ(標準曲線)が分っているならば、これを“時計”の目盛として焼土の最終焼成年代を読み取れることになる。すなわち、地磁気の方法変化が時計の針の動きに相当し、焼成時の針の位置を熱残留磁気記録する。標準曲線を求めるには、年代がよく分っている焼土から各時代の地磁気データを多数蓄積し、適当な短期間(～10年)の平均値をその時代(中央値)の標準点として定め次々と連ないでゆく。幸い、日本では、広岡(1977)によって西南日本の過去2000年間の標準曲線¹⁾が報告されているので、この方法が焼土随伴遺跡の年代推定法として実用化されている。考古地磁気法の詳細については中島等による解説²⁾が参考になる。

[問題点]

まず、地磁気の方法変化、言いかえると、地域によって標準曲線の形が西南日本のものとか

なり相違していることがあげられる。相違が小さい場合は西南日本のものを代用できるが、大きい場合には地域ごとに固有の標準曲線を定めなければならない。最近、各地での新しいデータが増えた結果、このような標準曲線の地域差が具体的に問題にされるようになってきた。³⁾

次に、地磁気変動を原理とする地磁気年代は土器編年と無関係に思われがちであるが、実際にはそうではなく、地磁気年代の導出は土器編年を基礎としていることに注意する必要がある。すなわち、確実な史料による少数の年代定点を除くと、標準曲線のほとんどの年代目盛は考古学の土器編年体系を参照している。地磁気年代のうち、年代定点に近い値には問題がないが、離れた値は土器編年上の実年代に強く影響されており、もし土器年代に改訂があればそれに伴って訂正しなければならない。年代定点の数が増えると地磁気年代は完全に独立できるが、現状では、土器編年との相互依存は仕方のないことと言える。しかし、地磁気を媒介とする対比のおかげで、地磁気年代測定法は無遺物でも有効である点、その広域性により相互に隔絶した土器編年を対比できる点で独自の性格をもつ。

2. 遺跡の概要と年代測定用試料

樋多田遺跡（大分県中津市、北緯33度32分58秒 東経131度13分19秒）のA地区S B 1の北縁には石組焚口をもつ竈が設けられている。竈（～70×70cm）の焚口は水平にした約70cmの細長い自然石の両端を支えて作られ、竈の中央には器を乗せる支柱が残されている。また、竈をはさむようにして、二つのかめが住居跡の外側に埋められていた。焼土は焚口と支柱の間に残され赤色に固く焼けている。住居跡の年代は出土した土器（坏、高坏）の形式から6世紀中頃～後半と推定されている。

年代測定用試料として合計10個の定方位試料を採取した。試料が少ないのは石のアーチと支柱が邪魔をしたためである。試料の採取方法は、拳大の焼土を石膏で固め、上面の方位をクリノコンパスで測定する仕方をういた。

3. 測定結果

試料の残留磁気の強度と方向を無定位磁力計で測定した。図に樋多田遺跡A地区S B 1竈の残留磁気の方向を示す。2個の飛び離れたデータを省略すると方向のまとまりはかなりよい（円内）。また、竈は安定した地盤に構築されており、最終焼成後に傾動した可能性は全くない。それゆえ、円内のデータは竈の最終焼成時の地磁気の方向を正確に示しているはずであり、これらのデータをもとにして年代測定を行うことができる。

円内のデータの平均方向と誤差の目安となる数値を計算すると次のようになる。ただし、

Im：平均伏角、Dm：平均偏角、k：Fisherの信頼度係数、 θ_{95} ：95%誤差角、N：有効試料数である。 θ_{95} は次に述べる円錐の頂角の半分に相当し、小さいほど測定誤差が少ない。すなわち、円錐の頂点はステレオ投影図の中心に、軸は平均方向に沿い、頂角は測定結果の95%を含むように選ぶ。Fisherの信頼度係数は大きいほど測定精度がよいことを示す。

残留磁気の平均方向

	Im (度)	Dm (度E)	k	θ_{95} (度)	N
樋多田遺跡A地区S B 1 竈	49.68	-15.69	602	2.26	8

Im：平均伏角、Dm：平均偏角、k：Fisherの信頼度係数

θ_{95} ：95%誤差角、N：有効試料数、

4. 地磁気年代の推定

図2に樋多田遺跡A地区S B 1 竈の残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の楕円)、および、広岡(1977)による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線を示してある。窯の考古地磁気年代を求めるには、この曲線上に残留磁気の平均方向から最も近い点を定めその点の年代を読みとればよい。年代誤差も同様にして点線の楕円から推定できる。このようにして得られた地磁気年代は次のようになる。

樋多田遺跡A地区S B 1 竈の地磁気年代 A.D.560±25

5. 考察

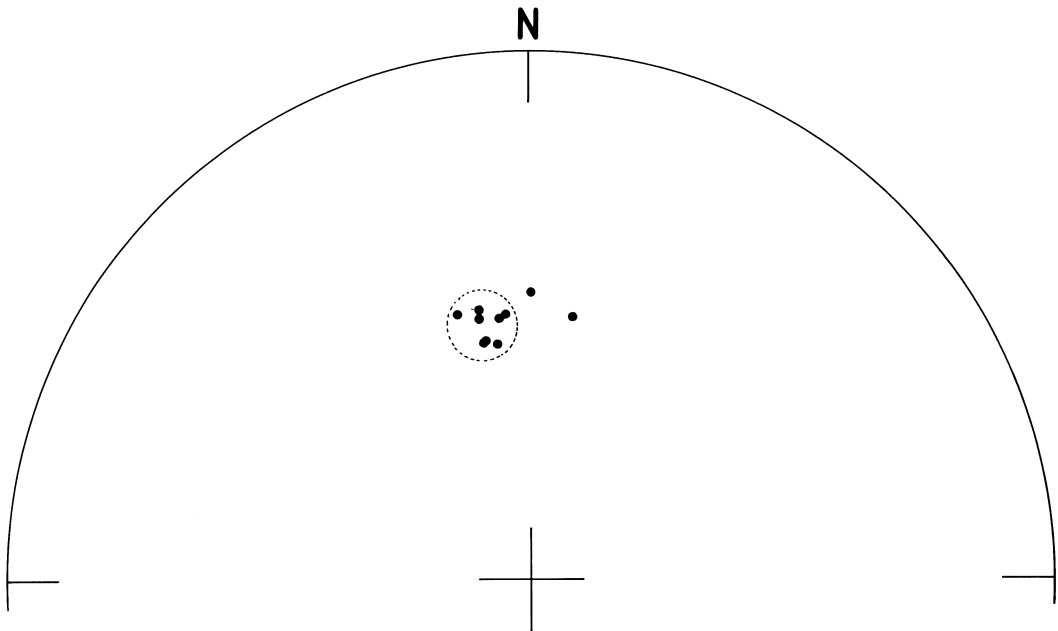
伊藤田窯跡群(大分県中津市)の瓦ヶ迫窯跡、草場窯跡、城山窯跡の熱残留磁気測定報告⁴⁾では、6世紀後半から7世紀前半の土器年代をもつ窯に対して、地磁気年代はいずれもより新しい方へずれており、最も時代の新しい城山窯跡で大きいずれが顕著であった。そして、我々はこのようなずれを(1)主として地磁気の地域変化に原因があり、(2)畿内の編年をそのまま用いる土器年代にも若干の原因があるかもしれないと指摘した。

これに対して、樋多田遺跡A地区S B 1 竈の地磁気年代(A.D.560±25)は土器から推定された6世紀中頃という年代とうまく一致している。このことは6世紀中頃において畿内と九州で地磁気の地域差が小さかったことを意味しているように見える。今後、九州で6世紀中頃以前

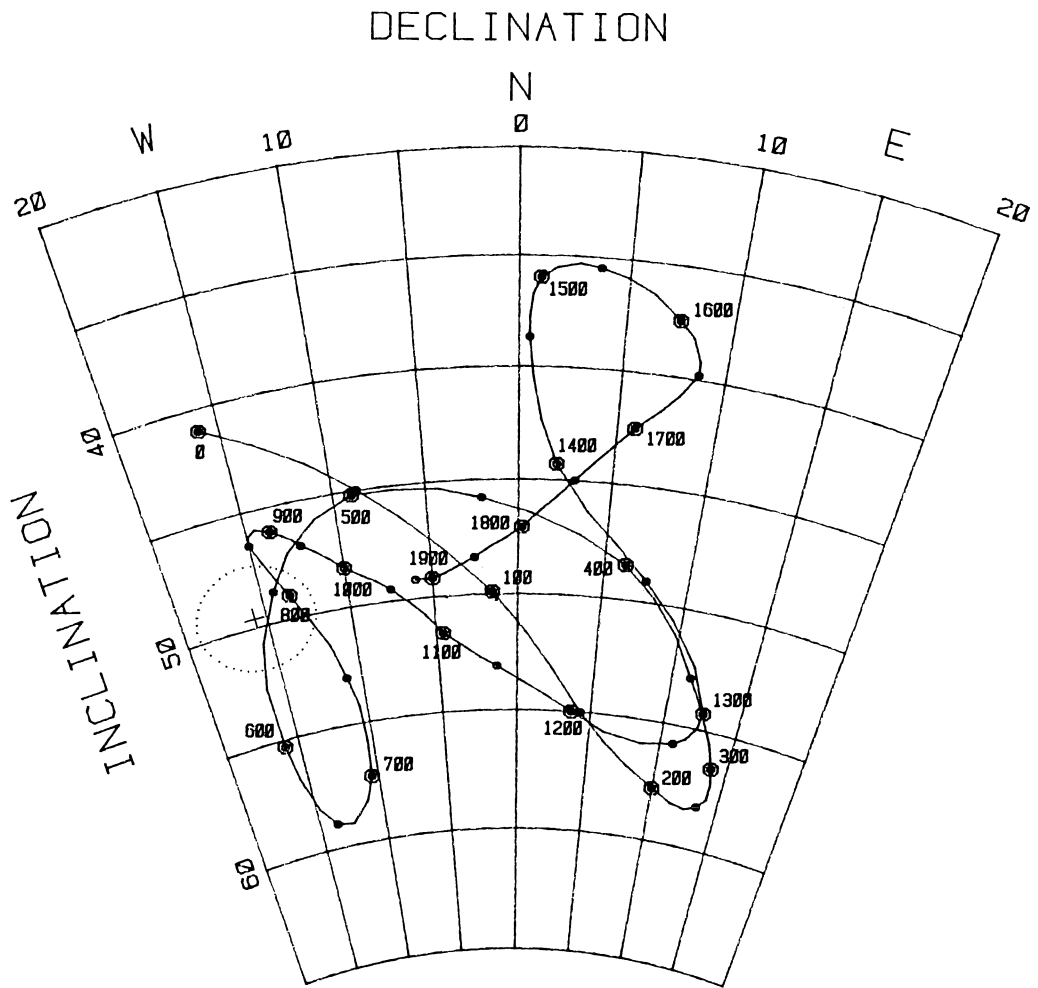
の地磁気年代測定データが増えると結論を断定できるだろう。

最後に、試料採取の便宜を図っていただいた大分県教育委員会の渋谷忠章氏に厚く感謝する。

- 註1 広岡公夫（1977） 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、
第四紀古地研究、15巻、200～203
- 2 中島正志、夏原信義 考古地磁気年代推定法、考古学ライブラリー9、
ニュー・サイエンス社
- 3 広岡公夫（1991） 考古地磁気永年変化の地域差、日本文化財科学会第8回大会研究発
要旨集、45-46
- 4 時枝克安、伊藤清明（1992） 伊藤田窯址群の熱残留磁気による地磁気年代、『一般国道
10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』
大分県教育委員会、



第75図 樋多田遺跡A地区S B 1 竈の残留磁気の方角



第76図 樋多田遺跡A地区S B 1 竈の残留磁気の平均方向 (+印) と誤差の範囲 (点線の楕円)、
 および、広岡 (1977) による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

第2節 森山遺跡

1. 調査の概要

(1) 調査に至る経過と調査概要

一般国道10号線中津バイパスに伴う発掘調査は、1987年には中津市街地東部の森山遺跡と宇佐市西部の大根川遺跡、向野遺跡を残すのみとなっていた。

森山遺跡は、当初用地買収の関係から分布調査・試掘調査が遅延していたが、買収が完了した6月から分布調査および試掘調査を行った。頭初、丘陵斜面下部に横穴墓群の存在が想定されたが、試掘調査の結果、丘陵頂部および北側・東側斜面部で弥生時代前期末～中期にかけての大規模な集落跡の存在を確認した。このため遺跡部分の本調査を必要としたが、中津バイパスの中津市部分の供用開始が1988年にせまっていたため、調査域を現道部分のみとし、さらに調査区を2区に分割し工事と並行させるなど開発部局と十分な協議を行なった。その結果、森山遺跡の調査区は約1,600㎡程で、この内に弥生時代前期末から中期後半前後の竪穴32基、土坑35基、溝2条、土壙墓14基、木棺墓3基、石蓋土壙墓1基、小児用甕棺墓1基、平安時代の火葬墓2基を検出した。

(2) 遺跡の立地と歴史的環境（第1図参照）

森山遺跡の立地する丘陵は、南方の八面山（標高659m）より北へゆるやかな傾斜でのびる低位丘陵の一つである。またその裾部は開折谷によって開けており、丘陵は樹枝状に形成されている。本遺跡の立地する丘陵もこのようなものの一つで標高約60m、下位の水田との比高差は40mを測る。さらにこの丘陵の西側には八面山にその源を発する犬丸川が丘陵に添って蛇行している。

この犬丸川の流域には多数の遺跡が所在するが、本格的な発掘調査が実施され遺跡の全貌が解明された例はいまだ少ない。ここでは表面調査と発掘調査によって収集された資料で犬丸川流域の遺跡を概観する。

旧石器時代に比定される遺跡は、八面山から派生する丘陵先端の伊藤田才木遺跡においてホルンフェルス製の剥片石器が、大坪遺跡で三稜尖頭器、ナイフ型石器の出土を見るが、断片的な資料である。しかしながら、隣接する宇佐市や築上郡域では近年比較的まとまった資料が発見されており、今後この地域においても丘陵地帯で注意していく必要があろう。

縄文時代に比定される遺跡は、中・下流域において多く見られる。まず中流域の中津市黒水遺跡において縄文早～前期の陥穴が検出されている。この種の遺構は、近年、京築地域や宇佐地域においても検出され注目すべきものである。また、伊藤田地区の穂谷池周辺の丘陵谷部においては長脚の石鏃が採集されており、この時期の遺跡が存在する可能性が強い。後・晩期になると中・下流域で注目される遺跡が次々と出現する。まず、中流域ではボウガキ遺跡（入垣貝塚

を含む)は縄文後期前葉～中葉にかけての貝塚と集落跡で構成される遺跡である。さらに、下流域においては今津地区の植野貝塚が認められる。この遺跡は昭和30年に賀川光夫氏等によって調査がなされ、縄文後期前葉のものと判明している。なお、この貝塚の東方台地上においても同時期の遺物が発見されており、ボウガキ遺跡と同様に貝塚と集落跡がセットになる遺跡の可能性が強い。現在周辺の宅地化が進みつつあるが、今後注意すべき遺跡の一つである。また、福島から北原、定留地区にかけては姫島産黒曜石製の石鏃や磨製石斧が多数出土しており、大規模な縄文時代の遺跡が存在する可能性が大きい。

弥生時代に比定される遺跡は、前期～中期のものとして中流域で森山遺跡、樋多田遺跡、福島台地上全体に広がる福島遺跡などがある。特に森山遺跡と樋多田遺跡は、犬丸川を挟んで対峙しており森山遺跡は標高約60m、比高差約40mの丘陵上に立地し、前期後半から後期初頭までの期間に互る集落跡で、これは都出比呂志氏によって分類された高地性集落Bタイプのものである。対し、樋多田は低地の集落で縄文時代から中世まで長期間継続して営まれている。標高でこの両者の中間に位置するのが福島遺跡である。ここでは、前期末～中期初頭の砂岩製柱状挟入石斧等が出土していることや朝鮮系無文土器の出土など朝鮮半島や北部九州の強い影響を受けており、集落も中・近世まで継続して営まれている。後期～終末期にかけては、中津市野依遺跡や犬丸川遺跡など低地部に遺跡が増大していく。特に犬丸川遺跡では山陰系の土器を使用した小児甕棺などの出土が注目される。

古墳時代の遺跡については、前期に比定される中流域の三光村岡崎遺跡において石棺墓1基と石蓋土壇墓20基が出土した。この内、石棺内から鳥を副葬した熟年女性人骨が検出された。下流域では中津市鍋島狐塚古墳で男性1、女性2体が箱式石棺内より出土した。犬丸川流域ではこれ以外に実体の分かるものはなく、古墳時代前・中期の様相は明確ではない。しかしながら、後期になると爆発的に遺跡が増大する。集落跡としては中流域の中津市大坪遺跡、同犬丸川遺跡、同前田遺跡、下流域の中津市野依遺跡、同中須遺跡などが、墳墓としては上流域の三光村三ツ塚古墳、同二ツ塚古墳、同洗添横穴墓群、中流域の森山横穴墓群、岩崎横穴墓群、城山古墳群、城山横穴墓群、下流域の野依古墳群があり、大坪・犬丸川遺跡―森山横穴墓、前田遺跡―城山横穴墓群、野依遺跡―野依古墳群と集落と墳墓との対応関係が認められる。さらに、これら遺跡の成立と同時期に伊藤田周辺の丘陵上に須恵器窯跡が作られはじめる。この伊藤田窯跡群中にある踊ヶ迫窯では、6世紀末に同心円叩き目文を持つ特異な平瓦が生産され山国川下流域西岸にある中桑野遺跡に供給されている。

奈良時代の遺跡は、上流域では塔ノ熊廃寺、中流域の野依遺跡、下流域の中須遺跡などの寺院跡・集落遺跡や中流域の中津市森山火葬墓や同寺迫火葬墓などの墳墓が見られる。特に、塔ノ熊廃寺は、新羅系軒丸瓦や鬼瓦が出土し、瓦当文様から山国川流域の垂水廃寺との関係が深い。また、野依遺跡で緑釉陶器が、中須遺跡で墨書土器が出土している。また、これらの遺跡

から出土する瓦、須恵器類は上述した伊藤田周辺の窯跡群より供給されていると考えられる。

このような遺跡の状況から犬丸川流域の原始・古代文化は縄文時代後期と古墳時代後期に大きな画期が認められる。

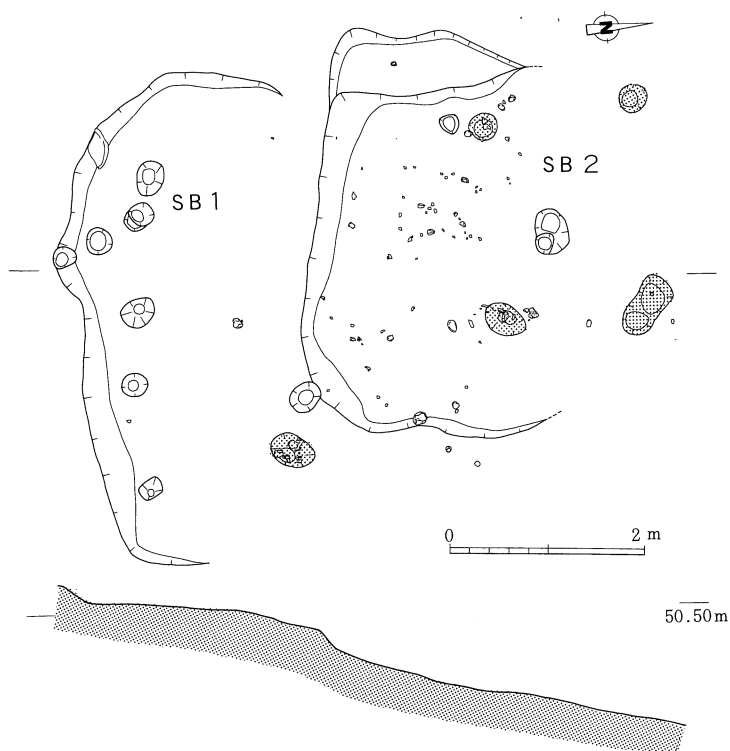
2. 遺構と遺物

(1) 住居跡

SB 1 (第1図)

本竪穴は標高50.5mを測る西側に延びる舌状丘陵西側（丘陵先端）の北斜面に位置する。この位置は竪穴群の最西端にあたる。上部が削平されているため南壁のみが明確で、東西壁は一部のみ残存している。東壁側でSK 1をカットしている。北側壁および北側床面はSB 2によって削平されており欠損する。その結果現存平面はほぼ隅丸のコ字状を呈している。東西辺約4.5m、現存部分の壁高は約20cmを測り、ほぼ45°の緩い傾斜で立ち上がる。床面は北方向に10°の傾斜を持つ。床面には炭化物、焼土は見られない。ピットは屋内に8個、壁に1個を数える。確実に本竪穴に付随すると思われるピットは位置等から1個のみである。

遺物の出土はほとんどなく弥生土器片3点のみである。

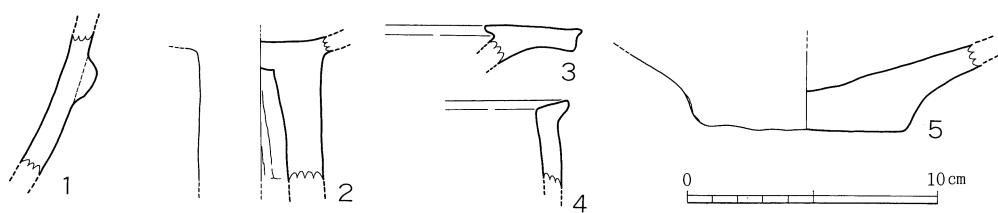


第1図 森山SB 1・2平・断面図

S B 2 (第1図)

本竪穴は標高49~50mを測る舌状丘陵西側(丘陵先端)の北斜面に位置する。この位置は竪穴群の最西端にあたる。S B 1の北側をカットして掘り込まれている。北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面はほぼ隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約2.5m + α 、南壁辺4.2m、西壁辺2.3m + α 、現存部分の南壁高は約20cmを測り、ほぼ50°の緩い傾斜で立ち上がる。床面は北方向に20°のやや急な傾斜を持つ。西側に南北方向に1.5m、東西方向に0.5m、床面からの高さ10cmの長方形のベット状遺構がある。床面には炭化物、焼土は見られない。ピットは屋内に8個を数える。確実に本住居跡に付随すると思われるピットは位置等から4個で、4本柱支柱穴の竪穴住居跡と考えられる。

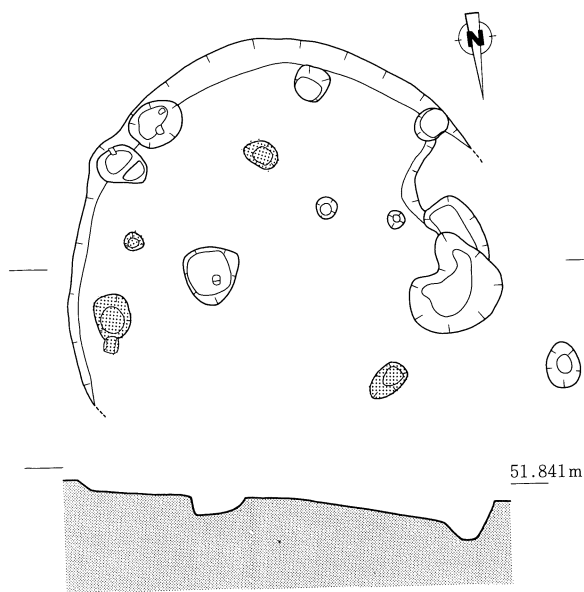
遺物の出土はほとんどなく壺、甕、高坏の弥生土器片数点が認められた。



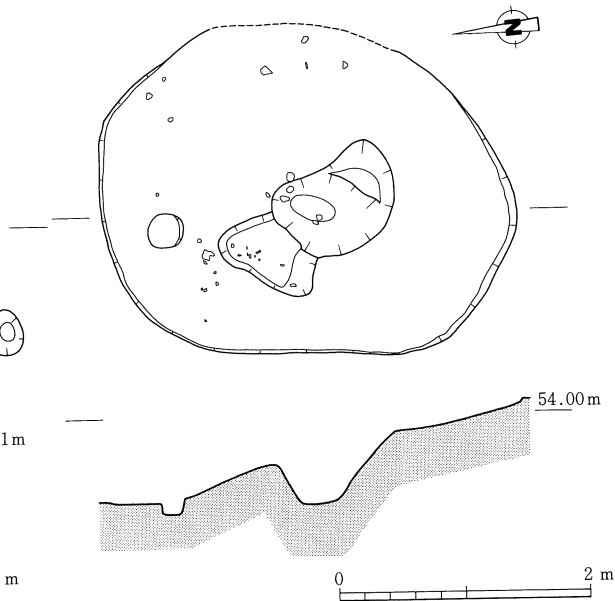
第2図 森山S B 1・2出土遺物(1はS B 1、2~5はS B 2)

第1表 森山S B 1・2出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
2図-1		壺胴部片	—	—	—	—	—	内外面ケンマ?	角閃石粒を含む	茶褐色
同一-2		高坏脚部	—	—	—	—	—	不明	角閃石を含むが精緻	黄褐色
同一-3		壺口縁片	—	—	—	—	—	ケンマ	角閃石粒を多く含む	淡橙色
同一-4		甕口縁片	—	—	—	—	—	内面→ケンマ 口縁→ヨコナデ 外面→タテハケ	角閃石粒含むが 精緻	同上
同一-5		底部	—	—	—	8.2	—	不明	石英・角閃石粒を 多く含む	茶褐色



第3図 森山SB3平・断面図



第4図 森山SB4平・断面図

SB3 (第3図)

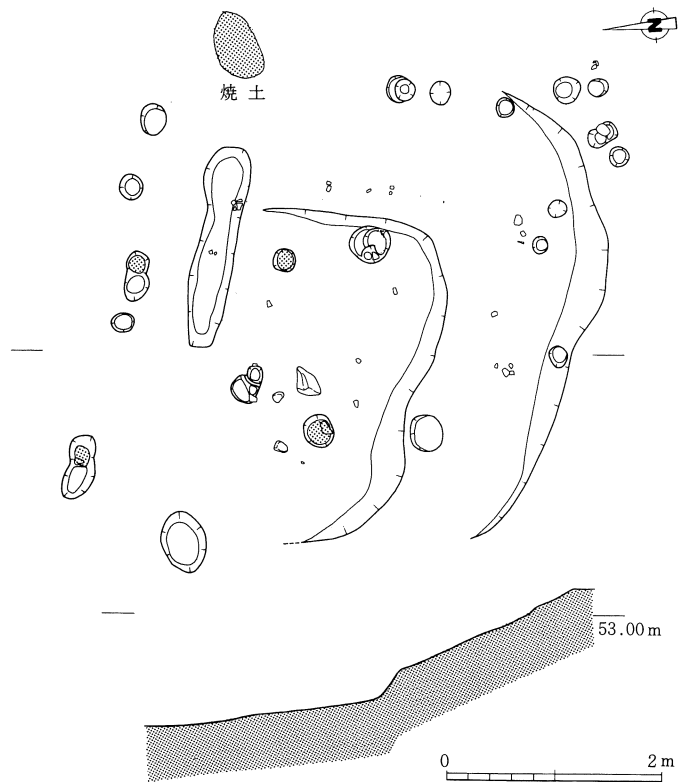
本竪穴はSB2の東側約13mの標高50mを測る北斜面に位置する。この位置は遺構群の最北端にあたる。北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面はほぼ楕円の弧状を呈している。現存部分で南北径約1.7m+ α 、東西径1.9m、現存部分の南壁高は約15cmを測り、ほぼ50°の緩い傾斜で立ち上がる。床面は北方向に35°のやや急な傾斜を持つ。床面には炭化物の詰まった小土坑が西側に見られた。ピットは屋内に9個、壁面に3個数える。確実に本住居跡に付随すると思われるピットは壁際の5個と考えられる。

遺物の出土はほとんどなく、図示できない弥生土器甕胴部片1点が認められたのみである。

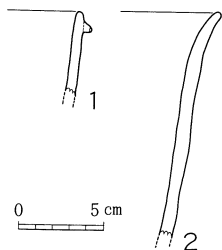
SB4 (第4図)

本竪穴はSB3の南側約4mの標高53.5~54mを測る丘陵平坦地の北斜面に位置する。上面は削平が激しく、南東壁は欠損する。その結果現存平面はほぼ楕円の弧状を呈している。現存部分で南北径約3.35m、東西径2.6m、現存部分の南壁高は約10cmを測り、ほぼ90°の急な傾斜で立ち上がる。床面は北方向に15~30°のやや急な傾斜を持つ。床面には焼土、焼石、炭化物の混ざった土坑が床面ほぼ中央に2個見られた。この土坑の規模は北側のものは長径80cm、短径45cm以上、南側のものは長径100cm、短径70cmのともに不定形土坑で南側土坑が北側土坑をカットしている。ピットは屋内に1個確認されたのみである。このピットの覆土上面には炭化層が認められた。

遺物の出土はほとんどなく、図示できない弥生土器甕胴部片5点が認められたのみである。



第5図 森山SB5平・断面図



第6図 森山SB5出土土器実測図

SB5 (第5図)

本竪穴はSB3の東側約1mの標高52~53mを測る北斜面にあり、SB3に隣接して位置する。南側に弧状の掘り込みを持つテラス状遺構を付設した隅丸方形のものである。

テラス状遺構は長さ4.1m、最深0.3mを測り、約20°の傾斜で竪穴を囲む。竪穴はテラスのやや西側に位置する。北壁および西壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面はコ字状を呈している。現存部分で東壁1.7m、南壁2.75m、西壁0.7m、現存部分の南壁高は約25cmを測り、ほぼ45°の緩い傾斜で立ち上がる。

床面は北方向に10°のやや緩い傾斜を持つ。竪穴の東壁北側脇に長さ1.9m、幅0.4m、深さ15cmの隅丸長方形の土坑が、同じく東壁の西側に長さ70cm、幅40cmの楕円形の焼土がそれぞれ確認された。焼土は竪穴との位置関係から屋外炉の可能性が大きい。ピットはテラスに6個、テラス壁に1個、竪穴内に8個、屋外に6個数える。確実に本住居跡に付随すると思われるピットは位置等から4個で、4本柱主柱穴の竪穴住居跡と考えられる。

遺物の出土は少量でテラス状遺構より甕(下城式土器)口縁部片1点が、竪穴内ピットより甕口縁部片ほか弥生土器片20点前後が認められた。

第2表 森山SB5出土土器観察表

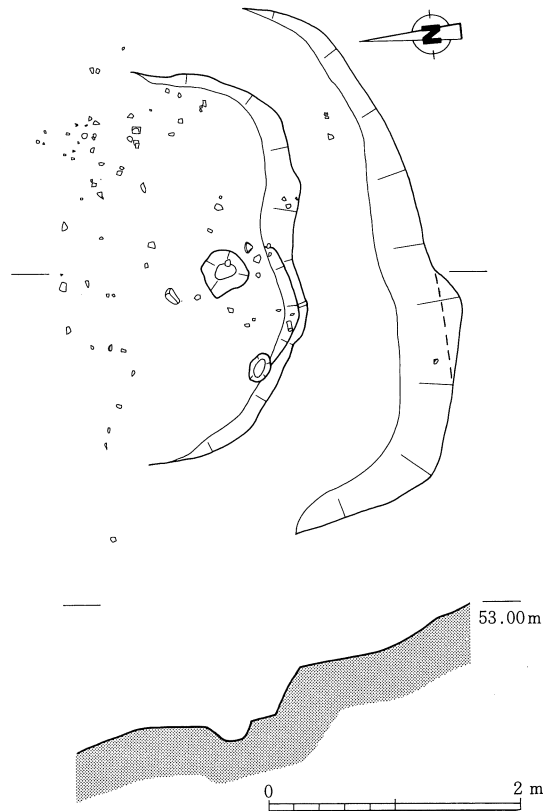
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
6図-1		甕	—	—	—	—	—	内面→不明 外面→ナデ、タテハケ	角閃石、白色石粒を含む	暗茶褐色
同-2		甕	—	—	—	—	—	不明	角閃石粒を含む	茶褐色

SB6 (第7図)

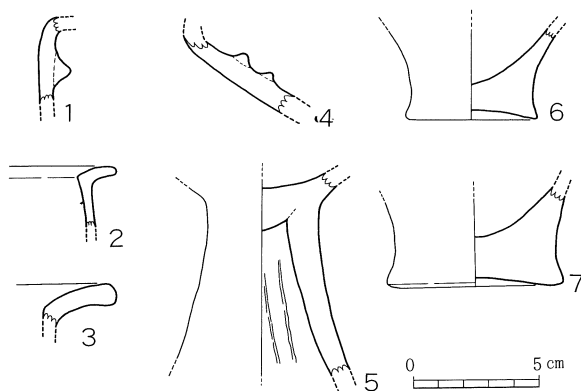
本竪穴はSB5の東側約3mの標高52~53mを測る丘陵北斜面SB5に隣接して位置する。南側にコ字状の掘り込みを持つテラス状遺構を付設した竪穴住居跡である。

テラス状遺構の長さは、東壁長0.5m、南壁長3.6m、西壁長1.3m、南壁高20cmを測り、約30°の傾斜で竪穴を囲む。竪穴はテラスのほぼ中央に位置する。東西壁の一部および北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面はコ字状を呈している。現存部分で東壁長1.3m、南壁長2.5m、西壁長0.9m、現存部分の南壁高は約25cmを測り、ほぼ75°の急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ水平である。焼土、炭化物層などは認められない。ピットは竪穴内に1個、壁ぎわに1個検出されたが、住居跡に付随するピットかどうかは明確でない。

遺物の出土は少量で甕口縁部片、同底部片、壺胴部片、高坏脚部片ほか弥生土器片20点前後と打製石鏃1点が認められた。



第7図 森山SB6平・断面図



第8図 森山SB6出土土器実測図

第3表 森山SB6出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
8図-1		甕胴上半					不明	白色砂粒を含む	茶褐色
同-2		甕口縁片					同上	精緻である	黄褐色
同-3		同上					同上	同上	同上
同-4		壺胴上半					内面→ヘラケンマ 外面→ナデ	角閃石粒を含む	淡褐色
同-5		高坏脚部					不明	角閃石粒を若干含むが精緻	黄褐色
同-6		甕底部?				5.3	同上	同上	淡橙色
同-7		同上				7.1	同上	精緻である	赤味を帯びた茶褐色

SB7 (第9図)

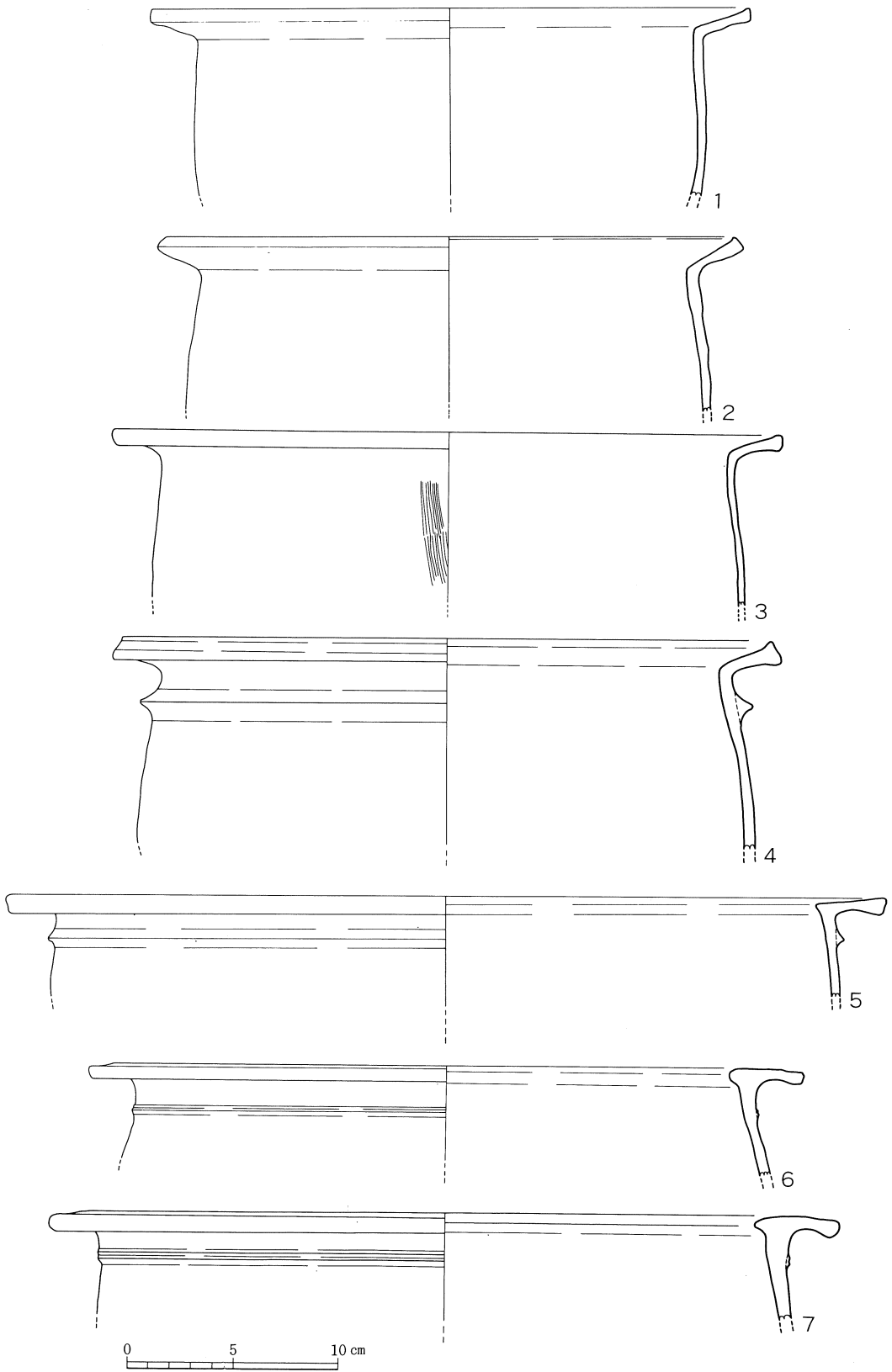
本竪穴はSB6の北側約7mの標高56m前後を測る丘陵西側の頂部平坦面に位置する。上部は削平されており、北壁は斜面になるため流失している。その結果現存平面はやや胴張りの隅丸方形を呈している。現存部分で東壁長4.5m、南壁長2.7m、西壁長4.3m、現存部分の南壁高は約15cmを測り、ほぼ50°の緩い傾斜で立ち上がる。床面は北方向に8°の緩やかな傾斜を持つ。床面東・西壁ぎわの中央よりやや北側に小土坑が検出された。東側の土坑は長さ1.4m、幅0.5m、深さ20cmを測り、土坑内からは多量の弥生土器片に混じって硬玉製管玉1個が発見された。西側の土坑は長さ1.0m、幅0.5m、深さ10cmを測り、土坑内には炭化物が詰まっていた。

ピットは屋内に5個を数える。確実に本住居跡に付随すると思われるピットは中央の1個のみで他のピットは不明である。

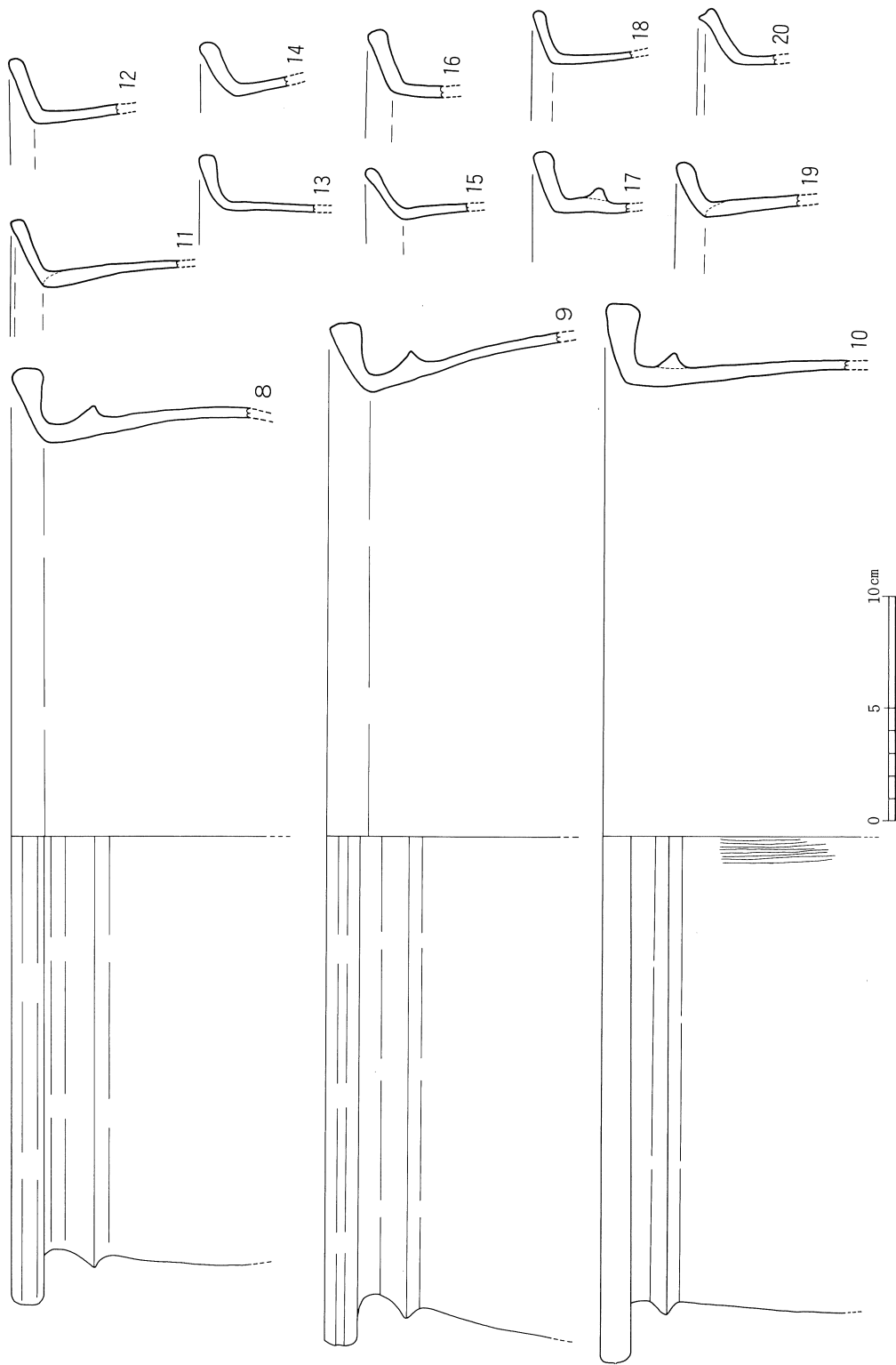
遺物の出土は竪穴の中央より東側に集中し、壺片、甕片、高坏片、長頸壺片など弥生土器片500点前後と磨製の石包丁型石器1点、打製石鏃6点、スクレーパー1点、石皿1点が認められた。



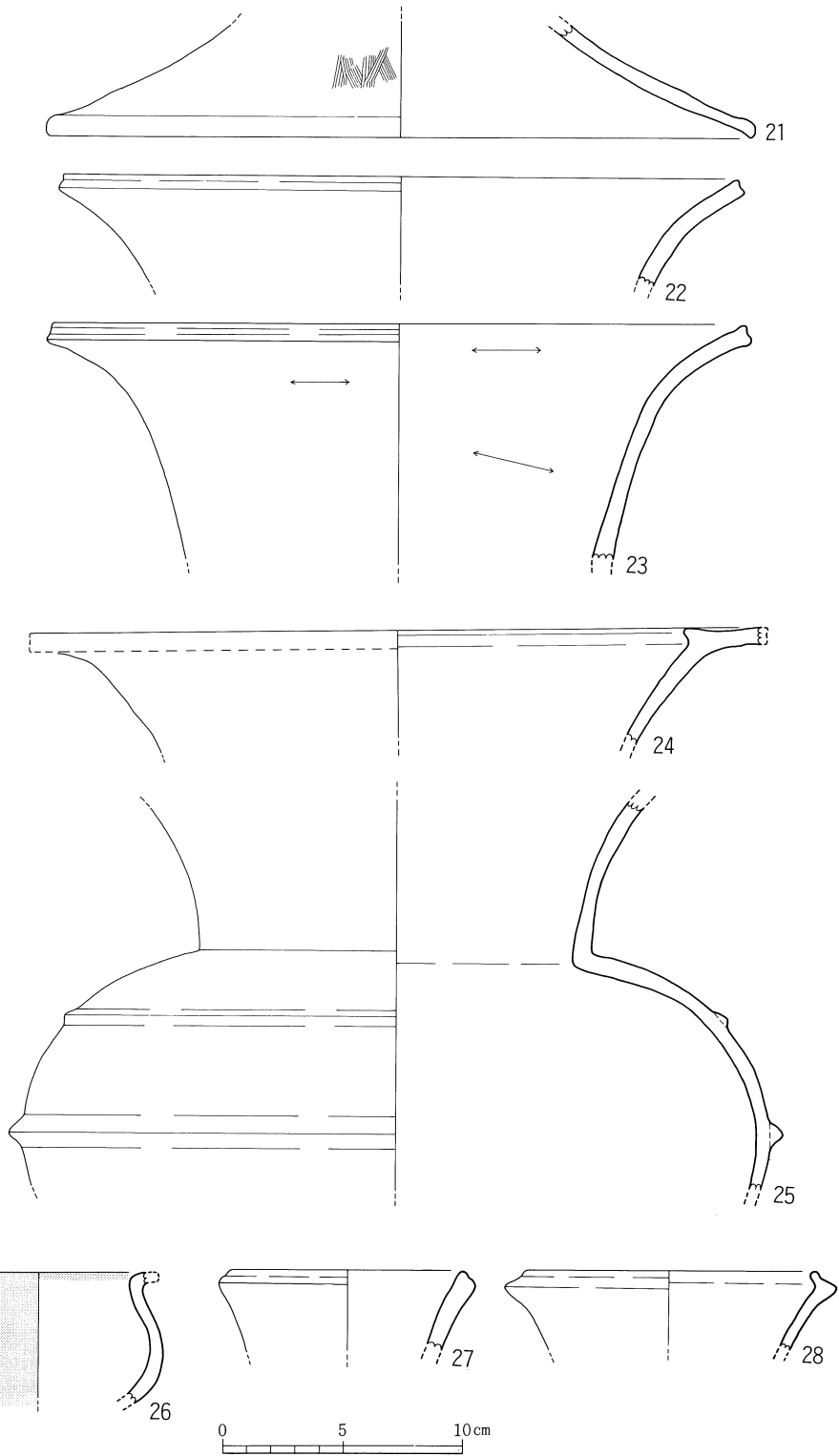
第9図 森山SB7平・断面図



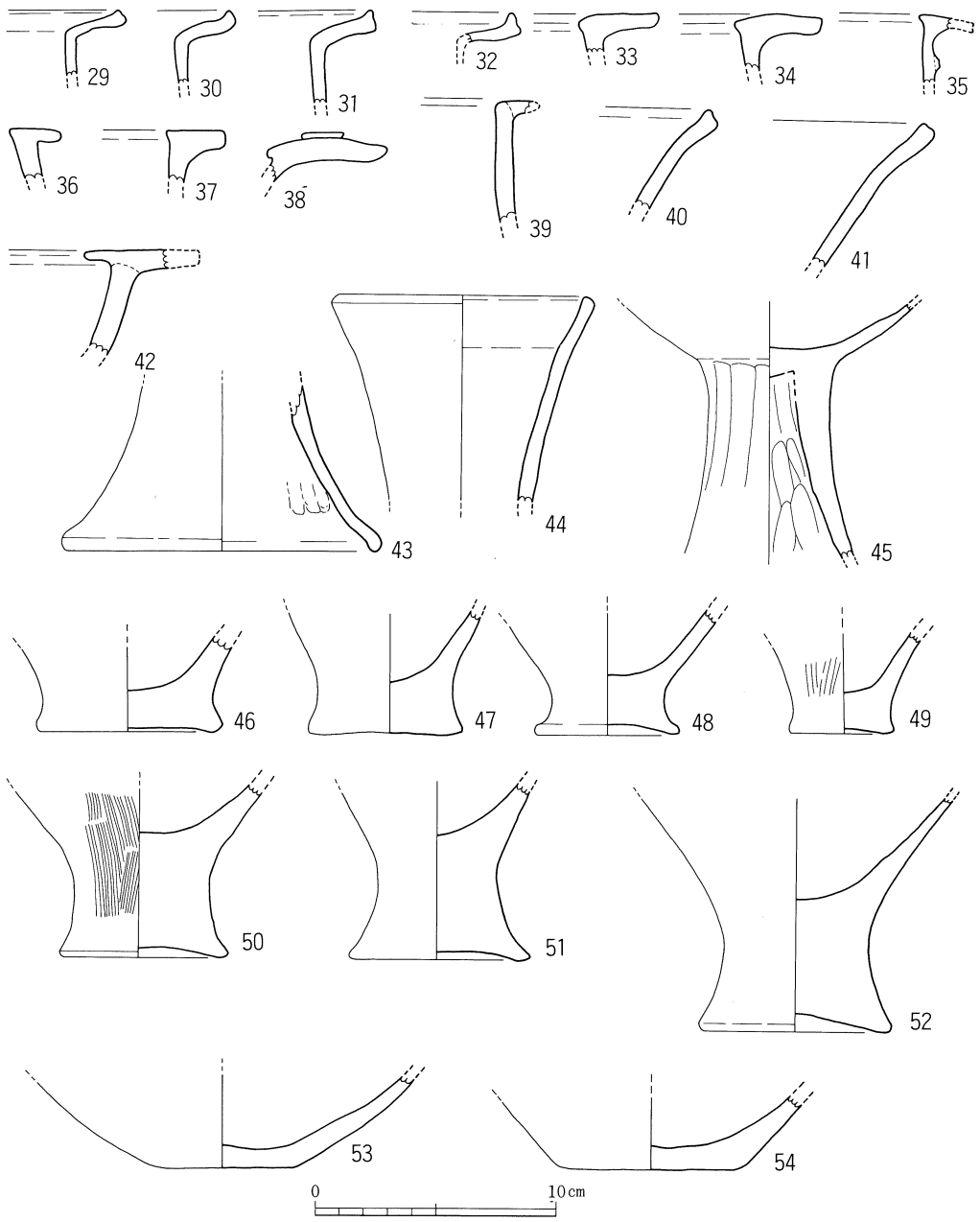
第10図 森山S B 7 出土土器実測図(1)



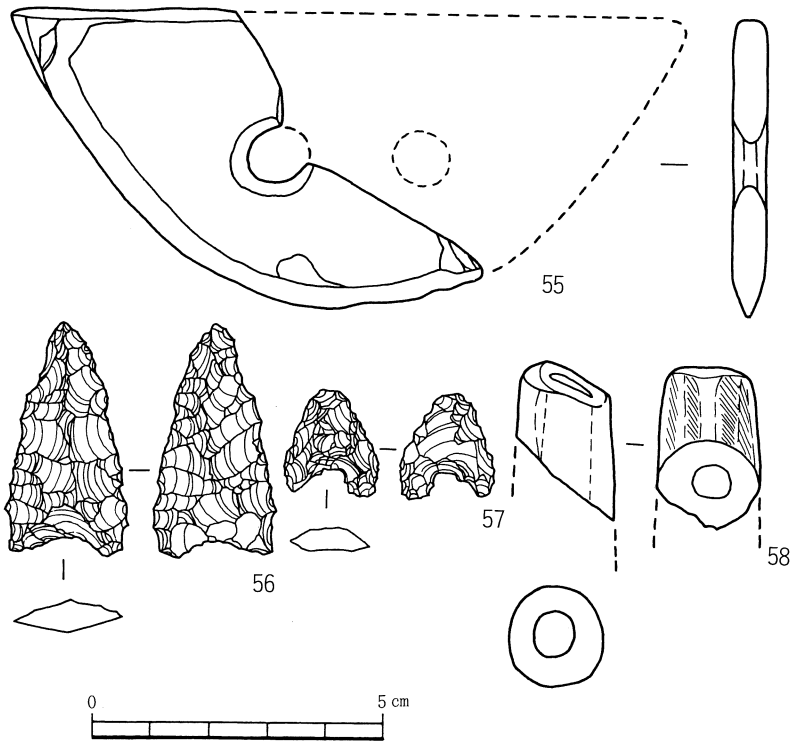
第11图 森山S B 7 出土土器实测图(2)



第12图 森山S B 7 出土土器实测图(3)



第13图 森山S B 7 出土土器实测图(4)



第14図 森山S B 7 出土石器実測図

第4表 森山S B 7 出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	量 (cm) () の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
10図-1		甕	(29)	24.5			内面→ケンマ? 外面口縁→ヨコナデ、胴部→細いハケ	角閃石粒を含む	茶褐色	
同-2		同上	(27.3)	24			不明	同上	同上	
同-3		同上	(32.1)	27.5			内面胴部→ナデ、内外面口縁部→ヨコナデ、胴部→細いハケ	角閃石、石英粒を多く含む	内、断面 淡黒色 外面 淡灰褐色	
同-4		同上	(31)	27.5			不明	角閃石、白色の石粒を含む	内、外面 褐色 断面 黒色	
同-5		同上	(42)	37			同上	角閃石粒を含む	茶褐色	
同-6		同上	(34)	30			同上	角閃石、石英粒を多く含む	淡褐色	
同-7		同上	(38)	33.5			同上	同上	褐色	
11図-8		同上	(41)	37.4			同上	角閃石、黒色の石粒を含む	黄褐色	
同-9		同上	(45.5)	41.5			同上	角閃石、石英粒を多く含む	淡褐色	
同-10		同上	(47.5)	42			内面胴部→ナデ、内外口縁胴部→上半ヨコナデ、外面胴部→ハケ	角閃石粒を多く含む	同上	
同-11		甕口縁片					内面胴部→ケンマ、内外口縁→ヨコナデ	角閃石、石英粒を含む	淡黄褐色	
同-12		同上					内面胴部→ケンマ	石英砂粒を含む	褐色	
同-13		同上					不明	同上	淡黄褐色	
同-14		同上					内外面→ナデ	角閃石、石英粒含むが精緻	淡棕色	
同-15		同上					不明	角閃石、石英粒を多く含む	赤褐色	
同-16		同上					同上	石英粒含むが精緻	淡褐色	
同-17		同上					内外面→ヨコナデ	同上	褐色	
同-18		同上					不明	白色砂粒を多く含む	褐色～淡黄褐色	
同-19		同上					内面→ケンマ、外面口縁→ナデ、外面胴部→ハケ目	角閃石粒含むが精緻	淡褐色	
同-20		同上					不明	精緻である	黄褐色	
12図-21		壺蓋?	(30.5)				内面→ケンマ? 外面→ナデ～ハケ目	角閃石、雲母粒を含む	淡褐色	
同-22		壺	(28.5)				内外面→ケンマ	角閃石、石英粒を多く含む	褐色	

第4表 森山SB7出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) () の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
12図-23		壺	(29.5)					内外面→ケンマ	角閃石、石英粒を多く含む	淡褐色(内外表面に赤色顔料混認める)
同-24		同上	(31.0)					同上	角閃石粒を多く含む	淡褐色
同-25		同上		(16.8)				内面頸部→ナデ、外面→ナデ	角閃石、石英粒を含む	濃黄褐色
同-26		小壺	(10)					内外面→ケンマ?	角閃石粒を若干含むが精緻	明褐色(口縁部内面および外面全体に赤色顔料塗布)
同-27		長頸壺	(11)					不明	同上	明褐色
同-28		長頸壺?	(12)					同上	石英砂粒を多く含む	赤褐色
13図-29		甕口縁片						内面→不明 外面→ナデ	角閃石粒含むが精緻	赤褐色
同-30		同上						内外面→ナデ	角閃石粒を多く含む	淡黄褐色
同-31		同上						不明	白色の石粒を多く含む	黄褐色
同-32		同上						内外面→ナデ	角閃石粒を多く含む	淡褐色
同-33		同上						不明	角閃石粒を含むが精緻	淡黄褐色
同-34		同上						同上	角閃石、石英、白色の砂粒を多く含む	明褐色
同-35		同上						同上	角閃石粒を多く含む	黄褐色
同-36		同上						内面→ケンマ 外面→ユビオサエ、ナデ	角閃石粒含むが精緻	褐色
同-37		同上						内外面→ナデ、口縁外面にユビオサエ痕有	同上	淡褐色
同-38		壺口縁片						内外面→ケンマ	角閃石、石英粒を含むが精緻	明褐色
同-39		甕口縁片						不明	角閃石粒を多く含む	淡褐色
同-40		壺口縁片						内外面→ケンマ	角閃石、石英粒を多く含む	同上
同-41		同上						内面→外面口縁部→ナデ、外面→ハケ	同上	同上
同-42		高環口縁部片						不明	角閃石、石英粒を含むが精緻	黄褐色(口縁上面に赤色顔料塗布)
同-43		高環脚部片				(13.5)		不明(内面にユビオサエ痕有)	角閃石、白色の石粒を多く含む	淡褐色
同-44		長頸壺口縁片	(11)					内面→ナデ、外面→不明	角閃石を含むが精緻	黄褐色～赤褐色
同-45		高環片		(5.5)				脚部内面→ナデ、シボリ、 外面→ケンマ、部内外面→ナデ	角閃石粒などの砂粒を多く含む	黄褐色
同-46		底部					8.0	不明	角閃石粒を多く含む	明茶褐色
同-47		同上					6.5	同上	同上	茶褐色
同-48		同上					6.0	同上	同上	淡黄褐色～赤褐色
同-49		同上					4.5	内面→ナデ、外面→荒いハケ ナデ	角閃石、白色の石粒を含む	黄褐色
同-50		同上					7.2	内面→不明、外面→ハケ、ナデ	角閃石、石英、斜長石を含む	黄褐色～赤褐色
同-51		同上					7.8	不明	角閃石粒を含む	茶褐色
同-52		同上					8.2	同上	同上	赤褐色～黄褐色
同-53		同上					6.0	内面→ナデ、外面底部→ナデ、胴部→ケンマ	石英、角閃石、雲母粒を含む	内断面→黒色、外面→明褐色
同-54		同上					7.8	不明	角閃石粒を多く含む	内面→明茶褐色、断外面→黒色

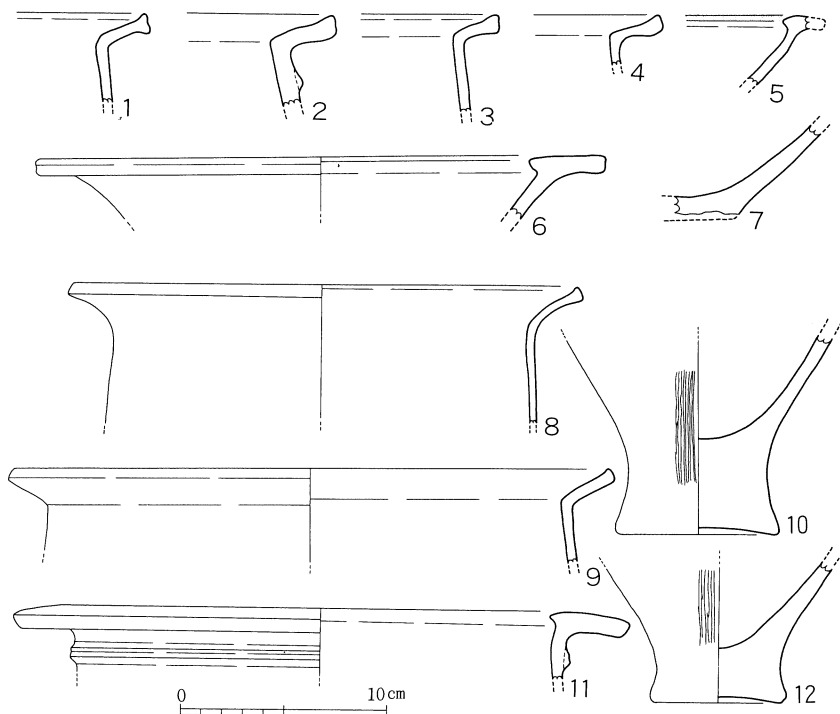
第5表 森山SB7出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	備考
14図-55		石包丁型石器	結晶片岩?	全面にローリングして磨滅著しい
同-56		石鏃	姫島産黒曜石	凹基式
同-57		石鏃	〃	同上
同-58		管玉	硬玉	

S B 8

本竪穴は標高53~54mを測る舌状丘陵中央やや西側の北斜面に位置する。上面のテラス状遺構、東西壁および北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面はほぼ隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約0.9m、南壁辺2.1m、西壁辺0.7m+ α 、現存部分の南壁高は約10cmを測り、ほぼ50°の緩い傾斜で立ち上がる。床面は北方向に30°の急な傾斜を持つ。床面には炭化物、焼土、ピットは見られないこと、竪穴の規模が小さいことなどから住居跡と認定できるかは不明である。

遺物の出土は竪穴内およびその周辺に密集し甕、高坏などの弥生土器片200数点が認められた。



第15図 森山SB8出土土器実測図

第6表 森山SB8出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
15図-1		甕口縁片						不明	角閃石粒を多く含む	淡褐色
同-2		同上						同上	角閃石粒を含むが精緻	内外面→黄褐色、 断面→黒色
同-3		同上						同上	角閃石、石英粒を含む	黄褐色
同-4		同上						同上	角閃石粒を含む	同上
同-5		高坏口縁片						内面→ケンマ 外面→不明	同上	褐色
同-6		同上	(28)					内外面環部→ケンマ 口縁部→ヨコナデ	角閃石、長石粒を含む	同上
同-7		底部片						不明	石英、雲母粒を多く含む	黄褐色
同-8		甕	(24.5)					同上	角閃石粒を多く含む	淡褐色
同-9		甕	(29.5)					同上	角閃石、白色の石粒を多含む	褐色
同-10		底部				8.0		内面→ナデ 外面→ハケ、ナデ	角閃石粒を多く含む	暗褐色
同-11		甕	(30.5)					不明	角閃石、白色の石粒を含む	黄褐色
同-12		底部				6.5		内面→ナデ 外面→荒いハケ、ナデ	角閃石粒を含む	褐色

SB 9 (第16図)

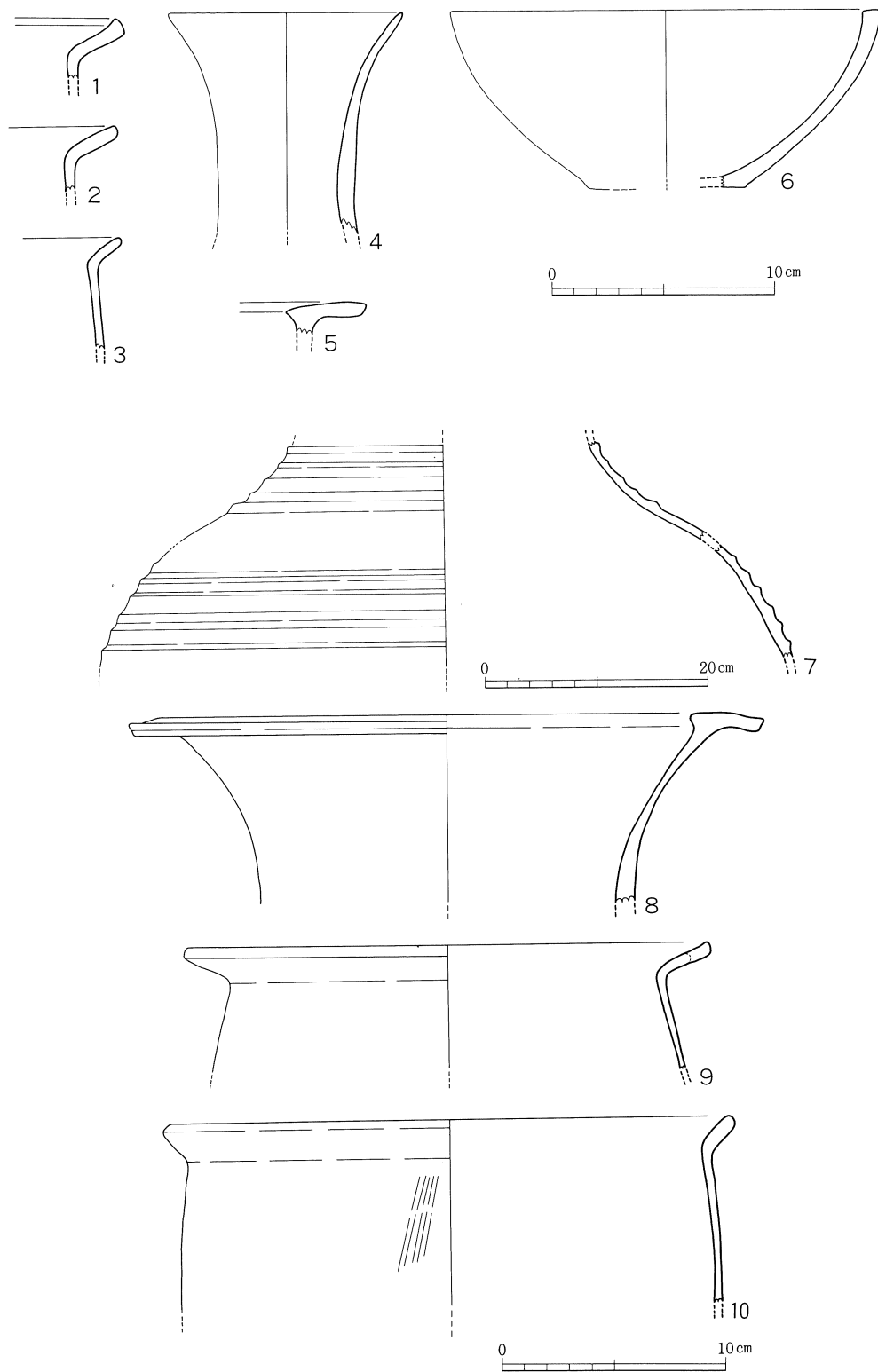
本竪穴は舌状丘陵のほぼ中央よりやや西側の北斜面、標高54mに位置する。この位置はSB 8の東約10mにあたる。東壁・西壁の一部および北壁は斜面が急なため流失している。その結果、現存平面はほぼ隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約1.6m + α 、南壁辺3.5m、西壁辺2.5m + α 、現存部分の南壁高は約30cmを測り、ほぼ70°の急な傾斜で立ち上がる。床面は北方向に10°のやや緩やかな傾斜を持つ。東壁と南壁東側に壁溝が、西壁北端に水抜きと考えられる長さ1.6m、幅0.6m、深さ10cmの土坑が付設されている。南壁ぎわ床面中央には径60cm、深さ10cmの浅い皿状の土坑が検出され、これを挟んで東西に焼土が見られた。ピットは屋内に20個前後を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットは位置等から2個で、2本柱主柱穴の竪穴住居跡と考えられる。

遺物の出土は竪穴の南側に集中し、壺、甕、長頸壺、鉢などの弥生土器片多数と太形蛤刃石

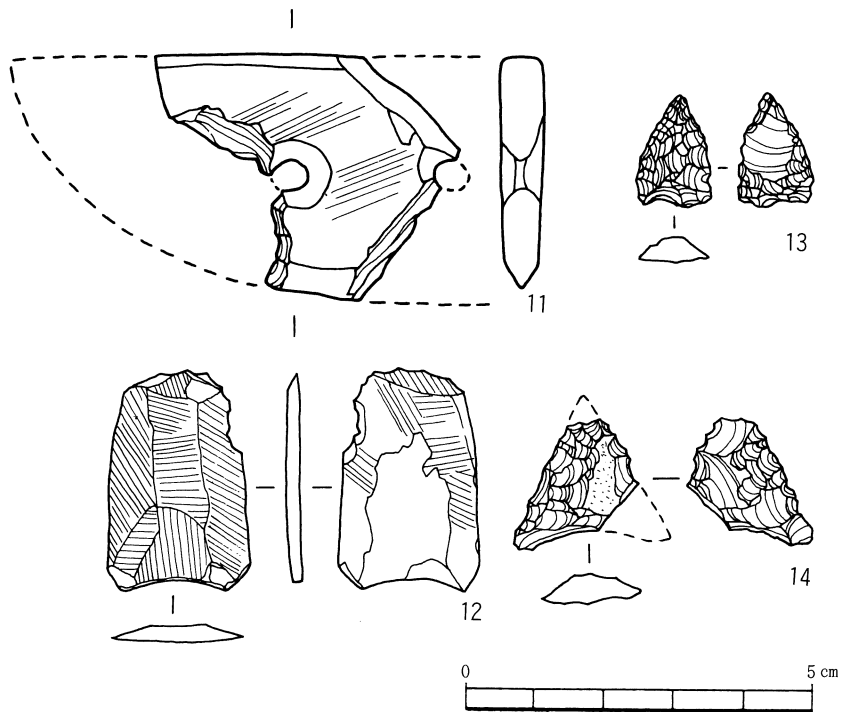
斧1点、石包丁型石器1点、砥石1点、磨石2点、凹石2点、石皿1点、磨製石鏃1点、打製石鏃3点が認められた。



第16図 森山SB 9平・断面図



第17图 森山SB 9 出土土器实测图



第18図 森山SB9出土石器実測図
第7表 森山SB9出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
17図-1		甕口縁					不明	角閃石粒含む	黄褐色
同-2		同上					〃	石英・角閃石粒含む	暗褐色
同-3		同上					〃	角閃石粒含む	内外面→赤褐色、断面→黒色
同-4		長頸壺口縁	(10.6)				〃	角閃石粒多く含む	淡橙色
同-5		壺口縁					〃	石英・雲母粒含む	黄褐色
同-6		鉢	(19.4)			(7.2) (8.0)	内外面→ケンマ	大粒の石英粒を含む	茶褐色
同-7		壺胴部			(62)		不明	角閃石粒を少量含む	黄褐色
同-8		壺口縁	(22)					同上	同上
同-9		甕口縁	(23)					同上	同上
同-10		同上	(25)					同上	同上

第8表 森山SB9出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
18図-11		石包丁型石器	硬質砂岩	9.6	半月型
同-12		磨製石鏃	頁岩	2.6	先端部欠損
同-13		打製石鏃	姫島産黒羅石	0.6	小型で雑な作り。平基式
同-14		同上	腰岳産黒羅石	1.0	凹基式。基部の一部欠損

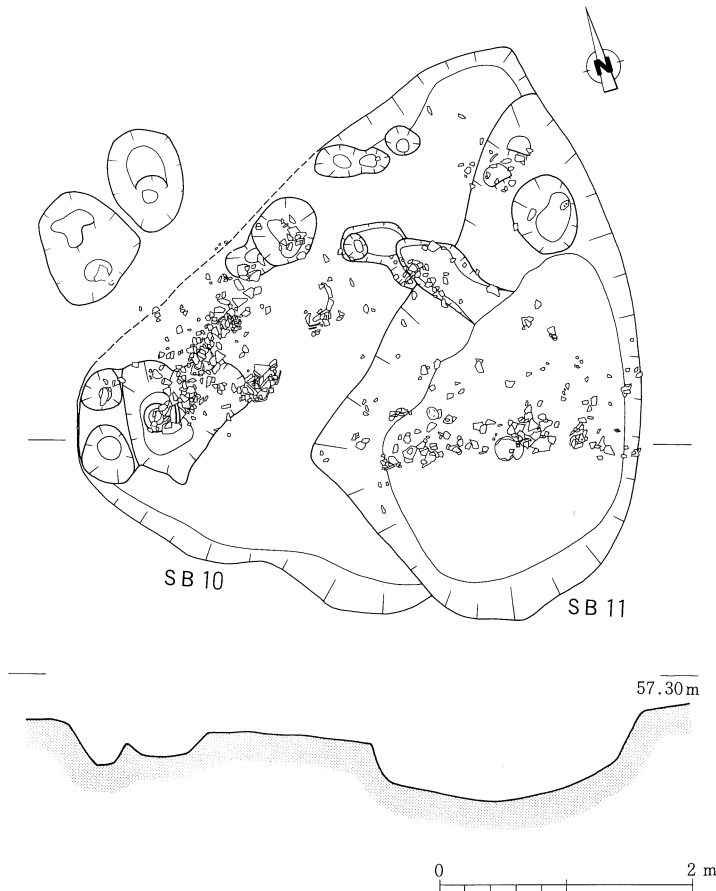
SB10・11 (第19図)

本竪穴跡はSB7の南東側約11mの標高57mを測る丘陵頂部平坦地に位置する。上面は削平が激しく、SB10の北西壁の一部は欠損する。また、SB10の南東側はSB11によってカットされている。SB10はやや不定形の長方形で、現存部分の規模で西壁辺3.2m、北壁辺4.8m、東壁辺0.4m + α 、現存部分の西壁高は約10cmを測り、ほぼ50°の緩やかな傾斜で立ち上がる。床面の南西コーナー付近に長さ1.0m、幅0.7m、深さ30cmの不定形の土坑が検出された。ピットは屋内の北壁ぎわに5個確認されたが、確実に本竪穴にともなうものか明確でない。

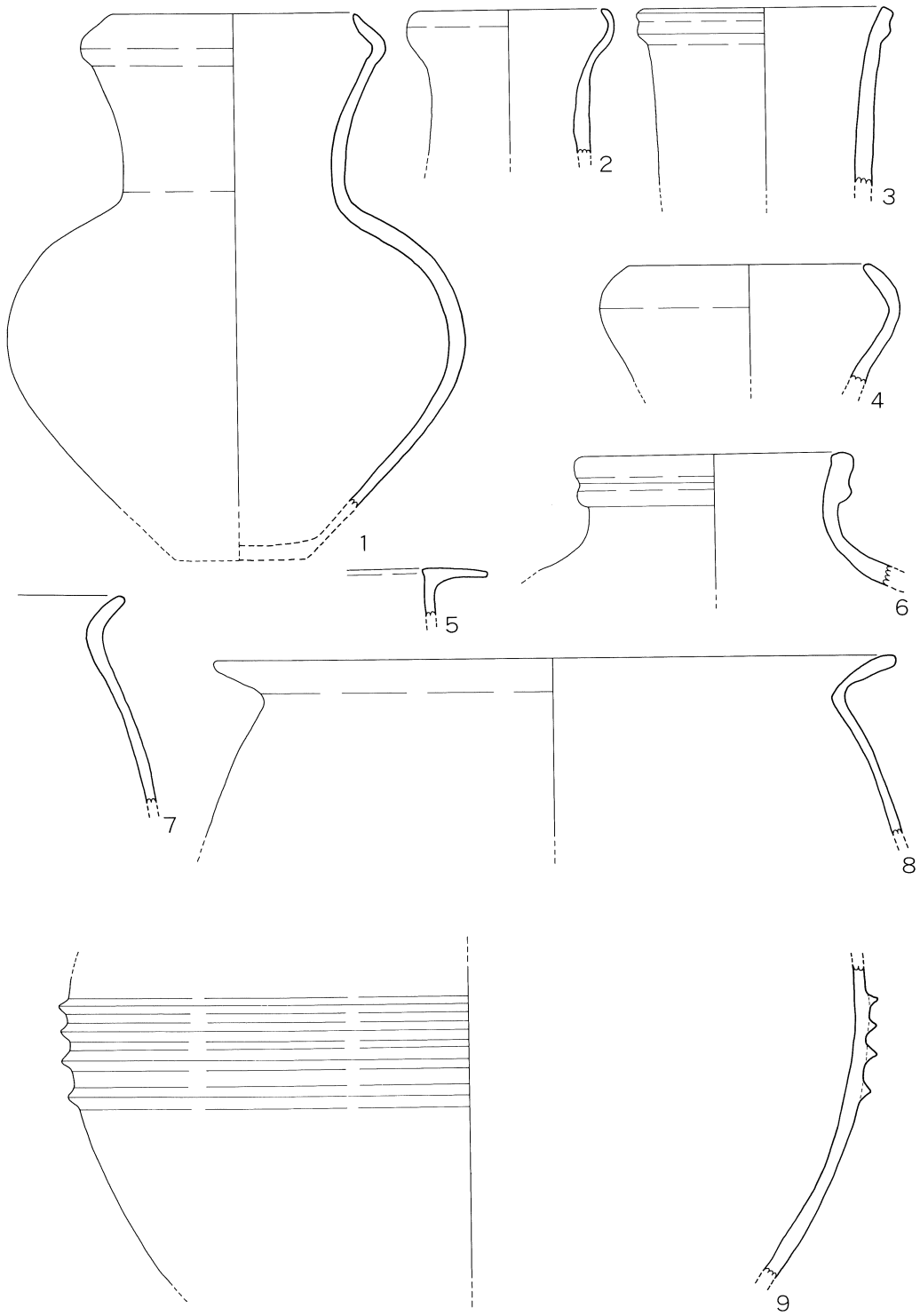
遺物の出土は南西コーナーの土坑付近に集中し、壺、甕、袋状口縁壺、長頸壺などの弥生土器片多数と石包丁型石器片2点、砥石1点、磨石1点、石皿1点が認められた。

SB11は長さ4.2m、幅2.6mの平面卵倒形を呈し、壁高は30cmを測り、70°のやや急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦であり、焼土、炭化物は認められなかった。ピットは、北側壁内に1個確認された。この竪穴は形状から見て住居跡と見るよりも貯蔵穴あるいは土坑と考えられよう。

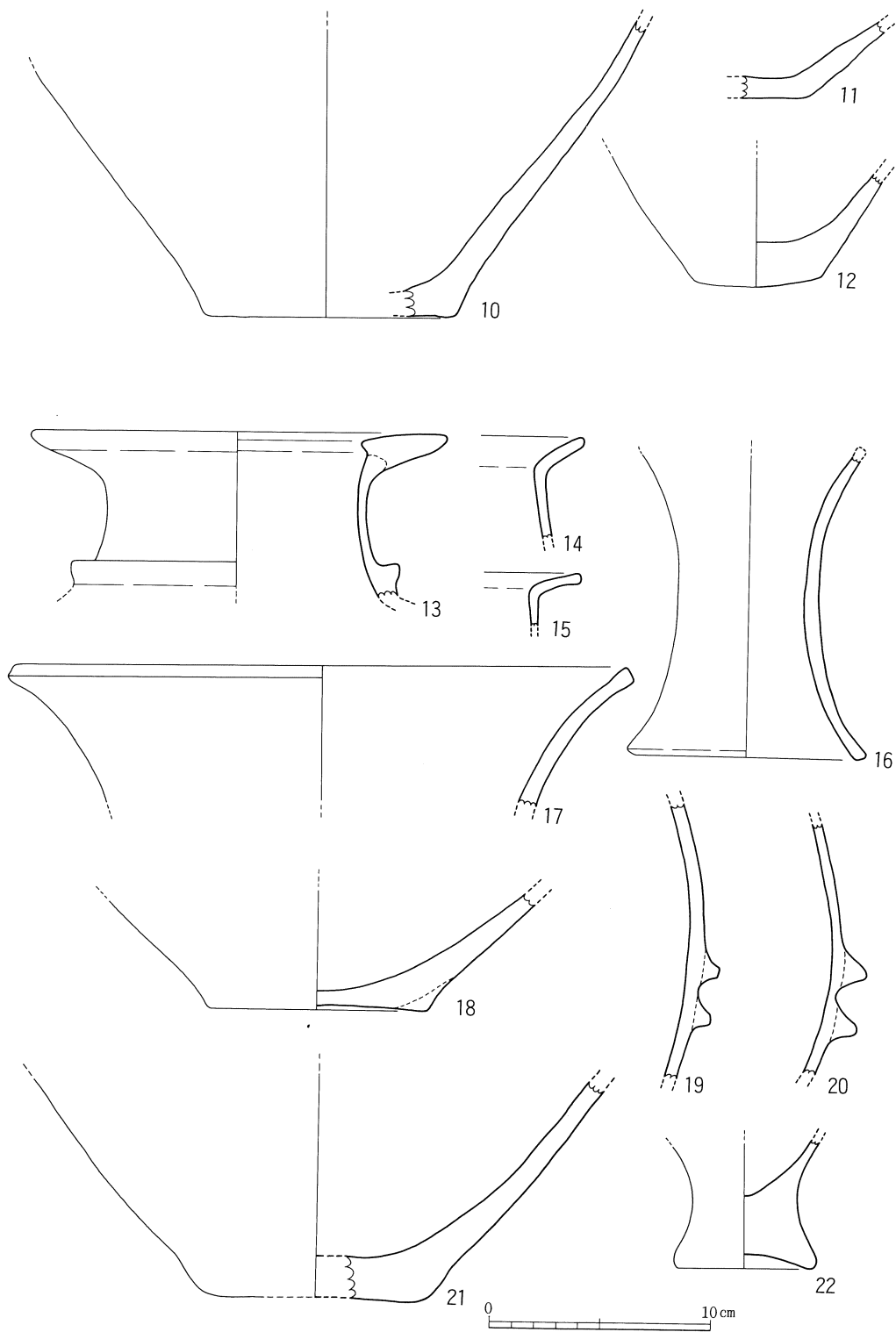
遺物の出土は竪穴中央付近に集中し、壺、甕、袋状口縁壺、器台などの弥生土器片200点前後が認められた。



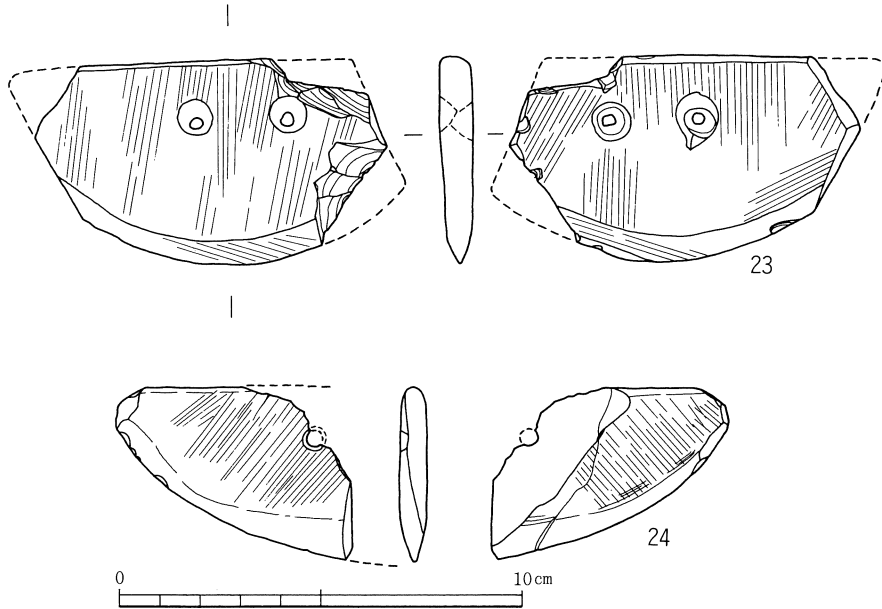
第19図 森山SB10・11平・断面図



第20図 森山S B11出土土器実測図(1)



第21図 森山S B10・11出土土器実測図(10~12はS B11、13~22はS B10)



第22図 森山S B10出土石器実測図

第9表 森山S B10・11出土土器観察表

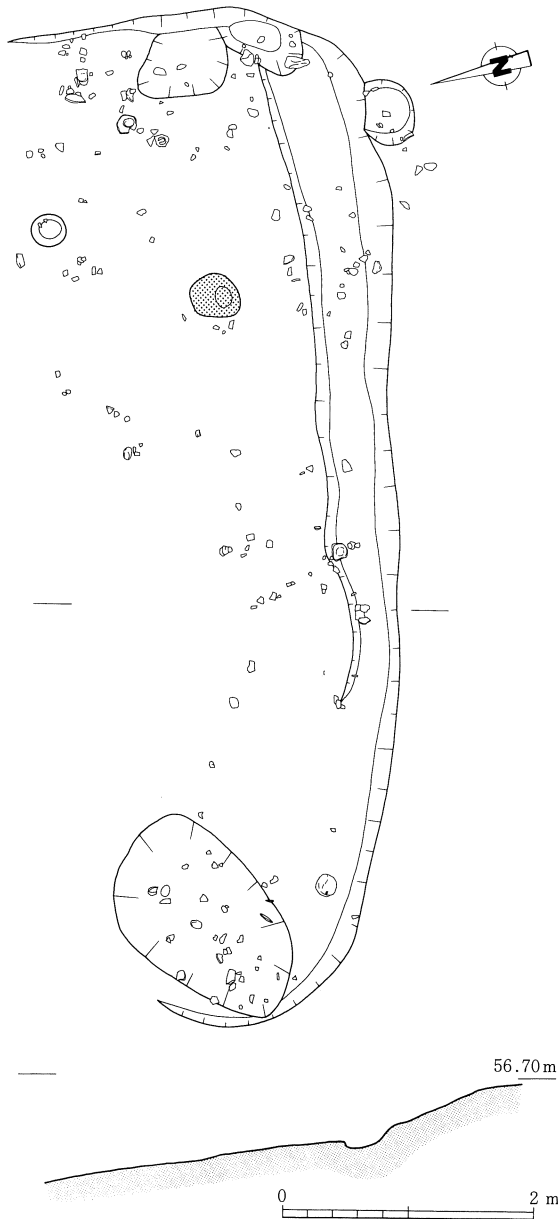
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
20図-1		袋状口縁壺	(11)	(10.3)	(20.5)			不明	角閃石、石英粒を多く含む	暗褐色
同-2		同上口縁部	(8.0)					ナデ?	石英、白色の石粒を含む	内・断面→淡灰褐色 外面→灰黑色
同-3		長頸壺口縁	(11)					不明	角閃石、石英粒を含む	内・外面→黄褐色 断面→黑色
同-4		袋状口縁壺口縁	(11)					同上	角閃石、白色の石粒含む	明褐色
同-5		甕口縁片						同上	角閃石粒含むが精緻	同上
同-6		長頸壺口縁	(12.8)	(12.5)				同上	石英粒含み荒い	同上
同-7		甕口縁片						同上	角閃石粒含む	内・断面→褐→暗褐色 外面→赤褐色
同-8		甕口縁	(30.8)	(26.4)				同上	石英、白色の石粒を多く含む	明褐色
同-9		壺胴部片			(37.5)			同上	角閃石、白色の石粒を多く含む	内面→黄褐→暗褐色 外面→淡褐色
21図-10		底部				(11.5)		同上	石英粒を多く含む	内面→黑色 外面→淡黄褐色
同-11		底部片						同上	石英、白色の石粒を多く含む	淡褐色
同-12		底部				6.2		同上	角閃石粒、含むが精緻	淡橙色で外部一部黒色
同-13		壺口縁	(19)	(13)				同上	石英粒を多く含む	内・外面→赤褐色 断面→黑色
同-14		甕口縁片						同上	角閃石、長石粒を含む	暗褐色
同-15		同上						同上	白色石粒を多く含む	内・断面→黒色 外面→黄褐色
同-16		器台			(6.5)	11		同上	角閃石、白色の石粒を多く含む	茶褐色
同-17		壺口縁	(28.5)					同上	角閃石、石英粒を含む	黄褐色
同-18		壺底部				10.2		内面→ナデ、外面→ケンマ	雲母、石英粒を含むが精緻	内面→黒色 外断面→淡褐色
同-19		壺胴部片						調整不明	雲母、石英粒を含むが精緻	内面→黒色 外断面→淡褐色
同-20		同上						同上	石英粒を含む	茶褐色
同-21		壺底部				(10.2)		同上	角閃石、長石、石英粒を多く含む	黄褐色
同-22		甕底部				6.6		同上	角閃石粒を含む	内面→黒色 外断面→褐色

第10表 森山S B10出土石器実測図

番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
22図-23		石包丁形石器	硬質砂岩	44.7	半月形石包丁形石器
同-24		同上	頁 岩	17.1	半月形石包丁形石器

S B12 (第23図)

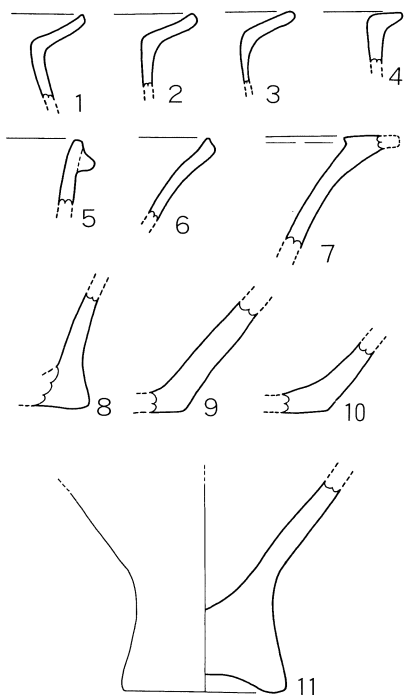
本竪穴は舌状丘陵のほぼ中央よりやや西側の北斜面、標高55～56.5mに位置する。この位置はS B 9の南約5mにあたる。東壁・西壁の一部および北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面はほぼ隅丸のコ字状を呈している。東壁はS K11号土坑が埋った後掘り込まれ、東壁辺約 $2.8\text{m} + \alpha$ 、南壁辺7.5m、西壁辺 $1.5\text{m} + \alpha$ 、現存部分の南壁高は約10cmを測り、ほぼ 50° の緩やかな傾斜で立ち上がる。床面は北方向に 10° のやや緩やかな傾斜を持つ。南壁の中央から東側にかけて幅35cm、深さ5cmの壁溝が付設されている。東壁ぎわ床面には長さ80cm、幅50cm、深さ20cmの不定形な浅い皿状の、西壁ぎわには長さ165cm、幅110cm、深さ30cmの楕円形で浅い皿状の土坑がそれぞれ検出された。床面には焼土、炭化物等は認められなかった。ピットは屋内に2個、壁に1個を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットかは明確でない。



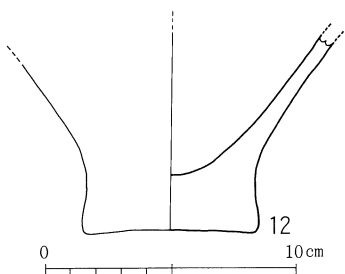
第23図 森山S B12平・断面図

中央から東側にかけて幅35cm、深さ5cmの壁溝が付設されている。東壁ぎわ床面には長さ80cm、幅50cm、深さ20cmの不定形な浅い皿状の、西壁ぎわには長さ165cm、幅110cm、深さ30cmの楕円形で浅い皿状の土坑がそれぞれ検出された。床面には焼土、炭化物等は認められなかった。ピットは屋内に2個、壁に1個を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットかは明確でない。

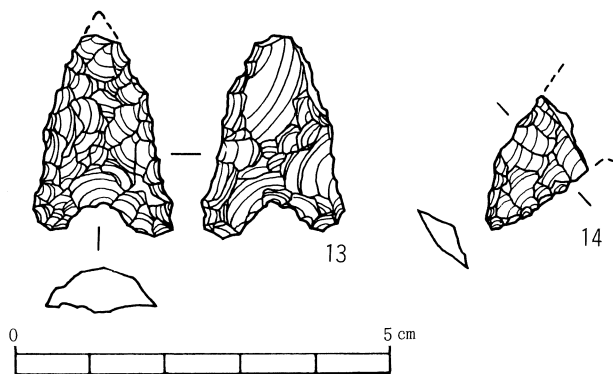
遺物の出土は竪穴全体に土器の小片が散乱するが、特に東西の土坑にはやや纏まって出土した。器種は甕、高杯などの弥生土器片100点前後と打製石鏃2点、砥石1点、敲石2点、石皿1点、石核1点、偏平打製石斧3点が認められた。



第24図 森山S B12出土土器実測図



第24図 森山S B12出土土器実測図



第25図 森山S B12出土石器実測図

第11表 森山S B12出土土器観察表

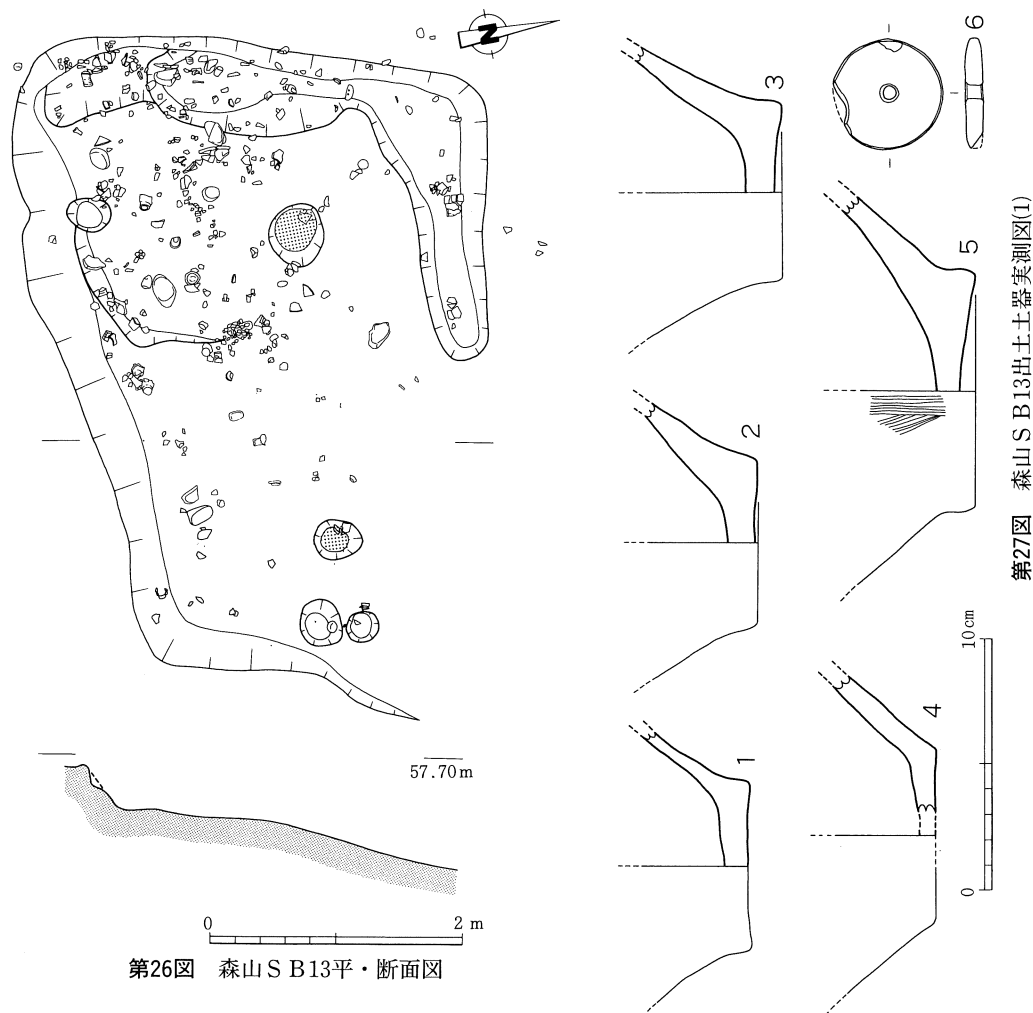
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
24図-1		甕口縁片						角閃石粒含むが精緻	茶褐色
同-2		同上						同上	黄褐色
同-3		同上						角閃石粒を含む	内・断面→黒褐色 外面→褐色
同-4		同上						同上	明褐色
同-5		同上						角閃石粒を含む	同上
同-6		壺口縁片						同上	同上
同-7		同上						石英粒を多く含む	暗褐色
同-8		底部片						角閃石粒を含む	赤褐色
同-9		同上					内面→ナデ 外面→ケンマ	角閃石、白色の石粒含むが精緻	淡黄褐色
同-10		同上					不明	角閃石粒を含む	明黄褐色
同-11		底部				7.2	同上	角閃石、やや大粒の白色石粒含む	明黄褐色～淡赤褐色
同-12		同上				5.9	同上	角閃石、白色の石粒多く含む	茶褐色

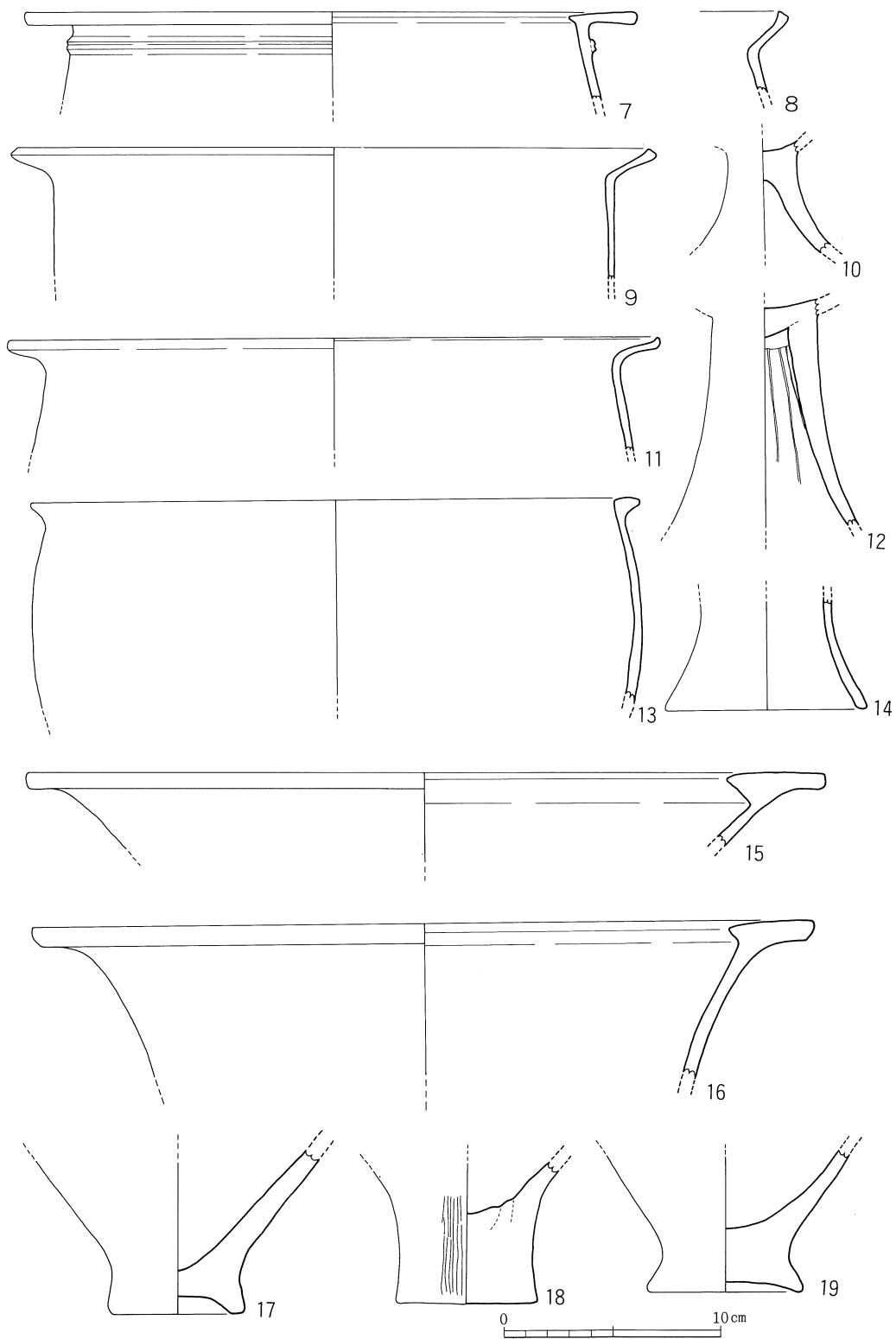
第12表 森山S B12出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
25図-13		石鏃	姫島産黒曜石	2.1	先端部欠損、凹基式
同-14		同上	姫島産黒曜石	0.5	基部のみ残存 凹基式

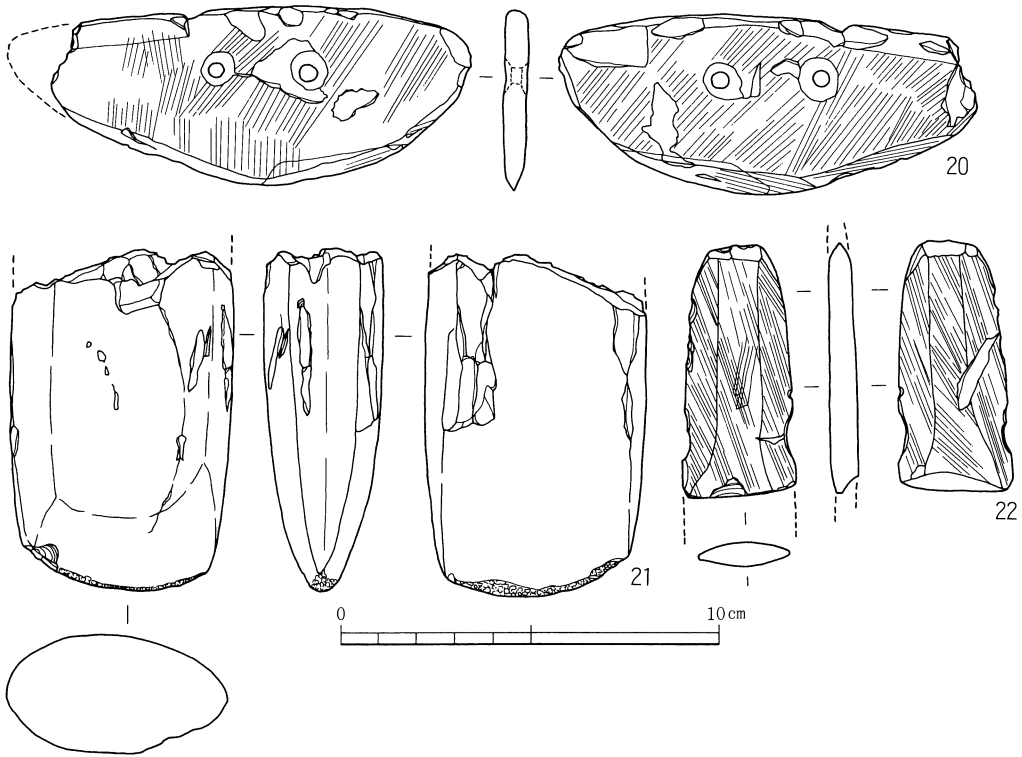
S B 13 (第26図)

本竪穴はS B 12の東側に隣接して位置し、西壁の一部をS K 12号土坑によって削平されている。標高は57m前後を測る。上部は削平されており、北壁の一部は斜面になるため流失している。その結果現存平面はやや不定形な隅丸長方形を呈している。現存部分で東壁長2.2m、南壁長5.0m、西壁長2.3m、北壁長2.3m + α 、現存部分の南壁高は約20cmを測り、ほぼ50°の緩い傾斜で立ち上がる。床面は北方向に15°のやや急な傾斜を持つ。西壁から北壁にかけては幅約40cm、深さ約15~20cmの壁溝が設けられている。床面中央には炭化物層が認められた。ピットは屋内に5個を数える。確実に本住居跡に付随すると思われるピットは中央の2本のみであることから本竪穴は2本柱支柱穴の住居跡であると考えられる。遺物の出土は竪穴全体に散乱しているが、特に中央より西側に集中し、壺片、甕片、高坏片など弥生土器片200点前後と太形蛤刃石斧1点、磨製石包丁型石器1点、磨製石剣1点、打製石鏃3点、磨石4点、凹石2点、石皿4点、投弾20点、偏平打製石斧2点、土製紡錘車1点などが認められた。





第28図 森山S B13出土土器実測図(2)

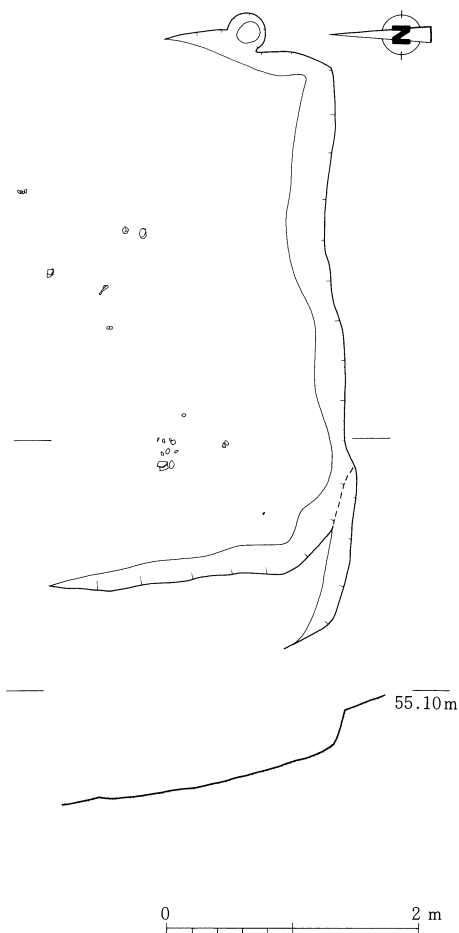


第29図 森山S B13出土石器実測図
 第13表 森山S B13出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
27図-1		底部				6.8	不明	角閃石粒含むが精緻	淡褐色
同-2		同上				7.2	同上	同上	淡橙色
同-3		同上				7.4	同上	同上	茶褐色
同-4		同上				(7.0)	同上	精緻である	淡黄褐色
同-5		同上				9.8	外面→ハケ目、内面→ナデ	角閃石、斜長石、石英粒含む	灰褐色
同-6		土製紡錘車	(4.5)			0.7		精緻である	黄褐色
28図-7		甕口縁	(22.0)				不明	角閃石、石英含むが精緻	同上
同-8		甕口縁片					同上	精緻である	淡褐色
同-9		甕口縁	(29.4)				同上	同上	同上
同-10		高坏脚部片					同上	同上	淡黄褐色
同-11		甕口縁	(30)				同上	同上	淡褐色
同-12		高坏脚部片					脚内面にシボリ痕有。他は不明	角閃石粒含むが精緻	淡黄褐色
同-13		甕口縁	(26)				不明	角閃石、石英粒含む	黄褐色
同-14		高坏脚部片	(9.0)				同上	角閃石粒含むが精緻	淡褐色
同-15		高坏口縁?	(28.0)				同上	精緻である	黄褐色
同-16		壺口縁	(28.0)				同上	角閃石、斜長石、石英含む粗い	茶褐色
同-17		底部				6.4	同上	角閃石粒含む粗い	褐色
同-18		底部				6.6	外面→荒いハケ目	角閃石粒含むが精緻	黄褐色
同-19		底部				7.4	不明	角閃石、石英含むが精緻	淡橙色

第14表 森山S B13出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
29図-20		石包丁型石器	頁岩	49	半月形のやや小型品
同-21		大型蛤刃石斧	結晶片岩	274	敲打痕で先端が丸くなっている
同-22		磨製石剣	頁岩質砂岩	19.5	先端部が欠損し、それを再利用して刃をつける

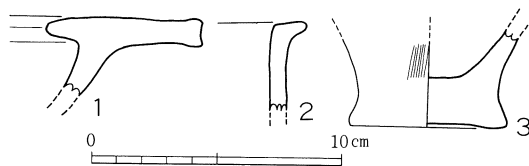


第30図 森山SB14平・断面図

SB14 (第30図)

本竪穴は舌状丘陵のほぼ中央の北斜面、標高54.5～55mに位置する。この位置はSB9の東約6mにあたる。東壁・西壁の一部および北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面はほぼ隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約1.3m+ α 、南壁辺4.6m、西壁辺2.4m+ α 、現存部分の南壁高は約20cmを測り、ほぼ70°の急な傾斜で立ち上がる。床面は北方向に15°のやや急な傾斜を持つ。西壁東側は10cmの段を持つベッド状遺構がが付設されている。ピットは壁に1個認められたが、確実に本住居跡に付随するとは考えられない。床面には焼土、炭化物等は認められない。

遺物の出土は20点前後と少なく竪穴の西側に甕、高坏などの土器片が認められた。



第31図 森山SB14出土土器実測図

第15表 森山SB14出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
31図-1		高坏口縁片						内外面ケンマ	角閃石粒含むが精緻	淡橙色
同-2		甕口縁片						不明	角閃石、石英粒含むが粗い	茶褐色
同-3		底部				6.5		内面→ナデ、外面→クテハケ、ヨコナデ	角閃石粒含むが精緻	黄褐色

S B15・16 (第32図)

本竪穴は舌状丘陵のほぼ中央の頂部、標高57.5mに位置する。この位置はS B13の南約5mにあたる。この竪穴は調査概報の18号竪穴にあたり、この報告では一基の竪穴としているが、土層観察およびピットの数・配置等から2基の竪穴が切りあったものである。

S B15はS B16に西側床面を切られているが、残存する部分から南北径8.2m、東西径8.7mのやや東西に長い不整形プランを呈す、本遺跡中最大規模の竪穴住居跡である。現存部分の壁高は35cmを測り、ほぼ80°の急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、幅25cm、深さ10cm前後の溝が東側の壁にそって一部認められる。西側壁の一部はS K12によってカットされている。ピットはS B16の床面外側に認められ、10個がほぼ円形に並ぶ。床面残存部には焼土、炭化物等は認められないが、S B16内に長さ2.6m、幅1.0m、深さ30cmの隅丸長方形の土坑が認められ、この土坑には焼土、炭化物、土器片が検出された。さらにこの土坑は土層堆積の状況から二度の切りあいが認められることからS B15・16両竪穴に使用された炉穴と考えられる。

遺物の出土は弥生土器片50点前後と少なく、ほとんどがS B16に流れ込んだと考えられる。

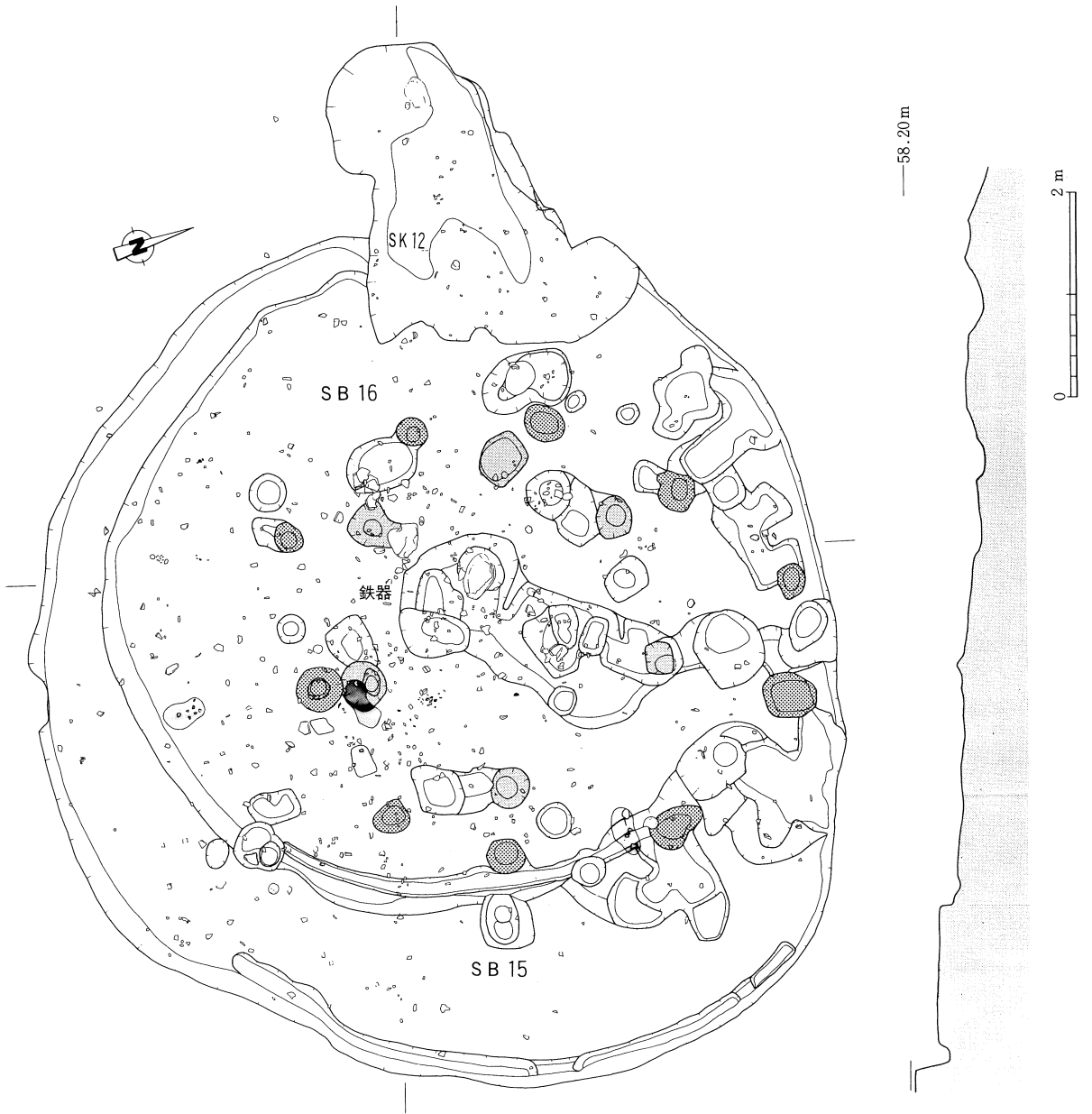
S B16は南北径6.8m、東西径7.0m前後のほぼ正円形プランを呈す。北側壁はS B15の壁をそのまま踏襲し、東～西にかけての壁は2～0.4mの範囲で縮小する。現存部分の壁高は15cm前後を測り、ほぼ85°の急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、幅20cm、深さ5cm前後の溝が東側の壁にそって一部認められる。西側壁の一部はS K12によってカットされている。床面の東側に幅50cm前後の焼土塊が5ヵ所検出されたほか床面ほぼ中央に前述した長方形土坑が認められる。ピットはS B16の柱穴群の内側に認められ、6個がほぼ円形に並ぶ。

遺物の出土は弥生土器片400点前後が床面全体に散布しているほか硬玉製玉片1点、碧玉製管玉1点、磨製石斧1点、石包丁型石器3点（内1点は立岩産輝緑凝灰岩製）、磨製石鏃2点、打製石鏃13点および同未製品3点、石剣未製品1点、砥石2点、凹石1点、敲石1点、石皿2点、

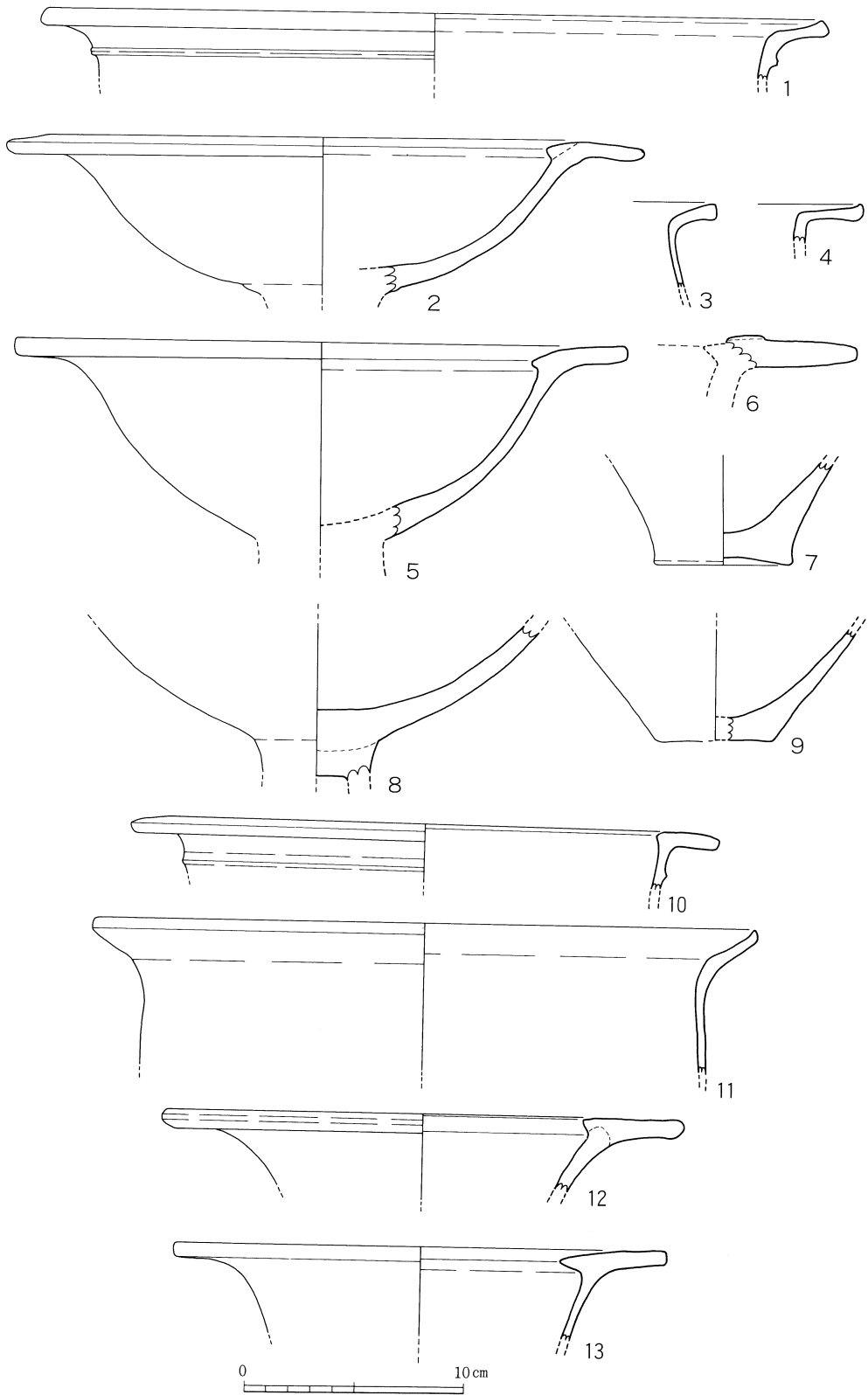
第16表 森山S B15・16出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
32図-1		甕口縁	(36)					内外面→ヨコナデ	石英、角閃石粒を含む	黄褐色
同-2		高環口縁	(20)					同上	角閃石、石英粒を含む	茶褐色
同-3		甕口縁片						同上	角閃石粒含むが精緻	淡黄褐色
同-4		同上						同上	角閃石、斜長石、石英粒を含む	同上
同-5		高環口縁	(19.2)					同上	角閃石、石英粒含むが精緻	内面茶褐色 外・断面明褐色
同-6		壺口縁片						同上	角閃石粒含む	黄褐色
同-7		底部				(6.5)		内外面→ナデ	角閃石、石英粒を含む	同上
同-8		高環-脚部片						不明	角閃石、石英粒を含む	同上
同-9		底部片				(5.5)		内面→ナデ、外面→ケンマ	精緻である	茶褐色
同-10		甕口縁	(21)					内外面→ヨコナデ	角閃石、石英粒を含む	黄褐色
同-11		同上	(30)					内外面→ヨコナデ	角閃石粒含むが精緻である	淡黄褐色
同-12		壺口縁	(16)					内外面→ヨコナデ	角閃石、石英粒を含む	黄褐色
同-13		同上	(13)					内外面→ヨコナデ	角閃石粒含むが精緻である	淡黄褐色

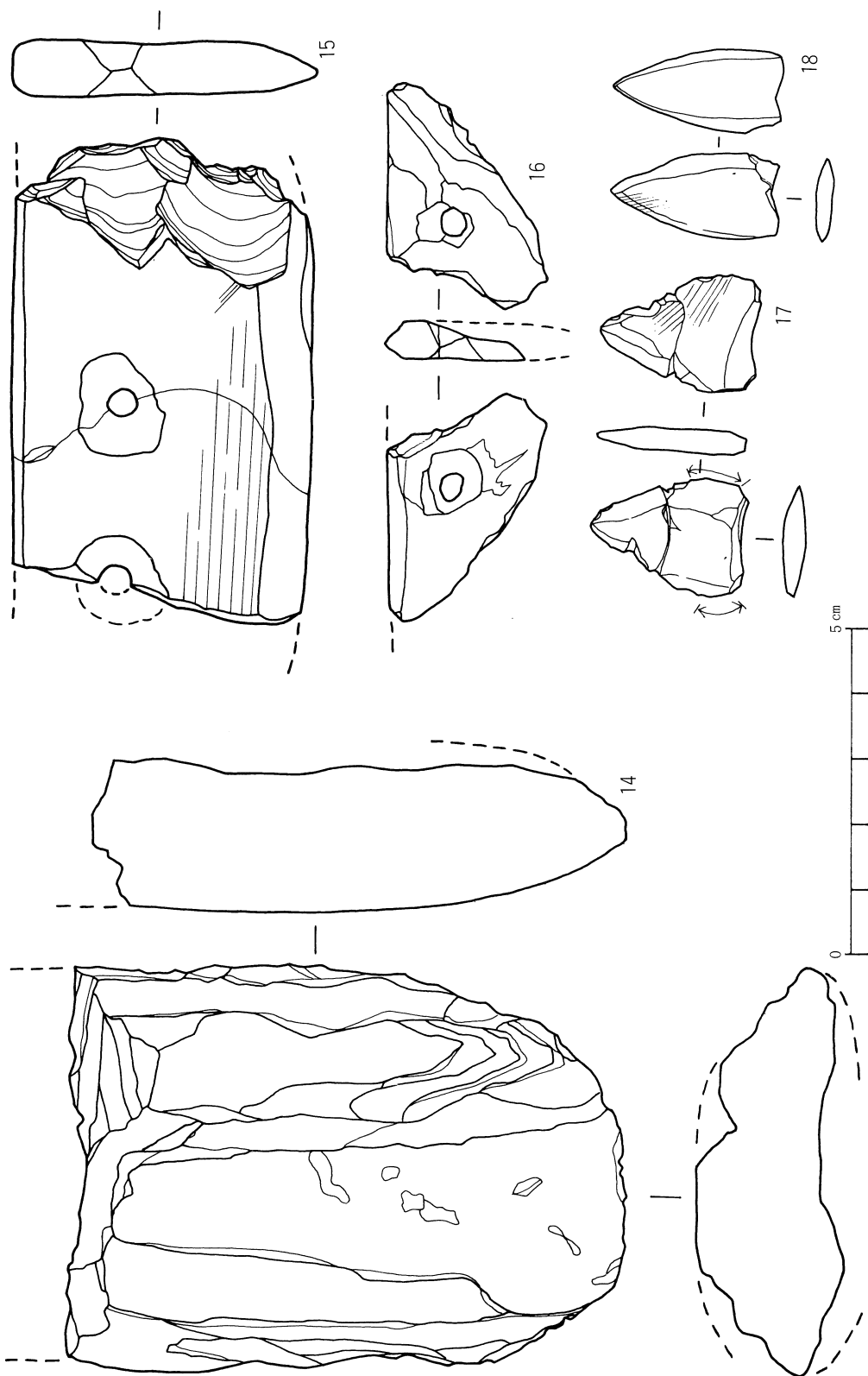
—58.20 m



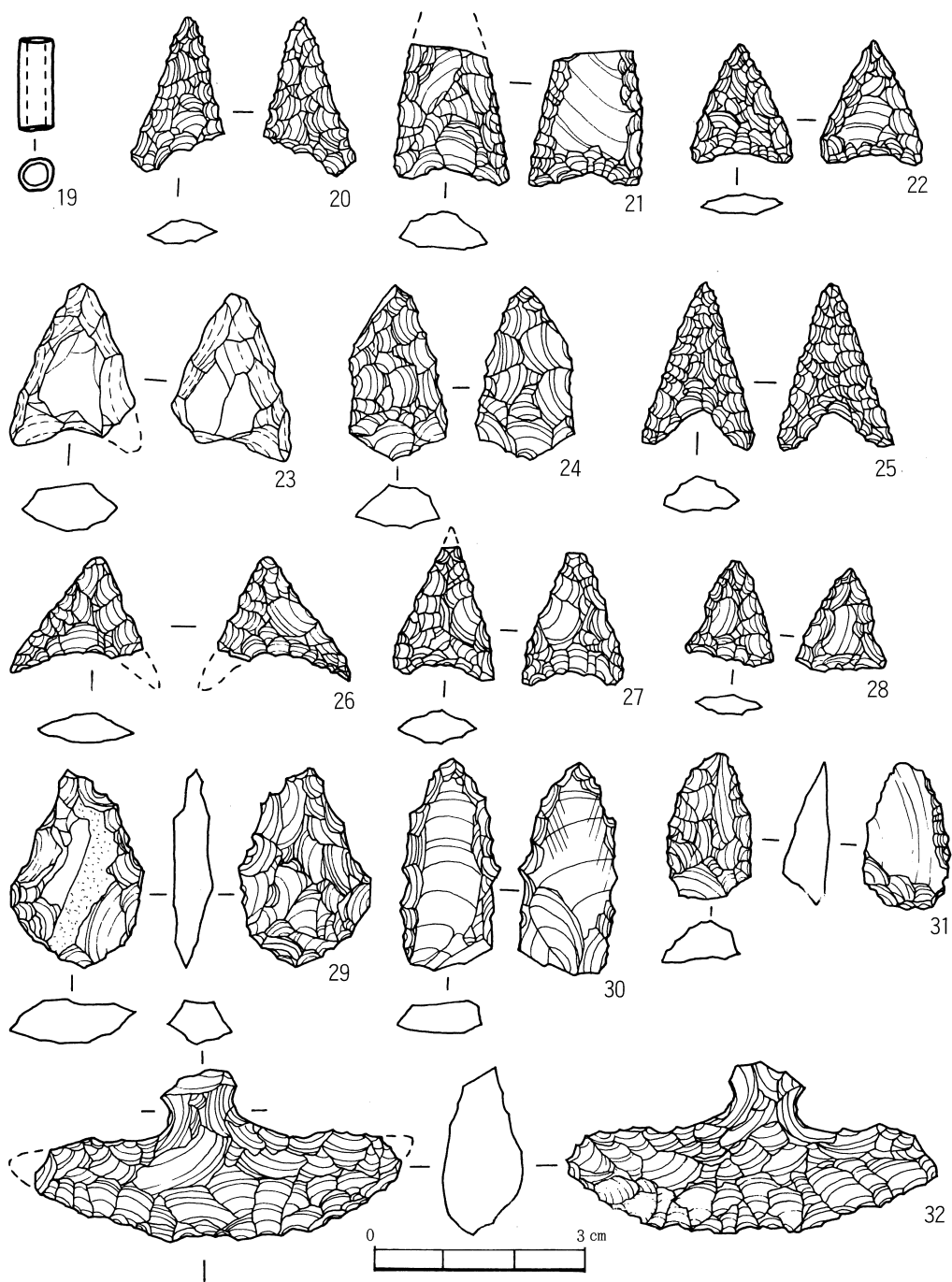
第32图 森山S B 15・16平・断面图



第33図 森山 S B 15・16 出土土器実測図(1~4は S B 15・5~13は S B 16)

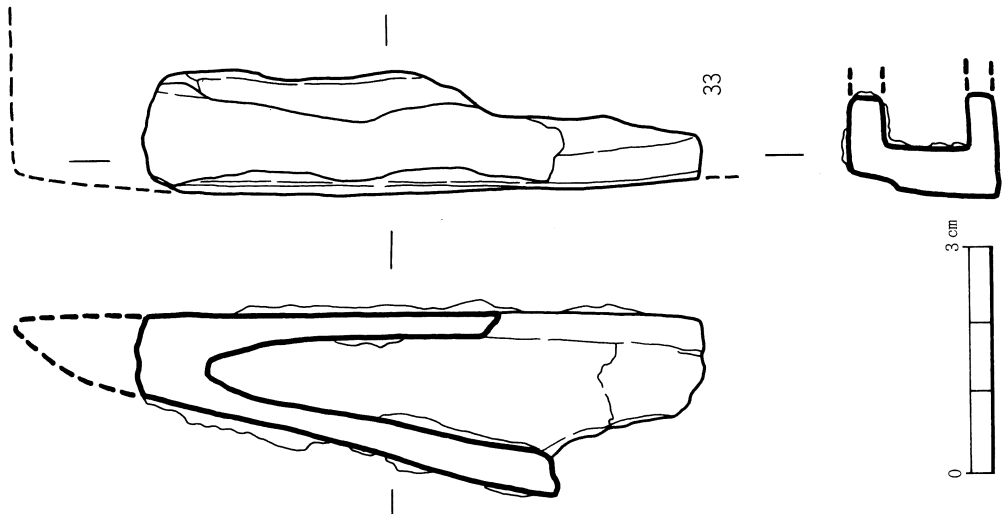


第34图 森山S B 16出土石器实测图(1)



第35图 森山S B 16出土石器实测图(2)

石核2点、偏平打製石斧2点、石錐1点、スクレーパー1点などの石器多数と鑄造鉄斧と考えられる鉄器片1点が出土した。



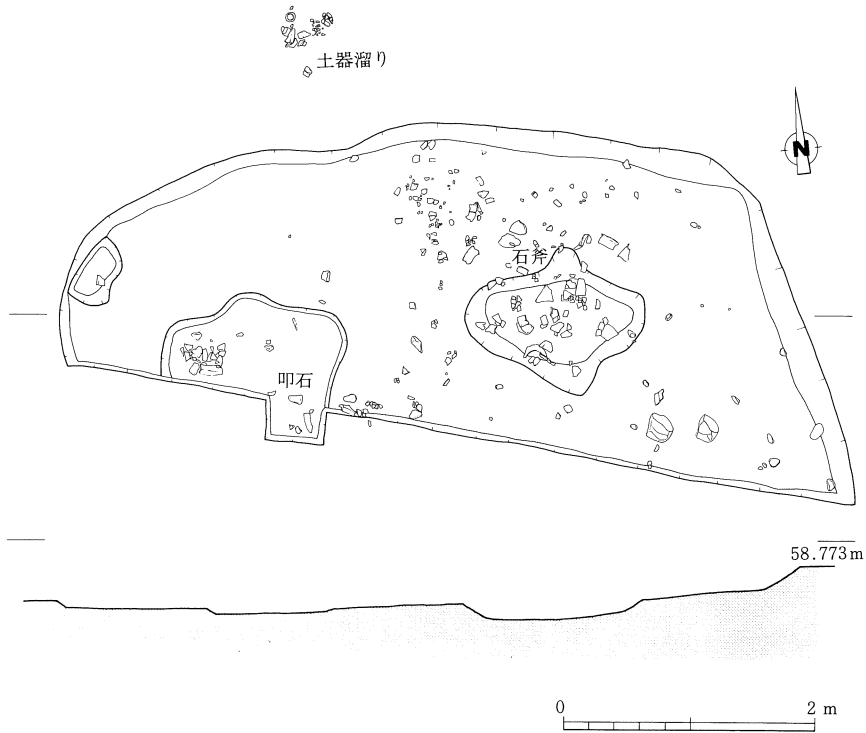
第36図 森山S B16出土鉄器実測図
第17表 森山S B16出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
34図-14		磨製石斧	結晶片岩	190	風化が著しく、剥離が激しい
同-15		石包丁型石器片	立岩産輝緑凝灰岩	47	
同-16		同上	頁岩	3.2	
同-17		磨製石鏃	同上	1.5	刃部の基部に近い所は刃を研ぎ出していない
同-18		同上	同上	1.0	基部の挟りは浅い
35図-19		管玉	碧玉	0.4	片面穿孔?
同-20		打製石鏃	姫島産黒曜石	0.6	凹基式
同-21		同上	同上	1.8	同上
同-22		同上	同上	0.5	同上
同-23		同上	同上	1.9	同上
同-24		同上	同上	1.3	凸基式
同-25		同上	同上	0.9	凹基式
同-26		同上	同上	0.7	同上
同-27		同上	同上	0.9	同上
同-28		同上	腰岳産黒曜石	0.5	平基式
同-29		打製石鏃未製品	姫島産黒曜石	2.5	
同-30		同上	同上	2.2	
同-31		同上	同上	1.2	
同-32		スクレーパー	同上	8.3	

S B17 (第37図)

本竪穴は舌状丘陵のほぼ中央、標高58.5mの本遺跡中、最高所に位置する。この位置はS B15の南約7mにあたる。南側は調査区外になり、その結果現存平面はほぼ隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約2.6m + α、北壁辺5.2m、西壁辺1.1m + α、現存部分の東壁高は約40cmを測り、ほぼ55°の緩やかな傾斜で立ち上がる。床面は西方向に8°の緩やかな傾斜を持つ。床面中央やや東側に長さ145cm、幅80cm、深さ10cmの不定形な浅い皿状の、西側に長さ140cm、幅80cm + α、深さ6cmの隅丸方形で浅い皿状の土坑がそれぞれ検出された。ピットは壁に1個認められたが、確実に本竪穴に付随するとは考えられない。床面には焼土、炭化物等は認められない。

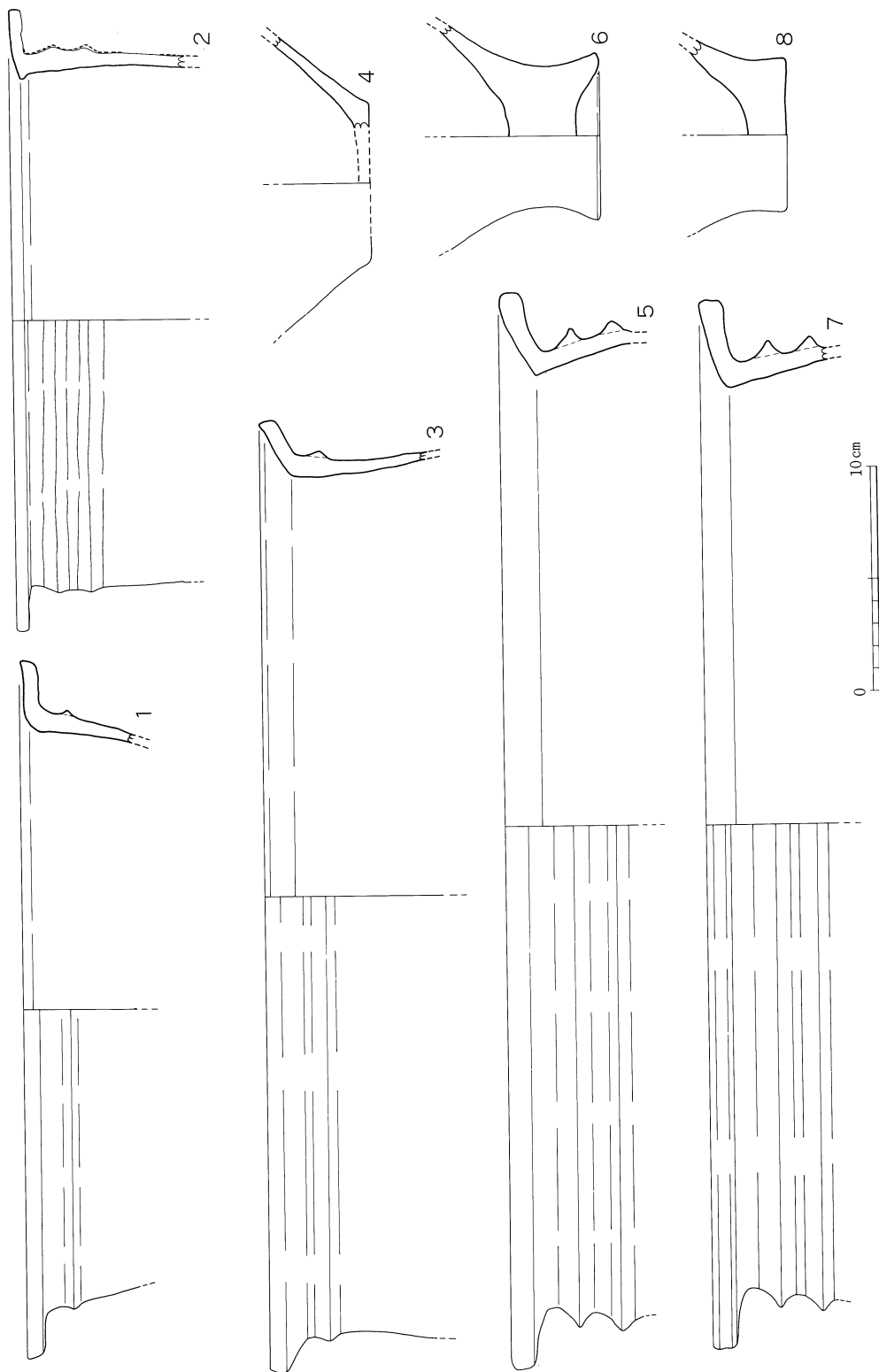
遺物の出土は100点前後が竪穴全体に散布し、甕、壺などの弥生土器片とともに片刃石斧1点、叩石1点、砥石1点、磨石1点、石皿1点が認められた。



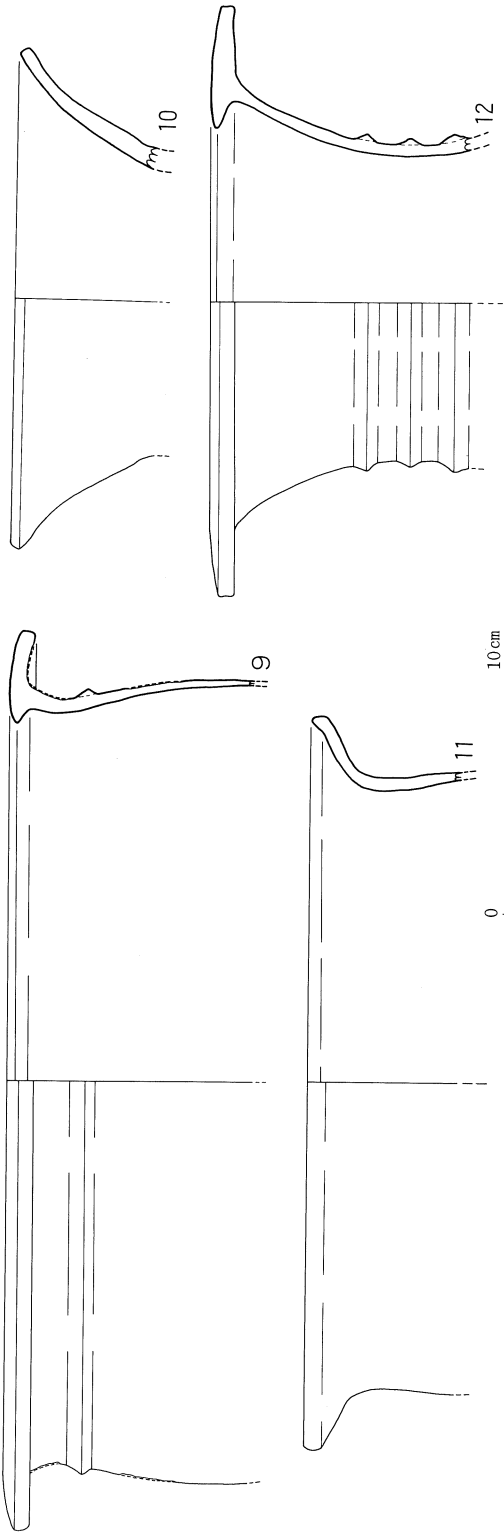
第37図 森山S B17平・断面図

第18表 森山S B17出土石器観察表

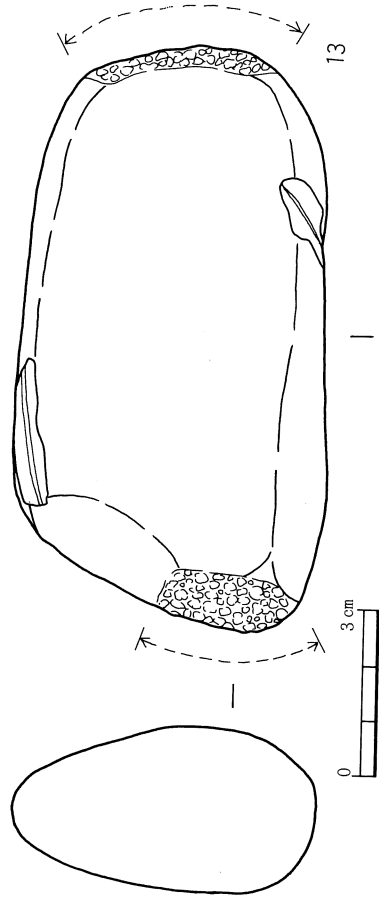
番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
40図-13		叩石	安山岩	242	上下先端に敲打痕有り(河原石)
41図-14		片刃石斧	頁岩	182	上端に敲打痕有り



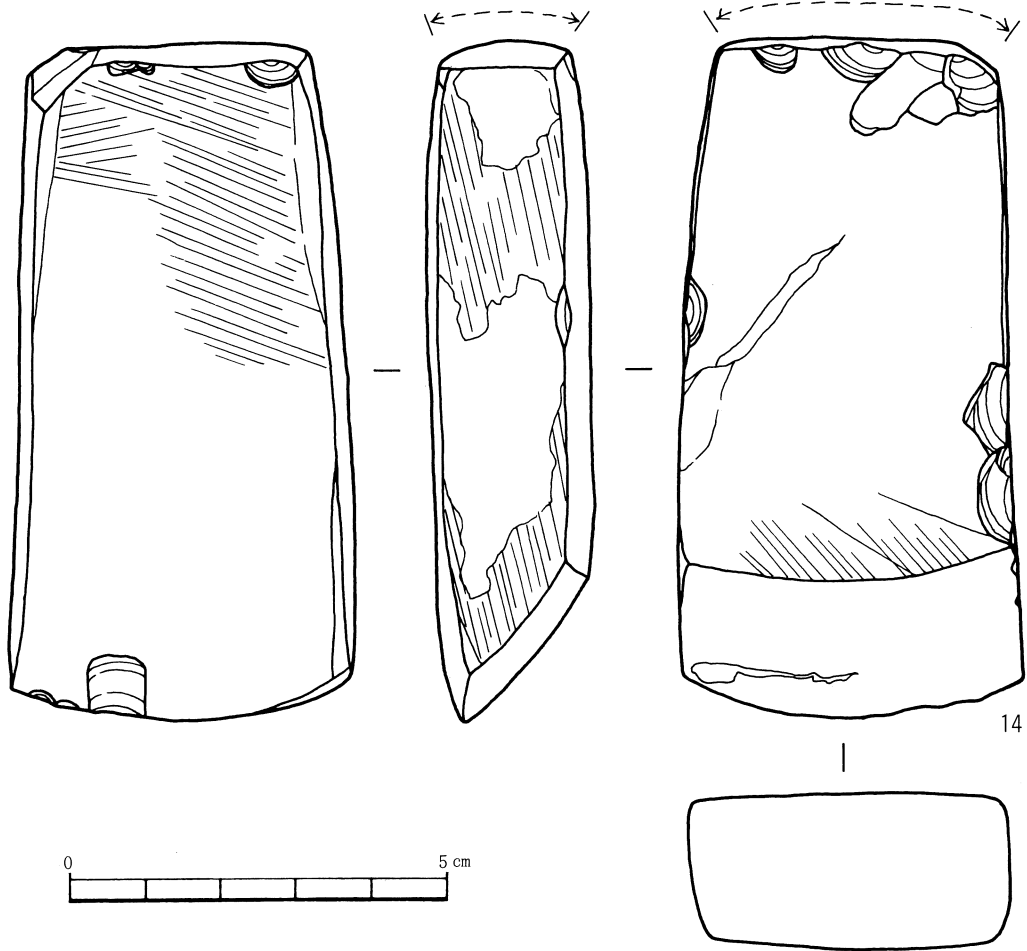
第38图 森山S B17出土器类测图(1)



第39图 森山S B17出土石器实测图(2)



第40图 森山S B17出土石器实测图(1)



第41図 森山S B17出土石器実測図(2)

第19表 森山S B17出土土器観察表

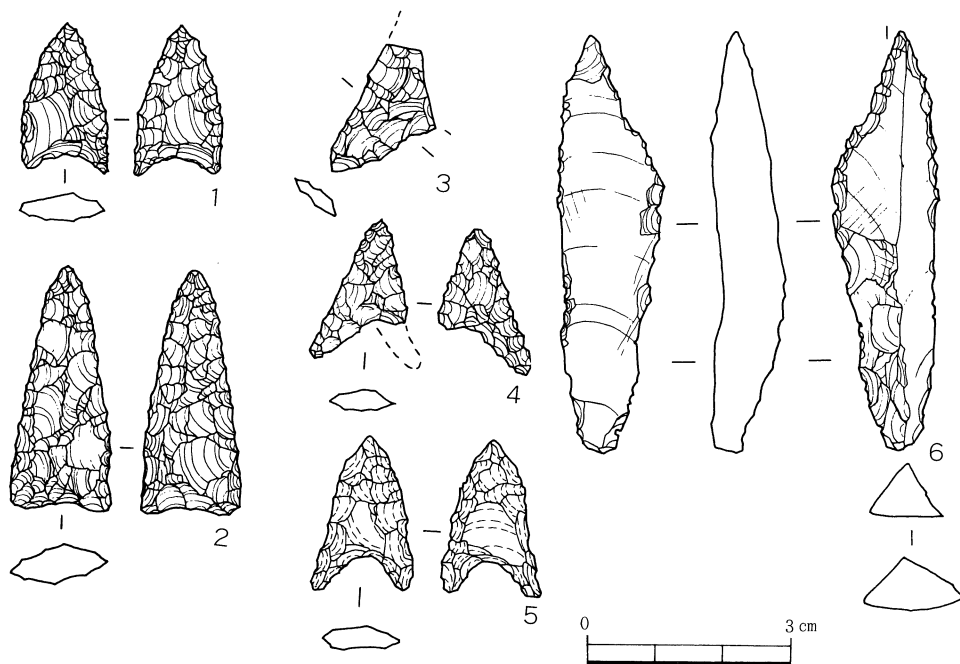
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
38図-1		甕口縁	(24)					内外面→ヨコナデ	角閃石を含むが精緻	淡黄褐色
同-2		同上	(22)					不明	角閃石、斜長石を含む	同上
同-3		同上	(42)					同上	同上	黄褐色
同-4		底部				(7.2)		同上	石英粒を含む	同上
同-5		甕口縁	(48)					内外面→ヨコナデ	同上	明黄褐色
同-6		底部				(7.5)		内外面→ナデ	角閃石を含む	赤褐色~黄褐色
同-7		甕口縁	(46)					内外面→ヨコナデ	同上	黄褐色
同-8		底部				7.0		不明	角閃石、斜長石を含む	赤褐色
39図-9		甕口縁	(29)					同上	同上	黄褐色
同-10		壺口縁	(19)					同上	同上	同上
同-11		甕口縁	(29)					同上	同上	赤褐色
同-12		壺口縁	(14)					内外面→ヨコナデ?	同上	黄褐色

S B18 (第43図)

本竪穴は丘陵ほぼ中央部北側斜面の標高55.5mを測る斜面に位置する。この位置はS B13の東3mにあたる。北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面はほぼ楕円の弧状を呈している。現存部分で南北径約7m前後、東西径6m前後を測り、南壁上面は幅0.75mで約25°の傾斜を持つテラス状の構造を持つ。南壁高は約40cmを測り、ほぼ80°の急な傾斜で立ち上がる。床面は北方向に5°の緩やかな傾斜を持つ。南壁床面には幅20cm、深さ10cmの壁溝が設けられている。床面東側には壁溝に接続して長さ160cm、幅95cm、深さ30cmの炭化物の詰った卵倒形の土坑が検出された。この土坑は内部の切り合い関係から最低3回の掘り返しが行われたと思われる。さらに、床面西側にも長さ55cm、幅35cm、深さ10cmの浅い皿状の土坑が検出された。ピットは屋内に13個を壁面に2個数える。確実に本住居跡に付随すると思われるピットは壁際の6個と考えられる。

遺物の出土は400点前後が竪穴全体に散布し、甕、壺などの弥生土器片とともに小型磨製石斧1点、砥石1点、磨石4点、凹石2点、敲石1点、石皿4点、打製石鏃6点、ポイント1点などが認められた。

なお、土器は前期末～中期初頭と中期中葉～後葉のものに分離できるが、前者はテラス上の貯蔵穴をカットした際に流れ込んだものと考えられる。



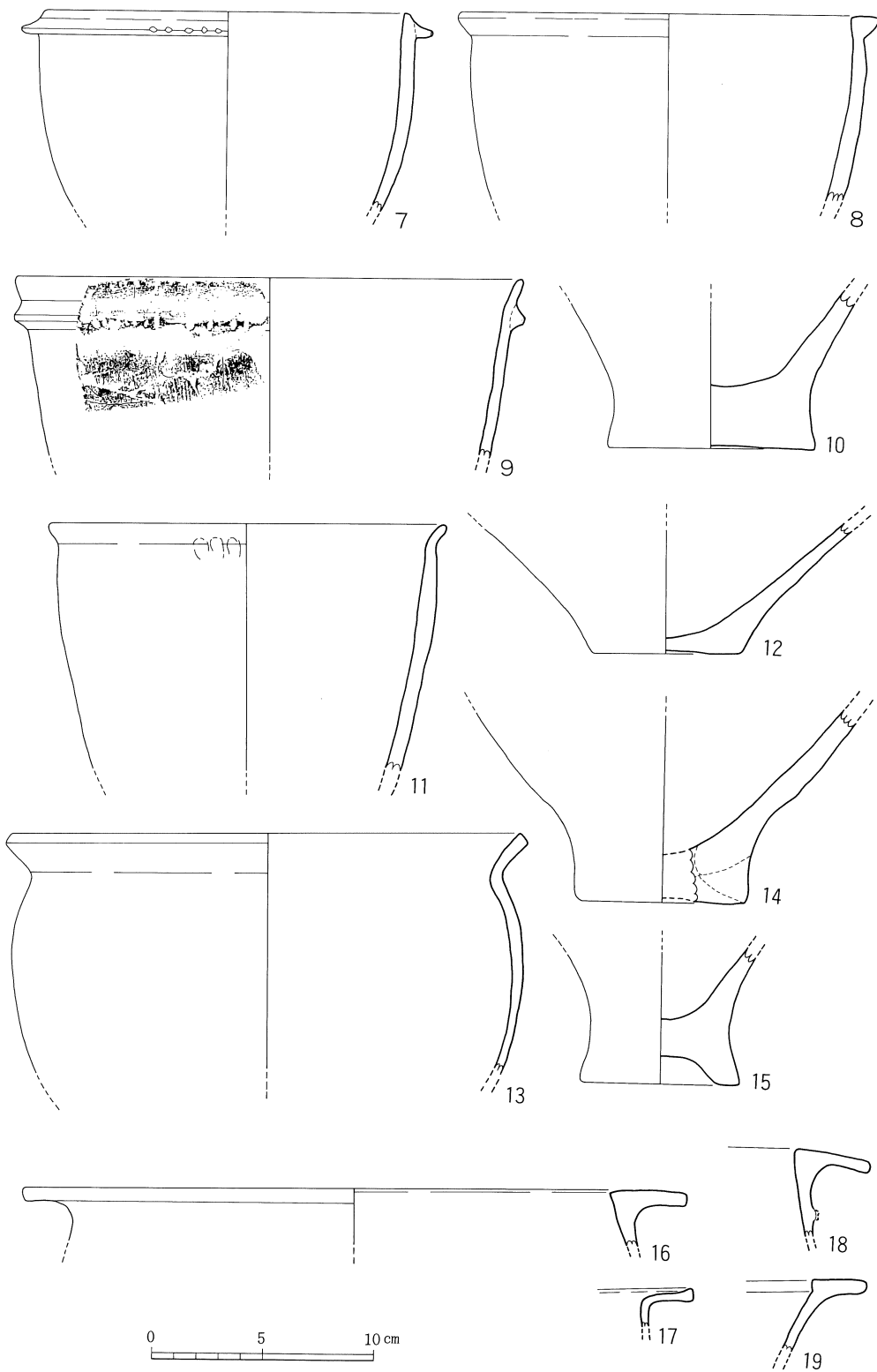
第42図 森山S B18出土石器実測図



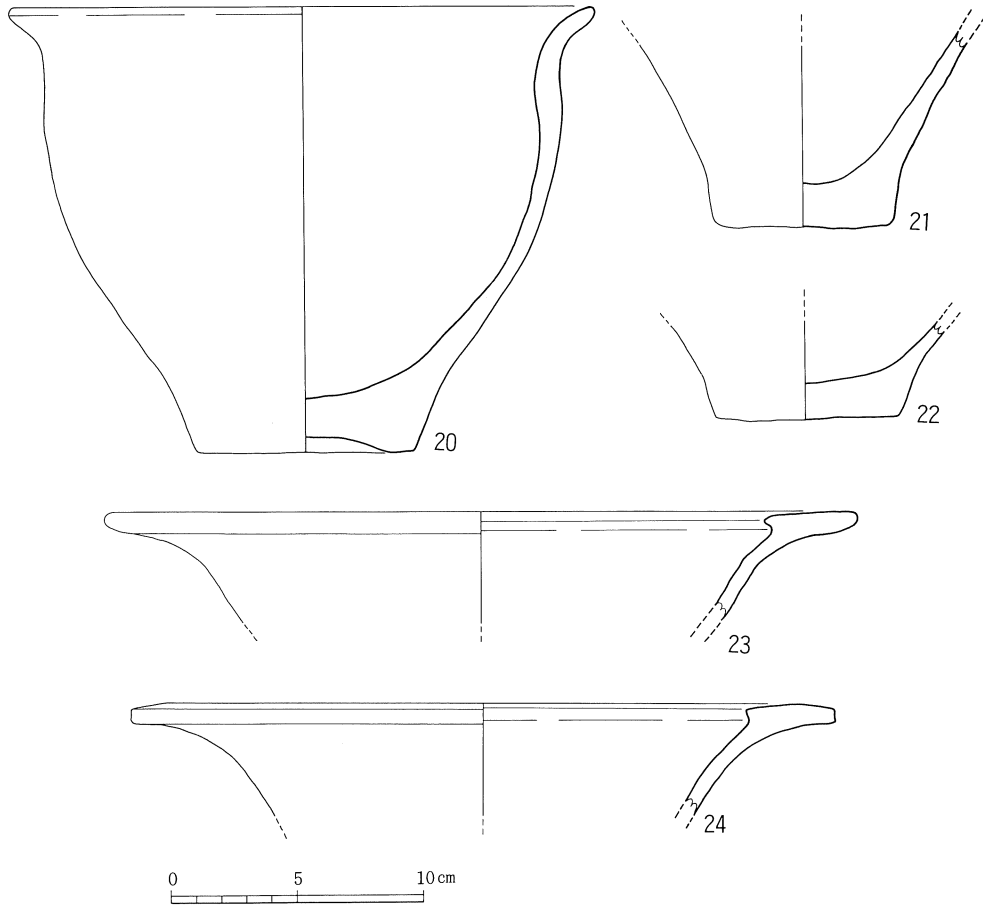
第43図 森山S B 18平・断面図

第20表 森山S B 18出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
42図-1		打製石鏃	姫島産黒曜石	1.0	挟りが浅い 凹基式
同-2		同上	同上	2.6	挟りがほとんどない 平基式
同-3		同上	同上	0.6	先端および基部の一部欠損 凹基式
同-4		同上	チャート	0.5	基部の一部欠損 同上
同-5		同上	サヌカイト	1.1	挟りがやや深い 同上
同-6		ポイント	姫島産黒曜石	6.1	



第44图 森山S B18出土土器实测图(1)



第45図 森山S B18出土土器実測図(2)

第21図 森山S B18出土土器観察表

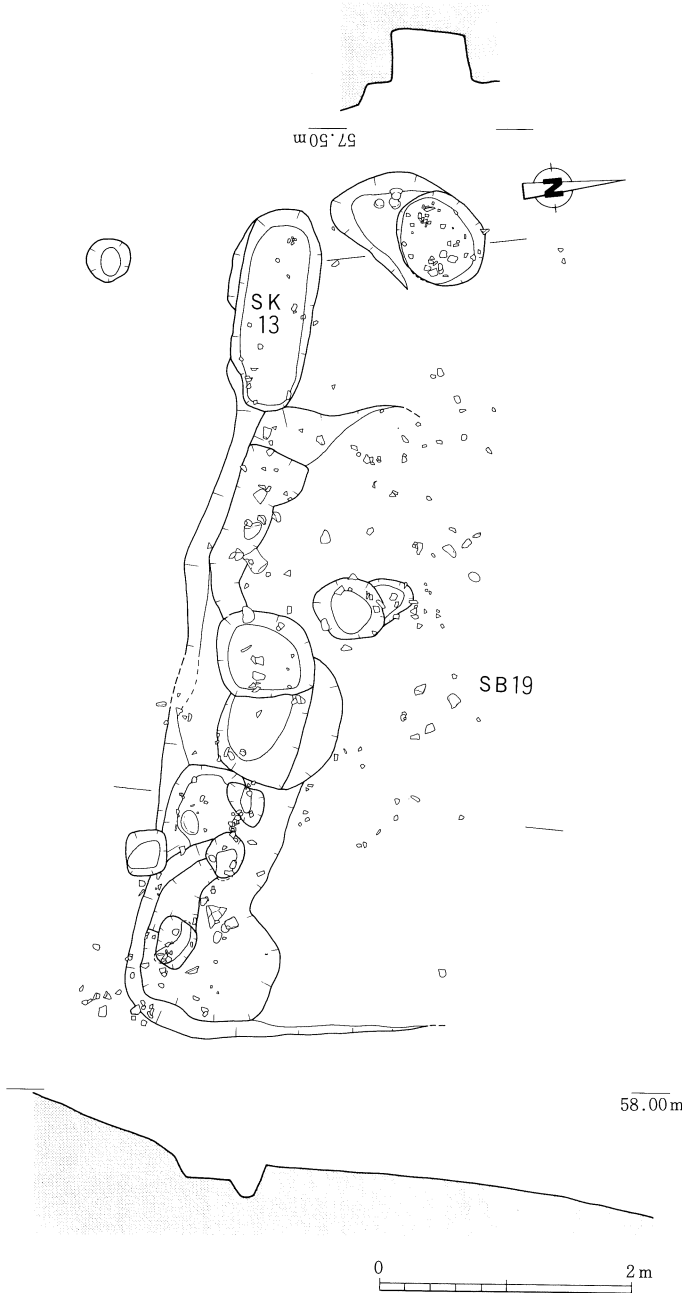
番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) () の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
44図-7		甕	(16)					不明	角閃石、石英、1~3mm大の白色石粒を含む	黄褐色
同-8		同上	(17)					同上	角閃石粒を含む	茶褐色
同-9		同上	(22)					口縁部内外面→ヨコナデ、内面 →ナデ、外面→ダテハケ	精緻である	黒褐色
同-10		底部				9.3		不明	角閃石と3mm大の白色石粒を多く含む	茶褐色
同-11		甕	(17)					不明であるが頸部外面に指圧痕有	角閃石粒を含む	明褐色
同-12		底部				6.7		不明	角閃石粒を含むが精緻	明黄褐色で底部外面に黒斑有
同-13		甕	(23)					口縁部内外面→ヨコナデ、他は不明	角閃石、石英含むが精緻	淡黄褐色
同-14		底部				(7.8)		ナデ?	角閃石、斜長石含むが精緻	同上
同-15		同上				7.5		不明	3~5mm大の白色石粒を多く含む	赤褐色
同-16		甕口縁片	(23)					同上	角閃石、斜長石含むが精緻	淡黄褐色
同-17		同上						同上	角閃石、石英粒含むが精緻	茶褐色
同-18		同上						同上	同上	淡橙色
同-19		壺口縁片						同上	角閃石、石英粒を含む	淡黄褐色
45図-20		甕	23	19		8.7	17.7	口縁部内外面→ヨコナデ、内面 →ナデ、外面→ダテハケ	角閃石、石英粒を含む	内・断面→やや赤味を帯びた褐色、外面→淡橙色
同-21		底部				7.3		不明	角閃石と3mm大の白色石粒を多く含む	やや赤味を帯びた茶褐色
同-22		同上				7.4		同上	角閃石粒を含む	明黄褐色
同-23		高坏片?	(22.6)					同上	石英粒含むが精緻	褐色
同-24		壺口縁片?	(21)					同上	角閃石、石英粒を多く含む	淡黄褐色

S B 19 (第46図)

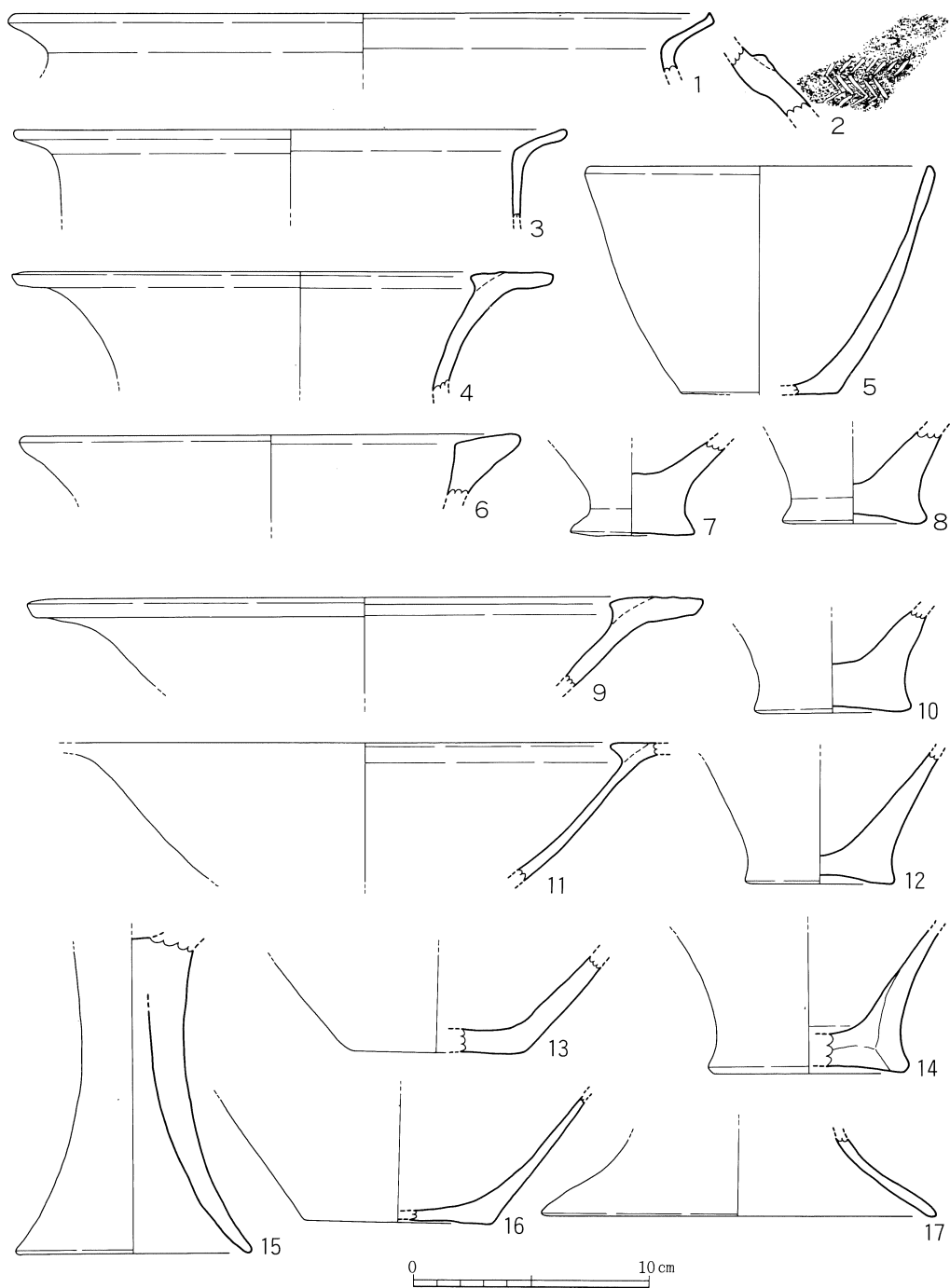
本竪穴は舌状丘陵のほぼ中央の北斜面、標高57～58mに位置する。この位置はS B 18の東南約5mにあたる。東壁の一部および北壁は斜面が急なため流失し、西壁はS K 13によってカットされている。その結果現存平面はほぼ隅丸のL字状を呈している。東壁辺約 $2.5m + \alpha$ 、南壁辺 $5.1m + \alpha$ 、西壁辺は下端のみが残存しており $1.4m + \alpha$ 、現存部分の南壁高は約10cmを測り、

ほぼ 65° のやや緩やかな傾斜で立ち上がる。床面は北方向に 9° のやや緩やかな傾斜を持つ。南壁から西壁にかけて幅110～50cm、深さ10cmの壁溝が付設されている。この壁溝内には5個のピットが認められた。床面には中央に焼土、炭化物層が認められた。ピットは屋内に1個を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットは明確でない。

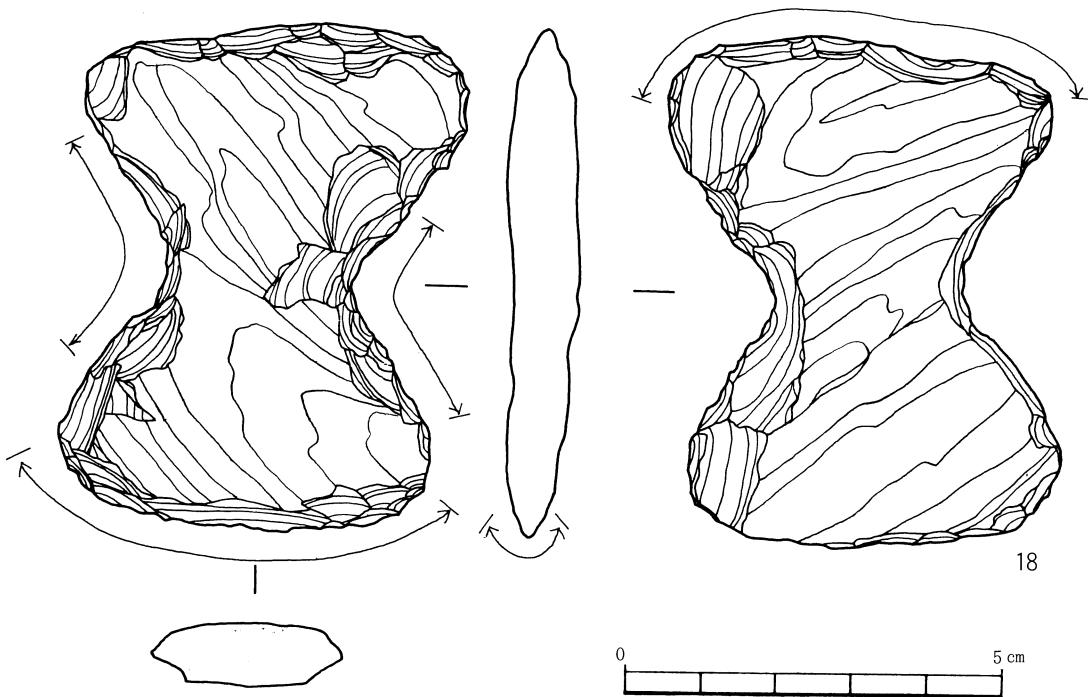
遺物の出土は竪穴全体に弥生土器片200点前後が散乱する。壺、甕、高坏、鉢などの土器片と分銅型打製石斧1点、砥石3点、凹石3点、敲石1点が壁溝東側最下面より認められた。



第46図 森山S B 19平・断面図



第47图 森山S B19出土土器实测图



第48図 森山S B 19出土石器実測図

第22表 森山S B 19出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
47図-1		甕口縁	(30)					不明	角閃石、斜長石を含む	茶褐色
同-2		壺胴部片						内面→不明、外面→ナデ、羽状文	同上	明褐色
同-3		甕口縁	(23)					内、外面→ナデ	同上	黄褐色
同-4		壺口縁	(14)					不明	同上	灰褐色
同-5		鉢	(14.6)			(6.7)	9.7	同上	角閃石、石英、斜長石を含む	明褐色
同-6		壺口縁?	(15.8)					内面→ケンマ、外面→不明	角閃石、斜長石、白色石粒を含む	茶褐色
同-7		底部						不明	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-8		同上						内外面→ナデ	同上	同上
同-9		高坏坏部	(20.8)					不明	同上	茶褐色
同-10		底部						同上	同上	黄褐色
同-11		高坏坏部	(21)					同上	同上	明褐色
同-12		底部						内面→ナデ、外面→不明	同上	茶褐色
同-13		同上						不明	角閃石、斜長石、石英粒含む	黄褐色
同-14		同上						内外面→ナデ	角閃石、斜長石を含む	明褐色
同-15		高坏脚部					10 (膝端)	不明	同上	赤褐色
同-16		底部					(8)	同上	角閃石、斜長石、石英粒を含む	黄褐色
同-17		高坏脚部					(17)	同上	角閃石、斜長石を含む	同上

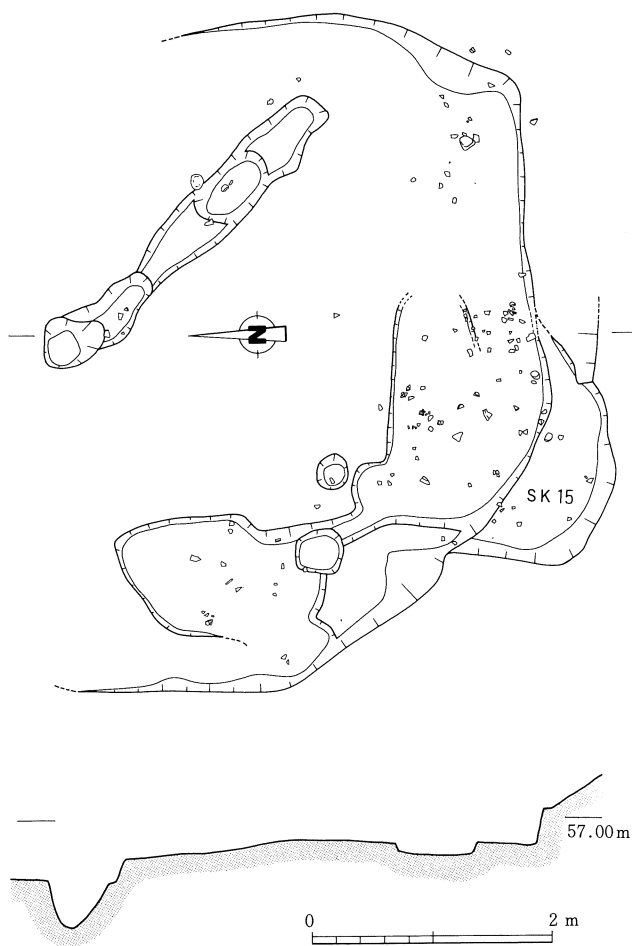
第23表 森山S B 19出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
48図-18		分銅型打製石斧	結晶片岩	38	上・下部に交互剥離により刃部を作り出すが鈍い。

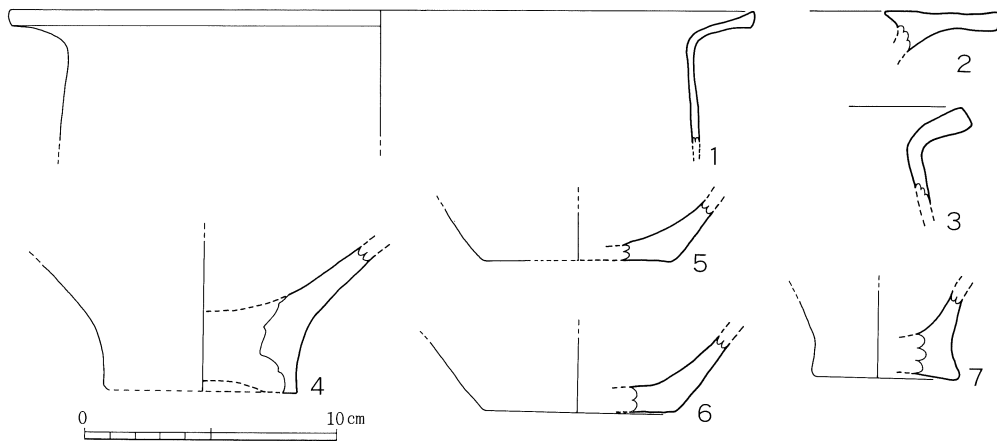
S B 20 (第49図)

本竪穴は舌状丘陵のほぼ中央の北斜面、標高57mに位置する。この位置はS B 19の北東約1mにあたる。北壁は斜面が急なため流失している。南壁西側でS K 15をカットしている。その結果現存平面はやや丸みを持つ隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約2.85m + α 、南壁辺5.4m、西壁辺1.9m + α 、現存部分の南壁高は約30cmを測り、ほぼ80°のやや急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。南壁西半から西壁に添って幅100~30cm、深さ10cmの不定形な浅い皿状の土坑が付設されている。この土坑内には1個のピットが認められた。また、床面東側から中央にかけて長さ260cm、幅45cm、深さ5cmの細長い土坑も検出された。ピットは屋内に2個を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットは明確でない。

遺物の出土は主に竪穴南側に200点前後が散乱する。壺、甕などの弥生土器片と打製石鏃3点、磨製石剣1点、磨石1点、敲石4点、石皿1点が認められた。



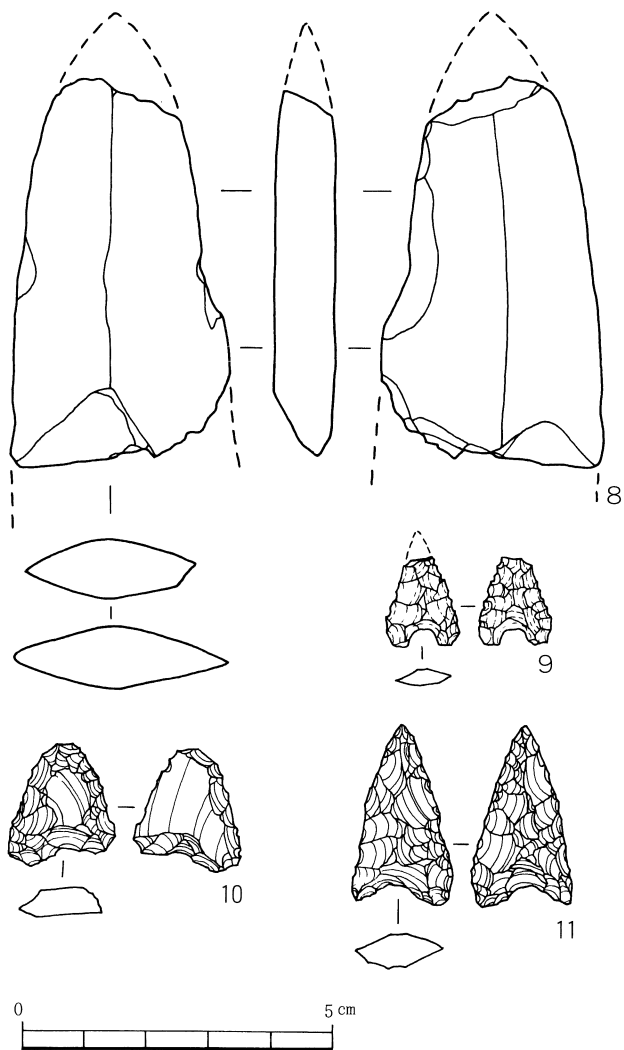
第49図 森山S B 20平・断面図



第50図 森山S B20出土土器実測図

第24表 森山S B20出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底部 器高			
50図-1		甕口縁	(30)				不明	角閃石、斜長石2~3mm 大の白色砂粒を含む	淡褐色
同-2		壺口縁片					同上	角閃石、斜長石が若干入る	茶褐色
同-3		甕口縁片					同上	角閃石を含む	淡橙色
同-4		底部片				(8.0)	同上	角閃石を含むが精緻	赤褐色
同-5		同上				(7.5)	同上	角閃石、斜長石を含む	茶褐色
同-6		同上				(7.8)	同上	同上	同上
同-7		同上				(6.0)	同上	角閃石含むが精緻	同上



第51図 森山S B20出土石器実測図

第25表 森山S B20出土石器観察表

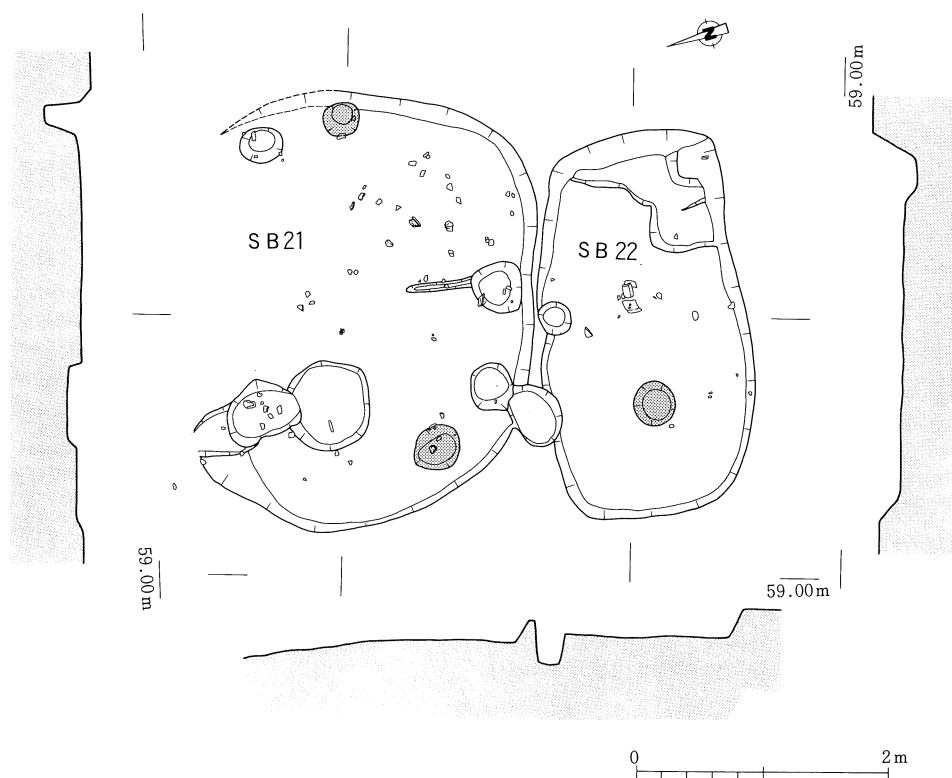
番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
51図-8		磨製石剣片	砂岩	17.7	
同-9		打製石鏃	サヌカイト	0.3	先端部欠損 凹基式
同-10		同上	姫島産黒曜石	1.4	凹基式
同-11		同上	同上	2	凹基式

S B21・22 (第52図)

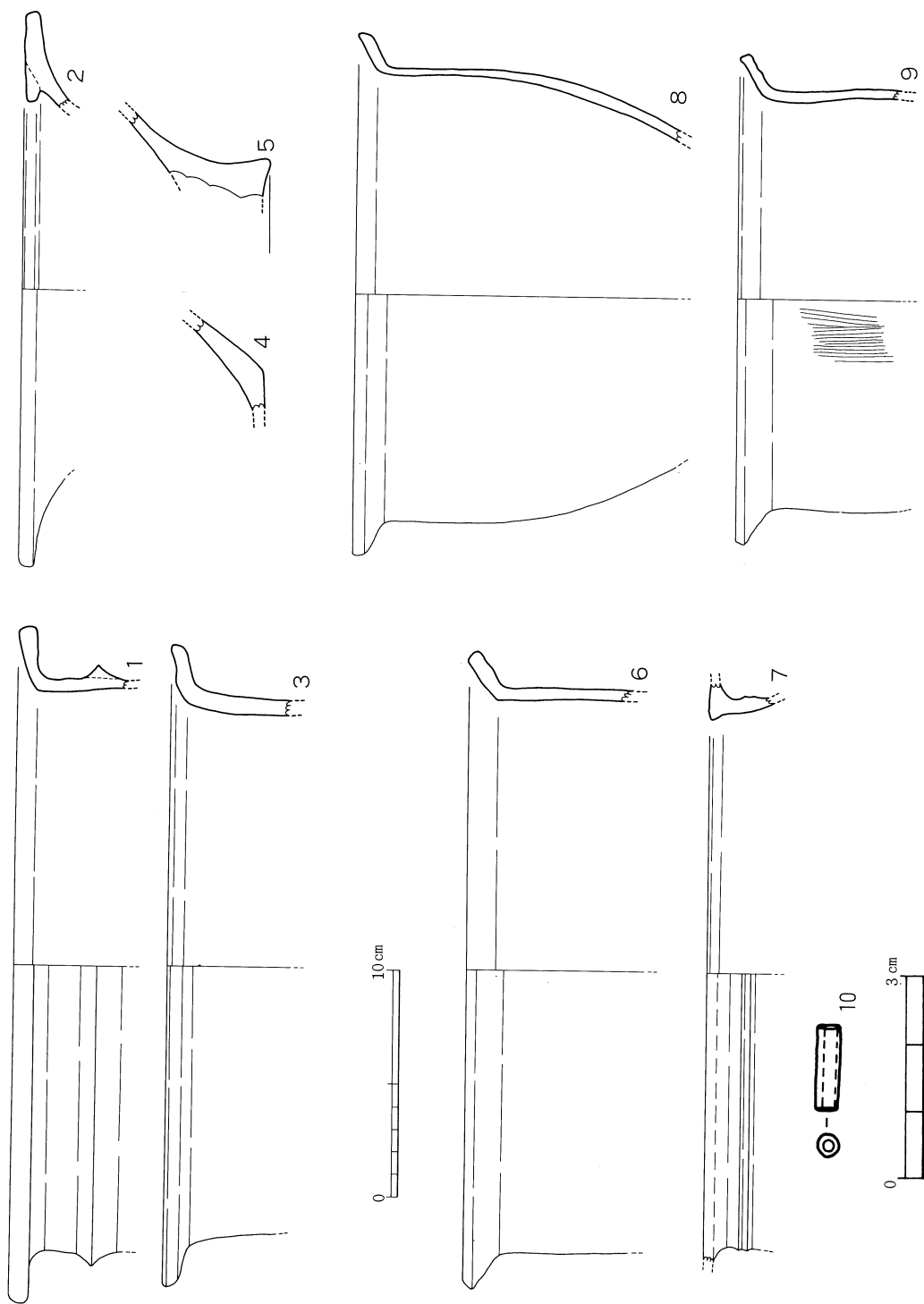
S B21は舌状丘陵のほぼ中央、標高59mに位置する。この位置はS B19の東南約1.5mにあたり、S B22の北壁と接する。北壁は斜面が急なため流失している。南壁の西側でピットにその一部をカットされている。その結果現存平面はやや丸みを持つ隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約 $1.5\text{m} + \alpha$ 、南壁辺2.4m、西壁辺 $2.5\text{m} + \alpha$ 、現存部分の南壁高は約15cmを測り、ほぼ 60° のやや緩やかな傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。床面北東側に径70cm、深さ15cmのほぼ円形の浅い皿状の土坑が付設されている。この土坑内には炭層が認められた。ピットは屋内に6個を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットは2個で、本竪穴は2本柱支柱穴のものと考えられる。

遺物の出土は竪穴全体にほぼ50点前後が散乱する。壺、甕などの弥生土器片と砥石1点が認められた。

S B22は舌状丘陵のほぼ中央、標高59mに位置する。この位置はS B21の南に接する。北壁の西側でピットにその一部をカットされている。平面形態は東西に長い隅丸長方形を呈している。東壁辺約1.3m、南壁辺2.9m、西壁辺1.2m、北壁辺2.8mを測る。現存部分の南壁高は約25cmを測り、ほぼ 65° のやや緩やかな傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。東壁に添って幅10~50cm、深さ10cmの壁溝が巡らされている。ピットは北壁に1個と屋内に1個を数える



第52図 森山S B21・22平・断面図



第53図 森山S B 21・22出土遺物実測図(1~5はS B 21、6~10はS B 22出土)

が、確実に本住居跡に付随すると思われるピットは床面中央西側の1個で、本竪穴は1本柱柱穴のものと考えられる。

遺物の出土は竪穴のほぼ中央に20点前後が散乱する。甕などの弥生土器片の他碧玉製管玉1点が認められた。

第26表 森山S B21・22出土土器観察表

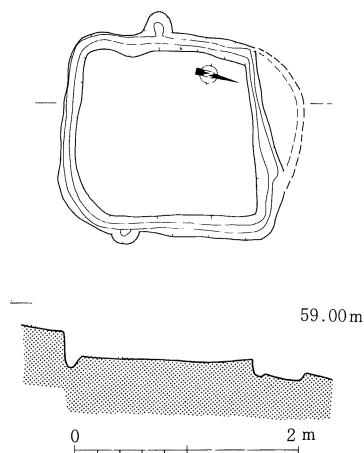
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 部	器 高			
53図-1		甕口縁	(30)					不明	角閃石、斜長石を含む	褐色
同-2		壺口縁	(19)					内外面→ナテ	同上	黄褐色
同-3		甕口縁	(28)					不明	同上	明褐色
同-4		底部片						同上	白色砂粒を多く含む	黄褐色
同-5		同上						同上	角閃石、斜長石2~3mm大の 白色砂粒を多く含む	暗褐色
同-6		甕口縁	(17)					同上	角閃石、斜長石を含む	褐色
同-7		同上	(13)					同上	同上	黄褐色
同-8		甕口縁-胴部	(23)					同上	角閃石、斜長石、赤褐色粒を含む	明褐色
同-9		同上	(22)					同上	角閃石、斜長石を含む	明褐色

第27表 森山S B21・22出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
53図-10		管玉	碧石	0.3	両面穿孔?

S B23 (第54図)

本竪穴は舌状丘陵の中央よりやや東側の北斜面、標高59mに位置する。この位置は後述する土●墓群の北に接する。平面形態は北側辺が若干流失するもののほぼ隅丸方形形状を呈している。東壁辺約1.8m、南壁辺1.6m、西壁辺1.7m、北壁辺1.7mを測る。現存部分の南壁高は約25cmを測り、ほぼ85°の急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。各壁に添って幅15cm、深さ10cmの壁溝が巡らされている。ピットは東西壁に各1個を数えるが、確実に本竪穴に付随すると思われるピットは認められない。本竪穴はその位置および形態が特異であるところから墳墓群に付属する施設の可能性もある。

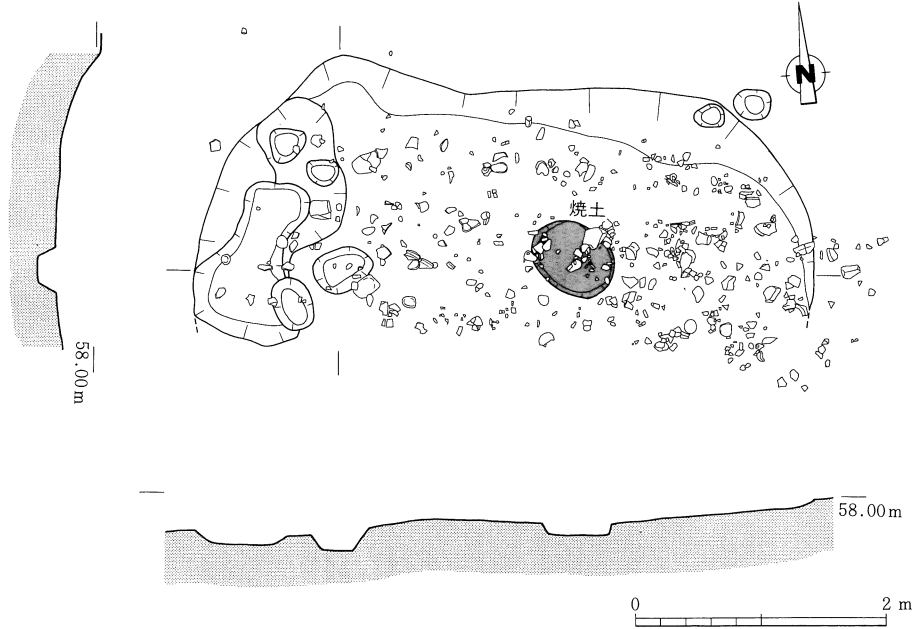


第54図 森山S B23平・断面図

S B24 (第55図)

本竪穴は舌状丘陵の基部（東側）の北側、標高58mに位置する。この位置はS B23の東約14mにあたる。北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面は隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約2.4m + α、南壁辺3.4m、西壁辺1.6m + α、現存部分の南壁高は約15cmを測り、ほぼ40°の緩やかな傾斜で皿状に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。東壁に添って長さ2.0m、幅0.8m、深さ15~30cmの不定形の浅い皿状の壁溝が付設されている。この内部は2段掘りで、3個のピットが認められた。さらに、床面中央に径60cm前後、深さ10cm程の円形土坑も検出され、この土坑内には焼土、炭層が認められた。ピットは屋内の西側に1個を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットは認められない。

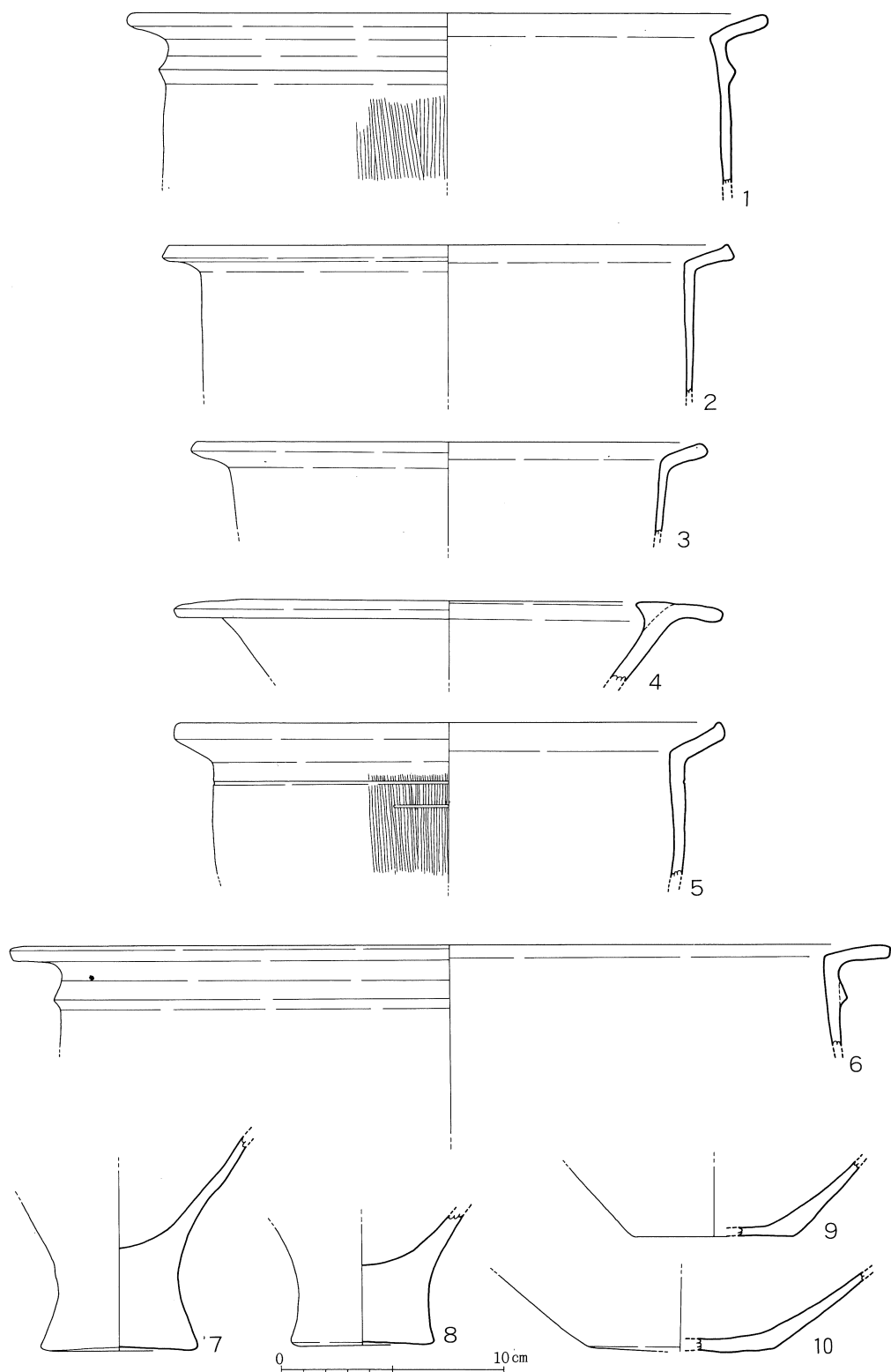
遺物の出土はほぼ竪穴全体に100点前後が散乱する。甕、高坏などの土器片とともに砂岩製砥石3点、打製石鏃3点、磨石4点、凹石2点、敲石6点、石皿6点などが認められた。



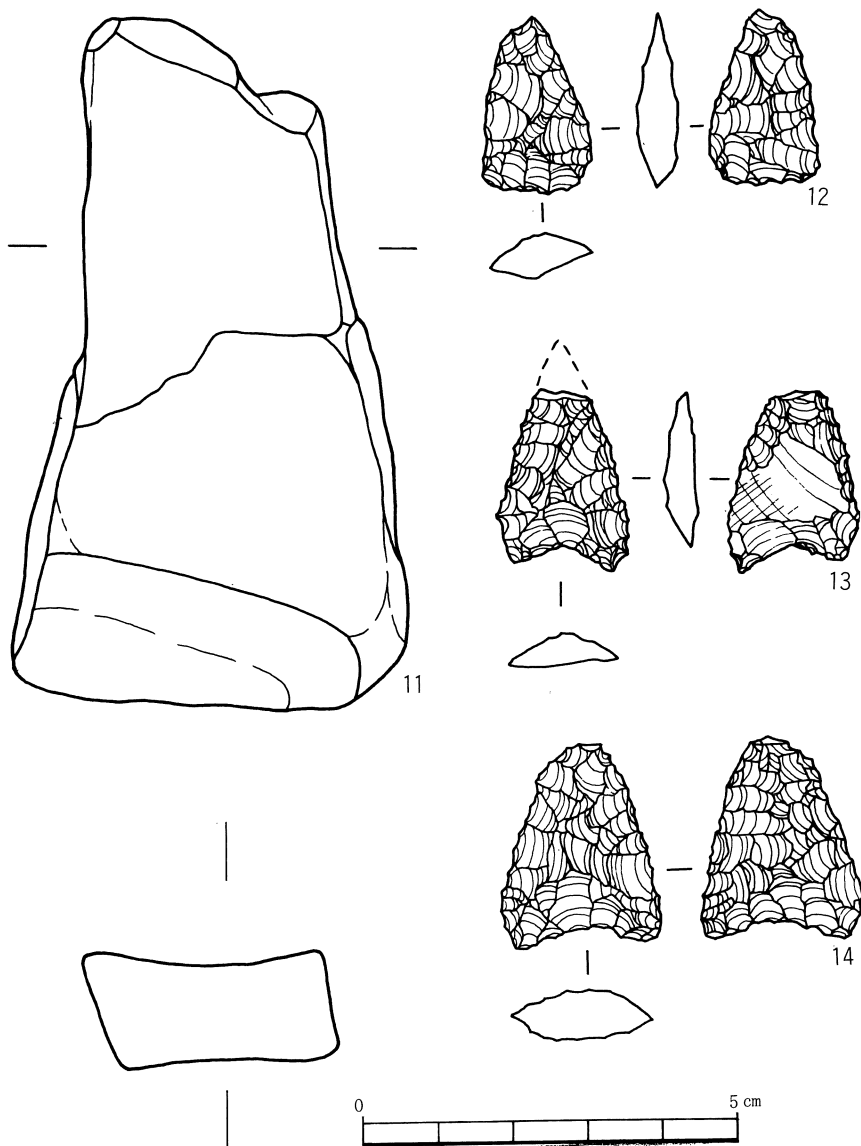
第55図 森山S B24平・断面図

第28表 森山S B24出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
56図-1		甕	(28)				口縁部内外面→コナテ、胴部→ハケ目	角閃石、石英砂粒を含む	褐色
同-2		同上	(25)				不明	同上	黄褐色
同-3		同上	(23)				同上	同上	褐色
同-4		高坏	(17)				同上	同上	黄褐色
同-5		甕	(24)				口縁部内外面→コナテ、内面 →テ、外面→コナテ	同上	同上
同-6		同上	(40)				不明	同上	褐色
同-7		甕底部				7.0	不明	同上	明褐色
同-8		同上				6.5	不明	同上	黄褐色
同-9		同上				(7.5)	不明	同上	赤褐色
同-10		同上				(8.5)	不明	同上	黄褐色



第56图 森山S B 24出土土器实测图



第57図 森山S B24出土石器実測図

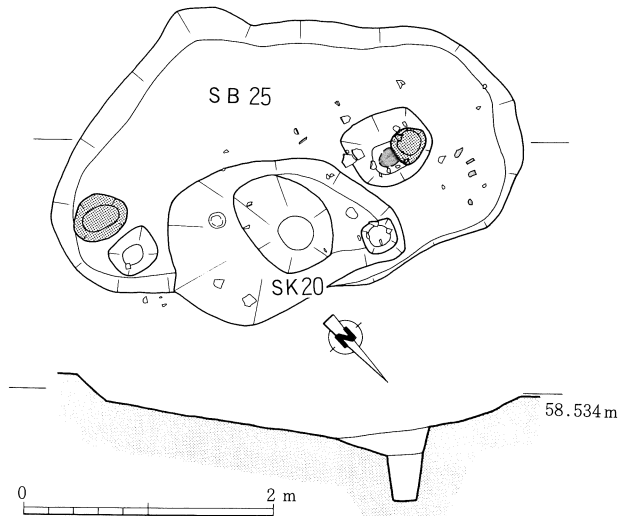
第29表 森山S B24出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
第57図-11		砥石	砂岩	113	4面とも使用している
同-12		打製石鏃	姫島産黒曜石	1.6	平基式
同-13		同上	同上	1.2	先端部欠損、凹基式
同-14		同上	同上	3.0	凹基式

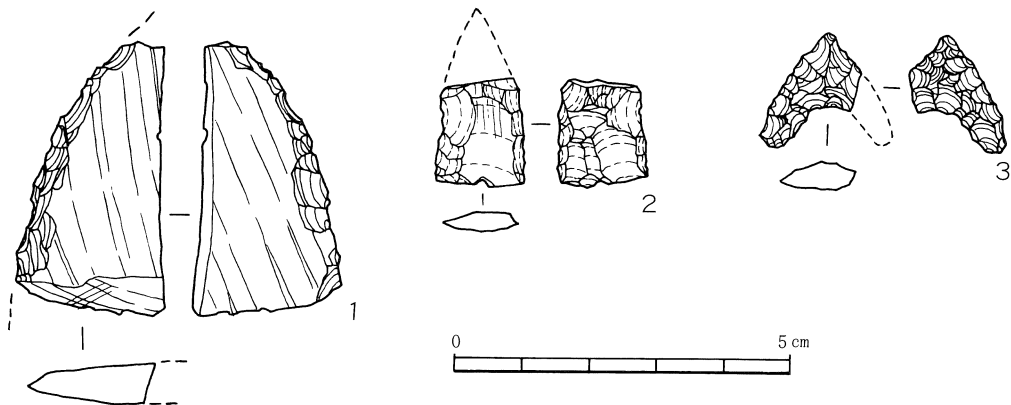
S B 25 (第58図)

本竪穴は舌状丘陵の基部（東側）の中央やや北側、標高58.5mに位置する。この位置はS B 24の南東約2.5mに位置する。北壁のほぼ中央はS K 20にその一部をカットされている。平面形態は東西に長い卵倒形状を呈している。東西長約3.85m、南北長2.15m、現存部分の壁高は約15～25cmを測り、ほぼ45°の緩やかな傾斜で立ち上がる。床面は中央に向かって約10°の傾斜で下がっている。床面の西側は径65cm、深さ20cmのやや大形のピットが検出され、これには焼土および炭層が認められた。なお、このピットは西側を小ピットによってカットされている。ピットは4個を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットは床面東西の2個で、本竪穴は2本柱主柱穴のものと考えられる。

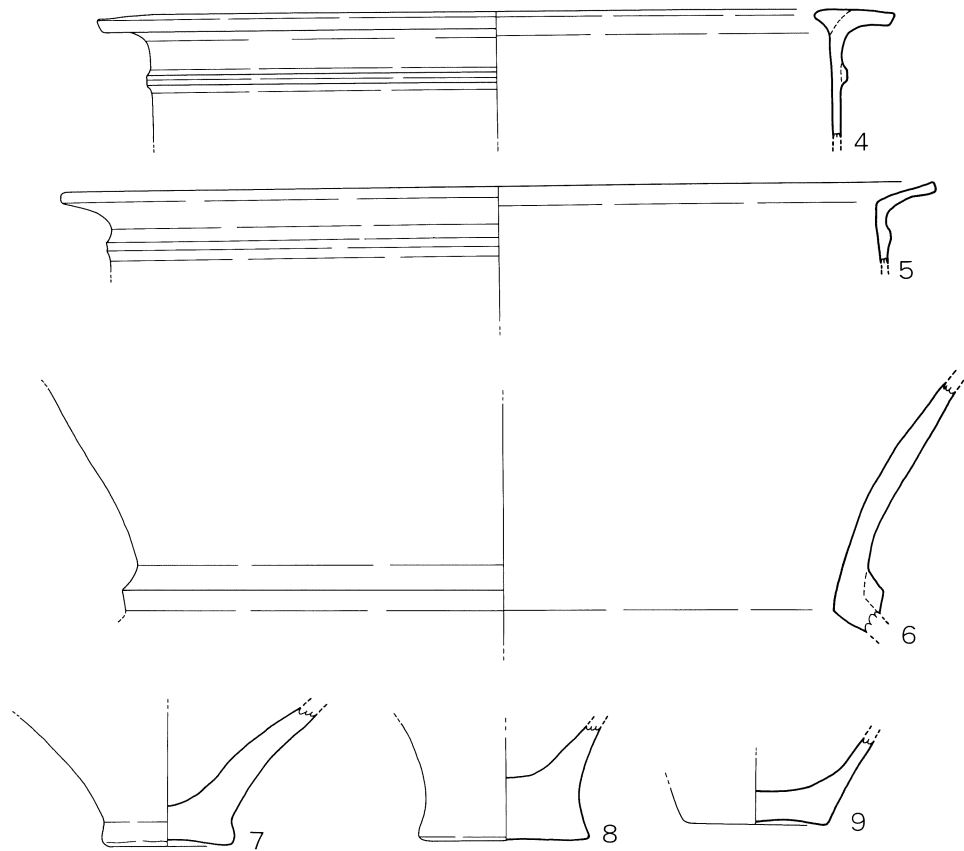
遺物の出土は竪穴のほぼ中央に20点前後が散乱する。甕などの弥生土器片のほかスクレーパー1点、打製石鏃2点が認められた。



第58図 森山S B 25平・断面図



第59図 森山S B 25出土石器実測図



第60図 森山S B 25出土土器実測図
 第30表 森山S B 25出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
59図-1		スクレーパー?	結晶片岩	6.0	先端・基部欠損
同-2		石鏃	サヌカ石	0.8	先端部欠損、平基式
同-3		同上	姫島産黒曜石	0.5	基部片方欠損、凹基式

第31表 森山S B 25出土土器観察表

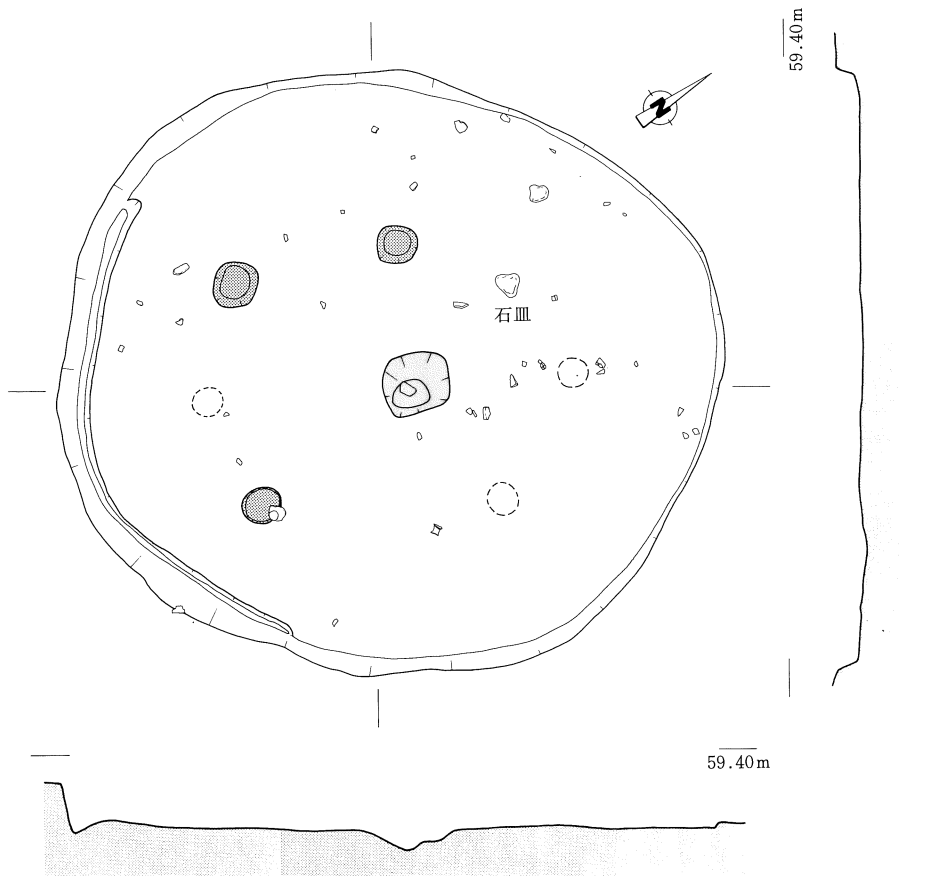
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数值は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
60図-4		甕口縁	(25)				不明	角閃石、石英を含むが精緻	黄褐色
同-5		同上	(35)				同上	白色の石粒含むが精緻	淡橙色
同-6		壺頸部		(26)			同上	角閃石、斜長石含むが精緻	黄褐色
同-7		底部 (蓋の可能性有)				5.5	同上	同上	同上
同-8		同上				7.0	同上	同上	同上
同-9		同上				6.0	同上	同上	同上

S B26(第61図)

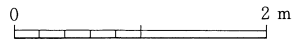
本竪穴は舌状丘陵の基部（東側）の中央尾根頂部、標高59mに位置する。この位置はS B24の南約3mに位置する。

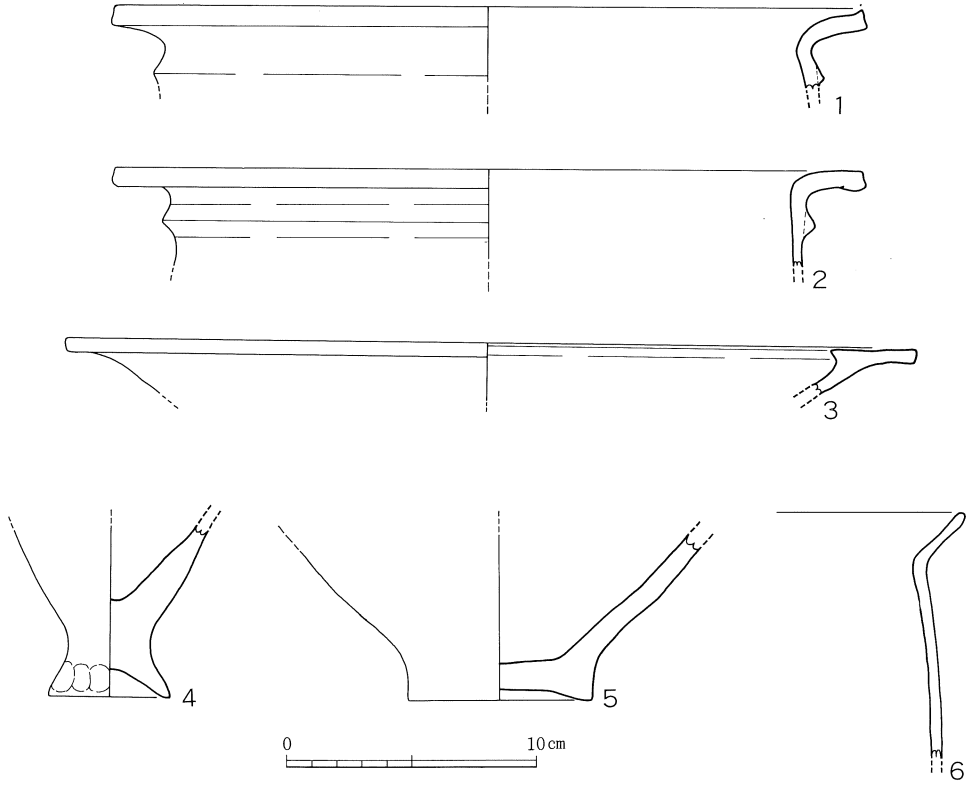
S B26は南北径5.0m、東西径5.2m前後のほぼ正円形プランを呈す。現存部分の壁高は南側で30cm前後、北側で10cm前後を測り、ほぼ80°の急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、幅20cm、深さ5cm前後の壁溝が南側の壁にそって一部認められる。床面の中央に径50~60cm前後、深さ15cmの焼土塊や炭層が混入したピットが検出された。ピットは床面に3個が認められたが、本来なら6個がほぼ円形に並ぶ竪穴住居跡と考えられる。

遺物の出土は弥生土器片30点前後が床面全体に散乱しているほか偏平打製石斧1点、石皿1点が認められた。

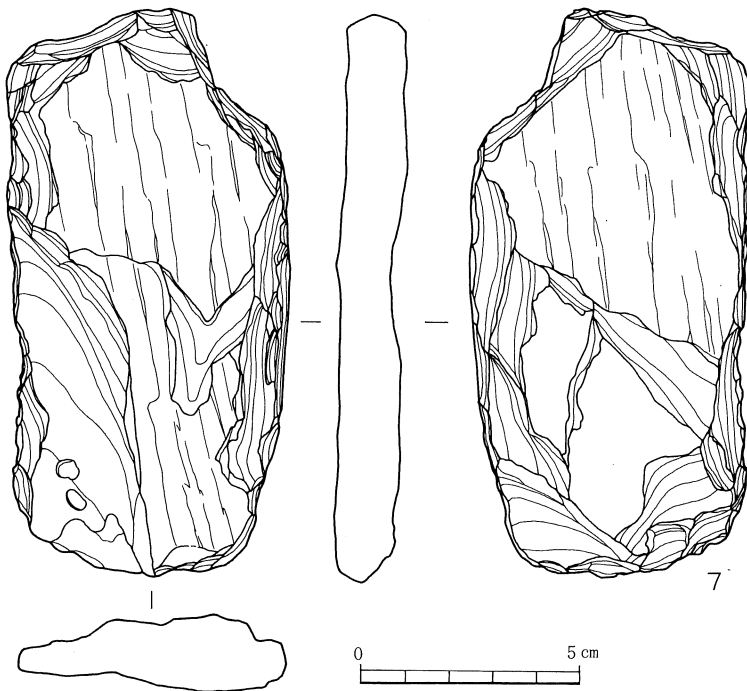


第61図 森山S B26平・断面図





第62図 森山S B26出土土器実測図



第63図 森山S B26出土石器実測図

第32表 森山S B26出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
62図-1		甕口縁部	(30)					不明	角閃石、白色小砂粒を含む	内→茶褐色、外・断面→黄褐色
同-2		同上	(26)					同上	同 上	暗黄褐色
同-3		高坏坏部	(28)					同上	同 上	明黄褐色
同-4		底部				5.0		脚底部外面に指押え痕有、他は不明	同 上	黄褐色で脚外面に黒班有
同-5		底部				7.5		不明	同 上	赤褐色
同-6		甕口縁部片						同上	角閃石、石英、白色石粒を含む	同上

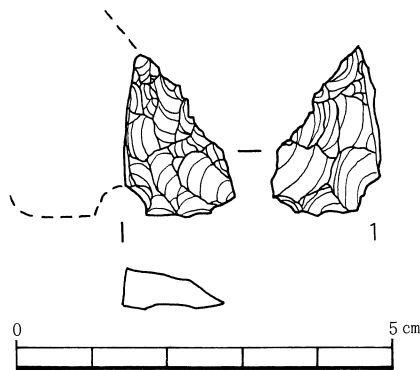
第33表 森山S B26出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
63図-7		偏平打製石斧?	結晶片岩	56.5	全体に風化著しい

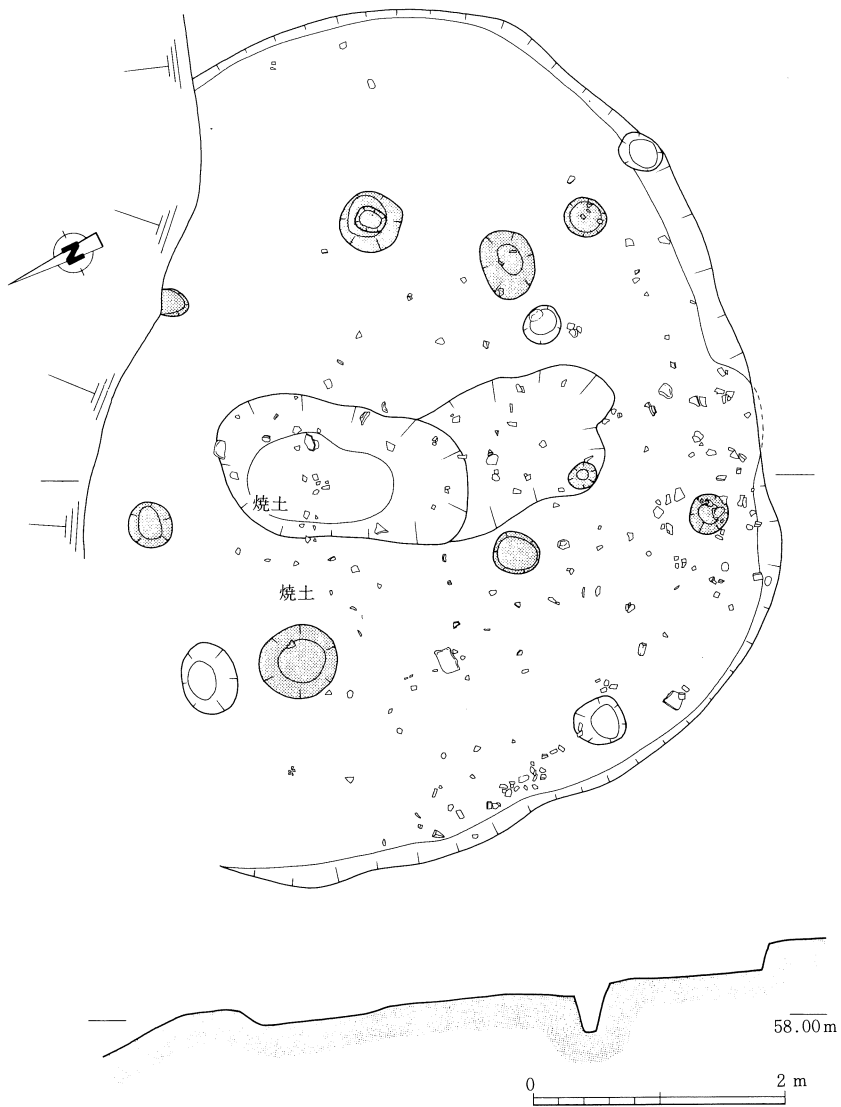
S B27 (第65図)

本竪穴は舌状丘陵の基部（東側）の中央やや北側、標高58.5mに位置する。この位置はS B25の東約1.5mにあたる。北壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面は丸みを持つ隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約2.6m + α 、南壁辺5.6m、西壁辺4.2m + α 、現存部分の南壁高は約20cmを測り、ほぼ80°のやや急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。床面中央に長さ60cm + α 、幅55cm、深さ10cmの規模の土坑とそれを切って長さ約2.0m、幅1.0m、深さ10cmの楕円形の土坑が検出された。ともに焼土塊や炭層が混入している。また、この土坑の北西側に径25cmの焼土も認められた。ピットは屋内に12個、壁に1個を数えるが、確実に本住居跡に付随すると思われるピットは6個が円形に並び、さらに南側に2個底状に付設する。

遺物の出土は主に竪穴全体に150点前後が散乱する。高坏、長頸壺、甕などの弥生土器片と打製石鏃1点、砥石4点、石皿3点などが認められた。



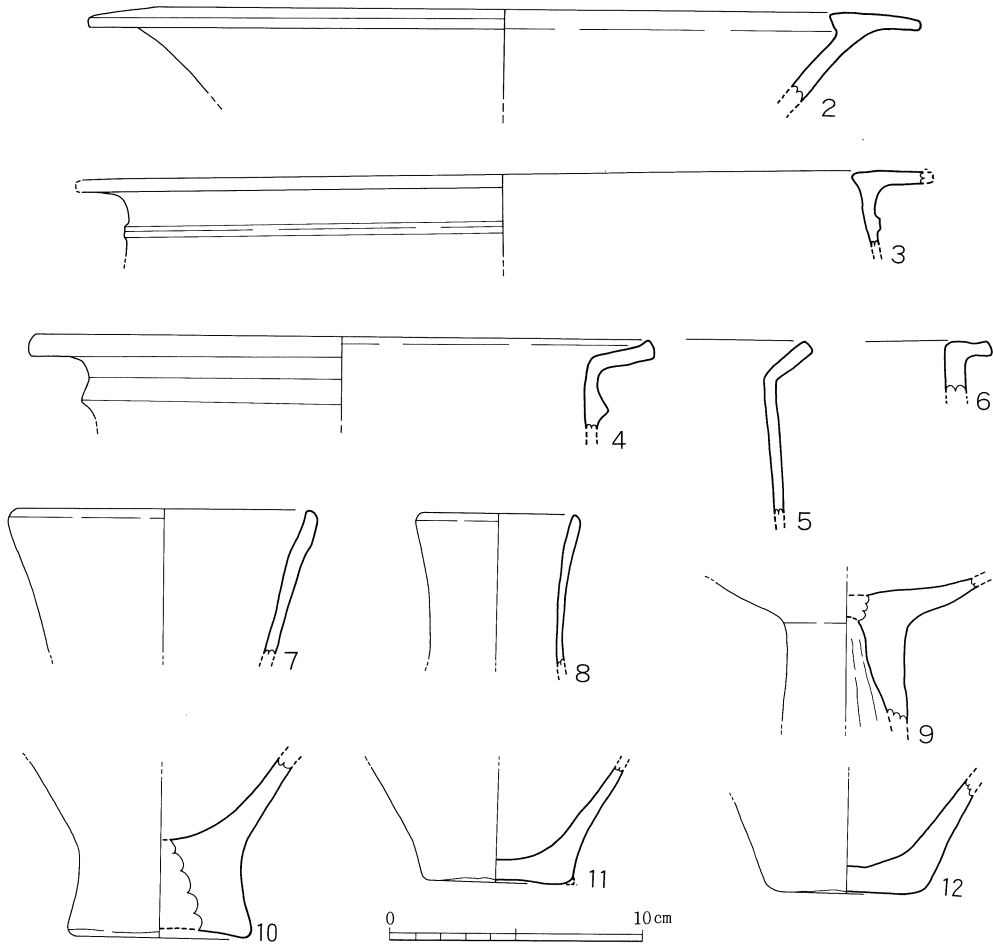
第64図 森山S B27出土石器実測図



第65図 森山S B27平・断面図

第34表 森山S B27出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
64図-1		打製石鏃?	姫島産黒曜石	0.8	約1/3残存 凹基式



第66図 森山S B27出土土器実測図

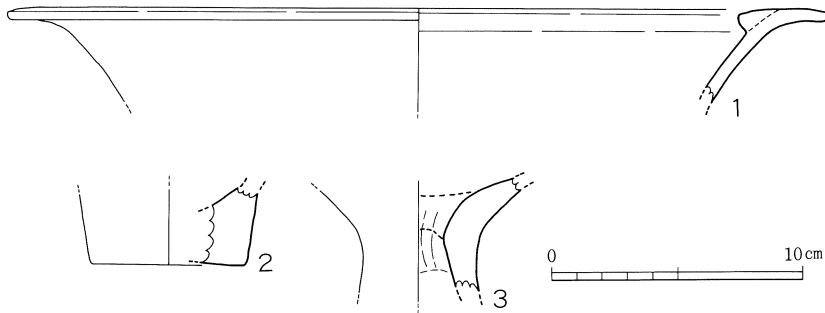
第35表 森山S B27出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
66図-2		高坏口縁	(26)					不明	角閃石、斜長石含むが、精緻	黄褐色
同-3		甕口縁	(28)					同上	角閃石、斜長石を含む	同上
同-4		同上	(24.5)					同上	同 上	同上
同-5		甕口縁片						同上	白色砂粒含むが、精緻	暗黄褐色
同-6		同上						同上	精緻	黄褐色
同-7		長頸壺	(12)					同上	角閃石、斜長石を含む	同上
同-8		同上	(6.5)					同上	同 上	同上
同-9		高坏脚部						同上	同 上	同上
同-10		底部				(7.5)		同上	同 上	同上
同-11		同上				(6)		同上	同 上	同上
同-12		同上				(6)		同上	同 上	同上

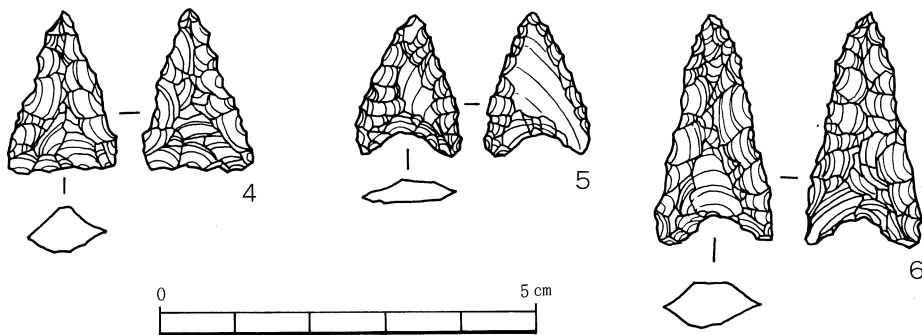
S B 28 (第69図)

本竪穴は舌状丘陵の基部（東側）の中央、標高約58.5mに位置する。この位置はS B 27の南東約3.5mにあたる。丘陵頂部に位置することと斜面が急なため西壁以外は削平・流失している。その結果現存平面はほぼ楕円の弧状を呈している。現存部分で南北長約6.5m前後を測る。西壁高は約10cmを測り、ほぼ70°のやや急な傾斜で立ち上がる。床面は北方向に3°の緩やかな傾斜を持つ。床面中央のやや南側には長さ190cm、幅70cm、深さ30cmのほぼ卵倒形状の土坑が検出された。この土坑の底面には長さ130cm、幅70cmの範囲に厚さ10mmの粘土が認められた。ピットは屋内に44個を数える。確実に本竪穴に付随すると思われるピットは中央土坑を取り巻く9個と考えられ、さらに西側に2個庇状に付設する。

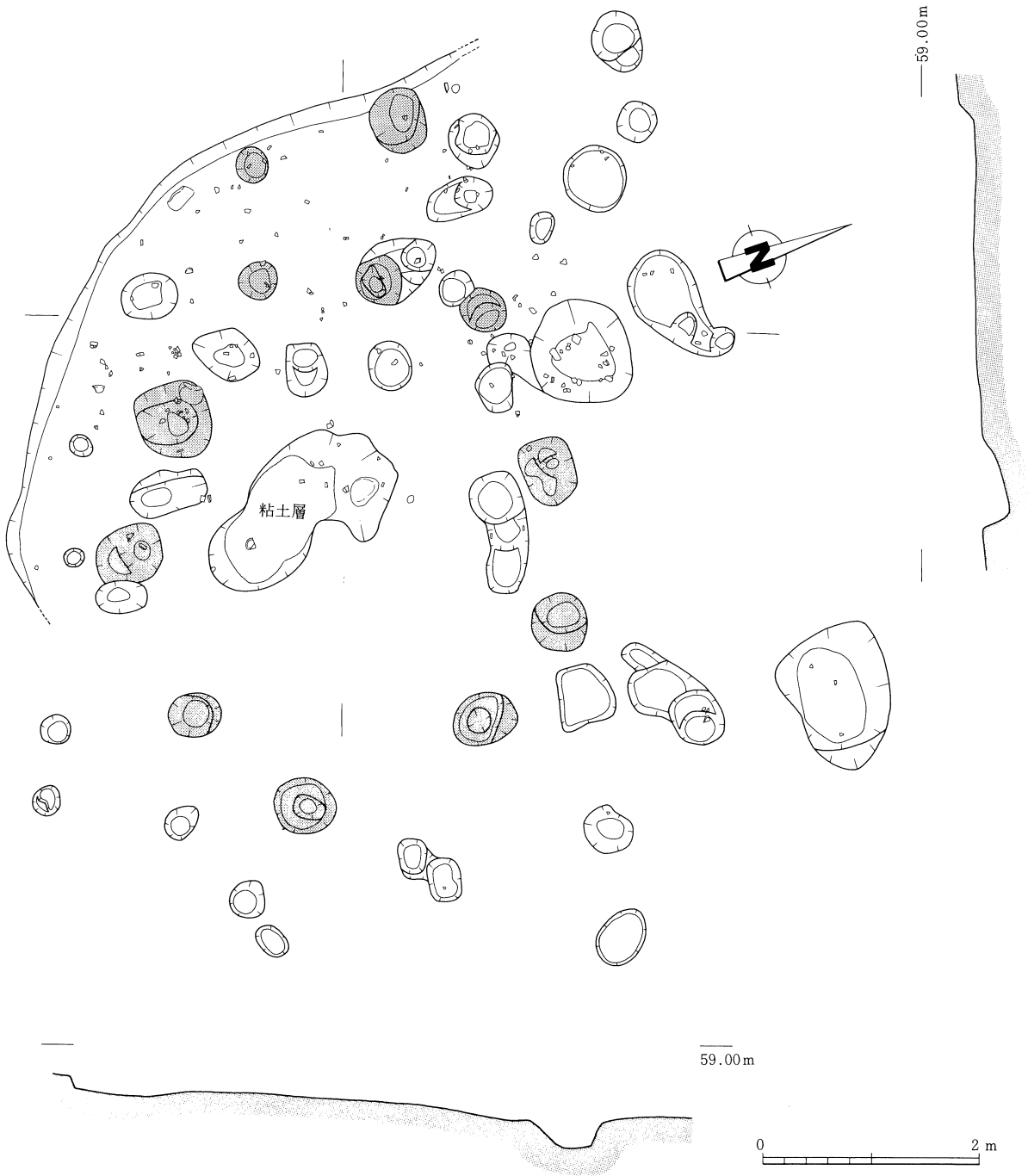
遺物の出土は100点前後が竪穴全体に散布し、甕、壺などの弥生土器片とともに打製石鏃3点、磨石1点、敲石2点、石皿1点、偏平打製石斧1点が認められた。



第67図 森山S B 28出土土器実測図



第68図 森山S B 28出土石器実測図

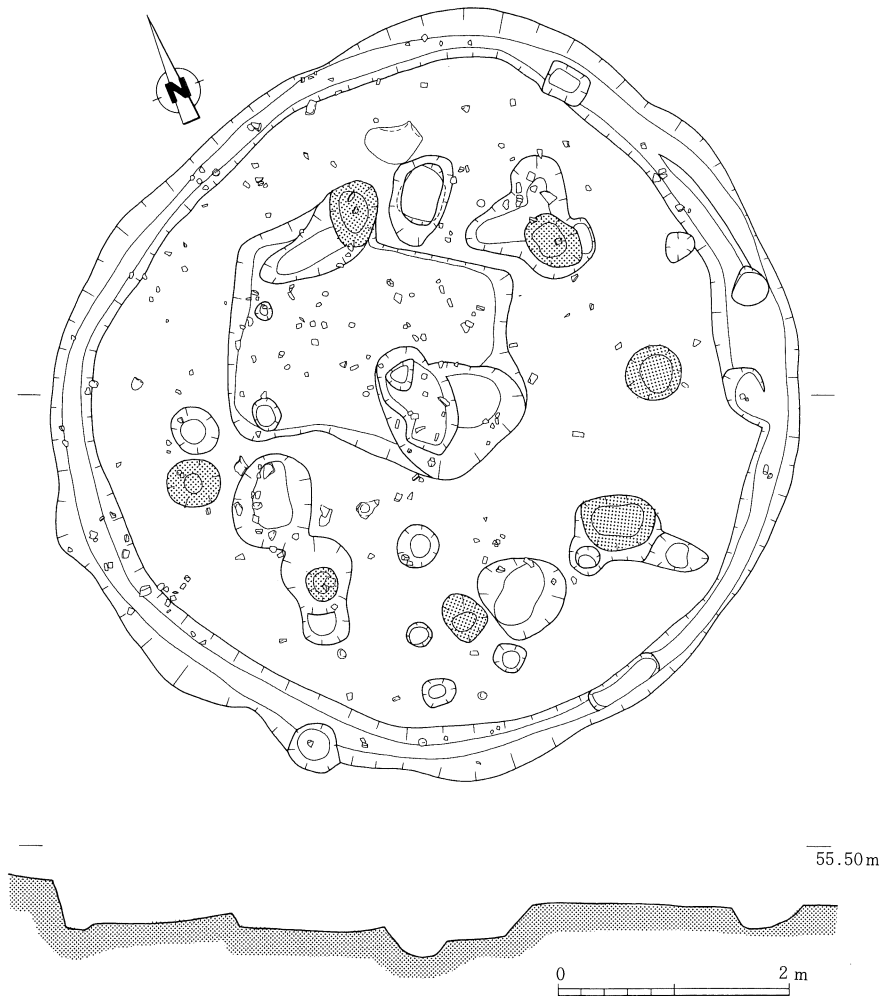


第69図 森山S B 28平・断面図

S B 29(第70図)

本竪穴は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵南側基部の頂部よりやや東斜面付近、標高55mに位置する。この位置はS B 24の北東約32mにあり、その間をS D 2によって区切られている。

S B 29は南北径6.15m、東西径6.6m前後のほぼ正円形プランを呈す。現存部分の壁高は東側で40cm前後、西側で5cm前後を測り、東壁はほぼ80°の急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、幅30~50cm、深さ5~20cm前後の壁溝が全周する。床面の中央よりやや北西側に東西辺1.8m前後、南北辺2.4m前後、深さ10cm前後の炭層が混入した隅丸長方形土坑が検出された。この土坑の北辺で長さ1.3m、幅0.5m、深さ15cmの卵倒形土坑が、南・東辺コーナーで長さ1.2m、幅1.0m、深さ15cmの不定形土坑が長方形土坑をカットしてそれぞれ確認された。ピットは床面に15個、壁面に3個が認められた。確実に本竪穴に付随すると思われるピットは中央土坑を取り巻く7個と考えられる。



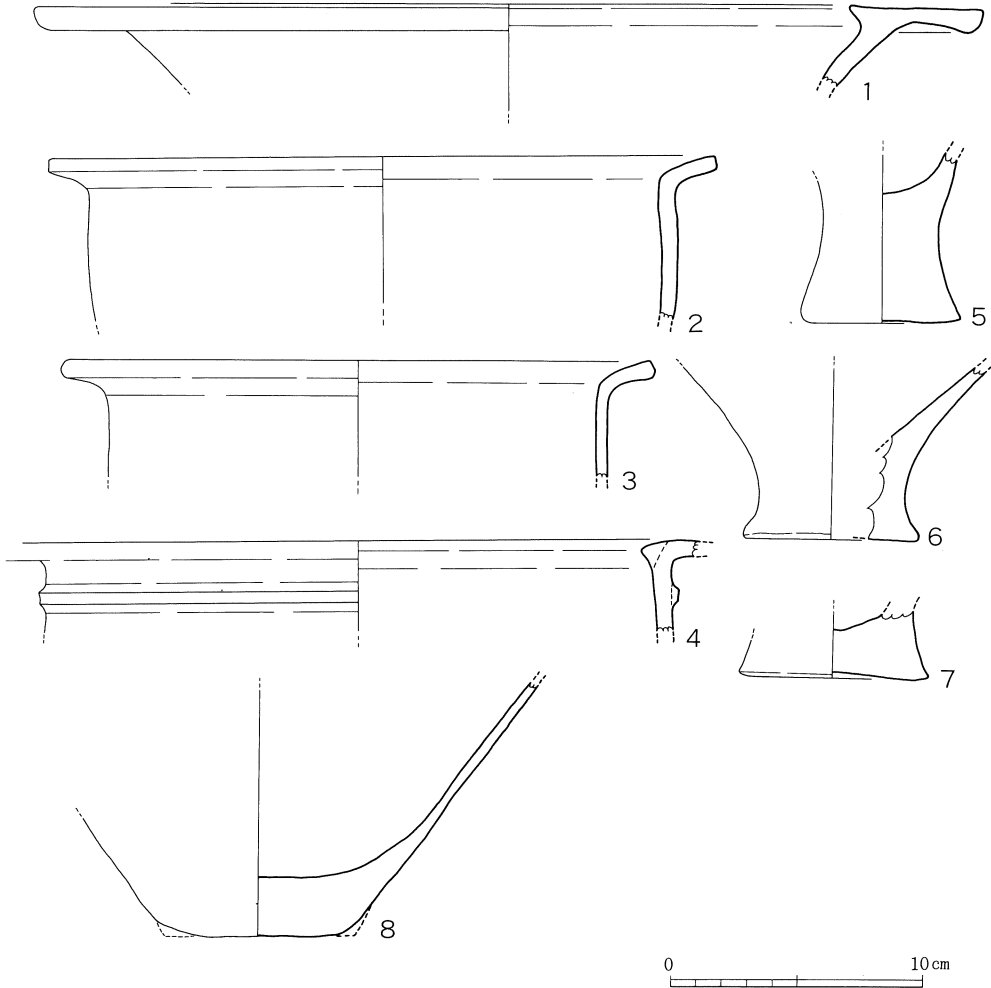
第70図 森山S B 29平・断面図

第36表 森山S B28出土土器観察表

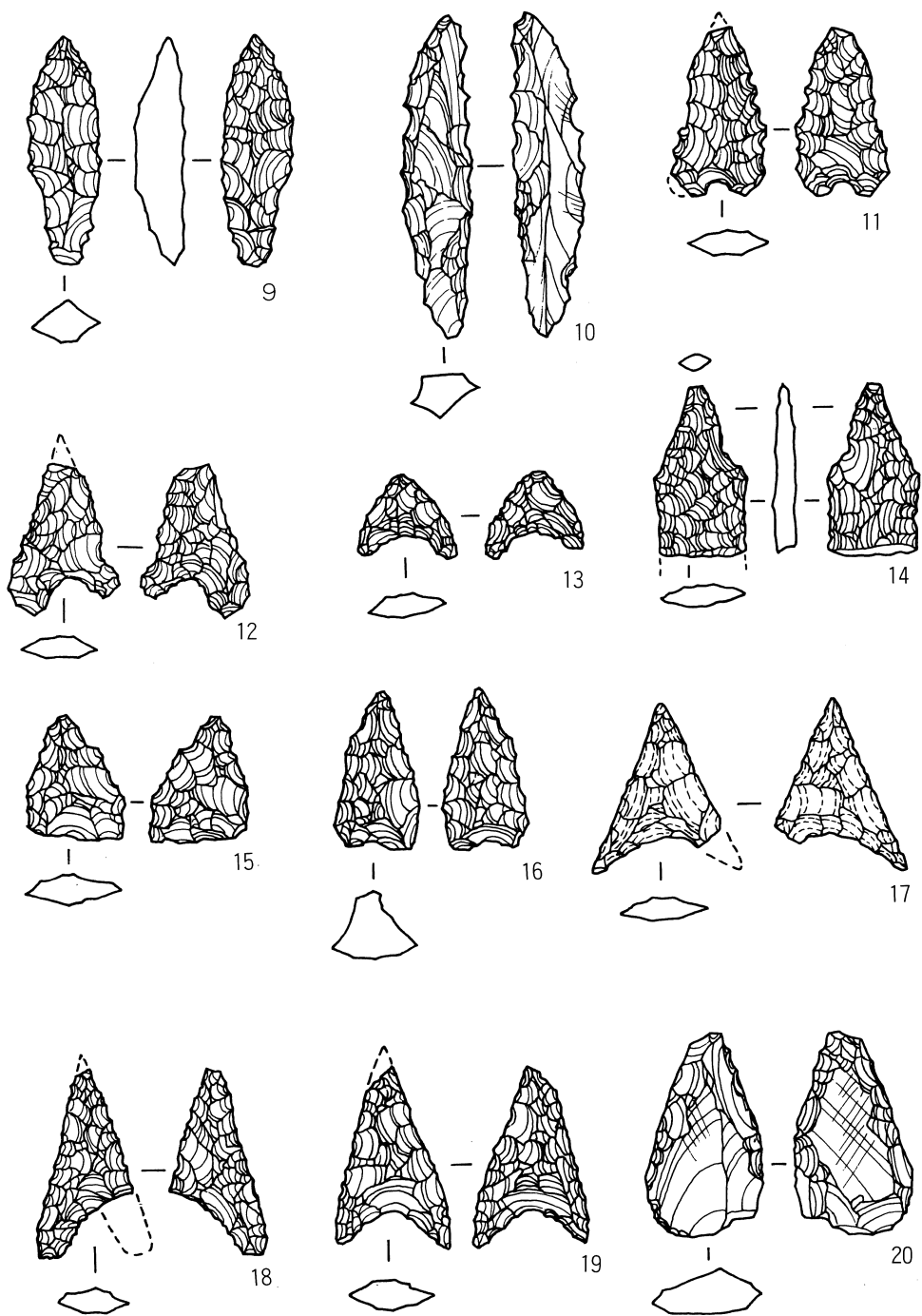
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部 最大径	胴部 最大径	底 径	器 高			
67図-1		壺口縁片?	(25)					不明	角閃石、斜長石を含む	明褐色
同-2		底部				(6)		同上	角閃石、斜長石を含む	明褐色
同-3		高坏脚部						同上	角閃石、斜長石を含む	赤褐色

第37表 森山S B28出土石器観察表

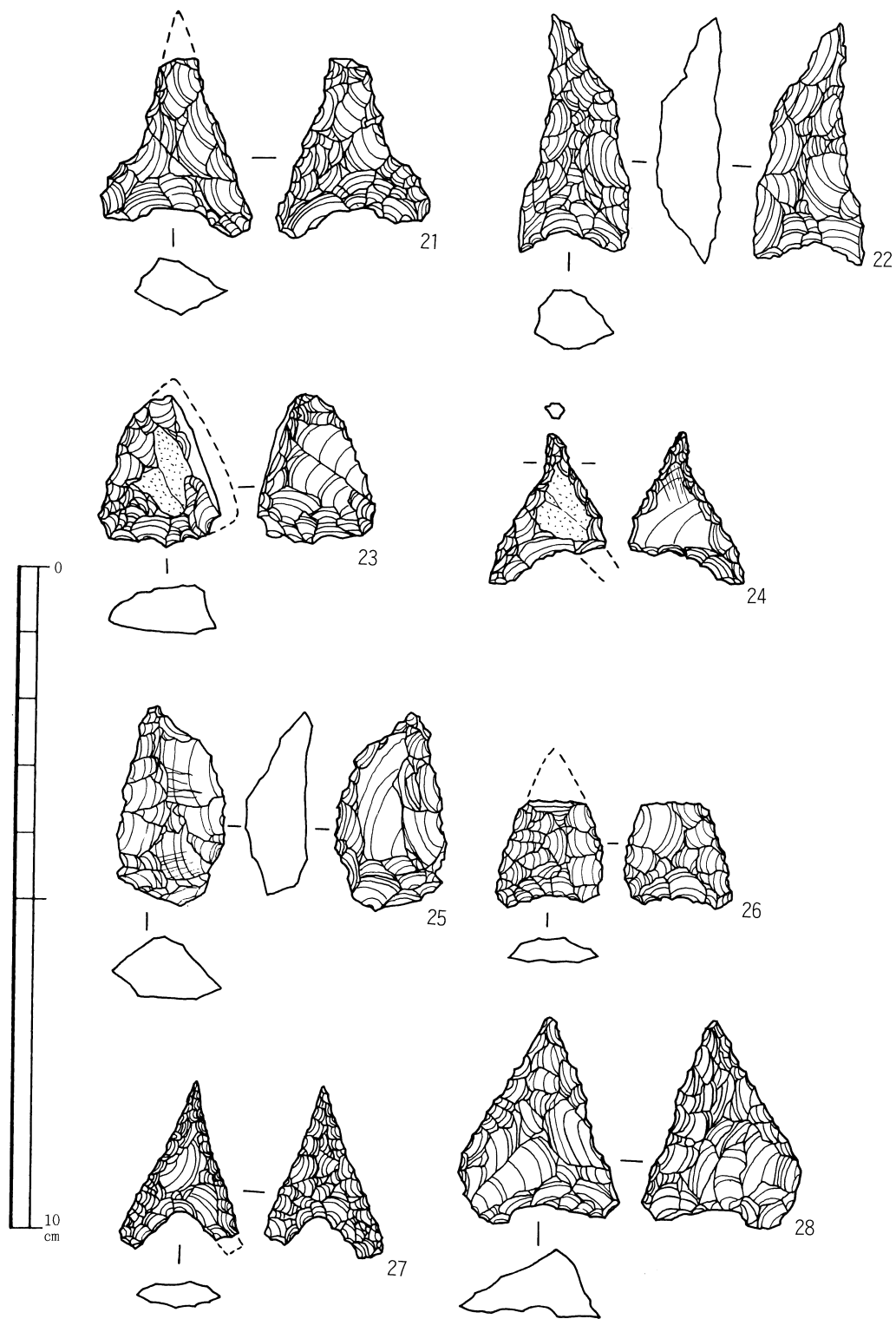
番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
68図-4		打製石鏃	姫島産黒曜石	1.9	平基式
同-5		同上	腰岳産黒曜石	1.3	凹基式
同-6		同上	姫島産黒曜石	0.5	凹基式



第71図 森山S B29出土土器実測図

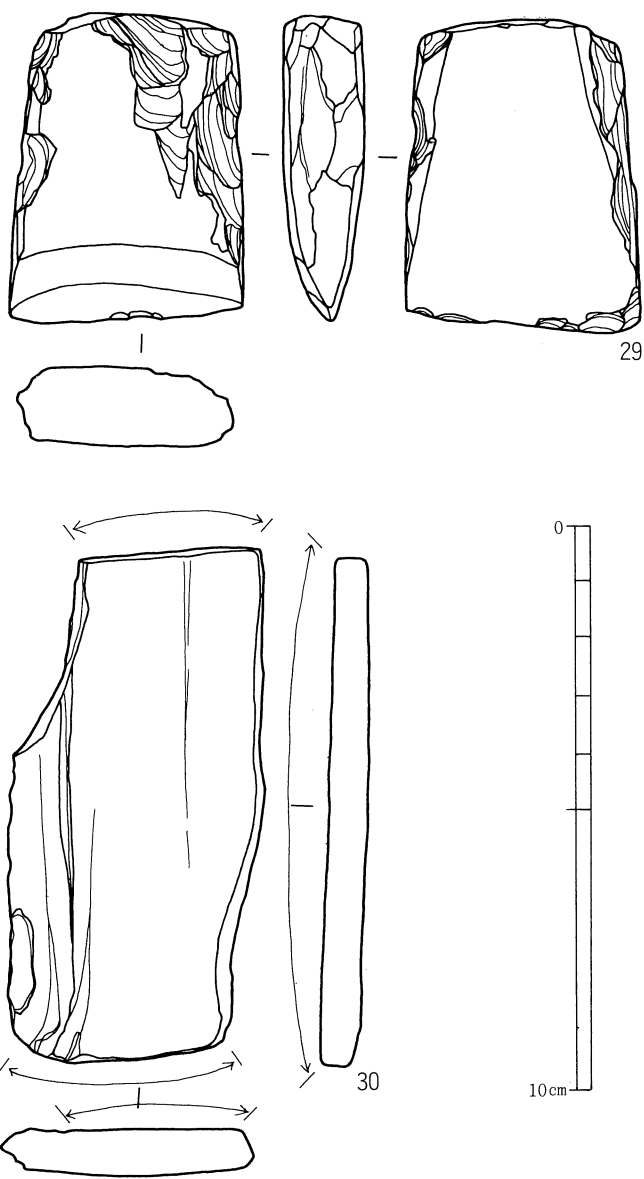


第72图 森山 S B29出土石器实测图(1)



第73图 森山S B 29出土石器实测图(2)

遺物の出土は120点前後が竪穴全体に散布し、甕、壺などの弥生土器片とともに打製石鏃28点、同未製品3点、磨製石斧1点、偏平片石斧1点、砥石1点、磨石2点、スクレーパー3点、石皿1点、石核2点、剥片72点などが認められた。特に石核、剥片、打製石鏃が多量に出土したのが特徴である。



第74図 森山S B29出土石器実測図(3)

第38表 森山S B29土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
70図-1		壺口縁?	(28)					不明	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-2		甕口縁	(27)					内外面→ヨコナデ	白色砂粒を多く含む	赤褐色
同-3		同上	(23)					内面→不明、外面→ヨコナデ	角閃石、斜長石を含む	褐色
同-4		同上	(23)					内外面→ヨコナデ	同 上	黄褐色
同-5		底部				6.5		不明	同 上	同上
同-6		同上				(7.2)		同上	石英、白色砂粒を含む	明褐色
同-7		同上				7.8		同上	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-8		同上				7.8		同上	角閃石、斜長石を含む	同上

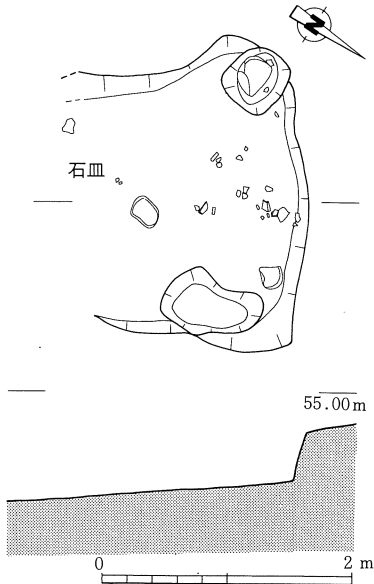
第39表 森山S B29出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
72図-1		石鏃	姫島産黒曜石	1.5	
同-10		同上	同上	2.4	
同-11		同上	同上	0.8	凹基式
同-12		同上	同上	0.7	同上
同-13		同上	同上	0.3	同上
同-14		同上	同上	1.0	基部欠損
同-15		同上	同上	0.9	平基式
同-16		同上	同上	2.1	同上
同-17		同上	サヌカイ	0.6	凹基式
同-18		同上	姫島産黒曜石	0.7	同上 脚部と先端部欠損
同-19		同上	同上	1.1	凹基式
同-20		同上	同上	2.7	凸基式
73図-21		同上	同上	2.6	凹基式 先端部欠損
同-22		同上	同上	4.1	凹基式
同-23		同上	同上	3.0	凸基式
同-24		同上	同上	1.0	凹基式 脚部欠損
同-25		同上	同上	3.8	凸基式
同-26		同上	同上	1.0	平基式 先端部欠損
同-27		同上	腰岳産黒曜石	1.2	凹基式 脚部欠損
同-28		同上	チャート	5.0	同上
74図-29		扁平片刃石斧	頁岩	61	
同-30		砥石	結晶片岩	56.5	

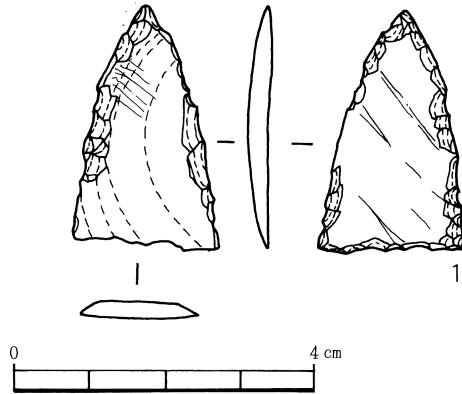
S B30 (第75図)

本竪穴は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵南側の東斜面付近、標高54.5mに位置する。この位置はS B29の北東約8.5mにあたる。東壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面は隅丸のコ字状を呈している。西壁辺約1.5m + α 、北壁辺2.5m、東壁辺1.6m + α 、現存部分の北壁高は約35cmを測り、ほぼ75°の急な傾斜で立ち上がる。床面は約6°の傾斜で南に下がっている。ピットは北壁の東西コーナー付近に各1個を数える。

遺物の出土はほぼ竪穴の北側を中心に20点前後が散乱する。甕などの弥生土器片とともに石皿、打製石鏃、スクレーパー1点が認められた。



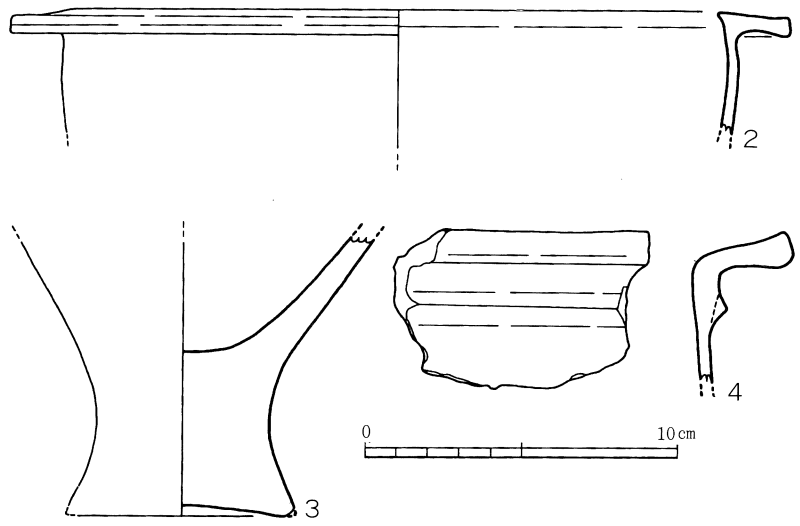
第75図 森山S B30平・断面図



第76図 森山S B30出土石器実測図

第40表 森山S B30出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
76図-1		石鏃	サヌカイト	1.5	平基式



第77図 森山S B 30出土土器実測図

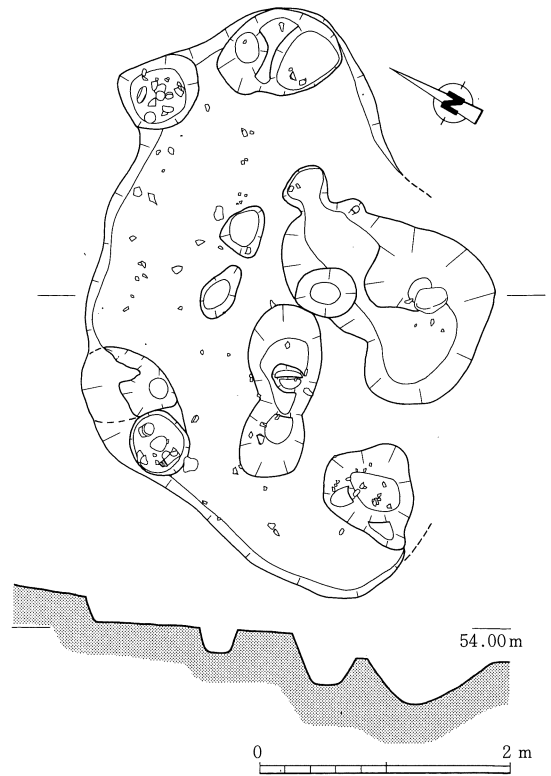
第41表 森山S B 30出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大部	底 径	器 高			
77図-2		甕口縁	20.4					不明	白色砂粒を含む	黄褐色
同一-3		底部				7.5		同上	角閃石、斜長石を含む	赤褐色
同一-4		甕口縁片						同上	角閃石、斜長石を含む	淡黄褐色

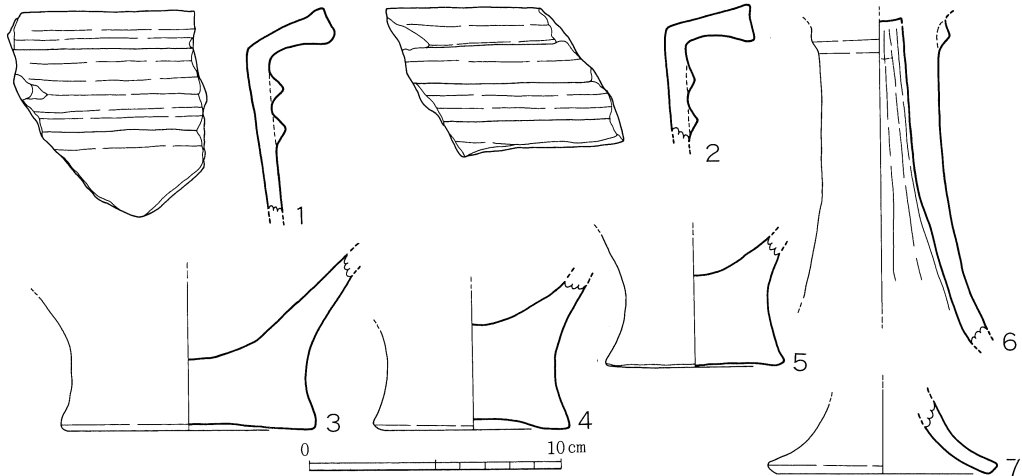
S B31 (第78図)

本竪穴は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵南側の東斜面付近、標高54mに位置する。この位置はS B30の北東約10mにあたり、調査区の北端になる。東壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面は隅丸の楕円形状を呈している。東西長辺約 $3.3\text{m} + \alpha$ 、南北長4.8m、現存部分の北壁高は約25cmを測り、ほぼ 75° の急な傾斜で立ち上がる。床面は約 5° の傾斜で南に下がっている。床面中央南側に、長さ210cm、幅130cm、深さ40cmの楕円形の土坑が確認された。ピットは床面に6個、壁面に3個を数える。

遺物の出土はほぼ竪穴の全体に40点前後が散乱する。甕、高坏などの弥生土器片と打製石鏃1点、磨石1点、敲石3点、偏平打製石斧1点が認められた。



第78図 森山S B31平・断面図



第79図 森山S B31出土土器実測図

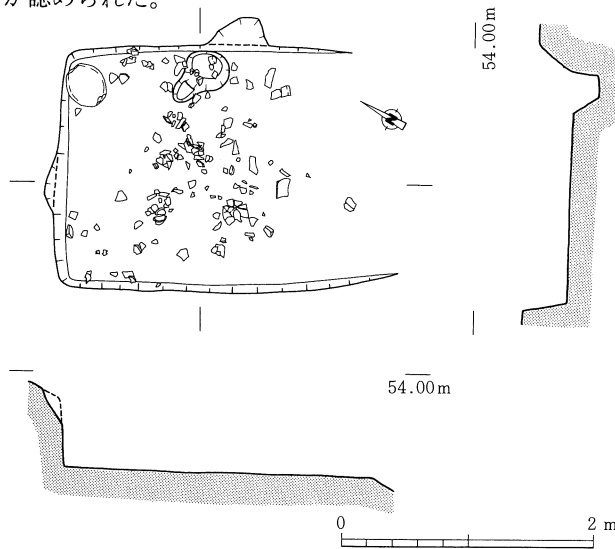
第42表 森山S B31出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	量尺(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径			
79図-1		甕口縁片					内外面→ヨコナデ	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-2		同上					内外面→ナデ	同上	淡褐色
同-3		底部				10.2	同上	同上	明褐色
同-4		同上				8.0	不明	同上	黄褐色
同-5		同上				7.2	同上	同上	赤褐色
同-6		高坏脚部		5.6			同上	同上	明褐色
同-7		同上				9.4	内外面→ヨコナデ	同上	黄褐色

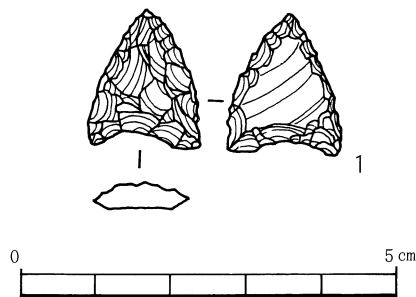
S B 32 (第80図)

本竪穴は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵南側の東斜面付近、標高54mに位置する。この位置はS B 31の東約2mにあたる。南壁は斜面が急なため流失している。その結果現存平面は隅丸のコ字状を呈している。東壁辺約2.3m + α 、北壁辺1.85m、西壁辺2.7m + α 、現存部分の北壁高は約60cmを測り、ほぼ85°の急な傾斜で立ち上がる。床面は平坦である。ピットは東壁際の中央に1個を数える。

遺物の出土はほぼ竪穴の全体に50点前後が散乱する。カメなどの弥生土器片とともに打製石鏃1点、石皿2点が認められた。



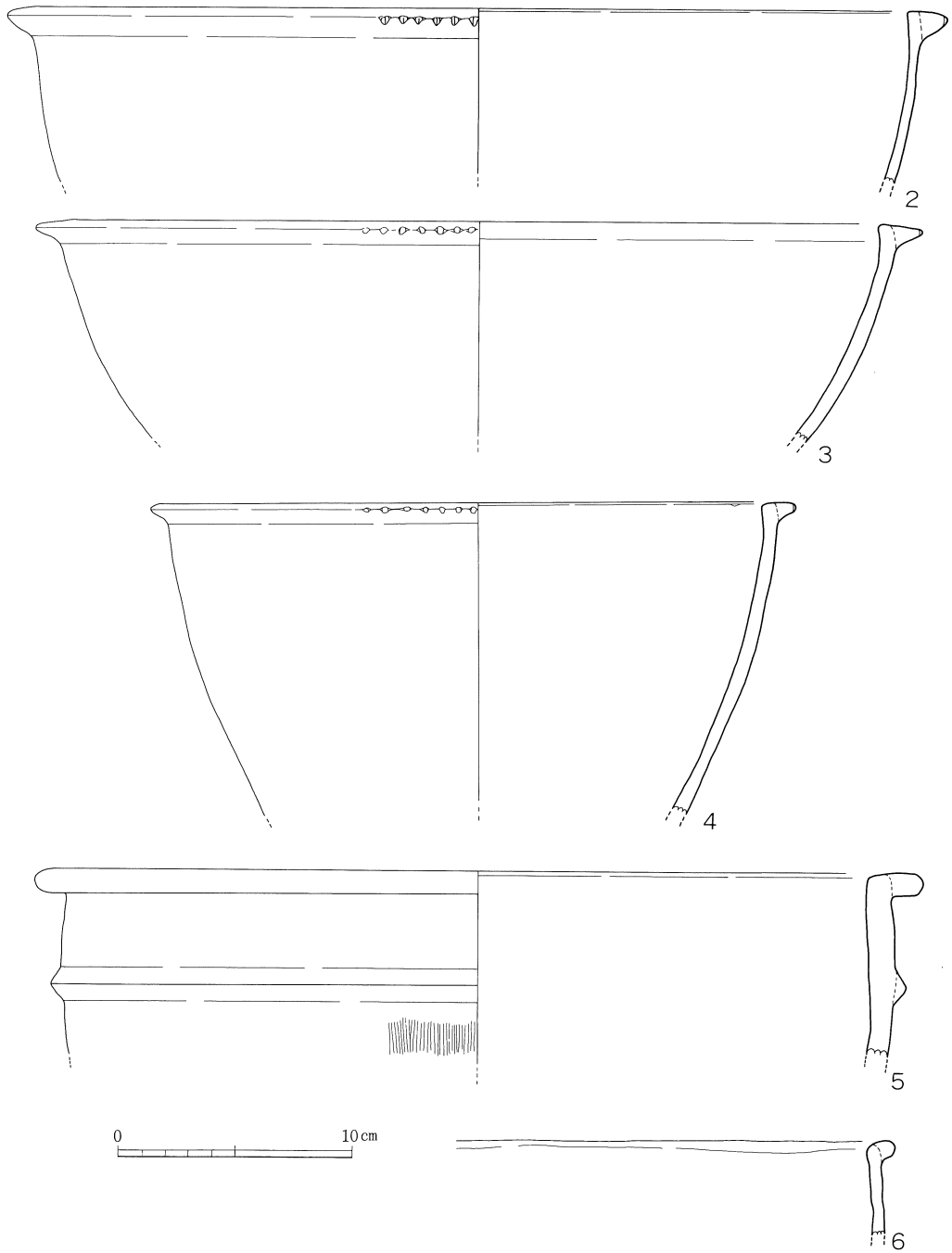
第80図 森山S B 32平・断面図



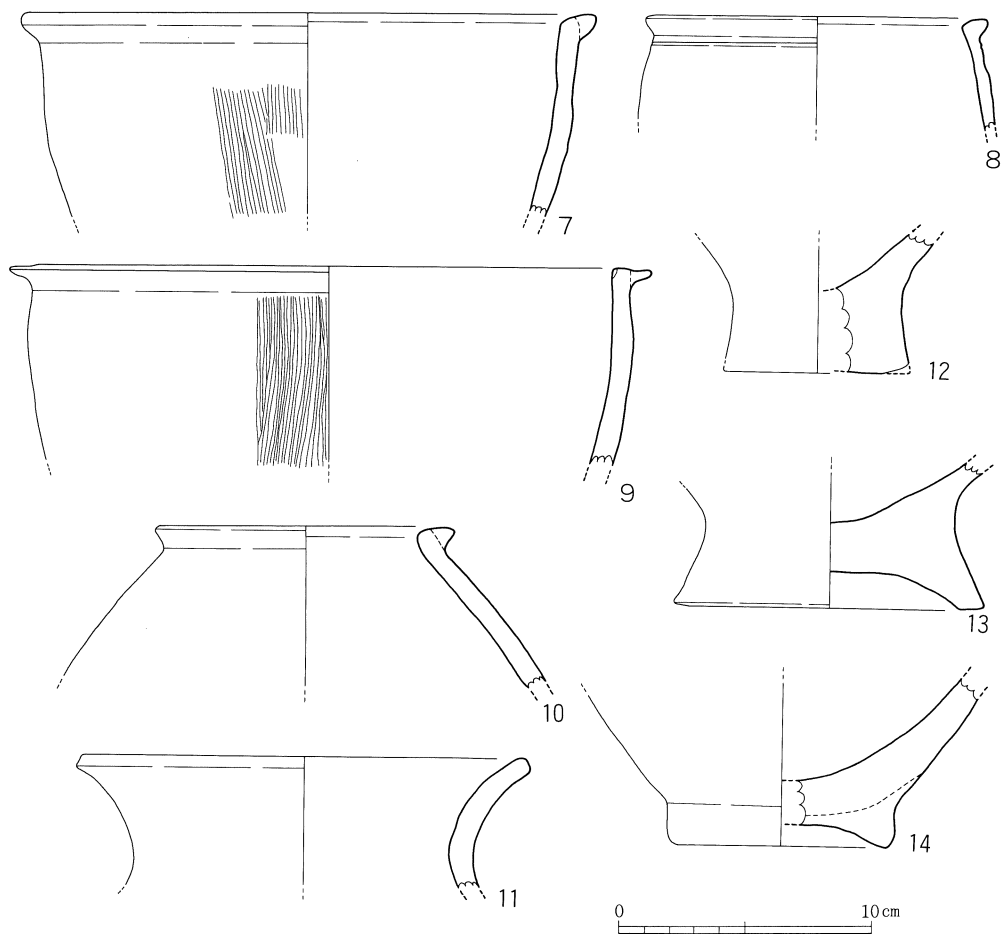
第81図 森山S B 32出土石器実測図

第43表 森山S B 32出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
81図-1		打製石鏃	姫島産黒曜石	0.8	凹基式



第82図 森山S B32出土土器実測図(1)

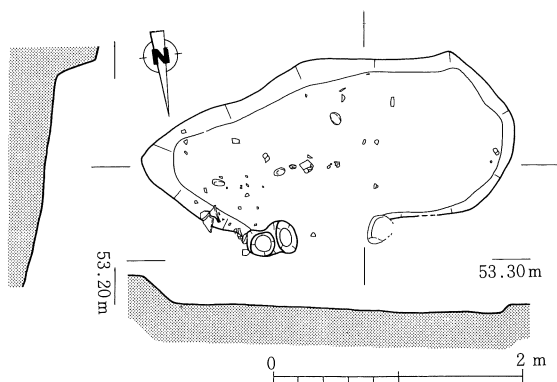


第83図 森山S B 32出土土器実測図(2)

第44表 森山S B 32出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
82図-2		甕口縁	(36)					不明	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-3		同上	(34)					不明	角閃石、斜長石、白色砂粒含む	同上
同-4		同上	(24.4)					内外面→ヨコナデ	同 上	同上
同-5		同上	(34)					内外面→ヨコナデ	同 上	同上
同-6		甕口縁片						不明	同 上	同上
83図-7		甕口縁	(21)					内面・外面口縁ナデ、外面→タテハク	角閃石、斜長石、石英粒含む	黒褐色
同-8		同上	(12.2)					内外面ナデ	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-9		同上	(22.8)					内面・外面口縁ナデ、外面→タテハク	同 上	茶褐色
同-10		甕口縁?	(9)					内外面ヨコナデ?	同 上	黄褐色
同-11		壺口縁	(16.8)					内面不明、外面→ヨコナデ後ハケ目	同 上	同上
同-12		底部				(7.5)		内外面ナデ?	同 上	同上
同-13		同上				12.5		内外面ナデ	同 上	同上
同-14		壺底部				9		不明	同 上	赤褐色

(2)土坑・ピット



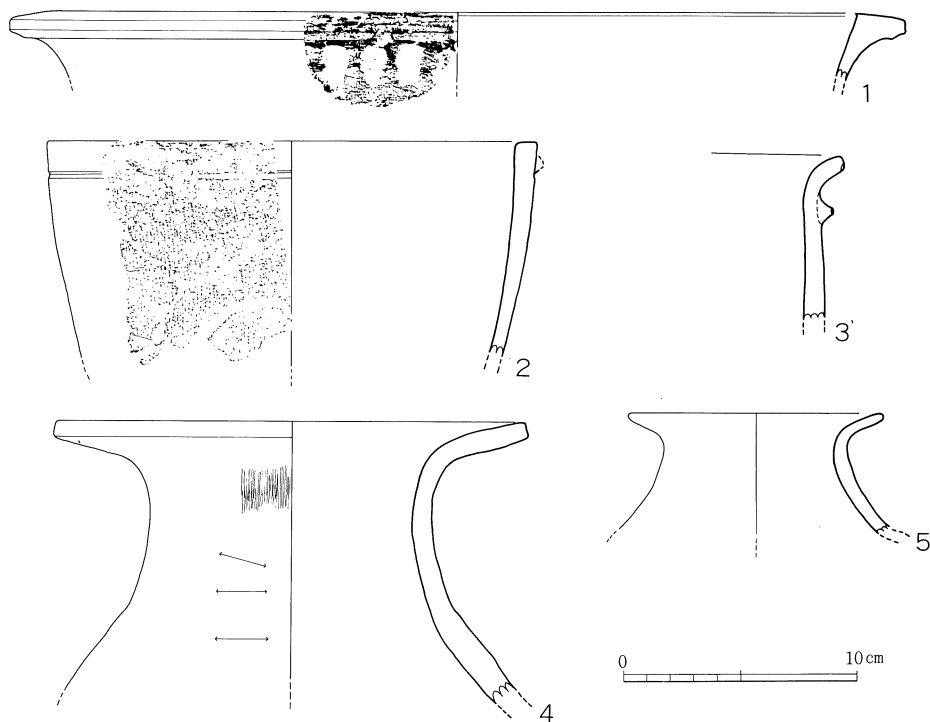
第84図 森山SK 3 平・断面図

SK 3 (第84図)

本土坑は西側に延びる舌状丘陵の西先端の北斜面、標高約53mに位置する。この位置はSK 2の東約1.5mに位置する。平面形態は東西に長い卵倒形状を呈している。北壁の一部は斜面が急なため欠失する。東西長約3m、南北長1.3m、現存部分の南壁高30cm、東壁高20cmを測り、南壁は70°、東壁は45°の傾斜でそれぞれ立ち上がる。床面は北方向に約10°のやや

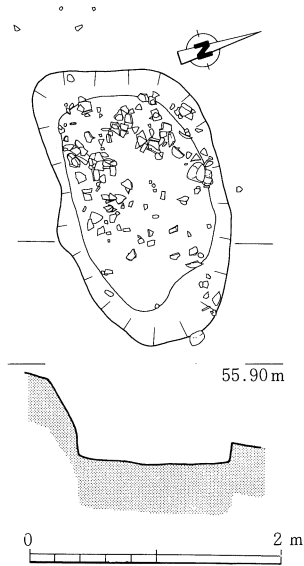
急な傾斜で下がる。ピットは北壁中央付近に2個を数える。

遺物の出土は土坑の中央より東側に30点前後が散乱する。壺、甕などの弥生土器片のほか叩石1点が認められた。



第85図 森山SK 3 出土土器実測図

番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) () の数値は推定復元					調整	胎 土	色 調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
85図-1		甕口縁	(34)					内外面→ヨコナデ、口縁下端→ユビオサエ	石英粒を含む	黄褐色
同一-2		同上	(18.2)					外面→ハケ目、内面→ナデ?	角閃石、石英粒を多く含む	赤褐色
同一-3		甕口縁片						不 明	大粒の石英粒を多く含む	内面→暗褐色、外面→黒褐色
同一-4		壺口縁	(20)					口縁内外面→ヨコナデ? 頸部外面→ハケ目 胴部→ケンマ、内面→ケンマ	角閃石、石英粒を多く含む	赤褐色
同一-5		同上	(10.4)					不 明	同 上	淡黄褐色

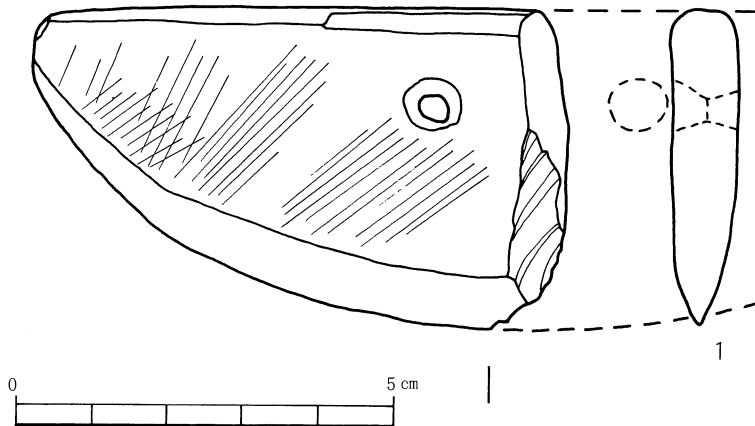


第86図 森山SK 9平・断面図

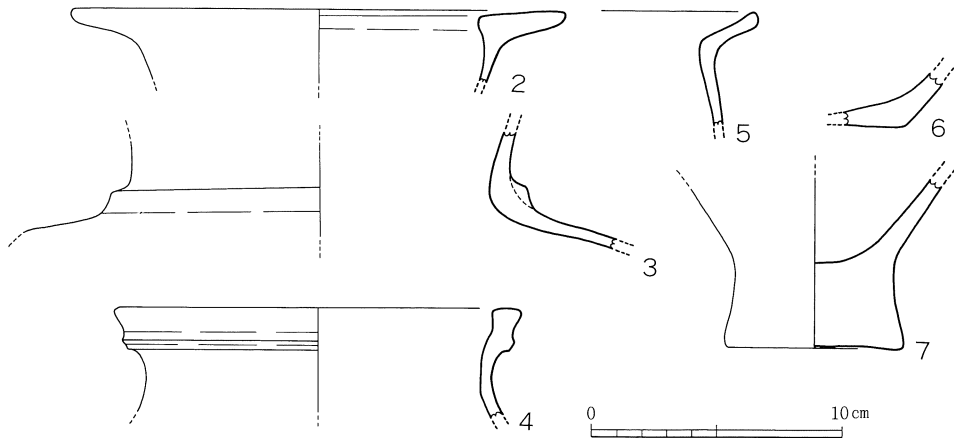
SK 9 (第86図)

本土坑は西側に延びる舌状丘陵のほぼ中央よりやや西側の北斜面、標高56mに位置する。この位置はSB 9の南西約4mに位置する。平面形態は東西に長い卵倒形状を呈している。東西長約2.2m、南北長1.4m、現存部分の南壁高60cm、北壁高10cmを測り、ほぼ75°の急な傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

遺物の出土は土坑の全体に50点前後が散乱する。壺、甕などの弥生土器片のほか石包丁型石器1点、磨石1点、凹石1点、敲石1点、石核1点が認められた。



第87図 森山SK 9出土石器実測図



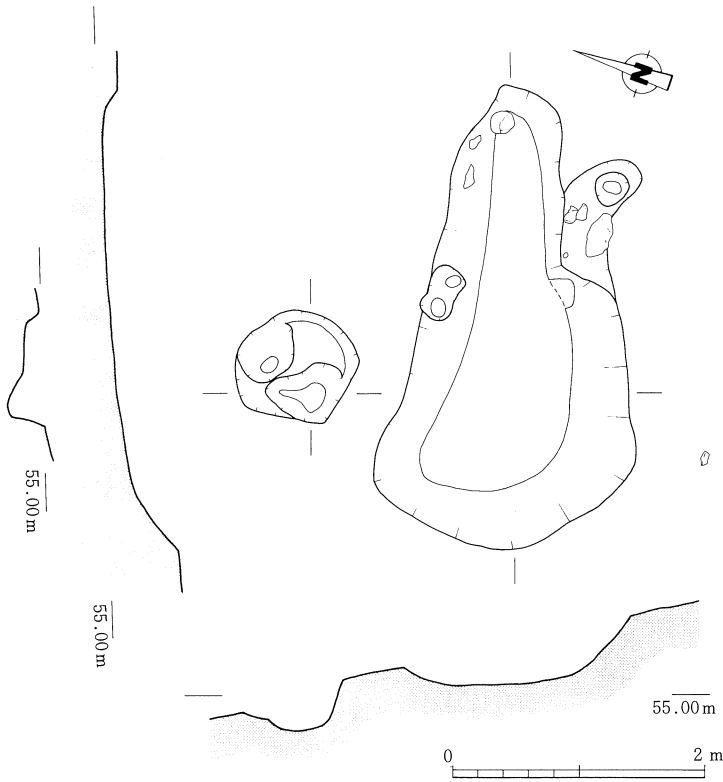
第88図 森山S K 9 出土土器実測図

第46表 森山S K 9 出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
87図-1		石包丁型石器	硬質砂岩	29.2	半月型

第47表 森山S K 9 出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
88図-2		壺口縁	(13)					不明	白色砂粒を多く含む	明黄褐色
同一-3		壺頸部		(14)				同上	大粒の石英粒含む	同上
同一-4		長頸壺口縁	(14)					同上	石英、雲母粒含むが精緻	同上
同一-5		甕口縁片						同上	角閃石粒を多く含む	同上
同一-6		底部						同上	角閃石、石英粒を含む	褐色
同一-7		同上				7.2		同上	同上	赤褐色



第89図 森山SK10平・断面図

SK10 (第89図)

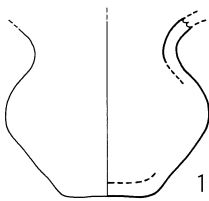
本土坑は西側に延びる舌状丘陵のほぼ中央よりやや西側の北斜面、標高56mに位置する。この位置はSB12の北約1.5mに位置する。平面形態は東西に長い卵倒形状を呈している。東西長約3.7m、南北最大長2.1m、現存部分の南壁高35cm北壁高10cmを測り、壁面は皿状に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

遺物の出土は土坑内に図示できない土器片が数点散乱するのみである。

SK12 (第33図)

本土坑は西側に延びる舌状丘陵のほぼ中央の頂部、標高56mに位置する。本土坑はSB16の西壁をカットしてつくられている。平面形態は東西に長い卵倒形状を呈している。東西長約1.55m、南北長0.8m、深さ76cmを測り、壁面は皿状に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

遺物の出土は土坑の全体に50点前後が散乱する。小壺、甕などの弥生土器片が認められた。



第90図 森山SK12出土土器実測図

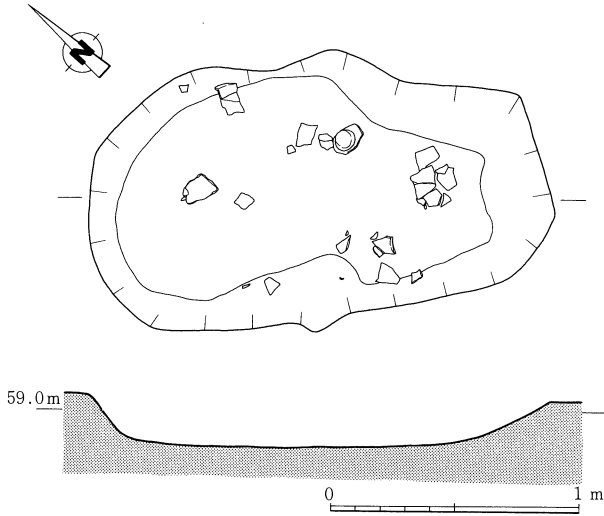
第48表 森山SK12出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) () の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
90図-1		小壺		5.8	8.2	3.5	7+α	外面→ケンマ、内面→ナア	角閃石、石英粒含む 黄褐色

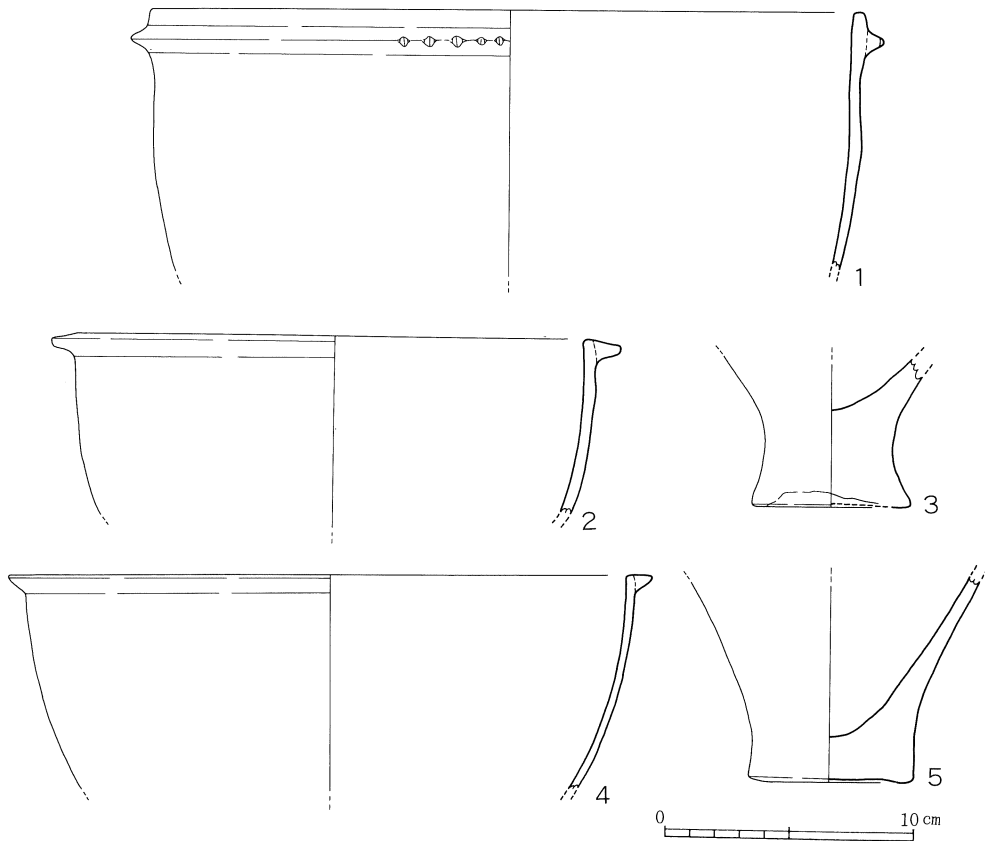
S K 19 (第91図)

本土坑は舌状丘陵の基部（東側）の頂部やや北側、S B 24の南約6 m、標高59 mに位置する。平面形態は東西に長い卵倒形状を呈している。東西長約1.85 m、南北長1.0 m、深さ20 cmを測り、壁面は皿状に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

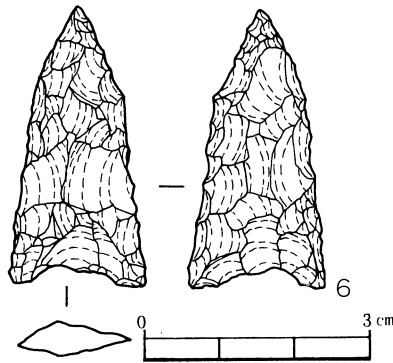
遺物の出土は土坑の全体に20点前後が散乱する。甕などの土器片のほか打製石鏃1点が認められた。



第91図 森山S K 19平・断面図



第92図 森山S K 19出土土器実測図



第93図 森山S K19出土石器実測図

第49表 森山S K19出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
92図-1		甕口縁	(28)					口縁内外面→ヨコナデ 外面→ナデ	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-2		同上	(10)					不 明	角閃石、斜長石、 白色砂粒を含む	同上
同-3		底部				6.5		同 上	同 上	赤褐色
同-4		甕口縁	(23.8)					同 上	同 上	黄褐色
同-5		底部				6.8		同 上	同 上	赤褐色

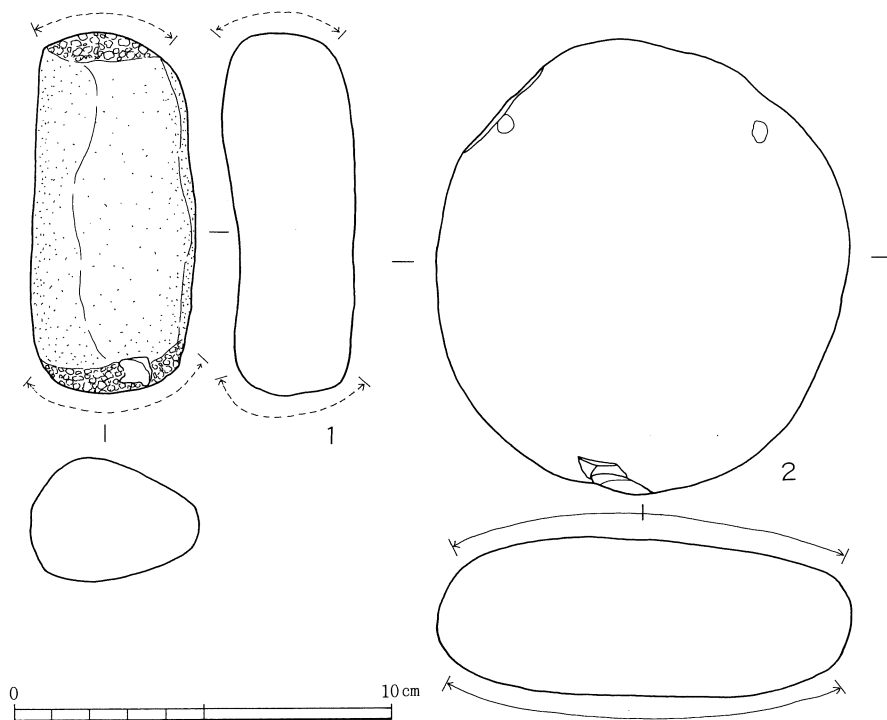
第50表 森山S K19出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
93図-6		打製石鏃	サヌカイト	2.6	凹基式

S K20 (第58図)

本土坑は舌状丘陵の基部（東側）の中央やや北側、標高58.5mに位置し、S B25の北壁の一部をカットして作られている。平面形態は東西に長い卵倒形状を呈している。東西長約1.9m、南北長1.25m、深さ40cmを測り、壁面は皿状に立ち上がる。床面は2段掘り状になり、その壁面にピットを1個付設する。

遺物の出土は土坑の全体に15点前後が散乱する。土器片のほか打製石鏃未製品1点、扁平打製石斧1点、敲石1点、磨石1点が認められた。



第94図 森山S K20出土石器実測図

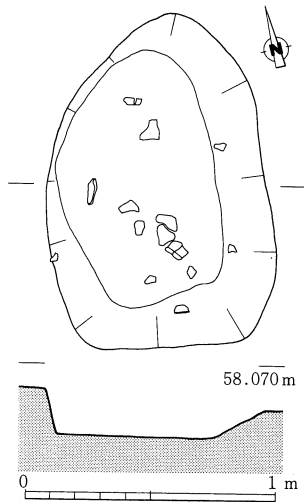
第51表 S K20出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
94図-1		敲石	安山岩	181	
同一-2		磨石	同上	822	

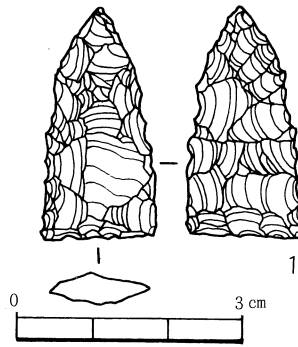
S K21 (第95図)

本土坑は北側に延びる舌状丘陵の基部南側頂部、S B28の北東約2 m、標高約58 mに位置する。平面形態は南北にやや長い卵倒形状を呈している。南北長約1.35 m、東西長0.9 m、深さ5 cmを測り、壁面は皿状に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

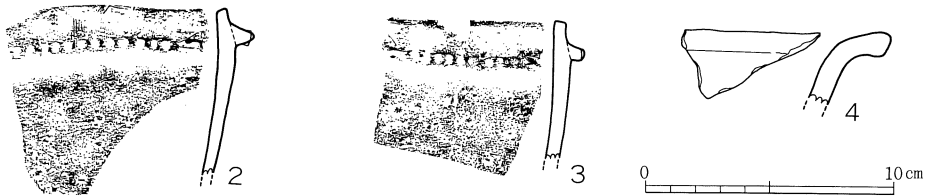
遺物の出土は土坑の全体に20点前後が散乱する。甕などの土器片のほか打製石鏃1点が認められた。



第95図 森山S K 21平・断面図



第96図 森山S K 21出土石器実測図



第97図 森山S K 21出土土器実測図

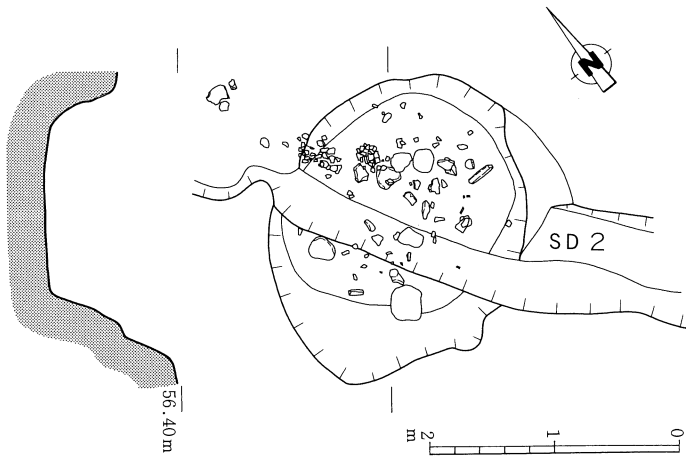
第52表 森山S K 21出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
96図-1		打製石鏃	サヌカイト	1.7	平基式

第53表 森山S K 21出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
97図-2		甕口縁片						内面→ナア、外面→ハケ	角閃石、斜長石を含む	茶褐色
同一-3		同上						内面不明 外面→部分的にハケ目	角閃石、斜長石、石英 粒を含む	赤褐色
同一-4		同上						不明	角閃石、斜長石を含む	茶褐色

S K 23 (第98図)

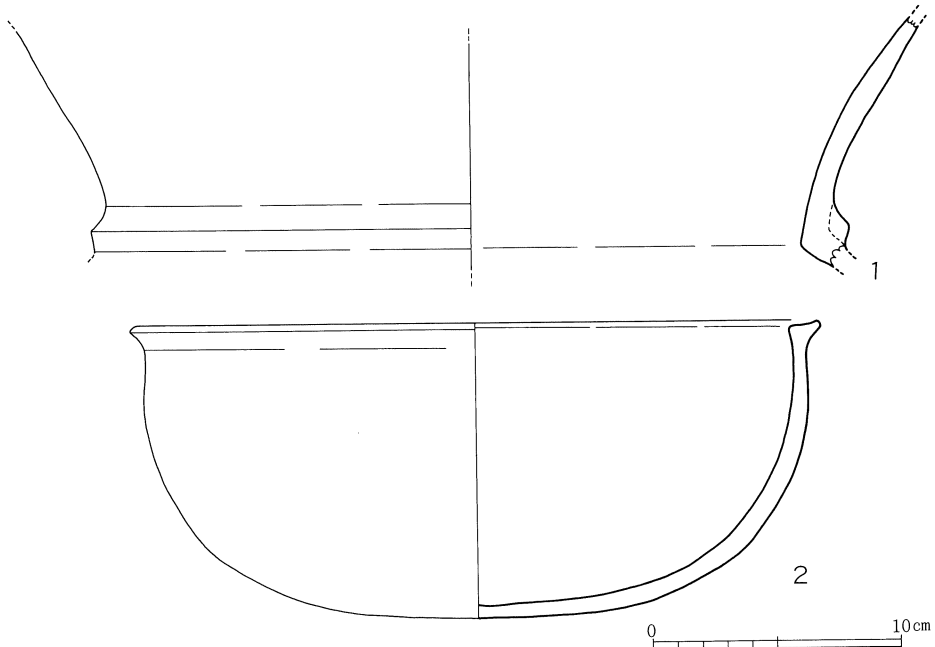


第98図 森山S K 23平・断面図

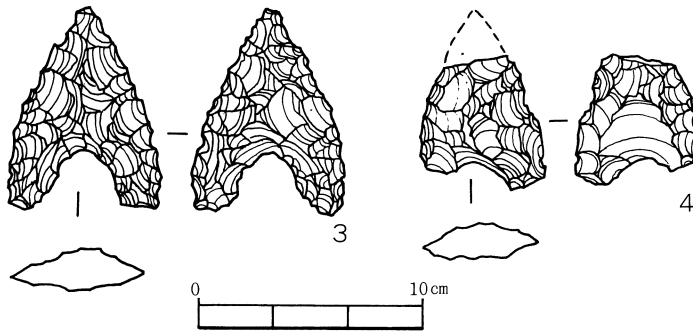
本土坑は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵南側基部の頂部よりやや下位の西斜面、標高約56.5mに位置する。この位置はS B 29の南約13mにあたる。平面形態はほぼ正円形を呈し、東西壁上面はSD 2によってカットされている。南北径1.9m、同床面径1.6m、深さ0.

8mを測り、壁断面は75°の傾斜で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

遺物の出土は主に土坑中央より東側に50点前後が散乱する。壺、甕などの土器片のほか打製石鏃5点、磨石1点、敲石1点、石皿6点が認められた。



第99図 森山S K 23出土土器実測図



朝100図 森山S K 23出土石器実測図

第54表 森山S K 23出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
99図-1		壺口頸		(26)				不 明	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同一-2		鉢		(28)				内外面ナデ	同 上	茶褐色

第55表 森山S K 23出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
100図-3		打製石鏃	サヌカイト	1.8	凹基式
同一-4		同上	姫島産黒輝石	2.1	先端部欠損、凹基式

S K 24 (第101図)

本土坑は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵南側基部の頂部よりやや東斜面付近、標高約55mに位置する。この位置はS B 29の北東約1.5mにあたる。平面形態は東西にやや長い卵倒形状を呈し、東壁は斜面のため流失している。東西長約2.5m + α、南北長1.5m、深さ10cmを測り、壁面は皿状に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

遺物の出土は主に土坑中央より東側に20点前後が散乱する。壺、甕、器台などの弥生土器片のほか打製石鏃1点、扁平片刃石斧1点、スクレパー1点、敲石1点、石皿1点が認められた。

S K 25 (第101図)

本土坑は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵南側基部の頂部よりやや東斜面付近、標高約55mに位置する。この位置はS K 24の東約1 mにあたる。平面形態はほぼ正円形を呈し、南壁上面はS K 26によってカットされている。南北径1.3m、同床面径1.15m、深さ1.3mを測り、壁断面は円柱状に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

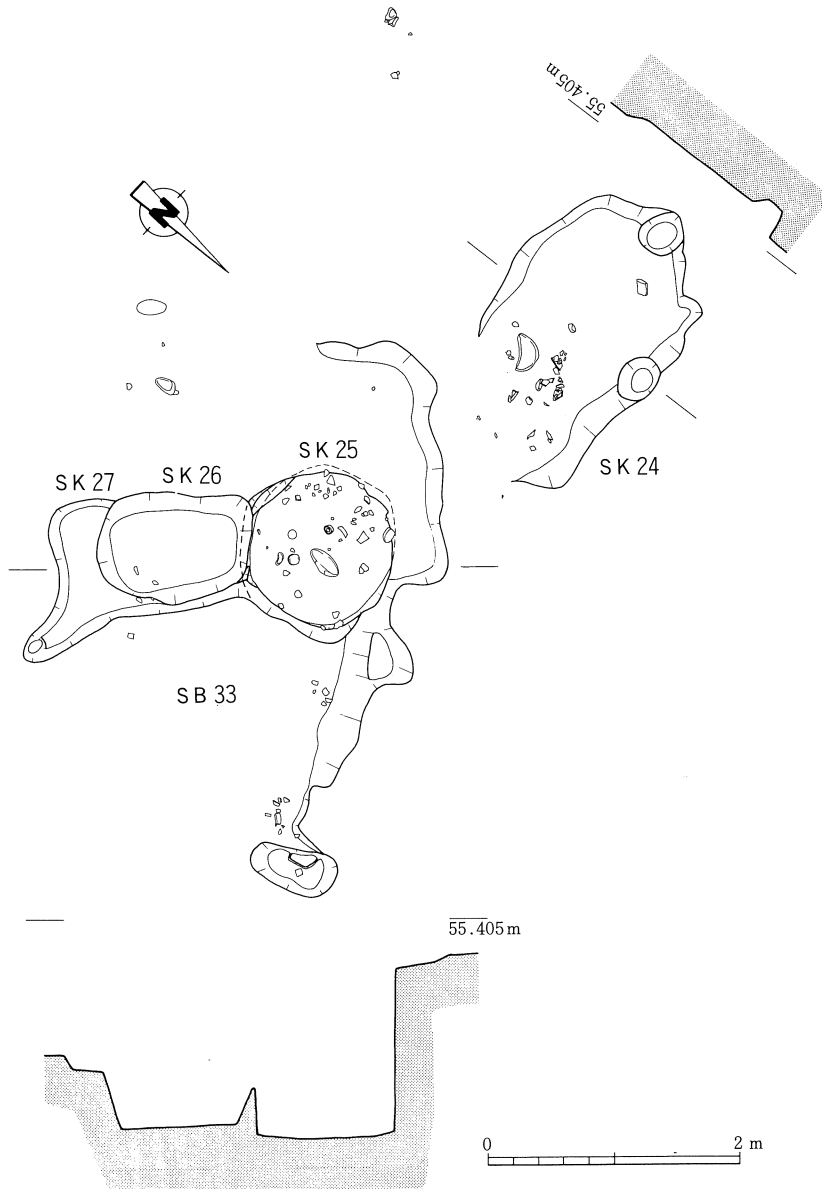
遺物の出土は主に土坑中央より東側に20点前後が散乱する。壺、甕などの弥生土器片のほか打製石鏃3点、磨石2点、凹石1点、石皿3点が認められた。

S K 26

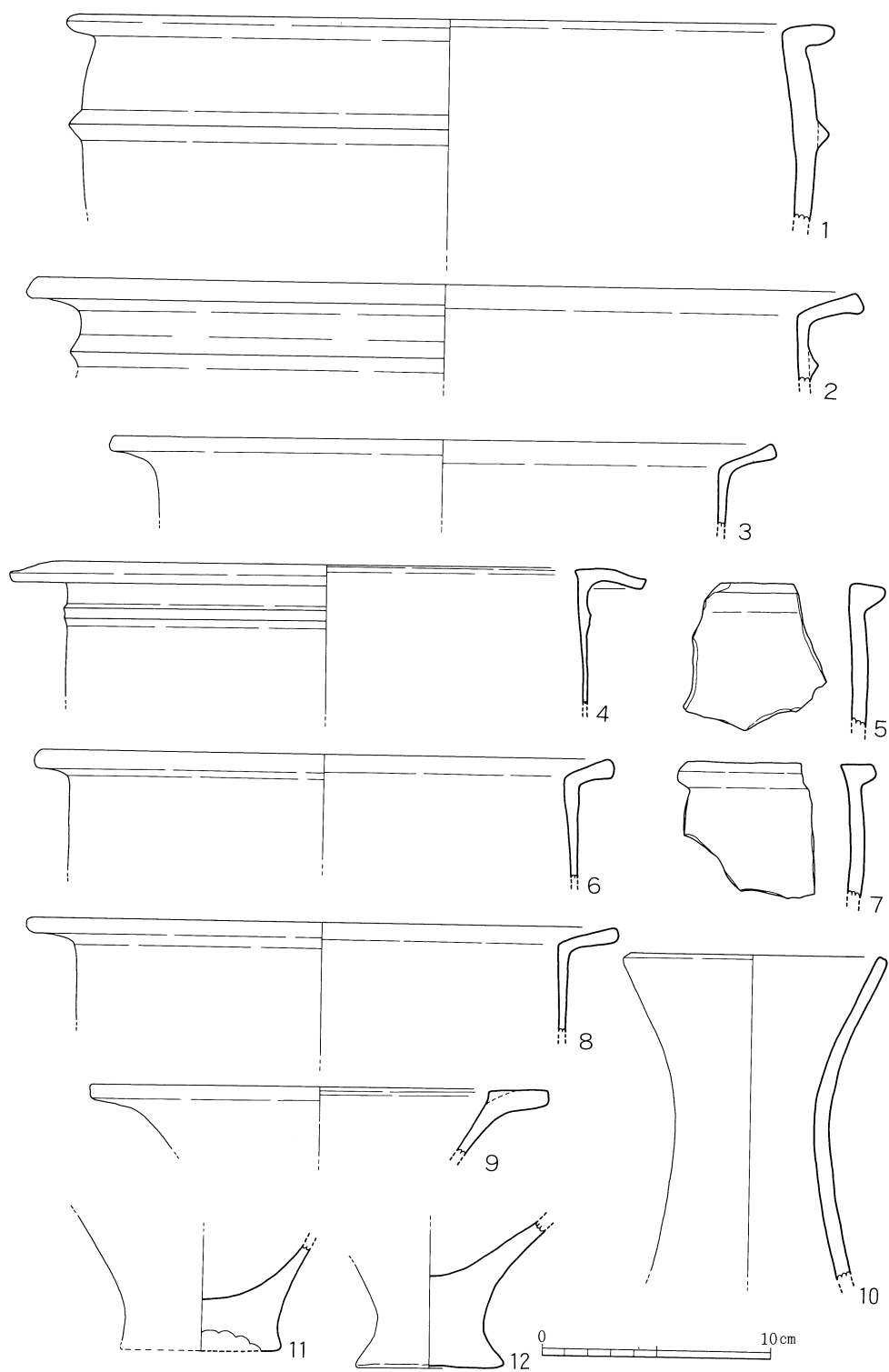
(第101図)

本土坑はS K 25の南壁をカットして作られている。平面形態は隅丸方形を呈す。南北長1.2 m、東西長0.85 m、深さ0.5 mを測り、壁面はほぼ75°の角度で立ち上がる。床面はほぼ平坦である。

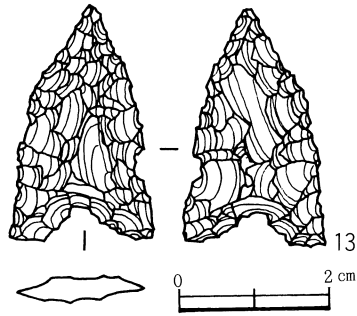
遺物の出土は主に土坑中より土器小片が認められた。



第101図 森山S K 24～27、S B 33平・断面図



第102图 森山S K24出土土器实测图



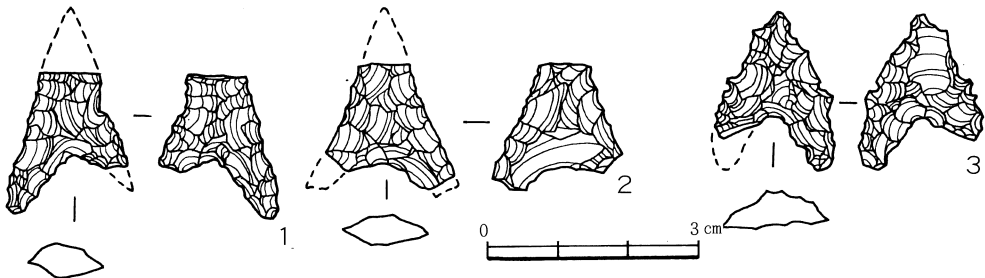
第103図 森山 S K 24出土石器実測図

第56表 森山 S K 24出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
102図-1		甕口縁	(29)					不 明	角閃石、斜長石、白色粒を含む	明褐色
同-2		同上	(36)					同 上	同 上	同上
同-3		同上	(29)					同 上	角閃石、斜長石、石英粒を含む	淡褐色
同-4		同上	(22)					同 上	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-5		甕口縁片						同 上	同 上	同上
同-6		甕口縁	(25)					同 上	同 上	淡黄褐色
同-7		甕口縁片						同 上	同 上	黄褐色
同-8		甕口縁	(25)					同 上	同 上	黄褐色
同-9		壺口縁	(15)					同 上	同 上	茶褐色
同-10		器台	(10.8)	6.0				外面→ナデ、他は不明	角閃石、斜長石、白色粒を含む	黄褐色
同-11		底部				7.2		外面→ナデ、他は不明	角閃石、斜長石を含む	淡褐色
同-12		同上				6.5		不 明	同 上	赤褐色

第57表 森山 S K 24出土土器観察表

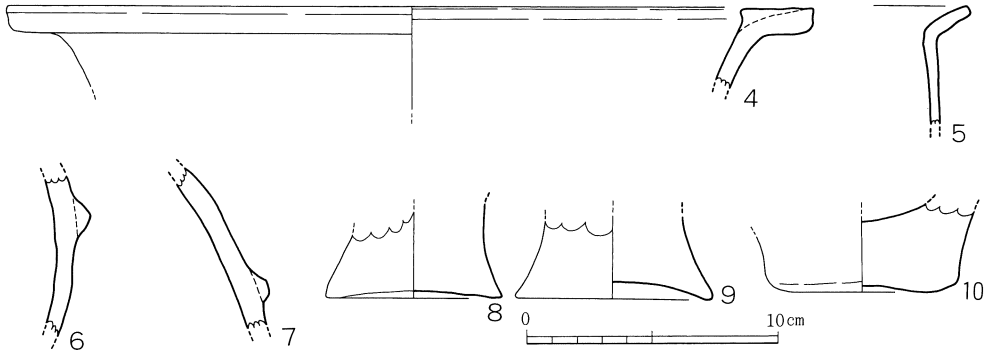
番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
103図-13		打製石鏃	姫島産黒耀石	1.8	凹基式



第104図 森山 S K 25出土石器実測図

第58表 森山 S K 25出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
104図-1		打製石鎌	姫島産黒耀石	0.9	凹基式 先端部欠損 脚部欠損
同-2		同上	同上	1.0	凹基式で抉り浅い 先端部欠損 脚部欠損
同-3		同上	腰岳産黒耀石	1.1	凹基式 脚部欠損



第105図 森山 S K 25出土土器実測図

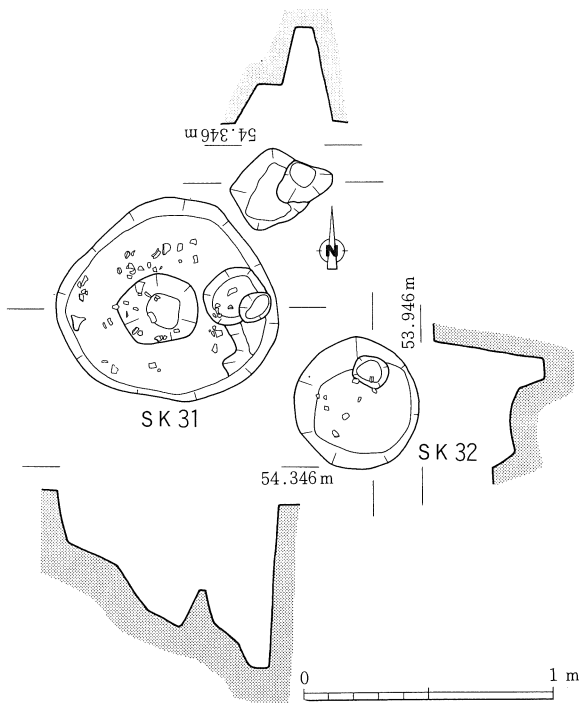
第59表 森山 S K 27出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径	器高			
105図-4		壺口縁	(26.4)					口縁部内外面→ヨコナデ、他は不明	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
同-5		甕口縁片						同上	同上	淡褐
同-6		壺胴部片						内面→ナデ、外面→ヨコナデ	角閃石、斜長石、白色砂粒を含む	灰黒色
同-7		同上						不明	同上	黄褐色
同-8		底部						外面ヨコナデ	角閃石、斜長石を含む	同上
同-9		同上						同上	同上	赤褐色
同-10		同上						同上	同上	黄褐色

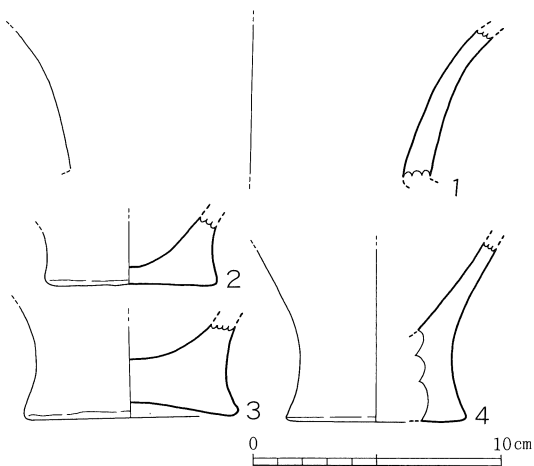
S K 31 (第106図)

本土坑は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵南側の東斜面付近、標高約54mに位置する。この位置はS B 31の南約2mにあたる。平面形態はやや歪な円形を呈す。南北長1.6m、東西長1.75m深さ0.55mを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ水平で、ピットは中央と東壁面際に認められた。

遺物の出土は土坑全体に弥生土器片が20点前後とともに石皿片1点が認められた。



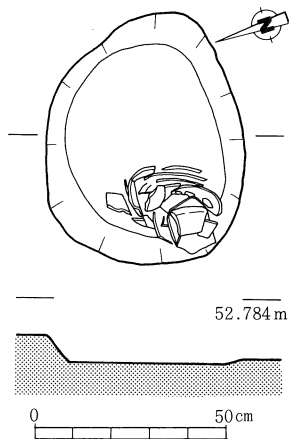
第106図 森山S K31~32平・断面図



第107図 森山S K31出土土器実測図

第60表 森山S K31出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
107図-1		壺頸部		(12)			内面→ヨコナデ後ケンマ、外面→ケンマ	角閃石、斜長石、白色砂粒を含む	淡褐色
同-2		底部			7.0		不明	角閃石、斜長石を含む	赤褐色
同-3		同上			8.6		同上	同上	黄褐色
同-4		同上			(7.5)		同上	同上	赤褐色



SP 1 (第108図)

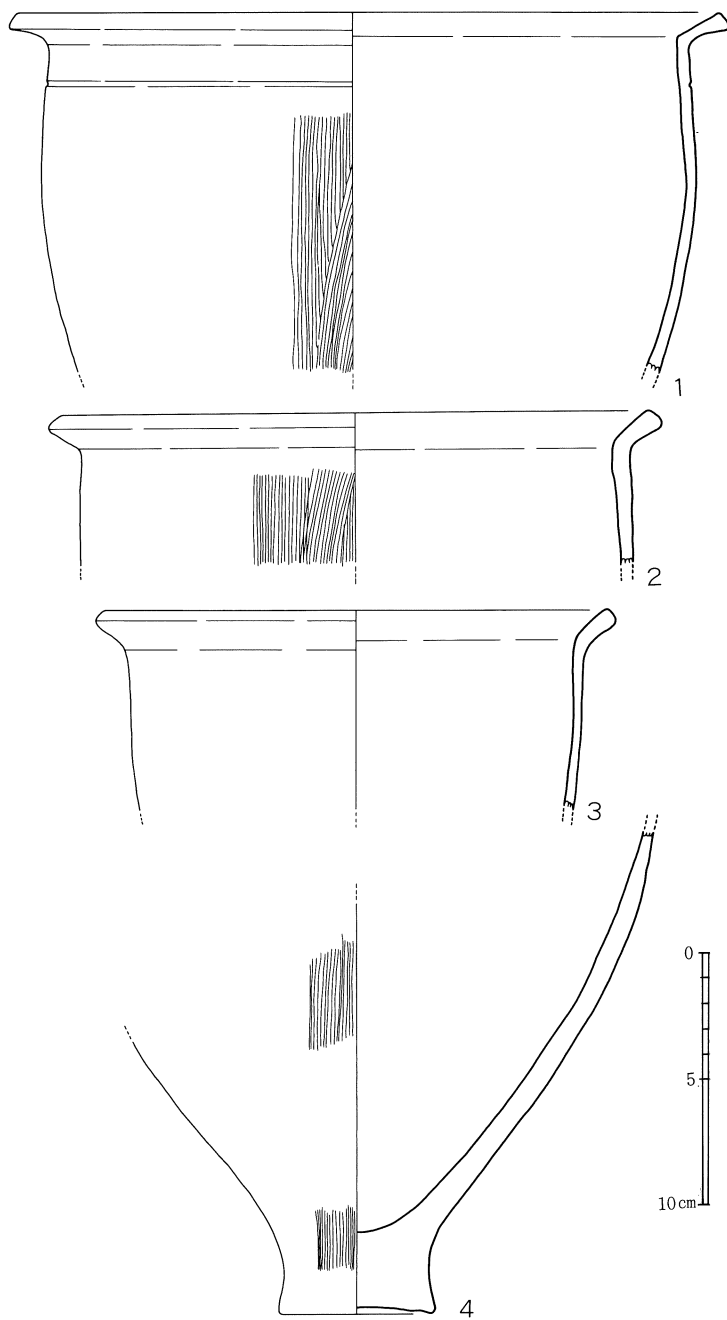
本ピットは西側に延びる舌状丘陵の西先端のほぼ中央、標高約52.5mに位置する。本ピットは調査区内の西先端に位置し、SB 1の南西側約13mにある。平面形態は楕円形状を呈し、上面東西長0.65m、南北長0.55m、深さ10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、床面は平坦である。

遺物の出土は西壁際の床面直上で甕が重なり合って出土した。

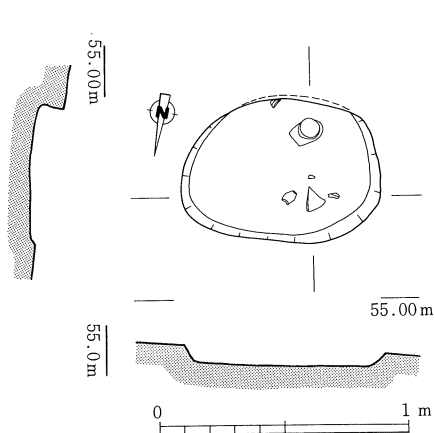
第108図 森山S P 1平・断面図

第61表 森山S P 1出土土器観察表

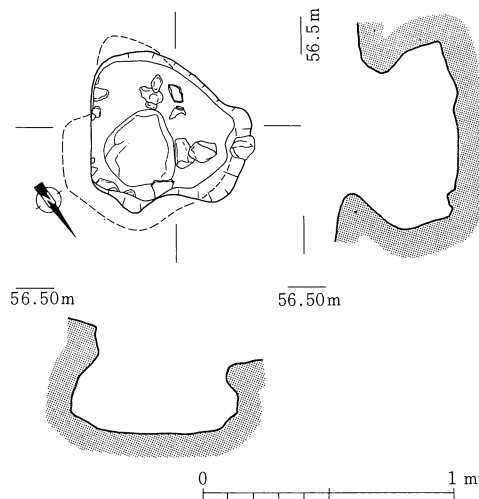
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
-1		甕口縁	(29)				口縁内外面→ヨコナデ、外面→ハケ 内面→不明	角閃石、斜長石を含む	黄褐色
-2		同上	(23)				口縁内外面→ヨコナデ、外面→ハケ 内面→不明	同上	同上
-3		同上	(20)				口縁内外面→ヨコナデ、他は不明	同上	同上
-4		甕底部				6	外面→ハケ、内面→ナデ	角閃石、斜長石、石英粒を含む	同上



第109図 森山S P 1 出土土器実測図



第110図 森山S P 2 平・断面図



第111図 森山S P 3 平・断面図

S P 2 (第110図)

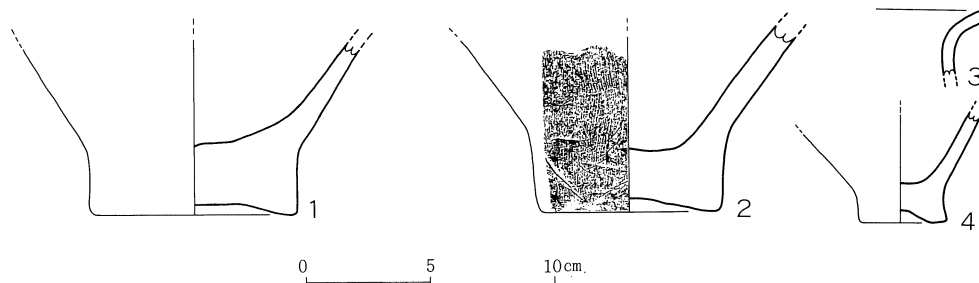
本ピットはS B 7の西側約2.0mの標高約55mを測る丘陵頂部よりやや北斜面に位置する。平面形態は東西に長い楕円形状を呈し、上面東西長0.8m、南北長0.55m、深さ10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、床面は平坦である。

遺物の出土は中央やや西側の床面直上から土器片が出土した。

S P 3 (第111図)

本ピットはS B 7の西側約0.5mの標高約56mを測る丘陵頂部平坦地に位置する。平面形態は不定形なおむすび状を呈し、上面東西長0.65m、南北長0.65m、深さ0.4mを測る。断面形は袋状を呈し、床面は凹凸がある。

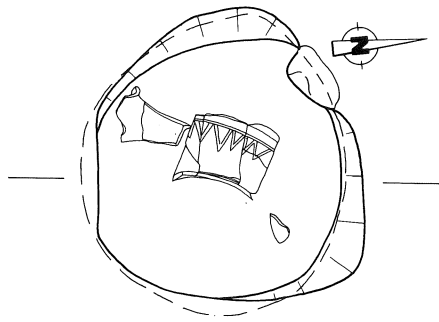
遺物の出土は中央付近から床面直上状態で土器片が出土した。



第112図 森山S P 2・3 出土土器実測図(1はS P 2、2~4はS P 3 出土)

第62表 森山S P 2・3 出土土器観察表

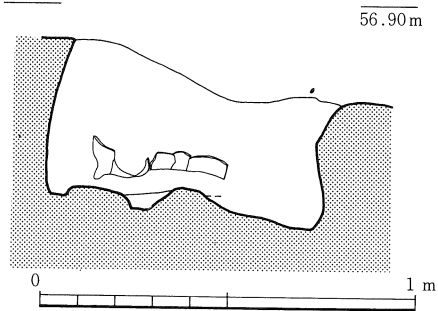
番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調	
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径				器高
112図-1		底部				8.5		不明	大粒の石英砂粒を多く含む	赤褐色
同-2		同上				7.5		外面底部→ナデ、他は細かなハケ 内面→ミカキ	角閃石、石英粒を含む	同上
同-3		甕口縁片						不明	同上	同上
同-4		底部				3.8		内外面→ナデ?	同上	同上



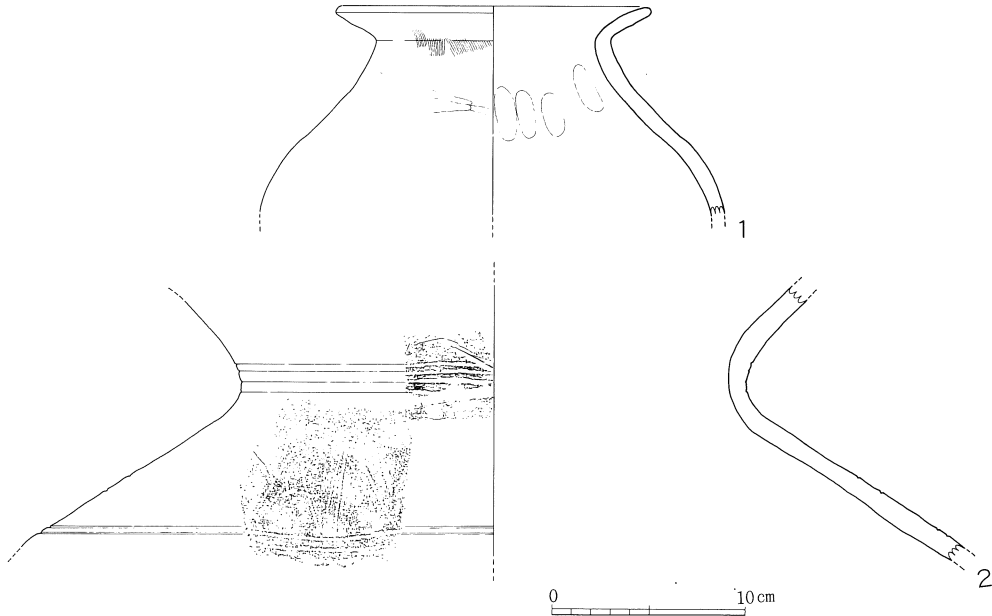
SP4 (第113図)

本ピットはSB7の東南側約1.5mの標高約56.5mを測る丘陵頂部平坦地に位置する。平面形態はほぼ正円形状を呈し、上面南北径0.7m、床面南北径0.7m、深さ0.4mを測る。断面形は袋状を呈し、床面は凹凸がある。

遺物の出土は中央から南東側に床面から約5cm浮いた状態で壺片が出土した。

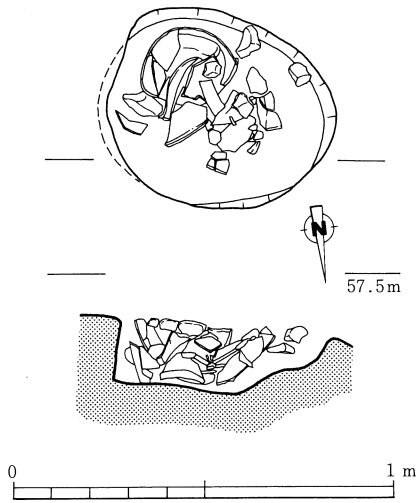


第113図 森山SP4平・断面図



第114図 森山SP4出土土器実測図
第63表 森山SP4出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
114図-1		壺	15	10.8				内面→ナデ、外面口縁→ヨコナデ、 頸部→ハタ、腹はケンマ	角閃石、石英粒を含むが精緻黒曜 石を1個含む	黄褐色
114図-2		同上		24.4				内面→ナデ、外面→ケンマ		

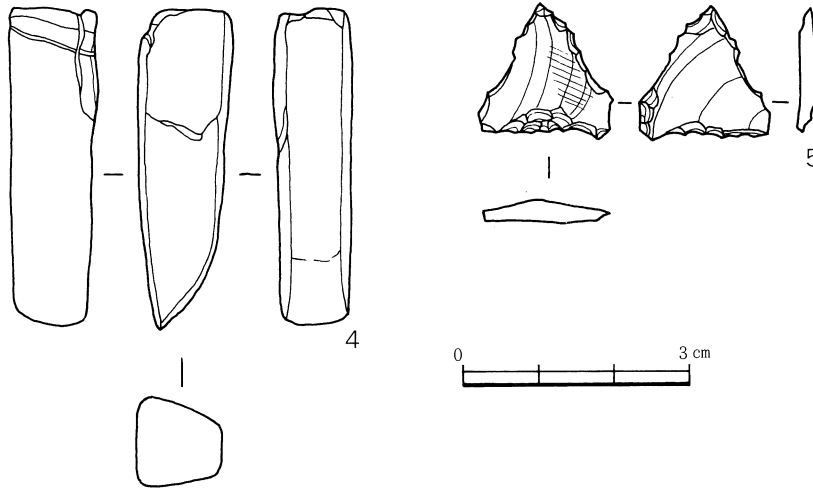


第115図 森山SP5平・断面図

SP5 (第115図)

本ピットはSK1北端部の東側約1mの標高約57mを測る丘陵頂部平坦地に位置する。平面形態は東西に長い楕円形状を呈し、上面東西長0.6m、南北長0.5m、深さ15cmを測る。断面形は東側は直に、西側は皿状に立ち上がる。床面は凹凸がある。

遺物の出土は中央の床面に50点前後が集中する。甕、壺などの弥生土器片のほか磨製石斧片1点、片刃石斧1点、打製石鏃1点、石核1点が出土した。



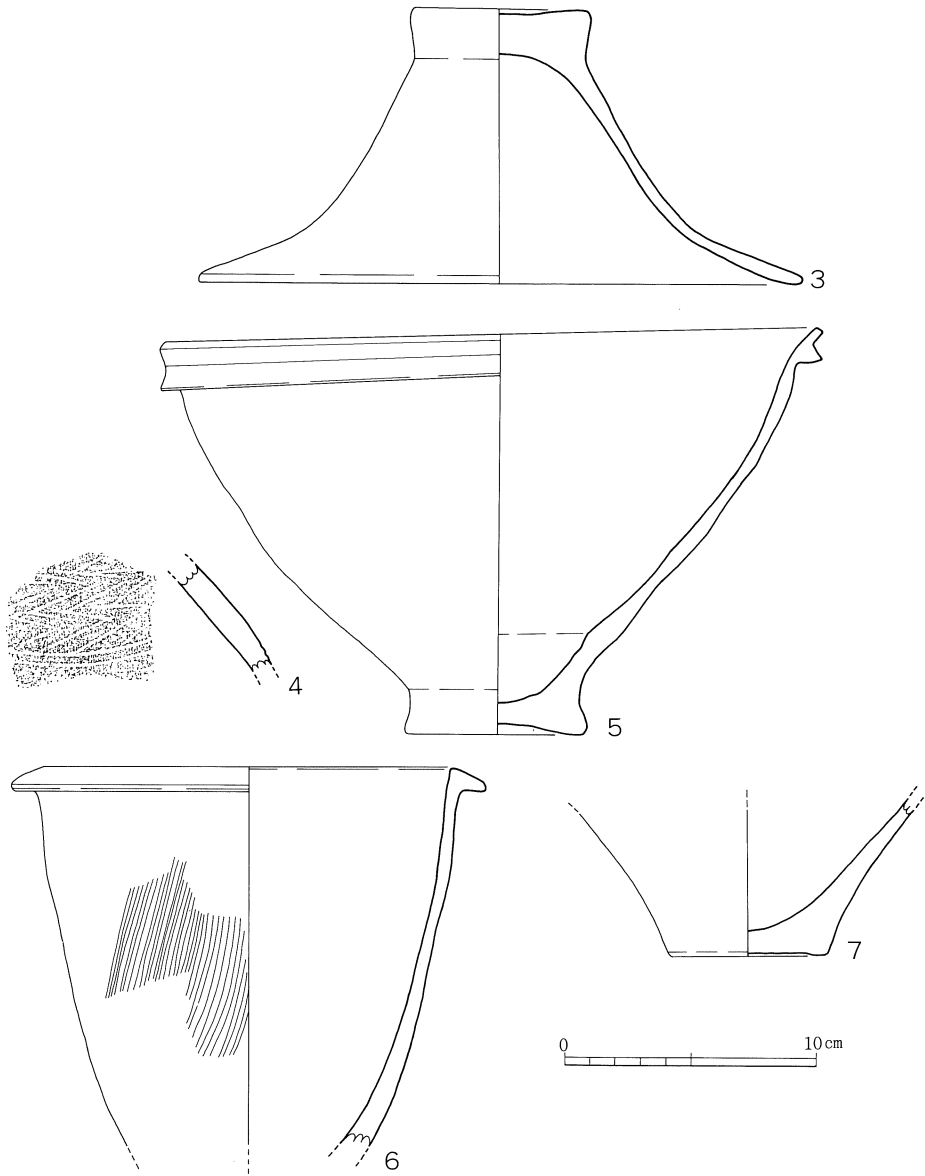
第116図 森山SP5出土石器実測図

第64表 森山SP5出土石器観察表

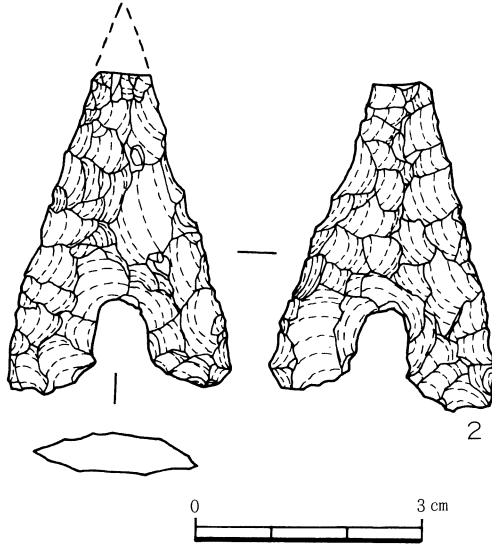
番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
116図-1		柱状片刃石斧	頁岩	9.7	
同-2		打製石鏃	姫島産黒耀石	0.7	平基式

第65表 森山SP5出土土器観察表

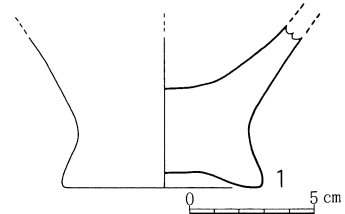
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調	
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径				器高
117図-3		甕蓋	24.4			7.5	11	不明	角閃石、石英粒を多く含む	赤褐色
同-4		壺肩部片						外面に貝殻圧痕による羽状文	角閃石、石英粒を含む	黄褐色
同-5		甕	25			7.3	16	不明	角閃石、石英粒を多く含む	内面→黄褐色、外面→黄褐色で一部黒色
同-6		甕口縁	16					外面の一部にハケ目、他は不明	角閃石、斜長石、石英粒を含む	内面→黄褐色、外面→赤褐色
同-7		底部				6.2		不明	同上	黄褐色



第117図 森山SP5出土土器実測図



第119図 森山SP6出土土器実測図



第118図 森山SP6出土土器実測図

SP6 (第46図)

本ピットはSB19の西側約1mの標高約57mを測る丘陵北側斜面部に位置する。平面形態はほぼ正円形状を呈すが、南側のみ2段堀の掘り方が認められる。上面南北径0.55m、床面南北径0.6m、深さ0.4mを測る。断面形は円柱状を呈し、床面は平坦である。

遺物の出土はピット全体に床面から状態で土器片10点前後と石庖丁型石器片1点、打製石鏃1点、凹石1点が出土した。

第66表 森山SP6出土土器観察表

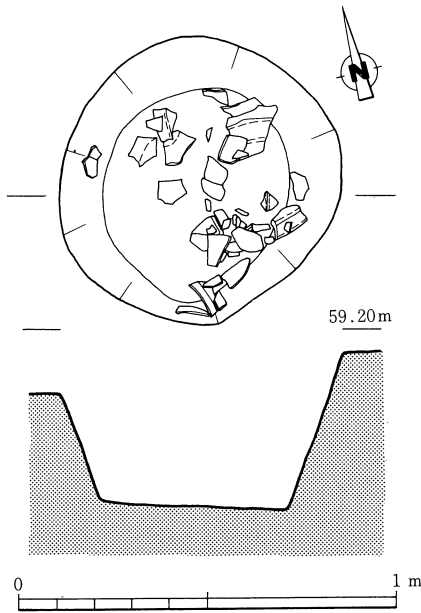
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
118図-1		底部				8.0	不明	角閃石、石英粒を含む	赤褐色

第67表 森山SP6出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
119図-2		打製石鏃	サヌカイト	4.9	凹基式 先端部欠損

第68表 森山SP7出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
121図-1		壺胴部			(37.5)		不明	角閃石、石英粒を多く含む	黄褐色
同-2		甕口縁	(33)				同上	同上	赤褐色
同-3		同上	(25)				同上	同上	同上
同-4		壺口縁片					同上	精緻である	黄褐色
同-5		底部				5.8	同上	角閃石、石英粒を含む	赤褐色
同-6		同上				7.8	同上	同上	同上
同-7		同上				7.5	同上	同上	同上

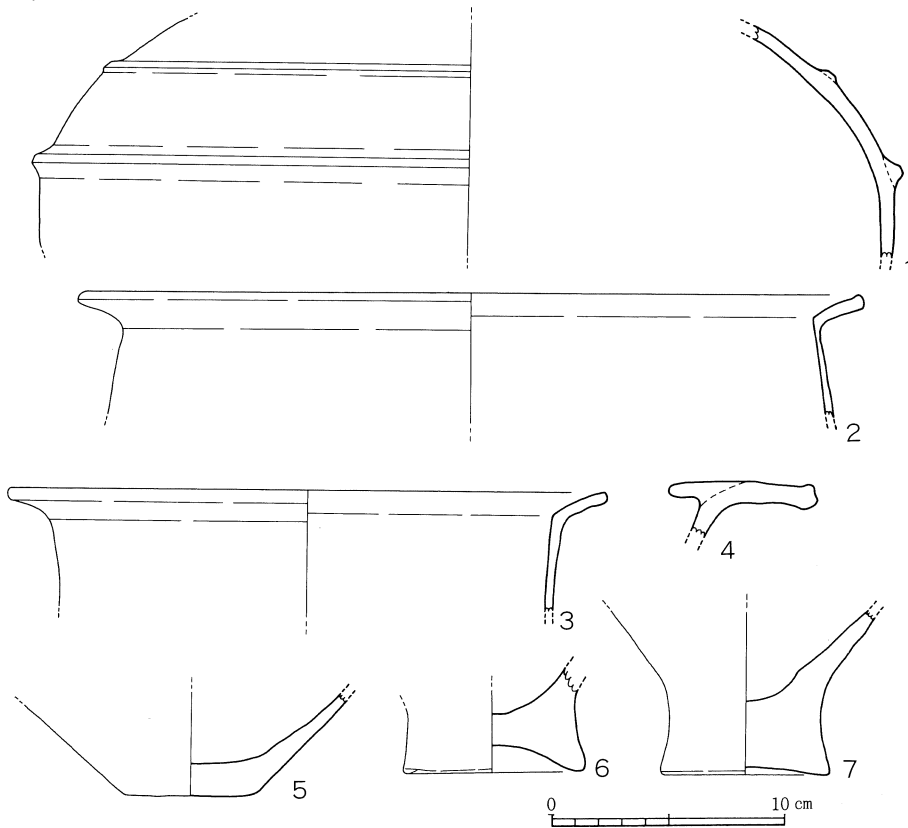


第120図 森山SP7平・断面図

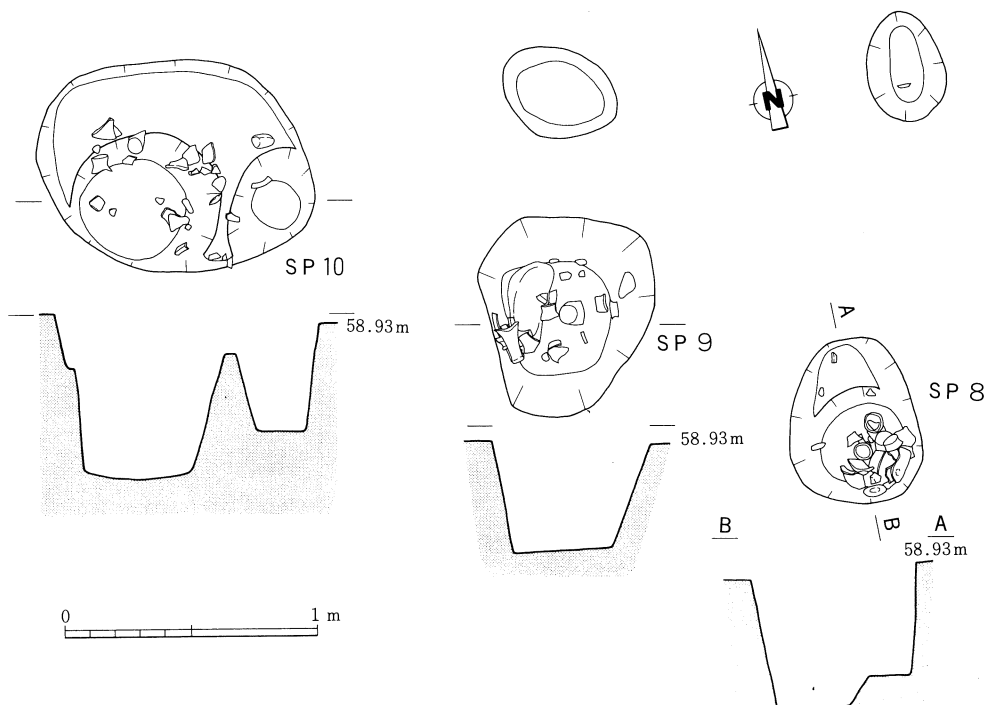
SP7 (第120図)

本ピットはSK19の南側約6mの標高約59mを測る丘陵頂部平坦地に位置する。平面はほぼ正円形状を呈す。上面南北径0.75m、床面南北径0.55m、深さ0.3mを測る。断面形は円柱状を呈し、床面は平坦である。

遺物の出土はピット全体に床面直上から土器片30点が出土した。ピットの位置から考えて土壙墓群にともなう祭祀ピットの可能性もある。



第121図 森山SP7出土土器実測図



第122図 森山SP 8～10平・断面図

SP 8 (第122図)

本ピットはS B 19の西側約1 mの標高約59 mを測る丘陵北側斜面部に位置する。平面形態はほぼ正円形状を呈すが、北側のみに2段堀の掘り方が認められる。上面南北径0.6 m、床面南北径0.55 m、深さ0.4 mを測る。断面形は円柱状を呈し、床面は平坦である。

遺物はピット全体の床面直上から出土し、弥生土器片30点とともに磨石2点が出土した。

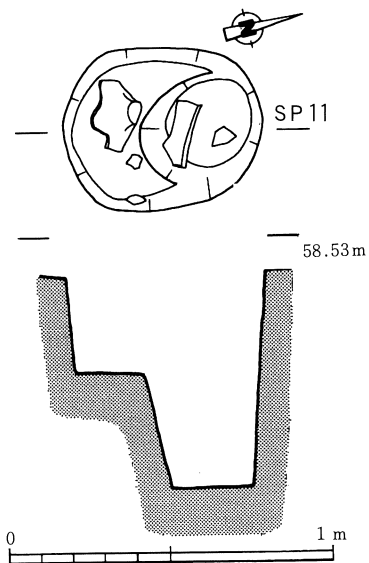
SP 9 (第122図)

本ピットはSP 8の北西6 mの標高約59 mを測る丘陵北側斜面部に位置する。平面形態はおむすび状を呈し、上面南北径0.8 m、床面南北径0.5 m、深さ0.4 mを測る。断面形は逆台形を呈し、床面は平坦である。

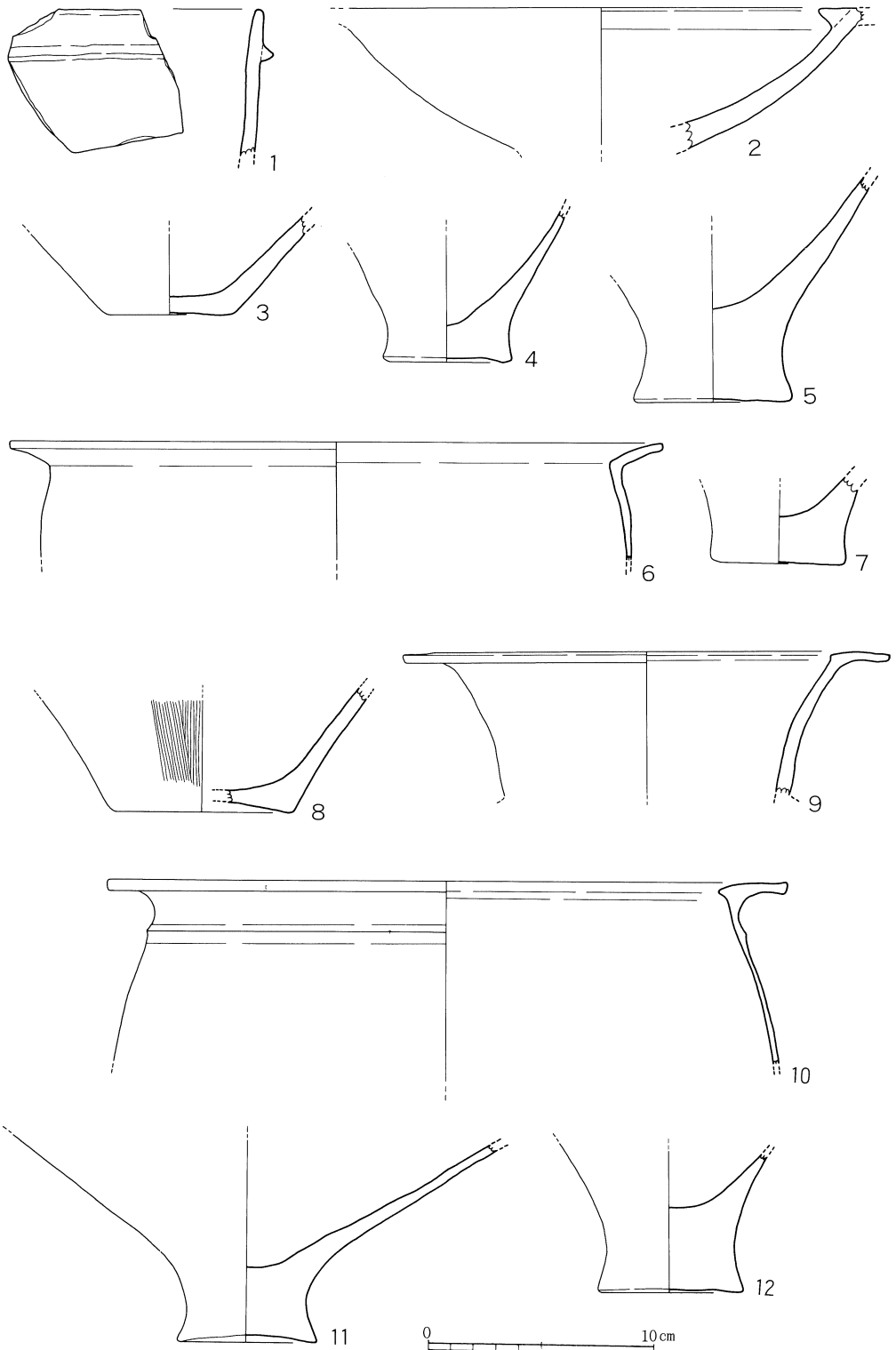
遺物はピット全体にほぼ床面直上で出土し、弥生土器片20点前後とともに磨石1点が出土した。

SP 10 (第122図)

本ピットはSP 9の北西6 mの標高59 mを



第123図 SP 11平・断面図



第124図 森山S P8~11出土土器実測図(1~5はS P8、6・7はS P9、8・9はS P10、10~12はS P11)

第69表 森山S P 8～11出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
124図-1		甕口縁片						不 明	角閃石、石英粒を含む	赤褐色
同-2		高坏片	(19.6)					同 上	同 上	黄褐色
同-3		底部				6.0		同 上	同 上	同上
同-4		同上				5.8		同 上	同 上	赤褐色
同-5		同上				7.2		同 上	角閃石、石英粒を多く含む	同上
同-6		甕口縁	29					同 上	角閃石粒を含む	黄褐色
同-7		底部				6.0		同 上	同 上	赤褐色
同-8		同上				(8.2)		外面→ハケ目、内面→不明	角閃石、石英粒を含む	同上
同-9		壺口縁	(16.4)					不 明	同 上	黄褐色
同-10		甕口縁	(25)					同 上	同 上	同上
同-11		壺底部				6.3		同 上	同 上	赤褐色
同-12		底部				6.5		同 上	同 上	同上

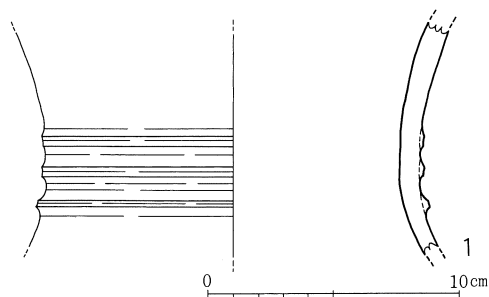
測る丘陵北側斜面部に位置する。平面形態は東西に長い楕円形状を呈すが、ピット掘り方の内南側に2個の小ピット掘り方が認められる。上面東西径1.1m、床面東西径0.95m、深さ1.15mを測る。断面形はほぼ円柱状を呈し、床面は平坦である。

遺物はピットの中央より南側で散布し、弥生土器片30点前後とともに大型蛤刃石斧片1点、凹石1点が出土した。

S P 11 (第123図)

本ピットはS P 10の北側5mの標高約58mを測る丘陵頂部に位置する。平面形態は南北に長い楕円形を呈し、北側は段状を呈している。上面南北径1.2m、東西径0.9m、床面南北径0.95m深さ1.3mを測る。断面形はほぼ円柱状を呈し、床面は平坦である。

遺物は1段目床面より弥生土器底部が、2段目床面より甕口縁部がそれぞれ出土した。



第125図 森山S P 13出土土器実測図

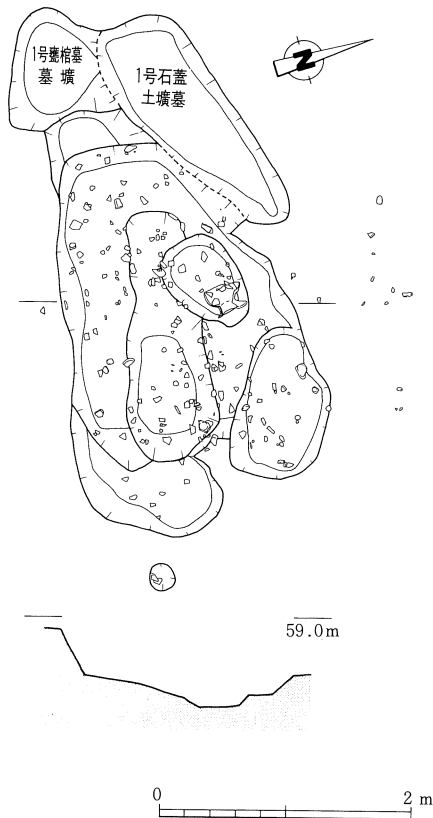
S P 13

本ピットはS B 30の北東約4mの標高約54.5mを測る北側に延びる丘陵の東斜面部に位置する。平面形態はほぼ正円形状を呈す。上面南北径0.6m、床面南北径0.4m、深さ0.4mを測る。断面形は円柱状を呈し、床面は平坦である。

遺物の出土はピット内中央で壺頸部が1点とともにスクレパー1点が出土した。

第70表 森山S P 13出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
125図-1		長頸壺		(13)				不 明	角閃石、斜長石を含む	黄褐色



第126図 森山1号祭祀土坑平・断面図

1号祭祀土坑（第126図）

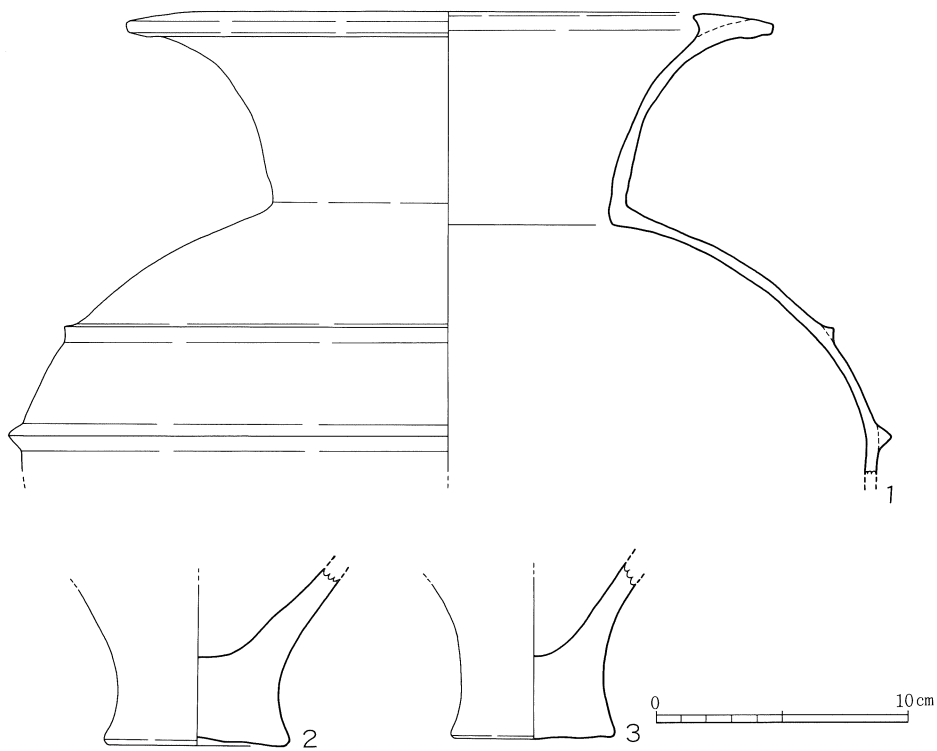
本土坑は舌状丘陵の中央よりやや東側の北斜面、標高約59mに位置する。この位置はSB23の東約4.5mにあたる。1号石蓋土塚墓、1号壺墓に近接しており、1号石蓋土塚墓の土塚南壁をカットしている。また、本土坑は現状で6個の土坑が切り合い関係を持ち形成されており、東西長3.5m、南北長2.1m、深さ40cmを測る。さらに、本土坑は本来長2.0m、最大幅0.75m、深さ10cmの土塚墓上に5個の土坑が形成されたものであり、最後に長さ80cm、幅55cm、深さ55cmの楕円形土坑が作られ、そこに下半部が欠損する壺が埋置されていた。出土遺物は前述した壺以外に小片の弥生土器片80点前後とともに打製石鏃1点、砥石2点、磨石1点、凹石1点、石皿2点が出土している。

第71表 1号祭祀土坑出土土器観察表

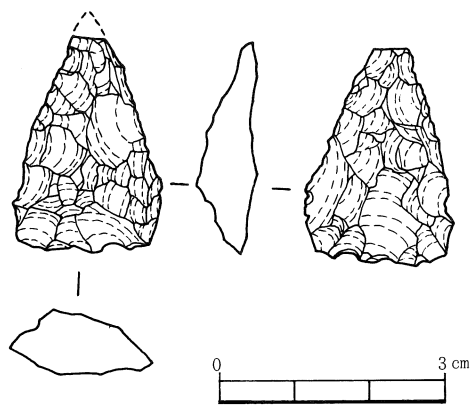
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
127図-1		壺	19.9	14.3	34			口縁部外面→ヨコナテ	角閃石、斜長石を含む	明褐色
同一-2		底部				7.5		不 明	同 上	赤褐色
同一-3		底部				6.6		同 上	同 上	明褐色

第72表 1号祭祀土坑出土石器観察表

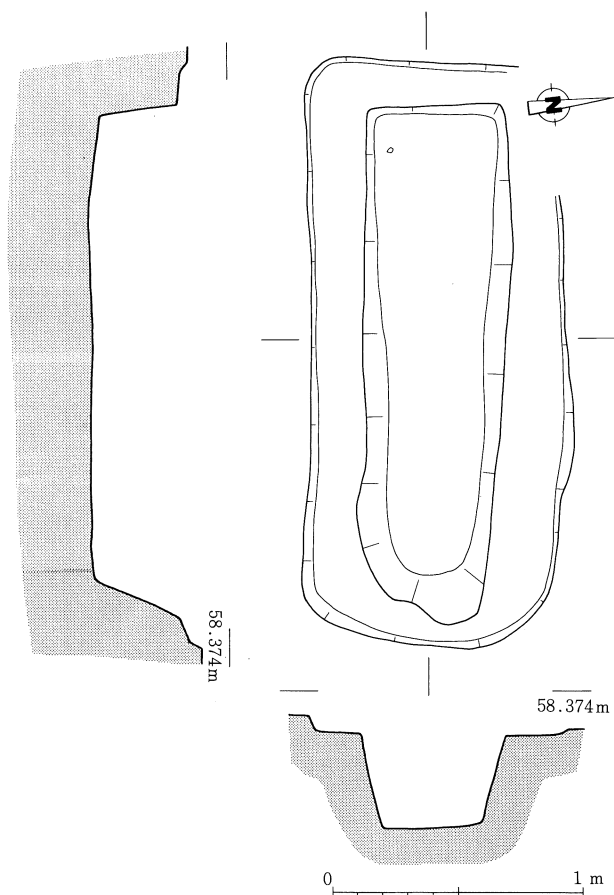
番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
128図-1		打製石鏃	サヌカイト	3.1	平基式 先端部欠損



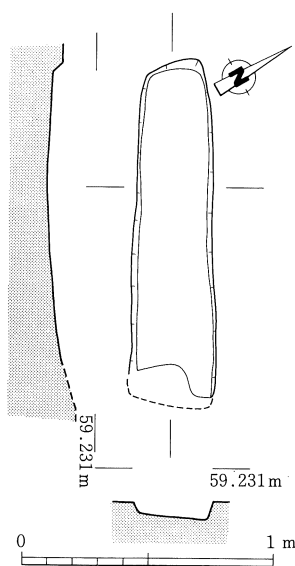
第127图 森山1号祭祀土坑出土土器实测图



第128图 森山1号祭祀土坑出土石器实测图



第129図 森山1号土墳墓平・断面図



第130図 森山2号土墳墓平・断面図

墳墓

墳墓群は西側に延びる舌状丘陵の基部東側の中央尾根頂部から北側斜面にかけての標高59m前後に位置する。13基の土墳墓、3基の木棺墓、1基の石蓋土墳墓、1基の小児用甕棺墓で構成される。さらに、北側に延びる丘陵上では土墳墓が1基検出された。

1号土墳墓 (第129図)

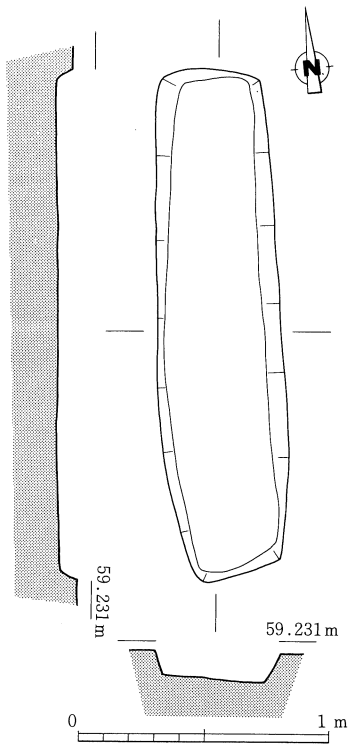
丘陵のほぼ中央北斜面に位置し、墳墓群中最も西側にありSB 23の南壁に接してある。残存状態は良好な二段掘りの成人用土墳墓である。主軸を東西に取り、頭位は西側にある。

2号土墳墓 (第130図)

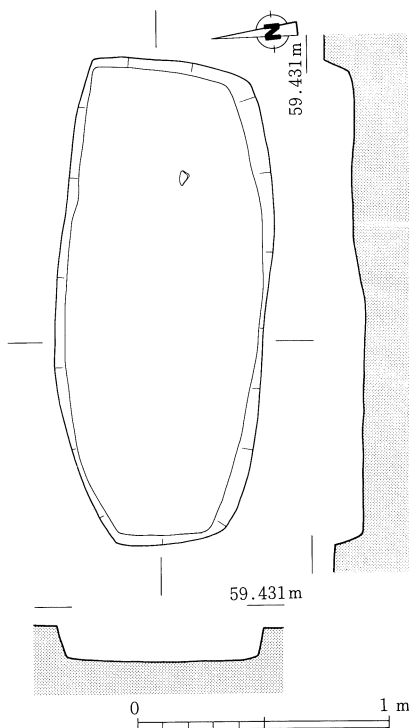
丘陵のほぼ中央北斜面に位置し、1号土墳墓の南1mに隣接してある。残存状態は東壁の上面がカットされているが、土墳墓のみの成人用土墳墓である。主軸を東西に取り、頭位は東側にある。

3号土墳墓 (第131図)

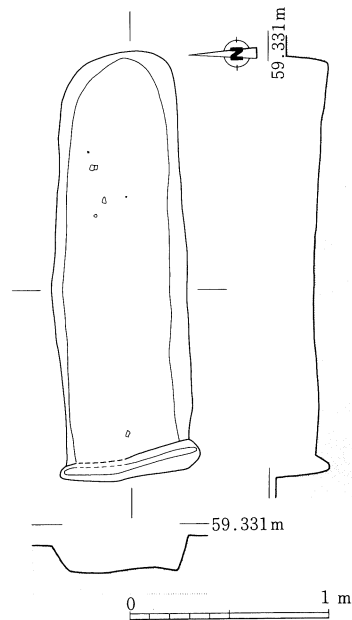
丘陵のほぼ中央に位置し、2号土墳墓の南約1mに隣接してある。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明であるが、成人用土墳墓である。主軸を南北に取り頭位は南側にある。なお、壁の立ち上がり角度から土墳墓と推定した。



第131図 森山3号土壌墓平・断面図



第133図 森山5号土壌墓平・断面図



第132図 森山4号土壌墓平・断面図

4号土壌墓 (第132図)

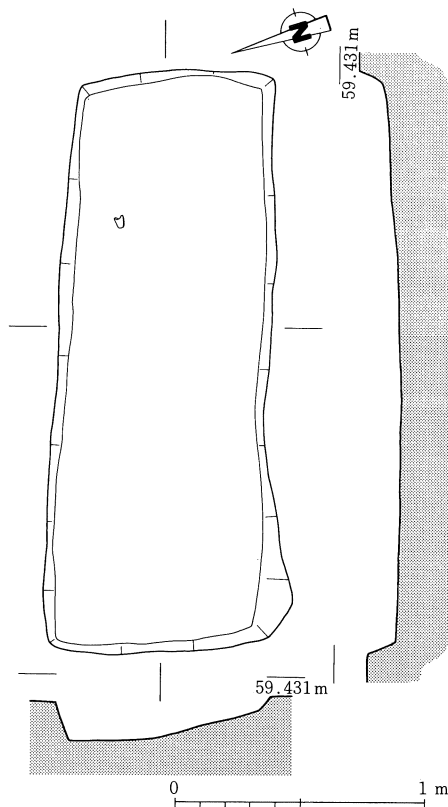
丘陵のほぼ中央に位置し、3号土壌墓の南約0.5mに隣接してある。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明であるが、成人用土壌墓である。主軸を東西に取り頭位は西側にある。底面の西小口部には長さ70cm、幅8cm、深さ8cmの掘り込みがあり、木板あるいは板石を立てていたと考えられる。なお、東小口コーナーの様相あるいは側壁の立ち上がり角度から土壌墓と推定した。

出土遺物は中央よりやや東寄りで甕胴部の土器片が4点出土した。

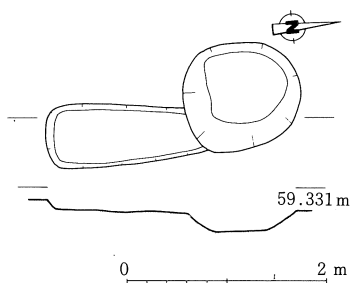
5号土壌墓 (第133図)

丘陵のほぼ中央に位置し、4号土壌墓の南東約1mにある。この位置は群中の最も南である。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明であるが、成人用土壌墓である。主軸を東西に取り頭位は東側にある。壁の立ち上がり角度から土壌墓と推定した。

出土遺物は中央よりやや東寄りで甕胴部片が1点出土した。



第134図 森山6号土墳墓平・断面図



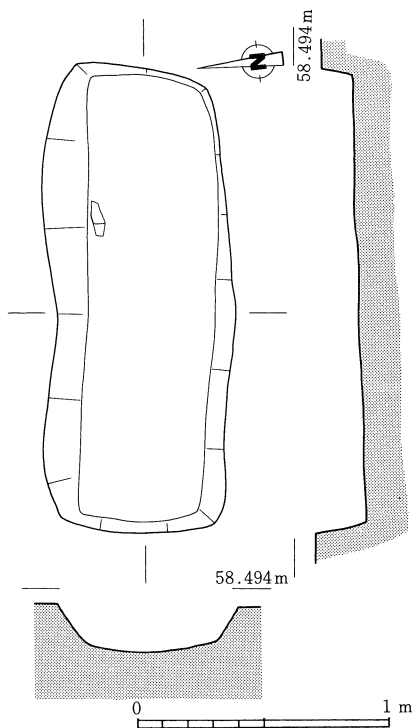
第135図 森山7号土墳墓平・断面図
7号土墳墓 (第135図)

丘陵のほぼ中央に位置し、3号土墳墓の東約1.5mにあり、主軸方向も同様である。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明である上に北小口部分もピットによってカットされているが、その規模から小児用土墳墓である。主軸を南北に取り頭位は南側にある。壁の立ち上がり角度から土墳墓と推定した。

8号土墳墓 (第136図)

丘陵のほぼ中央のやや北斜面側、2号土墳墓の東約1.5mに位置し、主軸方向もほぼ同様である。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明であるが、成人用土墳墓である。主軸を東西に取り頭位は西側にある。壁の立ち上がり角度から土墳墓と推定した。

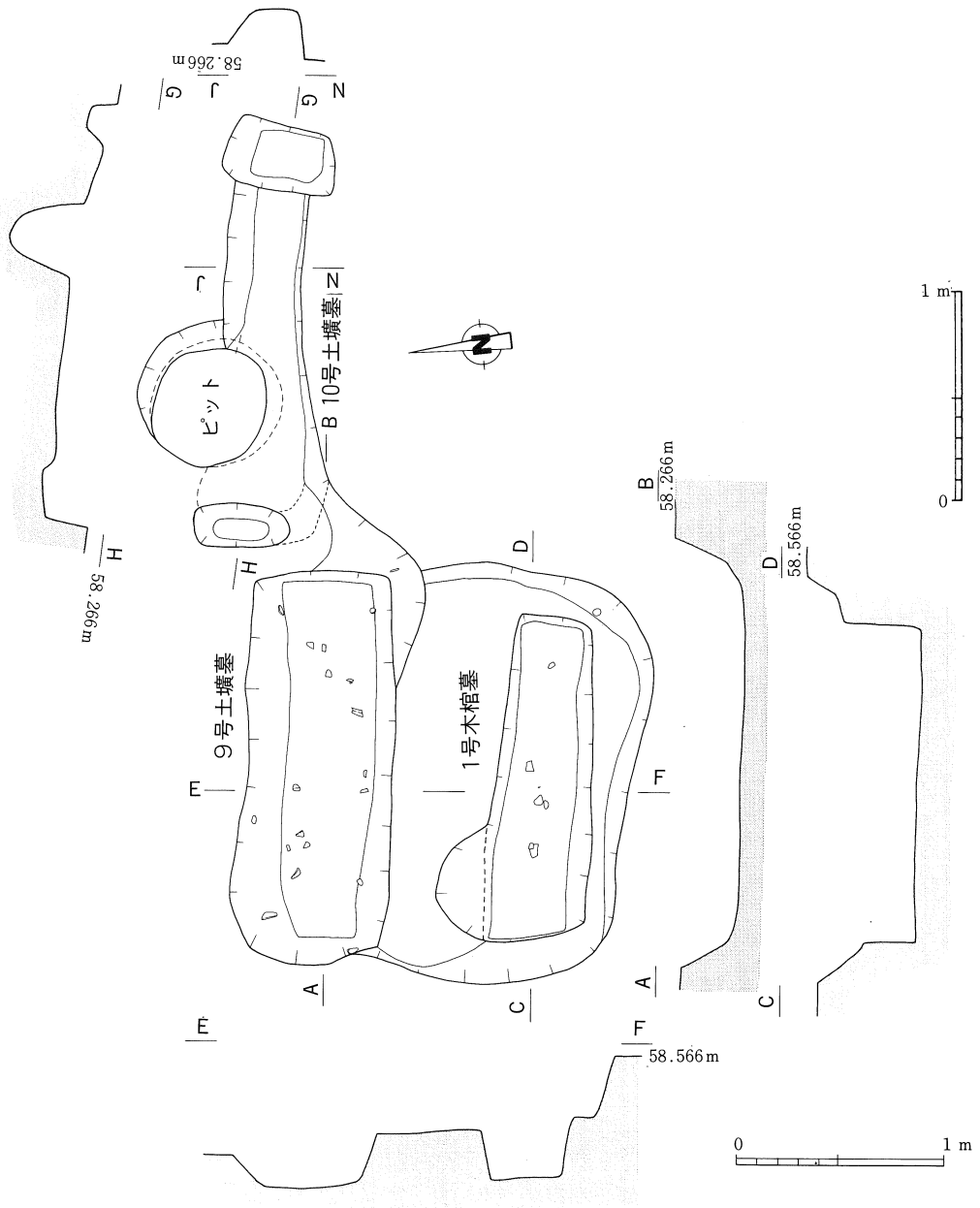
出土遺物は中央よりやや東寄りの北側壁際で甕胴部片が1点出土した。



第136図 森山8号土墳墓平・断面図

6号土墳墓 (134図)

丘陵のほぼ中央に位置し、4号土墳墓の東側に隣接しており、主軸方向もほぼ同様である。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明であるが、成人用土墳墓である。主軸を東西に取り頭位は西側にある。壁の立ち上がり角度から土墳墓と推定した。出土遺物は中央よりやや東寄りで甕胴部片が1点出土した。

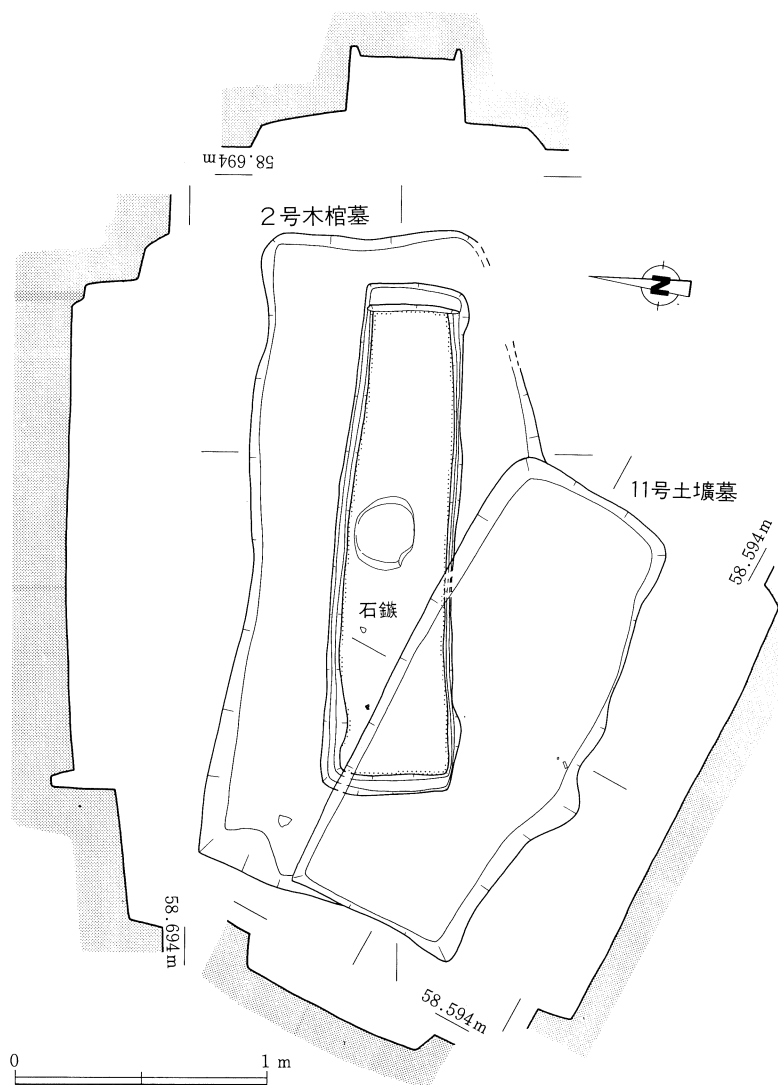


第137図 森山9・10号土墳墓、1号木棺墓平・断面図

9土墳墓 (第137図)

丘陵のほぼ中央北斜面に位置し、墳墓群中最も北側にある。主軸を東西に取り、頭位は東側にある。

出土遺物は土壌全面の流入土中に甕口縁部、胴部片が約20点ほど出土した。



第138図 森山11号土墳墓および2号木棺墓平・断面図

10号土墳墓（第137図）

9号土墳墓の東に隣接してあり、主軸方向もほぼ同様である。残存状態はピット、土坑などが作られたため上面はほとんど削平されている。わずかに東西両小口の堀方が認められ、その距離から成人用土墳墓であると考えられる。さらに両小口の堀方状態から板石を立てていた可能性が高い。

11号土墳墓（第138図）

2号木棺墓の一部をカットして造られている。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明であるが、成人用土墳墓である。主軸は2号木棺墓よりやや北方向にずれるが東西に取り、頭位は西側の可能性が強い。壁の立ち上がり角度から土墳墓と推定した。

出土遺物は中央南側壁際で甕胴部片が2点出土した。

1号木棺墓（第137図）

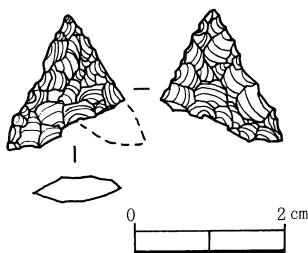
丘陵のほぼ中央北斜面9号土壙墓の南に隣接しており、主軸方向も一致する。残存状態は良好な二段掘りの成人用木棺墓である。木棺堀方は墓壙の南側に位置している。主軸を東西に取り、頭位は西側にある。小口板用の掘り込みは認められないがコーナーの形態や壁の立ち上がりの傾斜から木棺墓と認定した。

出土遺物は土壙全面の流入土中に甕胴部片が5点出土した。

2号木棺墓（第138図）

丘陵ほぼ中央のやや北斜面側、8号土壙墓の南東約1.5mに位置する二段掘りの成人用木棺墓である。墓壙の西・南壁の一部は11号土壙墓によってカットされている。土壙は墓壙のほぼ中央に主軸にほぼ平行して造られている。底面には幅5～8cm、深さ10cmの掘り込みが南北壁および西壁に認められ、その内側には2cm、厚さ1cm程の粘土目貼りが検出された。東小口床面は長さ10cm、高さ5cmの段状を呈している。以上の状況から木棺墓と認定した。主軸を東西に取り、頭位は西側にある。

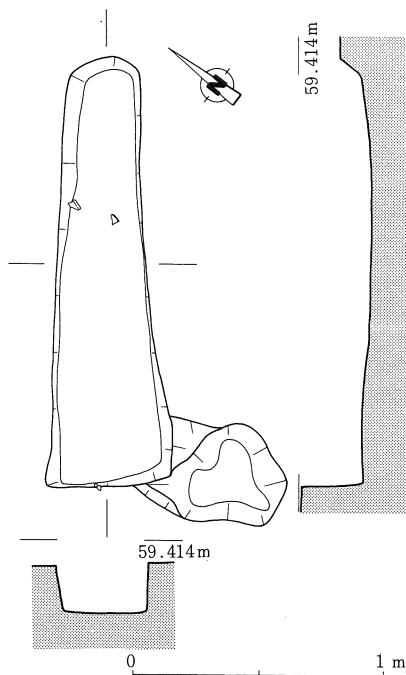
出土遺物は土壙中央床面直上に人頭大の河原円礫が1個、中央よりやや西側の北側壁寄り床面直上で打製石鏃1点が、墓壙北西コーナー付近で甕胴部片が1点出土した。なお、河原円礫は木蓋上に置かれていたものが落ちたものと考えられる。



第139図 森山2号木棺墓出土石器実測図

第73表 2号木棺墓出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
一1		打製石鏃	石英	0.6	凹基式 脚部一部欠損



第140図 森山12号土壌墓平・断面図

12号土壌墓 (第140図)

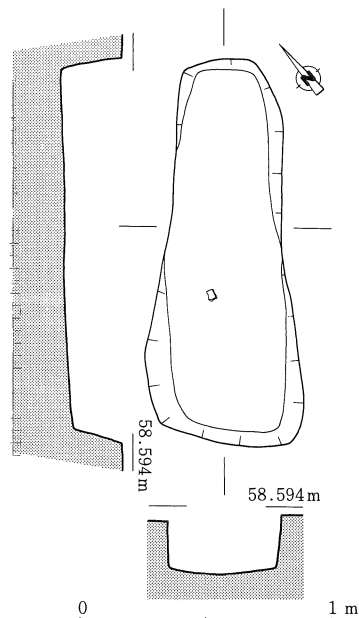
丘陵のほぼ中央に位置し、2号木棺墓の墓壇東南コーナーに隣接しており、墳墓群中最も北側にある。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明であるが、成人用土壌墓である。主軸を北東～南西に取り、頭位は南西側にある。なお、平面形態から土壌墓と推定したが、壁の立ち上がりは木棺墓の可能性も示している。

出土遺物は中央で甕胴部小片が1点出土した。

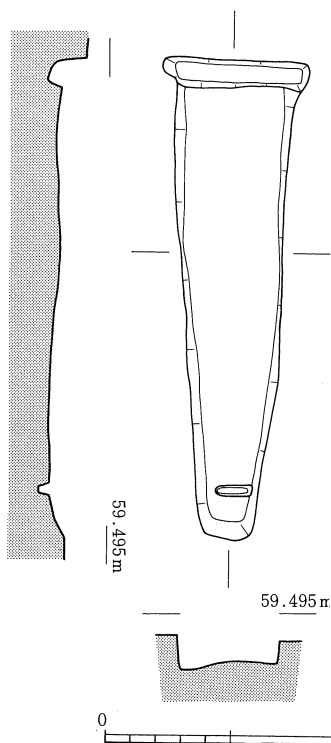
13号土壌墓 (第141図)

丘陵のほぼ中央に位置し、12号土壌墓の南西約1mに位置する。残存状態は上面が全体にカットされているので段掘りは不明であるが、成人用土壌墓である。主軸は12号土壌墓同様北東～南西に取り、頭位は南西側にある。なお、平面形態および壁の立ち上がりの状態から土壌墓と推定した。

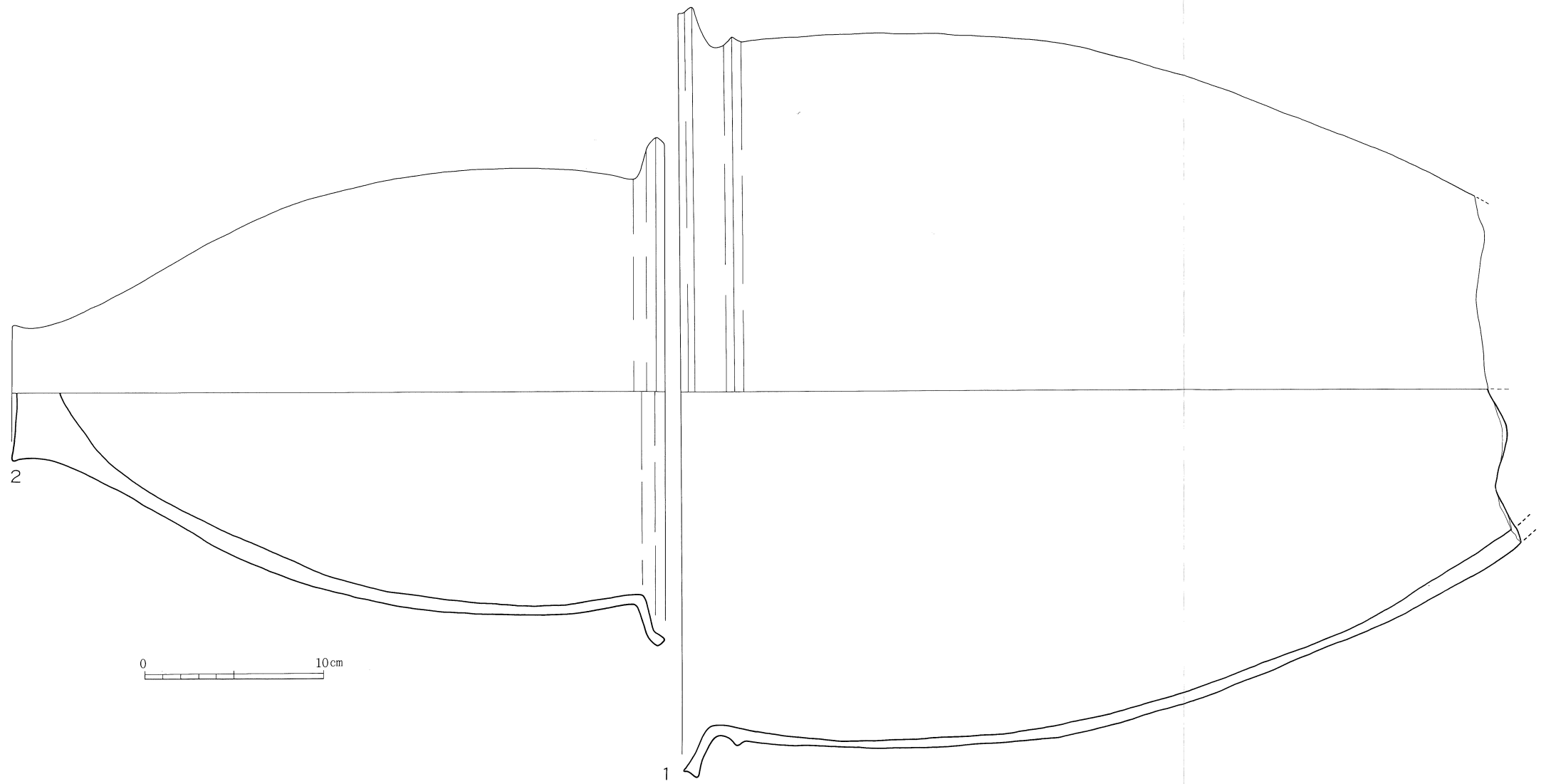
出土遺物は中央やや北東側で甕胴部小片が2点出土した。



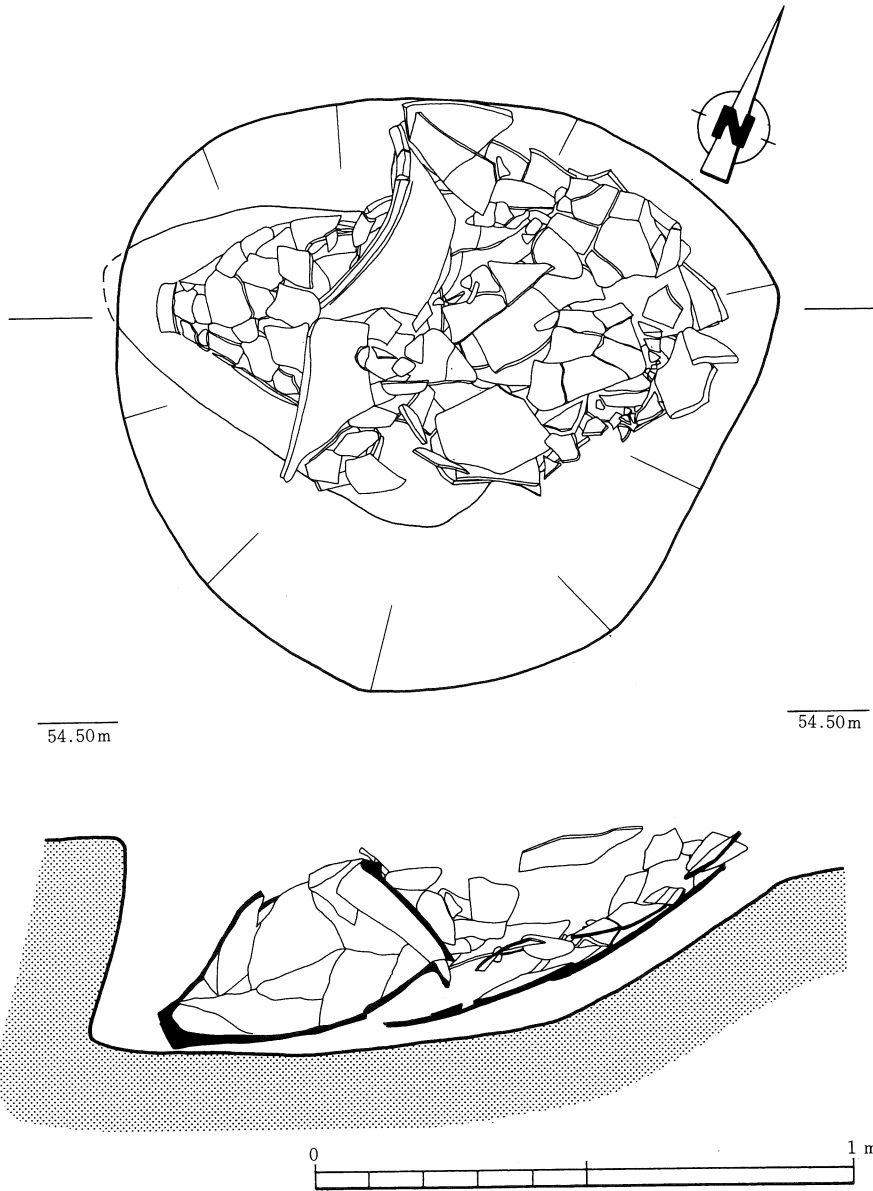
第141図 森山13号土壌墓平・断面図



第142図 森山3号木棺墓平・断面図



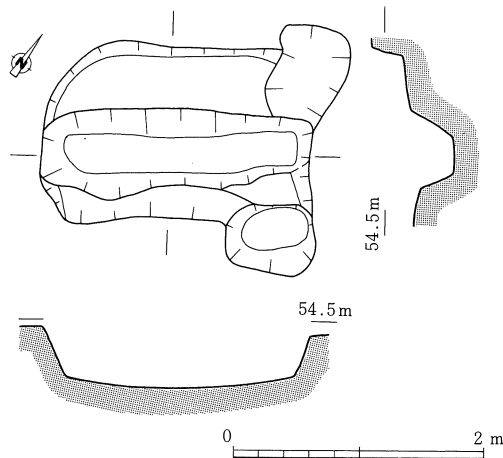
第143图 森山1号小児用鍔 实测图



第144図 森山1号小児用甕棺墓平・断面図

第74表 1号甕棺観察表

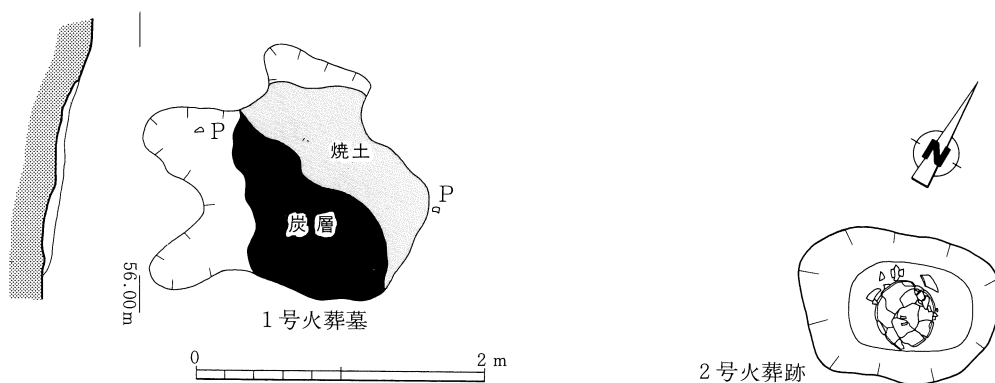
番号	写真 図版 番号	器種	法量 (cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
144図-1		上甕	42				45.0+ α	不 明	角閃石、白色砂粒含 むが精緻である	黄褐色
同一-2		下甕	28			7.5	36.5	同 上	角閃石、白色砂粒を多く含む	黄褐色



第145図 森山14号土墳墓平・断面図

14号土墳墓 (第146図)

丘陵基部から北に延びる舌状丘陵北側の東斜面付近丘陵のほぼ中央、S K31の北西0.5m隣接してある。残存状態は良好な二段掘りの成人用土墳墓である。墓壇東壁はピットでカットされている。主軸は北東～南西に取り、頭位は不明である。なお、平面形態および壁の立ち上がりの状態から土墳墓と推定した。



第146図 森山1号火葬墓・1号火葬跡平・断面図

火葬墓・火葬跡 (第147図)

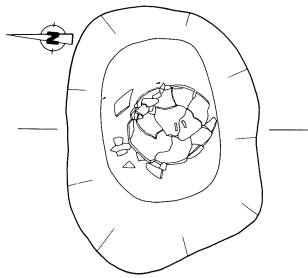
丘陵基部から北に延びる舌状丘陵の基部東斜面際、S D 2の南5m前後の所に位置する。標高56mの等高線上に並んで東に火葬墓、西に火葬跡がそれぞれ1基検出された。

1号火葬墓 (第148図)

本火葬墓は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵の基部東斜面際、標高約56mに位置する。上面は削平を受けているが東西1.0m、南北0.75mの楕円形土壇の中央に土師器甕が正置されていた。この甕上面も削平されており、口縁部が骨片とともに内部に落ち込んでいる。墓壇掘方と甕の間には炭混じりの黒色土を詰めている。さらに、甕底部の一部分は火を受けて赤変している。

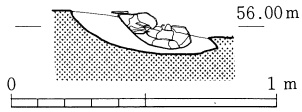
1号火葬跡 (第147図)

本火葬跡は1号火葬墓の西1.5mほどのところに位置する。東西1.0m、南北0.8mのヒトデ上の不定形な土坑である。南北長1.6m、東西長2.1m、深さ0.5mを測り、南辺は上面が削平され

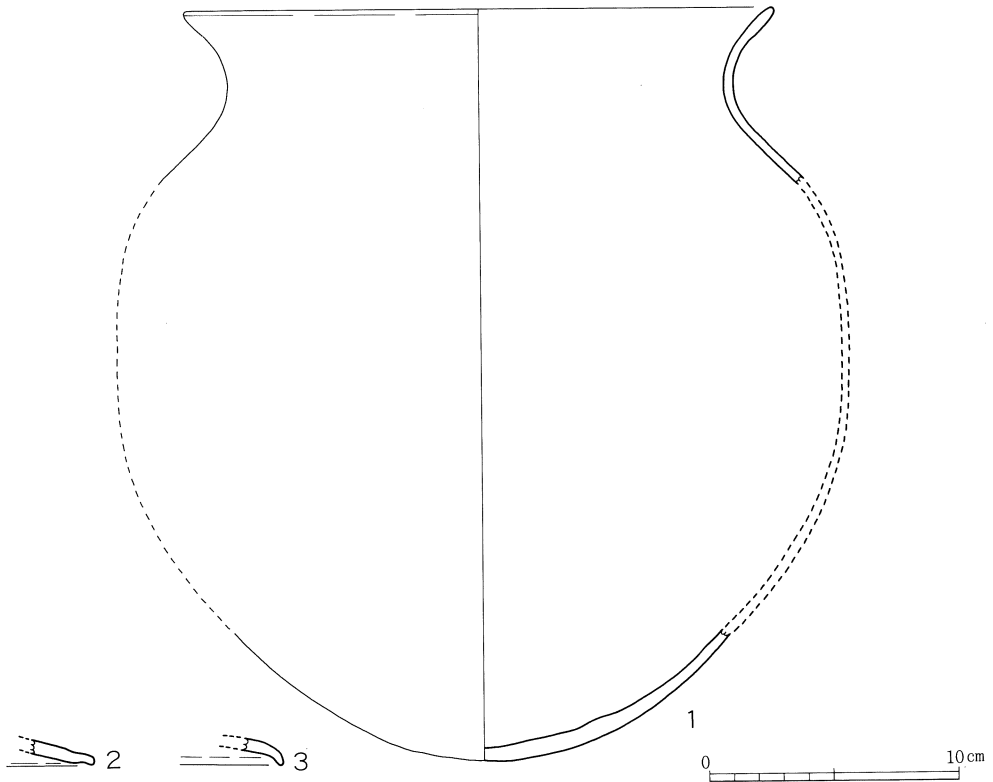


ている。中央やや西側から東側にかけてはほぼ全面に厚さ2 cm前後の焼土層が、中央付近ではこの焼土層の上面に1 cm前後の炭層が認められた。

出土遺物は土坑内西側と焼土層東側で須恵器壺蓋が検出された。



第147図 森山1号火葬墓平・断面図



第148図 森山1号火葬墓・1号火葬跡出土土器実測図(1は1号火葬墓、2・3は火葬跡出土)

第75表 1号火葬及び1号火葬跡出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
- 1		甕	(23)					底部内面→ハケ後ナ デ、他は不明	角閃石粒を多く含む	茶褐色で底部外面 一部赤変する
- 2		蓋						回転ヨコナデ	精緻である	灰黒色
- 3		蓋						同 上	同 上	同上

溝

SD 1

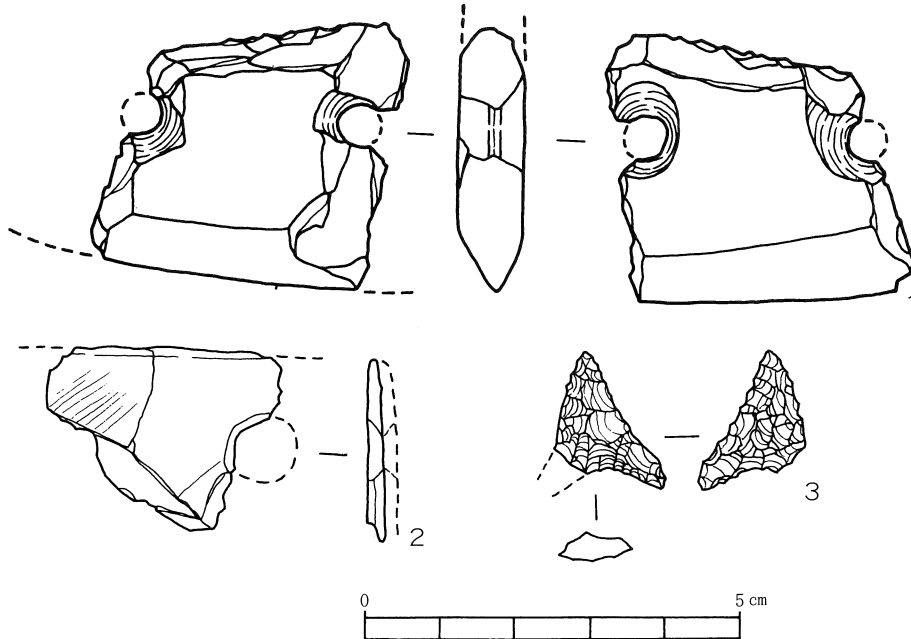
本溝は舌状丘陵のほぼ中央の頂部から北側斜面にかけての標高57.5mに位置する。この位置はS B11の東0.5mの所に隣接してある。溝は尾根の頂部から北側斜面にかけて丘陵を切断するように南北方向に直線的に延びている規模は南北長11.6m、上部幅1.5m、底面幅0.8m、深さ0.35mを測り、断面は逆台形状を呈す。南側は調査区外に、北端は斜面によって若干削平されている。埋土の状況からは土塁などの施設はなく、長期間の使用も認められない。

遺物の出土は溝内南側で弥生土器小片以外に磨製石包丁型石器片2点、打製石鏃1点が出土した。

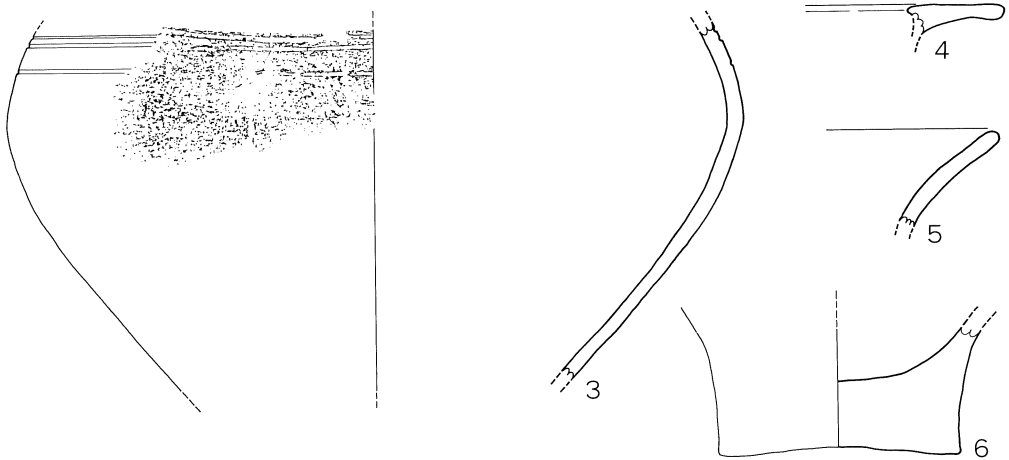
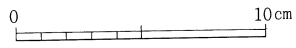
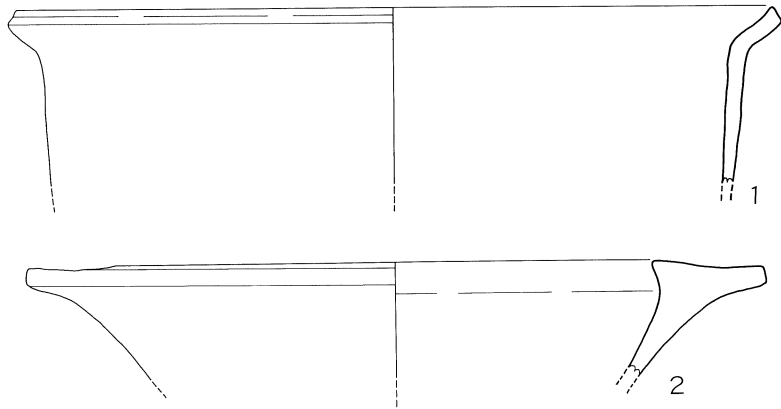
SD 2

本溝は丘陵基部から北に延びる舌状丘陵の頂部よりやや下位の標高約56~56.6mに位置する。この位置はS B29の南西13mの所にあり、S K23の中央をカットしている。溝は丘陵を切断するように東南方向から北西方向にほぼ直線的に延びている。規模は長約20m、上部幅1.05m、底面幅0.7m、深さ0.55mを測り、断面は逆台形状を呈す。北壁は斜面のため上部が若干削平されている。埋土の状況からは土塁などの施設はなく、長期間の使用も認められない。

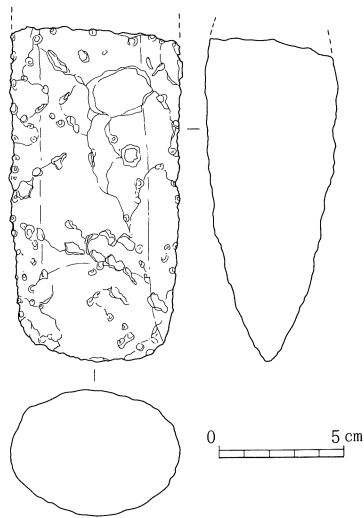
遺物の出土は溝内中央付近で弥生土器小片以外に大型蛤刃石斧1点、凹石1点、石皿1点が出土した。



第149図 森山SD 1出土石器実測図



第150図 森山SD1・2出土土器実測図(1~2はSD1、3~6はSD2)



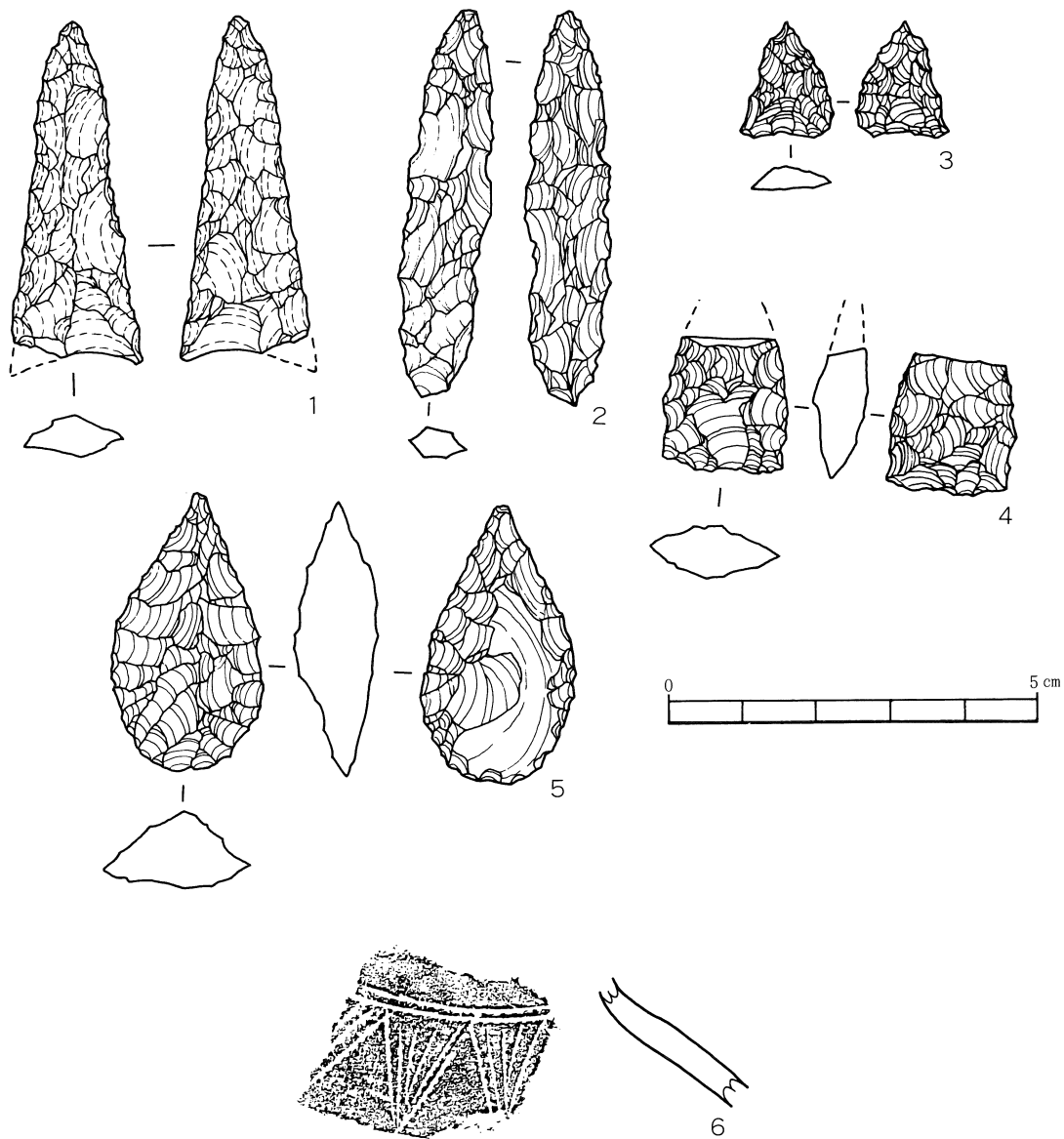
第151図 森山SD 2 出土石器実測図

第76表 森山SD 1・2 出土土器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元				調整	胎土	色調
			口径	頸部径	胴部 最大径	底径			
151図-1		甕	(30)				不明	精緻である	黄褐色
151図-2		壺(?)	(21)				同上	角閃石、石英砂粒を多く含む	内外面→茶褐色、 断面→黒色
151図-3		壺			(28)		同上	角閃石、石英粒を含む	黄褐色
151図-4		甕(?)					同上	同上	同上
151図-5		壺					同上	同上	同上
151図-6		底部				9.5	同上	同上	淡黄褐色

第77表 森山SD 1・2 出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器種	石材	重量(g)	備考
150図-1		石包丁形石器	輝緑疑灰岩	15.7	立岩産疑灰岩
150図-2		同上	硬質砂岩	—	
150図-3		打製石鏃	姫島黒耀石	0.5	凹基式 脚部一部欠損
152図-1		太形蛤刃石斧	安山岩	736.1	



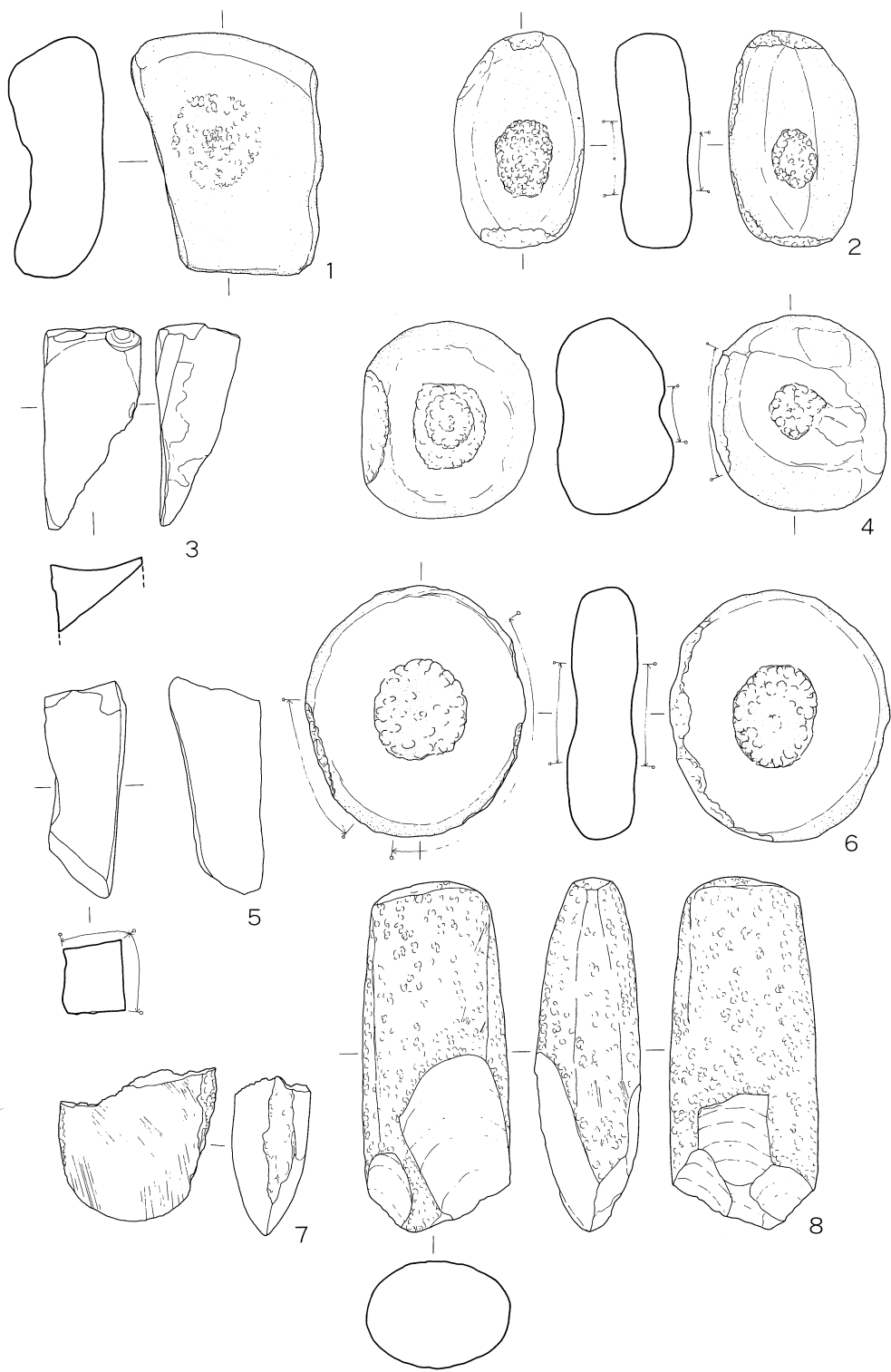
第152図 森山北側丘陵斜面部表採遺物実測図

第78表 森山北側丘陵部表採土器観察表

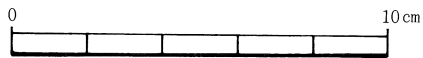
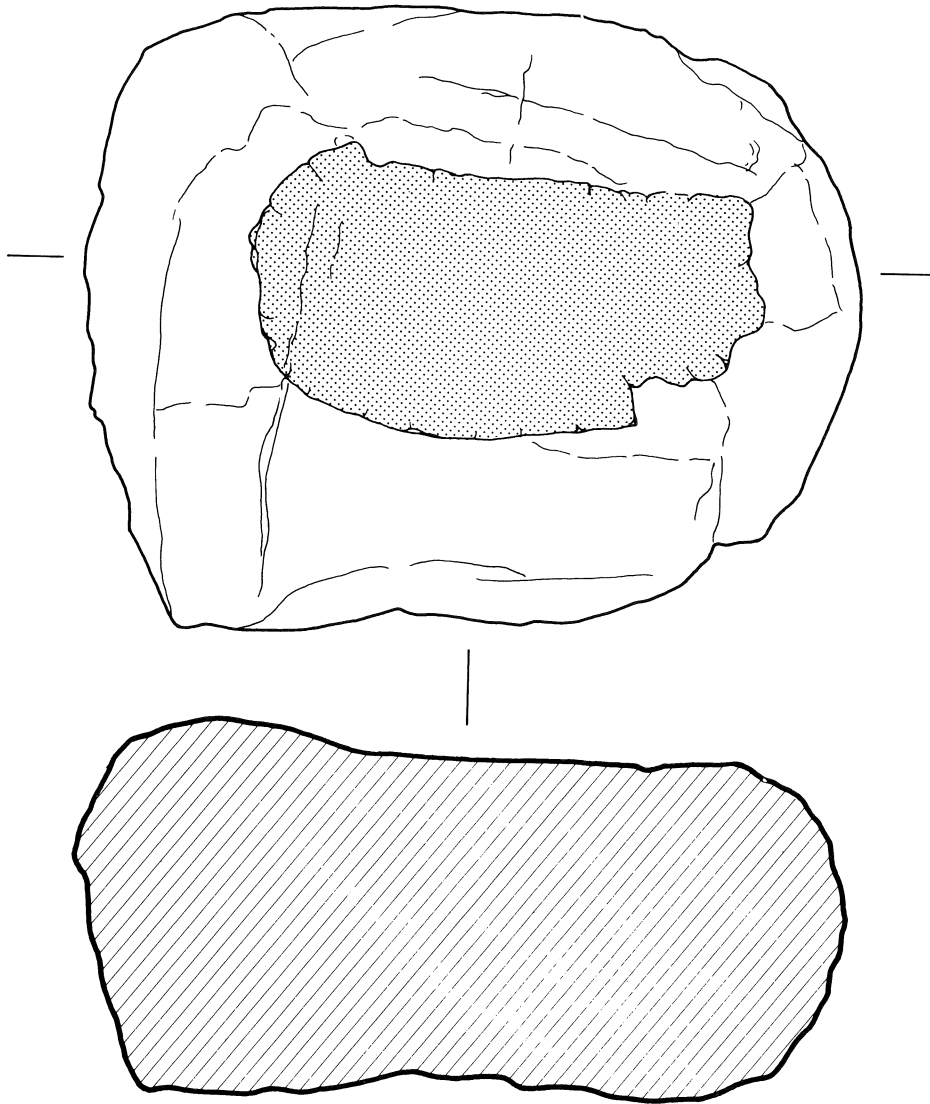
番号	写真 図版 番号	器種	法量(cm) ()の数値は推定復元					調 整	胎 土	色 調
			口 径	頸部径	胴部 最大径	底 径	器 高			
153図-6		壺肩部片						外面に貝殻圧痕文	精緻である	茶褐色

第79表 森山北側丘陵部表採石器観察表

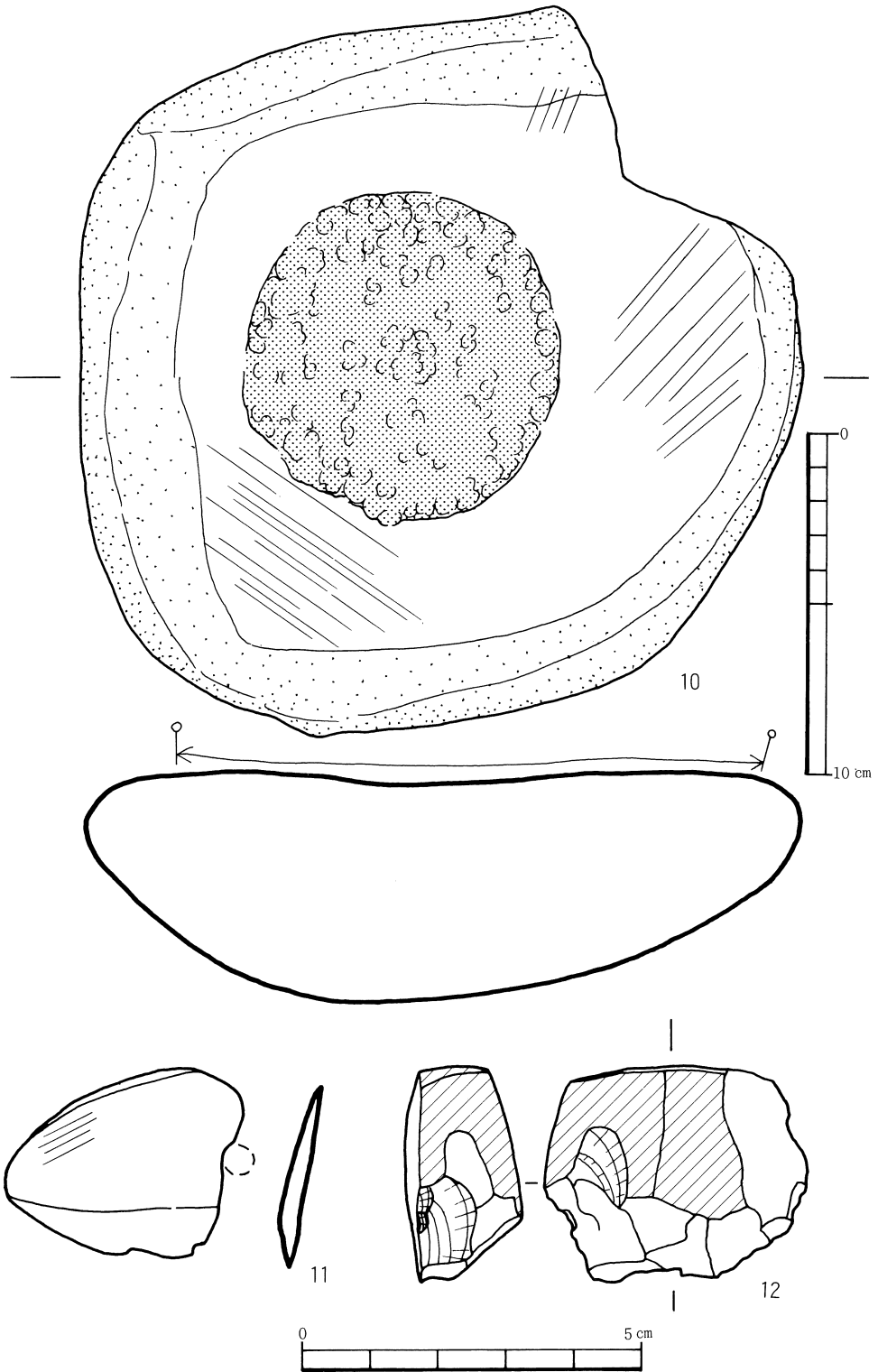
番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
153図-1		打製石鏃	サヌカイト	2.9	平基式 基部一部欠損
153図-2		ポイント	姫島産黒耀石	5.6	
153図-3		打製石鏃	同上	0.3	平基式
153図-4		同上	同上	0.9	同上 先端部欠損
153図-5		同上	同上	5.1	凸基I式



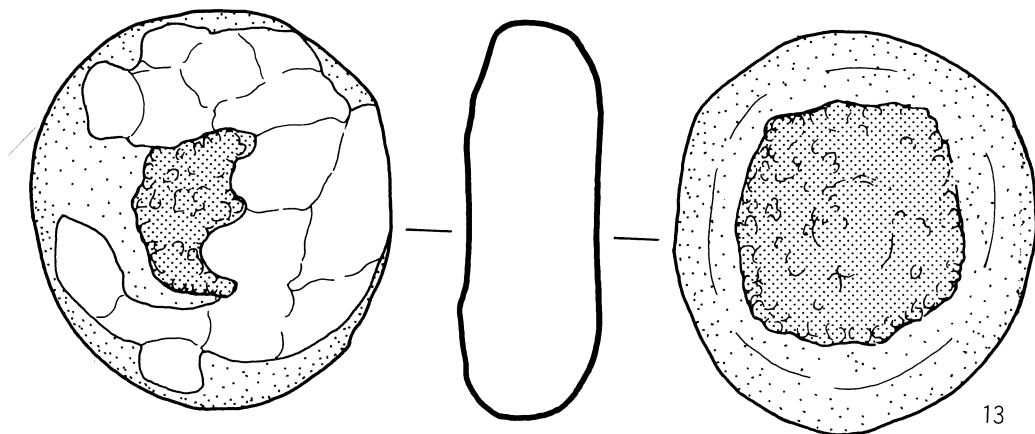
第153图 森山遗迹出土石器实测图



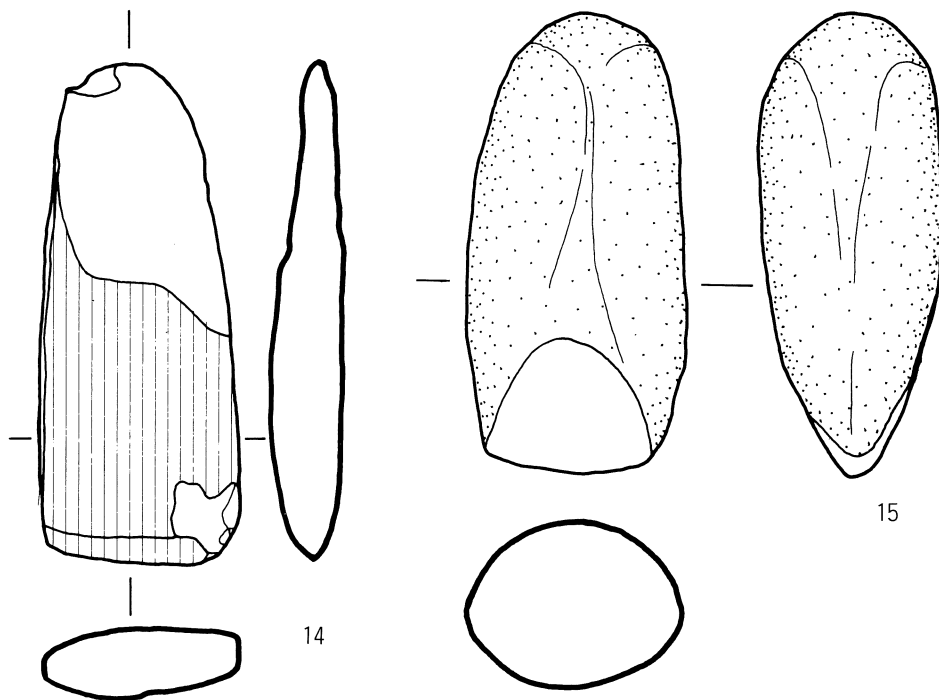
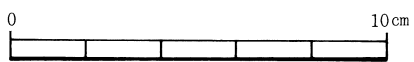
第154図 森山遺跡出土石器平・断面図



第155図 森山遺跡土器平・断面図

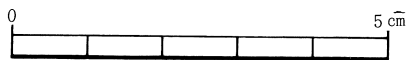


13



14

15



第156図 森山遺跡出土石器平・断面図

第81表 森山S B10・16・18・27・29 S K23、S P17、S D 2 出土石器観察表

番号	写真 図版 番号	器 種	石 材	重量(g)	備 考
1		凹石	安山岩	459	S P17出土
2		同上	同上	416	同上
3		砥石	同上	250	S B27出土
4		凹石	同上	453	S D 2 出土
5		砥石	同上	280	S B10出土
6		凹石	同上	824	S B18出土
7		大型蛤刃石斧	蛇紋岩	207	北側包合層出土
8		同上(未製品)	頁岩	726	同上
9		石皿	安山岩	4800	S B18出土
10		石皿	同上	6500	S K23出土
11		石包丁型石器	輝緑凝灰岩(立岩)	4	S B16出土
12		偏平片刃石斧	砂岩	27	S B18出土
13		凹石	安山岩	860	同上
14		偏平片刃石斧	蛇紋岩	27	S B18出土
15		小型石斧	安山岩	42	S B29出土

第82表 森山遺跡住居跡一覽

新番号	旧番号	平面形態	屋内施設	周溝・テラス	柱穴数	出 土 遺 物					住居跡の位置	時 期
						土 器	金属器	石 器	石 鏃	種 子		
S B 1	S B1-1	隅丸長方形			1 + α	3					北斜面	
S B 2	S B1-2	隅丸方形			4	5					同上	
S B 3	S B 3	円形	西側に土坑		5	3					同上	
S B 4	S B 2	楕円形	中央に土坑		1 + α	5					北斜面上部	
S B 5	S B 4	隅丸方形	東壁に焼土	テラス有	4	20					北斜面	前・末～中初
S B 6	S B 5	同上		テラス有	不明	20					同上	中・前～中・中
S B 7	S B 6	同上	中央に土坑		1 + α	500	不明鉄器1	3	1(打)		北斜面上部	中・中
S B 8	S B10	同上			不明	200	不明鉄器1		6(打)		北斜面	中・中
S B 9	S B14	隅丸長方形	南壁に焼土、土坑		2	100		9			同上	中・中
S B10	S B13	楕円形			不明	100		4	3(打)		頂部	
S B11	S D 8	隅丸方形?			不明	200					同上	中・後～中・末
S B12	S B15	隅丸長方形		溝一部有	不明	50		7			北斜面	中・中
S B13	S B17	隅丸方形	中央に炭化層		2	200		33	1(打)	アスキ?	同上	中・中～中・後
S B14	S B21	同上			不明	20			3(打)		北斜面	同上
S B15	S B18	円形		溝一部有	10 + α	50			3(打), 2(磨)	モミ, アスキ?	頂部	同上
S B16	S B 8	円形	中央に長方形土坑		6	400	鉄斧? 1	14			同上	同上
S B17	S B20	隅丸長方形			不明	100		5	6(打)	モミ, 不明種	頂部	同上
S B18	S B19	楕円形	西側に土坑	テラス一部有	6	400		13			北斜面	前・末～中・初
S B19	S B23	隅丸長方形	中央に炭化層、焼土	溝一部有	不明	200		8	3(打)		同上	中・中～中・後
S B20	S B24	同上	中央に土坑		不明	200		6			同上	
S B21	S B22	同上	東側に土坑		2	50		1			頂部やや斜面	
S B22	S B30	同上		一部壁溝	1	20		1			同上	
S B23	S B25	隅丸方形		壁溝有	無	3			3(打)		同上	
S B24	S B28	隅丸長方形	中央に土坑		不明	100		21			北斜面	中・中～中・後
S B25	S D34	楕円形	西側に小土坑		2	20					頂部やや斜面	同上
S B26	S B29	円形	中央に小土坑		6?	30		2	1(打)	アスキ?	頂部	同上
S B27	S B31	隅丸方形	中央に土坑		6	150		7	3(打)		頂部やや斜面	同上
S B28	S B32	円形?	同上		9	100		5	20(打)		頂部	同上
S B29	S B35	円形	中央に隅丸長方形土坑	壁溝有	7	120		6			東丘陵頂部	同上
S B30	S B37	隅丸方形			不明	20		1	1(打)		同東斜面	同上
S B31	S B39	楕円形?	中央に楕円形土坑		6	40		5	1(打)		同上	同上
S B32	S B40	隅丸長方形			不明	50		1			同上	前・末～中・初

第83表 森山遺跡土壙・木棺墓一覧表

(単位：cm)

NO	主軸方位	墓 壙(内法)			土壙・棺(内法)			掘込み		頭位	備 考
		長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	木口部	側板		
1号木棺墓?					170	42	18				西小口上面に標石、土器出土
2号 "	N-85°-E	252+ α			200	45	27	○	○		棺中央で河原石出土
3号 " ?	N-5°-W		107+ α	10	160	40	16	○			
1号石蓋土壙墓	S-65°-W				195	56	25				土壙内に弥生土器片出土
1号土壙墓	N-85°-W	227			183	49	30				墓壙西側で弥生土器片出土
2号 "	N-60°-W		98	5	117+ α	30	7				
3号 "	N-1°-W				195	41	8				
4号 "	N-85°-E				203	52	15	○(東側)			墓壙内で弥生土器片出土
5号 "	N-75°-W				185	78	15				
6号 "	N-73°-W				224	75	16				打製石鏃1点出土
7号 "	N-1°-W				75+ α	25	6				
8号 "	N-85°-W				177	51	8				土壙中央北壁で弥生土器片出土
9号 "	N-80°-W	166	105+ α	13	148	33	27				土壙内に弥生土器片出土
10号 "	N-85°-W				150	25	22	○			
11号 "	N-70°-W				186	75	14				
12号 "	S-55°-W				144	45	19				弥生土器片出土
13号 "	S-54°-W				165	40	25				同 上
14号 "	S-60°-W	165	80	20	143	20	27				

第84表 溝・土壙・ピット一覧

新番号	旧番号	平面形態	屋内施設	出 土 遺 物					位 置	時 期	
				種 子	土 器	金属器	石 器	石 鏃			
SD1	1号溝	断面逆台形			10			1	1	西丘陵西側	中・中・後
SD2	2号溝	同上			20			3		北丘陵南側	中・中・後
SK1	SD0	不定楕円形			3					北斜面	
SK2	SD1	楕円形								同上	前・末
SK3	SD2	同上	ピット2		30			1		同上	前・末
SK4	SD4	同上								頂部	
SK5	SD5	同上								同上	
SK6	SD6	隅丸長方形								同上	
SK7	SD7	不定方形								同上	
SK8	SD8	不定楕円形								同上	
SK9	SB12	隅丸長方形		アズキ?	50	不明1		6		北斜面	
SK10	SB16	不定楕円形			5					同上	
SK11	SB17東土坑	不定方形								同上	
SK12	SB18東土坑	不定楕円形			50					頂部	中・末・後・初
SK13	SD30	楕円形								北斜面	
SK14	SD18	同上								頂部やや北斜面	

第84表 溝・土壙・ピット一覧

新番号	旧番号	平面形態	屋内施設	出土遺物					位置	時期
				種子	土器	金属器	石器	石鏃		
SK15	SB2補土坑	隅丸方形?							北斜面	
SK16	SD20	不定楕円形			20		3		同上	
SK17	SD21	同上							同上	
SK18	SP27	不定楕円形?					2		頂部	
SK19	SD29	楕円形			20	鉄斧? 1	1	1(打)	頂部やや北斜面	
SK20	SD34内土坑	不定円形	ピット1		15				同上	
SK21	SB33	不定楕円形			20				頂部	
SK22	A号堅穴	不定円形						1(打)	頂部やや東斜面	
SK23	SB34	同上			50		8	2(打)	北西斜面	
SK24	SB36	不定楕円形			20				北丘陵やや東斜面	
SK25	SB41	円形			20		6	3(打)	同上	
SK26	同上	不定楕円形			10				同上	
SK27	同上	隅丸方形?							同上	
SK28	SD34	隅丸三角形					1		東斜面	
SK29	SD32	不定楕円形							同上	
SK30	SB38	隅丸三角形		アズキ?					同上	
SK31	SD35	円形	ピット1		20		1		同上	
SK33	SD37	楕円形			20		2		北丘陵東斜面	
SK34	SD36	不定楕円形					1		同上	
1号祭祀土坑	SB27	隅丸長方形			80		6	1(打)	西丘陵北斜面	中・中～中・後
SP1	SP0	楕円形			20				西丘陵頂部西側	
SP2	SP1	円形			10				頂部やや斜面	
SP3	SP2	楕円形			10				頂部	
SP4	SP3	円形			5				同上	
SP5	SP6	同上			5				同上	
SP6	SP11	楕円形			30		3	1(打)	北斜面	
SP7	SP20	円形			30				頂部	
SP8	SP22	楕円形			30		2		同上	
SP9	SP23	同上					1		同上	
SP10	SP24	円形			20		2		同上	
SP11	SP25	同上			2		2	1(打)	同上	
SP12	SP39	同上			1				北丘陵東斜面	
SP13	SP31	楕円形							同上	
SP14	SP15	円形					1	1(打)	西丘陵頂部	
SP15	SP19	楕円形					2		同上	
SP16	SP14	隅丸三角形						1(未)	同上	
SP17	SP16	円形					3		同上	
SP18	SP10	楕円形						1(打)	北斜面	
SP19	SP28	円形						1(打)	頂部	

第85表 石器出土表(1)

遺構	器種	太 蛤 刃 石 斧	磨 製 石 斧	方 片 刃 石 斧	扁 片 石 斧	石 頁 岩	包 凝 灰 岩 立 岩	丁 砂 岩	石 磨 製	鋏 打 製	石 劍	ス ク レ パ ー	砥 石	磨 石	凹 石	敲 石	石 皿	石 核	剥 片	そ の 他	扁 平 打 製	石 錐	時 期
SB 3																			2				
SB 5																			2				
SB 6										1									1				
SB 7								1		6		1					1		4	管玉1			
SB 8																			4				
SB 9	1							1	1	3			1	2	2		1		7				
SB10								2					1	1			1		1				
SB11																			1				
SB12										2			1			2	1	1	14		3		
SB13	1					1				3	1			4	2		4		12	投弾 20	2		
SB16						1 (小片)	2		2	13.3 (未)	1 (未)	1	2		1	1	2	2	79	管玉1	2	1	
SB17			1										1	1		1	1		3				
SB18		1 (小型)								6			1	4	2	1	4		24				
SB19													3		3	1			13		1		
SB20										3	1			1		4	1						
SB21													1						2				
SB22																			1	管玉1			
SB23																			1				
SB24										3			3	4	2	6	6		17				
SB25										2		1									1		
SB26													4				1		1				
SB27										1				1		2	3		7		1		
SB28										3			1	2			1		6				
SB29		1		1						28.3 (未)		3					1	2	72				
SB30										1		1		1		3	1		3		1		
SB31										1									17				
SB32										1						1	2		9				
SK 3																			9				
SK 7																1			2				
SK 9								1						1	1			1	2				
SK10																			1				
SK11																			5				
SK16														1	1		1						
SK18														1			1		4				

第86表 森山遺跡石器出土表(2)

遺構	器種	太 哈 刃 石 斧	磨 製 石 斧	方 片 刃 石 斧	扁 片 石 斧	石 頁 岩	包 凝 登 立 岩	丁 砂 岩	石 磨 製	鏃 打 製	石 劍	ス ク レ パ ー	砥 石	磨 石	凹 石	敲 石	石 皿	石 核	剥 片	そ の 他	扁 平 打 製	石 錐	時 期
SK19										1													
SK20										1 (未)									10		1		
SK21										1									2				
SK23										5				1		1	6	59					
SK24				1						1	1					1	1	4					
SK25										3				2	1		3	3					
SK28												1											
SK29																		1					
SK31																	1		2				
SK33														2					2				
SK34													1										
1号祭祀土坑										1			2	1	1		2	4					
SP1																			2				
SP5		1								1								1	4				
SP6						1				1					1								
SP8													2										
SP9													1										
SP10	1														1								
SP11																			1				
SP13												1											
SP14										1					1								
SP15															1		1						
SP16		1 (未)																					
SP17													1			2			2				
SP18										1									1				
SP19										1													
SD1							1			1									1				
SD2	1														1		1		1				
1号石蓋																			1				
2号木棺墓										1													
北側包含層	1 (未)	2							1	10		4	2	6	5	2	4	1	69		1		
合計	5	6	2	2	4	3	5	4	113	3	14	24	41	26	31	52	9		20 3	13	1		
%	1.3	1.6	0.5	0.5	1.0	0.8	1.3	1.0	29.7	0.8	3.7	6.3	10.8	6.8	8.1	13.6	2.4		5.3 0.8	3.4	0.3		

3. 小結

(1)出土土器の編年的位置づけ

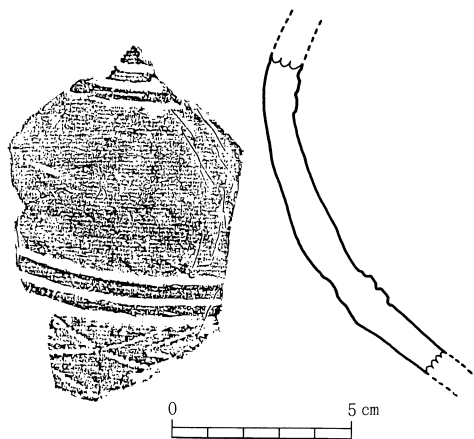
豊前南部地域の弥生時代前期から中期にかけての土器編年は、1975年の大分県宇佐市台ノ原遺跡^{註(1)}の報告を嚆矢とする。この報告では台ノ原I式を北部九州の板付II式後半並行期に、台ノ原II式Aを同城ノ越式並行期に、台ノ原II式Bを同須玖I～II式並行期に比定してこの地域の弥生前期から中期にかけての土器編年の大綱を示した。その後、1976年の福岡県新吉富村垂水の奈良前期の寺院跡と考えられる垂水廃寺の調査時に竪穴、土坑等から弥生時代前期末～中期初頭^{註(2)}、中期前半～中頃の土器が出土したことが報告されている。さらに、1978年、同新吉富村中桑野遺跡^{註(3)}の報告において前期後半から中期後半までの土器をV期に区分した上にそれぞれの土器形態の特徴を5地域相（豊前相、福岡相、瀬戸内相、山口相、不明相）に分類している。時間軸と空間軸を駆使し、土器から見た地域文化層を視点に入れた意欲的なものであるが、根幹となる土器相についての十分な検討、土器製作情報の変化プロセスなど若干の問題点も残った。また、1984年の大分県安心院町宮ノ原遺跡^{註(4)}の報告では、前期後半～古墳時代初頭までの土器をVII期に区分した。特に台ノ原II式Bと総称された北部九州の須玖I・II式については、宮ノ原III期、同IV期と細分し、さらに中期後半の土器についても器形は明示してないものの相当期を設定している。

以上が、豊前南部地域における集落跡より見た前期～中期の土器編年の大綱であるが、これらの資料は遺跡の性格上、流れ込みなどの要素もあり、組成の一括性を考えた場合ある程度の時間幅を認めなければならない。その点、1986・87年に報告された宇佐市樋尻道遺跡^{註(5)}、同野口遺跡^{註(6)}は、弥生時代中期後半を中心とする墳墓群で小児用甕棺墓、祭祀土坑出土土器は、その性格上、より一括性の高い土器組成を抽出することができた。既往の研究成果をもとに本遺跡および中津平野周辺の縄文晩期から弥生時代の土器を概観してみよう。

縄文晩期後半～末（弥生早期？）の資料については良好な一括資料は未だ発見されてないが、

本耶馬溪町多志田遺跡、筑上群大平村下唐原遺跡、中津市樋多田遺跡等河川の第1段丘あるいは自然堤防上に立地する当該期の遺跡が多い。石器については大陸系石器は現在までのところ発見されておらず、扁平打製石器、磨石、敲石等の縄文系石器のみが発見されており、現状では中津平野周辺では縄文晩期後半～末の水稻栽培は明らかでない。

弥生前期前半～中頃にかけての資料も明確でないが、唯一中津市在住の吉田良介氏の高瀬遺



第157図 中津市高瀬遺跡出土表採遺物

遺跡採集資料中に丹塗研磨をし、頸部に三条、胴部に二条の削出突帯を持ち、胴部下半に貝殻圧痕による羽状文を施す壺型土器片(第157図)があり、これは瀬戸内周辺の技法を持つ土器で、前期後半(板付II a 新段階)のものと考えられる。いずれにせよこの時期の遺跡は河岸の第一段丘上あるいは自然堤防上に小規模に立地すると思われ、このような立地条件を満たす高瀬、佐知遺跡等の詳細な調査が今後の課題となろう。

さて、本遺跡中の最古の土器としてはSK3、SK19、SK21、SP4、SP5の資料がある。SP4は小型の貯蔵穴と考えられる遺構で、ここでは頸部に貝殻圧痕による2条の沈線、胴肩部に放射肋のある貝殻圧痕文による二重の山形文が施されたやや大形の壺と口縁部と胴部のくびれの明瞭な壺が認められた。SK3、SK19、SK21、SP5の資料には底部上げ底状の甕で口縁下に有刻や無刻の凸帯を巡らす下城式土器あるいは口縁部に三角凸帯を巡らす亀ノ甲式土器が認められる。壺は胴肩部に沈線による羽状文様を施したもの、頸部と胴部の境が明瞭でなく頸部・胴部ともやや長くなる壺が認められる。台ノ原I式、宮ノ原I式にほぼ並行するもので弥生前期末～中期初頭(板付II b 新段階)に比定されるものであろう。なお、これらの中でもSK21、SP4が古相を示し、SK3、SK19、SP5が新相を示すものであろう。将来的に良好な土器組成が認められれば分離できる可能性もある。

中津平野の該期に相当する土器としては大坪南溝状遺構出土土器^{註(7)}、上ノ原横穴墓ピット内出土土器、同1号土壙墓出土土器^{註(8)}などがある。

次に中期前半の土器としては明確な資料を欠くがSB32、SK14出土のものの一部が相当すると考えられる。これには前記した亀ノ甲タイプのものにL字口縁で胴部に一条の凸帯を巡らす甕、頸部と口頸部がくびれずに続く壺、口縁部を若干肥厚される壺などが認められる。これらの土器は台ノ原II A式、宮ノ原II式に該当するもので北部九州の城ノ越式に並行するものであるが本遺跡では余り明確な土器組成は確認できなかった。

中期中頃に比定される資料にSK25、SD1、SP1の資料がある。底部にはやや上げ底状を呈す厚底で胴部はやや丸く、口縁部は「く」字状をなし口縁端部を肥厚させる甕、口縁部を肥厚させ鋤形口縁をなす壺が認められる。これらは台ノ原II B式、宮ノ原III期に該当するもので北部九州の須玖I式に並行するものであるがこの時期も前期同様、本遺跡では明確な土器組成が認められなかった。

中期後半の土器は本遺跡の大半の遺構で出土している。特にSB7、SB9、SB16、SB17、1号祭祀土坑、1号甕棺墓出土土器などに代表される。甕は底部がやや上げ底状を呈す厚底で、胴部は丸く、口縁部は「く」字状をなし口縁端部を摘み上げるいわゆる跳上口縁を呈するタイプと底部は平底状の薄底で口縁部はやや垂下気味の鋤形口縁を呈す甕がある。跳上口縁甕には断面三角形の、鋤形口縁甕には断面M字状の凸帯を口頸部直下に巡らしている。壺は鋤形口縁を呈するものと朝顔形に広がる広口口縁壺が認められる。他に高坏、小壺、鉢、直口壺等の出土も認

られた。これらの土器は宮ノ原VI期に該当するもので北部九州の須玖II式に並行するものである。

中期末～後期初頭の土器に比定されるものにSB11出土資料がある。口縁中央に弱い稜線を持つ袋状口縁壺と「く」字状を呈し若干肥厚した口縁端部を丸く収める甕が認められ、須玖II式土器よりやや後出の土器と考えられる。

以上が、本遺跡における出土土器の編年的位置づけであり、前期末～中期初頭と中期後半に遺構群の大半が形成、廃棄されたことが理解されよう。

註(1) 後藤宗俊「台ノ原遺跡出土の弥生土器の編年」「台ノ原遺跡」大分県教育委員会 1975年

註(2) 高倉洋彰「弥生土器」『垂水廃寺』新吉富村教育委員会 1976年

註(3) 馬田弘稔『中桑野遺跡』新吉富村教育委員会 1978年

註(4) 坂本嘉弘『宮ノ原遺跡』安心院町教育委員会 1984年

註(5) 佐藤良二郎他『馱館川流域遺跡群発掘調査報告書』I 1986年

註(6) 小倉正五・佐藤他『馱館川流域遺跡群発掘調査報告書』II 1987年

註(7) 江田豊「大池南遺跡」『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1988年

註(8) 村上久和「上ノ原横穴墓II」『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』(2) 1991年

(2)集落および墳墓について（付図 I 参照）

森山遺跡の調査は弥生時代中期の東九州北部（豊前南部）における集落構成を部分的ではあるがとらえたという意味で重要な意味をもつ。豊前地方の弥生時代前期～中期にかけての集落のほぼ全容の理解できる調査は行橋市竹並遺跡^{註(1)}を端緒とし、同前田山遺跡^{註(2)}、同下稗田遺跡^{註(3)}と北豊前側で集中して行なわれた。それに対して南豊前においては宇佐市台ノ原遺跡、東上田遺跡、安心院町宮ノ原遺跡と同時期の集落跡が調査されたが遺跡規模が大きいため集落構成を把握するには至ってない。その点、本遺跡は規模がコンパクトな上に丘陵部をほぼ完掘したためグルーピングが可能となった。丘陵南半は未調査区であり、土坑、竪穴などの数は不確定であるが下記の状況から弥生時代中期の一集落の景観を示すものと考えられる。

集落の構成 この遺跡に弥生人が定住を開始するのは、前項の土器の編年の位置づけでみたように弥生時代前期末～中期初頭の頃からである。調査区内ではこの頃の住居跡は認められず土坑、ピット（貯蔵穴?）のみである。同時期の住居が丘陵上に存在したのかどうかは今後の課題の一つである。中期前半にもA区32号住居跡が存在するのみで土坑、ピットは引き続き形成されている。それが中期中頃～後半にかけて集落形成が一変する。この時期住居跡群は東西に延びる尾根と南北に延びる尾根上に溝で区画して三群に別れて存在している。

C地区はSD1より西側に位置する住居跡群で尾根頂部付近にあるやや大形隅丸方形のSD7を中心に北側斜面上に小形の円形、方形竪穴7基の計8基の住居跡で構成されている。さらに尾根頂部にピット群が集中する部分があり他に1基前後竪穴が存在する可能性が高い。

B地区はSD1より東側、SD2より南側の範囲で東西に延びる丘陵の中央に位置する住居跡群である。この住居跡群は中央の墓地群によって東西に2分される。西群は本遺跡中、最大規模で唯一建て替えが行われているSB15、16を中心に北側斜面上に円形、方形の竪穴12基と南側丘陵頂部に方形竪穴1基の計13基で構成されている。この群はさらにSB9、SB12～14の4基とSB18～23の6基とSB15～17の3グループに分けられる。東群はSB24～28の5基の竪穴で構成されている。さらに丘陵頂部にピット群が集中する部分があり他に1基前後の竪穴が存在する可能性が高い。

A地区はSD2の北東側に位置する住居跡群で尾根頂部にあるやや大形円形のSB29を中心に東斜面上に小形の方形竪穴が2基前後存在する。本竪穴群は調査区外に延びており、竪穴数は確定できない。

以上、本遺跡においては、時間的、空間的様相から3群4単位の群に分けられ、1単位群は4～8基前後の竪穴で構成され、頂部の円形あるいは方形の大型住居跡に斜面部の方形住居跡が付随するように配置されているのが特徴である。さて、1棟の炉を持つ竪穴住居跡を1世帯（家族）とすると、このような4～8基でグルーピングできる竪穴群を1世帯群としてとらえられる。

さらに、この世帯群は生活、消費、廃棄等に至る一連の行為を行う最小単位であることが後述べる生産具の所有差で認められることができる。本遺跡においてはこのような世帯群が3群集まって1集落を形成していた状況が認められる。

註(1) 岩崎二郎『竹並遺跡弥生、古墳編』竹並遺跡調査会 1979

註(2) 長嶺生秀編『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集 1987

註(3) 長嶺生秀・末永弥義編『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集 1985

墳墓について

墳墓はB地区丘陵頂部の住居跡群のほぼ中央に3基の木棺墓、1基の石蓋土墳墓、1基の小児用甕棺墓、14基の土墳墓が集中する。このような墳墓と住居跡の占地のあり方は周辺地域の弥生墳墓と様相を異にする。通常北部九州における住居跡と墳墓占地の関係は丘陵等を異にしており住居跡と墳墓が混在することは少ない。また、たとえ同一丘陵上に在る場合でも空間地域を持って存在する。このような北部九州の弥生墳墓の立地に比べ本墳墓群の占地に差異があることが大きな特徴である。

次に主軸方向で分類するとN-80~85°-Wのグループ5基、N-54~65°-Wのグループ4基、N-60~75°-Wのグループ4基、N-85°-Wのグループ2基、N-1~5°-Wのグループ2基の5グループに分けることができる。これと住居跡群のグルーピングと比べると1グループ程墳墓群が多いが、ほぼ対応することが分かる。しかしながら竪穴数と墳墓数は合致せず、さらに1竪穴あたり4~5人程の住居であったとすれば、本墳墓を築造した人々はある特定原理で選ばれた者であろう。しかしながら副葬品等に差はなく墳墓の形態は異なるものの、等質的な様相を示している。

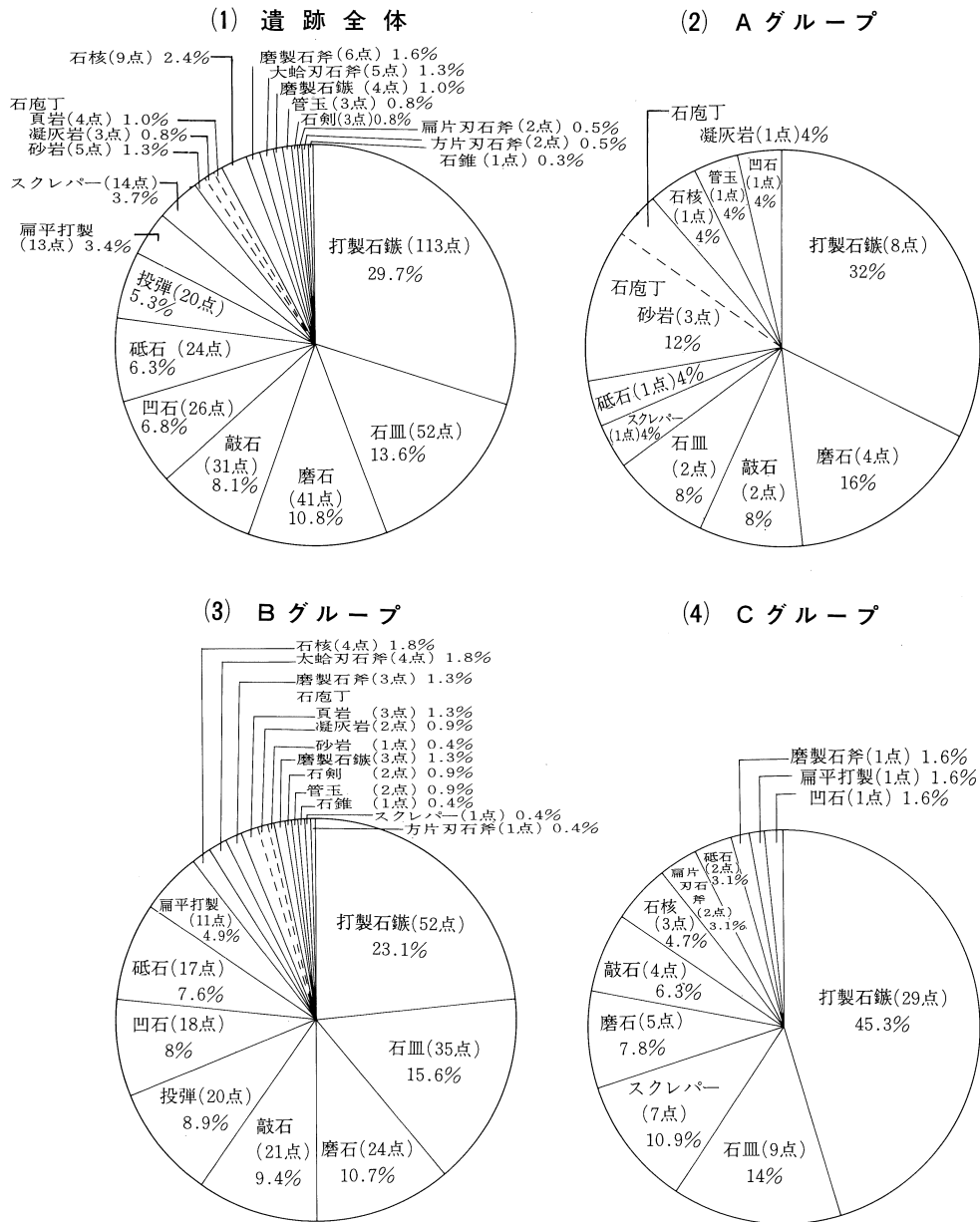
次に土壇内法100cm以下のもの1基[?]、140~160cmのもの5基、165~200cmのもの9基、201~224cmのもの2基である。土壇の規模と弥生人の性別差が整合的な関係を持つと仮定するならば幼小児2基(小児用甕棺も含む)、成年~老年女性5基、成年~老年男性11基と男性棺が多数を示す数値が認められる。しかしながらこれは土壇規模と性別差が整合関係を持つという前提が証明されておらず、^{註(1)}今後の課題としておきたい。

註(1) 小倉正五氏が土壇規模と性別差の相関性について述べた論考があるが、出土人骨と土壇規模の関係については明らかでない。

小倉正五他『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書』I 1986年

(3)石器製作および組成の特徴 (第155図参照)

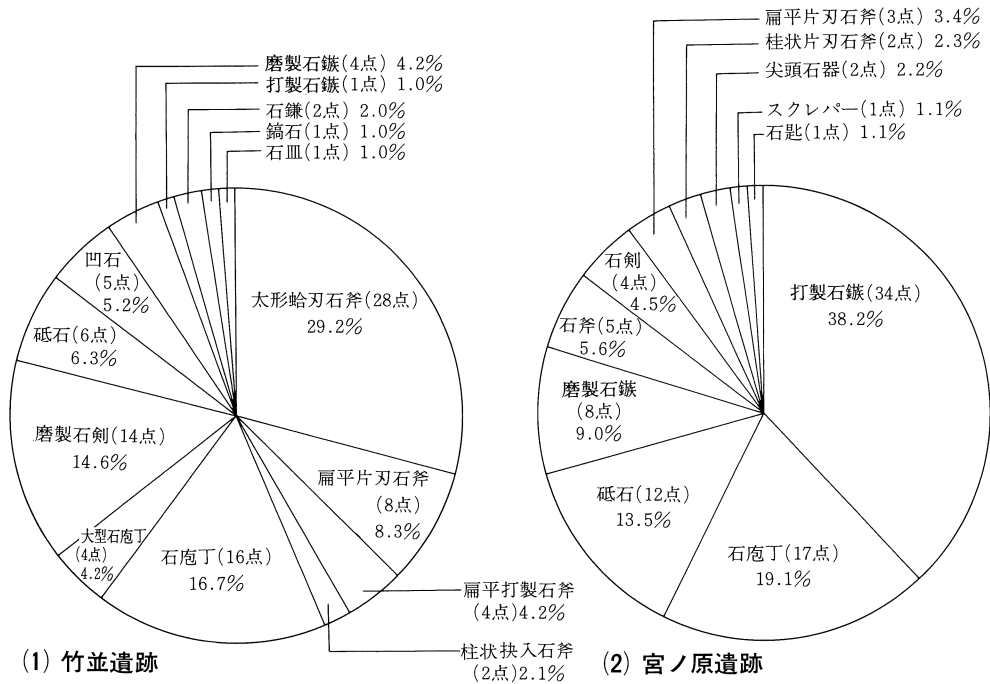
森山遺跡では黒曜石製石核および剥片と太型蛤刃石斧の未製石である結晶片岩製の剥片等が出土しているところから石包丁形石器以外の石器を遺跡内で作製していた可能性が高い。



第155図 森山遺跡出土石器組成グラフ

行橋市竹並遺跡石器組成クラフ

宮ノ原遺跡石器組成グラフ



第156図 竹並・宮ノ原遺跡出土石器組成グラフ

次にこのような石器組成保有率でその集落の生業の特徴および集落内の各集団間の生業差を認めようと試みたのが第155図である。(1)は森山遺跡出土石器すべての組成を表わしている。ここでは狩猟具の打製石鎌が30%、投弾5.3%、植物性生産具である扁平打製石器等3.4%、植物性再生産具である石皿、磨石、敲石、凹石が39.3%、動物性再加工具としてのスクレパーが3.7%と縄文系石器が全体の78%と圧倒的に多いことが特徴であり、それに対して稲収穫具である石包丁型石器は3.1%、伐採具である磨製石斧1.6%、木工具である片刃石斧は1.0%、武器・祭祀具としての磨製石鎌、磨製石剣1.8%と弥生系石器が7.5%と非常に少ないのがこの森山集落の特徴である。このような特徴的な石器組成を持つ集落を豊前地域の前期末～中期の他集落の(註(1))石器組成と比較してみると本遺跡の特徴がより一層明確になる。第156図(1)は行橋市竹並遺跡の石器組成を表わしたものである。この遺跡の立地は標高40m前後の森山遺跡とほぼ同様な立地にある。時期は弥生時代前期後半～中期中頃で、ここでは稲収穫具である石包丁型石器20.9%、伐採具である太形蛤刃石斧29.2%、木工具である扁平片刃石斧、柱状抉入石斧10.4%、祭祀具・武器と考えられる磨製石剣、同石鎌18.8%と弥生系石器79.3%に対して、狩猟具の打製石鎌2.0%、

植物性生産具である扁平打製石斧、石鎌6.2%、植物性加工具である石皿、凹石、敲石7.2%と縄文系石器15.4%となり森山遺跡と逆転した状況となっている。このように弥生時代前期末～中期の豊前地方の集落には水稻農耕にウエイトをおいた竹並タイプの集落と縄文時代以来の狩猟・採集にウエイトをおいた森山タイプの集落が存在したことが分かる。では豊前地域においてはこの2タイプの集落の内どちらが主流であったかを検討してみる。まず北九州市高津尾遺跡は標高50m前後の丘陵上にあり、時期は前期後半～中期を主体とする。ここでは稲収穫具である石包丁型石器19.6%、伐採具である蛤刃石斧10.3%、木工具である扁平片刃石斧11.8%武器・祭祀具と考えられる磨製石剣、石戈、石鏃6.3%と弥生系石器48%に対して植物性加工具である凹石などの縄文系石器7.8%と少量である。さらに本遺跡の性格を示すものとして砥石、ハンマー等の石器製作具が37.7%と大量に出土しているとともに石器未製品も多く出土している。この集落では水稻農耕とともに石器製作を主体とした状況を示していると考えられる。次に行橋市下稗田遺跡^{註(3)}は標高40m前後の丘陵上にあり、時期は弥生時代前期～古墳時代後期まで継続する京都平野の弥生時代大母村集落の一つである。ここでは主に弥生時代前期から中期にかけて多量の石器が出土しており、稲収穫具である石包丁型石器15.0%、伐採具である蛤刃石斧18.7%、木工具である片刃石斧3.5%、武器・祭祀具と考えられる磨製石剣、石戈、石鏃4.6%と弥生系石器41.8%に対し、狩猟具の打製石鎌、石槍、投弾2.6%、動物性加工具であるスクレイパー1.3%、植物性生産具である扁平打製石斧、石鎌2.2%、植物性加工具である礫器、石皿、敲石27.4%と縄文系石器33.5%となり、水稻農耕にウエイトをおきながらも植物伐採である程度補完する生業状況を示している。母村集落の生業状況がこのようなものであるとすると本遺跡内における小丘陵を基本とする単位集団での生業差を確認する作業が今後不可欠となろう。豊前南部では安心院町宮ノ原遺跡^{註(4)}で良好な石器組成が認められている。この遺跡は標高120mの丘陵上にあり、時期は弥生時代前期～古墳時代初頭まで継続する安心院盆地内の弥生時代母村集落の一つである。ここでも主に弥生時代前期から中期にかけての石器が出土している。第156図(2)が石器組成を表わしたものである。これでは稲収穫具である石包丁型石器19.1%、伐採具である石斧5.6%、木工具である片刃石斧5.7%、武器・祭祀具と考えられる磨製石剣、石鏃14.6%と弥生系石器45.0%に対して、狩猟具の打製石鎌、尖頭石器が40.4%、動物性再加工具であるスクレイパー2.2%と縄文系石器が42.6%となり、この宮ノ原集落は水稻農耕にウエイトをおきながらも狩猟もかなりの比率を持つ生業形態を示している。

以上、豊前地域の弥生前期～中期集落の石器組成からみた生業形態を推定したが、水稻農耕にウエイトを置く集落では稲収穫具である石包丁型石器が15～20%前後出土することが確認できた。さらに石器組成の比率から水稻農耕主体の竹並タイプ、水稻を中心にしながらも狩猟や石器製作等を補完的に行う宮ノ原、高津尾タイプ、狩猟・採集を中心にしながらも水稻農耕を補完的に行う森山タイプに分けることができよう。さらに森山タイプの集落は現在までのとこ

ろ少数であり、このタイプの集落は独立してあるのではなく生業上、周辺の水稲農耕を中心とする集落と相互に補完的關係で成立する可能性が高いことが京都平野の弥生時代大規模母村集落の一つである下稗田遺跡の石器組成率からも窺うことができる。

次に、森山遺跡は前述したように溝区画および竪穴群の分布状況から3グループに分離できた。この各集団単位の石器組成率を表わしたのが第155図(2)～(4)である。この表から各集団とともに打製石鏃を中心とする縄文系石器の比率が高いが、A集団では石包丁型石器が16%と高いのに対し、C集団には全く認められず、逆に狩猟具である打製石鏃の比率が45.3%と高い。また、武器・祭祀具と考えられる磨製石鏃、石剣はB集団のみに出土している。このように同一集落内の各世帯間にも生業差が見られそれが相互に補完關係を持ちながら集落が形成されているようである。つまり、丘陵の中央に立地し大形円形住居跡を持ち、なおかつ祭祀権を持つB集団が中心となり、水稲農耕を主体とするA集団と狩猟を中心とするC集団で構成されている状況が見られる。さらに、B集団の大形円形住居跡から鑄造鉄斧片が出土しているのも見逃せない。しかしながら前述したように本集落は総体としては狩猟・採集を中心的生業とした「山部民」的な性格を持つ集落として位置付けられよう。

近年、このような性格を持つ集落が福岡県小郡市北松尾口遺跡^{註(5)}II地点においても発見されており、水稲農耕が主心となる北部九州の弥生集落にも性格を異にするものが認められることから今後は時間的、地域的に生産用具の組成比率を検討することで各集落の生業形態を明らかにすることが可能となろう。

註(1) 岩崎二郎「弥生時代の遺構と遺物」『竹並遺跡』竹並遺跡調査会 1978年

註(2) 柴尾俊介他『高津尾遺跡』1北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1989年

註(3) 末永弥義「弥生時代前期～中期の調査3、石器」『下稗田遺跡』行橋市教育委員会 1985年

註(4) 坂本嘉弘『宮ノ原遺跡』安心院町教育委員会 1984年

註(5) 柏原孝俊「石器について」『北松尾口遺跡II地点』下巻 小郡市教育委員会 1990年

第3節 寺迫遺跡

1. 寺迫横穴墓

横穴墓は北方向に開析された丘陵の東向き斜面上部に2基確認された。横穴墓の位置する斜面は急な傾斜を呈している。この丘陵の南には小さな谷が形成されており、さらに横穴墓群が分布する可能性がある。

横穴墓の構築は基盤層の礫層を掘り込んでなされている。

1号墓 規模は全長3.9mである。構造は玄室奥壁から羨道部にかけて緩やかに傾斜し、墓前域にかけて約0.2mの段差をもつ。墓前域はさらに緩やかに傾斜している。

墓前域は、長さ2.3m、幅2.3mの方形を呈していた。土層の堆積は二次的なものであったため、追葬の状態を確認することはできなかった。

羨道の閉塞には地山礫が利用されていたが、二次的な移動を受け墓前域に散乱していた。

玄室の規模は羨道部を含めて長さ1.3m、幅1.3m、高さ0.6mである。平面形は方形を呈する。玄室内の堆積土は2～3cm程あった。玄室内の壁には構築時の工具痕跡が残っていた。壁から天井にかけてはドーム状になっている。玄室床面は平坦であった。ここから屍床などの施設や遺物は検出されていない。

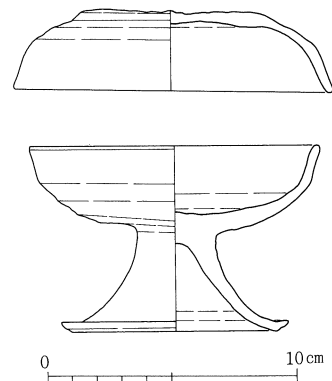
出土遺物として、墓前域から須恵器の坏蓋、高坏が検出された。

2号墓 1号墓の南へ3mで1m程下に位置していた。横穴墓の全長は4.3mである。構造は玄室奥壁から羨道部にかけて緩やかに傾斜し、墓前域にかけて約0.1mの段差をもち1号墓と共通する形状である。墓前域は、長さ2.3m、幅1.2mのほぼ長方形を呈する。土層は二次堆積であり、追葬を確認することはできなかった。

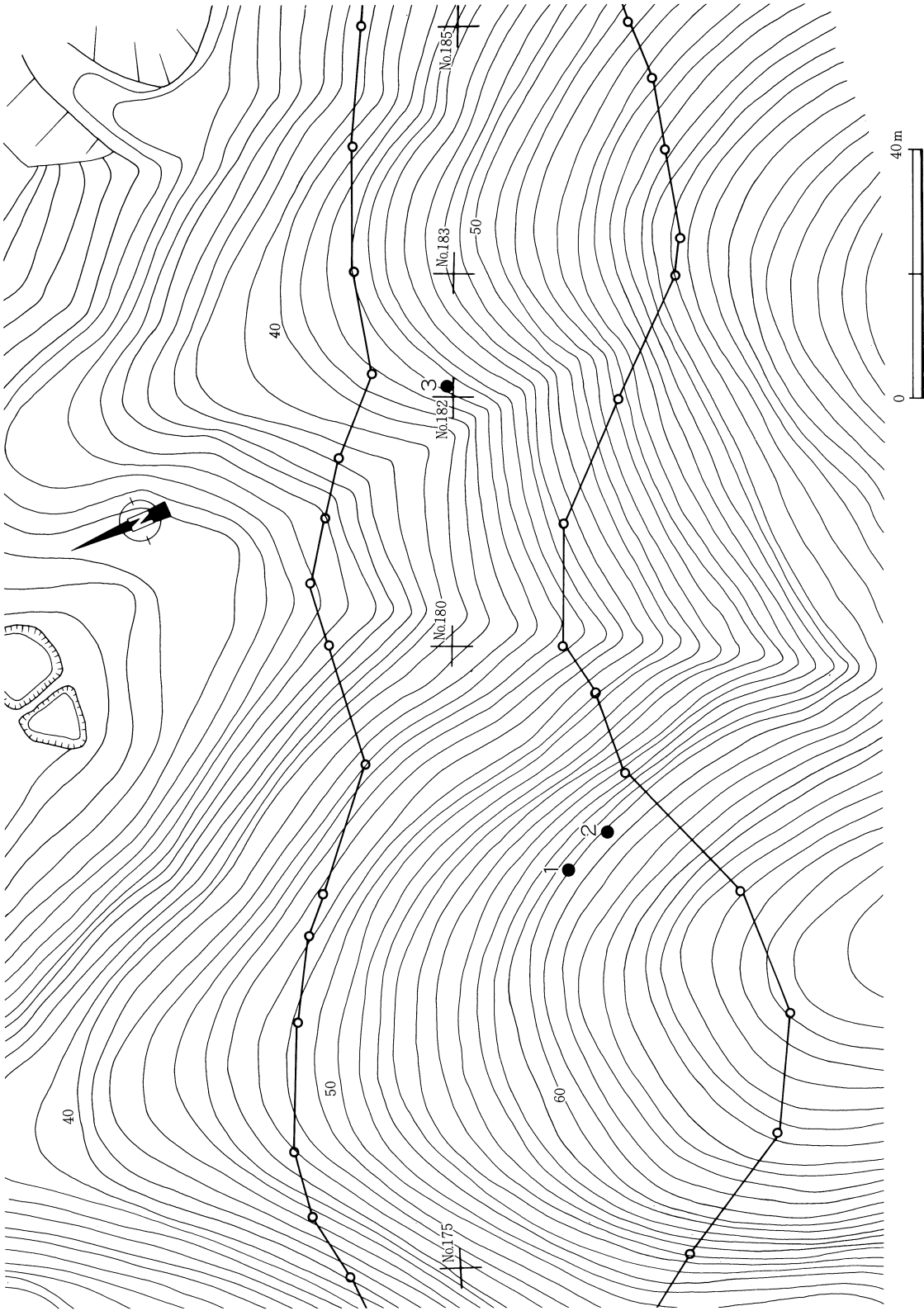
羨道部は、長さ0.3m、幅0.4m、高さ0.4mの規模をもつ。

玄室は、長さ1.7m、幅1.1m、高さ0.5mで平面形が長方形を呈する。天井はやや平坦となっている。玄室内には、厚さ0.1m程の流入土が堆積していた。玄室の壁面には斜め方向の工具痕跡が鮮明に残っていた。玄室床面は平坦であった。床面に施設は認められなかった。出土遺物は玄室内から若干の土師器細片が検出されたのみである。

1号墓の時期は、須恵器からみてTK209段階と考えられる。2号墓については構造上の共通性からほぼ同様の時期と想定できる。



第1図 寺迫1号墓出土須恵器実測図

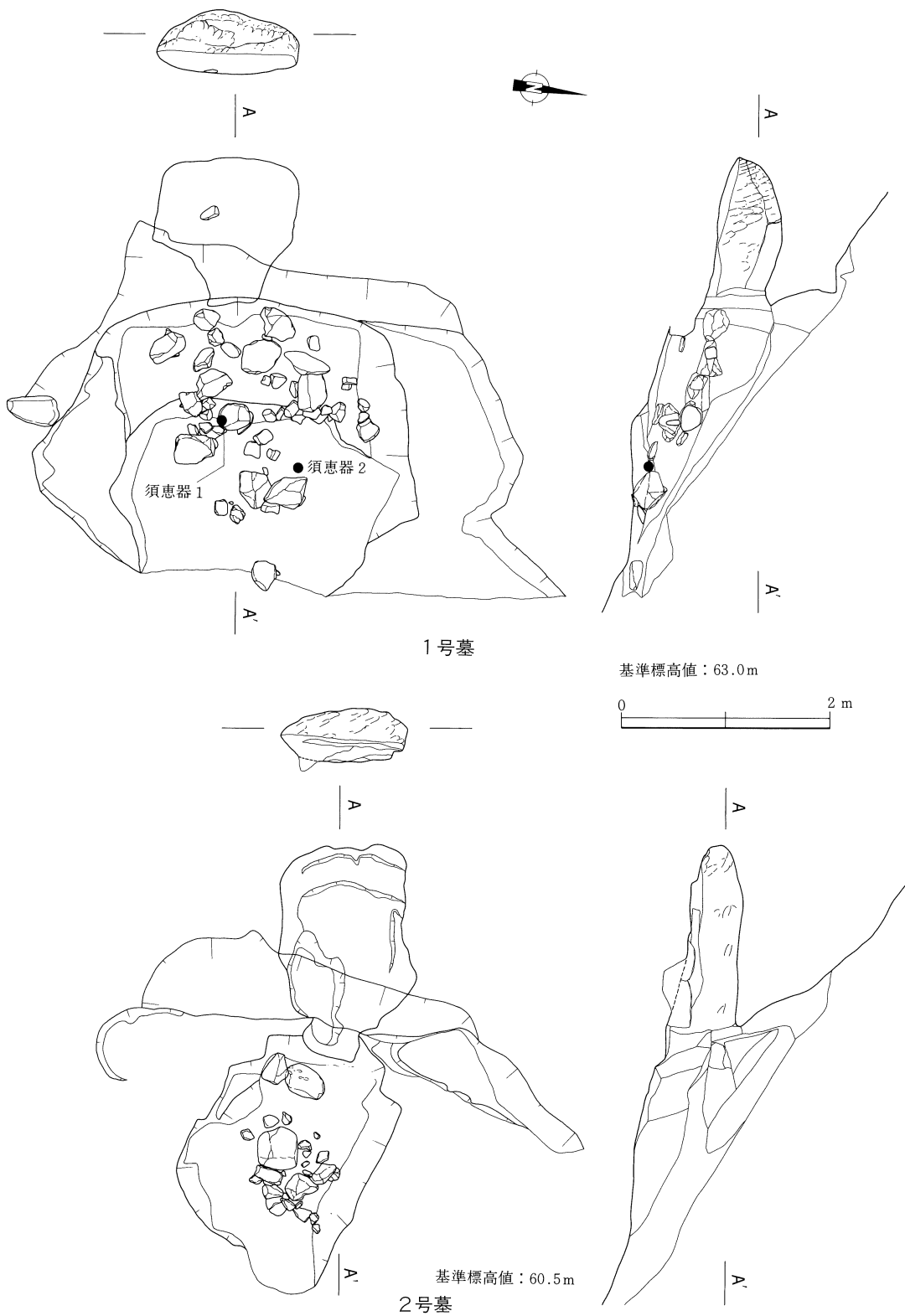


第2図 寺迫遺跡の遺構位置図

- 1 1号墓
- 2 2号墓
- 3 火葬墓



第3图 寺迫横穴墓位置图



第4図 寺迫横穴墓実測図

2. 寺迫火葬墓

寺迫横穴墓と谷を挟んで東側丘陵の西向き斜面中腹に位置する。

ここでは火葬墓1基を検出した。調査は丘陵の大半を対象に行ったが、火葬墓以外の遺構は全く確認されていない。このような状況からみて、火葬墓は恐らく単独で営まれたものと考えられる。

火葬墓は、径0.57m、深さの0.3mの円形土坑にほぼ水平位に骨蔵器が埋置されたものである。土坑内の埋土は2層確認できた。上層は軟質暗茶褐色土層、下層は炭化材を多く含む軟質黒褐色土層であった。

骨蔵器は須恵器双耳壺である。蓋はすでに欠失していた。骨蔵器の内部からは火葬骨が検出された。

この双耳壺は細い頸をもち、口縁部は細く嘴状に伸びる。胴部は長く、肩がやや張る特徴をもつ。底部は平底で外面に回転ヘラ切り後、ナデが施されている。肩部対になる耳をもつ。

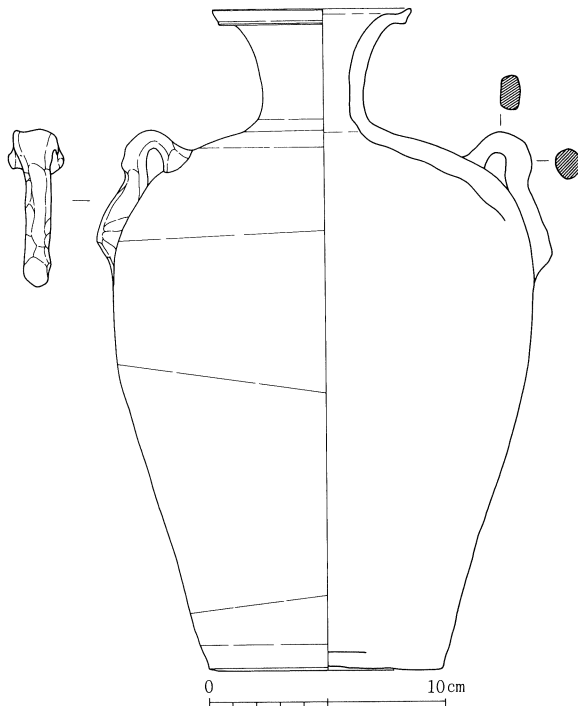
耳は、長さ6.7cm、幅1cm~1.9cmの棒状の粘土で作られており、上部は環状となっている。大きさは口径8.8cm、口頸部高5cm、胴部最大17.8cm、器高28cm、底径9.9cmである。

このような双耳壺の類例としては、北九州市小倉南区の御祖窯跡採集品などを指摘できる(文献1)。

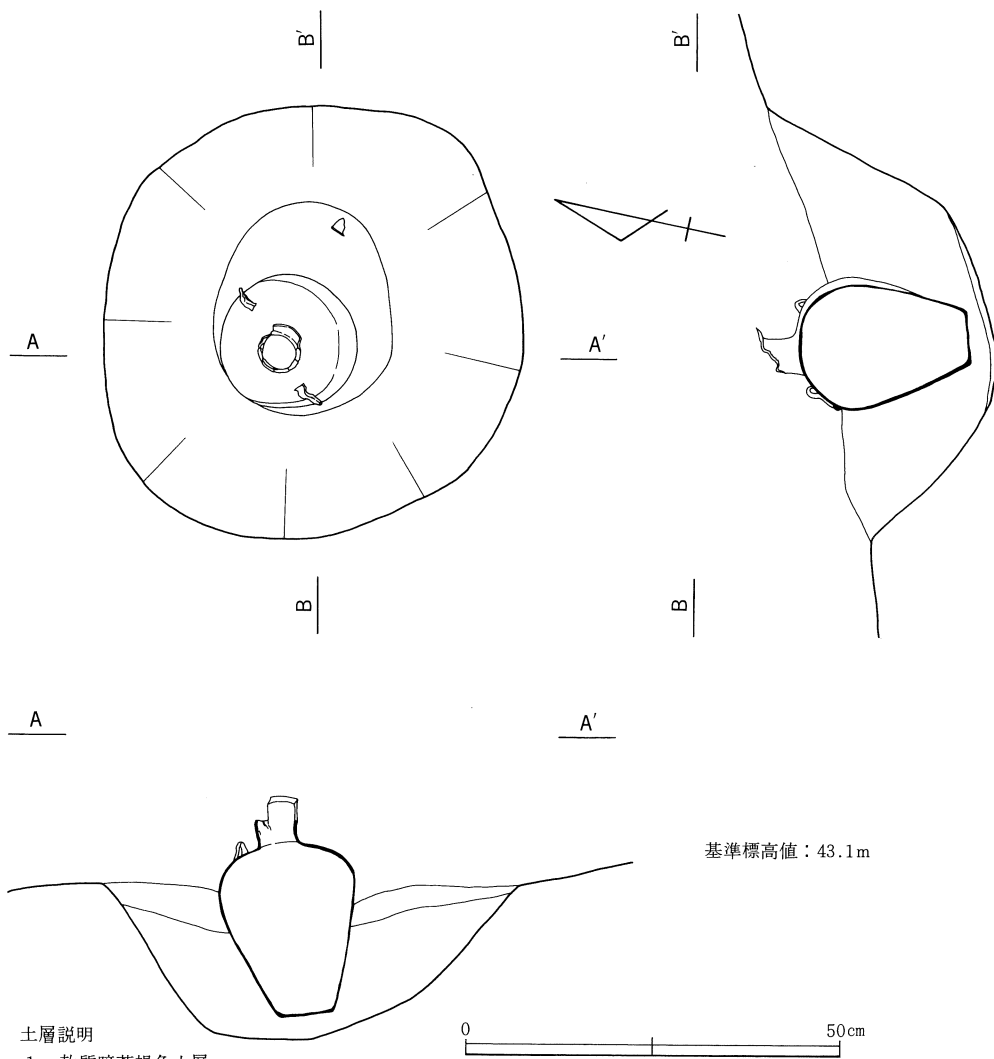
時期は、京都府亀岡市篠に所在する石原畑3号窯出土例(文献2)など畿内の事例を勘案すると9世紀後半代に該当するものであろう。

文献1 北九州市埋蔵文化財調査会『天観寺山窯跡群』1977年

文献2 京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書 第2冊』1984年



第5図 寺迫火葬墓骨蔵器実測図



土層說明

1. 軟質暗茶褐色土層
2. 混炭化物多量、軟質黑褐色土層

第 6 圖 寺迫火葬墓実測図

3. 寺迫火葬墓骨蔵器出土火葬骨

田中良之¹・金宰賢²

(1：九州大学九州文化史研究施設、2：考古学研究室)

1. 保存状態

寺迫遺跡出土骨蔵器には、若干ではあるが人骨が保存されていた。火葬骨のため細片化しており、保存状態も悪い。残存した火葬骨は骨蔵器の法量に比してきわめて少なく、重量で540gにすぎない。残存した人骨のうち、部位が判定できたものは第7・8図に示した。以下、これらについて記載する。

頭骨 (図版27-1・2)

細片に割れ、部位がわかるものはごく一部であるが、右頭頂骨 (鱗縁および乳突角を含む破片)、左頭頂骨 (ラムダ縫合を含む破片)、後頭骨 (外後頭隆起近くの破片)、左右側頭骨 (鼓室部・錐体および乳様突起)、前頭骨 (左眼窩上縁)、上顎骨 (左右前頭突起および左歯槽突起)、左頬骨、下顎骨 (右筋突起、左関節突起、左右下顎体の一部) の遺存が知られた。上・下顎骨の遺存部位から得られる歯式は、

I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C
○ ×	○ ○ ○
○：歯槽開放 ×：歯槽閉鎖	

である。また、遊離歯として下顎小白歯1本があり (図版27-3)、下顎左大白歯の歯槽も開放していたが、いずれも正確な歯種は判定しえなかった。

軀幹骨 (図版28-1)

左第一肋骨、第一および第二頸椎を認めることができた。また、頸椎椎体片、助骨の破片が少量存在する。

上肢骨 (図版28-2)

右肩甲骨 (関節窩)、右上腕骨 (骨体上部)、左上腕骨 (小結節および遠位端)、右橈骨・尺骨骨体中央部、左橈骨 (骨体上部) および中手骨・指骨が認められた。

下肢骨 (図版29-1)

左右の判別、あるいは部位の同定は困難であるが、大腿骨・頸骨の破片が認められた。

2. 性判定・年齢推定

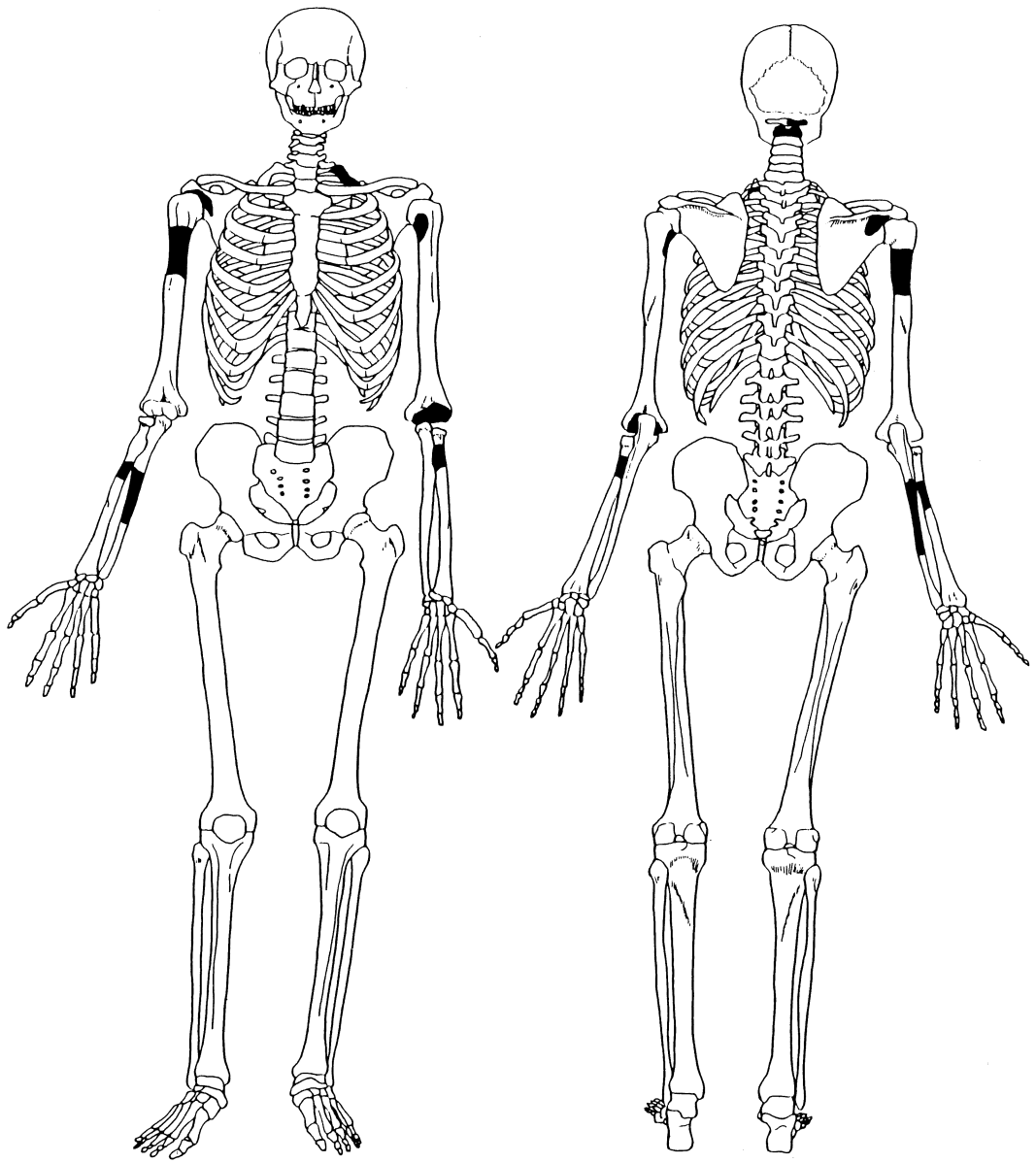
通常の性判定に用いられることの多い頭骨乳様突起が左右とも認められたが、いずれも乳様突起としては大きなものではない(図版29-2)。また、大腿骨片の中には粗線の一部を残すものがあり、やや発達した形状を示す(図版29-3)。さらに、左頬骨には縁結節が認められた(図版29-4)。

これらの所見は、乳様突起を除けば男性であった可能性を強く示唆するものである。そして、火葬骨は火葬時に収縮しており、とりわけ海面質が発達した部位においては顕著であると考えられる。したがって、乳様突起を性判定に用いるのは危険であることを考慮すると、この火葬人骨は男性であった可能性が大きいといえよう。

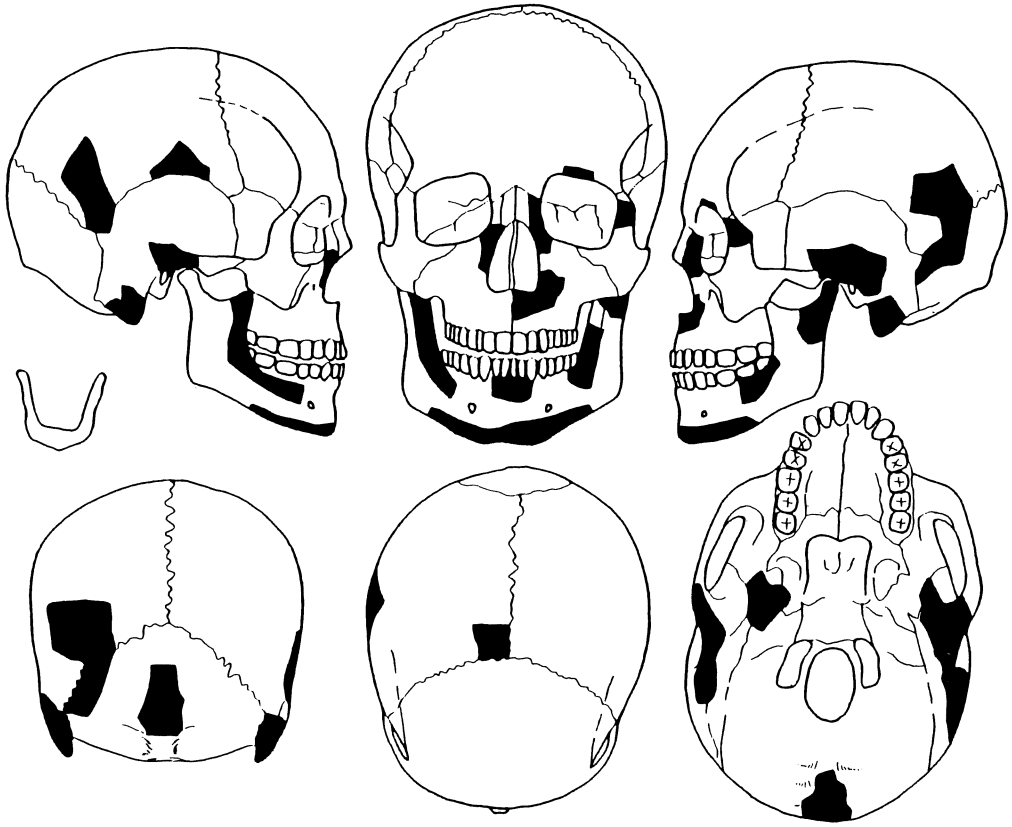
年齢については、左上腕骨遠位骨端が肘頭窩上半部まで遺存しており、骨端線も認められなかったことから、骨端の癒合が完了した成人であると推定される。そして、頭蓋主縫合が全て開離していることからみて(図版30)、成年であったと推定される。

3. おわりに

寺迫遺跡の平安時代に属する骨蔵器から検出された火葬骨は、量自体は少量であったが、ほぼ全身の部位が拾骨されていた。年齢は成年、性別は男性であったと推定されたが、それ以上の形質的特徴については、火葬時の変形と保存の悪さからうかがい知ることができない。しかし、保存不良で変形著しい火葬骨から年齢・性別を推定し得たことは幸運といってもよく、また、拾骨された部位の同定がある程度行えたことは、古代から始まる火葬習俗の変遷過程を検討する基礎資料としての意味をもつといえよう。

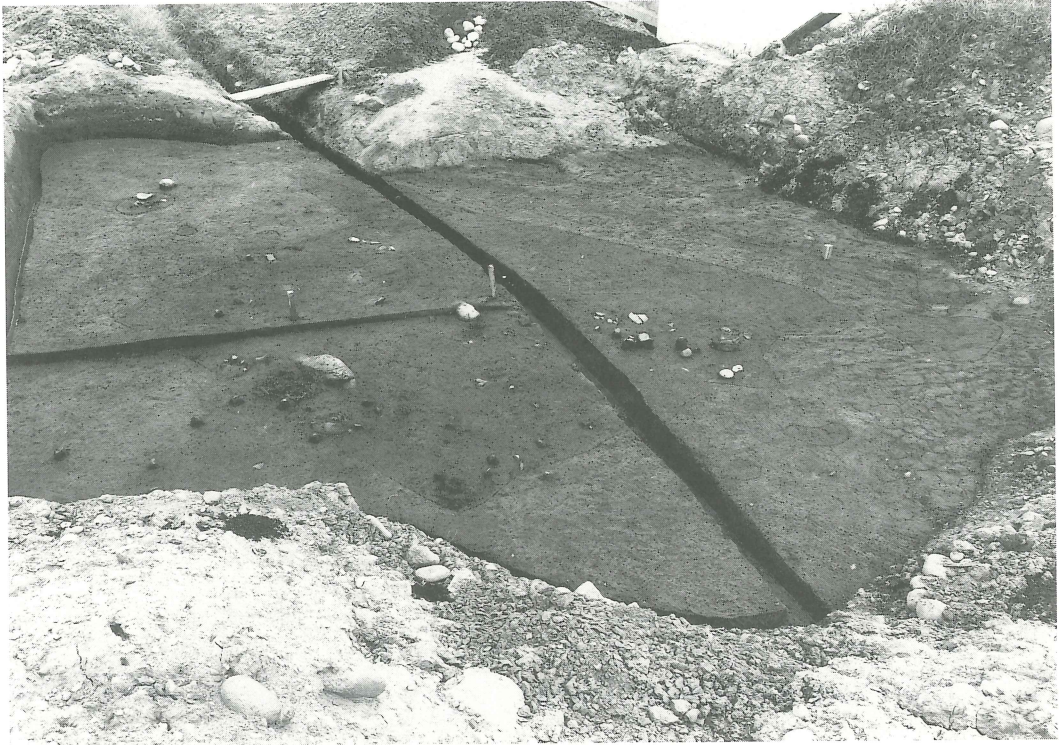


第7図 寺迫人骨遺存部位（体部骨）



第8図 寺迫人骨遺存部位（頭骨）

版 图 真 写



樋多田 A 区 全 景 (東 から)



樋多田 A 区 S B 1 遺物出土状態 (南 から)

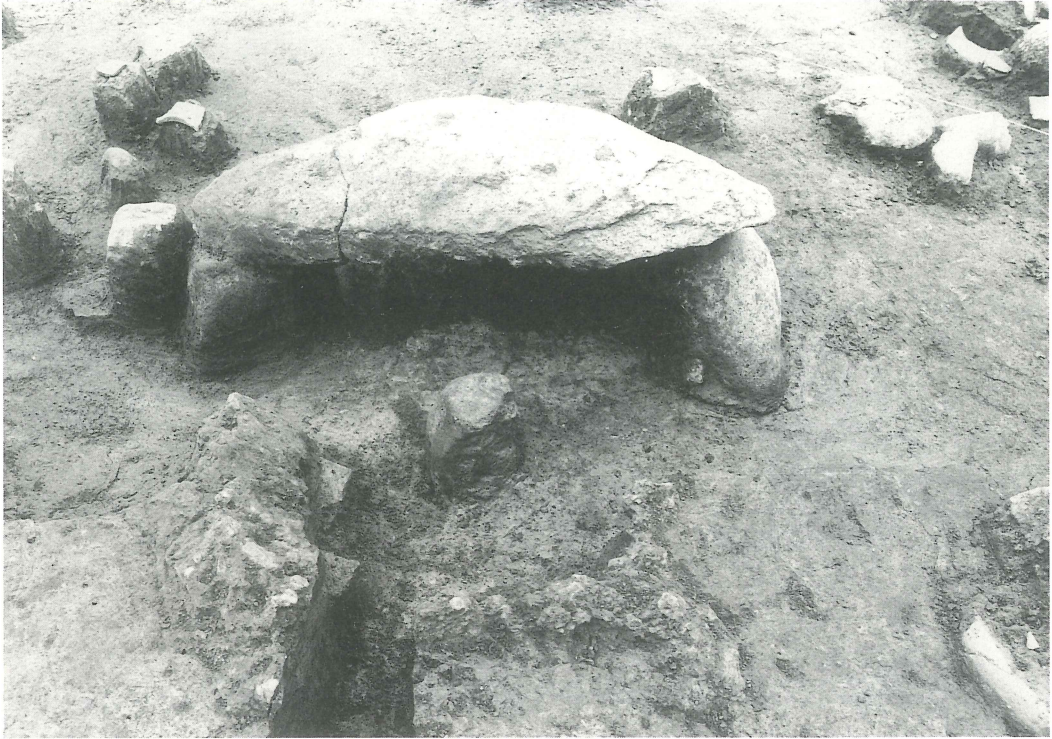
図版 2



樋多田 A 区 S B 1 カマド 付近 検出 状態 (北から)



樋多田 A 区 S B 1 カマド 付近 検出 状態 (南から)



樋多田 A 区 S B 1 カマド 付近 検出 状態 (北 から)

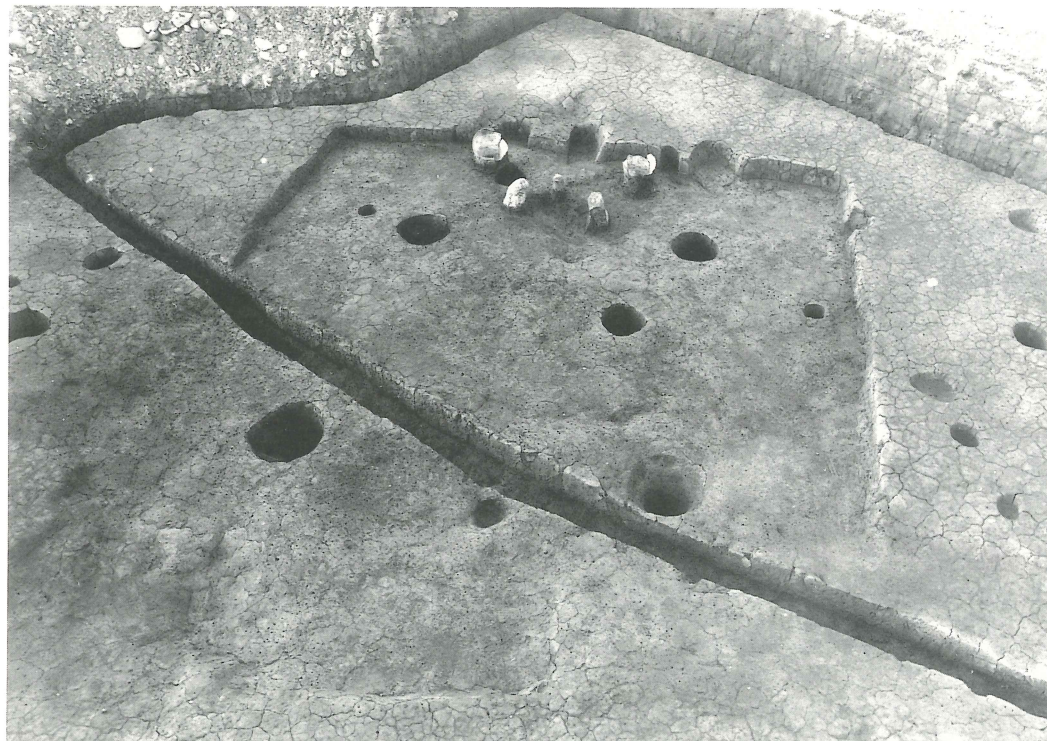


樋多田 A 区 S B 1 カマド 付近 検出 状態 (南 から)

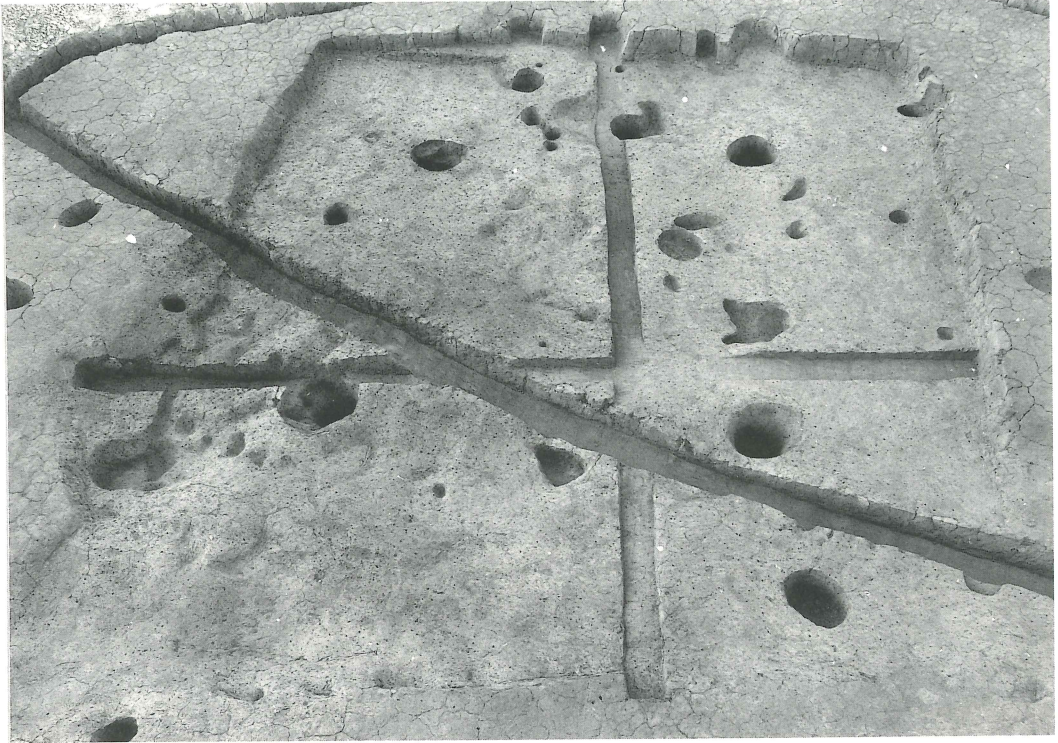
図版 4



樋多田 A 区 S B 1 カマド熱残留磁気測定



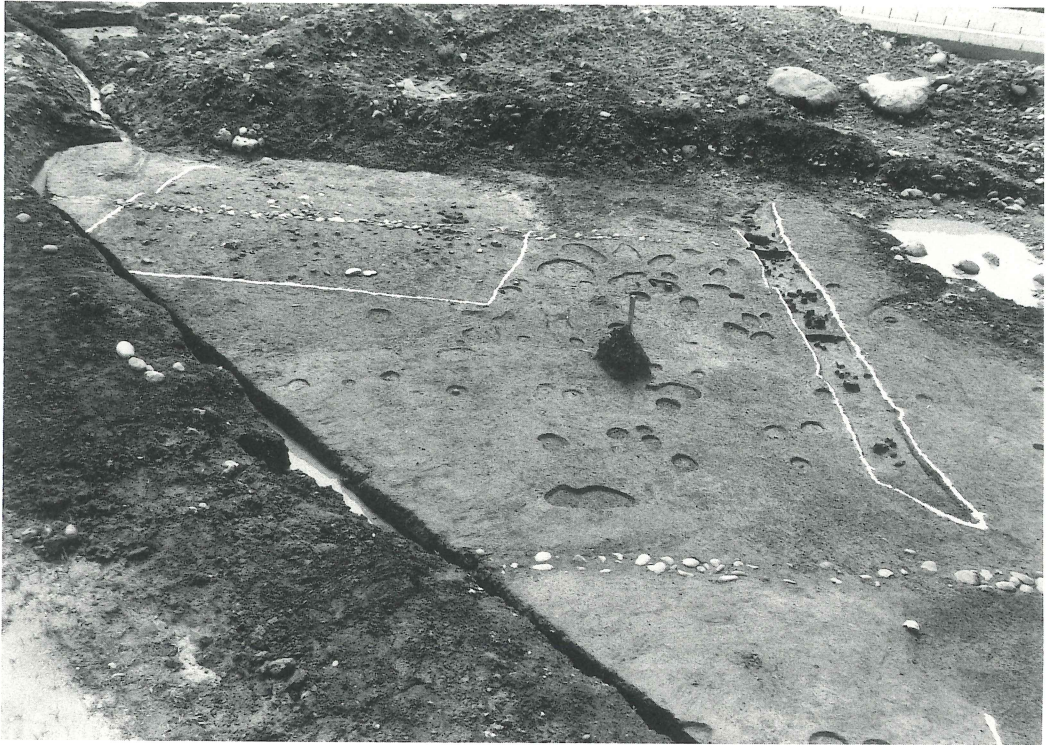
樋多田 A 区 S B 1 完掘状態 (南から)



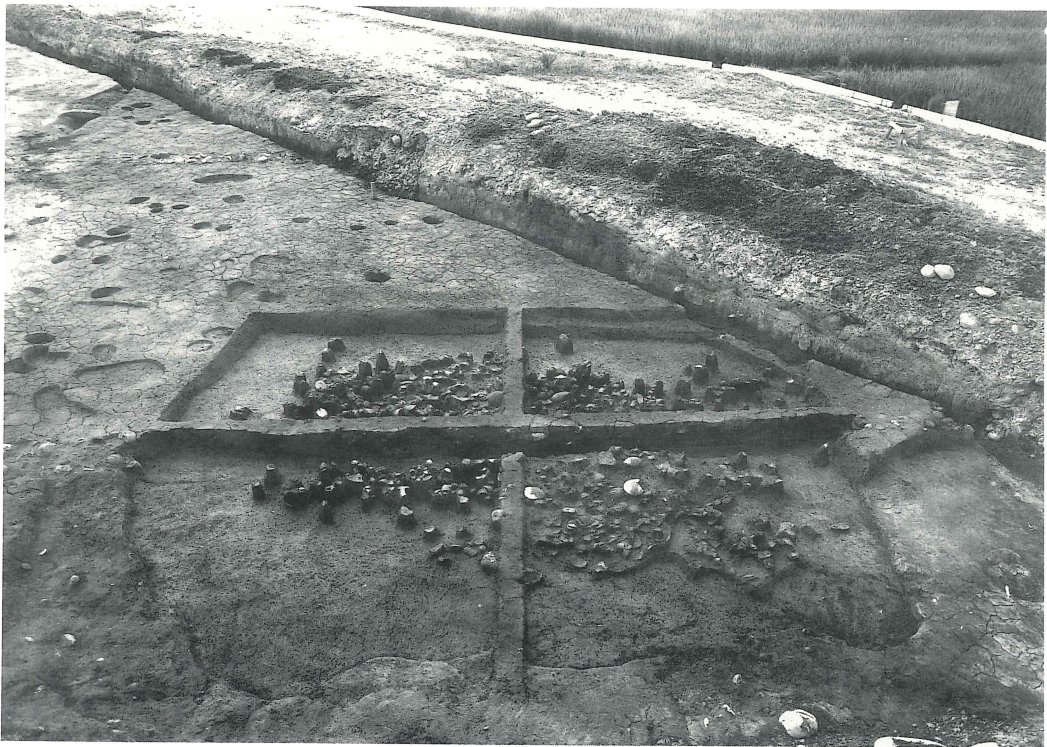
樋多田 A 区 S B 1 断割り状態 (南から)



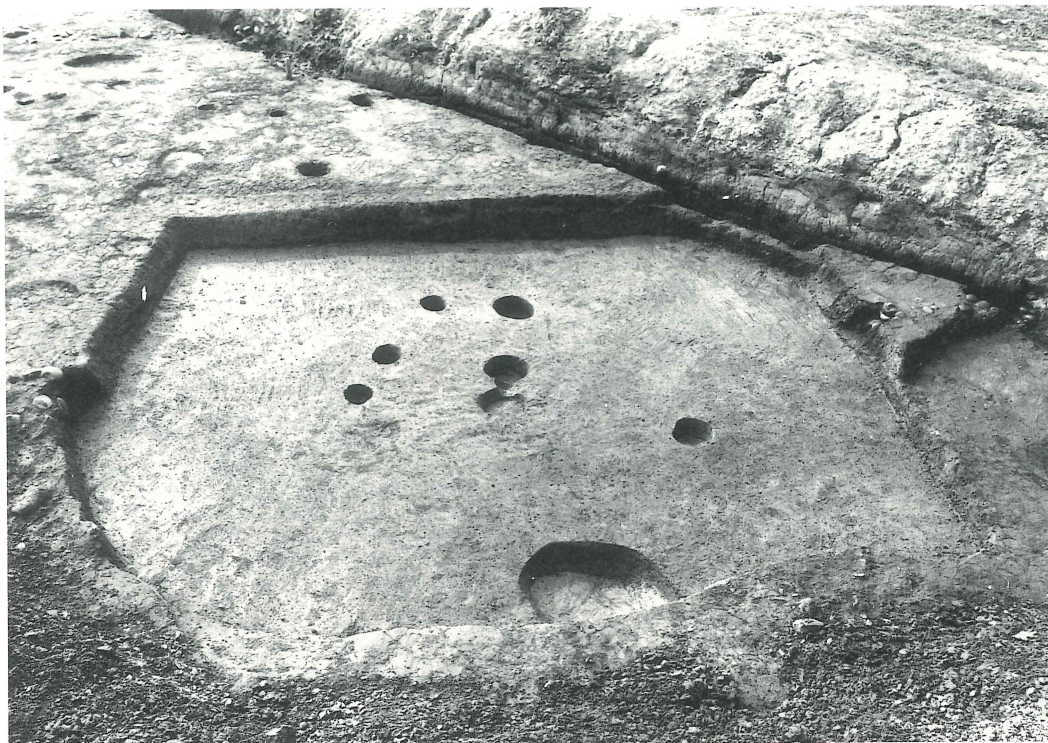
樋多田 A 区 S K 2 遺物出土状態



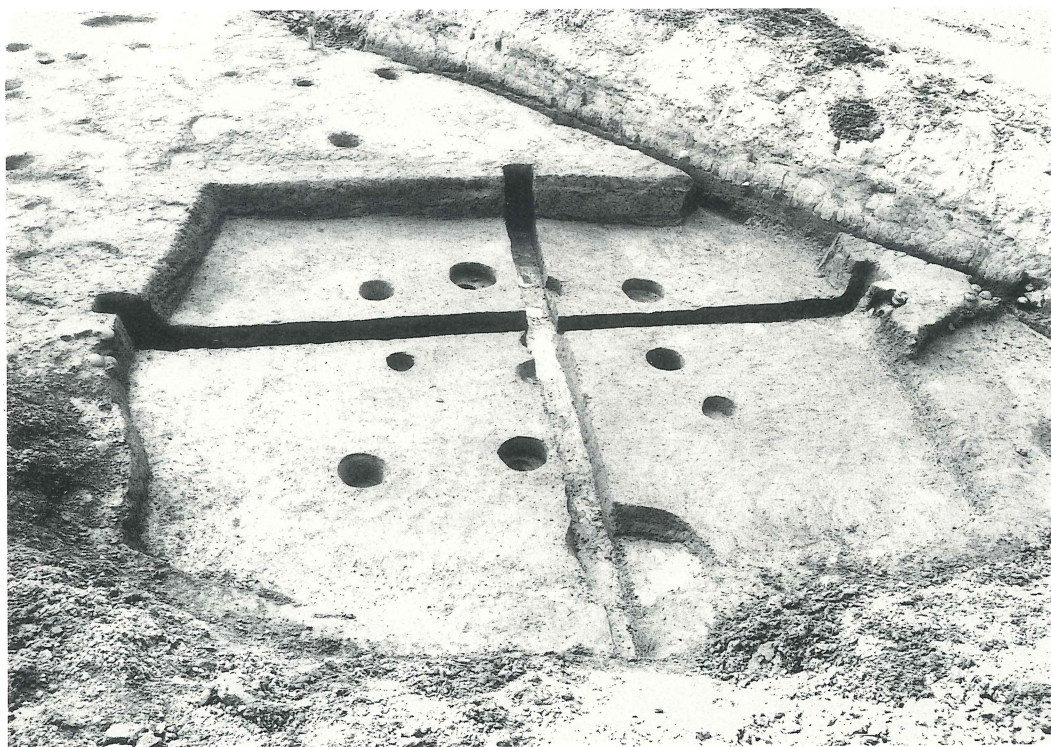
樋多田 B 区 遺構群遠景（西から）



樋多田 B 区 S B 1 遺物出土状態（南東から）



樋多田B区 SB1 完掘状態（南東から）



樋多田B区 SB1 断割り状態（南東から）

図版 8



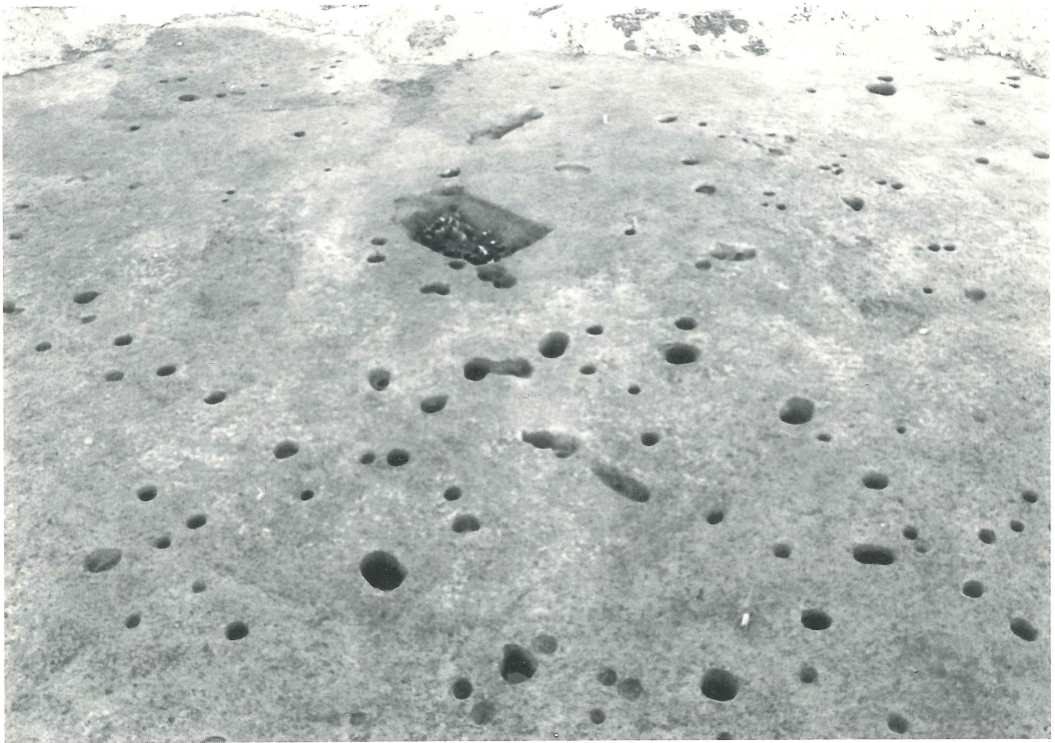
樋多田 C 区 全景 (北から)



樋多田 C 区 全景 (北から)



樋多田C区 SB1 遺物出土状態（北西から）



樋多田C区 SB2 および SK1（西から）



樋多田 C 区 S B 2 S P 1 遺物出土状態



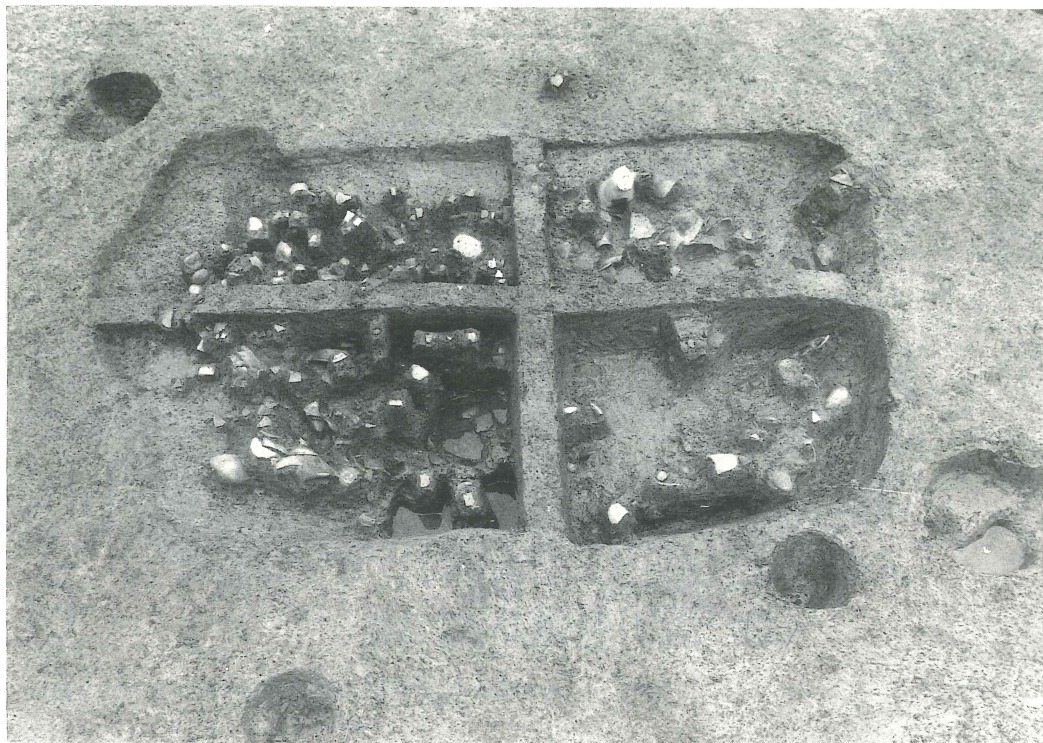
樋多田 C 区 S B 2 S P 2 遺物出土状態



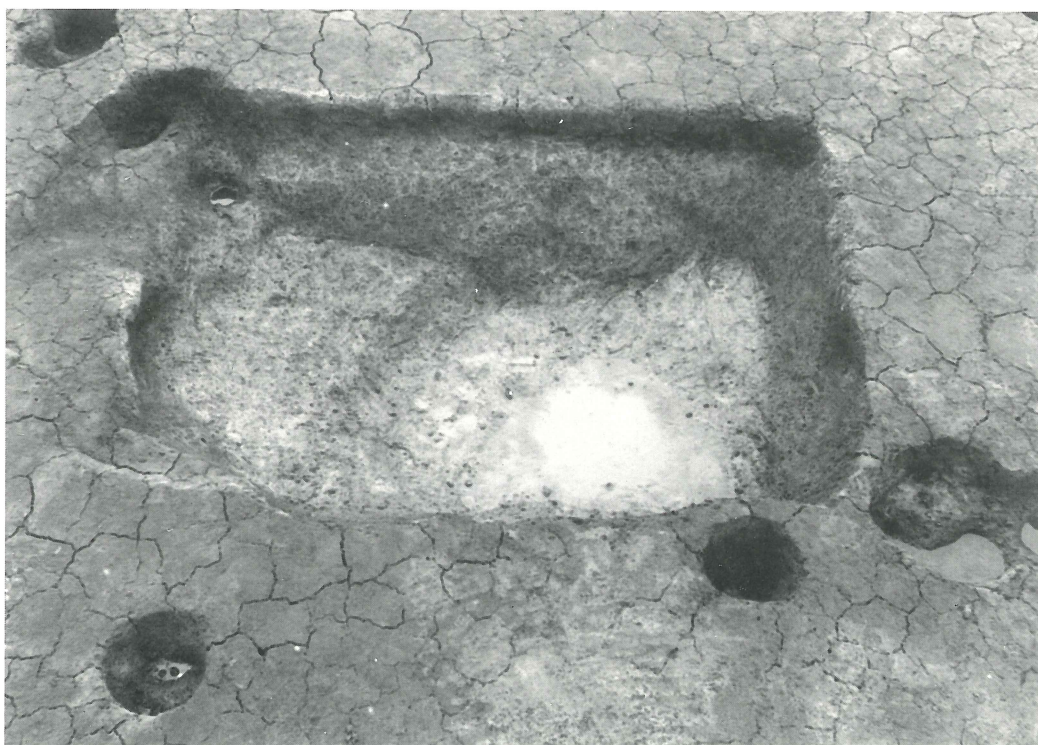
樋多田C区 SB2SP2石包丁未製品出土状態



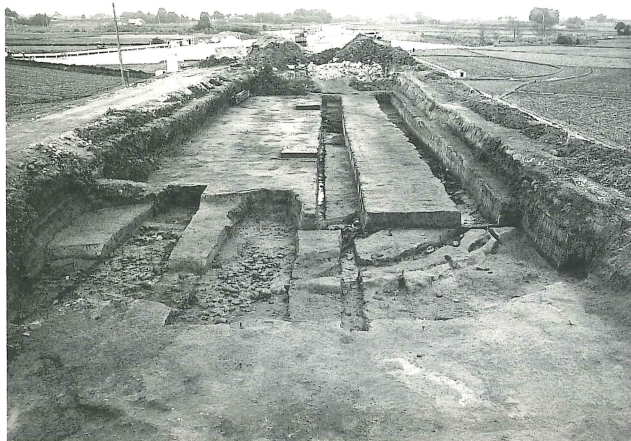
樋多田C区 SB2SP3遺物出土状態



樋多田C区 SK1 遺物出土状態（北西から）



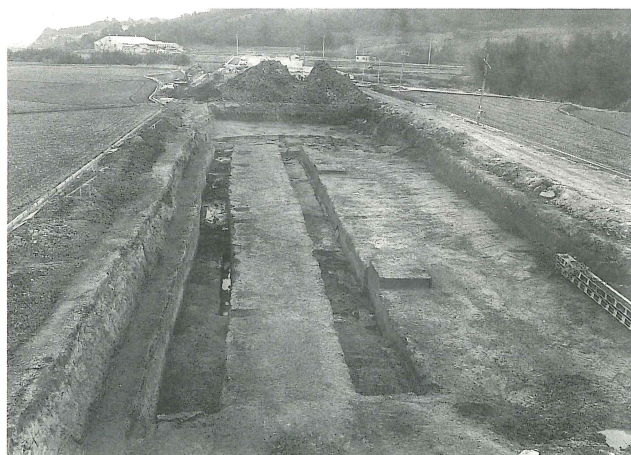
樋多田C区 SK1 完掘状態（北西から）



樋多田D・E区 全景



樋多田D区 近景



樋多田E区 近景



樋多田E区
第2トレンチ
縄文土器出土状態



樋多田E区
第2トレンチ
トチの実出土状態



←
樋多田D区
流路内
土器出土状態

樋多田D区
第1トレンチ
花粉分析
サンプリング
→





樋多田 第2次調査
流路内 二又鍬出土状態



樋多田 第2次調査
流路内 横鍬出土状態



樋多田 第2次調査
流路内 鋤出土状態



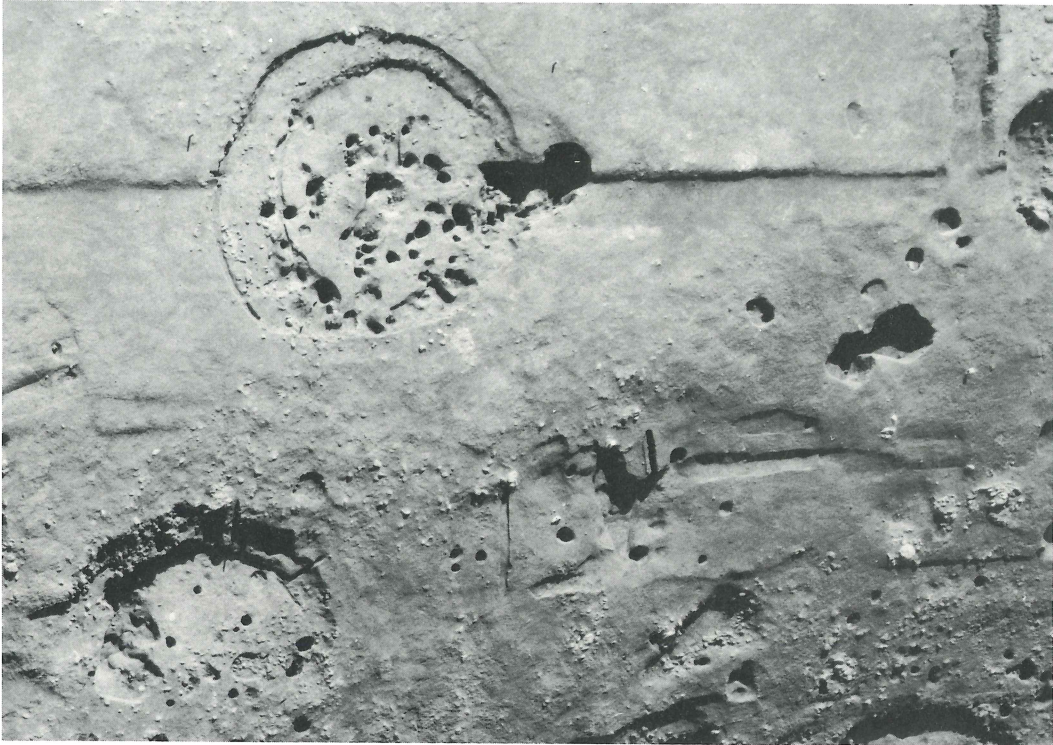
樋多田 第2次調査
流路内 えぶり出土状態



森山遺跡遠景空中写真（東方向より） 前方に豊前平野、犬ヶ岳・求菩提山を望む



森山遺路全景空中写真



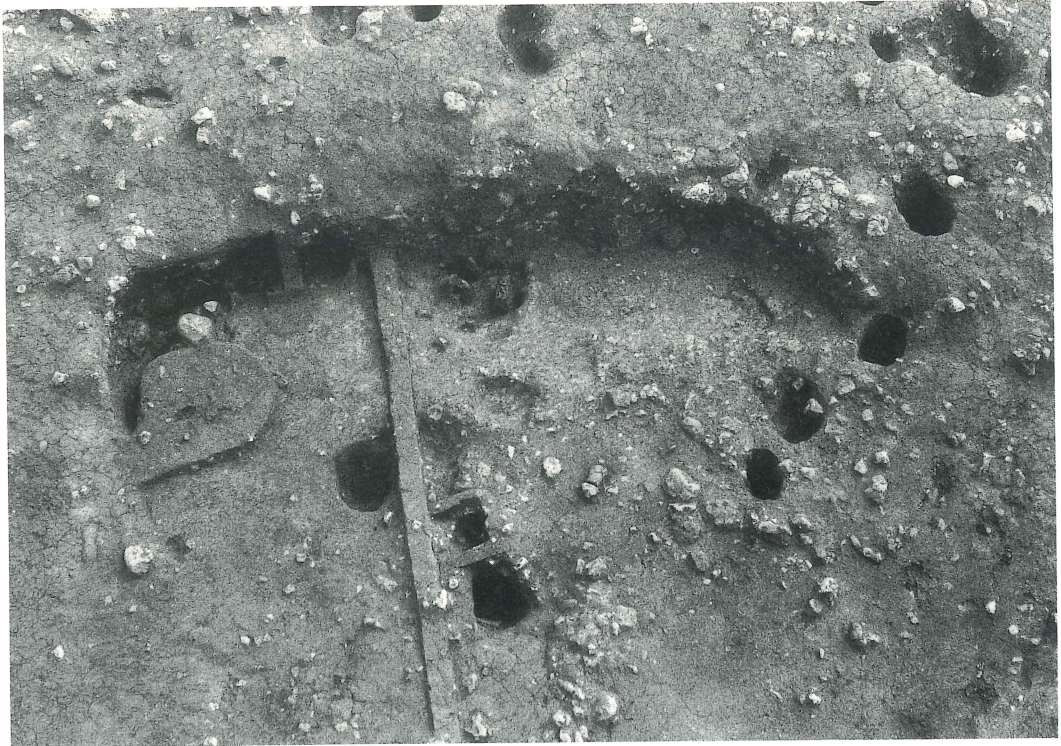
森山 S B 15 ~ 17 周边空中写真



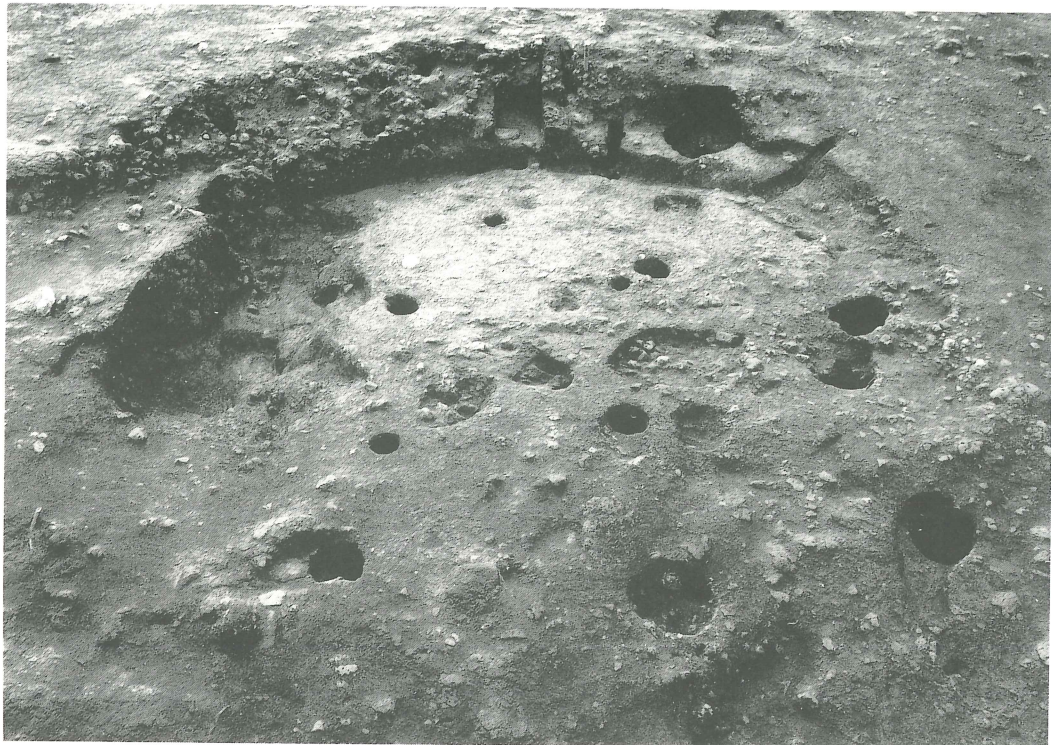
森山墳墓周边空中写真



森山 S B 1 · 2 近景



森山 S B 5 近景



森山 S B 18 近景



森山 S B 29 近景



森山 1 号土塚墓週辺



森山 1 号石蓋および 1 号甕棺墓切り合い関係



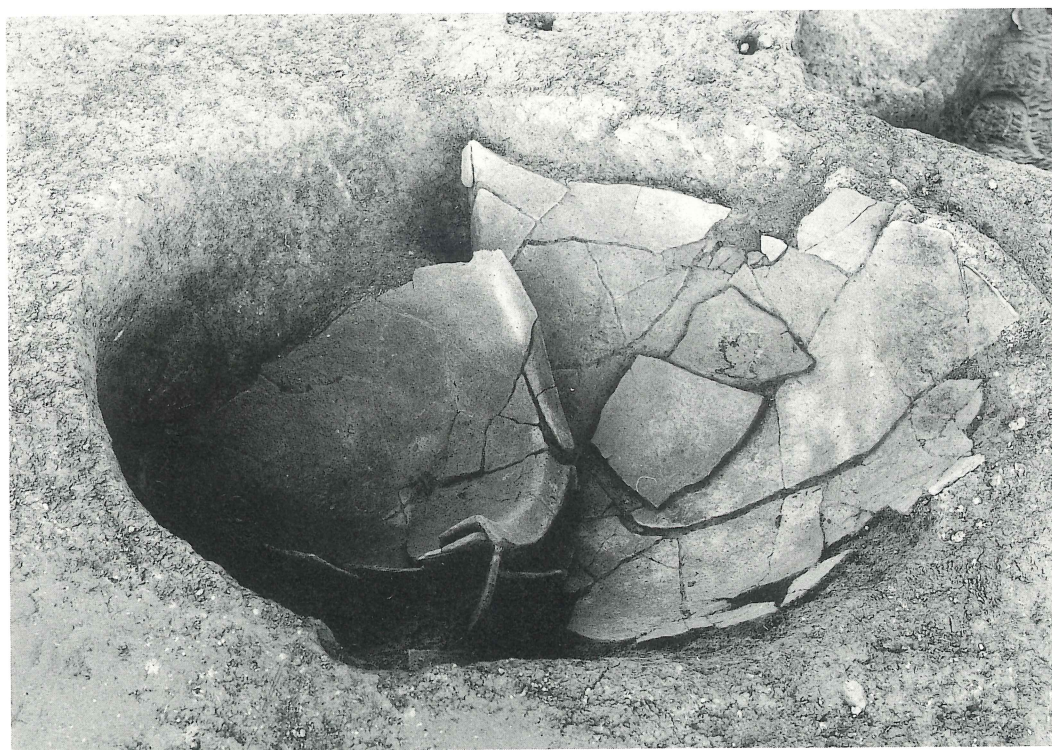
森山 1 号木棺周边



森山 1 号土坛墓周边



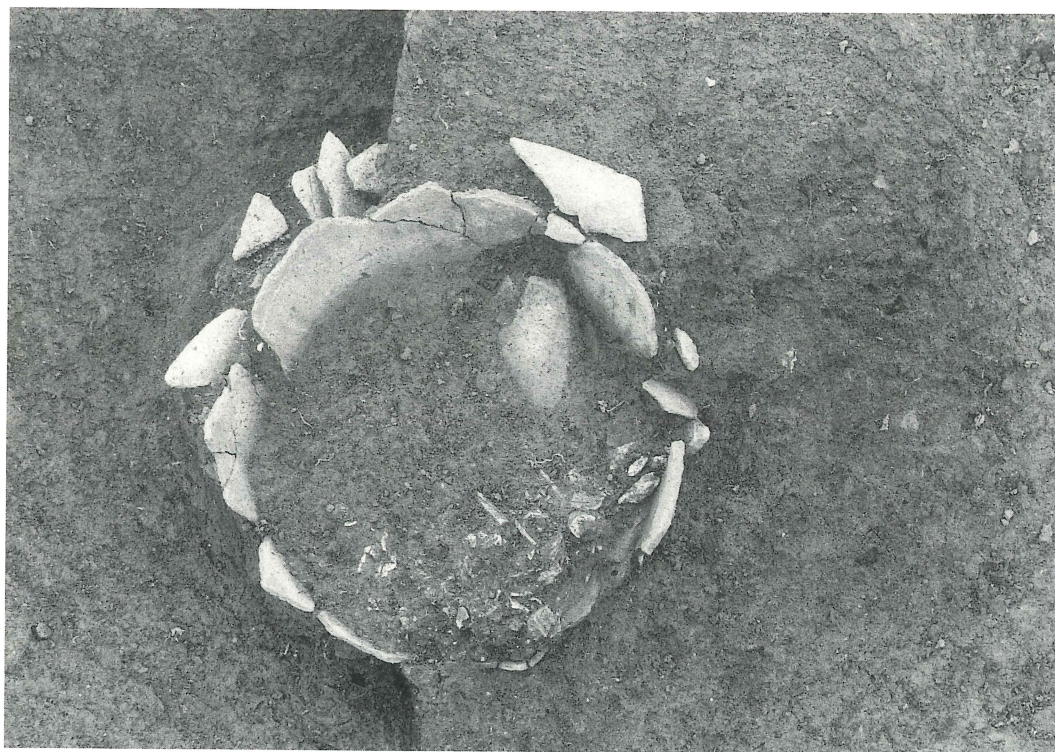
森山 1 号 甕 棺 墓 出 土 状 態



同 下 半 部 検 出 状 態



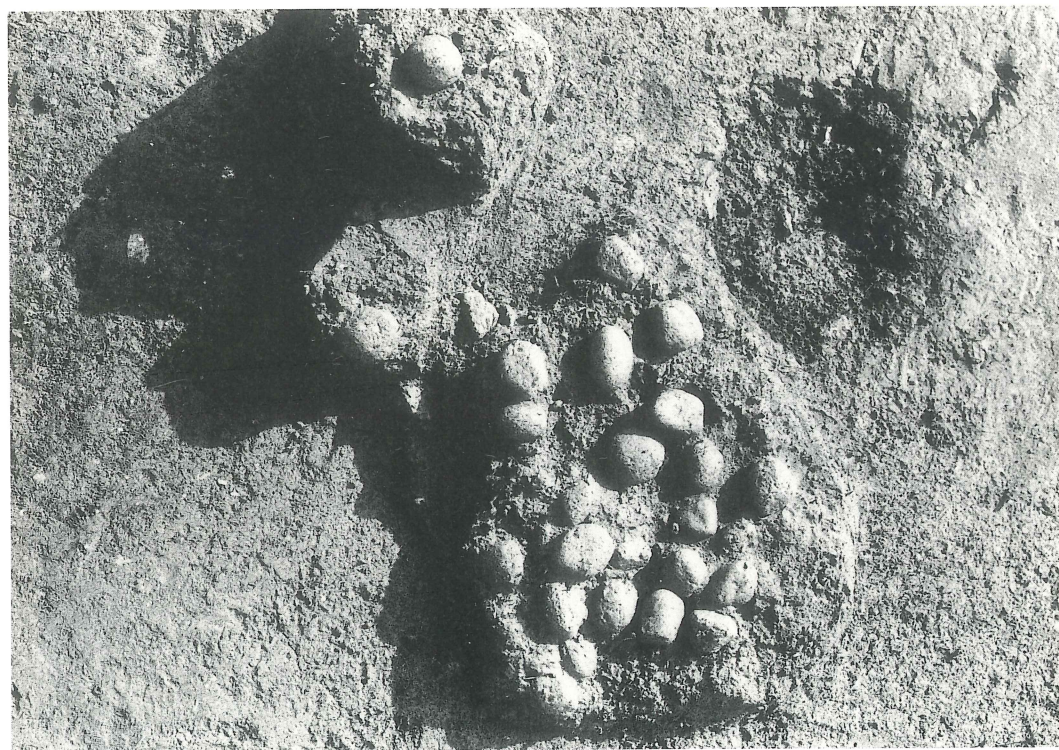
森山 1 号火葬路 · 1 号火葬墓全景



森山 1 号火葬骨藏器人骨出土状态



森山 S B 17 遺物 (片刃石斧) 出土状態



森山 S B 13 遺物 (投弾) 出土状態



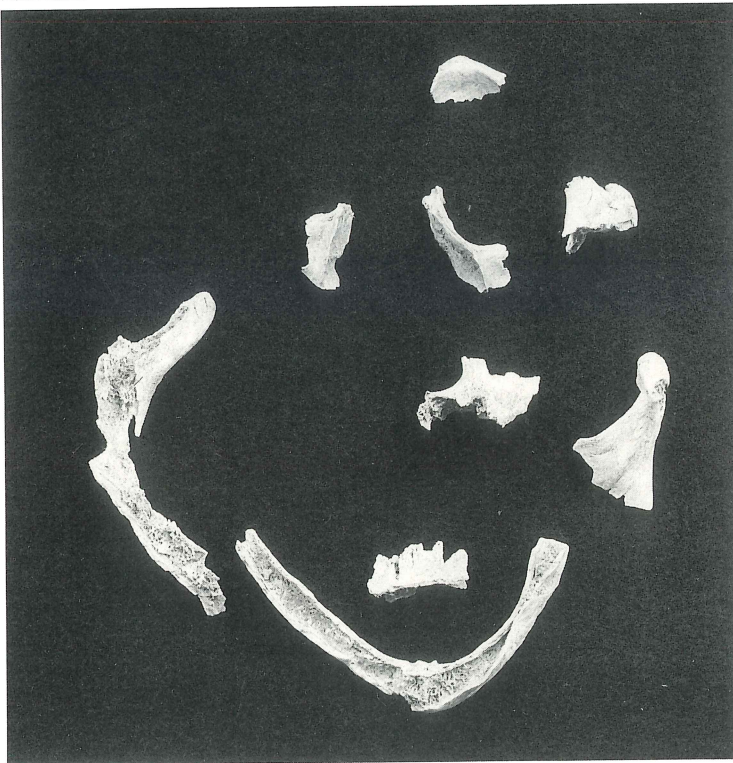
寺迫横穴墓全景（東方向から） - 右が1号墓 -



寺迫骨蔵器出土状態（西方向から）



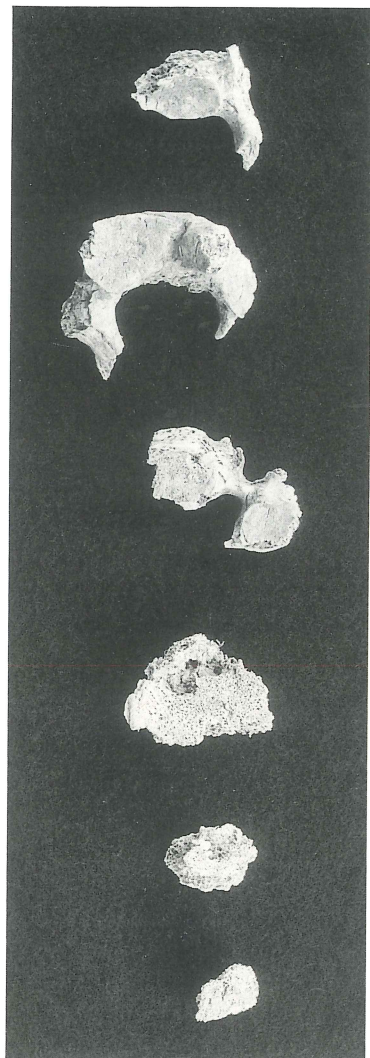
1 頭骨 (脳頭蓋)



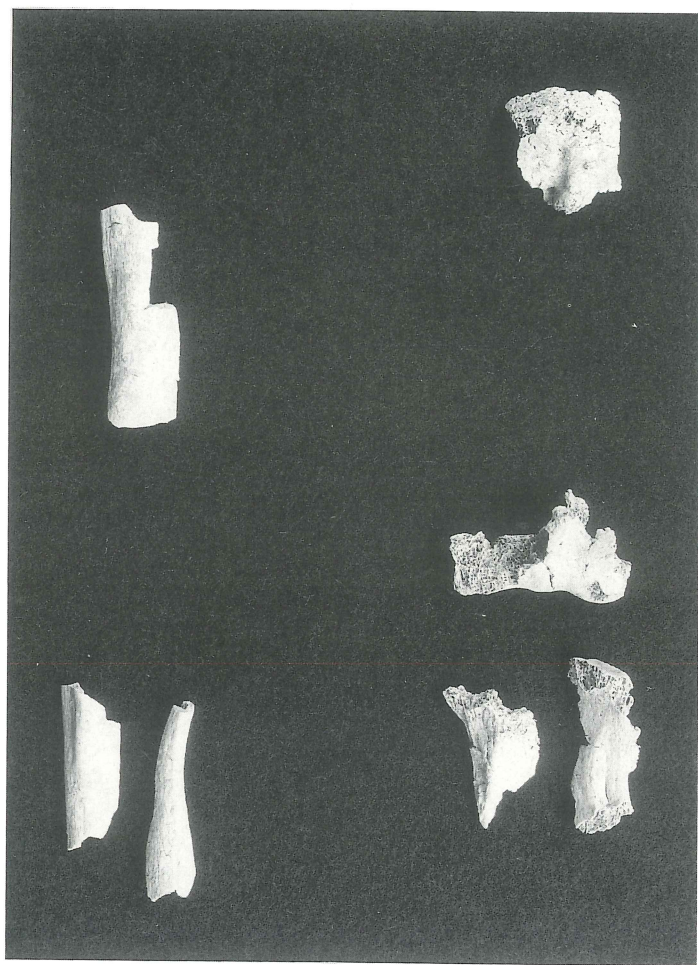
2 頭骨 (顔面頭蓋および下顎)



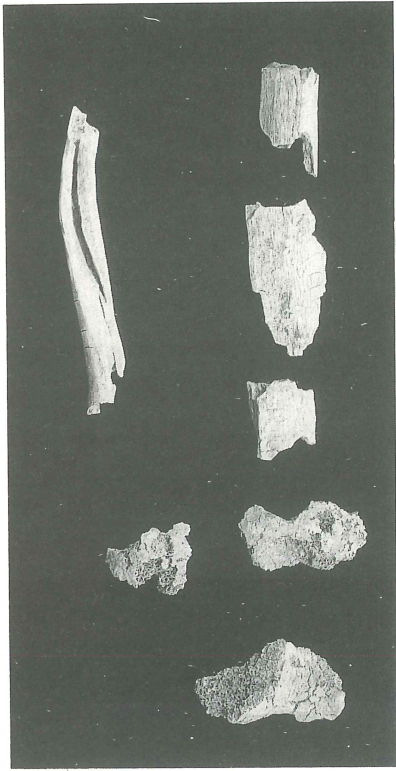
3 歯牙



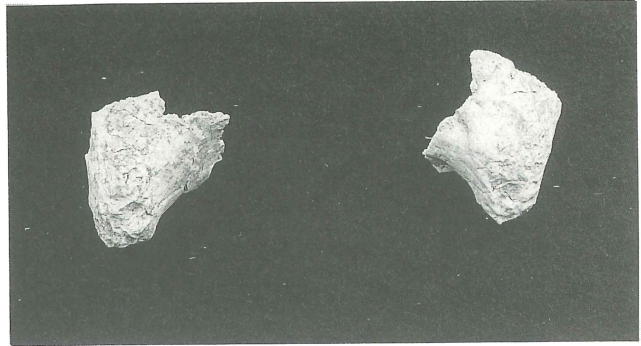
1 椎骨



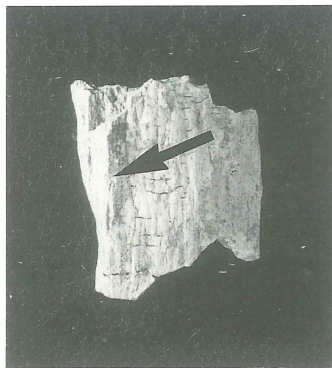
2 上肢骨



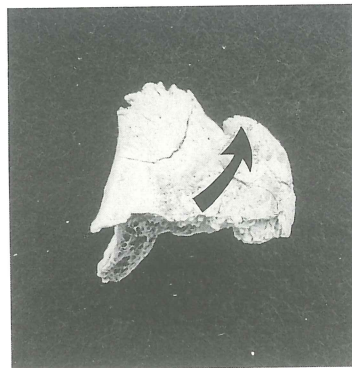
1 下肢骨



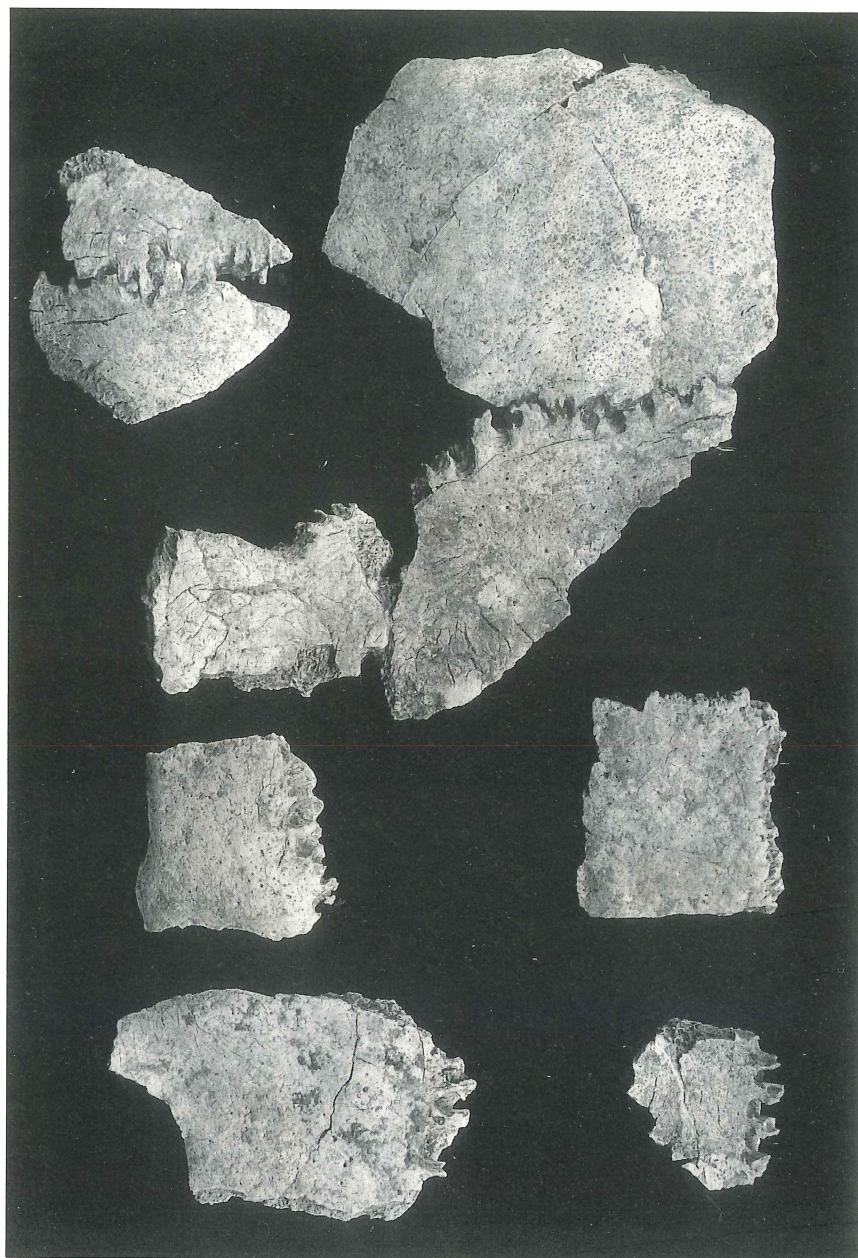
2 乳様突起



3 大腿骨粗線



4 頬骨縁結節



頭 蓋 主 縫 合

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

平成4年3月28日印刷

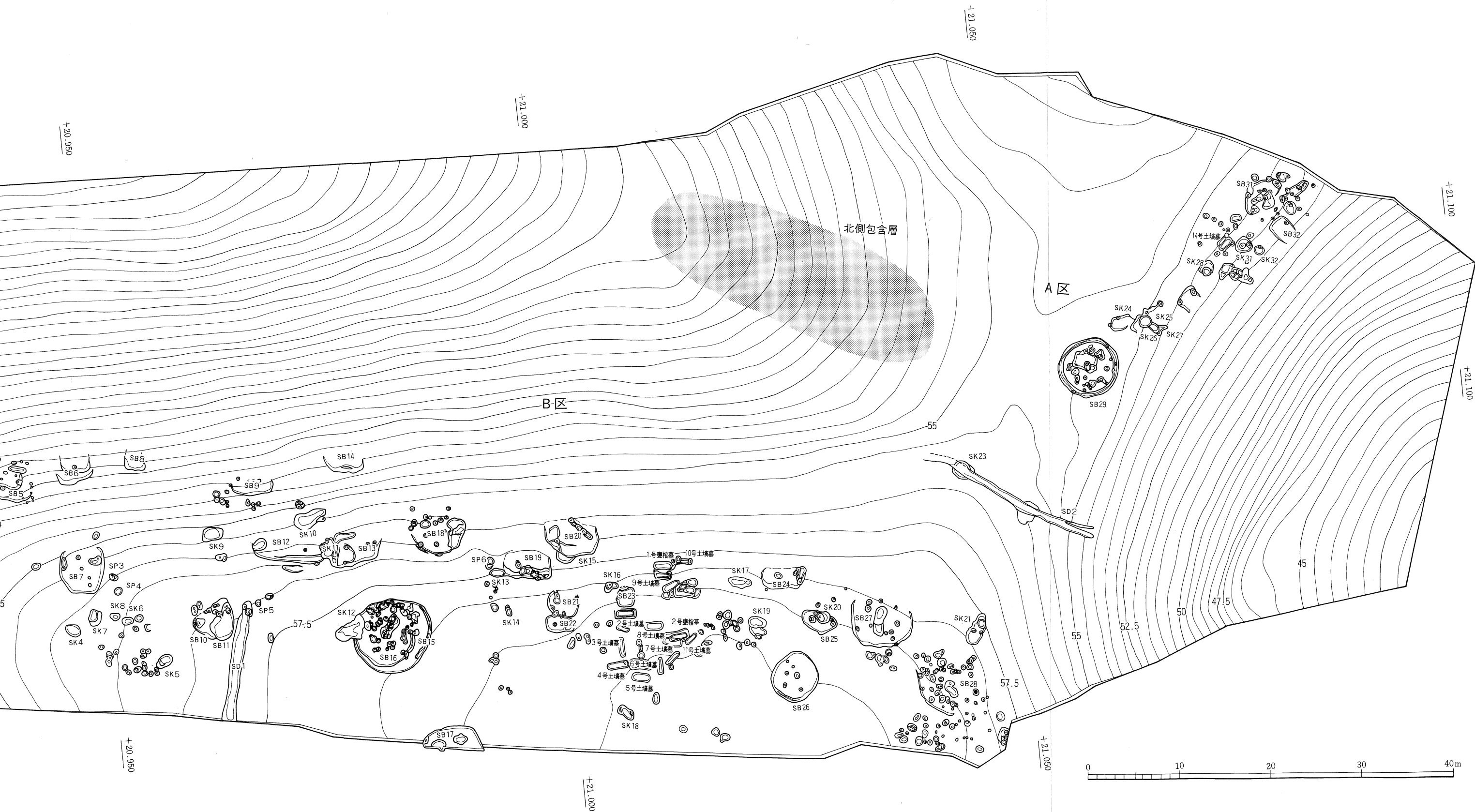
平成4年3月30日発行

編集 大分県教育庁管理部文化課

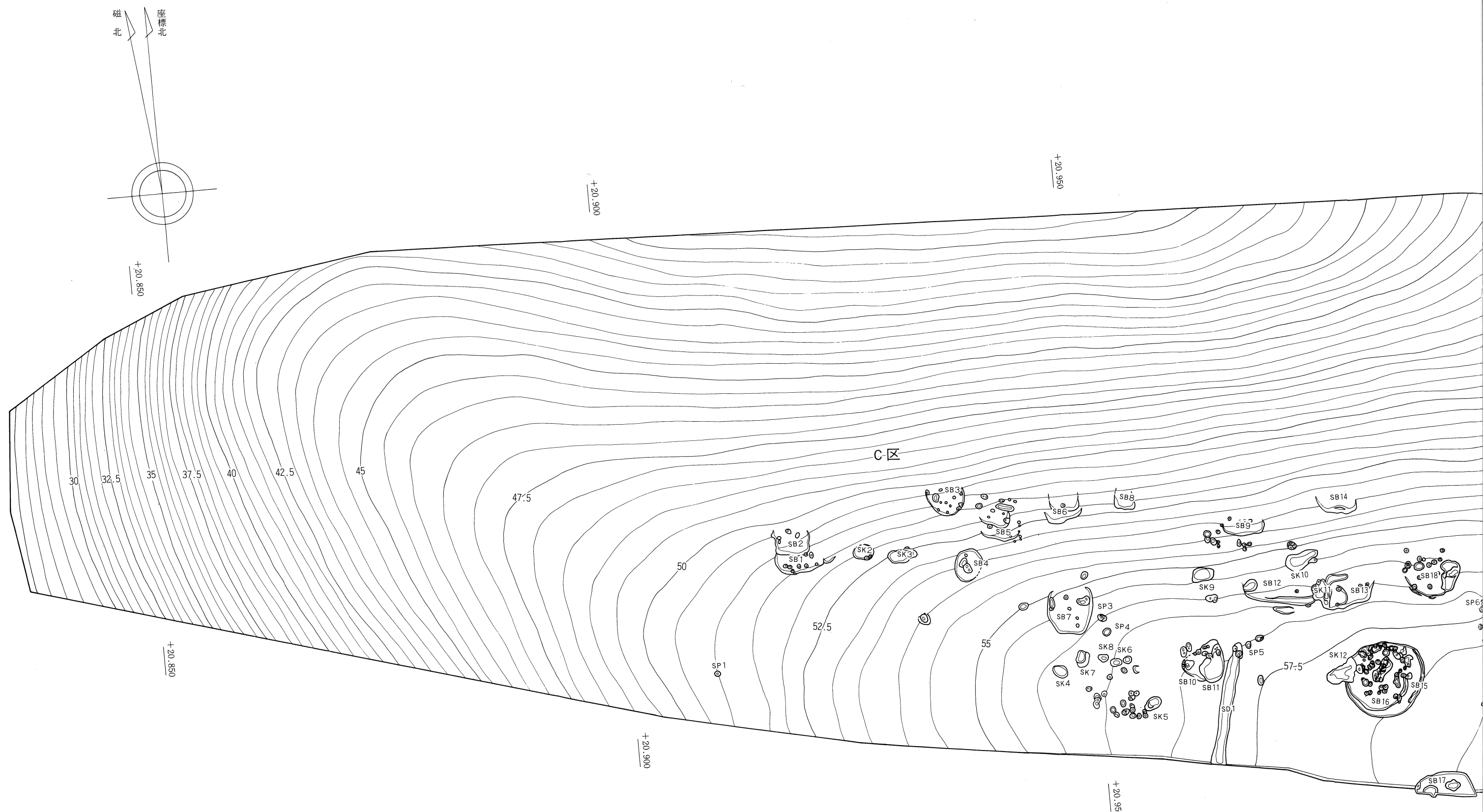
発行 大分県教育委員会

〒870 大分市府内町3-10-1

印刷 東洋印刷有限公司



付 図 I 森山遺跡遺構配置図



付 図 I 森山遺跡遺構配置図